KAIZO

改造

五月號

1930

藤森成吉著

何が彼女をそうさせたか？！

定價五十錢（書留送料十四錢）

普及版出づ

忽三十版突破!!

劇化に映畫に此人氣は何故か

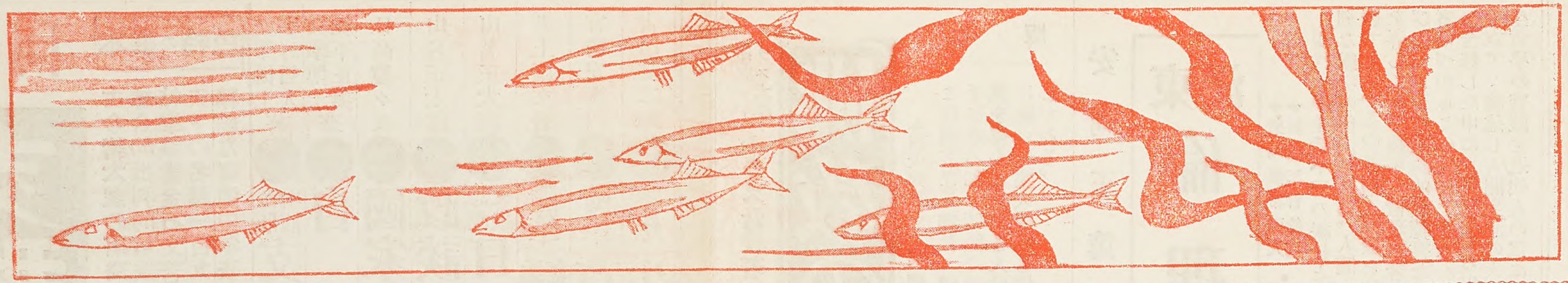
天成の美貌と至純の情操を有つ薄倖の孤兒、彼女は殘忍なる養父ルンペン・プロの許に冷かに成長し或は藝人となり乞食となり詐欺、心中……果ては人肉の巷を彷徨する等々あらゆる社會の刑道を身も魂も引摺られて遂に放火の大罪を犯す。果して彼女は大罪惡人か？　新興文壇の巨匠藤森氏は現代社會の深奥を剔抉解剖してこの偉大なる藝術品を我大衆の胸底に擲げつけた。誰か本書を繙き慄然として涙なきものがあるか。

敢て本書を百万の女學生婦人勞働者、並に子女をもつ家の母たちに送る

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



改造五月號目次





改造五月號目次

臨時議會と失業對策

深刻なる不景氣の潮波は恐るべき結果を豫測せしめ、そして不安と焦噪とは全國的に募り行く一方である。随つて四月廿一日を以つて開かるべき臨時議會に對する我民衆の期待も尋常ならざるものがある。もし本議會が短日月の故を以つて、もしくは具體的成案なきの故を以つて何等の失業對策を結果する能はずとせば民衆の濱口内閣に對する信望の揺らいで行くのは當然のこととせねばならぬ。我々は倫敦會議の結果については大體是認するものである。むしろモット日英米三國が協力して思ひ切つたる軍縮制限を加へざりしを憾むものである。世界に共通せる經濟難を救ふ第一の目標は軍事費の徹底的制限にある。特に我國の如き財政力、經濟力の乏しき國に於ては軍事費を節減して産業費に充當せしめ、以つて國力を培養するのが第一策である。この澎湃たる失業群の簇出を現前して濱口内閣がいかなる方策に出づるかはここ旬日にして決すべきが、しかし我々の見る所では陸海の軍事費において、教育費に於いてまだ／＼大斧鉞を加ふべきもの幾多あるを思ふものである。そこを眼をつぶつて猛斷果決してこそ始めて眞の緊縮政策は徹底する。しかし産業方面、海外貿易においてはあくまで積極政策に出で、この方向においては公債募集を許す例外を認むべきだと思ふ。そうでなかつたならば失業群はます／＼倍加し、世相はいよ／＼不測の險悪を増すのみである。今まで海外發展に對して我政府のとつた態度はすべてが退嬰、消極ばかりであつた。随つて今後は貿易に於ても、移民においても大膽なる積極政策に出で、内にありては都會と農村との經濟的關係を緊密にし、失業群を地理的、産業的に按配し、そして金融政策においても大銀行集中主義、都會集中主義を排して地方産業の興隆を企謀し、當面の卅五萬乃至五十萬の失業者に對しては一時の失業應急を方策するよりその失業を防止する根本策に手をつくべきである。二百七十名の絶對多數を擁する民政黨内閣が此際一部金融資本主義に同じて多數民衆の期待を裏切らば、直ちに新たなる評判は民政黨を敵とするに至るであらふ。軍縮案は一部の人々によりて反對されるかも知れないが多數國民は必ずや政府案を支持するに違ひない。しかしながら失業對策を見る政府者の眼はいつでも金融界及都會失業者を中心としてのみ計畫される。もちろん財政當局が日本ではきまり切つて銀行出であり、でなければ銀行家の支持によつて大藏大臣となつてゐる人が多いから國家財政の組成に當つても金融に偏局しておるのは免かれない事實である。何時も病點はここに孕む。國民經濟の廣い曠野を整理するには大衆の普遍的窮乏をきはめねばならぬ。特に今議會の失業對策を斷行する前に井上大藏大臣に此一言を服藥してもらいたい。



歴史に於ける『偉人』の役割

向坂逸郎

一

史的唯物論は歴史的發展の決定的原因を物質的生産力の自働的展開に求めて、歴史に於ける個人の感情、理性、意志のはたらきを無視するといふ非難がある。だが、史的唯物論者にとりても歴史は人類の社會の歴史である。社會は個人からなる。個人の相互關係の總體である。それは個人の單なる總計ではなくして、相互に相關係する諸個人の總體である。從つて個人を無視する事によりて社會の歴史を理解することは出來ない。たゞ問題は如何なる意味に於て個人が歴史の中に存在するか個人は如何なる役割を歴史に於て演ずるかにあるのみ。

マルクスは『ルイ・ボナパルトのブルュメール十八日』の劈頭に於て云ふ、『人間は、自己の歴史を造る。けれども、彼らは氣儘勝手に、自ら選んだ形勢の下に歴史を造るのではなくて、目前に有り合せた、一定の、過去から手渡された形勢の下に、その歴史を造るのである』

マルクスヘエンゲルス全集 第五卷 一二九頁〕と。歴史を造るものは人間である。個人は自己の感情と理性と意志とに於て行動する。これら行動の相互關係の總體が人間の歷史である。從つて吾々の史的唯物論の特徵が、個人の役割を無視する所にある可きではない。たゞ、史的唯物論者は、歷史に於ては、個人の感情、理性、意志及びそれに基く行動に對して一定の限界と方向とが與へられてゐる事を知つてゐる。如何に詩人の感情が奔放であらうとも、又如何に思想家の理性が『純粹』であらうとも、又如何に政治家の意志が强固であらうとも、それらの總てに對して一定の限界と方向とが歷史的に與へられてゐる。人間は自己の歷史を造る。だがそれは一定の限度と方向とに於てのみ造り得るのである。

個人は一定の與へられたる腦髓と體質とを以つて生れてゐる。無論、個人は自分自身の腦髓と體質とを自由に自ら選擇したのではない。神樣によりて授けられる所を見て來たものもない。それは永い間の進化過程によりて條件づけられてゐる。彼の腦髓と體質とを維持し、活動せしむる爲めに、彼は一定の自然的諸條件を必要とする。一定の衣、食、住が自然によりて與へられる事なくして、個人の體質、從つて又腦髓は維持され得ない。更に又個人は自然、例へば、雲なくして、雲の思考といふ腦髓の作用を營むことは出來ない。花のなき所、鳥の啼はない所、藝術家のこれらのものに關する藝術は生れ得ない。かくの如くして、腦髓の活動であるところの人間の意識に就いても、先づ第一に吾々は自然的の限度を考へなければならぬ。蓋し、吾々の前には『純粹』なる意識、意識そのものといふが如きものは存在しないからである。意識は、第一に一定の必然的の結果として與へられたる體質と腦髓とから不可分であり、第二に意識は意識されるもの、意識の內容又は對象なくしては存在し得ない。何物に就いても、又何事についても意識しない意識は存在し得ないであらうからである。『純粹』なる意識といふが如きは、唯吾々の抽象の產物であるにすぎずして、具體的には必ず何ものかを、何事かを意識する意識のみが存在する。かゝる意味に於て又自然は人間の意識の條件となつてゐる。個人の行動についても、意識に於けると同樣なる自然的限度が存在する事も亦吾々の見なければならない所のものである。

個人はたゞ自然的條件の下に生活してゐるのではない。更に個人は、先に述べた樣に社會的條件の中にも生活する。個人はいはゞ二つの世界に生存するのである。即ち自然と社會と。自然的條件の下に於てのみ生存する個人も、亦、吾々の抽象の產物である。『純粹』に個人的なる個人は具體的には存在しない。個人はたゞ一定の社會關係の中にのみある。凡ゆる社會的環境から抽象された個人は存在し得ないの

である。マルクスは云ふ、『スミス及びリカアドが出發するところの、個々の孤立の獵師や漁夫は、十八世紀の殺風景な想像に屬する。……此個人は、合自然に見え、且つ彼等の人間性の觀念と一致してゐたゝめに、歴史的に生成したものとは見えず、自然によつて定められたものに見えた。……奧深く歴史を遡れば遡るほど、個人は、從つてまた生産する個人も、ます／＼非自主的なものとして、より大なる全體に所屬するものとして現はれる。即ち、初めは尙ほ全く自然的に家族において、及び部族に擴大された家族においてそうであり、後には諸部族の對立及び融合から生れた種々なる形態の共同團體においてそうである。で、やうやく十八世紀において、「市民社會」においてはじめて社會的結合の種々なる形態が、個々人の私的の諸目的にとつての單なる手段として、外部的必然として、個々人の前に現はれて來る。が、此の立場、孤立的個々人の立場をつくり出す所の時代こそは、正に、これまでのところ最も發達した社會的（該立場よりすれば一般的）諸關係の時代なのである。人間は、最も文字通りの意味で政治的動物(Zoon Politikon) であり、單に社交的動物たるのみならずまた社會内でのみ自己を孤立化し得る動物である。社會外での、孤立の個人の生産なるもの――諸々の社會力を既に動的に内具した文明人が間違つて無人島へ吹き流されでもしたら起るかも知れぬ稀有のこと――は、共に生きて共に話す諸個人がなくて生ずる言語の發達といふにも等しい空想である』（經濟學批判、マル・エン全集　第七卷　三八四頁以下）と。

吾々の前には純粹なる個人はない。たゞ社會的なる個人、社會内でのみ自らを孤立化し得る動物であるところの個人があるのみである。社會的關係に於ける一點としての個人が存在するのみである。若し比喩的に云ふ事が許されるならば、吾々は、個人を凡ゆる社會的なる諸關係の一小交叉點であると云ふ事が出來るであらう。無論、吾々は社會が個人から成ることを否定する事は出來ない。個人なくして社會はあり得ない。だが、かゝる個人の單純なる機械的總計が社會であるのではない。吾々は、個人の間に交互的な關係が成立し、かかる交互關係の全體が個人を社會として結合してゐることを見るのである。即ち個人は相互に意識的、無意識的の協力的關係を形成し、それらの關係の總體として、有機的に結合された全體として社會を成してゐるのである。從つて、こゝに於ては、個人と雖も、既に社會關係の中に於ける一點としてのみ個人なのである。社會内でのみ自らを個別化した個人なのである。それ故に、吾々は社會は個人から成るといふが、實は個人は社會的の個人以外に存在し得ないのである。一切の社會的諸關係から抽象された純粹なる個人と云ふが如きは十八世紀流の『殺風景

な想像に屬する』。

かくの如く個人は社會的にのみ存在する。從つて、個人の思考、感情、意慾、行動も亦社會的な限界を有する事を認めなければならぬ。何事かを思考しない思考、何事かを感じない感情、何事かを慾しない意慾、何事かをなさない行動はあり得ない。人が何事かを思考し、何事かを感官し、何事かを欲し、何事かを爲すところのものは、又、社會的にも與へられたる限度を有し、從つて又社會的に條件附けられてもゐる。具體的個人は、社會的個人であり、社會的關係の中に於てのみ存在するものであるならば、その意識と行動との總體に於て、社會的限度が與へられる事は當然でなければならない。

二

吾々は、個人が自然的限度と社會的限度の中に於てのみ意識し、行動することを知つた。即ち、個人は、先づ、彼自身の自然、即ち、彼自身に與へられたる體質と腦髓とに制約され、次で外的自然、即ち不斷に彼に對して影響し、彼の生存を條件づけるところの自然によりて制約される。更に又彼は、彼の生存する社會の制約を免れる事が出來ない。かくて、彼はこの二つ——自然的及び社會的——の限度に於てのみ意識し、行動する。即ち、彼の意識と行動とは『自由』ではない。

併しながら、『人類がその中に住む所の此の二つの世界、自然的及び人爲的の世界は、決して不變ではなく、又永久に同一である譯ではない。即ちそれ等は寧ろ絶えざる變化に服してゐる。……然るに自然的世界は唯緩漫にのみ發展する。それは何等かの意義ある變化に至るまでには常に數千年を必要とする。此の如き理由によりて動物及び植物の種屬は、吾々に取りて不變であるとして現はれる。……之に反して人爲的世界は到る處急速に發展する。そしてその故に、人類の歴史は動物のそれと比較して頻繁に交代し、變化する所の推移を示す』(ラファルグ、經濟的唯物論 二九頁)。自然も社會も共に變化し、發展する。だが自然は比較的の意味に於ては不變であると考へる事が出來る。人類の社會が有史以來なした發展に比較する時、自然は不變である。原始人も吾々と同じ自然を見たであらう。だが、彼等の自然觀察と吾等のそれとの間に大きな距離が存する。吾等の今日有する科學と藝術とを彼等は有する事は出來なかつた。その他一切の彼等の意識と行動とに於て、想像を絶する相違のある事は疑ふを得ない。かかる差異を吾々は何處に求めるか? 自然は全く、又は殆んど不變であつた。だが、不變量として現はれるものは吾々の社會關係のみである。吾々は、今日吾々の有する意識と行動に於ける發展を制約するものを社會關係の變化に求める。それのみが、個人の意識と行動とを制約する要

素の内可變量であるからである。

併しながら、この社會關係は如何にして發展したか？社會關係は個人の交互的な關係であつた。彼等は彼等自身相互の生存を維持する爲めに、先づ第一に彼等の物質的慾望を充足せしめなければならぬ。人類は、先づ自然からその必要とする素材的富を吸收することによりて、自己の存續を可能ならしめるものである。この爲めに彼等は外的自然に對する彼等の合目的的活動、即ち勞働をなさなければならない。彼等は思索する前に、繪を描く前に、詩を作る前に先づ勞働しなければならぬ。人類は社會的存在である。彼等はこの生産的な勞働過程に際して社會的性質を失はない。『人間は生産に於て啻に自然に對してのみ關係するのではない。彼等は一定の方法に於て共同に働き、彼等の活動を相互に交換することによつてのみ生産する。生産するが爲めには彼等は互に一定の連絡及び關係に入り込み、且此等社會的の連絡及び關係に於てのみ、自然に對する彼等の關係は成立ち、生産が行はれる』（マルクス　賃勞働と資本　二五頁）。人類がその必要なる素材的富を獲得する爲に相互間に結ぶ一定の關係を、マルクスは生産關係と云つた。『之等生産關係の總體が社會の經濟的構造を形造る』。かゝる經濟的構造は社會の實在的の基礎となつて、その上に法律的、政治的の上部構造が立ち、その基礎に應じて特定の社會的意識形態がある。かくて社會の經濟的構造は、その社會に於ける一切の社會的、政治的、及び精神的生活過程を制約するのである。かくて我々は知る、一切の社會的個人の意識及び行動は結局に於ては、社會の經濟的構造によりて限定されるものである事を。即ち、一切の社會的、精神的の生活過程は、先づ第一に人類の生存の確保、社會の存續の可能の上にのみ存在し得るものである。社會的個人の意識と行動とは、この基礎に對して適應する事なくして永續することは出來ない。

而して、かゝる經濟的構造は如何にして變化し、發展するか？即ちかゝる生産過程内部に於ける人類相互の關係は、彼等のその時代に有する生産手段によりて條件附けられる。人類は技術を獲得した。この技術によりて自然に對して、彼等が積極的に働きかける程度に從つて、彼等は生産過程に於ける彼等自身の關係を變更する。彼等の經濟的構造は、彼等自身の作り出した技術に適應しなければならぬ。かくて結局に於て社會の有する物質的生産力が、一切の社會的生産過程を從つて又社會的個人の意識と行動とを決定する。究極に於て一切の社會的生活過程を決定し、個人の意識と行動とを制約するものが、社會の物質的生産力なのである。だが、それは究極に於てなのである。

『人間は、自己の歴史を造る。けれども、彼らは氣儘勝手に、自ら選んだ形勢の下に歴史を造るのではなくして、目前に有り合せた、一定

の、過去から手渡された形勢の下に、その歷史を造るのである』。人類は『自由』に歷史を造り得るのではない。彼を條件附ける一切のものの下に於てのみこれをなし得るのである。而して、かゝる一切の條件の中にあつて、社會の經濟的構造、從つて又社會の物質的生産力が、人類の作る歷史に對して、究極に於て、決定的に、その限度と方向とを與へるものである。何故に物質的生産力は、究極に於て、決定的の要素であるとなすか？

マルクスは『資本論』第三卷第二部に於てこう云つてゐる、『…生産諸條件の所有者たちが直接的生産者たちに對立する直接の關係――この關係が採るその時々の形態は、自然の順序として、勞働の仕方及び樣式と、隨つてまた勞働の社會的生産力との、或る一定の發達段階に照應する――こそ常に、全社會的構造の、隨つてまた主權對臣屬關係の政治形態の、簡單にいへばその時々の特殊國家形態の、最內部的な秘密を、隱れたる根抵を、示すものである。が、このことは、同一の――主なる諸條件の上から見て同一の――經濟的基礎も、自然的諸條件や、人種事情や、外部から作用する歷史的諸影響や、その他の如き、無數の相異つた經驗的諸事情のために、無限の變異と濃淡とを現象上に示し得ることを、妨ぐる所以たるものではない。此等の變異及び濃淡は、經驗的に與へられる如之諸事情の分析に依つてのみ、理解せらる可きものである』（改造社版　第五、三三〇頁以下）と。物質的生産力に相照應する當該社會の經濟的基礎の唯一の影響の下に於てのみ、人類は歷史を作るものではない。自然的諸條件、人種的條件、外部から作用する歷史的諸影響、その他無數の各種の經驗的諸條件が、歷史を作る人類の意識とに對して影響を有つ。そしてこれらの諸條件は、經濟的構造の決定に對つて、無限の變異と濃淡とを作り出すものである。

更に、歷史を作るところの人類に對して直接、間接に影響するところのものは、單に當該社會の經濟的構造のみではなくして、その社會の政治的、法律的その他の社會的生活過程の一切である。エンゲルスはかう云つてゐる。『唯物史觀に據れば歷史に於ける最後の決定的要素は、現實的生活の生産及再生産である。それ以上はマルクスも私も曾て主張したことはない。そこで若し人あつて之を、經濟的要素が唯一の決定的要素であるといふ風に曲解するならば、彼は、先の命題を、無意味にして抽象的なる無稽のたわごとと、化し了るものである。經濟的狀態は土臺である。併して上層建築の種々の要素――階級鬪爭の政治形態とその結果――戰勝の後で戰勝階級の規定する國憲その他――法律形態、更に總て之等現實的鬪爭の參加者の腦裏に於ける反射、即ち、政治的、法律的、哲學的諸理論、宗教的諸觀照、次でそれ等の、

教義體系への發展といふが如きものも、亦歴史的鬪爭の推移に對してその影響を及ぼす。そして多くの場合に於て、その(鬪爭……向)形態の決定に與つて力あるものである。經濟的運動は、總ての如き諸要素の交互作用の間に於て、總ての無數なる偶然性(即ち、相互間の內的連繫が隔つてゐる爲め又は立證し得ざる爲に、存在せざるものとして看過し得る物又は事件)を通じて、必然者として、結局に於て自己を遂行して行く。其の故にこそ此の理論を、歴史の或る一定時代に適用する事は、單純なる一次方程式を解くが如く容易ではないのであらう』(エンゲルス、ブロッホ宛の手紙、デル・ゾツイアリステイツシエ・アカデミケル、第一年、十九・二〇號)。

要之、歴史を作るところの人類に對しては、先づ第一に彼自身に於ける自然——體質、腦髓——と外的の自然との制約を數へねばならない。第二に、その社會の一般的生活過程及び究極に於てその經濟的構造の制約が加はる。かくてこれらの諸條件の制約の下に於てのみ個人は歴史を造る、而して歴史はかゝる個人の意識と行動との合成力として出來上るものである。各個人は各々特殊なる自然的、社會的の生活條件の下に已れ自身を作り上げてゐる。從つて、各個人の意慾と行動とは必ずしも同一方向に働くとは限らない。かくて各個人の無數の力が相交叉して、力の平行四邊形が無數に存在し、それから一の合成力が出來上り歴史なるものが成立する。無數の力がまとまつて一の合成力となり、歴史の車を前方に押し出し得るためには、これらの雜多なる力の方向にも拘らず、各個人の意識と行動との上に、結局に於て、自らを遂行して行く所の一定の方向に働く可き力が存しなければならぬ。これを吾々は物質的生產力と呼ぶ。エンゲルスはかう說明する、『歴史は常に許多の個人意思の衝突から出來上る成果として生じ、その個人意思の各々は又許多の特殊なる生活條件によりて、自分といふものに作り上げられる。從つて、相互に相交叉せる無數の力、即ち力の平行四邊形の無數の集團があつて、それから一の合成力——歴史的成果——が現はれ、そうしてそれ自身は、又一の全體として、無意識的に又無意志的に作用する力の生產物として觀られ得る。何者、各個人が欲する所のものは各他人によりて阻碍せられ、而も最後に現はれたるものは何人も意欲しなかつたものであるからである。かくて從來の歴史は一種の自然過程の如く推移してをり、且又本質的にも同一運動法則に從つてゐる。併しながら、個人の意志は——その各々は自身の體質と外的の、結局に於て經濟的の境遇(彼の特殊の一身上の或は一般社會的の)とに驅られて意欲をなす——彼等の意欲した所のものに到達しないで、一の總平均に、即ち一の共通なる合成力に融合するといふ事から、各個人はゼロに等しいといふ結論を出すべきではな

い。反對に各個人は合成力に寄與し、その限度に於てはその内に加へ込まれる」(上掲書簡)。こゝでエンゲルスはたゞ「從來の歴史」に就て語つてゐる事と合成力の方向に對して決定的の要素としての經濟的運動を特別には强調してゐない事を注意して讀まなければならない事を附言しやう。

かくて、人類の意識と行動とは一定の諸條件によりて制約される。それにも拘らず、歴史そのものを造るのは人類自身である。人類は一定の方向と限度とを與へられつゝ歴史を作るのである。各個人は、各々自己に可能にされてゐる限度内に於て、歴史的成果に對して寄與する。歴史に於ける各個人はゼロではないのである。

三

個人は歴史に於てゼロではない。彼自身に與へられたるものを以つて、その限りで歴史的成果に寄與する。社會の歴史は、かゝる個人の大衆の、結局に於ては、その社會の經濟的要素によりて與へられたる限度と方向とに於て、作り上げるところの合成力である。從つて、カウツキーの云ふが如く、個人の集團が小であればある程、個人の力は大なる重要性を得る。例はサラリーマンの家族に於て家父のある地位は、その家族にとりては極めて重大である。時とし家父の死はこの一家を餓えさせる事が出來得る。だが社會の歴史全體の動きに對しては、かゝる家父の死は、一人の未亡人と若干名の孤兒を作り出した以外に、殆んど何等の意義を有しない。吾國の一小財閥の沒落は、日本ブルジョアジーにとりては、可なり大きな波紋を描くかも知れない。だが、全世界の資本家階級の沒落の歴史の上に於ては、殆んど無視し得可き一小事件であるに過ぎない。濱口雄幸といふ政治家の存在は、現代日本に於て可なり大きな姿を以つて現はれてゐる。だが、全世界の歴史の上に於ては、忘れらる可き一存在であるかも知れない。

かくの如くして、吾々の目の前に轉回しつゝある全世界を、有機的に結合せる全社會の歴史に於ては、或る個人の力といふが如きものは問題とならないといつてもよい。この大きな歴史の推移を、吾々は、數人の政治家、數人の思想家、數人の詩人を知る事によりて理解することは出來ない。それは、この歴史に對して方向を與ふる根本的な力―經濟的要素―の認識にかゝつてゐる。併しながら、歴史を作るものは人間である。だが、個人ではない。社會の人間である。人間の大衆である。歴史の根本的動力は、個人にでなくして、社會に於ける個人の大集團、大衆に對して、結局に於ては、その動く可き方向を指示する。歴史は人間が造る。だが、人間はその相互的な協力の下にこれを造る。社會の大衆が造るのである。大衆が何處に向つて動くか、又

何處に向つて動く可き必然にあるかを認識することによりて、始めて、吾人は歴史を理解し得る。

だが併しながら、吾々はかく云ふ事によりて、個人を無視す可しとするのではない。或る個人が、しば〲社會の歴史に於て大きな役割を演ずる事を否定せんとするものではない。たゞ、彼をしてかゝる大きな役者たらしたものは、人間の社會的の力である事を述べんとするにすぎない。クレオパトラの鼻がいま少し低かつたならば、全世界の歴史が全然別に動いたであらうといふ有名な考へ方がある。然り、クレオパトラが醜婦であつたならば、史實の發展は、事實行はれた所と或る程度異つたかも知れない。——世に傳ふる所をそのまゝ史實であると假定する。だが、その際吾々にとりて問題となるのは、おなべ、おかめ等々の鼻でなくして、クレオパトラの鼻であつた事である。即ち、美人であつたものが一國の女王であるクレオパトラであつた事である。女王と云ふ一つの社會的地位、社會的勢力の一尖端であるところの、クレオパトラが美人であつた事であつた。クレオパトラといふ一個の美人が、歴史上大きな役割を演じたのは——若しそうであるとすれば——彼女及び之の相手方が一定の社會的地位にあつたといふ事に基因する。彼女をそうさせたのは社會的な力であつた。從つて、若しクレオパトラをして、現代東京の一ダンサーたらしめたとしたならば、せい〲で、鼻の下の長い金持のドラ息子と心中した位がおちであつたかも知れない。

又、セルビヤの一青年がオーストリオ皇太子フランツ・フェルディナンドに對して發射した一發のピストルの彈丸が、世界大戰の導火線となつたと云はれてゐる。假りにそうだとしやう。併しながら若し各國の金融資本の激しき競爭が、戰爭の危機を準備しておかなかつたとしたならば、更に又、この彈丸がオーストリヤの皇太子と云ふ地位に對して發射されずして、例ばある、カッフェーの女給に對して發射されたものであつたとしたならば、この一青年の發射したる彈丸は、かの歴史的大事件の發端的役割を得ずして終つたであらう。こゝでも問題は、決して一青年のピストルにあるのではない。この一個人をして比較的大きな役者としたものは、時の社會的狀勢であつた。又その彈丸が一の社會的勢力の尖端である一個人に命中したといふ事にあつたといひ得るであらう。

カウツキーはこの『唯物史觀』の中にこう書いてゐる、十八世紀に於けるヨーロッパの歴史を書く者は、當時のヨーロッパの諸國王の側にあつて、政治的勢力を有つた、側妾を無視することは出來ないであらうと。或程度に於てそういふ事が出來る。だが、それは直に一個の美女、國王の好色といふ事が、そのまゝ一國の運命に關したといふ風

に解釋することは出來ない。一美女をして好色なる國王の側にあらしめ、政治的影響力を有ち得る地位においたといふ事、結局は社會的な關係が、彼女をして政治的に大なる影響を齎らし得たにすぎない。無論、その際彼女等が、氣まぐれな女、又は才能ある女であつた事が、事件の進行に無影響であるといふのではない。たゞ、問題は彼女等がその才能又は氣紛れな性質を、政治的に影響を及し得る地位においたといふ事にあるのである。即ち、彼女等が一定の社會的關係に、一定の社會的力點におかれたといふ事が問題なのである。

世に、天才、偉人、大思想家、大詩人等々といふものがある。彼等は事實大きな力を社會に對して與へてゐる。彼等の社會的影響を吾々は無視することは出來ない。吾々はかゝる傑出せる人物の存在を忘れることは出來ない。彼等の歷史に於ける役割は大である。凡ゆる個人は、己れ自身に與へられたるもの——例ば才能——に應じて、歷史に對して影響する。傑出せる個人は、その特殊なる條件によりて與へられたる才能を以つて、社會の歷史に大なる影響を與へるを疑ふ事は出來ない。即ち、個人の社會に及す影響の程度は、一應は彼自身の才能の如何にあるといふ事が出來る。だが、併しながら、彼の才能が才能として生き得る——社會的影響を有し得るが爲めには、それが當該社會の社會的必要の方向に對して他の者より一層有力に働き得るといふ事、更にその才能が才能として現はれ得るに必要な社會的地位が與へられる事を必要とする。かゝる場合に於てのみ、吾々は、彼を『英雄』として、大思想家として、大政治家として發見する。それは恰度、例ば、荒木又右衞門といふ劍士は古の戰爭の方法に於ては戰場の『英雄』であり得たであらうが、世界大戰に於ける戰場に於ては、彼が戰線の何れの側に屬しやうと何等の問題とならない樣なものである。

ナポレオン・ボナパルトは天才であるかも知れない。だが彼をしてかの偉業を成遂げしめたものは、先づ第一に當時のフランス共和國がナポレオン的軍事獨裁官によりて、『規律が再興され、ブルジョアジーの支配が保證』(プレハノフ)されることを必要としたからであり、第二に一定の原因が恰も彼に對して軍事獨裁官の地位を與へたからであつた。『ナポレオンなる此のコルシカ人が正に、自國の戰爭によりて疲れ果てたるフランス共和國が必要としたる軍事獨裁官であつたといふ事は偶然である。併しながら一人のナポレオンが出現しなかつたら、他に人があつて必ずその地位を補充したであらうといふ事は、必要なる人は、必要なる時、常に見出されたといふ事實によつて明かである』

(エンゲルス、シュタルケンブルク宛の手紙 デル・ゾツイアリスチイツシエ・アカデミケル 第一年、十九——二〇冊)

マルクスは吾々の有する最も偉大なる思想家である。彼と雖も資本

主義的社會の限度の外に立つ事は出來ない。彼は眞實に資本主義的社會を理解し、一般に自然と社會とが如何にして吾々に認識され得るかを示す事が出來た。だが、彼はそのために、ヨーロッパに於ける一定の程度に於て發展した資本主義社會の存在を前提し、又一定の程度に於て階級を構成したプロレタリアートの存在を條件とした。そうしてこのプロレタリアートがその社會的地位によつて一切の階級を撤廢し、社會的發展の眞實の擔ひ手となされてゐる事を必要とした。かくしてのみ、彼は偉大なる思想家、又偉大なる指導者である事が出來た。エンゲルスはこう云つてゐる、『唯物史觀を發見したのはマルクスであるが、チエリー、ミニエー、ギゾー始め、その他一八五〇年までの全英國歴史家も亦、彼等自ら立證する如く、その發見に突進んで居たのであつた。且つ又、モルガンによる同一史觀の發見は時代が、既にその爲めに熟して居た事、そして正に發見されなければならなかつた事を證明して居る』（前揭）と。

かくて、偉人は結局に於ては社會的必然と、その才能に與へられる社會的地位とによりて決定されるものである事を知る。かく云へばとて、吾々は決して偉人の歴史に於ける役割を過小に評價す可きではない。彼等と雖も決して歴史的必然そのものの方向を自由に轉向することは出來ない。だが、彼等は一般社會人の未だ見得ざる時に、早くも社會的必然の方向を洞察し、一般社會人に先んじて遠方を見透し、かくて、彼等が何を求む可きかを明にし、一般社會人の意識と行動とに大なる影響を與へ、以つて歴史の進行に於て、人類の歩みに對して荊棘を除き、迂廻を節約する。從つて如何なる『偉人』が、何時現はれるかといふ事は、歴史にとりて、決してどうでもよい問題ではない。プレハノフはこう云つてゐる、『偉大なる人間は、彼の個人的な特殊性が、偉大な歴史的事件に個人的相貌を賦與する事によつて偉大なのではなくて、一般的な又は特殊な諸原因の影響の下に發生した、その時代の偉大な社會的必要に對して、役立つために自分を最も有能なものたらしめる特殊性を持つてゐる、と云ふ事によつてゞある。カーライルは、英雄についてその有名な著述の中に於いて、偉大なる人々を、創始者と名づけてゐる、これは非常に適切な名稱である。偉大なる人に、まことに創始者である。何となれば、彼は、他の者たちより遠方を見、他の者よりもより強く欲するからである。彼は、社會の智的發達の先行した歩程によつてその順番としてうち建てられた科學的問題を解決する。彼は社會的關係の先行した發達によつて創められた新らしい社會的必要を指示する。彼はこの必要を滿足させる手始めを自分にとる。彼は——英雄である。それは彼が、事物の自然的な歩程を止め又は變へ得ると云ふが如き意味に於いて英雄ではなくして、彼の活動

性が、この必要な無意識の歩程の意識的な自由な表はれであると云ふ意味に於いて英雄である。こゝに——すべての彼の意義があり、この中に——すべての彼の力がある。しかしこれは——巨大な意義であり恐ろしい力である』（マルクス學教科書、第四編　一七七——一七八頁に據る）と。右は譯文に多少意味の明白でないところはあるが、推測して讀めば、簡潔によく『偉人』の歴史に於ける意義と役割とを示してゐる樣に思はれる。

吾々は、歴史的に必要なる人は、必要なる時常に發見されるといふ事が出來る。だが、この事を目的論的な意味にとつてはいけない。歴史は、丁度必要な人が丁度必要な時に、直に現はれるといふ程に目的論的には出來上らない。必要なる人は、必要である限り、從つて又その出現に必要なる條件が與へられる限り、結局に於ては現はれる事を意味するに外ならない。從つて、かゝる必要とする人物の出現する爲めに、歴史は幾度か無駄なる、又は或る程度に於てのみ必要を充し得る幾多の人物を登場せしむるかも知れない。そうして幾多の困難を經て、やつと必要なる人物を發見するかも知れない。一人又は數人の必要なる『偉人』の代りに、數人又は數十人の小偉人を以つて、その必要を充たすかも知れない。歴史は神樣の細工ではない。

四

私は、先に、才能をして偉人たらしめるものは、社會的必要の方向に對して他の者より一層有力に作用する事であるとなした。この際吾々は故意に階級の存在を無視した。だが、若し吾々がこの問題の考察に於て階級を取り入れるならばどうなるか？そして事實上、原始共產體の社會を除いて、吾々は常に階級の存在、階級鬪爭の歴史を有つてゐるのである。

階級的構成の社會に於ては、社會人は階級によりて根本的に、利害の相對立せる諸集團に分離されてゐる。レーニンは階級を定義してこういつてゐる、『歴史的に規定された社會的生產の體制における彼等の地位によつて、生產手段に對する彼等の關係（これは多くの場合法律によつて確立され規制されてゐる）によつて、勞働の社會的組織における彼等の役割によつて、從つてまた彼等が、社會的富のうち自由に使ひ得る部分を、如何なる方法でどの程度に受取るかによつて相互に區別されるところの、人間の大集團が階級と稱せられる。階級とは人間の集團であつて、そのうちの一つは、社會的經濟制度を規定するに際し、彼等の異れる地位のお蔭で他人の勞働を領有し得る地位にある』（ルッボル、レーニンと哲學に據る——廣島氏譯文）。

階級は社會に於ける根本的な對立である。そこには支配階級と被支配階級の對立がある。從つて、かゝる社會には統一的な意味に於ける社會的欲求はあり得ない。ブルジョアジーはブルジョア階級的限度に於てのみ社會欲求を有する。プロレタリアートはかゝるものとしてのみその社會的欲求を有する。兩階級はそれ〴〵の社會的必要の方向に對して他の人々より一層有力に働きかける『偉人』を有する。又は指導者を有する。ブルジョアジーがなほ封建的支配と闘爭し、その××的性質を失はなかつた時代に於ては、その社會的必要はなほ徹底的に××的なるプロレタリアートのそれを、その限りに於て一致し得るものであつた。その限りに於て當時のブルジョアジーの指導者達は、歴史の進展に對して積極的の力であつた。支配を確立し、保守的階級となり了つたブルジョアジーの必要を代表し、その爲めにより有力に働きかける『英雄』達は、社會的進歩に對して消極的の力となる。

レーニンの死に於てプロレタリアートは、その有したる最も偉大なる『偉人』――指導者の一人を失つた。彼はプロレタリアートの社會的必要を一般プロレタリアに比較して、遙に深く洞察し、遙に遠く見透す事が出來た。その故にこそ彼は全世界のプロレタリアの偉大なる指導者であり得た。又、その故にこそ、彼は人類の歴史に於て偉大なる役割を演じ得た。プロレタリアはそれ〴〵その階級内に於て特殊的なる生活條件を有してゐる。加之、彼等に教養を與ふ可き一切の機關はブルヂョアジーに獨占されてゐる。それ故に、凡ゆるプロレタリアが同時に、且つ短期間に、彼等自身の眞實の階級的欲求を知る事は出來ない。そこで、眞實なる彼等の欲求を指示し得た指導者の下に、常に必ずしも、プロレタリア大多數が集まるといふ事はない。彼等は眞實なる彼等の欲求を知り得た時にのみ、徐々にかゝる指導者の下に結集する。從つて又、現に極めて多くの勞働者の上に『英雄』であるところの者が、常に必ずしも、勞働者階級の全的欲求を指示してゐるものとは限らない。彼等は單にたゞプロレタリアの部分的、一時的欲求をのみ代表し、その方向に對してのみ有力に働きかけてゐるのである。その限りに於てかゝる『英雄』達も歴史に於て何事かを爲しつゝありといふ事が出來る。だが、プロレタリアの成長と共に彼等の影はうすらいで行くであらう。そして眞實にプロレタリアートの階級的欲求の方向にのみ有力に働きかけて行く所の指導者のみがプロレタリアートの『偉人』として殘るであらう。彼等こそ、現代に於て眞實に歴史の進行に對して最も積極的に働きつゝある人々であるであらう。從つて又彼等こそ人類の歴史に於て『偉業』を爲すであらう。

無產黨全合同は可能なるか

森戸辰男

一

曾て私がドイツに滯留してゐた一九二二年の四月、無產階級の戰線統一を目的とする「勞働者世界大會」の開催について協議するため、俗に「第二」「第二半」および「第三」インタアナショナルとよばれて居たロンドン、ギーンおよびモスコウの三インタアナショナルの代表者が獨京ベルリンに會同したことがある。大戰後の社會的醱酵期を一應經過し、資本家階級の攻勢化と反動勢力の擡頭とが開始されはじめた當時にあつては、各國の無產大衆が血みどろの鬪爭を以て戰ひ取つた諸々の成果を確保するがためには、無產階級戰線の統一は絕對の必要事であつた。しかるに無產階級の戰陣は、當時、いたましくも骨肉相爭ふ三系統の陣營に岐れてゐるといふ狀態であつた。かやうな事態のもとに、各國の無產大衆はいかなるセンセーションをもつてこのインタアナショナル三團體の會合を凝視し、いかに熱烈なる望をこの會合に囑したことか。

一般大衆によつてかくも熱烈なる希望をかけられてゐた三インタアナショナルのベルリン會議は、しかし、識者の目には、始めから打ちかちがたき障害を包藏してゐた。といふのは、すでに四月二日の初顏合はせにさきだつて、第三インタアナショナルは、吾々は社會的反逆者の化けの皮を剝がしに出かけるのだと宣言し、これに對して共產黨の誠意を疑ふ第二インタアナショナルは、頭からサボタージュ態度である上に、第三インタアナショナル側で到底承認すると思はれぬほど困難な參加條件を提出したから。初發から決裂の危機をはらんだこの會は、共產黨側の讓步のおかげでやつと成立するに至つたところの所謂『九人委員會』によつて僅かに繼續されることになつた。さうしてこの委員會は五月二十三日に最初の、しかし同時に最後の、會合を開いたが、結局豫期の如く、喧嘩分れに終つてしまつた。翌日、共產黨側の『赤旗』紙は型の如く、第二インタアナショナルが九人委員會をぶちこわしたのだと批難し、第二インタアナショナル側の『前進』紙は、共產黨がこれを破壞したのだと攻擊した。しかしこの會議を決裂せし

めた眞因は、寧ろこれら兩團體における指導精神の對立とそれに基づく政策の對立および協同戰線に對する熱心と誠意と忍耐との缺乏とであつたのだ。ゆゑに主催者側のヰーン・インタアナショナルの次の宣言は遥かによくこれらの事情を言明してゐるやうに思はれる。曰はく、

「斯の如き會議（勞働者世界大會）の召集は、すべての參加者がその努力を眞實に結合し、一切の新なる分裂を惹起せず、プロレタリアの諸力の結合を一黨派の特殊の目的に利用するやうに試みざることを前提する。

「しかるに第三インタアナショナル系の諸黨派にあつては、自己の組織をボルシエヰーキの分裂・破壞より保護することが第一の關心事であつた。そして共産黨の煽動的運動の防止に熱中して、勞働者運動の一般的欲求と永續的利益とを忘れ、その結果、遂に第二インタアナショナル系の諸政黨中、その日和見的政策の立場から勞働者協同戰線の思想に反對し來つたところのものが勝利を占めた。かくして第二インタアナショナルは勞働者協同の事業に對して絶えず新しき障害をおいた。

「共産黨インタアナショナルは、一時、世界勞働者の壓力によつてモスコウ政府を支持せんとの願望に動かされてゐた。かくて世界勞働者會議を召集する考へに同意した。しかしそれは世界會議の事業をその行動によつて促進することにおいては何事もなさなかつた。否、むしろ正反對だ。ボルシエヰーキ政府はロシア國内において社會主義者に對するテロ的迫害を中止せざるのみならず却つて之を激しくし、更に勞働團體の思想發表および行動自由に對する攻撃と國民自決權に對する侵害とを繼續した。それは一層の不信を蒔き、彼等と協同的行動を採るつもりだと言明してゐる社會主義的諸黨派に對して罵詈・惡口を不斷にあびせた。それはその黨略を所謂『正體暴露』に用ゐた。『協同戰線』のスローガンは全くの權謀術數でしかなかつた。忠信と誠實とを以て協同行爲の前提を充たすことはさておき、それは善意の缺乏によつて之を破碎した。云々」と。

內訌と無爲とで特徴づけられた一ケ月餘の存命の後に自壞し、それとともに全合同への大衆の熱望もまた空しくけしとんだところの、このインタアナショナル三團體の共同委員會の經過は、其後各國で行はれた全合同又は協同戰線のための諸會議の好個の典型となつた。かくて今日まで世界プロレタリアの陣營の分裂は本質的には治癒されず、無産階級の××への公道は依然として閉塞されてゐる。

二

ヨーロッパの客舍でこれらの悲劇的な幾場面かを親しく見聞しえた私は、歸朝後早々、恰も無産政黨を胎成しつつあつた我國の社會に、覆轍の誡めにもと、上記の事情を論述した一書（最近ドイツ社會黨史の一齣）を送つたことがある。だが、我國においても事態はそれと拘はりなく宿命的に進展した。人々はヨーロッパにおける前車の軌道を批

判的に考案する代りに、屢々文字通りに直譯した。かつては、我國の實際的事情の十分なる檢討なしに、ヨーロッパにおける無產階級陣營內の兄弟喧嘩の最も露骨な形態を飜譯的に直輸入することが、恰も最も革命的な態度であるかの如く考へられてゐた時代さへもあつた。かやうな事情にも手傳はれて――その背後に之を可能にした客觀的條件の存在してゐたのはもちろんである――ヨーロッパにおける對立狀態は大體其儘に我國に移植された。しかも之に加へて、久しく我國の組合運動の隨伴現象であつたところの繩張的割據主義と指導者における個人的な感情的對立とが單に消滅しないばかりか、却つて上記の對立で油をかけられたので、我國の無產陣營はこれら新舊兩樣の對立の交錯によつて、文字通り縱に橫に、右に左に、四分五裂するに至つたのである。

だが同時に、一方に、戰線の分裂と同死打ちとが甚しくなればなるだけ、他方では大衆の間に、この無意味・不合理に見える分裂狀態を克服して戰線の統一を回復しようとする合同の欲求もまた盛になつて來ざるをえない。特に、最近におけるがやうに經濟的・政治的・社會的・文化的諸領域における支配階級の攻勢が益々露骨に深刻に激化しつつある事情の下においてはかやうにして大衆は――その背後の底意とカラクリとを見透しえない生眞面な大衆は、何らか統一的意味を持つた諸々の運動――よしその程度、範圍が制限的であらうとも――には常にその味方であり、實際にも、例へば「全國的單一無產政黨」「協同戰線」「中間結成」「大左翼結成」「大右翼結成」「單一絕對條件附合同」「無條件合同」「鬪爭的統一」等々の諸運動を多かれ少かれ支持し來つた。(尤もその間、合同・統一の失敗とそれに伴ふ種々の暴露とによつて大衆は痛ましき幻滅を繰返し、屢々自棄的な失望と憂鬱な無關心的態度とに投げこまれはしたが。)

單に所謂大衆のみではない、諸無產政黨の幹部諸君もまた、無產階級的勢力の合一がその××への公道であることを信ずる限りは、少くとも理窟の上では、決して合同の反對者ではありえない。實際にも我國無產政黨の殆んど全部は戰線統一の一箇條を黨の綱領中に掲げてゐるのである。故に、無產政黨合同の問題は第二回普選後に突發した問題ではなく、我國無產政黨の生誕とともに胎まれ、其後政黨の分裂に比例して益々その重大性を加へ來つたところの最も舊き問題なのである。

三

では、なぜ過般の總選擧後にこの問題が突如として前景に現はれたのであるか。

いふまでもなく無產諸政黨の政治的進出の不成績がその導火であつた。即ち、無產政黨の慘敗の主要原因はその陣營の分裂・抗爭・濫立共倒れにある、となす見方であつて、それには相當の理由がある。といふのは、例へば私の知つてゐる大阪第四區の如きでは、四人定員區のところへ五つの無產政黨が(地方無產と呼ばれてをかしな政黨を加

へれば六つになる）五つの候補を立て、みんな共倒れに終つたといふ例もある。これは稍々極端な例であるが、全國的に見ても、無產諸政黨の總得票數は第一回の四十八萬餘より約五十萬餘に增加してゐるに拘らず、當選者數は前回の八人から却つて五人に減少した。この票數に、假りに比例代表制の下で單一の合同無產政黨が存立してゐたものとすれば、全國一選擧區制なら二十二、三人現選擧區制ならば十三、四人になるさうである。

しかし吾々は無產黨の慘敗ならびに敗因に關するこの素人觀にそのまゝ贊成するものではない。けだし、無產政黨の選擧上における不成績は、主として社民黨と地方無產黨との側に存してゐるので、他の黨派については必ずしもさう簡單な論斷は下しがたいし、また所謂不成績の原因に種々あつて、かの分裂・抗爭は必ずしもその主要原因であるのではない。のみならず、ヨリ根本的には、當選代議士數は無產階級的勢力の增大の、政治的進出でさへもの、適當なる指數といふことはできぬ。

けれども、同時に、今度の無產諸黨の選擧上の不成績は、戰線分裂の禍害の最も卑近な、誰れにでもわかりやすい實物敎育であつたことは爭はれない。特に、無產階級の勢力進展を選出代議士數によつてのみ評量しようとする人々にとつては、問題はまさに決定的であつた。が、代議士萬能觀とは聊かの關係もない黨內黨外の人々にとつても、**亦政治的戰線の分裂による選擧上のこの不成績は、一般に無產階級戰線の就中經濟戰線の分裂に基づく鬪爭上の多くの不利益を指示する顯著なる信號であつた。**そこで、この實物敎育と信號とをきつかけに、此際、全無產政黨は合同に向つて努力しなければならぬ、といふ希望と運動とが蔚然として再發したのは、極めて自然な事の成行であると云へよう。

もし事態がかくの如くであるならば、所謂合同問題の本質は一體どこにあるのか。合同の追求者と非合同又は分裂の追求者との對立が問題であるのか。否、さうではない。今日の無產諸政黨は悉く抽象的には無產階級戰線の全的統一といふことが彼等の解放の一主要條件であることを確信し、いづれの黨もそれぞれの形態において、その實現を努力しつつある。したがつて現下の合同問題の本質は、私の見るところでは、全合同其者に對する贊否、もしくは、之を追求することの熱意の存否にあるのではない、むしろ問題は、全合同の實現といふ歷史的な大事業が、一體、何から始めらるべきかといふ點に係つてゐるのである。換言すれば、全戰線の統一は現在の情勢の下において無產諸政黨が即時無條件の全合同をなすことによつてのみ到達されるとなす見解と——この見地よりすれば部分合同は戰線統一の妨害物である——今日の客觀的主體的情勢の下においては、鬪爭力と持續的結束力ある全合同の即時結成の不能を見透し、當面に追求せらるべきものは斯樣な全合同ではなくて、將來、全合同もしくは大合同への一楔機たるべき堅實なる部分合同であるとなす見解との對立なのである。

四

「全合同」詳しく云へば全無產諸政黨が直ちに感情や行がかりを一擲し、獨自の指導精神を淸算し又は之に拘泥せず、即時に無條件に、全國的單一無產政黨に合同すること、これほど望ましきことが他にありえようか。さうして、もしすべて望ましきことが、意欲し・努力しさへすればそれで實現できるものであるとすれば、之に反對するものはまさしく愚者か裏切者かであらう。だが、吾々がバラ色の希望の世界から灰色の現實に歸り來るときに、吾々の理論がさやうな樂觀を裏書せぬのはもちろん、實際上でも世界各國の最近の史實と我國における數年の無產政黨運動史の事例ともまたこの樂觀に反逆してゐるのを見出すであらう。我國をも含めた世界各國において、幾度となく、輝かな希望を以て始められてはいつも同じ陰慘な幻滅に終始したこの全合同が、今日即時に、我國において可能なるがためには、單なる希望・意欲以外に、之を保證する何等か客觀的な根據がなければならぬ。從つて吾々にしてもし空望と幻滅とを繰返すことなく、合理的な目標と希望ある努力を吾々の陣營內に育成せんことを欲するならば、眺めるに愉快なバラ色の夕榮えに見入ることではなく、それが如何に不愉快であらうとも、現に吾々の立つてゐる灰色の泥土を直視しなければならぬ。この見地より我々は先づ全合同論が如何なる背景の下に、如何なる勢力によつて支持されてゐるかを冷靜に考察して見る必要がある。

最近における全合同論の擡頭に刺戟を與へ、これが有力な背景をなしたものは第一に、無產政黨運動の局外者であつた。即ち、總選擧における幾多の苦々しい經驗の後に、粗朴な形においてではあつたが、ともかく眞先に全合同への希望を表明した者は、無產黨員の一般市民就中、知識階級者（わけても新聞記者と社會評論家）および未組織勞働者であつた。次に、黨外者とともに注意すべき全合同論の温床は、いまだそれぞれの黨意識にまで訓練されてゐないところの黨內大衆である。さうしてこの種の大衆が、大體、黨生活の淺い青年に多く、また黨の統制力の及ぶこと稀薄なる地方に多いのは、當然のことだ。

さて、これら二群の所謂大衆における全合同論乃至全合同氣分は極めて生眞面目であるが、同時に極めて粗朴でもある。吾々は彼等において熾烈なる合同への衝動を感得しはするものの、いかにしてこの正しい本能を現實の世界に實現すべきかについての冷靜なる社會的認識は、殆んどつねに之を見出しえない。譬へて云へば、彼等の合同氣分は山を遠くから眺めながら、吾々の行先は頂上にあるのだから、吾々はただ眞一文字に頂上目がけて驅け登れよ、といふ素人の登山論にも均しい。私は、彼等の目的地が山頂にありとなす直覺を正しいと考へるし、またこの山頂に直進すべしといふ純なる熱意にも十分の敬意を表する。のみならずそれは極めて景氣のよい素人受けのよい考へ方でもある。けれども例へば諸君が實際に登山せらるる場合には、もちろんこんな素人の登山論を諸君の指針とはせられずに、却つて右に曲り

左に折れ、屢々大いなる迂回をすら辭しない山案內の言を信頼されるであらう。丁度、そのやう全合同もまた目標の意識とそれに對する善意ある努力と熱意とがあつただけでは決して達成されえない。大衆のこの欲求は、それが本能的に直覺した目標に到達しうるためには、はつきりした理論と豐富な經驗とを持つ指導者によつて指導され、組織されねばならぬ。さうしてかやうな指導的地位に立つてゐる者が無產政黨における大小種々の幹部である。しからば無產政黨の幹部は全合同の問題に對してどんな態度を取りつつあるか。

五

全合同論を意識的に運動化した最初の勢力の一つは地方無產諸政黨わけても東京無產黨である。これら地方諸政黨はその內容・素質において極めて雜多であるので、思想上にも實際上にも之を一團として取扱ふことは甚だ失當である。しかしこの異質性にも拘らず彼等は何等かの既成全國政黨に合流せんとの強い希望と之を受容しない全國政黨ならびにその脫落を攻擊する母體たる全國政黨に對する強い反感とにおいて、更にまた、過般の選擧の不成績の結果、このままに推移すれば自壞又は併合の運命がふりかかつて來はせぬかとの危惧においては略ぼ一致してゐる。したがつてかやうな狀態にある地方政黨が、彼等の希望と感情とにも副ひえれば、彼等の窮地を救ふことにもなり、おまけにみつともない割込運動に比しては——その內容はともかく名目においては——斷然、大義名分にも叶ふところの全合同論を眞先きに自黨の政策として捕へ、之を天下に絕叫するに至つたのは、まことに尤もなことだ。何となれば、萬が一にも全合同が成立てば、新黨において一株持てて割込の宿望が達せるし、それが失敗に終つても大衆の欲求のために鬪うたといふ名譽こそ得れ實質的に失ふところは殆んどないのだから。全合同の思惑は彼等にとつては最も利益多き思惑である。だからこそ地方政黨においては指導部も大衆も、幹部派も非幹部派も、共に結束して、少くとも表面上では、熱心なる全合同の主張者であるのだ。地方政黨は屢々全國政黨の合同論を攻擊するに方つてその重大理由として、それが自黨本位の合同論であることを指摘してゐるが、これは自分の目の梁に氣付かずして他人の面上の塵を笑ふの類ではなからうか。そのほか、地方政黨が合同機運の擡頭とともに直接に感ずるに至つた最大の危險は、部分合同が成立して選擇的に參加を許される場合に、置いてけ堀にされることであつた。この危險はぜひなんとかして防止されねばならぬ。さうしてそれがためには、地方政黨は集つて一團體を造り、個別取引を止めて集團取引をやるにかぎる。かくて生れたものが、過般合同問題に關して共同行動をとり、「單獨行動をとらぬ」ことを首要目的として成立するに至つたところの十一地方無產政黨よりなる『無產政黨統一全國協議會』である。東京無產黨と勞農大衆黨によつてリードされつつあるこの團體がまた全合同の熱心なる音頭取りになつてゐることについては、何等の說明を必要とす

まい。

全國政黨の全合同に對する態度は、地方政黨と異つて、黨としてはむしろ氣乘薄である。(勞農黨の態度は一見之れの例外をなすやうにも見えるが、既に多くの人々によつて指摘されてゐるやうに、實はさうではない。)といふのは、これらの全國政黨は善かれ惡かれ自己の指導精神とその勢力の發展性とについて一定の確信を以てゐるので、何もあはてて卽時の全合同――それは現狀においては鬪爭力と結束力の乏しい異分子の不安定なる集合以上には出でえない――なんか造り上げて、折角を築き上げた自己の地步を再び混亂させる必要を認めないから。從つて全合同に對する全國政黨の態度は、自黨の獨立維持を目標とする消極的、受動的態度か、他黨攪亂のためにする全合同機運の利用か、さもなくば指導精神において近似し、相互に信賴しうる友黨との合同即ち所謂部分的合同の支持かである。

しかし全國政黨内にも全合同論者がないのではない。さうしてそれは一つは黨内の反對派であり、他は極左のフラクションである。通常非幹部派乃至反幹部派と呼ばれてゐる兩者は、多くの場合、一見想像されるやうに、幹部ならぬ平黨員が主要勢力であるのではなく、黨の實權に近くゐる幹部に對してそれから遠ざかつてゐる。云はば在野の大小幹部を云ふのだ。さうしてかやうな反對派が黨内における失意分子、地方幹部および青年分子とに多いことも極めて自然である。

ところでこれらの黨内反對派の中には現幹部に比して優れてゐる者もあり、劣つてゐる者もあるが、いづれも現幹部の政策に反對して之に向ふを張り、あはよくば自ら之に取つて代らんとするの意圖を有する點においては變りない。さうして合同問題に關する現幹部の意向が上記の如くである以上、反對派にとつて最も有力なる反幹部運動は、所謂大義名分にも叶ひ、大衆の本能的欲求でもあるところの全合同論を提げて現實的事情に暗き大衆に臨み、當然可能なる全合同ができないのは、現幹部の故意の妨害によるのだといふやうなデマを飛ばして、大衆の間に反幹部的感情を煽り立てることであらう。東京における合同促進協議會、青年協同議會、其他青年部および地方部における樣々な決議運動は、多かれ少かれの程度において、この部分に類する。

なほ之とならんで、合法無產黨の陣營を混亂させ、合法無產黨の醜態を勞農大衆の前に見せつけてそれに愛想をつかさせやうとの意圖から全合同の不能を知りつつ、いな、知るが故に却つて之を強調する極左フラクションの策動も幾分あるらしい。かやうな諸勢力に指導せられて、全國政黨内にも亦全合同論の煽動が行はれ、最近では部分的にはかなりの信奉者を持つに至つてゐるのである。

最後に、附言しておくべきは、大衆・全民兩黨の單獨合同の說が傳はるや、この特定の單獨合同に反對するために、兩黨内および黨外において盛に全合同が唱へられるに至つたことだ。特に、大衆黨現幹部への反感と合同の仲間はづれにされる危險とを直感した一部の地方政黨の如きは、稍々滑稽にさへ見えるヒステリックな焦燥を以てこの單獨

合同を目の敵とした全合同論が叫ばれた。さうしてこの理由も亦極めて容易にわかる。といふのはこれら兩黨の合同は必らずや日本の無產諸政黨の勢力關係の均衡上にも、またこれら黨內における諸勢力の均衡の上にも、一大變動を及ぼすであらう。したがつてこの變動の結果自己の地位の劣惡化を豫想するこれら兩方面の諸分子から、當然この單獨合同への反對が起つて來ざるをえない。しかし漫然と之に反對してもそれでは大衆の支持をえがたい。そこで、彼等は反對を効果的ならしめるためには、なんらかヨリ進步的に見える辭柄を持たねばならぬ。かくてかつぎ出されたのが、大義名分にも叶ひ素人受けもよいかの全合同論である。かやうにして中には、眞意においては少しも全合同に贊成でなく、いな斷然全合同に反對である人々までが、しかも全合同の不可能を見越しながら、恐らく之を見越してゐるがゆゑに、大衆に向つて全合同を叫ぶといふ奇觀をさへも呈しつつある。

以上の如く、恰も大衆の間に支配的であるかの外觀を呈しつつある全合同の機運は、大衆における、極めて善意でしかも正しい直覺ではあるが、之が實現の社會的諸條件については極めて無省察な云はば•衝動的な合同欲求を背景とし素材として、上記樣々の方面における複雜な利害で動きつつある諸勢力が、各々の匿くされたる意圖を以て、意識的に之に働きかけることによつて造り上げられたところのものである。これがよかれあしかれ現下の全合同論の赤裸々な社會的姿だと私は考へる。

六

すすんで即時無條件の全合同は現在の事情のもとに果してできうることであるか。それを考へる前に、まづ全合同とは如何なる意味であるかを調べて見たい。

「全合同」は形式的には部分合同に對立し、實質的には一時傳へられた中間單獨合同に對立する言葉だ。しかしそれは明かに無政府主義者やサンヂカリストを除外してゐるのだから、全無產階級戰線の統一ではむろんない。それは政治戰線の統一であるにすぎない。然かもこの政治圈內においても××××を包含しようといふ意圖は殆んどこにも存在しないやうだから、全合同は全合法的無產政黨の合同を意味する。從つて若し之を全無產階級戰線の統一でもあるかの如く大衆に宣傳したならば、それは明かに大衆を欺瞞することになる。實は所謂全合同は眞實の全合同に進むべき一段階としての可能なる範圍——この可能性は頗る疑しいのだが——における部分合同の一種にほかならぬのである。

部分合同は中間合同、大左翼合同、大右翼合同などの形を採りうるが、その中、最も廣範圍の大「部分合同」、即ち所謂全合同は現下の情勢のもとに果して即時に實現できるであらうか、この全合同はその範圍として社民、全民、大衆、全國協議會および勞農の諸黨を含まねばならぬ。從つて全合同論者は、自己の主張が單なるデマやアヂや希望

の表明ではなく直接に具體的な結果を招來すべき責任ある運動であるとなす限り、これらの諸黨が合同の勸誘に應じて素直な心で合同協議會に出席するのはもちろん、進んでかかる全合同をなすの用意があり、なほ、この新なる合同黨が結束と統制とを持ち、ヨリ能率ある闘爭機關たりうる、といふ相當確實な見透しをその根據としてゐるべき筈である。では、此の如き見透しは現下の諸情勢の正しい反映であるであらうか。

(一)先づ社民黨に見るに、同黨はさきにその態度を決定して「今や社會民主主義の勝利は明確となつた、この事實は無產政黨合同の可能性を增大したものである。ゆゑに吾々は戰線統一に對し積極的態度をとるの決意を表明し、社會民主主義を中心とする階級的信頼に基づく戰線統一に對して、各無產政黨がその態度を表明することを要望するものである。」といふてゐる。それは明かに、かの社會民主主義の排擊をその本質とし、反社會民主主義的傾向の合同を造らうと意圖してゐるところの勞農黨との合同・提携を拒否する聲明である。爾來同黨はこの方針を採つて動かず、過般、大衆黨に對して單獨合同を申込むとともに、勞農黨提唱の合同協議會への參加を拒否し、重ねて全民・大衆兩黨よりの參加勸誘をも謝絶することによつて、その態度を一層具體化した。現在、同黨の大勢では、大衆黨との合同は可能なるも、全民黨との合同には組合側に難色あり、勞農黨に對しては合同のみならず聯盟も不可能であるとのことだ。かくて、單にこの社民黨の態度だけによつても所謂全合同の空中樓閣は霧消せざるをえないわけである。

(二)社民黨と絶對的反撥の地位にあるものは勞農黨だ。同黨は二月末に發表した合同問題に關する第一回の聲明書において「議員になりたさのためにのみ合同を口にしてゐる」社會民主主義者の合同論を攻擊し、之に對して「勞農大衆の利益のために闘はんがための大衆と大衆との戰線統一」を主張したる後「われ等が彼等社會民主主義者と同じ陣營に屬しながら、その陣營を階級的闘爭體として確保し成長せしめんがためには、われ等は彼等の行動・指導精神・議會萬能主義、階級協調主義に對し假借なき批判を加へることを必須の條件とする。すなはち吾々は何時たりとも合同の用意を有するのみならず、近くその提唱を發する準備を有すると同時に、黨內批判の自由の確保を主張するものなることを聲明する」といふてゐる。この社會民主主義に對する批判を「必須の條件」とした勞農黨の合同聲明書は黨外黨內において甚だ不評判であつたので、其後、同黨の執行部は、改めて、その準備中のものが無條件合同の提唱にほかならぬ旨を釋明するに至つたが、更にこの「無條件合同」の意味に註解を加へて「それは寸毫も吾々の態度の變化を意味するものではなく、また吾々が合同を通じて社會民主主義と妥協せんとするの意思を含むものでもなく、むしろ一層積極的に共同闘爭の實踐を通じて社會民主主義者を克服せんとする意思を含むものである。從つて吾々の茲にいふ無條件合同は雜誌『勞農』が嘗て主張したところの自己の立場をすての無條件合同と全くその本

質を異にする。吾々が無條件合同といふのは、社會民主主義を徹底的に批判せんとする吾々の態度を他黨の幹部に向つて承認せよと要求し、それを以て合同の前提條件となすにあらざる意味であつて、吾々の態度そのものを放棄する意味では斷じてない」となしてゐる。不評判な「條件」はすてねばならず、さればとて立黨の精神への顧慮や極左への氣兼ねもしなければならぬ勞農黨の苦衷は十分察しえられるが、さりとて以上の如き態度は斷じて合同促進的であるとはいひがたい。去月二十四日愈々同黨が各黨に發した「合同申込」にはもちろんなんらの條件も附せられてゐない。しかし同時に發せられた聲明書には問題とされた所謂「條件」の內容は一段と力強く明白に繰返されてゐる。勞農黨が立黨以來自黨以外のすべての合法無產政黨を社會民主主義黨と呼び、之を以てエセ無產政黨となし、これに對する鬪爭とその克服を同黨の一重要任務であると宣し來つたことは萬人の知るところだ。この勞農黨が、いま、寸毫もその在來の態度を放棄せず、而もこれらのエセ無產黨に對しての合同を提唱するとせば、人々がこの提唱者の誠意と此の如き合同の効果について疑念を挾んだとしても、それは無理もないことだらう。實際、當の勞農黨でさへが現に合同協議會の不成立の見透しを公然言明してゐる位だから。蓋しそれはその筈で、この如き合同は友黨間の結盟ではなくて敵との間の苟合にほかならぬのだから。それはともかく勞農黨の態度は社民黨の態度と相俟つて全合同にとつての險えがたき障害である。

（三）かく左右兩翼の抱持する指導精神が全合同の根本的障害であるとすれば、可能なる全合同は指導精神に拘らぬものでなければならぬ。さうして此の如く見解を最も明白に表明してゐるものは勞農大衆黨および東京無產黨とその指導下にある全國協議會で、その合同に關する決議の中には次の如く書かれてゐる。「吾等は指導精神に關する限り、絕對無條件の合同のみが合同の唯一可能なる方法なるを信ず。それ故に、社會民主主義の確立を合同條件とする社民黨並にさきには『黨內批判の自由』を必須條件とし、いまは無條件合同に服しつつ、しかもなほ『その態度は一貫して變らず』と稱するが如き勞農黨幹部をして合同に對する誠意を示さしむべく、勞農黨、社民黨の黨大衆諸君によつてかかる合同態度の徹底的に清算されんことを期す。」だが、果してこれらの兩黨の態度ならびにそれの基底をなしつつある指導精神が、全國協議會の註文に從つておいそれと清算せられる事であらうか。もちろん合同に關する儀禮的言辭は特に文筆的運動にすぐれた諸黨派のことであるから、色々と巧妙に改變される餘地があらう。しかし黨の態度およびその指導精神はしかく簡單には清算されえない。多年の存立を續き來つた黨派においては、黨の指導精神はよかれあしかれ黨の意識的大衆の中に深く滲透してゐる。のみならず問題の指導精神は恐らく世界的範圍において對立抗爭しつつその存在を續けてゐるところの云はば客觀的な社會的精神に多少の關聯を持つてゐるものであるとせば、益々以てその根據は目下のところ、全合同への漠然たる衝動的

要求よりも遙かに深く且つ根強い。かやうなわけから合同に先立つ指導精神の清算が不能事であれば、全合同は指導精神に拘らずそれに目をつぶつて行はれるものでなければならぬ。が、さすれば對立諸黨の指導精神は其儘新黨に持ち込まれるわけだ。ところでかやうな異質的集團——それも互に仇敵視する異質的集團——を含む謂はば烏合の衆が、帝國主義ブルジョアジーの攻勢に對して無産階級戰線を强化擴大するものたりえようか。經驗はむしろその反對を證明してゐる。例へば辛うじて全國的單一政黨たるの形を備へえた、分裂以前の第一次の勞農黨および日勞黨を中心とするかの七黨合同の歷史はどうか。合同によつて成立した新黨の鬪爭力は强大化されるどころか、直ちに始められた黨内における異質的團體間の抗爭にその勢力の大部分を消耗したために、ブルジョアジーに對する鬪爭力はその間却つて減殺され、さうしてこの鬪爭力は對立的な異質團體の分裂又は整理の後に初めて發揮された、といふ一見逆說的な事實を吾々は知つてゐる要するに、對立的指導精神が歷史的事實として世界的に存在しつゝある今日の事情のもとには、指導精神に係りなき無條件的全合同を言ふのは恐らく一箇の空想に近く、よし假りにこの空想が實現しうるとしても、この脆弱不安な異質的大合同は決して所期の效果——ブルジョアジーに對する鬪爭力の强化擴大——を結果しえぬであらう。さうして即時無條件合同を絕叫しつつある地方無産の人々の多くも、その腹の底を叩いて見れば、決して全合同可能の確信ある見透しは之を持つてゐないのである。

(四)全國民衆黨もまた夙に「全無産階級の利益のため各無産の政黨は從來の行きがかり感情などを清算して、一切の條件を附せず大合同をせんこと」を決議し、その誠意を證するため他黨に率先して勞農黨の合同協議會への參加を通告すると共に、出遲つてゐる他黨に向つても同會議への參加を勸誘しつつある。と同時にしかし同黨においてはその努力にも拘らず即時無條件の全合同は結局成立困難なり、との見透しの下に、この合同機運を水泡に歸せしめず、合同への大衆の要望に可能なる收穫を確保するためには、現在において可能であり、且將來のヨリ大なる合同への發展を持つ堅實なる部分合同だけはぜひとも完成せねばならぬとの着實なる見解が大勢を支配してゐるが如くである。

(五)終りに日本大衆黨は、一方では過般の總選擧によつて、その將來の發展性について最も自信を高めた黨派として、他方では少し以前に七黨合同の苦い經驗を味つた黨派として、所謂全合同論に對して極めて受動的であつた。即ち同黨は「從來の黨の方針に從つて出來るだけ誠意を以て合同の機運に順化し行くつもりであるが、今は聲明書によつて競爭する時期でないと思ふから、形式的な手段は避けて實質的に合同の可能性のある具體的な道を進んで行く」といふ極めてジミな態度を採つた。しかし所謂全合同論の擡頭は勞農黨の合同協議會の召集、全民黨の同協議會への參加勸誘、社民黨の單獨合同の申込等と相

從つて、同黨の態度を積極化せしめ、同黨も亦「全合同を最善の合同方針とし」て之に向つて努力し、形式的にも社民黨を勸誘して勞農黨の合同協議會に參加せんとするかの態度を示すに至つてゐる。とは云へこの黨内においても、大勢を支配するものは全合同不能の見透しであり、かくてその努力にも拘らず、萬一、全合同不成立の場合には第二段の策として、せめて可能にして發展性のある部分全合同だけはぜひともものにせねばならぬといふ決意と用意とが同黨大多數の態度ではないかと思はれる。

以上の如き情勢にして誤りなくば、鳴物入りで宣傳されつつある全合同は、之を冷靜に考察して見れば、それを成立たせる重要な條件を缺いでゐる。さうしてその道の玄人であり、且つ合同の當事者となるべき各無産政黨――全國政黨も地方政黨も――の支配的諸勢力も亦この事實を意識し、揃も揃つて全合同不能の見透を、或るひは公然に言明し、あるひは隱然に抱持してゐるのだ。しかもなほ人々は眞面目に恰も全合同が可能であるかの如く宣傳するのみか、それが即時に實現されうるかの如く、行動上、それに向つて努力するのである。しかしそれはまだ全然理解出來ぬことではないが、一番理解できぬは、見透不能なる全合同の名において、恐らくは唯一可能であらうところの部分合同の成立を妨げることだ。無知なる善意か、知つての惡意か。いづれにせよ、それは一つの奇現象と云はねばならぬ。

七

以上の如き情勢を控へて、開かれんとする勞農黨提唱の合同協議會は果してよく全合同を結果しえるであらうか。私は、多くの人々と共に、率直にその成功を疑ふものだ。それは恐らく最善の場合でもかのインタアナショナル三國體のベルリン會議の歷史を繰返すにすぎなからう。なぜであるか。

勞農黨は、自黨こそかやうな合同會議を召集する最適者だと信してゐるかに見えるが、公平なる傍觀者の眼には、まさに正反對に、この黨こそかやうな役割を演ずる最不適者の一つと映ずる。といふのは、人も知るやうに、同黨は立黨以來、爾餘の合法無産黨をすべてエセ無産黨と呼び、彼等の克服をその重要使命となす旨を揚言し、さうしてこれら社會民主主義的ダラク幹部の正體を暴露し、その支配下にある大衆を奪取して之を自黨の傘下に鳩合することを以て、戰線統一運動の眼目となし來つてゐるから。したがつて提唱者の勞農黨すらこの會議が成功するとは、否、成立するとさへ、見透しをつけてゐないらしい。即ち同黨の達示によれば、かの合同申込は「(1)戰線統一を直ちに積極的に遂行する熱意を有するものは我黨であることを大衆に示し(2)之を拒否する（戰線統一協議會を除いては之を拒否する見透し）他黨幹部の分裂主義を此の生々しき事實によつて暴露し(3)他黨内の合同を要求せる反幹部分子をわれ等の鬪爭に動員し、(4)もし合同成

立すれば、そこに比較的自由に廣汎に共同闘爭が可能であることを利用し、盛に大衆と大衆との共同闘爭を展開し、その闘爭の過程に於て社會民主主義者を浮き上らせ克服せんとする進軍の一歩である」。もしこれが合同申込の眞意であるとすれば、それはその見透しにおいてもその意圖においても、普通に人々の考へてゐる意味の合同を生み出さうとする眞面目な努力ではなく、むしろ「合同機運」を利用し合同提唱の美名の下に行はるる自黨擴大の策動であると誣いられても、恐らく之を辯解することは困難であらう。さうして勞農黨にしてかく合同協議會をば友黨との誠意ある協同の舞臺と考へず、克服さるべき敵との相互闘爭の場面であるとなす以上、勸誘を受けた他の無產政黨も亦よほどの間抜でない限りは、一定の覺悟と準備とを以て之に出席するに違ひない。かやうな形勢の下においてどうして「全合同」がまん足に成立しうるであらうか。

實際においても、社民黨は當初より、全民・大衆兩黨の勸誘ならびに黨內一部の既定方針への反對にも拘らず重ねて、この合同協議會への參加を拒絶した。全民黨は他黨に先立つて此の提唱に應じたが、それは「全線的合同の意味において」であり、さうしてこの全線的合同の意味には「日本大衆黨、無產政黨全國協議會、社會民衆黨等全無產政黨の參加を待つて始めてその目的を達しうるもの」であるといふ註解がついてゐる。從つてもし社民黨だけが參加を拒否しても所謂全線的合同は成立たなくなるのだから、全民黨の參加も疑はしくなるわけだ。しかし全民黨はさやうに窮屈には之を解釋せず、大衆黨其他が之に參加するならば、自らも亦この次善の合同協議會に出席して、合同への誠意を示すであらう。更に、地方無產の全國協議會は先月末にともかく出席の快諾を與へた。終りに、最近「全合同を最善の合同方針とす」ることを決議した日本大衆黨も執拗に社民黨の參加を勸誘し勞農黨の態度を批判しつつ、結局合同協議會に出席するのではあるまいか。かくて曲りなりにも勞農黨提唱の合同協議會は、もし同黨が黨內其他の事情から故意に之を遷延するのでなければ——全民黨は恰もそのことを推定したかの如く、期限付きで合同會議の開催を督促してゐる——恐らく社民黨ぬきで一應成立するであらう。

だが、このことから直ちに社民黨ぬきの左よりの大合同が成立しうるかに考へたら、それは非常な速斷であらう。勞農黨はこの會議によつて社會民主主義者の分裂主義を暴露しようとの意圖を持つてゐるし之に對して爾餘の無產黨は勞農黨のかやうな戰術とその獨善的態度が合同の障害であると考へてゐるから、口や筆先での合同論者である勞農黨こそ却つて實踐上の分裂主義者であることを指摘して之に應酬するに違ひない。かくの如くその行掛りにおいてのみならず、その根本見地においても重なる疎隔・對立を存してゐる諸黨を一丸とする左寄りの大合同は到底成立しえないであらう。私は恐れる、一部大衆の熱烈なる囑望にも拘らず、勞農黨の合同協議會は無產諸黨間の相互の協同のための會議であるどころか、その反對に却つて、相互の闘爭のた

めの會議として終りはせぬかと。

八

全合同が現下の情勢の下では到底、實現不能であるとすれば、いかなる合同がはたして可能であり且つ望ましきものであるか。

何らかの合同が可能であるためには、全合同を不能ならしめてゐる諸條件の存在せざることがなによりも大切だ。即ち、先づ第一には、合同すべき諸黨間に相容れがたき指導精神の對立が存在せざることと第二には、諸黨間に協同に關して相互の不安・疑惑・腹の探り合ひ等の存在せざることとである。これを積極的に云へば、合同すべき諸黨派の間に、指導精神の同一又は近似と一定程度の相互の信頼との存在が絕對的に必要である。もちろんこのことは全體としての黨について云ひうることで、種々の地方に亙る幾千・幾萬の大衆を含むところの大衆的政黨にあつては、個々の地方、個々の個人の間には必ずや理論見解の對立も存し、相互の信頼において多少缺ぐるところもありえやうけれども、これはいかなる場合にも免れがたきところである

ところで、かやうな意味の部分合同は、抽象的には左寄りにも、右寄りにも、また中間的にも成立しうるわけであるが、我國無産政黨運動の最近の情勢から具體的に考へれば、最も現實性に富むところの部分合同は大衆、全民兩黨を中心とし、地方無產の或者・其他を加へたる中間合同である。さうしてこのことは、この合同の賛成者はもちろん、その反對者も亦均しく之を承認してゐる事實であつて、この蓋然性の故にこそ屢々この合同により脅威を感ずる種々の方面から公然と又は隱然と、直接に又は間接に、この合同に對する反對の運動が試みられつつある所以でもあるのだ。

然らばいかなる理由の下に人々はこの中間合同に反對するか。それはこの合同が固定的であつて全合同の妨害になるといふことにある。ところが、以上述べ來つたところでもわかるやうに、今日では誰れもよほどの夢想家でない限り、口では何と言つてゐやうと、全合同可能の見透しを持つては居らぬ。彼等は最善であるかも知れぬが現實には不可能な全合同の追求のために、次善ではあるが實現可能な合同を放棄せよといふのであるか。のみならず所謂中間合同は諸々の部分合同中では左翼合同、右翼合同に比し、最も屈伸性と發展性とに富む部分合同であり、よし全合同が可能である場合を假想しても、中間合同は之を促進し之を效果的ならしめる作用をこそすれ、決して之を妨害するものとは考へられぬのである。

此の如き見透しにして誤りないとすれば、この可能にして有意義なる部分合同を實現しうる地位にあるすべての者は、確信と果斷とを以て、その目標の達成に全力を傾注すべきである。私はダンテと共に言ひたい「汝の道を步め、そして人々をしてそのいふに委せよ!」と。なぜなら、可能といふことは、放つておいてもひとりでに出來上るといふ意味ではない、それは屢々全勢力を擧げての努力を待つてのみ始

めて實現しうるものなのだから。

九

指導精神の對立と相互の不信とが存在する諸黨派の間には、なるほど全合同は成立しないであらうが、しかしこれら各々に獨自の存在を許し、その範圍内で相互に提携聯絡するところの緩き結合、たとへば全無産政黨を含む共同鬪爭委員會ぐらゐのものなら出來ぬことはあるまい。だから、不可能な全合同よりも可能だが固定の恐れある部分合同よりも、先づこの共同鬪爭委員會の結成に努力すべきである、との說がある。私はそれを大いに聽くべき考へであると思つてゐる。

だが、かやうな共同鬪爭委員會の成否、ならびに効果は抽象的には之を斷定しがたい。共同鬪爭委員會には、特殊的なものと一般的なもの、一時的なものと繼續的なものとがありうるが、ここに問題となるのは繼續的且つ一般的な共同鬪爭委員會であらう。したがつてこの種の委員會は他面から見れば、ゆるやかな合同即ち聯合協働團（アルバイツゲマインシヤフト）だともいへる。して見れば、この委員會が全政黨を包含しようとする限りは、その成立において困難稍々少き以外には、さきに、指導精神の對立および相互の不信を持つところの諸黨派間における合同の成否ならびに効果について誌したところのことが、大體、此の場合にもあてはまるであらう。といふのは、かやうな共同鬪爭委員會は我國においては一面から見ればまた所謂『協同戰線』の戰術の具體的形態と見うるのであるが、この所謂協同戰線の特殊なる歷史的特質は、決して眞實の意味において諸黨の協同を促進するものではないからである。

世界各國の左翼政黨によつて踏襲されつつある協同戰線の本元は人も知るやうに共産黨である。だから協同戰線の本質を理解するには、先づ共産黨インタアナシナルが第三回大會以來採用したところの原型における協同戰線の何たるかを知つておく必要がある。かつて私は共産黨の協同戰線の特質について次の如く書いたことがある。共産黨の提唱する協同戰線は、第一に、他黨の大衆をその相手方とする。即ちそれは大衆と大衆との協同であり、「下からの統一」でなければならぬ彼等はダラク幹部や「社會的裏切者」と提携せんとするのではさらさらない。もちろん彼等がそれぞれの勞働者團體を代表してゐる限り、彼等とも交渉しないわけには行かないが、それは彼等との親善を加へんがためではなくて、大衆の前に彼等の正體を暴露せんがためなのだ。次に、協同戰線の對象は大衆の實際的な日常の生活利益である。即ちそれは「彼等の手近な利益のためにする鬪爭によつて大衆を動員するのである。」資本家階級の攻勢化によつて勞働者階級の生活利益が到るところに脅威されるために、彼等は期せずして共同的防禦の戰陣に立ちかくして統一運動に向ふ機運が釀成される。共産黨はこの機運を特定の方向に導いて、自黨の發展に利用せんとするのである。更に、共同戰線の目的は社會民主主義幹部の暴露と、その支配下にある大衆の奪取とにある。さうしてそれがためにはさきに述べた大衆の生活利益の

ためにする闘爭が最も恰好なのだ。といふのは改良的指導者の度々のしかも公然の裏切にも拘らず、多數の勞働者は依然としてその配下に留まつてゐる。だから今日繰返して彼等が裏切者であることを證明してみたところで、餘り効果はないにきまつてゐる。そこでこれに處する最善の方法は、大衆の生活利益のためにする闘爭の舞臺に彼等を誘ひ出すことにある。さうすれば階級闘爭的精神の再燃し來つた勞働者は別にむづかしい說法をしないでも、彼等の指導者が、單に社會主義の究極目標に對する裏切者であるのみならず、ヨリ多くの賃銀、より短き勞働時間などいふ日常卑近な問題に關しても、眞劍な闘爭的精神を缺いでゐることを體驗するであらう。さうしてまた共產黨ではなしに好の改良的社會民主主義者が協同戰線の眞の破壞者であることを認得するであらう。この結果、意識的大衆は改良的指導者より離反して共產黨の旗下に集る來るに違ひない。かくして共產黨の共同戰線運動の鋒先は共同の敵たる資本家階級に對するよりも、却つてその味方であるべきかの社會民主主義者にヨリ銳く向けられてゐるものと考へられる。從つて共產黨の協同戰線運動における「協合」の意味も亦此の見地より諒解せらるべきだ。卽ち共產黨はもちろん社會民主黨との組織上の合同には絕對に反對である。のみならず共同運動をなすに方つても「凡ての共產黨は自己獨自の見解を發表し、共產主義の反對者を批評することにおいては絕對の自由と完全なる獨立とを維持すべきだ。共通の行動原則に從つて活動する場合にも「その行動の前後はもちろん、必要の場合には行動の最中においても、勞働者階級の一切の政策に關して例外なしにその意見を發表する權利と可能とを絕對に保留しなければならぬ」といふのである。

八年前に私が以上の如くその特質を規定した所謂「協同戰線」の戰術は、今日なほ我國の左翼運動者によつて、殆んど文字通りに、遵奉されてゐる。(例へば最近問題になつた勞農黨の指令第十一號を見られよ)もしも共同闘爭委員會が一方では左翼團體のかやうな意圖と、他方ではかくの如き意圖が當然に右翼團體に呼び起すであらうところの對立的意圖とによつて支配さるる限り、共同闘爭委員會は帝國主義ブルジョアジーに對する共同闘爭の機關として發揮しえずに、却つて大衆爭奪のためにする無產諸黨間の相互闘爭の舞臺として、その束の間の存在を終るであらう。さうして實際上にも諸外國ならび我國における幾多の共同委員會の無爲にして短命な歷史は、この豫想を裏書するものと思はれる。

では共同闘爭委員會は無產戰線統一の見地からは全然何の役にも立たぬものであるか。否。それは一定の條件の下では相當の果を擧げうるものと考へられる。しからばこの一定の條件とは何か。例へはここに健康の回復、增進を必要とする病弱者があつたとする。彼はたしかに多くの營養を必要とする。といつて彼れにむやみやたらに滋養物を食べさせたなら、彼れの病弱が治るどころか却つてたちまち吐瀉を起して一層健康を損ずることにならう。この場合において滋養物が眞實に

健康の回復・增進に役立つための一大條件は健全な消化力だ。從つてそれのない者にやたらに滋養物を食はせることは、害あつて益なきところである。共同闘爭委員會にあつても、それが量的に增大すればするだけ、抽象的にはその闘爭力を加へる筈だが、現實には旺盛な消化力なしに從らにその範圍を擴大することは、闘爭力を增進しないのみか屢々食傷、下痢を起して却つてその闘爭力を損傷しさへする。共同闘爭委員會のこの消化力、卽ちこの委員會の活動を有効ならしめる必須の條件は、實力と統制とある中間的勢力――卽ち一方では左右兩翼の間に立つて誠意を以つてその對立を仲介・調和し、他方ではこれら兩翼の偏向・逸脫を抑止しつつ階級闘爭の堅實な巨歩を歩みうる中間勢力の存在である。さうして中間合同はまさにかくの如き勢力を結成せんとしてゐるのだ。それゆゑに所謂共同闘爭委員會は、中間的部分合同と矛盾しまたは之を無用化するどころか、却つてこれなくしてはその健全なる機能を發揮しえないであらう。だから內訌・無爲・短命な名ばかりの共同闘爭委員會の代りに、結束と統制ある眞の共同闘爭の委員會を持たんとする者は、ぜひとも、それに平行して、いな、それにさきだつて强大なる中間勢力の結成を造上げることに努力しなければならぬのである。

一般的共同闘爭のためではなく、特殊の目的のための例へば減給反對、失業防止、軍縮撤底等等のための共同闘爭委員會は事態の急迫いかんによつては、割合たやく成立することができる。現に鐘紡の減給を機會に、勞農黨は各無產政黨に對し、各黨支持組合の共同の反對闘爭を促して之を共同に應援し、且つ黨獨自の活動をなすために失業反對共同委員會を設置しようとの申込をなすやに傳へられてゐる。だがこの委會員といへども、この特殊の目的が大いなる社會的・政治的、重要性を持ち、之に處する各黨の對策が著しき對立を示す場合には――指導精神の對立はまた多くの場合政策の對立をやむなくする――委員會の運動が深化、擴大し、存續が久しきに亘ること多ければ多いだけ、一般共同委員會に對する上記の論述がそのままこの特殊共同委員會にも適用されるであらう。

十

之を要するに、上來述べきたつたやうな現下の情勢の下においては「全合同」不能の見透しを、私は正しいと信ずる。かやうな事情のもとで、なほ「合同機運」から現實的に可能な何らかの收穫をあげ、以て大衆を絕望に陷れずに彼等の欲求に合理的滿足を與へる道は、思ふに、發展性ある中間的部分合同のほかにありえない。さうしてかやうな中間合同は、上來述べ來つたやうに具體的には大衆・全民兩黨を中核とする中間的勢力の結成である。もちろん、かくのごとき中間的部分合同は、率直に云へば、戰線の統一ではなくて、戰線の整理である。だが、それは想像しうべき諸々の部分合同中、最もよく左右兩側に向つてその翼を延ばしうるところの、換言すれば、可能なる大合同――

嚴密なる意味の全合同は近き將來には實現されえない――への發展性に最も富むところの、云はば戰線統一のための戰線整理なのだ。もしさうであるならば、責任ある指導者は見透しのつかぬ「全合同」をめぐつて徒らなる思惑に沒頭することをやめて、大膽に率直に、現狀の下に何が可能であり、何が不可能であるかを大衆に說示し、全力を擧げて一意この可能なるものの實現に向つて邁進すべきであらう。

それではいつたい全合同への大衆の欲求はどうなるのであるか。全合同への大衆の欲求はそれ自身としては疑もなく正しい。しかし同時にそれは現在の情勢のもとでは、繰返し述べ來つたごとく、到底充たしがき欲求なのだ。してみれば、全合同不能の見透を持ちながら、屢と内心においては全合同に反對でさへありながら、大衆の前に出ては大向ふの喝采をはくさんがために景氣のよい全合同論を呼號する者こそ、大衆に阿附し、大衆を弄び、大衆を欺瞞し、大衆を愚にするものだ。彼等は眞實なる大衆の啓蒙者、指導者ではない。合同運動が此の如き人々の手で操られ、弄ばれてゐる限り、全合同をめぐつて、恰も支那軍閥の通電戰のやうに、名文・惡文の決議文と聲明書との大量は生產されえよう。さうして既成政黨の政客氣取りの虛々實々の合同折衝は繰返されえよう。しかもその間に「全合同」の夢とともに、さしも高揚された合同機運其者さへが、やがて停頓、沈滯し、遂には沙漠に注ぐ河流のやうに、いつとはなしにその影を消し去るであらう。かくてまたしても脊負ひ投げを喰はされて幻滅と失望とを痛感するであらう勞農大衆は、口先きでのみは大見榮をきり、小手先きの策動には沒頭するが眞摯實踐によつて大衆の欲望に可能なる滿足を與へうるの確信と決斷とを持ちえない合法無產諸黨に愛想をつかし、或は政治的無關心に、或は反政治的經濟運動に、或は非合法的政治運動に轉向するのではなからうか。吾々は今日現にかやうな危機に直面してゐるのである。

客觀的條件から必然に生成する。それ自身ではあくまで正當な大衆の衝動的欲求はどこまでも眞劍な態度で之を尊重して行かねばならぬ。之を無視するの不可はもちろんだが、しかし之に阿附し、之を弄び、自己の利益のために之をダシに使ふこともまた同樣に許すべからざる罪惡だ。故に、一方においては冷靜にだが親切に、大衆の欲求の何たるかを究め、他方では、それが一般的に、また現狀のもとで、果して實現しうるものか否か、そして現狀のもとで全部の實現が不能なる場合には、全的實現への當座の段階として、その如何なる部分の實現が可能であるかの見透しをつけ、この確乎たる見透しを率直に、だが[illegible]と自信を以て大衆の前に披瀝し、然る後大衆とともに、勇敢に一向に、この現狀のもとで可能であり、全的實現への階梯であるところの部分的實現に向つて全力を致すこと、これこそ眞實に大衆の欲求を尊重し之に奉仕する所以であらう。吾々の場合にあつても亦、大衆に迎合せんがために、見透しの立たぬ全合同を當面可能の目標として揭げ、空しくこれが周圍を低徊することではなく、實現可能性と發展可能性とを持つところの部分合同を率直に堂々と當面の目標として揭げ

左顧右眄することなくこれが實現に直進すること、これこそ眞實に大衆の要望に忠なる所以ではないか。さうして吾々がそれの支持を必要とするところの意識的大衆も亦、結局においては、自己を利用する者や自己に阿諛する者に對してではなく、更に、合同文書の最大量の生産者や合同折衝における策動の最殊勲者に對してではなく、不能なるものと可能なるものとの冷靜なる見透しにおいて、當面可能の目標に向つて無産者的な太い線で確信ある努力を押切つて行くところの實行の黨派に對してのみ、その滿幅の信望をかけるであらう。故に私は望む、現狀が之を可能とし之を必要としつつある中間合同を結成すべき諸勢力、わけてもその核力たるべき大衆・全民の全黨が、我國無産階級運動の現狀が彼等に課してゐる重大なる歷史的任務をはつきりと自覺し、その實現に向つて協力一致、確信と果斷とを以て勇往邁進するであらうことを。といふのは全合同が執拗なる不斷の努力を待つてのみ遂には實現されうるであらうところの理想であるからだけではなくこの可能なる中間合同さへが、世人の云ひふらしてゐるやうに樂な仕事であるのではなく、その達成のためには黨内黨外に儼存する幾多の難關と鬪うて之を克服して行かねばならぬのだから。さうして私は信ずる、伸び上つた合同機運を立ち朽れにせしめず、せめてそれからなにらか有意味な收穫を取入れようとするすべての人々は、必ずやこの芝居氣のない堅實なしかし階級的には極めて有意義な運動に向つて熱意ある支持を惜まぬであらうことを。何となれば此の如き部分合同の確立こそ、次に可能なるべき大合同——私は全合同について思惑する勇氣を持たない——への一階梯であり、恐らくは設立されるであらうところの一般的又は特殊的共同鬪爭委員會をして有効なる鬪爭團體としてその持續的機能を發揮しえせしめる前提條件であるのだから。

附記。本稿は無産政黨の合同即ち政治的戰線統一の問題を主題としたので、無産階級戰線の他の一面、即ち經濟戰線の統一、とりわけ勞働組合戰線の統一の問題にはふれえなかつた。しかし我國の勞働組合の多くが支持團體として諸種の政黨に分屬してゐる以上、二つの戰線は密接な、否な不可分の關係に立ち、斷えず交互に作用しつつある。だから、政治は經濟に依存するから、戰線統一は組合戰線の統一から始めらるべきである、といふ生硬な公式主義的見解は明かに間違つてゐる。しかし、もし政治戰線の統一運動が何等かの事情で停頓するならば、經濟戰線の統一運動によつて之を刺戟し、促進し、强要すべきであらう。さうして金解禁後における資本攻勢は、一應此の領域における統一・合同の機運を熟させつつある。だが、冷靜に事態を觀察すると、ここにも政治戰線について述べられたるところと略ぼ似た事情の伏在してゐるのを見る。從つて私はここでも亦遺憾ながら全戰線の統一を見透しえない。とはいへ私は、最近傳へられてゐる全國同盟、組合同盟及總聯合との合同が更に其範圍を廣めて實現せられ、經濟戰線における來るべき統一のための整理をなし、同時に政治戰線における可能なる合同に向つて働きかけるとは、可能でもあり、望ましきとでもあると考へてゐる。なほ、序でながら、本稿は去る三月七日、大阪政治經濟學會の主催で大阪市の曾根崎小學校で開かれた總選擧批判學術講演會において試みた講演の手稿の後半に、其後の材料を補して加筆したものである。（一九三〇年四月九日）

特別寄稿

軍縮と歐洲聯盟

レオン・トロツキー

1　ヨーロッパ統一問題

佛のブリアンは、最高文明の持主でありながら而も一ダースを超える數の戰爭や革命なしでは、一世紀と活きて來られなかつたヨーロッパの運命を改善する必要を感じた。英のマクドナルドは、我等が地球を平和化する目的のために太西洋を横斷した。歐洲聯盟、軍備縮小、航海の自由、世界平和等々が流行語である。到る處、資本主義外交は平和スープを料理してゐる。ヨーロッパの民ばかりでなく、世界中の人民がこのスープの馳走にあづからんとして、各々大きな匙を持ち構へてゐる。

何が故のこの騷ぎぞ！

ヨーロッパに於ける最も重要な國では、社會主義者が既に政權を握つてゐるではないか、或は、握らんとしてゐる國もあるではないか？　否、正にそれが故にこそ、この騷ぎだとも云へる。然しながら、ブリアンの計畫とマクドナルドのそれとは、各々謂ゆる「平和」を全く反對の方向に持ち運ばんとするものである事だけは明白である。ブリアンは、アメリカに對してヨーロッパを護るべく歐洲の統一をもたらさんと欲するものである。マクドナルドは、ヨーロッパを壓迫せんとするアメリカの手傳をして、アメリカから謝禮を取らうとするものである。二つの列車が各々その乘客を破滅から救はんとして同一方向に突進してゐるのだ！

一九二八年七月の英佛海軍協約は、アメリカからたゞ一回澁面を見せつけられただけでお流れとなつてしまつた。この事實は、列強の勢力關係を如實に物語るものであつた。アメリカは云つた――「君等は、君等だけで勝手に作つた決議に、僕が默つて服從するとでも思ふのか？　若し君等が心から眞面目ならば、一層太西洋を越して來たらどうか？」と。そこでマクドナルドは、早速、汽船の切符を買つた譯だつたが、之れは正に平和プログラム中の最も實際的な仕事であつた。

ジュネーヴに集まつた未來の歐洲大陸統一者たちは、アメリカの酒

類密賣者のやうにピク／＼しながら、アメリカ・ポリスに注意を怠らなかつた。ブリアンの演説は序論から結論まで、歐洲聯盟は決してアメリカを敵とするものではないことを誓つて止まなかつた。かうした宣言を讀んだアメリカの政治屋たちは二重の喜悦を感じたに相違なかつた――「ブリアンは俺たちを怖れてゐる……だが、俺たちはやつの手にヒツかゝるものか！」

ストレーゼマンはブリアンの言葉を繰返しながらも、彼れに對して論爭の矢を放つてゐた。ヘンダーソンは双方に向つて矢を放つた。が、彼れの主なる敵はフランスの代表であつた。兎に角、ジユネーヴの討議は大體以下の如き筋書きであつたのだ。

ブリアン・　如何なる場合でも、アメリカを敵としない事。

ストレーゼマン・　全くその通り。だが、或者は心の裡では何んと思つてゐるか知れたことではない。

マクドナルド・　私は神の御前に誓ふ――誠實と好意とはイギリス人特にスコツトランド人のみが有つ特質であると。

「新らたな國際的雰圍氣」は、かくて、ジユネーヴに於いて醸造された。

ヨーロツパ内部の弱點は主としてその經濟的腐敗から生ずる。それと反對に、アメリカ合衆國の經濟的實力はその統一の基礎を成してゐる。そこで問題が起る。如何にせば、アメリカを敵とすることなしに、歐洲の統一をもたらすことが出來るか？　之である。

マクドナルドの半機關紙であるデーリー・ヘラルドは、九月十日の紙上で、歐羅巴聯盟の企圖はグロテスクであるのみならず、寧ろ挑戰的であると唱へて、若しもこの空想が實現された曉には、ヨーロツパはアメリカに對して巨大な關税壁を築き上げたことになる、そしてその結果イギリスは、二つの大陸の萬力に挾まれた形になるであらうと云つてゐる。同紙は尙ほそれに附言して、かゝる條件の下にアメリカから援助を得ようとするのは「狂氣の沙汰か、乃至はそれ以上である」と斷じてゐる。之れはかなり正直である。

實際は、歐洲聯盟とは正確に何を意味するものかは誰も知らない。ストレーゼマンにして見れば、それは貨幣の統一乃至は郵便切手の一定化に落着く。之れは聊か貧弱である。ブリアンは尙ほそれを「研究する」と云つてゐるが、一たいその研究の根據が何處にあるかは彼にも分らないのである。

統一の基準は經濟的性質のものでなくてはならぬであらうが、それも單に商業的だけでなく、生產方面をも包含せねばなるまい。人爲的の境界が鐵を石炭から隔離するやうな事は廢されなければなるまい。電化の普及がヴエルサイユ條約の取り定めた國境を超えて自然的及び經濟的發展の必要に應じて擴大されねばなるまい。歐洲の全鐵道系統が結合されることも必要であらう。等々。凡てこれ等は、前もつてヨーロツパ内部の關税壁を全部撤廢することなしには遂げられるものではなからう。それは從つて、アメリカに對する全ヨーロツパの單一關税

の設定を意味するであらう。

ヨーロッパ內に於いて關稅壁が撤去せられるならば、再組織と適應との一時的恐慌を經た後に恰も大企業が小企業に對して優勝すると同じ意味で、資本主義ヨーロッパは一層高級の生產と分配の新たな標準に達することは疑ひない。だが、それまでに、小さな企業家等がおとなしく自分たちの企業を放棄するであらうか? 否なか〻問題である。大資本家が市場の主となる前には、小さな資本家を亡ぼすことが必要である。國家でも同じことである。關稅障壁は、產業全體としての利益がどうであらうと、或る一國のブルジョアジーにとつて、他の國々のブルジョアジーに對抗する必要上缺くべからざるものであるが故に設けられてゐるのである。

ヨーロッパに自由貿易時代を確立せんとの目的を以て、一つの經濟會議が國際聯盟に依つて召集されて以來、關稅は益々高率になるばかりであつた。今日イギリス政府は二ケ年の「關稅休課」を提唱してゐる。それは來る二ケ年間現在以上に關稅を引上げまいと云ふ提議である。之れはヨーロッパ聯盟に對する一つの小さな保障として役立つであらうが、今のところでは單に一つの提唱として止まつてゐる。

而かもこれらの益々高く聳えつゝある關稅障壁を確保するために、軍隊なるものが各國に嚴然と構へてゐる。これ等の軍隊も亦歐洲戰前に比較して益々擴大されるばかりである。戰前には、イギリスはその海軍に二二三七、〇〇〇、〇〇〇弗を費してゐたが、現在では二七〇、〇〇〇、〇〇〇弗である。アメリカ合衆國の海軍費は一九一三年には一三〇、〇〇〇、〇〇〇弗であつたが、今日では三六四、〇〇〇、〇〇〇弗である。日本のそれは、四八、〇〇〇、〇〇〇弗から一二七、〇〇〇、〇〇〇弗、即ち殆んど三倍してゐる。各國の大藏大臣たちが、この軍費の洪水に船暈するのは無理もない。

五大强國の軍備費年總額(陸、海、空軍)は、過去三ケ年間に、二、一七〇、〇〇〇、〇〇〇弗から二、二九二、〇〇〇、〇〇〇弗に增加した。この數字は、ヨーロッパ三十ケ國の各ブルジョア政府が、如何に彼等の關稅を重大視してゐるかの證據として役立つであらう。大きな資本家が小さい資本家を潰さねばならぬとすれば、それと同樣に强國は弱國の關稅壁を蹂躙せねばならぬ譯である。

舊いドイツ――幾ダースかの小獨立國が各々關稅壁を設けてゐた時代のドイツ――を現在のヨーロッパに比較してストレーゼマンは、ドイツの統一に未來の歐洲經濟聯盟の手本を需めんとした。之れは惡るい類例ではない。だが、惜いことにはストレーゼマンは、ドイツが一つの國家に統一されるまでには、尠なくとも一つの革命(一八四八年)と三つの戰爭(一八六四年、一八六六年、一八七〇年)とを通過して來たと云ふことを附け加へるのを忘れてゐた。それのみでない。一九一八年の「共和國革命」を通過して來た今日に於てさへ、ドイツ系オーストリアはドイツ共和國の外に在る。事情かくの如しとするならば、僅か三四回の外交的朝飯が直ちに以て全ヨーロッパの經濟的統

一を實現せしめるであらうとは信じられないことである。—

2　アメリカ製軍縮

歐洲聯盟問題と並行して、軍備縮小問題が今日の議題となつてゐる。マクドナルドは、徐々の軍縮が永久の平和をもたらす最上の方法であると宣言した。平和主義者の云ふところは何時もさうである。若しも全ての國が充分に軍備を縮小するならば、それは平和の保證となるに相違ない。だが、それは關税壁の自發的撤去と同様な問題である。現在では、眞實に軍備の縮小を行つてゐる大國は、ヨーロッパにたゞ一國しかない。而してこの實際の軍縮は大きな戦爭の結果はじめて行はれたところのものである。この戦爭に於いて最初ドイツは、自國の支配の下に全歐洲を統一せんと企てたものであつた事をも忘れてはならぬ。

「徐々の軍縮」なるものは、若しその内容を暴露すれば、實に悲慘な喜劇である。それは軍備の縮小ではなく、實は英米間の軍備の對等を目的としての軍備擴張の一時的中止を意味するに過ぎない。然るに現在この目的が平和の保證と認められてゐる。之れは要するに、ピストルに制限を加へることが決闘禁止になると思ふのと同一である。この問題は、その裏を見ることによつて明かになる。二つの最大海軍國が僅か數千噸の問題で眞赤になつてゐると云ふ事實そのものが、來らんとする戦爭に際して一歩でも有利な立場に自國を置かんとする、その外交的豫備行動が則ち現在の軍縮であることを明白に示してゐる。

だが、英米海軍の「均衡」設定なるものが國際的立場からは何を意味するか？　それは實に大きな不均衡——アメリカの利益のために——を、設定するところのものである。而もこの事實は、その協議に參加するところの全て、特にロンドン及びワシントンに在る海軍省によつて明らかに認められてゐるところのものである。彼等がこの事實について口を緘して語らないのは、それは單に外交的臆病からである。だが、吾々は何も彼等の臆病を眞似る必要を感じない。

歐洲戦爭の經驗が物語るところは、第二の世界戦爭は決して迅雷の如き速度を以てするものではなくて、長期の準備期間を要し、而してその勝敗は關係國の生産能力の如何によつて定まるものである——と云ふことである。戦爭中に交戦國の軍艦が單に修繕を必要とするばかりでなく、寧ろ盛に新艦の建造を必要とするであらう。

歐洲戦爭の三年目になつてから、ドイツの潜水艇が如何に大きな仕事をしたかを吾々は觀た。戦爭が始つて後に至つて、イギリスとアメリカが歐洲の舊い軍備を全く超越したところの強大な陸軍と海軍とを如何に新らたに組織したかも吾々は觀た。陸軍と云はず海軍と云はず、戦爭開始當時の凡ゆる軍備及び軍器は、單に、出發點であつたに過ぎなかつた。勝敗を決するところのものは、交戦國が敵の兵火のもとにあつて、士卒や、大砲や、軍艦や、飛行機等々を製造し得る能力

である。舊ロシア帝制でさへもが、戰爭直前には相當の豫備を貯へてゐた。たゞそれが成し能はなかつたことは、戰爭中に新らたな軍器を製造することであつた。

アメリカとの戰爭の場合、イギリスが勝ち得る唯一の理論的條件は、戰爭の起らぬ前に、アメリカの遙かに優勝な經濟的並に技術的能力を出來得る限りハンデイキヤツプするために、軍事的優勝地位を占めておくことである。戰前に於ける兩國海軍の均衡化は、戰爭開始の最初の月から、アメリカに勝目がある譯になる。二三年前にアメリカが、有事の際には何時たりとも、ちやうどボツタラ燒を造るやうに巡洋艦を續々と造つて見せると啖呵を切つたことのあるのが想ひ起される。

フーヴアー・マクドナルド協議は、軍備縮小はおろか海軍の制限にも及ばなかつたものである。それは僅かに戰爭の用意を合理化する問題に過ぎなかつた。偉大なる戰爭の經驗及びそれが齎らした多數の發明が、凡て、軍事的必要に供せられてゐる今日に於いて、武器並に戰術の改良が一九一四年前に比して非常に急速であることは、當然である。それが故に、多くの戰艦が未だ一回も實用に供せられない前に廢艦の列に入れられるであらうと云ふことは止むを得ない。かゝる情勢の下にあつては、豫め多くの軍艦を貯へておくことは愚である。茲に於いて軍備の合理化は、戰爭の開始に當つて必要なだけの軍艦乃至は戰時中に續々と新式軍艦を建造する試驗的基礎となる程度の軍艦を必要とするに止まる。そこで列強は、多かれ少なかれ、軍備の「制限」を利益とする次第である。然るに運命はこの「制限」をば經濟的に最も強大なる國家の特權と化してしまつたのである。

最近數年間、アメリカ合衆國の陸海軍省は、全國の產業を來らんとする戰爭の用意に適應せしむべく全力を盡して來た。海軍々器製造業者の巨頭シユワブは、海軍大學で最近彼れが試みた演說を以下の數言を以て結んでゐる——「現在に於いて觀られるであらうところの戰爭は、老大なる生產的企業と寧ろ同一視されべきものであると云ふことは、最早、諸君に明らかとなつたところであらう云々。」

フランスの帝國主義者は、當然、アメリカをイギリスにけしかけることに熱中してゐる。ラ・テンプは海軍問題を論じる社說中に、艦隊の均等は決して海上勢力の平等を意味するものでない、なぜならばアメリカは、イギリスが幾世紀か確保して來た如き強大な海軍根據地の所有を到底夢みることさへ出來ないからである、と云つてゐる。英國の海軍根據地は同國に優越的地位を與へるところのものである。併しながら英米艦隊の均等が實現されたからとて、それでアメリカが滿足するものでは恐らくなからう。アメリカが更に要求するところは「海洋の自由」である。之れにイギリス海軍根據地の利用をかなりに制限するところのものである。第二にアメリカが要求する「門戶開放」も亦重大である。このスローガンの下にアメリカは、單に支那ばかりでなくインド及びエジプトをして英帝國の支配に反抗せしめるであらう。アメリカは、イギリスの海軍根據地に向つて、海からでなく陸か

ら則ちイギリス自からの植民地を通じて攻め寄せることが出來る譯である。アメリカは、さうした時期を見計らつて、艦隊を動かせば事足るのである。勿論、それは未來の話である。だが、その未來なるものは××を以て數ふべきものではない。ラ・テンプは心配する必要はない。アメリカ合衆國は食ひ盡せるだけのものは、一口々々に取り込んで行く、そして勢力關係をその凡ゆる方面――技術的、商業的、財政的、軍事的等々――に於いて己が強敵の不利益に導いて行くであらう。勿論その間、彼れは敵の海軍根據地のことをも決して忘れはしないであらう。

ヘーグの會議でスノーデンが二千萬弗をイギリスのために儲けたことをアメリカの新聞は嘲笑した。勿論この金額は、アメリカの觀光團が費す煙草錢にも足りないものである。スノーデンは果して勝つたか？　からニユウヨーク・タイムスは問ふ。「否！　眞の勝利者はヤング案である。」則ちそれはアメリカ金融資本である。國際銀行を通じてヤング案は、ヨーロッパの金穴を確實に握つた。ドイツで鑄造された財政の鐵鎖は、やがてフランスの手を縛り、イタリーの足を繋ぎ、イギリスの頸にからまる。イギリスの獅子使ひを以て自から任じてゐるマクドナルドは、獅子の頸環を指示して、之れこそは平和の具であると誇つてゐる。だが、平和の實現は、アメリカがヨーロッパに金を貸して、それからイギリスとの海軍力の均等に同意すればそれで充分達せられると思ふのは錯く！

3　アメリカ帝國主義獨裁

一九二三年以來私は、第三インターナショナルをしてアメリカ合衆國の存在を認めしめ、なほ英米間の對立こそが世界列國間の離合を決定するところの基礎的條件であることを是認せしめることに努力を盡して來た。然しこの私の所說は、第三インターナショナルの第五大會（一九二四）に於いてさへ、なほ異端扱ひにされたのである。私はアメリカの役割を過大視するの故を以て攻擊された。アメリカ恐怖の前に、歐洲內に於ける凡ての抗爭は解消されると私が云つたといふやうに吹聽された。オッシンスキー、ラーリン等は、強大なアメリカを「退位」せしめるために無駄に多くの紙とインキを費した。ラデックは又、ブルジョア・ジアナリストの尻について、英米協調の時代が今や近づきつゝあるなどと書き立てゝゐた。彼れは、一時的外視情勢を國際關係の本質と見誤まつてゐたのである。

然しながら徐々にアメリカは、第三インターナショナルの役人たちによつて「認め」られるに至つた。彼等は私の過去の立論を繰返しはじめたが、併し每度、反對派はアメリカの役割を誇張するの一言を附加することを忘れなかつたのである。その當時に於けるアメリカの正確な評價は、ペッパー並にラブストーンの先取權であつたことは周知の如くである。

左傾開始以來、保留意見は消滅して、今では公認理論家の何人も

が、英米が戰爭の方向に必然的に急轉しつゝあることを豫言せなければならなくなつてゐる。この問題について私は昨年二月、或る同志に一書を送つたことがある。「英米の對立は終に眞面目に考へられるやうになつた。漸くのことでスターリンとブハーリンは、それが何を意味するかを知り出して來た。だが、英米の對立が絶えず激化して來て、直接に戰爭にまで及ぶであらう如くに吾等の新聞が書き立てることは、餘りにも事態を單純に觀すぎる。さうした發展過程にあつては、勿論數度の危機が往來することであらう。戰爭は双方にとつて頗る危險な事業である。彼等はなほ何んとかして平和に事を解決せんと努めるに相違ない。凡ゆるさうした事の最後に、結局、血によつての勝負が來る。而してその最後なるものに彼等は急速度で近づきつゝある。」

現狀は正に再び英米間の軍事的「協調」を物語るところのものである。そして或るフランスの新聞は、アングロ・サクソン獨裁の時代が到來すると怖れてゐるほどである。アメリカがイギリスとの「協調」を利用して、日本とフランスとを一つの樽で同時に操縱しようと欲してゐることは事實である。だが、かうした現象の凡ては、アングロ・サクソンの支配の一段階として觀られべきではなくつて、イギリスをも含む全世界に對するアメリカ獨裁の一過程であるとすべきものである。

この點について、第三インターナショナルの指導者たちは、私がアメリカ資本の勝利以外の何ものをも豫想してゐないかの如くに云ひふらす。小ブルジョア的學者等も亦、マルクス主義者は資本主義の勝利を魔法扱ひにすると攻撃する。どちらの說も譫言である。吾々がアメリカは世界的支配の方向に動きつゝあると云ふことは、必ずしもこの支配が實現されると斷言してゐるのでは決してない、又よしそれが實現されたと假定しても、それが幾十年或は幾世紀繼續されるであらうことを豫期するものでは決してない。それは單に歷史的傾向の問題である。而してこの傾向なるものは、實際に當つては何等か他の歷史的傾向のために自からの方向を轉じ、或はその新傾向のために追ひ越されると云ふことが在り得るのである。若しも假りに資本主義世界が幾十年かに亘つて何等××××なく存在し得るものならば、それ等の幾十年こそはアメリカの世界支配の實證であるであらう。だが事實は、かゝる過程はそれ自からの矛盾を發展せしめて、他の資本主義的矛盾と合流し、それ等を增大するに過ぎぬであらう。アメリカはヨーロッパに於ける合理化運動を益々促進せしめるであらう。そしてそれと同時に他方ヨーロッパのための世界市場は益々小さなものとなるであらう。かくてヨーロッパの經濟難は益々深刻となる。減退する世界市場に對するヨーロッパ諸國の競爭は急速に激化する。それと共に、ヨーロッパ諸國は、アメリカの壓迫に對抗する必要上、彼等の勢力を合流せしめんと努めるであらう。之れが則ちブリアンの計畫の基礎をなすところのものである。發展の諸過程が如何なるものであら

うと、一事だけは確定してゐる。即ち、アメリカが據つて利するところの國際的均衡の破壞こそは、來たらんとする時期に於けるヨーロッパの凡ゆる危機と×××變化との主要な根源である。××××の××が數十年繼續し得るものと考へる者は、世界の情勢に全く盲目なるものであつて、改良主義の泥海に遠からず沈沒するにきまつてゐる。

この問題が洋の對岸即ちアメリカ合衆國の運命の立場から觀察せられる場合でも、未來は聊かも資本主義の平和の理想と合致するものではない。

歐洲戰爭當時まではアメリカ合衆國の勢力は、國內の工業と農業との間の動的均衡關係に應じて、內國市場を基礎として發達したものであつた。戰爭はこの發達の上に突然危險を齎した。合衆國は今や資本と商品とを益々多く輸出しつゝある。世界的勢力としての合衆國の發達は、アメリカの產業並に金融の全組織——巨大な資本の摩天樓——が世界經濟の基礎の上に益々依存關係を深めねばならぬことを意味する。然るにこの基礎は日々に壞滅しつゝあるところのものであつて、而もその壞滅を齎らす者はアメリカ自身である。商品と資本とを輸出し、艦隊を增し、イギリスを壓迫し、歐洲の重要產業を買收し、支那その他の植民地に侵入する等々に依つてアメリカの金融資本は、自からの手を以て自からの基礎に穴を掘り、そこにダイナマイトを埋めてゐるのである。何處からそのダイナマイトに火がつくか？　アジアか、ヨーロッパか、或は南米か？　多分、同時にパッと全部着火されることになるのであらう。だが、この問題は第二次的である。

4　歐羅巴ソヴエット合衆國

プロレタリア階級の立場からのヨーロッパ合衆國の問題は、歐洲戰爭の當初、即ち一九一四年九月に既に吾々が提唱したところのものであつた。「戰爭とインターナショナル」と題した册子中に、私は、ヨーロッパの統一は必然にその經濟的發展の關係に於いて問題化されべきものであること、但しそれはヨーロッパ・プロレタリア階級の×××××の××××を實現するにあらずんば不可能であることを指示せんと努めた。

一九二三年に及んで、ルール地方の占領が新らたにヨーロッパの根本的經濟問題（主として石炭並に鐵の問題）を緊張せしめた時に、吾々は第三インターナショナルの幹部をしてヨーロッパ合衆國のスローガンを採用せしめることに漸く成功したのであつた。だが、彼等のこの問題に對する態度は冷淡であつた。一九二三年のドイツ革命の失敗後は、ヨーロッパは一つの安定時期に入つた。××の基礎的問題は議題から取り去られた。ヨーロッパ合衆國のスローガンは消えてしまつた。

然しながら不幸にして、ヨーロッパ合衆國なるスローガンの經濟的根據そのものは、第三インターナショナルの現在の政策の基礎的觀念

——單一國內に於て社會主義を××することの×××——を無効化するものである。

現代の特質は、生産力が國境を超越して、特にアメリカ及びヨーロッパに於いては、一部分は全大陸的、又一部分は全世界的範圍のものとなつたことである。前回の帝國主義戰爭は、この生産力と國境との間の矛盾から生れたものである。然るにこの戰爭の結論——ヴェルサイユ條約は——更らに又これ等の矛盾を強調するものに過ぎなかつた。他の言葉を以てすれば、生産力の發達に當面して、資本主義は最早や一國內に存在を限ることは出來なくなつたのである。更らに、××××は生産力の一層の發達の上に自からを基礎づけねばならぬものである。然らずんば、資本主義に對してそれは進歩でなくて退歩となる。一九一四年に吾々は書いた——「若しも××××の問題が國家の境界線內に限つて解決せられるものであるならば、それは結局國家擁護に歸着する」と。ヨーロッパ・ソヴェット合衆國なる語そのものが、一國內に於ける×××××の不可能を合意する。その完成は一大陸の範圍內に於いても望まれ得るものではない。ヨーロッパ××××合衆國は、單に×××××世界聯盟の道程に於ける一つの歴史的段階を意味するに過ぎぬ。

一再ならず歴史に於いて起つたことは、××が歴史的問題を決するに力足りなかつた場合は、代つてその解決に當らんとする所の力は反動であつたと云ふことである。かくてビスマルクは、一八四八年の革命の失敗後、ドイツの統一を齎らした。かくてストリッピンは、一九〇五年革命後に於いて、農村問題の解決に努めた。かくてヴェルサイユに集まつた戰勝者たちは凡ゆるそれまでのブルジョア革命が解決することの出來なかつたところの國家問題を彼等の意のまゝに解決したのである。ホーヘンゾルレン家のドイツは、それ自からの欲する形——ヘルメット型——にヨーロッパを組織せんと努力した。然しそれは成功しなかつた。その次には勝つたクレマンソーが、ヨーロッパを出來得るだけ澤山の斷に切り刻まんと欲した。然るに今やブリアンは、糸と針とを以てこの切り刻まれたヨーロッパを再びつぎ合せやうとしてゐる。もつとも彼は、どの切れから先きに縫ひ合せたらよいのか頻りと迷ふてはゐるが。

第三インターナショナルの現幹部並びにフランス共産黨幹部の或るものは、政府の平和主義の僞善を曝露してゐるが、たゞそれだけでは不充分である。ヨーロッパ統一の傾向を單にソヴェット國家に對する戰爭の準備として解釋することは小兒病である。ヨーロッパ合衆國と云ふことは、單なる巧みな外交的合言葉ではない。それは、アメリカ合衆國の壓力が加はるに從つて、層一層と強く感じられるところの、ヨーロッパの不可避的經濟上の必要から生れたものである。それが故に第三インターナショナルは、此際、ヨーロッパ・ソヴェット合衆國のスローガンを高く揭げて、××××者の僞瞞的××××と對抗せねばならないのである。

第二貧乏物語

河上肇

第十回

A　このまへ君に會つてから間もなく、僕は選擧戰をやることになつたので、たうとう二月ばかり失禮した。選擧戰當時はまだ雪が降つてゐたが、今日はもう櫻も散つてしまつてゐる。月日の經つのは實に早いね。

C　月日の經つのも早いが、時勢の遷るのも恐ろしく早いぞ。君がこの『物語』を始めてからでも、同志山宣は兇刄に斃れる、續いて四・一六事件が起る、田中内閣がつぶれる、勞農黨が再興される、三たび××××××××、總選擧が行はれる、等々、實に樣々の事件が次ぎから次ぎへと起つてゐるが、更にそれらの事件が繼起してゐる社會の底では、急流が矢のやうに流れてゐるよ、——またゝくひまに深刻な不景氣は惡疫のやうに中央の都會から全國の津々浦々へ忍び寄り、洪水のやうに街頭に投げ出される失業者の群は眼に見えて日々增大してゐる。俺には理屈は分からんが、何にしても××××ひどく×××××來てゐるよ。

A　さうだ！　この『物語』の第一回當時を顧みると、僕自身の氣持にしても境遇にしても、今昔の感があると言つても大げさでないほどの變り方をしてゐる。世と共に流れてゐるつもりの僕としては、自分自身を顧みるにつけても、なるほど君の言ふ通り、時勢の遷るのも恐ろしく早いなと感じるよ。

C　かういふ時勢に下手の長談義は氣がきかぬ。この『物語』も追々纏めたらどうだ。

A　君の言ふ通りだ。それではさつさ〳〵と片づけよう。

C　片づけるにしても物の順序がある。勞働者はいつまで經つても貧乏だが、大資本家は段々大金持になるばかりだ。それはどういふわ

けで、さうなるのか？　これが前回から持ち越してある問題だ。ともかく此の問題を片づけたまへ。

十五　剰餘價値の出所

Ａ　その問題は、つまり剰餘價値の泉源はどこにあるかと云ふ問題に歸着するのだ。ところで剰餘價値といふ言葉の意味は、前回に詳しく述べたから、もはやその説明を繰り返す必要はあるまい。

Ｃ　さうだ。資本家はどうして十萬圓を二十萬圓にするか、百萬圓を三百萬圓にするか、それを手取り早く話してくれればよいのだ。

Ａ　或る資本家が例へば百萬圓の資本を運轉して、年に二割の利潤を得るとすれば、その利潤額は一ケ年に二十萬圓になる。今その二十萬圓のうち、十萬圓は自分が贅澤をするために無くしてしまつたとしても、後に十萬圓殘る。そこで第一年度の資本は百萬圓であつたとしても、第二年度の資本は百十萬圓になる。斯樣にして年々利潤の一部を資本に繰り入れてゆけば、資本家はいくら贅澤をしてゐても、彼れの資本は年々大きくなるばかりぢやないか。

Ｃ　それは分かつてゐるよ。問題はその利潤がどうして生まれるかにあるのだ。

Ａ　それは簡單にいへば、勞働者から勞働を搾取することによつて生まれるのだ。

Ｃ　資本家は搾取する階級だ、勞働者は搾取される階級だ、さういふことは俺たちが年中聽かされてゐることなのだが、資本家はどうして俺たちを搾取するのか、それがよく分からないのだ。

Ａ　それは自然に分かるわけのものでは決してない。だからこそ吾々には理論を學ぶ必要があるのだ。『イデオロギーの過重評價を云々し、目的意識的要素の役割の誇張を云々するものは、すべて、勞働者がたゞ彼等の運命を彼等の指導者の手から自分自身の手に引き取りさへしたならば、純勞働者運動といふものが出來上がり、それによつて彼等は、自分自身で獨立したイデオロギーを作り上げることができるし、事實また之を作り上げてゐる、と思つてゐるのだ。だが、そこにこそ深刻な誤謬が存する。右に述べたところを補足するために、私はカウツキーのこの上もなく正しい言葉を引用しよう。』斯樣に言ひつゝレーニンは、カウツキーの長い文章を引用してゐるが、その中には、次ぎのやうな文句がある。『資本主義の發展に從つて、プロレタリアが益々增加すればするほど、彼等は益々資本主義に對して鬪爭することを餘儀なくされ、且つ資本主義に對する鬪爭の可能性を益々多く有つことになる。かくて社會主義的意識は、プロレタリアートの階級鬪爭の必然的な結果として生まれて來るであらう。——人々がもし斯樣に

考へたならば、それは全然間違ひだ。もちろん學說としての社會主義は、プロレタリアートの階級鬪爭と同じやうに、明かに現代の經濟關係のうちに、その根源をもつてゐる。だが、一方が他方を產み出すのでは、決してない。現代の社會主義的意識は、深遠なる科學の基礎の上に立つてのみ、始めて成立しうる。現代の經濟學は、現代の技術と同じやうに、社會主義的生產の一條件であるが、プロレタリアートは、如何にこれを熱望しようとも、自らその何れをも創出することはできない。科學の所有者は、プロレタリアートでなくて、ブルジョア智識階級である。現代の社會主義が生まれたのも、かゝる範疇に屬する若干の個人の頭腦の裡においてである。そして彼等によつて、それは、智識的に最も進步してゐるプロレタリアたちに傳達され、後者は更にこれを、條件の許すかぎり、プロレタリアートの階級鬪爭の中へ持ち込んだのである。だから社會主義的意識なるものは、プロレタリアートの階級鬪爭の中へ外部から齎らされた一要素であつて、自然生長的に發生した何物でもない。』これはカウツキーの言葉だが、先きにも言つた通り、レーニンはこれをもつて『この上もなく正しい言葉』だとしてゐるのだ。實際それに相違ないと云ふことは、多年のあひだ階級鬪爭の實踐を潛り拔けて來た君が、現にマルクス主義經濟學をまだはつきりと把握してゐない事によつても、證明されるではないか？

C　それがどうしたと云ふのだ？　話は全く脫線してゐる。

A　なるほど脫線してゐるに相違ないが、僕がこういふことを言ひ出したのは、吾々の運動は理論を無視しては駄目だと云ふことを痛感してゐるからだ。いくら鬪爭に鍛えられた勞働者でも、初手から何等の理論をもたぬものは、遂に吾々を失望させる日がある。それと同じやうに、いくら大衆的鬪爭が激發されても、そしてまた、大衆はかゝる鬪爭を通じてこそ次第に教育され啓蒙されてゆくに相違ないにしても、それを自然發生的な傾向に放任しておいては、必ずブルジョア的イデオロギーに捉はれるに決まつてゐるからね。

C　そんなことは分かつてゐるよ。横道にそれずに、急いで本筋の話を運んでくれ。

A　資本家による勞働者の搾取は、『公平』なる取引の外形のもとに蔽はれてゐるので、その眞相を見拔くことが困難になつてゐる。だが中世の農奴を見ると、彼等が土地の領主によつて搾取されてゐたことが、手に取るほど明かだ。實際に土地を耕作するのは農奴だ。從つて土地から色々な農產物を生產するのも農奴だ。しかしそれらの生產物のうち、農奴の生活に必要なものだけが彼等の手に殘され、餘分のものは悉く領主に卷き上げられる。そして領主は、この卷き上げた生產物のお蔭で、生まれてから一度だつて土をいぢることもなしに、年中

贅澤な暮しをして行くのだ。當時農奴たちは、領主様のお蔭で自分たちも露命がつなげて行けるのだと思つて、感謝してゐたにしても、彼等の意識如何に係りなく、實際には農奴たちが領主や領主の家族や家來やを養つてゐたのだ。それで農奴たちの勞働は、つまり二つの部分に分かれてゐたわけだ。一つの部分は、彼等自身および彼等の家族を養ふために必要とされる勞働（すなはち必要勞働）であり、他の部分は必要勞働以上の餘分の勞働（すなはち剩餘勞働）であつた。そして是等剩餘勞働の大部分は、領主たちが遊んでゐて勝手な眞似をするために消費されたのであつた。かゝる剩餘勞働を強制されてゐたと云ふこと、それがつまり剩餘勞働を搾取されてゐたと云ふことになるのだ。

C　その話はよく分かるが、さうするとしかし、今の小作人といふものは、地主に對して昔の農奴と同じ關係に立つてゐることになるな。

A　さうだ。だからこそ現在の農村には封建的遺制が少からず殘つてゐると云ふのだ。尤も小作人が昔の農奴そのまゝのものでないのは勿論だが、そんなことを述べてゐると、話がまた横道にそれるから、よして置かう。

C　それで農奴が剩餘勞働を搾取されてゐたと云ふことは分かつたが、どういふ譯で、今の世の中でも、勞働者は農奴と同じやうに剩餘勞働を搾取されてゐると云ふのだ。

A　今の世の中でも、勞働者の勞働は、必要勞働と剩餘勞働とに分かれてゐる。そして必要勞働によつて生産された部分の生産物は勞働者に歸し、剩餘勞働によつて生産された部分の生産物は、結局のところ、資本家地主階級の所得に歸する。

C　さうはなつてゐないだらう。例へば紡績工場の女工にしても、彼等は絲を生産してゐるが、しかし彼等の生産した絲は全部資本家の所有物となるので、女工がそれを分けて貰つた驗しはないだらう。

A　それはさうさ。社會的分業の基礎の上に商品生産が發展しきつた今日の社會では、勞働者は自分らが消費する物を生産してゐるのではない。だから紡績工は絲を生産するにしても、その生産した絲はすべて工場主の所有に歸する。その點では、昔の農奴がその必要勞働をもつて自分自身の生活資料を生産してゐたのとは、譯が違ふ。だが、その代りに、今の勞働者は資本家から賃銀を貰ひ、その賃銀で自分の必要とする物を他から買ひ求めてくる。そしてそれらの物が、昔の農奴に當てはめて言へば、彼れの必要勞働によつて生産した生産物に相當するのだ。だからもし今日の勞働者が、彼れの勞働をば、丁度彼れの受取る賃銀に相當する價値を生産するだけの分量に止めたなら、彼れは彼れ自身の生活が要求するところの必要勞働を負擔しただけであ

り、資本家に對し何等の剰餘勞働をも提供しないことになる。それと同時に、資本家は彼れが賃銀として支拂つた價値に相當するだけのものを、勞働者から勞働の形で受取るに止まることになるから、彼れの手許には、差引き何等の剰餘價値も殘らぬことになる。

C　價値とか勞働とか言ひ出すと、話がまた分かりにくゝなる。一體、價値と勞働とはどういふ關係をもつてゐるのだ？

A　さういふ疑問が起るからこそ、この『物語』の第八回から第九回にかけ、前もつて價値の說明を委しくして置いたのだ。『十四、剰餘價値』の冒頭で、僕がそれまでに述べて來た商品の分析や價値の實體やに關する話を纏めるために、マルクスの次ぎの言葉を引用したのをこゝで再び思ひ出して貰はねば駄目だ。『一つの商品が或る價値をもつのは、それが社會的勞働の結晶であるからだ。その價値の大きさは、その中に含まれてゐる斯かる社會的實體の分量の大小に依存するものだ。だから、諸商品の相對的價値〔諸商品の價値の比率〕は、それらの諸商品に費され・實現され・固定された・勞働のそれ〴〵の量または高によつて決定される。同一の勞働時間〔勞働の分量はその繼續時間で測られるのだ〕をもつて生産されうるところの諸商品のそれ〴〵の分量は、〔價値において〕相等しい。』

C　そのことなら分かつてゐるぞ。つまり純金二分を掘り出すために必要とされる勞働の平均量が二時間分だとすれば、日本では純金二分のことを一圓と云つてゐるのだから、金に限らずその他どんな品物でも、二時間分の勞働で生産される品物の價値は、みな一圓だと云ふことになるのだらう。

A　その通り。尤も『商品の價値を計算するにあたつては、吾々は、最後に用ひられた勞働の分量に加ふるに、商品の原料を作り出すため以前に費された勞働の分量と、かゝる勞働を助けるための器具・道具・機械・および建物に賦與された勞働の分量と、をもつてしなければならぬ』といふことも、この際思ひ出して貰はねばならぬ。

C　それも承知だ。

A　それなら話は譯なく進める。今假に或る紡績工が十ポンドの絲を生産したとする。そしてそのために消費された棉花を二十時間分の勞働を含めるものとし、また機械類の消耗分を四時間分の勞働を含める紡錘によつて代表せしめるならば、〔二時間分の勞働で生産された品物の價値を一圓とすると云ふ前提のもとでは、〕十ポンドの絲を生産するために消費された生産手段〔原料、機械、等々〕の價値は、合計十二圓になる。これは十ポンドの絲を生産するために必要とされた過去の勞働であり、既存の價値である。ところで、これらの生産手段を利用して十ポンドの絲を生産するために、紡績工が六時間分の勞働を費し

たとするならば、生產された十ポンドの絲には、過去の勞働二十四時間分と紡績勞働六時間分と、合計三十時間分の勞働が含まれてゐることになるから、その價値は十五圓である。そして、この場合、もしその紡績工が資本家から三圓の賃銀を貰つてゐるとするならば、生產された十ポンドの絲はすべて資本家の所有物になるにしても、彼れは原料、機械、賃銀、等々に十五圓を投じて、最後には再び十五圓の生產物を得るのだから、彼れの手許には、差引き何等の剩餘價値も殘らぬことになる。

C　全くさうだな。

A　資本家のために何等の剩餘價値が殘らぬといふことは、つまり勞働者が資本家に對して何等の剩餘勞働を負擔せず、從つて勞働者は資本家のために少しも搾取されてゐない、といふことを意味するのだ。勞働者は六時間分の勞働を提供することによつて、三圓に相當するだけの價値を生產したのだが、しかし資本家から丁度三圓だけの賃銀を得てゐるので、彼れはその三圓を支出することにより、米なり酒なり煙草なり雜誌なり、何でも自分の必要とする物を買ひ求めることが出來る。分業が廣く行き渡つてゐる世の中だから、彼れの必要とする此等の品物は、他の勞働者の勞働によつて生產されてゐるのだが、これを勞働者階級全體について云へば、彼等は、結局のところ、自分たちの生活に必要なだけの勞働(すなはち必要勞働)を負擔してゐるだけで、それ以外には何等の剩餘勞働をも負擔してゐないことになる。

C　君は先きにかう言つたね。『もし今日の勞働者が、彼れの勞働をば、丁度彼れの受取る賃銀に相當する價値を生產するだけの分量に止めたなら、彼れは彼れ自身の生活が要求するところの必要勞働を負擔しただけであり、資本家に對し何等の剩餘勞働をも提供しないことになる。』――今その意味は分かつたが、しかしさうだとすると、資本家の手許には何等の剩餘價値も殘らぬことになり、資本家の儲けの出所がなくなるではないか？　それでは資本家が當惑するだらう。

A　全くさうなのだ。だが、資本家はそんなことに當惑して、たゞ立ち停つてゐはしない。彼れは一日三圓の賃銀を拂つて勞働者を雇つた以上、勞働者が六時間の勞働を終へたところで、『さあ、お歸り』と言ひはしない。勞働者が默つてゐるなら、十時間でも十二時間でも十五時間でも、出來るだけ長い時間の勞働をさせようとするのだ。

C　それは全くだ。何にしても俺たちは生きてゐる人間で、さうばかり無理はきかないが、もし俺たちが死んだ機械のやうなものだつたら、資本家の手先共は、俺たちに一日二十四時間働けと云ふだらうよ。ともかく勞働時間の短縮には、奴等は頑强に反對するよ。

A　それはその筈なのだ。三圓の賃銀を出して一日六時間働かした

のでは、差引き儲けなしになる。勞働者の勞働時間が六時間を超した時始めて、勞働者は剩餘勞働を負擔することになるのであり、そして六時間以上になる部分が多ければ多いほど、彼れはより多くの剩餘勞働を負擔する。そしてその剩餘勞働によつて生産された價値こそは、剩餘價値として資本家の懷にはいるものなのだ。

C　さうすると、勞働者が例へば一日十二時間勞働するとすれば、そのうちの六時間分だけが自分自身の生活のために必要とされる勞働で殘り六時間分の勞働は資本家のためにたゞで奉公することになるのだな。

A　その通り。つまり一日十二時間分の勞働が、半分々々、必要勞働と剩餘勞働とに分かれるのだ。そして六時間分の必要勞働に對しては、その勞働によつて生産された價値と同じだけのものを賃銀として資本家から受取るが、殘り六時間分の剩餘勞働に對しては、何等の報酬も受けないことになる。だから、勞働者對資本家の關係は、最初に云つた通り、その本質から云ふと、昔の農奴對領主の關係と同じことなのだ。農奴は一生懸命で土地を耕作して種々の生産物を産出するが、領主はそれらの生産物のうち、農奴の生活に必要なだけのものを殘しておいて、それ以上の餘分は盡く取り上げてしまふ。今日の勞働者も、資本家から、丁度それと同じやうに取扱はれてゐるのだ。

C　さうすると、俺たちは一日三圓の賃銀を貰つて、それで十二時分の勞働全部に對する代價を支拂つて貰つたやうに思ひ込んでゐたが、實は俺たちの勞働の半分は不拂ひの勞働なのだな。

A　さうだよ。だからこそ資本家は儲かるのだ。

C　なるほど、話がやつと面白くなつた。そこの理屈が分かると、謂はゆる『剩餘價値による資本家的生産の秘密の曝露』といふ奴がやれるやうになるのだな。もう一息話を推し進めてくれ。

A　承知した。だが、これで話は一段落ついた。先づ一服してから話を續けよう。

十六　商品としての勞働力

C　一服してゐるうちに一つ疑問が起つた。もし君の言ふ通りに一日十二時間の勞働のうち六時間分だけが支拂はれた勞働で、殘りの六時間分はたゞの勞働だとするなら、俺たちは何もたゞで資本家に御奉公する義務はないのだから、資本家が一日三圓以上は出さないと云ふなら、俺たちはたゞ六時間分だけ勞働して、それが濟んだらサッサと工場を引上げたらどうだね。

A　ところがさうは行かないのだ。勞働者が例へば一日三圓の賃銀で資本家に雇はれるといふのは、つまり一日分だけ自分の勞働力を資

本家に賣ることなのだ。今の世の中は、すべての富が一切合財、商品といふ形を採つてゐるので、どんな物でも先づその代價を支拂はねば、それを自分の物とすることが出來ないが、しかし代價を支拂ふためには貨幣がいるし、また貨幣を手に入れるためには、自分の持つてゐる商品を賣らねばならぬ。ところで勞働者は、原料とか機械とかいふやうな生產手段を有つてゐないから、自分が商品を造つてそれを賣物にすることが出來ぬ。それで已むなく自分の肉體に宿つてゐる勞働力そのものを商品として資本家に賣るのだ。賃銀といふのは、つまり商品としての勞働力の代價なのだ。ところで總ての商品と同じやうにこの勞働力といふ商品の價値は、これが生產のため必要とされる勞働の分量によつて決まる。そこでつまり一日分の勞働力の價値は、勞働者自身および彼れの家族の一日分の生活資料の價値と同じことになる。何故といふに、一定の勞働力が引續き商品として提供されるためには、その供給者たる勞働者が生きて行かねばならず、且つまた彼れが老衰したり死んでしまつたりした場合には、彼れの後繼者が出來てゐねばならぬが、もしさうだとすれば、つまり勞働者自身および彼れの家族の一日分の生活資料を生產するために必要とされる勞働の分量は、その勞働者の一日分の勞働を造り出すために必要とされる勞働の分量に相當するからだ。商品としての勞働力の價値は斯樣にして決定されるのだが、今、資本家は斯かる勞働力をその價値において買取つたとする。

C　話がまた面倒になつたね。「その價値において買ひ取る」とは何の事だ？

A　値打通りに買ひ取るといふ意味だ。例へば、勞働者の必要とする生活資料の價値が一日三圓に相當するなら、一日分の勞働力の價値も三圓だ。それをその價値において買ひ取るとは、その値打通りに三圓で買ひ取ることなのだ。さういふ場合には、價値と價格とが一致する。すなはち値打と値段とが一致するのだ。

C　物の値段はいつでもその値打通りになつてゐるのか？

A　そんな譯のものではない。物の値段は、値打以上になつてゐることもあり、値打以下になつてゐることもある。價値と價格との背離といふのは、そのことだ。殊に勞働力になると、その價格（すなはち賃銀）は、大概の場合、價値以下におし下げられてゐるのだ。しかし今は一應、勞働力の賣買はその價値を標準として行はれるものと假定しよう。

C　前からの假定を續けて行けば、資本家は勞働者からその一日分の勞働力を三圓で買ひ取ると云ふことに假定するのだね。

A　さうだ。そして斯かる賣買が行はれると、それによつて一日分

の勞働力といふものが資本家の所有物になる。それは、例へば僕が金三圓を出して靴一足を買つたと云ふやうなものだ。ところで、すでに一定の代價を支拂つて之を買ひ取つた以上、その使用價値(効用)を利用することは、全く僕の權限内にある。僕が如何にその靴を虐待しようとも、賣主は僕に對して文句を云ふわけにはゆかぬ。

C　それはさうだな。

A　そこでかう云ふことになる。――一日三圓の賃銀を出して一定の勞働者を雇ひ入れた資本家は、その勞働者から一日分の勞働力を買ひ取つたのだから、その勞働力の使用價値を利用することは、全く彼れの自由だ。前にも述べたことだが、すべて商品といふものは、價値と使用價値との兩面をもつてゐる。そして價値といふ方面から見れば、どんな商品でも皆な金何圓に値すると云ふ點において、互に全くその品質を同じくしてゐるが、使用價値といふ方面から見れば、商品はその種類を異にするに從つてその使途を異にしてゐるので、互に全く品質を異にしてゐる。例へば机は書見に役立ち、衣類は寒暑を凌ぐに役立つといふ類だ。今、勞働力といふ商品の使用價値は勞働の發揮から成り立つてゐる。ところで、こゝに極めて大切な事柄は、一日分の勞働力が發揮しうる勞働の分量はその價値によつて規定されてゐないと云ふことだ。

C　もつと深切に話さないと、何のことか分からないぞ。

A　前からの假定によれば、一日分の勞働力の價値は三圓だつた。三圓といふのは純金の六分のことで、これも前々から假定によれば、六時間分の勞働を意味するのだ。だから、資本家が一日分の勞働力をその價値通りの値段で――すなはち三圓で――買ひ取つたと云ふことは、つまり一日分の勞働力を六時間分の勞働で買ひ取つたと云ふことなのだ。ところで勞働者は、一日に六時間分の勞働しか出來ないと云ふわけのものではない。彼れは十時間でも十二時間でも十五時間でもの勞働に耐えうる。そこで、一日分の勞働力の價値は六時間分の勞働に相當するが、その使用價値は六時間よりずつと多い分量の勞働の發揮として實現されるといふことになる。今資本家は、かういつた特殊の性質を具へた商品を買ひ取ることによつて、始めて剩餘價値を獲得しうるものだ。一日分の勞働力を買ひ取るために支出する價値は、假に六時間分の勞働に相當するにすぎないとしても、一旦これを買ひ取つた以上、それを如何やうに使用するとも買主の勝手なのだから、勞働者はもはや六時間分だけの勞働を提供してしまつても、資本家は『さあ、お歸り』と言ひはしない。『まだ歸るには早いぞ、俺はお前の一日分の勞働力を買ひ取つたのだ。もつと殘つて働け』と言ふのだ。斯樣にして資本家は、六時間分の勞働に相當する代價を拂うて、勞働

者には例へば十二時間分の勞働をさすのだ。いつかも話したやうに商品の價値とは勞働の凝結に外ならぬのだから、一定の時間勞働者にたゞで勞働させてゐる資本家は、たゞで價値を取得することになる。それが取りも直さず資本家地主階級の不勞所得を（すなはち資本家のためには利潤、地主のためには地代を）形成するところの剩餘價値に外ならぬのだ。

C　それでは、資本家階級の所得に歸する一切の剩餘價値は、たゞ勞働者が剩餘勞働を負擔するといふことのみから生じるのだね。

A　全くさうなのだ。そしてそこに資本家階級の致富の秘密が存在するのだ。自分一人でいくら勤勉に勞働したからとて、纏つた餘財を作り上げることはなか／＼困難だが、何百人何千人乃至何萬人といふ勞働者を雇つて來て、その一人々々から毎日剩餘勞働を搾取してゆくといふ日になれば、百萬圓はいつしか五百萬圓になり、千萬圓はいつしか五千萬圓になり、やがて一億圓にもなるだらう。自分一人で働くのでなく、多勢の人に働かしてその上前をはねてゆくのだから、それで僅かな年數のうちに大きな金持が出來上がるのだ。

C　剩餘勞働の搾取といふことが致富の秘密なら、資本家たちは工場を建てたり機械を据え付けたりなどして、わざ／＼色々な物を生産しなくとも、ぢかに勞働者を搾取したらよささうに思へるが、それにはどうか？

A　さうは行かない。勞働は物に對象化され、物の中に凝結して、はじめて價値となるのであつて、勞働そのものが價値なのではないから、資本家が剩餘價値を獲得しようと思ふ場合には、彼れは先づ剩餘勞働を物に對象化させ、そしてその物を自分の所有物としなければならぬ。そこで例へば紡績工の勞働を搾取しようと思へば、原料としての棉花を――話が複雜になるのを避けるために、この棉花をもつて總ての生産手段を代表せしめておくが――紡績工の勞働力と一緒に買ひ込んで來て、その棉花の上に紡績工の勞働を加へさせねばならぬ。この場合、棉花の價値は、そのまゝ生産物たる綿絲の上に移る。何故といふに、商品の價値はその物の生産に必要とされる勞働の分量によつて決まるのだが、今棉花にして綿絲の生産のために必要とされる原料であるならば、しかるかぎりにおいて、原料たる棉花の生産のために必要とされた勞働の分量（それによつて棉花の價値は規定されてゐる）は、そのまゝそつくり、生産物たる綿絲の生産のために必要とされる勞働の分量の中へ算入される筈だから。さう云ふやうな譯で生産手段の價値は生産過程の前後を通じて少しも增減しないのだ。だからマルクスは、生産手段に放下された部分の資本を、不變資本部分と名づけ勞働力の購買に充てられた部分の資本を、可變資本部分と名づけた。

言ふまでもなく、全部の資本のなかで、たゞ可變資本部分だけが、價値增殖の機能をもつてゐるのだ。だから資本家の立場から云へば、自分の資本を出來ることなら可變部分だけにしたいのだが、技術上さうは出來ないのだ。そればかりではない、いづれ後に悉しく話すが、資本主義が發展するにつれて不變資本の占める部分が全體の割合からいつて段々大きくなつてくるばかりなのだ。

C　それで大體話は分かつたが、元來剩餘價値に關するマルクスの理論は、資本家的生產の種々の秘密を曝露するための有力な武器である筈だ。以上話してくれたところを土臺にして、もつと生き／＼した事實を說明してくれないか。

A　大分長く話を續けたので、聽手の君も疲れたゞらうと思ふが、更に二三の事實を附け足しておかうか。

十七　勞働時間延長、賃銀値下げ、産業合理化――勞働能率の增進、等々

A　第一に、何故資本家が勞働時間の短縮に反對するかは、以上述べ來つたところで充分に合點できるだらう。

C　それは分かる。だが一日は二十四時間から成り立つてゐる。資本家は何故勞働者に二十四時間の勞働を要求しないのだらう？

A　それは勞働者も生きてゐる人間である以上、死んだ機械のやうに晝夜休みなしに働くことは、生理上不可能だからだ。しかし資本主義の發達史を調べて見ると、隨分めちやくちやな勞働時間を強制した時代もあるよ。それが段々短縮されて來たのは、勞働者が次第に自覺して來て、團結の力により限りなき資本家の搾取に抗爭し始めたからだ。一日に十何時間といふやうに勞働させられては、勞働者の生命が縮む。そのために、四十年間働ける者も、二十年間しか働けなくなるとすれば、つまり資本家は、勞働者に一日分の勞働の代價を拂つただけで、二日分の勞働力を使用する勘定になる。そんなことは、お互が資本主義制度を認めて掛つても、不法だと言はねばならぬ。だから勞働者は、資本主義の埒内で、商品販賣者たる資格をもつて、勞働時間の延長に抗爭することが出來るのだ。

C　しかし容易なことでは勞働時間も或る限度以上に短縮されはしない。我國の勞働者階級がメーデーといふ國際的階級戰に參加するやうになつてから、もはや十一年の歲月が經つが、第二回目から掲げた『八時間勞働制の實施』といふスローガンは、今歲もまた徒に掲げられるに止まるだらう。

A　なるべく長く勞働させるほど資本家の儲けは多くなるのだか

ら、勞働時間の短縮はもちろん容易なことではないよ。ちよつと油斷すると、すぐ逆に勞働時間延長とくるよ。

C　それに賃銀の値下げもするな。

A　さうだとも。僕は先きに勞働力はその價値通りに買ひ取られるものと假定したが、これはさういふ假定のもとでも尙ほ資本家による剩餘價値の獲得は可能だといふことを、はつきりさせるために設けた一つの假定だ。資本家はできるだけ賃銀を勞働力の價値以下に切り下げようとする。例へば一日三圓の値打はあつても、これを二圓で買ひ取らうとするのだ。それは、さうすることによつて、一日の勞働時間のうち必要勞働時間の占める部分を少くすることができ、それにつれて剩餘勞働時間を多くすることが出來るからだ。だから、勞働時間を長くすることと、賃銀の値下げをすることとは、資本家の獲得する剩餘價値を增大する點において、どちらも同じ意味をもつのだ。

C　近頃頻りに問題になつてゐる產業合理化といふのは、どういふ關係になるのだ？

A　資本家、資本家の政府、ならびに資本家の學者たちは、產業合理化の項目として色々なものを列べ立て、それによつて眞相をごまかさうとしてゐるが、元來產業合理化の根本精神は、勞働能率の增進にあるのだ。

C　勞働能率の增進とは何のことだ？

A　これについても學者たちが色々欺瞞的のことを言つてゐるが、簡單に言つてしまへば、勞働能率の增進とは、つまり一定の時間內に發揮される勞働の分量を多くすることなのだ。資本家の立場からすれば、勞働時間を長くすることにより、勞働者からより多くの剩餘勞働を搾取するのも、勞働時間は元のまゝにしておいて、勞働能率を增進せしめることにより、勞働者からより多くの剩餘勞働を搾取するのも、結局において同じことだ。だから、勞働者の反抗のため勞働時間の延長が面倒だとなれば、今度は產業合理化による勞働能率の增進とくるのだ。

C　どうして勞働能率を增すのだ？

A　それは資本家たちにとつて一つの『科學』となつてゐる。どうしたら一定の時間內にできるだけ多くの勞働量を勞働者から搾り取ることができるかを、科學的に研究するのが、資本家に雇はれてゐる『研究者』たちの專門の仕事なのだ。『科學的經營法』といふ奴がそれによつて出來上がつた。そしてコンヴェイヤー・システムといふのは、それを大部分實際に應用したものなのだ。勞働者の加工すべき材料は、コンヴェイヤーに乘つて、一定の速度で勞働者の前を絕えず通り過ぎる。勞働者は、その眼の前の材料か運び去られないうちに、言ひ換へ

れば、機械力によつてちやんと規定されてゐる時間内に、自分に當てがはれてゐる仕事を、油斷なく眼前の材料に加へて行かねばならぬ。彼れの手腕がそれに間に合はなければ、彼れは首切られる。屋外には失業者が溢れるほど待つてゐる。彼れが首切られた後には、すぐにその屍を越えて他の勞働者が現はれ、彼れの坐席に代位する。作業の各部分における勞働の強度は一定されてをり、それに步調を合せて行けない者は、次ぎ〳〵に淘汰される。斯樣にして搾取は限りなく進展してゆくのだ。

C　資本家といふものは隨分ひどいことを工夫するものだね。

A　資本家某々が特に質の惡い人間だといふことのために、斯樣なことが起るのではない。もしさうだつたら、一人の高僧が現はれて資本家たちに說教しただけで、世の中は直ぐに改まる筈だが、實際をいふと、資本家某々は彼れの所有名儀になつてゐる資本の人格化されたものに外ならぬのだ。彼れが如何に善良なる精神の持主であらうとも彼れの意圖によつて世の中がどうなるものでもなく、むしろ逆に、彼れの意思が今の社會組織によつて規定されてゐるのだ。だが、そのことは次回に譲るとしよう。

C　ではこの『物語』もまだ續くわけだね。

C　さうだ、少くとももう一回やらう。

C　それも可からう。それではまた來るよ。

A　どうかまたやつて來てくれたまへ。

絕對多數を抱いて

馬場恒吾

政界の危險信號

總選擧に大勝した許りの民政黨内閣である。まさかに特別議會で倒壞するやうな事はあるまい。何人もさう思ふ。多數の國民はさうである事を望む。併しかうした狀勢の中に於ても、内閣が絕對に安全であるとは誰にも保證出來ない。其所に日本の立憲政治の變態性がある。内閣を潰し得る勢力としては樞密院と貴族院がある。彼等が今直ちに濱口内閣を潰さんと企てゝゐると云ふ證據はない。私の云ふのは彼等が若し内閣を潰さうと企てるならば、内閣は潰される。衆議院に於ける與黨が如何に絕對多數であつても、内閣の潰れる事をどうする事も出來ないと云ふ事情が存在する。

例へば、内閣は特別議會に義務教育費國庫負擔額を一千萬圓增加する案を提出する。衆議院は可決する。貴族院も蓋し可決するであらう。併し若し否決したら何うなる。

義務教育費補助を增したつて、增さなくたつて、政治の大局から云へば大した問題でない。政友會の地租委讓に對抗する爲めに民政黨は教育費國庫負擔を云つた。總選擧の時には、景氣よく、義務教育費は全額を國庫から出してやると演說したのであらう。だから行懸り上、全く知らん顏も出來ず、玆に一千萬圓增額を特別議會に出さなければならない。併し本當の事を云ふと、貴族院に否決されたと云つて、國の存亡に關する問題ではないから、政府だつてさう血眼になる必要はないのだ。

だが、其處に政府の威信と云ふ問題が起る。此特別議會に提出される議案の中に、外に目立つものはない。教育費補助が最も重要なる議案と云へる。其重要なる案が貴族院で否決されるときは、内閣としては鼎の輕重を問はれた事になる。それに屈從すれば、政府の威信地に墜ちて、次ぎの議會では重要法案悉く否決と云ふ運命を覺悟しなければならない。さればと云つて、再び信を國民に問ふと云ふ意味で衆議院を解散することは、餘りに事々しき努力の徒費と思はれる。玆に政府は窮地に陷る。

樞密院が政府を窮地に陷れる事も亦容易である。例へば海軍々縮條約の御批准奏請に賛成するか否かの問題が眼前に横つてゐる。局外者から見れば日英米の軍縮協定はよくこれほど迄に纏つたと思はれる。彼等は若槻の手腕を認めるものが多い。然るに、樞密院に於ては若槻は繼子である。其由來は昭和二年に樞密院が若槻内閣を潰して以來の事である。樞密院は政府の提出した臺銀救濟の緊急勅令案を否決した。其時の論爭の中心は、樞密院は臨時議會を召集せよと云ふ。政府は財界が不安で議會を召集する暇がないと云ふ。樞密院は頑として聞かない。若槻内閣は辭職した。茲で樞密院が凱歌を奏した事になつてゐる。所ろで其凱歌が束の間であつて、翌日から銀行休業、全國に渡る預金取り付けが始まつた。樞密院は慌てゝモラトリヤムの緊急勅令に賛成せざるを得なくなつた。此經驗で、樞密院は表面は若槻に勝つて、内實は若槻に負けた事になつた。樞密院は若槻を内閣から蹴落したが、後になつて、蹴落したのが間違ひであつた事を、金融恐慌と云ふ事實に依つて見せ付けられた。普通人ならば、灰を被つて後悔の意を表すべき所である。併し彼等はさうはしない。却つて彼等は自分達を負かした若槻を快からず思ふ。

樞密院とて今回の軍縮協定の御批准奏請に反對はしないであらう。併し何か氣候の變化に依つて、反對したら何うなるであらう。濱口内閣は進退に窮する。軍縮協定は日本の爲め又は世界の爲めに必要であると信じ、そして内閣さへ更迭すれば、樞密院が此協定を可決するかもしれぬと思つたならば、内閣は寧ろ政權投出しの途を取るであらう。

總選擧に勝てば、其政府は安全であると云ふのは、議會政治が普通に行はれてゐる國で云ふ事である。日本の如き、議會政治が變態的にしか行はれない國では、衆議院の絕對多數は政局安定の保證にならない。人が最も安心してゐる時こそ、危險の最も大なる時である。

元老百年の後

元老西園寺公が病んで、一時恢復の望がないと傳へられたとき、多くの人は西園寺亡き後にどうなると云ふ問題を考へた。幸に病氣は治つたらしい。併し彼れは八十二歳である。今後何十年も此世にある人ではない。西園寺亡き後はと今にして考へても早過ぎはしない。

彼れの永い生涯の中には世の非難を受ける事もあつた。最後の非難は清浦内閣推薦の時であつた。だが、それ以來彼れの内閣推薦振りは正しかつた。加藤(高明)、若槻、田中、濱口と、何れも政黨總裁である人を、何時も世間の期待通りに推薦した。即ち日本には政黨内閣制が確立した如く見えた。その結果として、超然内閣、中間内閣の目まぐろしき運動がなくなつた丈けでも、國民はどれ丈け助かるか判らない。所ろで若し今日西園寺が死なば、かうした變則的内閣の運動が再び復活はしないか。或は樞密院内閣、貴族院内閣が企てられはしないか。少くとも此等の封建的勢力が大に威勢を盛り返へしはしないか。これらは、西園寺の病中に各方面の話題となつた事柄である。

西園寺亡き後に新らしく元老が出來るや否や。少くとも西園寺の意見では、内閣推薦者としての元老の役目は、憲政常道が確立すれば不用になる。政權は政黨總裁から總裁へと滑かに行く。陛下は内大臣に御下問になるかもしれないが、内大臣は儀式的に政黨總裁を推薦する、從つて新らしく元老を置く必要を見ないと云ふ事だ。

然るに假に内大臣に御下問があつたとする。今の内大臣は牧野伸顯伯である。牧野は公平で個可な人である。併し若し彼れが此御下問に對して、自分一個の意見で奏上する事を畏れ多しとして、或は隣席の先輩山本權兵衛伯の意見を徵したらどうなる。これは極端に可能性の多い事柄である。山本は震災當時山本内閣を組織し、虎の門事件で、心を殘しつゝ下野した人である。彼れは果して虛心坦懷に政黨内閣のみを推薦するであらうか。西園寺には全然私心がなくなつてゐる。が、私心のある元老に出られては堪らない。西園寺無き後に對する世人の不安は茲にも存在する。

西園寺は所謂憲政常道の確立に努力した。所ろで現在は憲政常道が半分しか確立してゐない。内閣を作るときは政黨總裁を推薦する。これは憲政常道である。然るに其内閣を貴族院や樞密院が破壞する。これは憲政常道の未完成な所である。この儘に續けて行くと、茲に一つ政黨内閣が出來る。其内閣が總選擧を行つて絕對多數を占める。すると貴族院か樞密院かゞそれを倒す。次ぎに又政黨内閣が出來る。それが總選擧を行つて絕對多數を得る。すると又貴族院か樞密院かゞそれを倒す。何日迄行つても同じ事を繰り返へすのみだ。權兵衛が種を蒔き、烏がほじくる。國民は煩に堪へない。

此變態の政治狀態を合理化する方法は、内閣を作る時が政黨主義ならば、内閣が倒れるときも政黨主義にしなければならぬ。卽ち内閣は總選擧で負けるか、或は衆議院で負けなければ辭職する必要はないと云ふ事にする。貴族院や樞密院が如何に逆か立ちをしようとも、それは内閣が政策を實行する妨げにならない規則にする。さうでなければ憲政常道は確立してゐない。

それならば、政友會の田中内閣の如きはどう始末をするかと云ふ問題が起る。田中内閣は、貴族院や樞密院の攻擊に會つても潰れず、最後に己が首を縊つた形ちで潰れたのである。だが、このやうな都合のよい自己崩壞は滅多に起るものではない。それを屢ゝある例として期待することは出來ない。田中内閣は衆議院で初めは負けてゐたのであるが、議員の變節を勸誘して、後には負けなくなつた。其内閣を貴族院や樞密院が倒す事が出來ないとなると、國民は何日迄もその内閣の存在を忍ばなければならぬかと、此問題が殘る。

私はそれは忍んだ方がよいと思ふ。さうすると國民に精根が付く。總選擧と總選擧の間の四年間を惡政に苦しめられる。其苦痛を嘗めた時、國民は初めて選擧で政府を倒ほす意氣込みになる。

西園寺が確立せんとする憲政常道はまだ半分しか確立してゐない。殘る半分は貴族院と樞密院の權力を殺ぐ事である。西園寺が餘生をそ

の爲めに貢獻するならば、彼れこそ、眞に憲政の神として祭られるであらう。

政界低氣壓の所在

貴族院若しくは樞密院が濱口内閣を窮地に陷れんとするとき、一般輿論は大抵政府の味方をするであらう。何となれば衆議院に絶對多數を占める政府が、國民を代表せざる保守的勢力に依つて潰されると云ふ事は動機の如何を問はず時代を侮辱してゐると考へられるからだ。

併し政府がかうした政治的理由で潰れるのでなく、不景氣と失業から來る所の、社會的不安から潰れる時はどうであらう。それは輿論が如何に政府に味方しても、貴族院、樞密院が一緒になつて政府を擁護しても、或は反對黨の政友會も又今暫らく此政府を存續せしめやうと努力しても、矢張政府は潰れる。そして後は政界と社會が混沌たる状態に陷る。

總選擧前後までは事毎に政府に突掛つてゐた政友會は近來鳴りを靜めてゐる。餘りの靜かなる事が却つて目立つ。政友會系の新聞ですら我黨幹部は選擧に負けて意氣銷沈したと毒づいて居る。或は幹部の統制が旨く取れてゐないのでないかと素破抜く。併し私は寧ろそれを善意に解する。犬養總裁は金解禁の後始末をよくする事に於ては、政友會も政府と協力するを厭はぬと云つた事がある。政友會としては、こゝは默つて見てゐる方が賢明の策である。財界が行き詰るものならば默つて見てゐても行き詰る。寧ろ政友會が惡宣傳をしたからかうなつたなどゝ、政府に云譯けの口實を與へない方がよい。政友會の靜けさを以て、幹部の無策に歸するは、必しも當を得た解釋とは云へない。

それに比べると、鐘紡が男女工の給料値下げは、政治的意味がなくても、恰かも政治的策動であるかの如く疑はれてゐる。鐘紡は紡績會社中で最も優秀なものとせられる。此間まで年三割五分の配當をしてゐた。諸積立金が有り餘るほどある。若し紡績會社で賃銀を減らす必要に迫られてゐるものがありとしたら、それは鐘紡でなくして、他の會社である。鐘紡が配當を一割減ずれば三百萬圓浮き出る。職工幸福增進資金を九百三十萬圓積んでゐる。それが僅かに二百萬圓を賃銀から捻出せんが爲めに、これ程の大騷動を惹起してゐる。とても算盤でも常識でも解釋出來ない。恰かも鐘紡の腹は政府が金解禁をした。産業合理化を唱へた。其結果が賃金値下げである。罪は政府にある。政府を恨めと、かう云はんが爲めに、平地に波瀾を起したのではないかと見える。鐘紡當局者の意志がさうでなくとも、虚心坦懐に外部から眺めてゐると、周圍の事情からそんな疑惑が起るのである。

一方に九百萬圓の職工幸福增進資金を抱いてゐる。一方に二百萬圓を捻出する爲めに此大騷動を起す。此二つを對照して見ると、鐘紡の爲す所は少くとも合理的でない。合理化は先づ鐘紡を支配する人々の頭腦より始めねばならぬ。鐘紡の誇りとする家族主義と溫情主義こそ先づ合理化の坩堝に投ぜらるべき品物である。

無産政黨が産業合理化に反對するのも少しく變んである。英國勞働

黨は產業合理化に贊成して、それを黨の主要政策の一つにしてゐる。英國の產業が不振なのは、それが舊式の個人主義的な、個々別々の多數の會社に分かれてゐるからである。石炭鑛業が千有餘の會社に分かれて、其會社が何れも重役、幹部に高い給料を拂つてゐる。即ち頭の上の方の費用が嵩むが爲めに、石炭業それ自身が不振になる。結局一九二六年の總同盟罷業になつた程である、だから石炭業を國家で管理する。其經營と作業を合理化する。それが勞働黨の主張である。

產業合理化は時代の進步である。合理化せざれば產業が死滅する。だから合理化それ自身には反對する餘地もなく、又反對しても合理化の步武が停まるものでない。只問題となるのは合理化の方法である。合理化の利益を誰れが受け、合理化の損失を誰れが負ふかである。

若し下手に合理化をすると、合理化の利益は之を資本家が取り、損失は之を勞働者に負はす事になる。合理化の手段として失業者を出す時がさうである。其失業者は最後に於て國家が之を養ふ義務がある。國家としても別に國家自分の金と云ふものはないのだから、一般人民の負擔に於て失業者を養ふ。此場合には合理化の利益は資本家が取り、損失は國民全體が負ふ事になる。それは產業の合理化にあらずして、不合理化である。

合理化を避くべからざるものとすれば、其合理化の利益は國家が取り、其損失も亦同じく國家が負擔する。茲に始めて論理が一貫する。それでなくてさへ、失業者が增加してゐる。若し國家が產業合理化を獎勵して、失業者が益々增加する場合には、國家は無論、其失業者を完全に引き取る積りで居る事を必要とする。そしてそれを完全に引き取り得る爲めには、產業を國家の統制の下に置き、そして合理化より生ずる利益を國家に徵收する道を開かねばならぬ。だから產業合理化の目標は產業の國家管理より以外の何物でもない。又其所迄行かなければ、失業問題の解決も出來ない。かうした意味に於ける產業合理化なればこそ、英國勞働黨は贊成し得るのである。產業の國家管理の目標を有たず、只漫然として產業の合理化を唱へると、今度の如く鐘紡などに適用される。

濱口內閣は前途多難である。只此一つの政府の前途多難は何んでもないが、實は國の前途多難である。日本は過去十年間人爲的の空景氣を維持して來た。歷代の內閣が國の經濟狀態の眞實を直視する事を恐れて、只其日暮らしの彌縫のみを事として來た。整理すべき產業を整理せず、切り捨てるべき資本を切り捨てず、引下ぐべき物價を引下げなかつた。其爲めに日本の資本家階級は取るべからざる利益を取り、貪るべからざる安逸を貪つて來た。そして金解禁が行はれたる今日、彼等は當然拂ふべき年貢を拂はしめられつゝある。其苦しまぎれに彼等が自分の負擔を無產階級に轉嫁せんとするとき、茲に一般の不景氣と失業苦が生れる。そしてそれは經濟問題から、社會問題に轉化し、遂に政治的颱風を捲き起さんとする。それは只一濱口內閣のみの問題ではない。其衆議院に有する絕對多數の如きは有つてもなくても同じ事になる。貴族院、樞密院、反對黨悉く力を合せても、尙よく此颱風を乘り切り得るか否かゞ疑問となる。彼等は悉く國民の前に兜を脫いでどうか靜まつて吳れと歎願するであらう。其時になれば彼等が今日一生懸命に沒頭してゐる所の政爭なるものは、それこそ眞實に有閑階級の遊戲であつた事を、心の底から思ひ知るのであらう。

世界的不況時代

阿部賢一

一

退くことを知らずに盲目的前進を續けて來た資本主義は、今や世界を不況と不安のドン底に陷れてゐる。一般的に云へば世界における生產力と消費力とが、その社會制度的內在の矛盾に行當つて一大淸算の必要に迫られてゐるのが世界經濟の現狀だと觀られ得る。機械的生產力は、豐富なる原料の吸收と函數的の市場擴大によつてのみ、發展するのであるが、植民地爭奪の夢はすでに消えた。帝國主義戰爭の幻は又その故に、現今地球上に、日に月に濃厚となりつゝあると觀るが、第二の獨乙たる損名を誰しも輕々しく冒さぬだけの話である。

武力による直接的搾取は少なくとも表面的には面倒になつた。英國の大を以てして半裸體の一ガンヂーを如何ともすることが出來ず、燎原の火の如く擴がる反英運動をその趨くまにく放置せざるを得なくなつた。況んや謂ゆる後進國の覺醒とその經濟の發達は、謂ゆる先進國の武力的侵入を容易ならしめざる宣傳力と戰術を心得て來たから、國旗を先導に商賣の途を開き母國の肥肉としての新市場の開拓を求むる事は望みなき方法となつた。わが田中外交の如きも十九世紀末の經濟發展外交思想を世界大戰後に實行せんとしたものであつて、等しく反動の陣營內においても、外交の是非の問題としてよりか時代の變遷を見拔かざる不聰明にその特色を有した。露骨な武力を振ふことによつて資本家的利潤の蓄積を企圖する希望が薄くなつたと同時に、金融資本の威力はその背後にやはり舊來の武力を擁して望むことによつて今や何物をも壓倒し盡さんとするの狀勢になりつゝある。例へて云へばアメリカの世界への金融的君臨はその資本力によつて歐洲諸國を殆んど奴隸化しつゝあるではないか。それのみか、その金融的武力は旣に業に大西洋を越えて英國を征服した。ワシントン會議ですでに骨の髓までしやぶられた老大資本國は九年の後ロンドン軍縮會議において城下の盟をなしたやうなものである。爾餘の國々はもとより問題ではない。かくてアメリカの金融帝國はローマ武力帝國を一九三〇年に打出してゐる。

それで世界經濟の動向を觀測する爲にはアメリカ資本主義の優越的支配を中心とせねばならぬが、今一歩立入つて考察せねばならぬ。第一には世界經濟の現狀を知る爲めに諸々の現象を觀ねばならぬ。第二にはこれ等の經濟變動の過程をかくあらしめたところの理由を究明せねばならぬ。これ等の諸點を見極めることによつて、現下世界の不況の實相を多少窺知し、やがてわが國不景氣の外部的原因について多少の常識を得ることが出來るであらう。

× × × ×

戰爭は飛躍の機會だ。武人の、政治家の、商人の、工業家の、そしてそれは取りも直さず資本主義經濟のそれだ。世界戰爭はその未曾有の機會であつた。二十世紀を、十九世紀と全然異なる色彩で塗るためには、アメリカ資本國と勞農ロシアの二大橫綱の出現を見なければならず、その間數十幾百の群小國家の興隆起伏がなければならなかつた。そして大戰爭の後始末をつけるために、各國は戰爭そのものにも劣らぬ辛苦の十有餘年を暮したのであつた。破れたる勢力の均勢回復のために軍備は──少數强國の僅かな海軍軍縮を除き──擴張され軍事費は膨脹した。租稅負擔は民衆に取つては痩馬に重荷となつた。紙幣は濫發された。各國の豫算は安定の望みなきものすらあつた。ヤング賠償問題決定に至るまでの中歐の不安は戰勝國自體をどれだけ苦しめたか。金解禁その他貨幣制度の回復若くは創設の爲に各國は如何に惱んだか。それにアメリカの歐洲に對するシヤイロツク的威力が加はつて、經濟問題の觀點から云つて、從來の國際貸借、金融の國際的移動の筋道を全然根柢から引くり返して終つた。その間に第三インターナシヨナルの活躍が世界的に見られ、ストライクその他のあらゆる社會運動がすばらしく進展し、資本陣營におけるトラスト、カルテル等の獨占權力確立に對抗して無産階級の陣營においてはその權力結成に劃世的進境を見るに至つた。而してその大勢は科學的正確を以ての推移の外の何物でもなく、舊社會の殼を破つて新社會への步みを徐々と、併しながら、確實に、續くる過程に過ぎない。十餘年の辛苦は戰爭の後始末であると同時に──新戰爭の準備に忙がしき形勢も見逃してはならぬが──新社會への進轉の生みの苦しみだつた。

その世界的動搖期の一段落を終へて、今一服してゐるところが現狀だ。一服は一服だが、それは沈滯と不況と不安の靜けさだ。嵐の後の靜けさであり、又嵐の前の靜けさだ。そして無氣味な御通夜の寂寥が世界を蔽うてゐるが、東洋の一國の姿も時濟としてゐる。世界と大きくざつぱに云つたが、煩悶は國と國によつて同一では無論ない。不況の原因や經過も必ずしも同樣ではない、が綿密な調査はこの文の目的ではない。世界不況の姿を霞を隔てゝでも觀ようと云ふのが目的なのだから。

大戰の後を受けた各國の苦悶が兎にも角にも一息をするに至つた事は之を各國財政上の收支均衡に見得るであらう。無論のこと、豫算表だけで國の財政經濟の眞相を見ようと云ふのは危險ではある。しかし

戰後どうにもからにも辻褄の合はなかつた收入支出のバランスを兎に角合はし得てゐるだけでも一通りではない筈だ。今各國の收支を見るに左の如くである。統計は少し古いが、昨今と大差はないと云へよう。而して又わが國の豫算はこゝに擧げないが、珍しく非募債主義によつて作製された豫算として內閣自慢の代物——その眞價値の批判はこゝに省くことゝして——であることは周知の事、わざ〳〵こゝには擧げないであらう。

最近歐羅巴諸國の政府豫算の概要（單位は凡て百萬弗）

國名	墺地利	白耳義	勃牙利	チエッコスロヴァキア	丁抹	エストニア	芬蘭	佛蘭西	獨逸
豫算年度	一九二九年	一九二九年（豫算案）	一九二八—二九年	一九二九年	一九二八—二九年	一九二八—二九年	一九二八年（決算）	一九二九年	一九二九—三〇年
歲入總額	二五三・五	三一九・三	五四・五	二八三・三	一〇八・九	二一・五	一二四・三	一、七八〇・九	二、三九八・八
歲出總額	二七九・四	二九八・八	五四・二	二八二・二	一一〇・五	二一・五	一三七・〇	一、七七八・三	二、三九八・八
歲入過不足	(−)二五・九	(+)二〇・五	(+)〇・三	(+)一・一	(−)一・六	—	(−)一二・七	(+)二・六	—

國名	希臘	洪牙利	愛蘭自由國	伊太利	ラトヴィア	リスアニア	和蘭	諾威	波蘭
豫算年度	一九二八—二九年	一九二九—三〇年	一九二八—二九年（決算）	一九二八—二九年（決算）	一九二八—二九年	一九二八年（決算）	一九二九年（豫算案）	一九二八—二九年	一九二八—二九年
歲入總額	一二六・六	二一〇・五	一一九・六	一、一三七・一	三一・七	三二・一	二九九・〇	九一・七	二九七・四
歲出總額	一四一・六	二四九・九	一四一・五	一、一〇四・〇	三一・七	二八・三	三五八・七	九四・九	二八三・二
歲入過不足	(−)一五・〇	(+)〇・六	(−)二一・九	(+)三三・一	—	(+)三・八	(−)五九・七	(−)三・二	(+)一四・二

國名	葡萄牙	羅馬尼	西班牙	瑞典	瑞西	ソヴエト聯國	英國	ユーゴースラビア
豫算年度	一九二九—三〇年	一九二八年（決算）	一九二八年（決算）	一九二八—二九年	一九二八年（決算）	一九二七—二八年（決算）	一九二八—二九年（決算）	一九二九—三〇年
歲入總額	九一・五	二〇三・五	五八四・三	一八六・二	七三・九	二、九四三・五	四、〇七〇・三	二二四・〇
歲出總額	九一・一	二一八・七	六二七・八	一九九・六	六九・三	三、二四〇・六	三、九八〇・八	二二四・〇
歲入過不足	(+)〇・四	(−)一五・二	(−)四三・五	(−)一三・四	(+)四・六	(−)二九七・一	(+)八九・五	—

日英米獨佛の株價並物價指數表　(兩指數共 1926＝100)

年. 月		英國		獨逸		佛國		米國		日本	
		株價指數	物價指數	株價指數	物價指數	株價指數	物價指數	株價指數	物價指數	株價指數	物價指數
1927.	1	104.0	97.0	141.8	101.1	105.4	88.5	106.7	96.6	100.9	94.1
	2	105.1	96.3	163.8	100.9	111.4	89.9	110.7	95.9	103.4	95.0
	3	104.4	94.9	158.6	100.4	119.1	91.2	113.6	94.5	99.1	95.3
	4	105.4	94.4	164.2	100.3	128.0	90.5	119.0	93.7	95,7	96.1
	5	106.3	95.3	177.4	102.0	124.6	89.5	123.7	93.7	91.4	96.1
	6	106.3	95.7	136.7	102.6	119.5	88.6	126.3	93.8	87.9	95.1
	7	106 6	95.3	152.9	102.4	123.7	87.8	129.3	94.1	86.2	93.8
	8	107.3	95.1	149.7	102.6	122.5	87.9	132.5	95.2	86.2	93.1
	9	108.3	96.0	145.1	103.9	124.2	85.5	138.4	96.5	87.9	93.0
	10	109.6	95.5	147.7	104.0	125.1	83.5	137.1	97.0	87.1	91.7
	11	109.6	95.3	132.9	104.2	123.3	84.6	136.1	96.7	87.9	92.5
	12	110.3	94.8	127.7	103.9	133.9	85.9	139.2	96.8	89.7	92.2
1928.	1	111.1	95.3	144.6	103.2	146.7	86.3	139.1	96.3	91.4	91.6
	2	110.9	94.7	136.3	102.6	142.1	86.6	136.9	96.4	92.2	90.8
	3	113.9	94.7	135.5	103.1	156.5	83.6	143.4	96.0	91.4	90.4
	4	116 2	96.5	142.1	103.8	175.7	88.0	149.0	97.4	92.2	90.6
	5	118.5	97.0	143.3	105.1	178.2	89.9	151.5	98.6	94.8	91.0
	6	114.7	96.3	148.8	105.1	179.0	89.0	145.4	97.6	97.4	90.4
	7	113.9	95.3	144.3	105.4	168.8	88.8	145.4	98.9	95.7	90.6
	8	115.8	94.1	141.8	105.3	187.5	87.6	150.9	98.9	94.0	91.6
	9	117 7	92.9	144.1	104.1	191.8	88.2	158.2	100.1	94.8	92.0
	10	119.2	93.1	140.2	104.2	191.4	87.8	160.2	97.8	89.7	92.5
	11	119.7	93.1	135.4	104.4	198.6	89 0	169.7	96.7	91.4	92.7
	12	119 3	93.4	138.4	104 1	205.4	88.8	169.7	96.7	88.8	92.5
1929.	1	122.7	93.4	138.0	103.3	231 3	89.6	184.6	97.2	91.4	90.7
	2	121.7	93.5	129.9	103.6	233.1	90 8	186.9	96.7	92.2	91.8
	3	121.0	94.6	128.2	103.9	227.5	91.0	185.2	97.5	93.1	92.1
	4	119.8	93.7	131.9	102 0	220.3	89.2	187.5	96.8	87.9	90.5
	5	118.2	91.7	124.5	100.8	217.7	88.6	187.4	95.8	84.5	91.1
	6	118.6	91.6	124.4	100.5	208.8	86.9	193.7	96.4	85.3	90.5
	7	124.2	92.8	125 6	102.5	211.4	87.2	212.3	98.0	81.0	88.5
	8	123 5	91.7	122.9	102.8	213.1	83.5	223.1	97.7	75.9	87.6
	9	124.2	91.7	122.6	102.8	220.3	84.9	232.1	97.5	78.4	87.8
	10	120.8	91.9	117.9	102.1	207.9	84.8	187.7	96.3	77.6	87.4
	11	110.4	90.5	110.1	100.8	196.1	84.2	151.7	94.4	76.7	85.2
	12	110.5	89.5	106.6	99.9	196.9	83.8	159.8	94.2	73.3	84.3

各國財政はかやうに安定に近きものとなつてゐる。これと同時に各國の貨幣制度の回復、修正、新設が行はれたこと、否、これありしが故に財政上の收支の均衡が期待し得られた事情も明かに認めなければならぬ。これ等の經過はこゝには全部ペンを觸れずに置くが、これから以下の記述の裏面には常に各國貨幣制度の安定――それ故に各國財界の不安定とも云へよう――を前提としてゐる事をこゝに斷つておく。

權力を以て統制する財政上の收支は均衡が取れても、その統制の及ばない財界はその日暮しである。營利的豫測が羅針盤だ。原價値下の爲には産業合理化で御座れ、能率の增進で御座れ、機械の使用で御座れ、農と云はず商工と云はず、資本家的神經は算盤の上に鋭敏に働くのである。だがその多量生産品の市場は、國內の需要不足と外國市場における競爭と需要不足と輸入國における自國産業保護策や國産品使用奬勵等の風潮等に阻まれて進退こゝに谷まることゝなる。

生産の增加が市場の擴大を伴ふ限りにおいて資本家的經營は永續する筈である。又生産の增加が物價下落を引起してもそれが需要の增加を引起して不斷に且つ有利に且生産を續行して行ける間は利潤は增加しないまでも恐るべき減少はしないであらう。それが獨占事

案であれば利潤增加を作ふことさへあるであらう。しかし財界の不況期においては、以上の好都合の假設に反して、物價も下落し利潤も減少し、乃ち株價も下向一方を辿ること丶なる。今一つの統計を掲げて最近の趨勢を示すであらう。（統計は東洋經濟新報昭和五年四月五日發行より轉載）（前頁參照）

前表は東洋經濟新報が各國の政府及び雜誌社の調査を本にして作製したものであるが、之により一目瞭然とこ丶三ケ年間の財界變動の跡を知るを得る。無論各國の株式價及び物價の爲に選ばれた株及び商品も調査方法も恐らく同一でないであらうから、之を以て正確なる財界指針と云ふことは出來ないまでも、これ以上に世界經濟の動向を知る便宜は今のところはない。之によつて最近の財界の動きを觀るに英國は昨年中頃に至るまで大體において金解禁後の經過としては順調であつたが、十月に入つてから株價も物價も頓落した。獨逸は物價株價とも亂調子を續けてゐたが、特に昨年十月の交より著しき下落を示して來た。佛國はやはり昨年十月を以て特に株價下落に一期を劃してゐるし、米國に至つては物價株價とも同じく十月を境としてそれまでの異常の好調に引更へ慘落の憂目を見てゐる。最後にわが國は昨年七月の交からそろ〳〵下落の傾向を確めながら、ずる〳〵と下向して來た。今、以上の統計の一九二六年を基年とせずに大正二年一月を基年として觀察すれば、わが國の物價は英米に比較して下向の程度小ではある。

各國物價比較（東洋經濟雜誌四月五日號）

	大正二年一月	昭和四年四月	五年二月
日本金物價	一〇〇	一五七・〇九	一五三・五三
米國卸物價	一〇〇	一三四・〇	一一八・六
英國卸物價	一〇〇	一三八・六	一二四・一

併しながら、同誌の同號において掲ぐる株價指數の下落について觀るに著しいものがある。

昨年三—六月。及び昨年六月—本年三月株價下落率

	四年三月末	四年六月末指數	下落率（＋）は騰貴	四年六月末	五年三月末指數	下落率
金融株	一〇〇	九一	九	一〇〇	九一	九
銀行	一〇〇	九五	五	一〇〇	九〇	一〇
保險	一〇〇	九〇	一〇	一〇〇	九五	五
信託	一〇〇	八八	一二	一〇〇	八八	一二
取引所株	一〇〇	八七	一三	一〇〇	八五	一五
海運株	一〇〇	九三	七	一〇〇	八〇	二〇
電力電鐵株	一〇〇	九五	五	一〇〇	八七	一三
電力	一〇〇	九五	五	一〇〇	八二	一八
電鐵	一〇〇	九五	五	一〇〇	九三	七
鑛業株	一〇〇	八八	一二	一〇〇	七七	二三
工業株	一〇〇	九三	七	一〇〇	七五	二五
紡績	一〇〇	九四	六	一〇〇	八二	一八
毛織	一〇〇	八四	一六	一〇〇	七七	二三

製麻	一〇〇	九二	八	一〇〇	五四	四六
製紙	一〇〇	八九	一一	一〇〇	七四	二六
製粉	一〇〇	九一	九	一〇〇	八三	一七
製糖	一〇〇	九六	四	一〇〇	八六	一四
麥酒	一〇〇	九二	八	一〇〇	八三	一八
洋灰	一〇〇	一〇四	(+)四	一〇〇	五七	四三
肥料	一〇〇	九四	六	一〇〇	七八	二二
其他共平均	一〇〇	九二	八	一〇〇	八二	一八

昨年に比して今年の株價下落は以上の如くであるが、その下落は今年に入つてから甚しくなつたのであつて、製麻の如き一ヶ月前に比して一割六分五厘の下落であり、平均五分であつた。併しながら以上の統計は重要なる比較的少數の株についてのものであり、若し指數に上らざる他の微力なる會社の株價下落を想像すれば更に著しいものがあるに相違ない事はこゝに云ふまでもない。われ〳〵が近頃旅行する際車内で耳にするのは深刻な不景氣の話でないものはなく、窓外に立ち列ぶ煙突から元氣よく黑煙に出てゐるのは十の中幾何であらう。わが國の不況には世界並の原因以外になほ數多き不利にして不合理な原因がある譯だが、今年に入つて株價暴落、起業不振は數を擧げずとも明白である。本誌發行の時期には前掲統計よりも遙かに株價は一般に下落してゐるだらう。物價も下落した。しかし必要品の下落せざる事は官業製品か、獨占製品かたゞしは惰勢で高値を維持するに依ると思ふ——煙草、電車賃、豆腐の値段が下らぬのはその一例。

財界一般の不況、それに各國それ〳〵の不況原因によつて物資の國際的移動も今年に入つてから著しく減じて來てゐる。無論二ヶ月の統計を以て今後の貿易を推定することは出來ないが、昨年に比してその著しき減少はやはり世界的不況を示す一資料たるを失はぬ。括弧内は前年同期の金額單位、日本千圓、英國千ポンド、米國百萬ドル、ドイツ百萬マーク）

日本

	一月	二月	合計
輸出	一四六、〇〇四	一一八、八八六	二六四、八九〇
	(一八一、六六九)	(一四七、三五三)	(三二九、〇二二)
輸入	一八二、七六〇	一六〇、七〇五	三四三、四六五
	(二四〇、八二六)	(二三七、四七八)	(四七八、三〇四)

英國

	一月	二月	合計
輸出	五八、二六二	六〇、六〇〇	一一八、八六二
	(六六、八七九)	(六五、九〇〇)	(一三二、七七九)
輸入	一〇一、八五四	八八、二〇〇	一九〇、〇五四
	(一一六、五四六)	(九〇、八〇〇)	(二〇七、三四六)

米國

	一月	二月	合計
輸出	四一七	三五一	七六八
	(四八八)	(四四一)	(九二九)
輸入	三一二	二八一	五九三
	(三六九)	(三七一)	(七四〇)

	ドイツ		
輸出	一、〇九二	一、〇二六	二、一一八
	(一、一〇一)	(九七一)	(二、〇七二)
輸入	一、二九五	九八二	二、二七七
	(一、三一九)	(一、〇一五)	(二、三三四)

生産は興らず、物資は疏通しない、その上に資金は國際間に偏在し、しかも資金の豐富な國では金利が異常に低落した。そして之を導いたものはアメリカであり、その機會となつたのは昨年十月末の恐慌であつた。世界の金の半分を占め、莫大の對外債權を擁し不景氣知らずであつた米國が、あまりの浮調子に足を踰み外したのがそれであり、それまでに準備銀行が投機抑制の爲に利子引上を企てたものの、市中銀行の勢力が餘りに大であり、産業家自から豐富に資本を保有してゐるので、準備銀行の金融統制が望み通りに行かず、投機は昂進し遂に大蹉跌を爲した。爾來金利は下り、財界やゝに立直りの曙光を認むるが如きも金利昇騰までには至らない。金利低下したること甚しきに拘はらず需要起らず信用依然として縮滞するが現狀である。因に左に世界各國の金利の動きを示しておかう。

	現行利率(三月末)	改定日	昨年十月一日
日本銀行	五・四八%	(一九二七年、一〇月、八日)	五・四八%
紐育準備銀行	三・五	(一九三〇、三、一四)	六・〇
英蘭銀行	三・五	(一九三〇、三、二〇)	六・五
佛蘭西銀行	三・〇	(一九三〇、一、三〇)	三・五
獨逸帝國銀行	五・〇	(一九三〇、三、二四)	七・五
白耳義銀行	三・五	(一九二九、一二、三一)	五・〇
伊太利銀行	六・五	(一九三〇、三、三)	七・〇
和蘭銀行	三・〇	(一九三〇、三、二四)	五・五
瑞典銀行	四・〇	(一九三〇、三、六)	五・五

乃ち昨年上半期から景氣回復、特にアメリカの投機的好景氣に伴ふ高利に釣られて諸國の金利を自衞上高く引上げられたのであるが、十月末の恐慌以來資金需要起らず、金利は引下に次ぐに引下げとなり、それが又諸外國の金利引下げを促して今日に及んでゐるのである。

財界の不況と云ふ。これを觀るに諸々の觀點があり、之を議すことは玆には不必要と思はれるが、以上の略述によつて現今世界不況の片鱗を示し得たかに思はれるのである。而してこれ等各國の財界不況の最も端的なる結果として失業群の激増をわれ等は觀るのである。注意深き讀者は三月六日ニューヨーク、ベルリン及びロンドンにおいて「失業と飢饉に對する抗議」と云ふ旗印で民衆の示威運動が行はれ、流血さへ見たと云ふ記事を記憶せられるに相違ない。果して外國電報の報ずる如く共産黨の運動であつたか如何か知らぬが、それは何人の計企であるにせよ、胃腑の問題として失業群の怨聲が一九三〇年不況時代を彩る一大特色であることを否むことは出來ない。本年二月英國においては百五十萬八千の失業で昨年同期より十四萬人の增加、獨逸は同じく二月に二百二十三萬で昨年とほゞ同數、米國においては三百

萬人の失業者を有すとの事である。わが國では公稱失業者數は三十一萬だが、實數は百萬に上るであらうと推定されてゐる。外國ではあまり目立たぬ知識階級失業者が東京市だけで最低三萬を數へ、登錄せられざるもの全國に亘つて十萬の多きを數へようか。個人的責任にあらず、季節的原因によらず、滔々として市場に溢るゝ有爲の靑壯年の勞働力を强いて無用に歸せしめんとす。然も職業紹介所は日夜その奔命に疲れ、中央地方の起債による失業救濟事業の如き政府は緊縮看板を外してその實行を期してゐるやうであるが、それも燒石に水の譬である。

かく異常なる失業群の激增とその固定化に最も明白にして且つ又最も意味深き世界的財界不況の姿を見出すのである。

× × × ×

世界的不況の相を瞥見したわれ等はその由來するところを少しく尋ねて見たい。各國は各々その不況の原因を多少は異にしてゐるが、景氣と云ひ不景氣と云ひ、何れも一國のみ孤立して然うである譯はない。何等かの關聯において景氣の變動を國際的に共にするの傾向はある。併しながら、その間自から現下の不況を招來する原因について異なる二個の系統を見出さゞるを得ないやうに思へる。それはアメリカの不況と歐洲諸國の不況と之である。今それ等の國の事情について極めて大ざつぱの概觀を試みたいと思ふ。

オーソドックスの經濟常識によれば、國の經濟發達と外國貿易はこう云ふ關係を持つて進むものと考へられた。乃ちまづ農業國はその國の農業の發達の爲に又農業以外の産業發達の爲に資本を輸入し機械器具を輸入するがその代償として輸出する程のものもないから、輸出入の關係から云へば輸入超過になる傾向がある。ところが輸入資本や機械を以て産業の開發に當てその生産物を以て外債の元利償還に當つるに及んで輸出超過の時代に入る。更に進んで産業國たるに至らばその製品を輸出することはするがなほ蓄積資本を外國に貸付くることゝなるから、貿易關係は再び輸入超過となり、その入超差額は對外債權の回收や元利即ち所謂る貿易外收入によつて賄ふことゝなるのだと云ふのであつた。この公式は大體において正しかつた。實例を云へば英國の如き世界大戰前において年々莫大の入超があつたにも拘はらず、二億磅に近き對外債權の利子及び配當收入のみを以ても賄ひ得たのであつた。同じ入超でも金持の入超であつて、年久しいわが國の如き貧國の入超ではなかつた。獨逸も佛國も英國ほどではなかつたが、概して貿易上においては入超國の域に達してゐたのである。これがその强味でもあつた。無論それはこれ等の諸國が他の諸國に先んじて産業を興し、植民地を攻略し軍權を確立してゐたに依る事は云ふを俟たない。

然るに大戰後アメリカの弗が世界經濟のシテ役を承るに及んでからは前記の常識は雲か霞と消え失せた。何故ならば最近まで英國や獨佛が享樂してゐた大入超樂土の境を苦もなく越えて出超樂土を實現したか

らである。例へば最近諸外國の貿易狀況を視察しよう。(一九二九年の貿易界。東洋經濟雜誌。昭和五年三月一日發行參照單位百萬弗)

	輸出	輸入	(一)は入超 (+)は出超
米國	四、四〇〇	五、二四八	(+) 六四八
英國	五、九四四	四、〇八四	(一) 一、八六〇
獨國	三、二〇一	三、二九八	(+) 九七
佛國	二、二八四	一、九六二	(一) 三二二

流石は英國であつて、その膝すでに米國に屈したと云はれながら尚ほ過去三ヶ年に四千萬磅を對外投資に當てゝはをる。而して過去の搾取や蓄積はその入超を補塡してゐるであらう。しかしその勢から云つて米國には比すべくもないのである。米國は大戰前に對歐債務は五十億弗に上つたか、戰時中に少からざる部分を支拂ひ、今日においては舊い聯合國に對する貸付だけで百三十億弗を優に超え、これに純然たる經濟的貸付を加へればその對歐債權は二百億弗を超ゆるだらうと推定せられてゐる。

昨年出版された「米國の最近經濟變化」——現大統領フーバーを議長にする報告書——によれば統計は些か古いが、次の統計がある。(單位百萬弗)

	米國人の受取勘定 長期私人投資利子	米國人の受取勘定 短期同	米國人の受取勘定 米國國庫戰爭債權收入	支拂勘定 長期同	支拂勘定 短期同	差引
一九二二年	五二六	二五	一五八	一二〇	二四	五六五
一九二三年	五六〇	三〇	二五九	一四〇	四〇	六六九
一九二四年	五九六	三五	一八三	一五〇	四二	六二二
一九二五年	六三九	四五	一八六	一六五	六四	六四一
一九二六年	六七八	五七	一九五	一九〇	七八	六六二
一九二七年	七三八	五七	二〇六	二〇三	七八	七二〇

即ち米國は對外債權の利子だけで一九二七年には、七億二千萬弗は稼轉んでゐても何かの形で懷に這入つてくる富なのである。しかしその反面には外國から米國に向けて投資する向もあるにはある。併しその對米投資は米國の對外投資に比較すると遙かに少ない。例へば次の統計を見る。(出所以上に同じ。單位百萬弗)

	米國對外長期投資	償却金	差引	外人ノ對米國投資	償却金	差引	對外投資超過高
一九二二年	一、二二〇	四七八	七四二	八〇	七四	六	七三六
一九二三年	五八一	三五八	二二三	三〇八	六四	二四四	九
一九二四年	一、四二四	六一〇	八一四	一三一	八七	四四	七七〇
一九二五年	一、五九三	七七七	八一六	二八三	七八	二〇五	六一一
一九二六年	一、六五三	八六三	七九〇	七〇九	五四一	一六八	六二二
一九二七年	一、九七四	九八二	九九二	九三一	七〇〇	二三一	七六一

以上の數字によつて米人の對外投資力の旺盛なる事を知るであら

う。なほそれ以來最近の情報を見るに對外投資高は一九二八年は十五億七千六百萬弗、一九二九年は下つて七億七千九百萬弗と云ふことである。(エコノミスト。昭和五年三月一日)。投資高は大に減じたが、それは恐慌前の異常の投機熱にあふられ國內の株式社債に資金が向つたからだと想像せられてゐる。

以上の如く米國には莫大な對外投資高があり、年々の元利受取超過があり、そこへ前に論じた出超である。その他謂ゆる貿易外收入支出の詳細なる統計はこゝに之を擧ぐるの煩を省くであらう(前掲報告第二卷七三八頁參照)が、一切の計上記錄せられた貸方借方の差引は一九二七年においては二千萬弗の入超、遡つて一九二六年は八千五百萬弗の入超、一九二五年は九千六百萬弗の入超、一九二四年は六千三百萬弗の出超でさへあつた。

で、よし多くの年においては金體の收支の上では入超であつたにしても、その入超振りが餘所目にはあまりに呑氣である。何となれば一九二七年では旅客の落す金は受取勘定では僅か一億五千三百萬弗、これが諸外國人が米國に落して行く金だが、米國人が外國に落して行く金は七億七千萬弗なのである。で、差引六億一千七百萬弗だけ餘計に地球の表にバラまいて來ると云ふ次第だ。一例を擧ぐれば以上の次第なので、貿易外收入をいつでも思ふ存分に出超に轉じ得る譯である。貿易が出超、貿易外收支がかやうな強味を持つ。しかもその貿易と云ふも米國生產額の僅一割を外國に輸出するにすぎないのである。眞に鬼に金棒だ。羨んでも致方がないが、その金權と對外債權の回收——投資の利子配當と戰債元利——がやがて歐洲諸國をして不景氣のドン底に永く沈湎せしむる根本的原因である事を明白に認めねばならぬ。歐洲を一體として云へば、戰敗國は戰債の負擔と投資の搾取は、稼げども稼げども、アメリカ資本の桎梏は脫し切れない。たゞ辛ふじてその投資を仰いで息をつくのみだ。戰勝國の英佛伊と雖も獨乙より受取る賠償金の中より又自己の懷中より年々對米債務の償却に當てねばならぬ。貿易も貿易外收支も共に入超を連年繰返してゐる實狀である。畢竟する歐洲は擧げてアメリカ金融資本主義に奉仕し、その王冠の光輝を添える爲に存在せるものとでも云へようか。

搾取せらるゝ歐洲は、現下の不況を自力を以て轉回する希望も資料も乏しいのだ。少なくとも外部的形勢の變化によつてその不況を打開する光明に接する望みは極めて薄い。乃ち自から節し合理化を唱へ、創造教育を叫び、關稅引上を要求し、輸出補償法を施し、國產品奬勵を喧傳するが如き之によつて何處にか活路を見出さんとする苦悶の象徵であると觀なければならぬ。

だが、米國そのものは歐洲諸國とその事情を異にする。繁榮がその立前だ。昔流に云へば天と地と人とが密爾に相抱擁していやが上にもこの帝國を祝福するのである。今日地球上で自給自足の封鎖經濟を營んで尚ほ且つ相當に高度の物質生活を維持する國、又維持し得る國は實に米國と露國だ。露國は現今全力を盡して實行しつゝある謂ゆる五

ヶ年計畫を續行して行けば、十年の後には米國の繁榮を凌ぐであらうとさへ云はれてゐる。しかしその計畫の十分の一の實現でも大した業績だらう。だが米國はすでに經濟史上未曾有の繁榮を享樂し得る域に達してゐる。そしてその理由は云ふまでもなく國土の廣く且つ平坦なると、天然資源の豐富にしてその種類多く錫を除いて不足を感ずることなき程度の天惠と、國內の交通々信網が四通八達せると、國內に消費力旺盛な市場があることに依り、更に新技術や創案を實用化するに極めて大膽なる等、資本主義經濟の發達の爲には無上の苗圃でなければならぬ。然もその上に世界大戰によつて世界經濟の一角を支配する獨占的地位を占めたのである。すでにかくその體內に國境を撤去した全歐洲の經濟力以上を宿すのであるから、外から來る何等の援助を借らず自力で景氣を起し繁榮を生み得るのである。さきに論じたやうに全生產物の僅か一割を輸出してさへ現狀を維持し得るのであつて、貿易によつてのみ國を立て得る日英獨の如き國と性質を異にする。偶々米國企業家が更に再生產品市場を南米、東洋に求め或ひはフォードの如く勞農露國の五ヶ年計畫に事實上參加してその事業慾と利潤慾を滿足する者もあるが、それは米國の經濟實體と經濟組織から溢れ出る餘力の致すところにすぎない。そして昨年秋の恐慌によつて一大頓挫を來したために年末來の不況に沈湎した米國財界は、昨今再び立ち直つて景氣を自發せんとする片鱗をさへ現はし出してゐる。ミッチエルの表によれば、米國の景氣は次の順序に循環した。一九二二年は再生と繁榮。一九二三年は景氣に次で中休み。一九二四年は緩和は不景氣の後に更生。一九二五年は繁榮。一九二六年は繁榮に次でやゝ中休みの狀態であつたが一九二七年に入つてから緩和な萎縮があつた。この景氣順環に次では一九二八年は萎縮より更生し、一九二九年には急激なる繁榮を喚び起し十月末の恐慌で局面一轉、不況の底に陷落した。そしてその谷底から、又低金利のドン底から財界更生が徐々に伸び上りかけてゐるのをわれ等は認めるのである。米國の財界人の豫想もそうであり、又最近入手のアナリスト財界活氣指數も僅か乍ら、而し明白に確實に上向を傳へてゐる。やがて更生し今年から來年にかけて繁榮の途を辿るに至るであらうと、之は想像ではあるがそうなるであらう。

× × × ×

アメリカ資本主義は、幾多の矛盾を胎內に藏しながら、なほ自己を再生產し再擴張するの若さと强さを有してゐる。が歐洲資本主義は英獨佛その何れたるを問はず、もう齒が立つてゐる。ブリアンの汎歐洲聯盟はその悲鳴の一つだ。ビーバーブルック——ローザーメヤーの統一帝國黨は熟して落ちんとする果實を見ての絕望となすは僻目だらうか。彼等の國境と偏見がある限り、歐洲資本主義はアメリカ資本主義への奴隷的奉仕に甘んじねばならぬ。世界的不況を一掃して、景氣を自發するの希望はあつても力が、悲しいかな、彼等には無いのだ。そして北歐の一角から靜かにこの動きを見守る勞農露國がある。

世界的不況の時代だ。しかしその下にうごめく諸々の國はたしかに特殊の性質を持つてゐる。そしてその中にあつて最も慘めなのはわれ等の足元の日本資本主義だと思ふ。

勞働の受難期

山川均

失業問題の『重大化』

總選擧に勝つた濱口內閣は、いまや失業問題によつてその運命を試みられんとする。わが國の政變は、かつては官僚軍閥の舊勢力の牙城となり、後にはブルジョア分派の爭鬪が變態的に現はれる裝置となつた貴族院や樞密院の方角から捲き起されることが多かつた。民意の浪には少しも怖れることを知らぬ勇敢な內閣の船頭も、かういふ方角に現はれる一抹の暗雲は、極度に怖れることを知つてゐた。失業問題の重大化は、全く反對の方向に當つて、內閣の運命を脅やかす一つの妖星の現はれたものであつた。新興階級の組織せられた政治勢力は、なほブルジョア政治を脅やかす力がない。けれども民衆の生活はすでにブルジョア政治を威嚇しはじめてゐる。

內務省最近の發表によると、二月中における全國の推定失業總數は三十五萬であつて、前月に比して約一萬人、前々月に比して三萬五千人の增加となつてゐる。この調査の開始せられた昨年九月の推定數は二十六萬八千であつて、調査せられた人口の四%に當つてゐた。しかるに翌十月には、失業者は調査人口の四・三三%に、十一月には、四・三八%、十二月には四・五四%、本年一月四・九三%、二月四・九九%に增加した。

いふまでもなく失業者三十五萬といふこの數字は、現在のわが國における『就業の能力および意志を有するにも拘らず就業の機會を得ざるもの』の全數ではない。第一に、調査は、全人口の一割一分にしか當らない主として工業人口に限られてゐる。從つて第二には、農村における失業者は全く除外せられて居り、また第三には、小商人の沒落や、所有地や小作地の喪失のために、新たに勞働力の賣手として現はれる要素を包括してゐない。のみならず、右の限られた工業人口の範圍內でも、前揭の數が、失業者の實數をどの程度に正確に表はしてゐるかは疑問であつて、現に同じく內務省社會局の調査によると、常時百人以上の勞働者を使用する全國の工場において、昨年十二月中に解雇せられた勞働者の總數は十九萬五千であつて、雇入數の二萬五千を

差引くと、一ヶ月に十七萬人の工場勞働者が失業したことになつてゐる。沒落に瀕してゐる百人以下の小企業の場合は、恐らくもつと甚しいものがある。そこで都會と農村とを通じ、就業の機會に對して相對的に過剩となつてゐる人口の總數は、何ら正確に知ることは出來ないが、若し知ることができたなら、それは恐らく大多數の人々が現在の失業問題に對して認めてゐる重大性を、さらに數倍するほどに重大な數字であるにちがひない。

現在の失業問題の重要性は、失業者の絶對數が未曾有であるといふこと以外にも、未曾有の性質を持つてゐる。從來のいかなる時期にも、もちろん失業者のなかつた時はない。例外的な好況期と産業の膨脹期には、勞働豫備軍が殆んど現役勞働者として徴募し盡され、なほ足りないで、農村の過剩人口を盛んに都會に吸集した時がある。けれどもそういふ時期においてさへも、農村から供給される新たな勞働力は、間もなく實際の需要を越へた。景氣が傾くと、勢ひ失業者は增加したが、その一大部分は謂ゆる『歸農』することによつて、失業問題に重大化は著しく緩和せられることができた。農民の生活は窮迫してゐたが、何世紀かの封建的搾取の訓練と神聖な家族制度とのお蔭で、農村の生活には、まだそれだけの謂はゞ彈力性とも云はれるものが殘つてゐたのみならず、これらの失業者も、近い將來に必ず回歸する好景氣時代には、再び都會の工業に收容せられる約束を與へられてゐた。

今日は、事情が一變した。農村には、もはや都會における商工過剩人口を、好景氣の一陽來復まで收容しておく餘裕と彈力とが全く無くなつたか、殆んど全く無くなつてゐる。假りに農村が、都會から押付けられた失業者の一部分の歸農を受容れたにしても、今日はかつての不景氣時代のように、近い將來における景氣の恢復は約束せられてをらぬ。大正九年の恐慌を分水嶺として、景氣はだんだん谷底へ降つてゐる。たゞその間に、謂ゆる中間景氣といふ多少の迂回と道草とがあつたゞけである。多くの人々は、景氣は早晩回歸するといふ漠然たる信仰から、金解禁の前後をもつて、恐らくは不景氣の底だらうと考へてゐた。そして金解禁は、不景氣の終末といふよりも、好景氣の始まりであるかの如く考へてゐた。しかし事實はその反對を說明した。

かようにわが國今日の失業狀態は、事實上、恒久的な性質を持つといふ點では、世界的の現象たる現在の失業時代の共通性を帶びてゐる。たゞわが國現在の失業問題が、先進資本主義國のそれとの間に性質の相異があるとしたならば、これらの先進國では、現在の恒久的な失業狀態は、産業合理化の結果として起つてゐる、しかるにわが國における失業の累進的な激增と深刻化とは、むしろ合理化の序幕として現はれてゐることである。これらの諸國では、戰後の經濟上の再建と恒久的な不景氣の打開のために、産業の合理化が行はれた。組織せられた勞働階級の大部分もまた、希望を産業の合理化においた。そして或る程度まで、進んでその進行に協力した。産業の合理化は、勞働の

生産力を驚くべき程度に高めたが、その結果は、資本にとつては利潤の確保であらうとも、勞働者にとつては、勞働の强度の增大と勞働力の恒久的な過剩であつた。

わが國の場合は、産業の合理化が決してこの程度に進行してをらぬことは云ふまでもない。現在の勞働力の過剩は、大部分、産業の合理化によつて生産力が增大した結果でないことは自明である。けれどもわが國の場合にも、現在の不景氣から脫しようとする資本の生存の鬪爭の前には、たゞ合理化の道が開かれてゐるだけである。その點ではわが國の資本主義も忠實に、先進資本主義國の轍のあとを追うてゐる。かうしてわが國の失業問題も、何ら解決を指してゐるものではなくて、恒久化と深刻化を指してゐる。

失業問題が、資本主義に取つてとうてい解きがたき謎であるといふことは、勞働階級がこの謎の解決を資本家階級に迫ることが、無益であるといふことを意味しない。資本主義は固よりその建前の內で、失業問題を完全に解決する力はない。反對に、資本主義は自分自身の前に、一そう解決の望みの少ない問題に變じて失業問題を再提起しつゝある。けれども失業問題に對する資本主義の無能力が或る大きさとなり、そしてこの解決を迫る力が或る强さとなる時に、恐らくは資本と勞働の關係の展開に、新たな轉機を與へるものである。

のみならず、資本主義の範圍內においても、勞働階級の壓力は、或る程度の部分的な解決または救濟を、資本家階級の負擔においてなさしめることができる。一般的な八時間勞働制の確立、青少年勞働の禁止の擴張と勵行、養老年金を伴ふ老年者の退職制度、あらゆる種類の被傭者を包容する失業保險の實施などは、當然に勞働階級の要求となるべきものであるが、差し當つては大規模な公營事業の着手と失業者に對する救濟金の交附を要求しなければならぬ。勞働階級は利用し得べき一切の財源、ことに軍縮から現に豫期せられてゐる財源に對しては、これを優先的に失業問題の施設に充てることを要求する權利がある。

最近、政府は失業の增大を見て、今更に問題の容易ならぬことに氣づいたようである。この驚きは、失業問題の「重大化」といふ表現となつてゐる。今日の失業問題をもつて、救濟事業を申譯ばかりに擴張し、やれ調査だ審議だ申答だと云つてゐるうちには、いづれは景氣の好轉と共に、何とか片づくだらう位に、生まやさしいものに考へてゐたのは、ブルジョア政治家知識の限界と共に、或る意味では、ブルジョア政治そのものゝ限界を示してゐる。失業問題の「重大化」に驚いた今日といへども、ブルジョア政黨の內閣が、失業問題の重大性を完全に理解してゐるかは疑はしい。失業問題は、恐らくは政府や政黨の怖れてゐるよりも、もつと怖るべき大きな口を開いて、彼らの道に待つてゐる。そして問題が解決せられるまでには、無數の內閣は、この怪物によつて吞みこまれるにちがひない。

鐘紡の減給問題

わが國產業界の代表的な大企業の一つとして、全國三十六の工場に三萬五千の從業員を使つてゐる鐘ヶ淵紡績が、突如として從業員の給料減額を發表したことは、會社に取つては『意外』であり、勞働者にとつては當然な波紋を惹き起した。

鐘紡は戰時以來、勞働者に對しては本給の七割、事務員に對しては本給の六割を戰時手當の名で支給してゐたが、今回の發表により、右の戰時手當は全廢され、新たに三割の割增手當を支給することゝなつた。會社側の言ひ分によれば、元來、戰時手當は戰時物價騰貴時代に支給したものだから、物價の下落した今日、これを減額するのは當然なのである。この言ひ分が當然であるか否かは暫くおき、この獨斷的な賃銀減額を正當化する言ひ分のうちにも、資本家側によつて常用せられてゐる賃銀支拂方法における不合理の一端が暴露せられてゐる。若し會社側の言ひ分が眞實だとすれば、戰時手當なるものは、戰時における法外的な利益の處分として、例へば重役に分配せられた餘分の賞與金などゝ同一性質のものでは決してない。會社自ら云つてゐるように、そして會社が今日、それを以つて獨斷的な減額を正當化する理由にしてゐるように、戰時手當なるものは、生活費の騰貴に應じて支拂はれたものであつて、言葉を換へて云へば、勞働力を維持し再生產するための費用の增加に對して支拂はれた代金、即ち賃銀以外の何ものでもないといふことになる。しかるに會社は、賃銀の一部分を、賃銀としては支拂はないで、例外的な恩惠でゞもあるかのように聞へる戰時手當の名を以つて支拂つて來た。かように會社は、生活費の昂騰につれて、當然に本給を增額すべきところを增額しないで、これを『手當』として留保した。そして本給ではなくて手當であればこそ、會社は本給の場合よりも一そう容易に、一そう尤らしい外觀と口實の下に純然たる一方的な『內示』によつて、これを減額する便利を得る。鐘紡が七割の戰時手當の代りに新たに支給しようとする三割の手當をも、これを三割の賃銀增額とはしないで、依然として割增手當としておかうとする根據も、同じくそこにある。かういふトリックは、現に賃銀支拂方法の上に行はれてゐる多くの欺瞞のうちの、僅かに一つの場合に過ぎぬ。

その名目が戰時手當であらうとも割增手當であらうとも、勞働者に取つては、これらの手當を加算したものによつて、初めて最低生活賃銀が出來上つてゐるのであつて、本給と名づける部分から控除せられると手當と名づける部分から控除せられるとを問はず、均しく賃銀の減額であり、均しく生活標準の低下であり、均しく生活そのものゝ切り詰めなのである。尤も鐘紡の場合は、本給に對する差引四割の手當の減額であつて、勞働者の實際收入差約二割三分五厘の減額となると云はれてゐる。賃銀が、一擧に二割三分の減額に逢ふことは、勞働者

の生活にとつては容易ならぬ壓迫であつて、決して大なる苦痛でないとは云はれない。けれども二割三分といふ數字のみについて云ふならば、多くの、工場ごとに基礎の薄弱な中小の企業にあつては、種々なる方法で、その實收入が二割を減じてゐる場合は少なくない。また多くの產業部門の勞働者は、名目上は同一の賃銀率を維持しつゝも、實收においては、二割もしくはそれ以上の減額に逢つてゐるものさへも珍らしくないと云ひ得られる。

そこで鐘紡の賃銀減額が、人心に異常な衝動を與へたのは、その減額は二割三分でも、その全意義は、二割三分よりも遙かに高率に評價せられた爲めにほかならぬ。そしてその主たる理由は、云ふまでもなく、わが國の產業界における紡績業の地位と、紡績業における鐘紡の地位とによるものであつた。

何人もがまづ第一に注意したことは、鐘ヶ淵紡績が、わが國の諸會社中、その基礎においても、その營業成績においても、最も優良な代表的な大會社として、戰時および戰後を通じて高率の利益配當を行ひ、現に戰時の好景氣が昔の夢となり、紡績業は操業短縮によつて僅かに存在をつづけてゐる筈の今日も、依然として三割五分といふ最高率の配當を行つてゐるばかりでなく、最近には、武藤前社長の退職に對して、三百萬圓といふ莫大な慰勞金を投げ出したほどの營業狀態にある大企業だといふことであつた。かゝる基礎の上に立ち、かゝる營業成績を擧げてゐる企業が、利益配當には一指をも染めないで、まづ勞働者の生活低下を強制したのだから、沒落に瀕した小企業や、不景氣と大資本との挾擊に壓搾されつゝある基礎の薄弱な工場主が、賃銀二割の減額を企てたのとは、おのづから事情が異つてゐる。個々の企業家や工場主の事情と場合とについて云ふならば、その賃銀減額は、少くとも彼らの立場からは止むを得ざる最後の手段として、生存の唯一の方法として行はれたと見られる場合が少くない。ところが鐘紡の場合はそうでない。何人といへども、鐘紡が生存の必要に迫られて、唯一の活路として戰時手當の廢止を斷行したと說明する者はない。

鐘紡の賃銀減額が二割三分以上に評價せられる第二の理由は、紡績業における鐘紡の指導的な地位である。この點では、鐘紡の減給は紡績業全般に企圖せられてゐる賃銀減額の大勢を作り出すために、紡績業者の了解の下に行はれたとさへも疑はれてゐるほどであつて、その基礎においてもその業績においても、鐘紡以下の水準にある多くの紡績業が、これによつて賃銀減額の口實ときつかけとを與へられることは、云ふまでもない。現に一二の紡織會社は、鐘紡にならつて既に減給を發表したと傳へられてゐる。

一企業に屬する三萬五千の從業者に對し、一齊に賃銀減額が宣告せられたことは、たゞそれだけでも、わが國においては既に稀有の勞働問題であるが、その實は、たゞに三萬五千の勞働者の問題ではなくて紡織產業百三十萬の勞働者の問題である。紡織產業勞働者は、深夜業撤廢の實施によつて、女工は平均一割の賃銀減額を蒙つてゐる。婦

人勞働の保護を唯一の理由とし、そして婦人勞働の保護のために必要缺くべからざる深夜業撤廢の如き施設でさへ、資本主義の濾過器を通過するうちには、婦人勞働の搾取を增大する一つの手段に變質する。かうしてわが國の紡績資本は、深夜業撤廢によつて人道の擁護者となつた上、その代償の全額は、勞働の强度の增大と賃銀の減收とによつて女工の懷から徴收した。その通りに、彼らは不景氣の深刻化と內地需要の減退、帝國主義的關稅戰による海外市場の閉塞などから豫想せられる事業の不振と利潤の減少とを、百三十萬の勞働者の生命の緊縮によつて埋め合せようとする。云ふまでもなく株主には三割五分の配當を保證し、そして勞働に對する攻擊の殊勳者には、三百萬圓の慰勞金を呈上するために。

けれども纎維工業百三十萬の勞働者の賃銀が一般的に低下したならば、その影響は、すべての產業部門に波及する。鐘紡が紡織產業のうちに指導的な地位を占めてゐる以上の度合をもつて、全工場勞働者の七三％を占める纎維工業は、今日なほ、わが國の工業のうちに壓倒的に重要な割合を占めてゐるからである。かように鐘紡の減給實行は、全勞働者の賃銀に對する一齊攻擊の合圖と見ることもできる。かうして鐘ヶ淵紡績は、濱口內閣が範を垂れそこねたところのことを、資本家自らの手によつて、直ちに實現しようとするものであつて、勞働階級が異常の衝動を感じたのは當然であつた。

この新たな資本の進擊に對して、勞働階級がどのように反應するかは、注目に値ひする。すべての勞働階級は無產諸派と呼應して、對抗の運動を始めてゐる。かうした勞働組合運動の活潑な行動は久しく見られなかつたところであつて、殆んど假睡の狀態に陷入つてゐるかの如くに見えた運動は、この衝戟によつて、一時に喚び醒まされた觀がある。鐘紡減給問題を動機として、產業合理化をめぐる資本と勞働の一大接戰の展開を見ることも、必ずしも豫期せられぬことではない。それと同時に、若しこの鬪爭が有利に展開せられたなら、それは第一には、資本の攻勢の馬蹄の下に踏みにぢられ、久しく萎靡沈滯した組合運動がその陣容を恢復し、その組織を擴大强化する機會となり第二には、經濟鬪爭における戰線の統一を實現する絕好の機會となり、第三には、組合運動と政黨運動との間に、正しい關係を確立する機會ともなることができるだらう。

鐘紡問題は、謂ゆる溫情主義、家族主義なるもの丶當然の破綻を曝露したものとしても意義がある。鐘紡は多年の間、その溫情主義家族主義なるものによつて、使用勞働者が組合を組織することさへも阻止してゐた。けれども資本にとつては、利潤ほど合理なものはない。溫情主義家族主義の代表者たる鐘紡が、利潤擁護の必要の前には、最も溫かな溫情をもつて、家族の生命を切り詰める第一の勇者となることを辭しなかつたことは、溫情主義家族主義等々の封建思想と封建關係とによつて近代資本と勞働の關係を支配しようとする時代錯誤が、鐘紡自らによつて『合理化』されたことをも意味してゐる。

緊張せる教育問題とその分析

杉森孝次郎

一

教育問題は、目下、世界的に緊張しつゝある。教育が、その存在理由をいま一と度び問はれ始めた。

勿論、その一極にはロシヤがある。そこにては、教育は他の最も多く乃至すべての國家的社會の場合と對比して斷然殊別的なる位置、随つてまた内容を示す。ロシヤの現在の教育はその曠古的なる、無比的なる社會的アツプヒーヴルの直後の政治的第一方法そのものとしての意義をむしろ持つ。現在のロシヤは、その直接行動によつて獲得せる形態的新地歩をば、間接行動によつて安確化することをそれの自然的、及び當然的最急務として見いだす。その間接行動は、しかし勿論、教育だ。かくして、現在のロシヤに於いては、教育と政治とは全然一體化してゐる。そこには政治卽教育、教育卽政治のユニークなる段階が出現してゐる。そこにては、教育と政治との間に寸分の隙もない。しかし、この位置は平凡なるものでは勿論ないが、無問題的なるもの、批議を超絶したものでも決してない。なぜなら、政治と教育とは、究竟の見地からして、その社會的存在理由を異にする。されば、現在のロシヤに於けるほどの政教一致は、要するに教育が政治の手段位に、よしその意識は教育當事者にさへないとしても、決定されてゐることを意味する。

けれども、現在のロシヤの場合は特絶だ。そこにては、政治が實は宗教だ。そして、そこにては教育がまた完全に一つの、いな唯一の宗教だ。政治としてそこに觀ゆるところのものは決して、普通の意味に於いての政治ではなく、眞の意味に於いての宗教であるのだ。同様に、教育としてそこに觀ゆるところのものも決して尋常の意味に於いての教育ではなく、眞の意味に於いての宗教であるのだ。それ宗教はすべてを還沒す。現在のロシヤが、いかにその語の最も正しき一適用に隨うて宗教的狀態そのものであるかを明認しうる何人もが、その政治と教育との間なる無類の一致的關係をば、その宗教の宗教的價値を問はずに直ちに評價し去り、批判し去ることの非論理を知るに困難しない

であらう。

二

ロシヤは、産業革命を最も遅ればせに開始し、その代はり、それの將來的なる史的、論理的歸結を最も先き廻はりして制するものである。先進産業國のすべてが、それぞれの事情によるそれぞれの仕方に於いてではあるが、要するに小だしに、なし崩し的に、隨つてまた比較的には無意識的に、卽ち「社會政策」的なる方法によつて、ひまをかけて達成するところのもの、達成しつつあるところのものをロシヤは一氣に、組織的に、計畫的に、克服、獲得せんとするものである。これはその憲法を見て最も顯著なるものであるが、その基調と特徴は教育の方面にも鮮明、確實に自然、あらはれてゐる。

現在に於いて最も宗教的なるものはロシヤだ。されば、ロシヤ以外の最も多くの國家的社會に於いては、教育の位置はやはりいちじるしく緊張を始め、または增しつつあるが、それは、程度に於いても、種類に於いても、ロシヤに於いてのものとは全く異る。ロシヤ以外の産業發達國に於いては、教育は必要なる、適正なる、當然なる社會的變化をすこしでも前進させるため、招來するための要具としての位置を期待される。ロシヤの善後的なるに比して、その語の或意味に於いて準備的である。準備的とは、ヴイオレンスを目的とするものではない。そのさきの結果を、それが善なるものである限り、より進んだものである限り、それをこそ目的とするものでそれはあつて、教育は教育であるが故にそのヴイオレンスに對しては飽くまで否定的態度を取る。

しかし、多くの産業發達國に於いて、教育が期待される正當なる社會變化の準備または行動は甚だ幻滅的だ。そこにては、教育は餘りにも酷に、また教育の方だけを注視すれば餘りにも無力に、無抵抗的に、古きレジームの爪牙、御用、いなむしろ奴隷的寄生物以外のものでない概がある。わが國についていへば、いはゆる思想善導、教化總動員の如きはその反映現象に屬するものであるが、その弱點は、勿論、もつと直接に學校體系そのものの世界內、その社會的コンテクストの內に大きく存在する。

勿論、教育は、これを最も科學的に定義するならば、一つの可能的習性にむかつて、外部から意識的に或形式を與ふる行動以外のものではない。されば、いかに古きレジームの手段としてのものであつても、それが人間の習性を意識的にその方向に決定するものである限り、それは教育だ。しかし、この定義は極めてポジチヴなるものだ。徹底的、または規範的見地からすれば、教育は、いな教育も他の多くのものと共に、社會的であらねばならぬから、その習性形式の意識的努力乃至行動は、その意識的部分に於いて十分に社會的であることを必要とする。それは利己的なるいかなる個人主義たることをも、集團主義たることをも、隨つて階級主義たることをも許さない。個人のことばに於いてはその個人の最も自然的なる、卽ち最も當然的なる在り

かたを目的として教育はその習性形式に從事するものであり、いかなる集團のことばに於いても同樣にさうだ。かくして、人格の完成、または文化の進步的保存、卽ち個人または集團の可能的最高限に於ける進步的、進化的保存が教育の目的であるほかない、その目的行動が教育だといふ教育に對する徹底的または結論的定義が成り立つ。されば、いはゆる思想善導や教化總動員の過去の業績と事實とが反映または證示する如きものは、眞の教育からは下方に遠ざかつたもの、外方にそれたものであると見ねばならぬ部分を多大に持つものであるのだ。

　古きレジームは、それの原則に於いて、イデオロギーに於いて、心的傾向及び組成に於いて多分に、餘りに多分に利己的だ。それは生產主義であるよりも消費主義だ。けれども、消費主義は利己的反社會的であり社會的なるものは生產主義のほかにはない。

三

　最近わが文部省によつて發表されたる、そして多くの新聞紙上に「中等實業教育の實際化的、隨つてまた一面に於いて地方化的大革新」とやうに報述さるるものは、教育の從來の消費主義から新らしき生產主義への轉向を、その深さと規模はどんなに限られたるものであらうとも、傾向とするものである。

　何が文部省をしてこの擧にいでしめたか。そこに含まれてゐるであらう個人的なる、及び黨派的なる事情や、歷史や、行きがかりや、動機等をば問はず、專らその社會的關係を問題とするならば、そしてこれが最も重要なる關心をわれらにとつては必然構成するが、さうするならば、それは實に世界の、すくなくとも進步的なる世界の大勢を反映する一現象にほかならない。勿論、四周を觀望して、消費主義教育から生產主義教育への最も斷然たる變革を示すものとしてロシヤがある。アメリカ、ドイツ、いなむしろドイツ、アメリカの順に於いて、同一傾向の多少とも顯著なるものがある。勿論、この點に於けるロシヤとアメリカとの差はむしろ程度的を超えて性質的にいちじるしい。前者に於いて中心的努力であるものが後者に於ては末梢的努力以上のものではなく、後者に於ける中心的實在は前者に於いてはそれの原始的發達期にむかつて既に根絕的に截斷されてゐる。ロシヤとアメリカの似て而して異なる對比は、前者の「コムプレクス、システム」と後者の「プロジエクト、メソッド」とを比較觀察して見ても明白であることは、デユーイーの「サーヴェット、ロシヤの印象」（九八―一〇三）等にも注意されてゐるが、この聰明なるアメリカの教育者の視察報告を待たずして既に十分に明白なることである。

　要點は、現在のアメリカは中心的にはどんなに消費主義的なるものを持つてゐやうとも、そのアメリカの批判的愛國者たる一人デユーイーの如きは、その點について斷然アメリカに滿足せず、ロシヤに刺戟と暗示と先進的實驗の甚だ有價なるものを確認してゐるといふ事實は、現代または今日がいかに消費主義から生產主義への必要を、教育が勿

論除外されずに、汎通的に發達させつゝあるかを反映してゐるかにある。

日本の場合を見るに、同時に左手に「教化總動員」を提唱または企畫しながら、右手に教育の實際化または「社會的有用」(これは日本の場合を指示する引用符ではない)化を立法する程度のものであるが故に、それは、中心的には甚だ消費主義的なるものを持つ。それ故にまた、その實際化は文字通りに末梢的なる特徵を擺脫しない、その弱點の自然の現はれの一は、既に世間の識者の屢なる指摘と注意を受けたる、即ち一昨年(一九二八)から昨年へかけて問題となつた中學改善案にある。それは勿論、田中內閣當時の出來事であつた。今度の中等實業教育擴充案は、しかしまた勿論、現在の文部省が、あるひは文相が、一とたび前文相(小橋)によつて反故にされたる前內閣案を實質的に復活せんとするものにほかならない。私自身は、その問題の初發に際して、例へば「中央公論」一九二八年十一月號に於て、「問題の中學改善案を論評す」と題し、劈頭、「二年の錯位」と小題し、

二年までは、すべての生徒を一樣に敎育し、三年から上を二種にわける點に先づ注意する。

最初の二學年の畫一的教育は個性發見に到達するまでの類性教育の段階であることは「第一學年及第二學年に於て所定の學科を一樣に必修せしむるは心理發達の程度を顧慮したる結果にして、且此の期間に於て各生徒の知能、趣味、特長等を調査し之に基づきて第三學年以上の學習を有效適切に指導せんが爲なり」(「國民」今年九月十二日)と、當の調査委員會が明白に自認してゐる事柄でもある。恐らく何人もが氣づくであらう通り、この點に關しては、なぜ小學校を八年に延ばして、中學校の最初の二年を廢用にしないかといふ疑問と遺憾が避けられない。

義務教育としての小學校教育は最も基礎的な、その意味に於いて最も綜合的なものであることを條件として、社會人の類性完成の過程に於ける最初の一段階であらねばならん。すでに義務教育としての小學校の發達した制度を有するわが日本の社會の如きにあつては、類性完成の最初的段階を途中で斷絕し、中學の二年を經過して始めてそれがものになるやうな制度を保守または更設することは甚だ不賢明だ。この機會にも、義務教育延長の必要と、それを姑息、等閑、怠慢に附することの罪惡とは酷烈に感ぜられる。今度の案も、それが政府側から出たものであり、大膽なる制度改善をもつて自ら任じ、他から目せらるるが如きものでありながら、その折角の改制案が、劈頭第一に、小學校の內容的未完成を依然保守する性質のものであることは、一つの大きな不注意であるばかりでなく、無責任だとさへいへる。

その上さらに二年の中學教育をうけないでは、小供の將來の志望、選擇、方途が、教育者から見て何分きめられないと概略わかつてゐながら、義務教育をその二年前に斷絕することは、國家として、一つの無責任でなくてなにか。小學校卒業者にして中學校入學を、家の貧ゆゑに、單に志願することすら最初から絕望する幼少國民の數が、入學者に比して、壓倒的に大である現實の眼前に置いて、またそれを眼前に置いて、その無責任は殊に强大だ。

と言說した。今日に於いて、客觀的事實が改まらず、私自身のそれに

對する批判も變はらない。

生産主義に徹底しないが故に、中學の最初の二年と、高等小學と、尋常小學即ち義務教育のその以前に於ける斷絶即ち終了とが意味する混雜、無統一がありうるのだと、一面から批評することは十分に事實に妥當する。

現在の尋常小學校そのものが、もつと生産主義化される餘地があるが、現在の高等小學（原田實「中學校は自殺する」參照、今年四月「中央公論」）を、また實業的補習學校を斷然小學の體系內に取り入れて、小學校即ち普遍的、義務的教育を充實する必要がある。小學校は義務的國民教育であるのだから、その小學校の存在理由の見地からして、これは必要な改革であるといはねばならん。それは國家の責任に屬するものだとさへいひうる。

四

教育の社會的有用化は勿論今日に始まつた必要ではない。私自身は、例へば「教育の根本問題」（一九二八年五月「改造」）に於いて、當時の事情に即してその見地を展開したことがある。當時と今日と、事情はほとんど同一だ。ただそこに多少の變化があつたとすれば、同一事情の緊張化以外のものではない。一九二八年末に發表されたる、田中內閣の「中學改善案」の如きものは、直接にはいはゆる試驗地獄救濟の必要に刺戟されたものでもあつたのだが、今日に及んでは事情と意識はもつと進展した。試驗地獄は依然として存在するが、これは要するに浮層的現象である。現在、尋常小學卒業を待つて不完全ながら、いな過酷ながら勤勞に沒頭せしめられず、進んで上級の、義務以上の教育機關を利用しうるものはむしろ大體に於いては特權階級に屬する。現在に於いては、就職難の極度の緊張と、不景氣とが教育の社會的有用化を、實際化を、最も直接に刺戟する。もつとも、その實際化の方は、現在の支配階級及び特權階級の側に於ける「左傾」または「危險思想」の豫防的及び制止的一策としての意義をも、分析心理學的には、有する。いな現象的、意識的にさへも有する。勿論、これは特にわが國の近狀を材料としての言だ。そして、この點が關する限り、現在の青年男女、殊に大學、專門學校、高等學校程度のものが、その學生が「社會科學」的急潮に、あるひは流行に埋心しつつある現象は、決して一概に感心すべき性質のものではないが、さりとて、當局や特權階級、支配階級のそれに對する觀察と對策とは、それ以上にさへ感心のできないものである場合が壓倒的、代表的だ。

もとより「社會科學」が、それの研究が、眞に社會科學の研究であるならば、現在に於いて、また當瞬間に於いて、これよりも必要なるもの、急要なるものはない。學生の側に於ける不健全または不聰明は、それが社會科學でないところにある。それがそれでない限りに於いてその批難すべき不健全または不聰明があるのだ。それ以外にはそれは決して求められない。よく世間に見聞されるやうな、研究はよいが行動

はわるい、行動化がわるいのだといふ見解も全然不聰明なるものだ。善き思想である限り、正しき認識である限り、これに隨つて行動しないことは不自然でもあるが、それよりも第一にそれは不道徳だ。行動がわるい場合、行動化がわるい場合は、その行動に移される思想そのものがわるい場合、行動化される認識そのものがただ名に於いて認識であり實に於いては決して認識でない場合に限る。それがミスであり、迷信であり、利己的または集團的妄想である場合にそれは限る。眞正なる社會認識、社會科學、これよりも必要なるものは現在に於いて斷じて絶無だ。

五

然らば、何が學生をして社會認識を、社會科學を、眞正なる形に於いてのそれを、持たしめないか。それを妨ぐるものは何か。この一問を與こす時、それに對する正しき答へは、當然、日本の場合にあつて、教育にその一大原因が存するといふにある。

わが小學校を見よ。またそれの直接延長たる中等諸學校を見よ。いなすべての學校を見よ。しかし、なかんづく、義務、即ち強制を條件とする、そして比較的最低齡期を内容とする小學校を見よ。次ぎに中等諸學校を見よ。そこには根本的非啓蒙主義、反開明主義の甚だしいものが存しないか。オブスキューランチズムが存しないか。そして、そのオブスキューランチズムが強絶なる政治的權威主義を、オーソリテリアニズムを背景としてゐないか。純眞なる、無垢なる、無邪氣なる、そして最も深烈に求知的なる、愛眞的なる、うらわかき男女の、女男のたましひをば、その最も敏感なる、そして習性づけられやすき時期に、年代にあたつて、頑冥なる、「教育」政治的教育の犠牲にしてしまふ。天下これよりも殘酷なる所業も、行爲もないのだが、それがわが國の教育にある。

人間は習性の動物だ。いな、人間さへもが習性の機械の如きものだ。その習性は、勿論、年わかきうちに最も容易に形成される。そして、最も早く造られたる習性ほど、最も深く根を張つて、最も久しく、そして有力にその人を決定、内部から不可抗的に、無意識的に、超意識的に決定する。これは心理學的事實だ。わが國に於いて、小學時代の芽生えに際して、聰明または習性の初期に際して、求知、愛眞を斷然妨ぐる制度ありとせば、それがその年少者の後年に及ぼす影響がいかなるものであるほかないかは豫認することができる。それは、輕信、妄信、斷信、即ち淺く知つて深く信ずる習性以外のものではありえない。それは考へない習性以外のものではありえない。それは認識しない習性以外のものではありえない。それは萬事を、信ずる限りの萬事をば、數的、量的、力的、要するに、外在的なる優越、絶大、權威によつてのみさうする習性以外のものではありえない。質によつて信、不信するといふ習性は、その事情下には決して發達しない。けれども、これよりもなげかはしい事が世にあるだらうか。斷じて否。」

六

よくミリタリズムといふ評言、批語を見聞するが、この語の或眞義は、日本の教育の或側面をさながら照らす力を持つ。軍國主義、武斷主義、野蠻主義等とこれを換語することはこの場合自由だが、これが日本の教育にある。それがそこにあるといふのは、結果からいへば、いはゆる左傾思想學生にも、社會科學學生にもそれが強く、深く、支配的なる力を發揮しつつ存することをも意味する。小學時代、中學、高等女學校時代に、淺く考へ、狹く知り、そして全人格的に、信仰的に、宗教的に、絕對的に信ぜしめられたる習性が、高等學校へ進んでも、大學へは入つても、至極强壯に生き延びてゐて、いなむしろ、年と共に成長したるお伽噺の意地わるき蛇の惡魔の瘡傷(?)の如く、巨大化すると共に惡化さへしてゐて、そしてそれは陰險に、內攻さへしてゐて、當人は疾うに克服したつもりのそれに、舊習性いな舊思想に、舊意識に、その語の或意味に於いては實質的には相變はらずまたは發達的に、またその語の或意味に於いては形式的に依然またはますます、操縱、支配されつつある。かれらは新酒を舊革に盛りつつある。軍國主義を否定するかれらが習性の深處に於いてそれの異名稱、異現象、異材料的なる、たゞそれだけの差を有する、肯定者である。軍國主義とは何か。それは唯物辨證法的なる一つのものだ。それは認識または關心の對象物たる一全體に、或または一つだけすらもの不滿足を、當方にとつての不滿足を發見すれば、それを克服するための必要に驅られてその全體を否定する思想、認識、行動以外のものではない。批難される場合の軍國主義の正體はこれ以外のものでは決してない。斯く觀じ來たれば、われらは、日本の正統教育左傾學生を必然產出すと、春秋の筆法とやらにかなふか否かは別として記述する科學的自由を持つ。小學教育、中學及び高等女學校教育と「社會科學」學生との間には實に單純なる、ただ極めて單純に複雜なる、即ち容易に見透かしえられる因果關係があると確說することができる。

更にまた、教育上に於ける反開明主義が絕大の權力、制裁力をもつて常在する社會に於いては、いやしくも正當なる、即ち眞に必要なる變化を、即ち進化、進步を意識する人々としては、唯物辨證法的方法以外のいかなる方法にもたよりえない理由が十分にある。一九一七年に先行せる約一世紀間のロシヤはただその一例に過ぎない。十九世紀の歐洲大陸諸國は變革を持つたのに、獨り英國がそれなしで、しかも進步を犧牲とせずに生き延びたのは、十七世紀の變革に敎へられて自由主義を新興させたからであつたことは、また通則の一例に過ぎない。

七

論じてここに來たれば、いはば社會的規模に於ける方、法に於ける、行動心理學主義、「ソーシャル、ビヘーギアリズム」の教育的見地から

なる急務、必要はわが國に於いても、むしろわが國に於いてこそ特に非常に強く主張されねばならぬ理由が再、再々認される。教育は實に社會內容または社會機能內の一つのものに過ぎない。殊に形式的、制度的教育、即ち學校教育に於いてその制限はいちじるしい。實に、制度的教育は全然官許的、國營的と見られうる。綜合的、代表的にいへば政治だが、分析的にいへば經濟、產業、家庭を首めとして種々なる、すべての社會的なるもの、制度及びイデオロギーが、教育を外部から制約する。コンヂションする。習性づける。

　されば、教育を改正せんとする努力は、それがすこしでも徹底的なものであるためには、孤立的努力であることをば絕對的に許されない。校內、教室內から周圍の大社會を、それの政治を、經濟を、產業を、家庭を感化、啓蒙、教導、改作することは全然不可能では勿論ないが、同時に政治改善、經濟、產業、家庭の改善を追求する複雜なる方法、私自身の用語に隨へば綜合的なる方法を積極的に取る必要は絕對的だ。そのためには個人的努力と、集團的努力と、輿論喚起と、ことごとく必要だ。個人的努力も必要だ。正しきことをば一人でもなす、天下を敵として戰ひ取るといふ個人的態度が先づないならば、人だのみ、單なる集團主義の個人がどんなに多勢に結合したところで成績は決して優質なるものではありえない。それは盲動的强力をば生じうるが聰明なる强力をば生じえない。されば、機械時代に入つてなほ且つ、いな實に機械時代に入つていよ〳〵、この點は力說、高調、宣傳される必要を持つ。しかし、それと共に、組合主義、結社主義、同志一團主義はもとより絕對的に必要だ。これは實に機械時代の認識から來る直接の範疇命令だ。

　社會內なるおの〳〵のもの、すべてのものは、正しき意味に於いてそれの政治化を獲得するまでは、決してそれ自身でありえない必然の約束がある。なぜなら、政治は、それがどんなに善き政治であらうが、惡しき政治であらうが、事實として、社會統營の行動そのものだ。しかも政治は、とにかくその社會內の、政治よりも一層基礎的、原料的、實質的、創造的、獨自的、根本的なるものに出發する。されば、教育に例を求めていふならば、政治は、どの途、なんらかの形に於いて、或教育をば肯定する。故に、一つの教育または、教育意識は、あるひは意思は、それがたま〳〵その政治によつて現に肯定されてゐるものであるならば――ロシヤのやうに――文句はないが、然らざるすべての場合、その教育は敢然として現存の異端を克服し、それ自身の政治を持つ、換言するならばそれ自身を肯定する政治を造る必要がある。さうでないならば、その教育は自信なきもの、無責任なるものであるのだ。即ちそれは教育としての自覺なきもの實は教育でないものであるのだ。

　教育者にはまた何人も教育者たる自覺に於いては、その自覺に立つ限り、右の形に於ける政治的意思あることを當然とし、必要とする。わが現在の教育者の世界に、どれほどこれの發達があると見るべきか。

八

教員減俸運動が目下進行中だ。いはゆる異動の大規模なる發現がこれと關聯してある。それの直接の刺戟はもとより經濟的なるものだ。間接にはそこに政黨的背景等がいくらかあるとしてもだ。

現代は經濟時代だ。産業時代だ。産業を中心とする經濟制度、慣行にしても反教育的なるものがあるならば、それを改作する責任と必要は教育者、教育意識者の上に絶對的强度に於いて存する。されば、例へば教員減俸運動に當面しても、教育者自身が、ただ自己の利益を保護するの念のみに終始するならば、かれらはその限られたる目的をすら達成することはできない。それでは自分さへよければ問題はないといふことになる。現存の、卽ち教育及教育當事者を圍繞する經濟組織そのもの、産業制度そのものが、不正當なるものを持つならば、一般的に、卽ち社會的に、その不正當を克服する意思が教育者にもなくてはならん。教育者自身の場合は、直接にかれらの收入に關する場合は、その通則の一例として認識され、評價されねばならん。金融資本主義の世界に於ける根本的に不都合なる現象をば發見さるるにまかせて克服する態度なしでは、社會的ではないが故に社會はその運動者に助力しない。

教育者の存在理由は、その可能に於いて、極めて積極的なものであるが故に、財的にもかれらは厚遇されべき理由がある。現在に於ける教育者の自卑と他から受くる輕蔑とはその財的事情に一理由を持つ。一品性及び知能に於いて優秀なるものが進んで教員たらんと努力するやうでなくてはおもしろくないが、それには教員の物的待遇をも高める必要があることは言を待たない。社會が、すくなくとも自國的社會が一般に貧であるならば、教育者が獨り富を享樂することはよろしくないが、他に多大なる寄生的または搾取的富者が存する限り、それを許容しながら、肯定しながら社會的に有用なる生活に、事業に勤勉する自分たちだけが貧に甘んずることは消極的ながら不正だ。教育者自身も、周圍の正しき人々も、教育者をいぢめるよりも先務的なる對象物が存することをば忘れてはならん。

しかしながら、問題は第一に人だ。形式的に、名稱的に教育者であつても、それこそ碌でもないものがすくなくない。これらのものを一掃する必要は急を告げてゐる。制度の形式が整つても、改正されても、その局に當たる人が粗末であつては浪費に過ぎない。教育者の厚遇は必要である。しかしそれは教育者たる實質的資格ある教育者を條件としての話だ。輓近、人の問題が過去に閑却されてゐる。

九

人といへば、教育界に於ける教育者としての人が再求される必要があるのみならず、被教育者、卒業者が、殊に大學の場合に於いて、甚だ歴就職の不適者だ。これは、かれらがあらゆる意味に於いて無能者

であるわけでは決してない。準備と目的との間に不一致があるのだ。今日のいはゆる法文科を卒業して必ず就職しうるを望むことは、そして多くの場合それが失敗に終はることは、社會がわるいからばかりでなしに、卒業者自身としても認識の不足を意味する行動であると評せねばならん。現代がいかなる社會であるかをば彼等は知つてゐる筈だ。斯の如き社會に就職しうるための準備として、彼等が大學に於いて修得せらるものは果たして正直に有資格なるものであるか。例へば哲學を見よ。例へば經濟學を見よ。大學が主として教授するところのそれらを見よ。何人も思ひあたる節が多少、否過多に存せねばならん。

中學校の最近に於ける危機的、あるひは沒落的形勢は、實は、大學教育の失敗を反映する現象以外のものではない。その事理は簡明だ。中學は職業教育の場所ではない。中學は大學の豫備校に屬するものにほかならない。その大學の卒業者が近時いよ〱生活場裡に於ける不適者たることが明證されて來たが故に、中學の存在理由が問はれ始めたのだ。目的そのものが否定されて來たのだから、手段が否定されるのはあたり前だ。

今日、大學教育なるものは實に浪費的なる部分を含んでゐる。印刷と交通が發達した事情下に、大學の、すくなくとも法文科的方面、社會科學的方面は、組織に於いて、方法に於いて、材料に於いて、概ね舊態依然ではないか。社會の無知と無自覺を條件として、或種の寄生的及び搾取的行動に、小規模ながら耽りつつあることが今日の大學の或性質だと評することができる。

中等學校は目下、社會的に有用なる教育をスローガンとして姑息的にながら改正されんとしてゐる。しかし、その企てさへもが、大學を問題としないことは、これまた權威主義、事大主義の一つの現はれにほかならない。大魚は常に逸せられる。原則なき、原則意識なき國民の不斷の悲哀だ。

十

教育の實驗主義化が、原則としても、方法としても深く要求される。これについては、前記「教育の根本問題」その他に於いて私は屢說した關係もあり、ここには省く。ただ、日本人の短所は原則意識の缺乏にある。實驗主義は、正しき原則意識を第一要件とする。さうでないならばそれは目的なき手段同然の制限物だ。原則意識はいはばイデオロギーだ。正しきイデオロギーが、教育の場合に於いても、いな教育の場合に於いてこそ特に最も、目下日本が必要とする、必要として求むべき第一物だ。そのイデオロギーについては、私はその大部分をば私の平素の發表に代理させる。

教育と階級の問題、營利主義による學校興設の風潮に對する批判、最近の心理學の新發達と教育との關係、小學校以前の男女兒と教育との問題、教員養成機關の問題、教育の可及的立體主義化の問題——今度の文部省案についていへば「實業的知識技能の相關的理解」はこれに關係あるもの、屬するものだ——等々、これらに既述及び既發表に多少の研究と暗示を有するものである。いな、今後の發達的研究を待つていよ〱教育の進步に貢獻すべきものに屬する。目下進展中なる教育意識の、また問題の緊張は、如上の事情を、他のものと共に示す。

政府の軍縮對策是乎非乎

安富正造

一 日英米の協定案

直接的に觀れば日米交渉、その實質は日米英三國いはゆる海洋團（シーグループ）の妥協の基礎として、去る三月十三日午後、米國全權の一人リード氏が若槻首席全權を其宿舍に來訪して手交せる提案は、十五日早朝（ロンドン時間）發電、同夜（日本時間）東京に着電したが、其筋發表に依れば（三月十七日夕刊東京各新聞に現れ後日問題となりし有名なる海軍當局言明に伴ふもの）、右案の要領は次のやうである。

	米國	日本	對米比率
大型巡洋艦	一八〇、〇〇〇	一〇八、四〇〇	六割〇二
輕巡洋艦	一四三、五〇〇	一〇〇、四五〇	七割〇〇
驅逐艦	一五〇、〇〇〇	一〇五、五〇〇	七割〇三
潜水艦	五二、七〇〇	五二、七〇〇	一〇割〇〇
（補助艦合計）	五二六、二〇〇	三六七、〇五〇	六割九七五

但し米國は一九三六年迄に大型巡洋艦十五隻十五萬噸を完成し、殘り三隻は一九三三年以降毎年一隻づゝ起工するも一九三六年以前には完成せしめず、此場合、大巡の比率は完成艦に於て七割二三に相當する。

尚右の外、之と不可分の關係に於て、主力艦の代換建造を一九三六年まで延期し、所謂主力艦建造休日を遵守すると共に、現に保有中の主力艦より、英國五隻、米國三隻、日本一隻（金剛級）を協定成立後十八ヶ月内に廢棄し、英米日の主力艦保有量を十五隻、十五隻、九隻とするは既に意見の一致を見て居り、また航空母艦に就ては未だ具體的の決定に至らないが、一萬噸以下の航空母艦をも華府海軍制限條約に規定せる航空母艦保有量の内に包含させることは殆ど確實である。

主力艦及航空母艦に關する此情勢に於て、補助艦に關する前記三月十三日の提案に對し、我全權團は事態重大なりとして政府に請訓した。之に伴ひ政府の内外に種々の主張あり策動も幾多行はれたが、政府は着電の十五日から算へ十八日目の四月一日に至りて、遂に愼重なる考慮を打切り閣議を決定し、即日上奏を經て回訓した。その全文は公表されるべくも無いけれども、要領は概ね次の如きものである。

一、國際平和と國民負擔輕減の二大見地より政府は原則として請訓原案の數字を承認する。

一、今回の協定は一九三六年迄を以て有效期限とし次回會議を一九三五年に開催することを條約中に明記せしめる。

一、小型巡洋艦對米七割要求に關し我國が次回會議に於て七割要求を主張する權利を留保する。

但し留保の形式方法は全權の自由裁量に依り更に交渉せしむるも其の最後決定には重ねて請訓せしめる。

一、我國の大型巡洋艦中に含む古鷹級（七千百噸、八吋砲裝備）が條約期間内に沈沒又は破壞したる場合には之が代換建造に當り一萬噸級を以てすべき權利を留保する。

一、潜水艦に就き日米英對等（パリチー）の條件にて原案の數字を承認するも此場合我國は一九三三年以降潜水艦の建造工事絶無となり特種の製艦機能を破壞する虞あるが故に此點除外例として妥協案に適當なる部分的修正を要求する。即ち

(イ)若しフランス、イタリーの脱退に因り三國協定に終局し英國の潜水艦保有量を増加することあらば我國もまた之に準ずる。

(ロ)潜水艦保有量を動かすことなくして艦齡十三年の原則に除外例を設け年次を繰上げ廢棄並に代換建造を行ふため若干の潜水艦を協定せしめる。

一、我國の製艦工業能力を維持するため輕巡洋艦及驅逐艦に就きても艦齡を繰上げ代換建造すべき數艦を協定せしめる。

一、制限方式に關する一般協定の一部として驅逐艦の噸數を潜水艦に融通する問題をも此際更に考慮せしめる。

叙上の回訓を受取つた我全權は、四月二日午後（ロンドン時間）、セント・ゼームス宮殿に於て若槻、財部、松平の顔振れで以て、英米の首席全權に本件の最功勞者たるリードを加へたるものと會見し、若槻首席全權より日本政府回訓の内容を説明しその口述覺書を英米側に手交した。覺書の要旨は、新聞電報を綜合するに、左の如く解せられる。

一、主力艦の代換建造を五ヶ年延期すること、英米日の現有主力艦の内五隻、三隻、一隻を夫れ／＼廢棄し且三國の何れも新主力艦を建造すること無く保有量を直ちに十五、十五、九の定數に合致せしむること。

一、一九三六年以後の大型巡洋艦に關しては今回の協定に拘束せられざること。

一、潜水艦の若干は艦齡超過前のものをも廢棄して毎年補造を繼續し工業力を維持すること。又輕巡及驅逐艦に就きても此點考慮すること。

一、今回の條約は存續期限を一九三六年末までと諒解すること。

右の口述覺書に對し、若槻、スチムソン、マクドーナルド三首席全權所持の各通に、これ等三氏が署名したといふ。勿論此事は條約に對する署名調印と同一視するわけに行かないけれども、感激の一場面に

於ける席與として輕蔑することは出來ない。何故なら、確かに「了承」の意義を有するからである。若しこの署名を眞實とすれば、之を誘導したのは我全權團の處置として小さい事乍らお手柄といふべく、且つ我國內の强硬論者が、對內的に又對外的に、揉みに揉んで空氣を震動させた効果は先づ此樣な所に認められる。乍併、よしや署名が虛報にしろ、右の口述覺書に英米が異議を挾まずして、否、當然ではあるが感謝を以て之を受取つた以上、我政府の留保は主義に於て容れられ、玆に日米英に關する限り協定の基礎は確立し、ロンドン海軍會議の最大難關は解放されたのである。

之は同日引續いて催されたる五國首席全權會議に報告された。そして翌三日會合の日米英三國會議には、我方より若槻、財部、松平、米國側よりスチムソン、リード、英國側よりマクドナルド、アレキサンダーの諸全權が出席し、留保條項の細目に就き若槻全權より說明を加へ、特に日本は妥協案の結果として將來工業能力に及ぼす影響が大なるを以て、(一)潛水艦、輕巡洋艦及驅逐艦のうち華府條約以前の艦は代換期を繰上げて建造したきこと、(二)驅逐艦と潛水艦の噸數融通は我國の持論なるを以て此點に重ねて考慮を求むること、(三)七千百噸型の古鷹級は我國に於ける大型巡洋艦(カテゴリー)の一種類なるを以て之が沈沒又は破壞したる場合には代換建造として一萬噸型に改むべきこと、等を協議し結局之を特別專門委員會に附託した。

從つて政府回訓の實行上、我國の全權團が專門委員等と共に交渉を進むべき問題は、大體次の如きものとなつた。

一、條約の有効期限及次回の海軍軍縮會議期日に就ては難問題は無し。

一、大型巡洋艦に關する對米七割要求の留保を明示すべき方法としては、議事錄に留むる程度の一方的宣言を極力回避し、出來得れば條約本文に挿入するか、或は附屬宣言書乃至交換文書に依りて、本條約期間並に其後へ明確なる權利を設定するやうに努めなければならぬ。

一、古鷹級が條約期間內に沈沒又は破壞したる場合に一萬噸型を以て代換すべき留保は我國に極めて重要なる意義を有するだけ夫れだけ他國側に於ては反對理由として妥協案の協定噸數に變更を來たすことを强調すべきは勿論であると覺悟せねばならない。

一、潛水艦に對しては、一九三六年迄に少くも一萬噸(最大型五隻)以上を新規建造し得るため、華府條約以前の潛水艦中數隻を艦齡十二年又はそれ以內に廢棄代換することに協定しなければならぬ。

一、輕巡洋艦に對しては、一九三六年迄に艦齡十六年に達する龍田天龍、球磨、多摩の外に少くも、北上、大井、木曾、長良を加へたる八隻(約三萬七千噸)を繰上げ代換するための協定を要する。

備考。最老齡艦たる利根、筑摩、平戶、矢矧を代換するものは現

に建造中の一萬噸級高雄、愛宕、鳥海、摩耶の筈である（昭和二年度以降繼續費）

一、驅逐艦に對しては、普通の艦齡を超過するもの以外に野風級三隻、神風級九隻、如月級四隻、蓮級二隻、若竹級八隻合計約二萬八千噸中より一九三六年迄に約二萬五千噸を代換するための協定を要する。

一、以上の代換協定に關しては、華府條約の實効發生期日たる一九二三年八月一日を以て境とし、其以前に起工したる諸艦に就き起工の日を起算點として輕巡洋艦は十六年、驅逐艦及潜水艦は十二年を艦齡とするが如き方法を交渉せねばならぬ。

一、驅逐艦より潜水艦への噸數融通を一般制限方式の內に於て主張する必要がある。

一、歐洲殊に英佛間の協定に基き英國の保有勢力に變更を生ずる時は我保有量をも修正し、特に驅逐艦に對する增加量を生ずる場合には之を潜水艦に融通する如く要求せねばならぬ。

右は一專門委員の立場を假に取つて、政府回訓の主旨を貫徹するための考慮であるが、紙面の都合上、一般制限方式の討議經過などを玆に述べ得ざるも、制限方式は根本義として艦種別主義に據り、大巡より輕巡へ、輕巡より驅逐艦への噸數融通は例外的に認められんとする。乍併、小型艦種より大型艦種への融通は許されないことに決してゐる。そして水上艦より潜水艦への融通にも反對論が強く未だ決着してゐないけれども甚だ難境に在る。他方三國協定案の基礎觀念は、融通問題を度外して直接數字に依り釘着けにしようとするものゝ如く思はれる。

二　米國の第三次提案か最終妥協案か

日英米の保有量に關し、先づ米國は去る二月三日から具體的に發動し、二月五日に文書を以て提議するところ有つた。そして二月二十七日松平リード第一次私的會商に於て、リード全權の試案たる形式を以て、米國側の第二次提案が現れた。若し紙面が許すならば、之等第一次、第二次提案の內容と、各の場合に於ける我方の對案とをも此所に檢討したいのであるが、今それを略するとし、爾後松平リード兩全權は、無拘束の自由討議に依り難局の打開を圖るため私的會商を重ね、その第八次に達せる三月十日の協議は殆ど決定的意義を生じ、十二日には若槻全權が齋藤情報部長を伴ひてスチムソン全權と會見し、且同日の松平リード第九次會商には日本の專門委員の或者も交渉に參加したと傳へられて居る。その翌日たる三月十三日午前若槻氏はマクドーナルド英國首席全權と會見し、同日午後リード氏は協定の基礎案を更に若槻全權へ手交したのである。

此案を外務省側に於ては、實質上純然たる米國案と看做さずしてむしろ日米妥協案の意味に解し、請訓の重大さと會議全局の情勢とから判斷して之を最終案と見たやうである。少くも國民一般には然う信せ

られた。今回若槻首席全權の有する自由裁量の餘地は相當に廣大であると聞く。その全權が特に本國政府の決意を促して請訓するに至つたに就ては、(一)此上交渉の餘地無しと認める理由、(二)此程度の妥協ならば甚しく不利に非ずと認める理由、(三)之以上を要求することに依り會議を決裂せしむるとせば其場合の我が利害得失に關する考慮、が備はつてゐなければならぬ。(一)に對しては、リード全權と腹藏なく私的討議を續けて來た松平全權が主として貢獻すべき地位に在る。乍併、同時に他の諸全權及顧問隨員等の智識並に判斷は凝結して日本全權部の空氣を作り、それが若槻氏の判斷を輔けなかつた筈はない。何故なら、日本全權部の精神はバラバラ不統一のものと信じられないから。(二)に對しては、海軍大臣大將たる財部全權及顧問安保大將其他隨員として海軍の俊秀をすぐつて居るのであるから判斷を誤るわけが無い。勿論財部氏は請訓の責任を分擔すべき地位に在る。(三)に至つては專ら若槻氏が大局より達觀すべき問題であるけれども、諸全權及各顧問は此點に關しても首席全權を輔翼しなければならない。特に山川顧問及隨員中の津島財務官は國際人として政治經濟兩方面より若槻氏に貢獻すべき責任がある。之を要するに、我全權から來た請訓は正に事態の重大を告げるものであつた。破壞は建設の基と言ふが、目下我國は此會議を決裂せしめてならぬ事情に在る。

然るに海軍側特に軍令部は、斷じて日米妥協案と看做さず、日米兩全權の自由討議に依て生れたる合意的成案に非ずして、多少日本の主張を斟酌したる一方的提案であつて、なほ交渉の餘地ある米國側の第三次提案に過ぎず、未だ非公式にも帝國全權は之に承認を與へて居ないことを固執した。之では日本外務省と海軍側との不一致を全世界に公表したのみならず、ロンドンに在る日本全權部の內幕を暴露した形にも成る、何か不一致の事情があるかの如く。

海軍の言ふ所も事實に相違ない、何故なら、松平リード會商の結果を文書に認めて持參したのはリード氏であつて、形に於て確かに米國側の提案であるから。そして其內容は松平氏の思ひ通り即ち日本側の主張の儘では無く、米國側から言つてギリギリ結着とするものであるから。

乍併、前記せる三月十日より十三日までの經過を見れば、此提案はホワイト・ハウスとの連絡を取つて居ること疑なく、又、十二月の若槻スチムソン、十三日の若槻マクドーナルドの兩會見が、若槻氏に請訓の重大決意を爲さしめたのに與つて力あるは勿論である。(首席全權としては輕々に請訓出來るものでない。)それ故に外務省側のやうに最終案とも見らるゝ。しかも其內容に於て、日本の三大原則(大巡對米現實七割の確保、潜水艦現有量七萬八千噸維持、補助艦總括對米七割の確保)は其儘盛られてゐないにせよ、華府會議及壽府會議に於て經驗したるところよりは、米國の我國に對する理解は進歩し、或程度まで我要求に步寄りを見せて來たのは、是れ畢竟松平リード私的會商の成果であつて、之を最終案と看做さば、同時に妥協案と言ふも差支へ

ない。

我國は最初より地歩を七割に讓つて居るのだから、國際正義の見地より米國は我主張を鵜呑みにするが宜いとは、一應尤千萬な理屈に聞えるけれども、國際會議に於ては全然他國のみに讓歩を迫り我方の言分のみを貫徹することは不可能である。第三者として觀察すれば、佛國あたりの態度にも無理が見え、伊國側に至りては、其態度に何か下品らしき不快さを感じさせられる點がある。我國としても餘り單調なる押しの一本槍を變化して、實質的に國家の安全を圖るべきである。

海軍側は本會議に際し逸早く七割宣傳を行ひて國民的パッションを煽り、宣傳としては效果を收めたのであるが、實は今更ら引込みが、附かなくなつて居る。乍併、前の宣傳效果に味を占めたか、三月十七日に「海軍當局に言明」なる名の下に、軍令部方面から發せられたる所謂怪文書の事件は、國家を思ふ熱誠を通り越して少しく極端に走り過ぎた感がする。斯くも冷靜を缺きて感情的な末梢神經の現れが世に出づる如きは、何かそこに原因が無くては叶はない。

從來外務省の遣口は官僚主義の餘弊甚しく、出先官憲よりの來電を軍部に秘し隱す例が少くない。之は多年の間軍部殊に參謀本部あたりの干渉に虐め拔かれたことの反映だといふが、何にしても少し大腹中を見せて貰ひたい。松平リード會商に就き、その進行狀況は逐一漏らさず全權部の軍事專門家に報告して之が助言を得たか否か？　又外務省は本件來電を細大好惡とも悉く海軍側に通牒したか否か！　何かそこに蟠りがある如く思はれる。請訓に附帶せる若槻氏の意見が存在するならば、それを讀んで外務省と異る解釋を下す程に物の判らぬ軍部でもあるまい。乍併、首席全權の電報と矛盾する如き意見を財部氏が發電したとすれば、如何に全權の資格と海軍大臣大將の資格と二重なればとて、財部氏の言動は奇怪至極と言はれねばならぬ。又突然として生じたる財部全權歸朝說の如きも、國の内外に疑惑の種子を蒔くものである。

尙交渉の餘地ある米國第三次提案と見るか、或は日米の最終妥協案と解するか、それは要するに、戰爭を理想とし軍備擴張を充實又は充備の名に於て要望する軍部の觀念と、戰爭を回避して平和的、外交的手段に依り國家間の紛爭を解決すべき任務を有する外務省の觀念との衝突に他ならない。蓋し首相としては、軍部側の軍備第一主義の虜と成ることなく、世俗の喜ぶ對外强硬論に囚はるゝこともなく、最高道德たる政治のために最大の犧牲を拂はなければならぬ。彼が、國力に立脚する廣義の國防、財政、產業、國民の生活狀態、國際政局の大勢等を高所大所より見透して、沈吟十數日、遂に外務省側の主旨を取りて最終妥協案を認め、局部的に海軍側の希望條項を回訓中に容れさせたことは此際の處置として至當とすべきものである。

三　國防眞に危きか

四月一日の回訓に就き、海軍省は表面穩從にして其實は所謂三大原

則の實質的維持に底堅き様子を見せ、即日より軍備計畫上新生面の開拓に着眼し、既に或程度の財源保留を要求して居る。その對策としては優秀なる特務艦（制限外）の新規建造、航空隊の擴張、術力の向上及新式兵器の整備等に依る內容充實の如き、施設すべき事業は山程あつて國家がそれ等を消化し得るや否や、むしろ食傷の心配がある。

然るに軍令部側は依然として同訓案反對に低徊して止まず。其言を聽けば我國防は累卵の危きに居るが如く感じさせられる。果して然うであらうか？ 前掲の協定案と對照するため日米の勢力を四種の視角から比較すれば、

（一）一九三〇年三月現有艦船 既成艦及建造命令發布濟のもの

艦種	米國		日本		對米比率
大巡	一三隻	一三〇、〇〇〇	一二隻	一〇八、四〇〇噸	八割三四
輕巡	一〇隻	七〇、五〇〇	二一隻	九八、四一五	一三割九六
驅	二九九隻	三〇七、一五五	一一九隻	一三二、四九五	四割三〇
潛	一一九隻	七六、〇五〇	七一隻	七八、四九六	一〇割三一
合計	四四一隻	五八三、七〇五	二二三隻	四一七、八〇六	七割一六

（二）現有艦船中一九三六年迄に艦齡を超過するもの

艦種	米國		日本		
大巡	―		―		艦齡二十年
輕巡	―		四隻	一六、九六〇	右 同
驅	二六七隻	二七三、五八四	四七隻	三九、二九〇	艦齡十六年
潛	一〇二隻	五三、一〇〇	三三隻	二五、七六八	艦齡十三年
合計	三六九隻	三二六、六八四	八四隻	八二、〇一八	―

（三）現有艦船中一九三六年末に艦齡內のもの

艦種	米國		日本		對米比率
大巡	一三隻	一三〇、〇〇〇	一二隻	一〇八、四〇〇	八割三四
輕巡	一〇隻	七〇、五〇〇	一七隻	八一、四五五	一一割五六
驅	三二隻	三三、五七一	七二隻	九三、二〇五	二七割七四
潛	一七隻	二二、九五〇	三八隻	五二、七二八	二二割九一
合計	七二隻	二五七、〇二一	一三九隻	三三五、七八八	一三割〇七

（四）協定案に依る場合一九三六年迄に建造量

艦種	米國		日本	備考
大巡	五隻	五〇、〇〇〇	―	米國の大巡は內三隻を完成せず
輕巡		七三、〇〇〇	一九、〇〇〇	
驅		一一六、〇〇〇	一二、〇〇〇	
潛		三〇、〇〇〇	―	
合計		二六九、〇〇〇	三一、〇〇〇	

右の四表を査閲すれば、同訓案中に留保せる繰上げ代換建造の必要の理由、米國の既成艦は艦齡古き故現狀に於て實勢力劣弱なるも今後新造に伴ひ有利に轉回する理由、等を容易に見出し得る。が、それと共に國防上の危險は今明日に差迫りて我國へ降り蒐る次第に非ざること、大巡に關しても一九三五年迄我國は對米七割以上を保つこと、從つて問題の對米七割論は現實問題といはんより寧ろ權利上の問題に過ぎないこと、等を之に依り明かにし得らるゝ。

今、大型巡洋艦に就き説明を加ふれば、現在我國の有する既成艦は八隻、六萬八千四百噸、八吋砲六十四門であつて、こゝ兩三年中には十二隻、十萬八千四百噸、八吋砲百四門となる豫定である。之に對し米國は今年内に四隻、四萬噸、八吋砲三十八門を有すべき筈であつて、明年中に八隻、八萬噸、八吋砲七十四門に達し、其後漸次增加して多分一九三四、五年頃に至り十五隻、十五萬噸、八吋砲百三十七門を有することゝ推定される。其餘の三隻、三萬噸、八吋砲多分二十七門は、狀況に因り之を輕巡洋艦に振替へないものでもないが（英米協定の選擇權）、たとへ大型巡洋艦を建造するにせよ、我國との協定に依り一九三三年以降毎年一隻に限り、その完成は一九三六年乃至一九三八年となる。故に一九三五年（昭和十年）末に於て、我國の對米比率は隻數八割、噸數七割二分三厘弱、八吋砲數七割五分九厘である。但し隻數の多いことは同時に比較的小型艦たるを意味し即ち、防禦力、運動力、生活力に不利あるを示す（軍政上から見れば維持費も損）けれども、次期の海軍軍縮會議には此點に妥協の手掛りが存在するやにも思はれる。けだし次の時代の問題は主力艦全廢に相違ないから。

又、潜水艦に就て見れば、我國の主張せる現有七萬八千五百噸と、協定案に示す五萬二千七百噸の出所は前表に明白であるが、軍部の要求する點は其數並であつて、多分實際に戰時の配備を充すための必要と思はるゝ。然らば絕對數さへ得らるれば滿足かと言へば、同時に米國と對等(パリチー)でありたいとも言ふ（會議決裂の場合には此點が對内的にも問題となる。）軍備の相對性に由りて米國と對等でさへあれば五萬二千七百噸で宜いかといへば、七萬八千五百の絕對數は必要であると言ふ。軍部の要求が政治家を惱ますことは概ね此類である。兎に角、協定案に依て廢棄せられんとする二萬五千七百噸の潜水艦は、既に實用價値に乏しい九百噸以下の中小型艦なのだから、條約の効果發生と共に國難來るやに宣傳するのは錯覺に過ぎずして、右の結果一朝にして我國防を危地に陷れるとは斷じられない。

現職に在る軍人は、陳腐な言草ながら『常在陣中』の觀念を以て養はれて居る。軍部に於ては好く『明日の戰爭』といふが、實は明日どころか、只今立所に戰爭の勃發する場合を腦裡に描くのが軍人の心事である。國際聯盟とか不戰條約などの有無如何に拘らず、戰爭が彼等の最高道德なればこそ、最大の犧牲を捧げて戰爭の準備即ち軍務に日も維れ足らず努力精勵し得る。故に軍備擴張は軍人の本務であつて、國家の資源は軍備本位に按配せらるゝもの、政略は國防計畫を基本として動くべきだとするのが軍人の頭腦である。成程、日淸戰爭乃至日露戰爭迄は夫れで善かつた、又その必要が有つた。そして國論も夫れに一致した。併し今日は世界の形勢も我國の事情も全然一變して居る。何國を敵として何時如何なる戰爭を豫想するのか？　國策として戰爭の手段を用ひないことは我國を含む殆ど全世界の五十六國が儼肅に誓約し且之は永續性を有する。國際聯盟規約の義務を云々するか、聯盟規約は不戰條約の規定に調和するため目下改正案を研究中である

のみならず、その第十六條の制裁義務に就ては、必ずしも聯盟國當然の義務でなく各國自主權の發動に據るとする說も多い。我國が自發的に戰爭を回避せんとすれば能きるのである。アメリカの移民法を問題にするか、之が解決を戰爭に訴へるのであつたなら一九二四年は正に其時機であつた。併し此問題は敢て戰爭を須たなくとも平和な談笑裡に、我國辱を拂拭し得る曙光が見え出した。支那の門戶開放機會均等を問題にするか、現代の大勢はもはや特權の維持を許さないのみならず、隣邦の繁榮は即ち我國產物の市場擴張である。競爭品に對しては更に精巧なる高級品を以て轉換すべきこと當然の法則である。際涯なき支那大陸の富源を列國の資力に依て開發する結果は、地理的に天與の好條件を占むる我國に最大の利益を來すこと必定だ。神經過敏に悲觀せず、大國民の襟度を以て現代機械文明の大勢に適應する方角にこそ進むべきだ。此問題に付て、去る二月四日、米國大使キヤッスル氏が日米協會の晩餐會に於て演說せる「東洋に於ける日本の威力は西部太平洋地方に於て秩序と進歩と平和とを齎すものである」といふ言葉は味ふべき價値を有する。勿論之は彼の特別任務（軍縮會議中の特命大使）に鑑み、フーヴア大統領の意に合致せるものと見られる。が、此言葉は即ちアメリカ大陸に於けるモンロー主義と全く同一精神を示すものである。我國は進んで此言葉に深長なる意義を附して溫き握手を求めるが宜い。支那に關して日米が嫉視反目するのは愚の骨頂である。日米手を携へ協調親善するなら、およそ太平洋界隈の事意の儘ならざるは無く、更に日米英いはゆる海洋國の協調乃至相互精神的援助は全世界の平和を保つに充分である。

他方、我國の事情はドウであらうか、世界の三大國の一だとか五大强國だとか云ふけれども、その世界を動かす力の微々たる證據には、我國よりも判事を出して居る國際司法裁判所は、成立以來茲に十年、應訴義務受諾國は既に四十二ケ國に達せるに拘らず、聯盟の常任理事國にして且自國の判事を有しながら、尙狐疑して我國が未だ右の義務を受諾し得ないとは何事であるか。產業の方面を見れば、國際勞働會議の條約は、概ね我國の產業狀態に於て未だ受入れられないものである。又は金解禁の影響と米國の不況とに因りて生糸の市價が千圓を下廻らんとする處があれば、政府民間共に慌てゝ全國民の負擔に於て非難の多い補償法を發動させる如き有樣である。輸出入のバランスに就ても考へるがいゝ、生糸絹布と綿糸布とは我輸出品の大宗であるが、その送先は何處々々であつて戰爭の相手次第ではドウなるのか？　我國の必要不可缺なる製鐵原鑛と棉花と石油との輸入は、そも〳〵何處々々から來るのであるか、此點に關し大部分は我國と米國と有無相補つて居ることに注意せねばならぬ。金融に於ては、二億圓足らずの正貨流出に依りて既に兌換準備の足許を脅かされ、第二回四分利英貨公債の借換問題はロンドンに於ける若槻全權を牽制するに充分である。海運に於ては、日本の最優秀船といふ淺間丸級三隻も、大西洋客船に比較すれば第三流に過ぎない。斯の如き國力にて何國と戰爭をするの

か？　我軍備が瑞典とか丁抹を目標にしないことは自明の理である。戰爭らしき戰爭（山東出兵は戰爭では無い）の起る恐れありと做す方面に關しては、軍資金の調達に、軍需品の購入に、戰時產業の維持に、到底如何とも爲し難き故障のため、我國は世界に多數の友邦を求めぬ限り、獨力の戰爭は覺束ない。或は獨逸軍閥に倣つて資金と生產と消費との國內循環を策する者があるなら、それは其策の行詰りを獨逸自身證明した事實を解せぬのみならず、我國と獨逸との內容に環境に相違あることを知らぬものである。加之、朝鮮臺灣特に前者に就きては、英國が大戰中愛蘭に關し經驗したる以上に、統治上の難問題を覺悟しなければならぬ。

國防は結構であるが、國防の爲に存在する國家では無い。國家の爲の國防である。軍備は國力に副ふを要する。對內的にも對外的にも國力が總ての基礎である。イタリーが如何に頑張つても今日のところ佛伊均等論に同情は起らない。佛國は何にせよ華府會議當時より地位を高めた。それは國力の復興に由るものである。英米が如何に肝膽を碎いても日本を華府條約の如く全然六割の比率には取扱ひ得なくなつた。第三者として客觀する世界の公論は案外公正妥當なものである、そして目に見えぬ力を以て世界の萬事を動かす。實は當該國の國力が經濟的に或は精神的に種々なる絆を以て世界を動かして居るのである。故にロンドンに於ける協定が、若し軍部の思ふ壺に落ちて來ないからといつて軍部は激怒してはいけない。況んや二重政府の存在を疑はしめる如き觀ある言動は軍部の爲に取らぬ所である。如意にならぬのは若槻以下諸全權（海軍大臣を含む）の罪でもなく、又東京政府の罪でも無い。全く國力の致す所に他ならぬ。だから、お互に日本國民は軍令部長のいはゆる「天意」に從つて隱忍自重し、何より先に國力の培養發達のため更に臥薪嘗膽せねばならないのだ。華府條約に關しては英米に屈服したものとか何とか、無理解なる敵愾心を安價に鼓吹する向もあるやうだが、ロンドン條約に對しても定めし非難する人は非難するであらう。併し事實上、全世界の有機的結合は年に月に增進しつゝあつて、現に一國家はそれ自體のみにては生存する能はず、世界の列國に伍してこそ存立を續け得らるゝ。共同社會に於ては、獨り自國の利害と必要とを考慮するのみならず、一般諸國の安定に寄與し眞の平和の爲に貢獻せねばならぬ。之に反し集團として諸國家に對する一國家の橫暴又は、不信は總べての國家の生存を脅威し世界の公論を敵とすることに成る。此場合、軍艦大砲の增勢に依りて優越感の悅びに浸つたところで、それは客觀的に國家の向上にはならない。右は米國の事だけに當付けて言つて居るのでは無いが、資本的帝國主義に支配されて米國至上主義に陶醉するなら、それが如何なる成果を齎すと思ふのか、事實は既に軍閥的帝國主義に依る獨逸至上主義に於て證明濟だ。然るに英國海軍を見よ、壽府會議に當りては素より、最近までは英帝國國防備のため巡洋艦最少限七十隻の絕對必要を固執したものが、今回勞働黨內閣の國策に調和して五十隻計畫に改訂した。之に鑑みても、濱口首相の裁斷したる妥協回訓に依り卒然として國防上の缺陷を生ずるとは信じられない。唯望むところは、軍縮の根本精神に從ひ、餘剩財源を負擔輕減に充當して、最も肝要なる國力の涵養を期する一事である。（四月九日）

クーチェポフ將軍の失踪事件

—ソギエット政府の陰謀か？
—國際的ブルジョアの策略か？
—全歐新聞總動員の宣傳戰！

在フランス
改造特派員　木村　毅

（一）百萬フランの懸賞金

今、歐洲に、殆んど元手いらずで百萬フランに有りつけると云ふとてもボロイ儲け仕事が一つ轉がつてゐる。クーチエポフ將軍の失踪事件がそれだ。彼の生死を確かめて、誘拐者探索の手掛りを與へる事ができさへすれば誰れにでも呉れるので、五十萬フランはパリの新聞ル・マタン社の提供、他の五十萬フランは將軍の夫人（或は既に未亡人？）の提供、兩方〆めてさきに言つた通りの計百萬フラン也が、この世知辛い現代に、受取手の來るのを待ちながら、銀行の金庫の中に寢てゐるのだ。

これは今迄、懸賞尋ね人のために提供された最大金額の一つだと言はれる。なる程、さうであらう。ナポレオン三世がヴクトル・ユーゴーの首に掛けたのでも確か四萬フランに過ぎなかつたと覺えてゐる。當時と今日と、たとへ金の相場がひどく違ふにしても、その多寡を比較すれば、兩方がてんで角力になりはしない。

その代り、もし多くのブルジョア新聞が盛んに書きたてゝゐる如く、背後に『赤露の魔手』が動いてゐるとすれば、うつかり此れを密告しようものなら、直ぐゲペウー（ソギエットの秘密警察）のピストルの口が烟を吹いて、その人間の一命は失はれかねないと想像されてゐる。で、將軍夫人も、ル・マタン社の方も、有力な法律家に依頼し

て、密告者の生命は必ず保護すると言明してゐる位だ。
勿論、この事件は既に海外電報として、日本の諸新聞にも載つたらうとは思ふ。が、電報だけにこちらの諸新聞の如く詳しいわけに行くまい。そこで私は自分の集めた切拔を綜合して出來るだけ信用のおけるやうに此の事件の輪廓を描いて見やう。以下、特に新聞名を附記しない敍述は、各紙の記事のほゞ合致してゐるものである。特種に限つてそれを掲載した新聞名を特記する。通俗新聞の誇張した記事は初めから採らない。そんなにして餘計な調味を加へなくても、この事件は生のまゝで優に探偵小說的滿足を讀者諸君に與へ得ると信ずる。現に既に或る專門の探偵雜誌にはこの事件を脚色した續き物が現はれてゐる位だから、今後これに取材した作品が幾つか現はれるであらう事も豫想される程に怪々奇々なのだ。
なほ面白いのは此れを報導する諸新聞の態度が、全く對蹠的な二派に分れてゐる事だ。一つは前述したやうに事件の背後にソヸエットありとしてどうでもかうでもその責任をモスコオ政府に負はせねば承知せぬもので、ブルジョア新聞の凡て、隨つて歐洲全新聞の九十九パーセント、否それ以上が之に屬する。も一つは、此れを各國のブルジョア共力で、反ソヸエット熱を煽るために謀んだ計略に過ぎないと言つて、初めから重要視しないもので、共產黨系の諸新聞が之に屬する。と言つてもその數は極めて微々たるもので、直接間接に私の眼に觸れた限りで言ふと、ソヸエットの兩大機關誌イッベスチヤ、プラヴダを除けば、僅かにフランスにジョン・ジョレス創刊の歷史を有するリユーマニテがあり、イギリスにソヸエットの宣傳機關としてこの正月から發行されてゐるデエリイウオカアがあるのみで



クーチエボフ將軍

あるへ尤も私の眼の屆かぬものでドイツにも何かあるに違ひないが、それとても僅かに一二を數へ得るのみと思ふ)

そんな次第で兩者は數から言ふと問題にならぬが、共産黨の機關誌は鋭烈なる戰鬪力を有するので、豺狼の牙をむいて萬犬に當る如く、孤軍重圍の裡にありながら、蝟集する攻撃に應酬し、ゆくりなくも茲に全歐諸新聞總動員の宣傳戰を現出したのは、之が初めから重大な國際外交問題か何かに關するものなら兎に角、事、一個人に關して起つたものとしては、近時稀なるジャーナリズムの偉觀とせねばならぬ。

能ふべくば私はこの一篇に於てその景況をも彷彿させ、現代歐州ジャーナリズムの動きの一端を傳へる事をひそかに期するものである。さうでないと、今こそ其の發生後一ヶ月以上を經過しながら信憑すべき手掛りは殆んどなく、全く迷宮に入つてゐるこの事件も、之が日本に到着して雜誌に發表を見る迄には、如何なる材料が現はれて問題の解決を見ないにも限らぬ。豫めそれを慮つて、その時に際しても臨場の味の全く失はれて了はないやうに若干の用意をしておくのは、ペンを執る身の心得からである。

先づこの事件の發端から叙して行くであらう。

（二）　白露再興の主動者

去る一月二十六日の事である。

丁度その日は日曜だつたので、クーチエポフ將軍は、朝のうちパリにあるロシヤ正教會の禮拜に出席した。そして一旦歸宅してから、今度は、元の帝政時代にロシア陸軍の將校だつた者によつて組織されてゐる倶樂部へ出席すると言つて、カルチエ・ラタンの自宅を出で、そのまゝ全く行衞不明になつて了つた。

將軍は日露戰爭にも世界大戰にも出陣して偉功をたてた勇士であつた。革命後はパリに逃げて來てゐたが、反赤露運動への盡瘁は片時も忘れた事がなかつた。敢然な、而も思慮の周密な人間だつたので衆望も自らに集まり、白軍再興の望みは、一に彼の上に掛けられてゐると言つてもよかつた。でアンチ・ボルシエギック陣營の總大將であつたニコライ大公が沒すると、遺命によつて彼はその後繼者に推された。從來からのソギエットに不利なプロパガンダは多く彼の方寸に出で、最近は又何か大仕掛な密謀を凝らしつゝあつたとも傳へられる。

その將軍が突如として行衞不明になつたのだから、何より狼狽したのは、フランスに最も多く、そして幾らかづゝは歐州各國に遁竄してゐる總計幾萬かの白露人であつた。初め彼等は密々の間に自分達の間で搜索してゐたものゝやうであるが、遂に及び難いのを斷念して世に公けにしたものらしい。

新聞紙上に最初の報導の現はれたのは、失踪後一週間以上も過ぎた二月初めであつたと記憶する。（この時は新聞の報導も大してセンセイショナルでなく、私も一寸珍らしい事があるた位に思つて、不覺にも切抜を作らなかつたので、茲にはツきりした日付が言へない。そして今私の居るのは地中海沿岸の一小村で圖書館も新聞縦覧所も無い所だから、調べるわけにも行かぬ。）たゞ幸ひ二月四日のパリ電報を掲げたタイムスの記事を保存してゐるからそれを譯載する。

『昨夜深更より今早曉にかけて、警察は、白露の總指揮者クーチエポフ將軍が行衛不明となれるのを探索するため、パリの西南郊外に出掛けた。直接的確な證據を探るまでには到らなかつたが、結果は全然失敗でも無かつたやうである。

事件は極めて微妙な性質のものだから、警察でも非常に大事を取りつゝある。即ちシヤヴロオなる巡査がクーチエポフ將軍とも覺しい人が自動車で連れ去られる所を見たと陳述したのに基づいたので、當局は今や、將軍は必ず或る暗黒行爲の犠牲になつたものに違ひないと睨んでゐるやうである。なほ當局は、將軍はまだ存命せるものと信じてゐるが、或は既にフランス國外には連れだされたかも知れぬと觀測してゐる。』

（三）　粗地外套の美人

次回目に現はれた報導は極度にセンセイショナルなものであつた。

『ブロンドのボルシエヰキ美人、フランス秘密警察に召喚さる―奢侈を極めた彼女最近の生活ぶり』『ベルリンに於けるソヰエット秘密警察飛行班との連絡』――かうした大活字が各新聞の一面に喚き立ててゐた。即ち二月五日である。

各紙の大體共通した記事によると――

警察は全一週間に渉り約八十の手掛りを探索したがその苦心も効なく、今やクーチエポフ將軍事件は全く迷宮に入れる時、或る病院に働いてゐるガルリンの申立に依つて、俄然局面に急轉廻を見た。彼はクーチエポフ將軍が二人の平服の男と一人の正服巡査と一緒に、町角に待つてゐる自動車に入る所を、病院の窓から目撃した。なほ他の目撃者の言によれば、その時自動車から餘り隔たらぬ所に「粗地の外套」を着た婦人が立つてゐて、乗る前に將軍に何か話し掛けてゐた。

新聞は大抵愼しみ深く、未だその地點の町名を秘してゐた。併し、パリのその地點には巡査は張つてゐない筈なので、將軍を自動車に誘ひこんだ正服は僞巡査と察せられるとの旨は附記してゐた。

更に――

警視廳秘密搜索部長ベリエ氏は、昨日、ルドミラ・イワノワ・チコバン・ボーベドノチエフなる一婦人を召喚して密々に訊問する所があつた。彼女はパリ在住のボルシエギキ仲間で評判の、ブロンドの素晴らしい美人である。彼女の素性について今迄に判明してゐる事は、生れがドイツ人で、パリ郊外の自動車屋に働いてゐるロシヤ人と結婚してゐると云ふ事だけに留まる。たゞ非常に奇異なのは今迄かなり一ぱい〳〵の生活を送つてゐたのに、最近の數週間異常に富裕らしくなつた事である。

彼女自らは知人に、ベルリンなる伯父の遺產を繼承したのだと語つた由。なほ噂によるとしば〳〵ドイツに旅行して、ベルリンのゲペウー飛行班長と結婚してゐるロシヤ婦人に會つてゐる。……

自動車の傍で將軍に話し掛けた「粗地の外套」の美人と、このルドミラとが果して同一人であるかどうか？　パリ警視廳の究めやうとするのは即ちその點であると、諸新聞は魅惑的な謎を投げて、いやが上にも讀者の興味を此れに惹きつけた。

さあ、かうなると色んな事を言ふ人間が後から續々と出現する。

巡査のガウチエ君は曰く、自分はゴド・ド・モウロア街で、警官の服を着た男が自動車の運轉手と話してゐる所を見かけた。彼はアロンデスマン四區の徽章をつけてゐたので、自分の同職と思ひ、區違ひへ來て何をしてゐるのかと尋ねた。彼は返事をしないで、直ぐさま自動車に飛び乘つて走り去つた。その時には別に氣にも留めなかつたが、後から思ふと或はその「粗地の外套」を着た婦人と一緒にゐたと云ふ僞警官ではあるまいか。なほ、運轉手は赤い徽章の付いた帽子を被つてゐた。

一婦人（警察は特にその名を祕す）は曰く、自分も警官が粗地の外套の婦人と話してゐる所を確かに見掛けた。丁度ウーディネ街に使に出た途中であつたが、巡査の袖が非常に短かつたのと、帽子がしつくり合つてゐないのとで、特に目をひかれた。相手の女は毛皮で縁縫ひをした粗地の外套を着て、見るからに富裕さうで當世風であつた。自分は男女ともはつきり覺えてゐるから、對面すればその人だつたかどうか言ふ事も出來る。（この記事には特にウーディネ街と地名の指示あるに注意せよ）

さうかと思ふとレディン君と云ふ運轉手は將軍の失踪直前、確かに僞警官と粗地外套の美人とが話をしてゐる所を見屆けたと證言しておきたから、段々ゲペウーの恐ろしさを話に聞くうちに怖毛がつき、とう〳〵氣が違つて「ボルシエギキが私を殺す、殺す、殺す。」と、室に閉ぢ籠りながら叫び續けてゐると云ふ記事も見えた。

その他各種の新聞が樣々な名と職業の人間を登場させては、前記と

ほゞ同一の事を多少枝葉を變へて證言させてゐたが、果してそんな人間があつたのか、或は勝手に作り上げたのかは、神様と編輯内部とだけが御存知のことである。

やがて日の立つうちに、レデイン君が暗殺を恐れて發狂したなどと云ふのは嘘である。ルドミラ夫人との對面を求められたのに、彼は平然として出席して、別に怖れも避けもする風は無かつた。只併し彼が見たと云ふ婦人とルドミラ夫人とが同一人であるかどうかを確答する事は出來なかつたと、そろ〳〵仲間の尻ッ尾の掴み合ひが初まる。

（四）鼠色と赤色の自動車

茲で二つの問題が提出されたわけになる。即ちその病院の小使が見たと云ふ自動車の行方をさぐる事と、ルドミラ夫人に關係のあるらしいベルリンに手を入れる事である。

恰もよし、將軍の失踪後十一日目に、警視廳へ無名の手紙が届いた。それによると將軍は誘惑者により謀殺されて、ムードンの森の奥深くに埋められたと云ふのである。直ちに警視廳の大活動が初まつた。飛行機は眞夜中に森をさして飛んだ。翌朝の諸新聞は、森の探索と發掘は今朝の夜明方までには終る筈だから、或は將軍の屍骸が發見されて、この謎も解決を見るに到るかも知れぬと報じた。

併しその期待は充たされなかつた。森の中にはそれらしい何の痕跡も無かつた。それはその筈でムードンの森と言へばパリの西部、ベルサイユへ行く途中にある。汽車の停車場もあるし、又セイヌを河舟で下つてセエヴルかサンクルウで陸に上ると美しい森がすぐ眼の前に擴がつてゐる。畫家などが好んでアトリエを構へる所で、島崎藤村氏の令息も一時、そこに住んでゐられたと聞いた。その位だから日曜には非常に郊外散策の人出が多く、森がどんなに廣いと言つても人目に掛らずに屍骸を埋め了うせるなどと云ふ事は、到底不可能なのである。

何も無いと分れば、新聞は、前の報道などはけろりと忘れて、探偵かムードンの森を發掘したなどと云ふのは事實無根である。たゞその附近に若干の露人の住家があるのでそれを往訪したに留まる。なほ將軍は子供達の休暇のため、この附近に家を借りやうとしてムードン居住の一ロシヤ婦人に相談したる事ある由……云々。

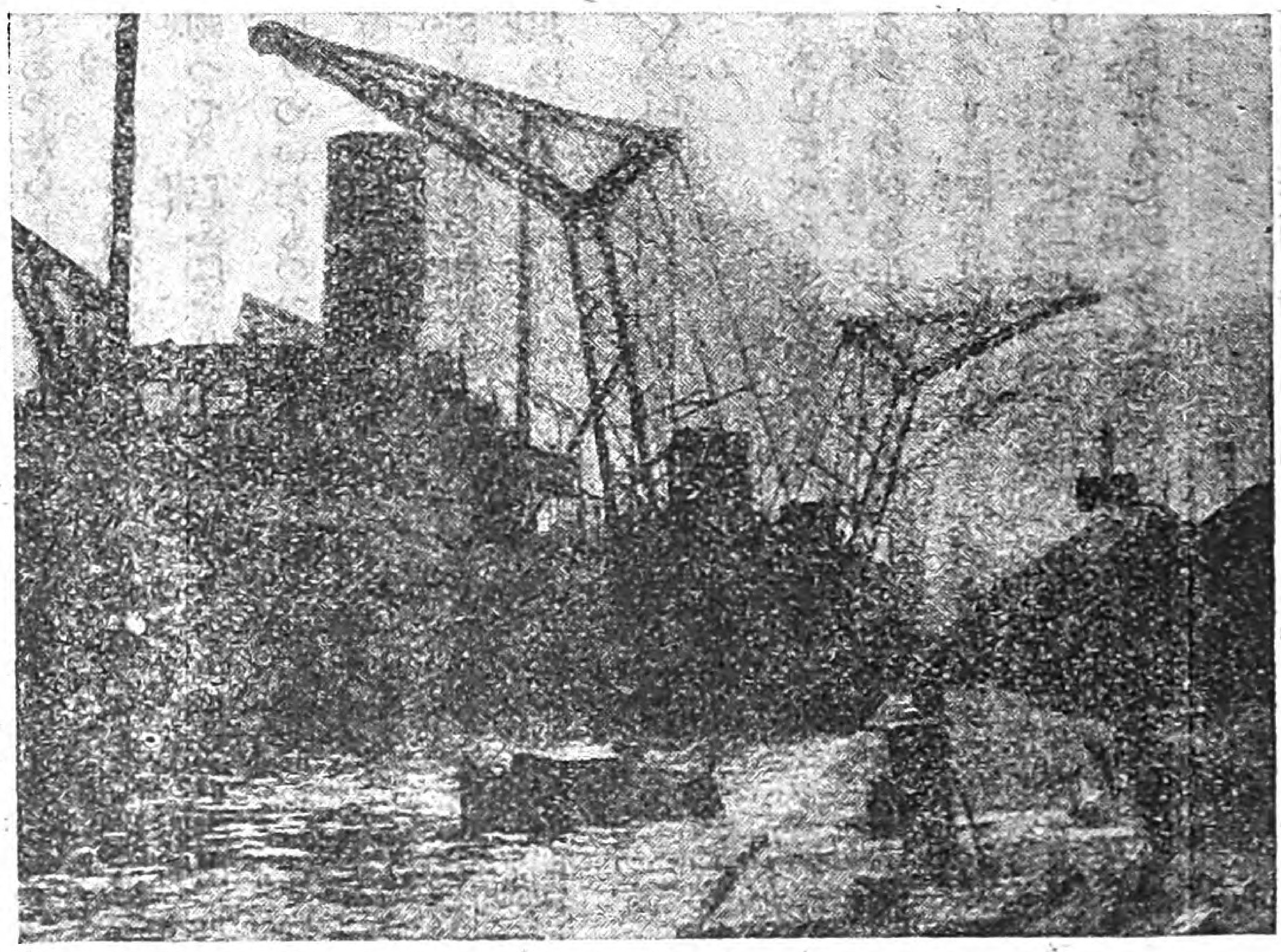
併しムードンが必ずしも全く見當を外れてゐたのではない。將軍を誘拐したと覺しい自動車が確かにこの方面に向つて疾驅したらしいのは多くの目擊者によつて證明された。

運轉手イワノフ・ソフロノフ君曰く、一月二十六日の正午頃自分はボルト・ド・サンクルウを鼠色の有蓋自動車が驅けぬけるのを確かに見た。その前をば、恰も案内をするかの如き格好で赤色自動車が先行し

てゐた。

此の鼠色の自動車と云ふのは、病院の給仕が見たと云ふそれと恰も吻合するのである。サンクルウはムードンに極めて近い所である。又、或る運轉手は曰ふ。（當局は特にその名を秘す）自分は鼠色自動車がニユイイー外郭、アヴニユ・ド・ラ・デフアンスに沿うて、サン・ジエルマン・アン・ライエ方面へと走つて行くのを見た。

サンゼルマンはパリ西北の郊外でアレクサンドルデユマが『三銃士』『巖窟王』著作後の豪盛な生活をしてゐた所と云ふよりも、或は東大法科の平野義太郎教授の下宿のあつた所だと言つた方が、讀者諸君には親しみが深いかも知れぬ。それはサンクルウ、ムードンなどとは方角違ひだが、犯人は踪跡を晦ますためジグザグに疾行したと云ふ事も考へ得られる。そしてさきのソフロノフ君が鼠色自動車の乘手に何の注意も拂つてゐないのに反し、この秘名運轉手君はそれを詳述してゐる。即ち運轉手の横に一人の男が坐し、中には三人乘つてゐた。眞中のは無意識狀態にあるかの如くグダリと倒れてゐたが、寫眞で見る將軍の如くに黑い髭があつたと。



ソギエツト汽船カールマルクス號

又ロアレのシヤトウ・ルナアルの旅宿の主人ロジエ・シモン君は曰く、將軍失踪の翌一月二十七日、彼を誘拐したと覺しい鼠色自動車が門前に駐まつて、運轉手が酒を求めた。その言葉には強いスラヴ訛りがあつた。掩ひをおろしてゐたので自動車の中は見えなかつたが、併し運轉台には優に人體を收容するに足る大いさの袋が置いてあつた。なほこの地通過の際は赤自動車は後尾に付いて走つてゐたと。

この陳述によつて秘密搜索部はすぐロアレに飛行機をとばせたが何の手掛りも得られなかつた。翌日と云ふ點、袋の一件とか少々臭くさい。

この前後に一新聞は、その有名な鼠色自動車がパリの或るガレージ

の中で發見された。許可票には僞番號を打ち、車の内部は、坐席はちぎれ、木部には傷が一ぱいで、慘憺たる苦鬪の跡を現はしてゐたと、報じて讀者を興奮させたが、これはヨタであつたらしい。なぜなれば、それ程有力な證據が手に入つたにしては餘りにその後の搜索の進捗がはか〴〵しく無さ過ぎるからである。却つて、思ふにそれ等赤露二台の自動車も恐らくは夜のうちにパリに歸りついたものであらう。なぜなれば警察の嚴重なる搜索の結果、その夜、一台の自動車もパリから蹤跡を晦ましてをらぬ事が判明したと云ふ諸新聞の記事の方が、おとなしいだけ信頼するに足るであらうと思はれる。

(五) 伯林にて糸をひく者

ムードンの森の搜索が全然効果を擧げず、そしてベルリンから確報が未だ到着しない前は、實に雜然、紛然たる多くの噂を生んだ。曰く將軍はシベリヤへ既に送られた。曰く、まだパリに隱されてゐる。

將軍はイタリよりサン・ゴタール線によりて當地に到着、數日間滯留しつゝありとの噂あれど、警察は未だつき留めるに到らずと、報じたのはリユツエルン電報。

一月二十七日、ソヴエツトの汽船カール・マルクス號がアントワルプに碇泊してゐた。そのため警察はベルジユウム當局と連絡を取つて搜索してゐると報じたのはロンドン・タイムス。

中で最も信用のおけさうな一記事は、將軍の失踪は決して誘拐によるものでなく、白露人の不和に氣を腐らして、自發的に身を隱したのである。その證據にはヅーリツヒのフエデラル銀行に立寄つて十五萬フランの預金を引出してゐると云ふのであつたが、パリ警視廳の紹介に答へた銀行の返電には、將軍の預金の引出されたる事實なし！

ペンを本筋に返して、然らばベルリンでの結果はどうであつたか。

オフイシアルな報告はみな、そこにも何等確たる手掛りなしと云ふのである。併し新聞には例によつて面白い尾鰭をつけた記事が續々と現はれた。

獨紙ベルリナア・ターゲブラツトは云ふ。

クーチエポフ將軍搜索のため二人のフランス探偵がベルリンに來て、當地在住の追放露人と會見してゐる。露人の中には、數週前將軍がベルリンに來た時會見したと云ふ者が數人ある。だがそんな事を言ひふらす者は反ソヴエツトの機密をさぐるため巧みにその仲間に入りこんでゐるモスコオ政府の密偵であると、純粹の白露人間には信ぜられてゐる。

又、大陸版ニユーヨーク・ヘラルドや、デエリイ・メエルにはこんな記事が載つた。

數週間前、將軍は確かにベルリンへ行つた。或る夜遲くソヸエット系の露人が扉を叩いて、親切から、ベルリン滯在の白軍と思はれてゐる人間の仲にも、内實はゲペウーが少くないから注意しないといけない、こゝに長くゐては一命が危いからパリへ引き返したがよからうと注意してくれた。將軍は素直にそれに從つた。なほ、件の注意を與へた赤露人は、その二日後何者かに誅殺されたが、犯人は未だ逮捕されない。

最後の一節、この暗殺者はゲペウーだと言はぬばかりの暗示がこの記事の眞實性を稀薄ならしめてゐる。併し幾分これに似た事實があつたらしいと思はれるのは、ずツと後になつて二月末の佛紙ラントランシジヤンに次のやうな記事が出た。

將軍は最後のベルリン訪都の際ライチョルン・ノイシュタピッシュ・ホテルに滯在し、白人を裝うてゐるゲペウーと興味のある交渉をしてゐる。その中にはアレクサンドル・ソボウ、ニコライ・ロベルチイなどと云ふ人間もあつた。

但し此等の固有名詞が又でたらめかどうかは私の保證する限りでない。

後に項を更めてもう一度書く機會があるから、今迄私はなるべくそれに觸れないでおいたのだが、併し以上の諸記事を通じても大體各新聞か一致して反ソヸエット的態度を持してゐる事は窺へるであらう。中にあつて最も世を驚かしたのはパリの夕刊リベルテの記事である。私は平常この新聞を殆ど手にしないからその性質をよく知らないが、大體漠然と社會主義系統のものと考へてゐた。尤も或る友人は、その特色は今は全く失はれてゐると教へてくれた。この記事を見ると或はそれが本當かも知れない。

即ち曰く――

この陰謀はベルリンに於て行はれたもので、首謀者はイワウヰッチと云ふ元のパリのソヸエット秘密警察の實權を握つてゐた者である。彼の陰密に握つてゐる勢力は大したものでソヸエット大使などは表面を飾る傀儡に過ぎなかつた。それがこの前のベセドウスキイ事件の失敗により、パリに於けるゲペウーの組織が世に暴露されさうになつたので、一先づベルリンへ退却した。

併し策動は決して止めず、パリの赤露大使館員アレンと謀聯しつつ、ゲペウーの實權を握る事は依然たるものがあつた。ゲペウーは或は大使館員となり、或は商用を帶びて來佛してゐる露人の間に交つて常に何事かを謀らみつゝあるのである。

フランス警察の確實に握れる證據によれば今回のクーチエポフ將軍誘拐の主動者は、そのためわざ〲モスコオから派遣せられたゲペウ

ーで、彼等は一月二十日ベルリンに立寄り、イワノキッチから詳細なる指令を受けてゐる。そして將軍誘拐の事を果すと、翌日ベルリンに引返し、更に一月二十八日にはロシヤに歸るべくベルリンを立つた。さう云ふわけだから此の二人を捉へる事は不可能である。併しフランスの共産黨員が之を助けた事實があるので、警視廳はその逮捕、なかんづく僞警官の捜索に腐心しつゝある。……

（六）佛國共産黨の實狀

これには同じ仲間のブルジョア新聞まで、「驚くべき報道」と言つて眼を見張つた。

なほリベルテの記事中、ベセドウスキイ事件とあるのを一寸說明しておくと、このベセドウスキイと云ふのはパリにあるソヴエット大使館の一等書記官であるが、母國政府に忠實さが足りないと云ふので、モスコオでは呼び返さうとした。もし歸國を肯んぜざる場合は一命を奪ふて、屍骸となして送るも苦しからずとの秘密指令で、その時の用意に黒い長い棺が大使館に持ちこまれた。ベセドウスキイは身に危難が迫つたのを知つて、フランス政府に救助を願ひ出たのである。

ドウバア海峽の向うで、このリベルテの記事に首を捻つたのはタイムスである。明かにリベルテの名こそ指示しないが、次の如き記事は、その報導に刺戟されて書かれたものとしか思へない。曰く──

ベゼドウフスキ事件は決して政治上に重大な意義を持つたものではない。その報道は餘りに誇張され過ぎてゐるので、未だソヴエットがフランス國內に非法行動をなしつゝある證據は一つも擧がつてをらぬ。只、たま／＼今回のクーチエポフ將軍失踪事件と結びつけて流說されて、佛露關係の非公式方面に一種の興味を呼び起してゐるに過ぎぬ。

序にフランス共産黨について說くならば、前回の總選擧（一九二八年）によく百萬票を獲得したが、正式黨員は一萬五千人に過ぎない。隨つて獲得票數の大部分は候補に對する個人的好惡、又は他の左翼諸黨の掲げた政綱の不滿から思はぬ拾ひ物をした浮動投票である。何敏にして聰明なるフランス共産黨の指導者が第三インタナショナルに對して形式的以上の秘密援助をするものとは思はれない。それに現在優秀指導者の大部分は投獄されてゐて、組織內の重要事務を執るわけに行かぬ。その結果第三インタナショナルから直接金錢的支給を受けつゝある所謂「パーマネント」と稱する分子が、各要所事務を執りつゝある。彼等は職を失ふの恐れあるが故にモスコオの命を奉ずるに汲々として、毛一筋も之に違ふ事を恐れてゐる。そしてプロレタリア階級の間にソヴエットの宣傳をする細胞組織の實權は彼等の間に握られて

ゐる。だが彼等の信任は赤色區域（自治制に共産黨の勢力を占めてゐる地方）にさへ日に〳〵失はれつゝある實情である。……

此の項に限り私は逐字譯にしたから讀者諸君も一讀して直ちに氣付かるゝであらうやうに、含む所あるが如く、無きが如く、甚だ要領を得ない書き方だが、フランス共産黨員がこの事件に連累ありとするのを承認してゐるのでない事だけは分る。

元來タイムスは御存知の通りの保守新聞で、ロシヤに好意を持たぬため、私の滯英中は（恐らくは今も）特派員が赤露への入國を拒絶され、常々"Our correspondence is absolutely correct"を誇つてゐるタイムスも、ソギエットに對する記事だけは餘り信用されないと言はれてゐた。その反露新聞にこの記事あるは、以て外のブルジョア新聞が如何に誇大にソギエットに不利なヨタを流布しつゝあるかの、最も有力な反證とならう。

尤もそのタイムスも、今やこの事件にソギエット政府の關係あるを全く信ぜぬ者も、併しゲペウー（英語ではオグプウ）の仕わざではあるだらうとの信念を次第に深めつゝあると報じた。果してクーチエポフ將軍失踪事件對ゲペウーとモスコオ政府との關係は、張作霖爆死事件に對するわが陸軍派遣隊と田中前內閣とのやうな隱微なものであらうか。

（七）佛露外交の危機

杳として何の消息も無いまゝに三週間は過ぎた。二月の十四日は新聞紙の上でこの事件が最高潮に達した日であつた。

そこにはル・マタン社及び將軍夫人提供の懸賞金の記事があつた。但しこれについては冒頭に書いておいたから、茲に再び繰り返さぬ。

そこには又將軍夫人が依頼辯護士と並んで立つてゐる寫眞が掲げられてゐた。この訴訟を引き受けたのはカンプンチ君である。最後にそこには又、フランス在住の一萬一千人の白露人の署名ある歎願書が總理大臣タルデユウに提出されたと云ふ記事があつた。それによると歎願書署名人の筆初めは、元のプレオブラチエンスキイ聯隊の士官達の名で占められてゐる。これはクーチエポフ將軍がその聯隊の最後の聯隊長だつた因緣によるので、彼はそこで大戰中三度も『名譽』の負傷を遂げたのである。書中には嚴しく『ボルシエギキ恐怖時代』を非難し、速かにフランス司直の手の赤露罪魁の上に下らん事が希望してあつた。

猛烈な新聞戰はこゝを境界として愈々火の手を煽つたのである。

ソギエットは初め拱手傍觀の態度で、自分達がこの事件の共犯もしくは主謀者であると見られてゐる世上の風說を、否定する文書だも發

表しなかつた。

彼等は白露人の策動と云ふといつも鼻であしらつて、機關誌イッベスチヤはアムステルダム駐在の特派員の『最も信用すべき通信』として、將軍は南米へ遁れたのである、これは最右翼帝政黨の追跡を懸念して、彼の僚友が逃がしたのであるとの、人を食つた記事を掲げた。

併し、前記多數白露人の署名ある歎願書はタルデユウ首相に提出され、彼は、この罪惡の使嗾者がソヸエット政府だとの確證が擧つたら、露佛の國交は斷絶せしめる決心だとの記事を各新聞紙は一齊に掲げた。茲で問題は自然に、兩國の外交關係にまで擴大して來たわけだから、今やモスコオ政府も之を鼻であしらつて濟ますわけには行かぬ。果然、イヅベスチヤとプラヴダは激昂毒語を、嘔吐の如くに浴せて來た。

汝、反動的なるフランス政府よ、社會主義建設途上の有力なる隣邦との交誼を放棄し、山賊的白露人の歎願に聽從する前、よろしく三思する所あれ。——

かう云ふ調子で初め、最後は常套の、社會主義建設の阻止をはかる資本主義者に對し、勞働大衆の憤激の下るに汝は耳を掩ふかで結末して、先づフランスからの輸入品のボイコットを以て威嚇した。

この數日前パリにあるソヸエット大使館は極度の緊張と殺氣裡に、次の如き飛檄を同志間に發したと傳へられる。

『敬愛する同志よ、特別警備隊組織の必要あるに依り、二月十一日水曜の夕刻、赤色インタナショナル防備聯盟本部に集合せよ。深更に及ぶも計り難きにつき、辨當携行のこと。君達の熱誠の證明さるべきを信じ、こゝに最も友誼のこもれる挨拶を贈る——パリ區書記L・C』

これは夕刊プチ・パリジヤンのみが掲げたがタイムスは轉載した。私が、パリ在住の共產黨員なる知人に眞否を問ひ合せたら、確かにさうだとの返事があつた。

フランス議會には、ピレネイ區選出の代議士イバルネガレイ外一名の署名ある請願『パリにソヸエット大使館の存在するは危險と不便を發生するに付き、ソヸエット政府との外交關係速時撤廢の件』が提出された。これにはロンドンの軍縮會議に出席中のタルデユウ首相がパリに歸つて應答すると言ふので、全歐はその成行に片唾を呑んで待つた。

併し期待せられた日タルデユウは風邪で議會に出席できなかつた。その翌日は藏相シエロンの豫算の討議に入る前、內閣の信任投票を行うた所、九票の差で石灰質不足の卵の殼のやうにグチヤリと內閣は潰れて了つた。ついでシヤウタン內閣出現、五日にして倒潰、そして再びタルデユウ內閣の成立となつたが、併しこの慌しい政變が折角高

潮に達したクーチエボフ事件の、アルコール分を蒸發せしめる結果となつたのは是非が無い。

(八)濃霧に消えた怪汽船

話は又事件に還つて、然らばムードン・サンゼルマン附近に發見した赤鼠色二臺の自動車はその後どこへ行つたか。――外の一切の報告は信ずるに足らぬが、これだけは多くの目撃者の證明によつて確實とされたやうである。そしてノルマンデイの海岸トルーギル附近が濃厚な嫌疑地となつた。

と言ふのは、この方面で問題の自動車を見かけたと云ふ三人の有力な證人が現はれたのである。一人はパリの有名な辯護士グランコロオ、一人はその兄弟でトルーギルの近くなるボンネギル・スール・トークの町長、最後の一人は鐵道の踏切番。

實はこの附近でその自動車を見かけたと云ふ者は前にもあつて、警視廳は一度探索したのだがそれはパリの市會議員フエルナン・ロオランのであつた事が分つて、中止したのであつた。

然るにグランコロオ辯護士は自ら警視廳に出頭して申し立てた。

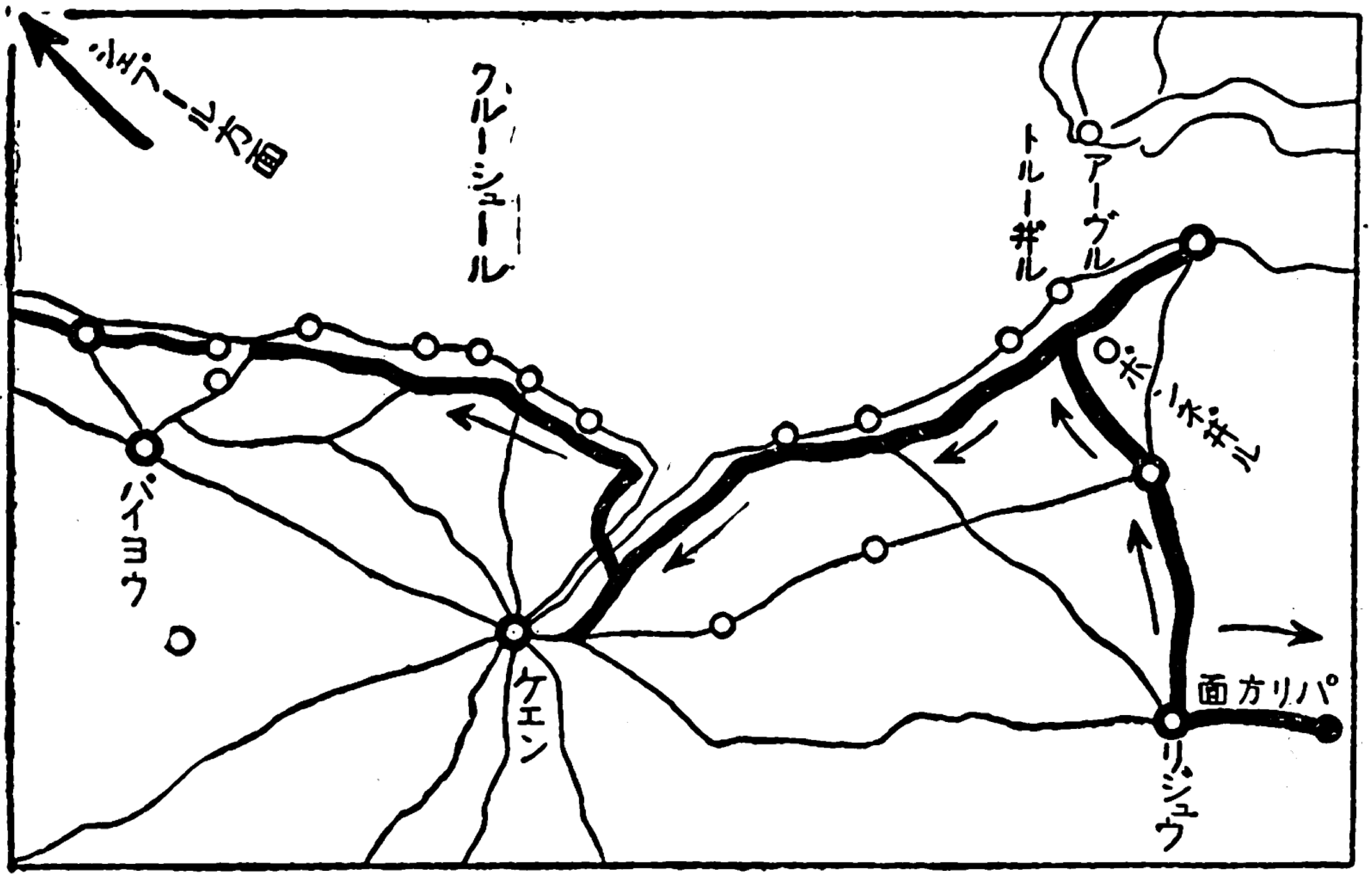
自分は兄弟訪問のため件の日曜日にノルマンデイへ出掛けたが、その時一臺の鼠色の有蓋自動車が自分を追ひ越した(即ち後にグランコロオ市會議員のと認定されたものである)併し數分後、もう一臺の埃にまみれ切つた同色の自動車が、素晴らしいスピードで自分を追ひ越した。中には、二人の男が重傷、もしくは無意識と見える髯の濃い男を中に挾んで乘つてゐた。いづれ此れはトルーギル病院にでも運ばれる患者であらうと思つたので、別に自分はそれ以上の注意を拂はなかつた。併し又すぐその後から赤自動車が殺人的急速力で追ひかけて來たので、記憶は確かである。……

又、踏切番はケエンとバイヨウの眞中程に當るヴエル・スール・メエル近くの海岸で見たと云ふのだが、そこは有名な探險家ビルドの飛行機が大西洋横斷の際、着陸した地點である。

兩者が件の自動車を目撃したのは、將軍がパリで誘拐されたと推定されてゐる時刻より約二時間の後である。

たほそのノルマンデイ海岸警備の役人の談によると、その二十六日午後二時から四時迄約二時間、ソギエット旗を掲揚せる怪奇な汽船が海上二哩の地點に碇泊して、時々サイレンを鳴らしてゐたが、間もなくその邊一體を立てこめた濃霧に鎖されて見えなくなつた。

以上を綜合して立てられる推定は、將軍はこの附近の海岸で自動車からモーター・ボートに移され、それを沖の怪汽船が受取つて、行方を晦ましたのだらうと云ふ事になる。



ノルマンデイ海岸

橋頭に翻る赤色旗、碧波の上を游弋せる怪奇船、魔物の呻くやうな不吉なサイレンの響き、そして最後に物を最も神祕化すに役立つ濃霧の襲來――からなると餘りに浪漫派の小說めくので、私は初めこの記事を信用するのに躊躇したのだが、後にル・ジユーナルの特派員の報を見るに及んで、この中にも若干の眞實味が含まつてゐる事を發見した。ジユーナルは多分、フランスでは一番發賣部數の多い新聞であらう。この國の一般世相と云ふやうなものを知るには至極よいとは、「朝日」の特派員としてその建物の中に事務室を持つてゐられる重德洞水氏から、渡佛早々の頃聞いた所である。懸賞金の提供ではル・マタン紙に出しぬかれた形だつたが、この事件の報道には最も力瘤を入れてゐるのが傍の目にも見える。

隨つてル・ジユーナルは樣々な人物を拉して色々な陳述や證言をさせてゐるが、歸する所事件當日の潮の加減だと、三時半頃から四時にかけてはボートが防波堤沿ひに波止場まで優に入つて來られたらうと云ふ事を證明した。それからソボエツト旗の揭揚はおまけだがトルーヸルの近くクルーシユールの二哩沖に一隻の汽船の碇泊してゐた事も、それが警霧汽笛を鳴らしてゐた事も事實である。海上警備の役人は望遠鏡からのぞいたが、霧が立てこめてゐてどこの國の船とも判明しなかつたのだと云ふ事も報導した。

これで、辯護士だとか町長とか、證人が比較的社會上の地位を有する人なので、新聞記事も一二日一寸色めいたが、要するにノルマンデ

イの海岸でこの事件は行き留りになつた。

凩のはてはありけり浪の音

と、息を入れて、一句洒落たい位だ。

(九)　珍報頻々として到る

百萬フランの懸賞金、一萬一千人の署名ある請願書！

その記事の出た同日の新聞に、係檢事として任命されたデラレは、四十八時間以内に疑雲を一掃して事件を判明せしめる自信があると揚言してゐた。

所が四十八時間は百時間たつても、事件の判明はおろか、何一つ有力な手係りだに得られない。この間取調べた證人千人以上と傳へられる。

私はこの稿の初めに或る病院のガルソンがその窓から、將軍の自動車で誘拐される所を目撃した事を記した。初めそれに關する固有名詞は一切秘せられてゐたが、それは段々に分つて來た。町はウーディネ、病院はサンジヤン・ド・デユウの同胞病院、ガルソンの名はオーギユスト・シユタインメツツ。

デラレ檢事は十五日の土曜、浩瀚な調書を携へながら病院を訪れ、シユタインメツツ君と一緒に三階の窓からウーディネ街を見おろした。そして當日の模樣を巨細に聽取した上、犯罪擬演(reconstitution)を行ふことにした。これは困難な事件になると施行してみるのがフランスの裁判慣習なのださうである。(大陸版デエリイ・メエル)

二月十八日午前十時主任檢事デラエは警視廳秘密搜査部長ペリエの立會を求めシユタインメツツの陳述に據つて、一月二十六日クーチエポフ將軍誘拐の時の狀況そのまゝの施行に取り掛つた。

鼠色の有蓋自動車の代りには、警察用の暗緑色のそれを用ひ、サンジヤン・ド・デユウ同胞病院の眞向ひなるウーディネ街へ向けて、ルースレ街の傍道に待たせた。又別な自動車を赤自動車の代用として病院のブールヴアルに向けてウーディネ街に待たせた。

主役の將軍には警部長のウーゴオがなつた。鼠色自動車に近づくと、これも警官の扮した二人の男に話しかけられたので、將軍は驚くこなしをする。そして初めは躊躇する風をみせたが結局は乘車を承諾する。忽ちに、本物の警官に依つて扮せられた僞警官は赤色自動車に飛び乘つてそれを走らすと、鼠色自動車はその後につゞく……。

擬演は三度くり返され、デラレはシユタインメツツ君及び幾人かの次席檢事と病院の三階の窓から詳細にそれを觀察した。たほ搜索用のため寫眞は幾枚か撮影せられた。デラレ主任檢事の曰く、擬演の結果は申し分なし！

全歐を刮目させたクーチエポフ將軍失踪事件も、新聞讀者の興味を引つぱつて行つたのは先づこゝ迄で、その後は記事も頓に繼子扱ひにされて小さくなつた。と言つて、この謎が解けたと言ふのではない。その後の報道を見ても、有力な手掛りと言ふものは全く捉めないやうである。

茲に、その後今日に到る迄の報道、及びそれ迄でも私の記述に洩れた事で、多少目さきの變つたのを個條書きにすると、

一、ブロンド美人ルドミラも彼女の夫も、警視廳に召喚されて、訊問を受けた事はないと言つて、新聞記事を否定してゐる。

一、リベルテ紙に報ぜられたゲペウーの主魁イワノギツチの妻は、その後パリのソギエット大使館内に收容されて保護を受けてゐる。

一、將軍を捉えた者はラトギヤのパス・ポートを持つてゐた。故に海港地ではそのパス・ポートの所持者を警戒してゐる。(ラロッシユ電報)

一、(極最近、即ち三月一日の記事)將軍誘拐の顚末及び現在の運命を詳知してゐると云ふ不思議な三人のラトギヤ人が昨日パリに入りこんだ。警察では嚴重な警戒を加へつゝあるが、彼等の語る所によれば、將軍は自分達の住居の傍で事實に遭遇したと云ふのである。今日警視廳に出頭、凡てを陳述するであらう。

最後に私が非常に愉快に思ふのはプチ・パリジヤンに載つた記事である。曰く、

一勞働者はポルタン・ベッセンの海岸(フランスの北海岸シエブールとアーヴルの間)に漂ふ壜を拾ひ上げた所、クーチエポフ將軍のと覺しいメッセージが入つてゐた。それには、今、自分(將軍)は捉えられてソギエットの荷物船スパルタックに乘せられてゐる。奇蹟による外助かる見込みはないから、この壜の拾得者はどうか私の最後の挨拶を友人達に傳へて呉れるやうにとの旨が認めてあつた。……

さすがにこの記事は、私の知る限りで大抵の新聞が默殺したやうだつたが、英國保守黨の直接機關誌モーニング・ポストにはパリ電報として載つてゐた。なほこのソギエット汽船スパルタックは一月二十五日アーヴル出帆、途中アントワルプに立寄り、一月三十一日にブルンスブツテルを過ぎてゐる。そこはキイル運河の入口で、レニングラードに續く航路が開けてゐる。日付から見ても順路から見ても少し喰ひ違つて平仄に合はない。

(一〇)『ソギエット地獄』

各ブルジョア新聞は、この事件の發生後、パリに於けるソギエットの魔手の愈々陰險酷毒なるを證明すべき怪事實を一再ならず報道し

た。或る新聞にはゲペウーが元のツアの血統の生存せる一粒種子で帝政復活の暁には天子となるウラジミル大公（十二才）をムードンの森で捉えやうとして果さなかつた記事が出た。或る新聞には、ゲペウーは今年五歳になるクーチエポフ將軍の子供を捉えやうと計りつゝあるが、これは將軍が剛直で白露再興の秘策を白狀しないから、この可憐の少年を將軍の前で拷問に掛けて、無理にも口を開かせやうとする策略らしいとの記事が出た。その他A・B・C・D……と元のロシヤ貴族の子供の危機一髪に虎口を脫した報導が數々あつたが、みんな云ひ合せたやうに十才以下の年齡になつてゐたのは、如何に讀者の憎惡を集める策略には子役を使ふのがいゝとは言へ、ソギエットを鬼子母神樣か山椒太夫とでも勘違ひをしたのではあるまいかと、私には懸念された。

そんな報道は主として大仰に英國新聞に見えたが佛紙にも絕無では無かつた。西園寺公が滯佛當時ジユール・シモンの小品が載るので愛讀されたと言ふ、今ではひどく時代ばなれのした溫厚の長者ル・タン紙（フランス外務省の機關紙）でさへ、某大公の子の八才になるのがヴンサンヌの森で遊んでゐた所、二人の曲者が自動車から降りて誘拐しやうとしたのを、付添女の氣轉で漸く毒手を免れた事を報じた位だ。

それにしてもクーチエポフ將軍事件だけでパリの警察は血眼になつてゐる眞最中だ。その鼻先を掠めてゲペウーがかくも諸所に出沒するのが本當なら、そもく彼等、大膽にあらずんば鬼神に通ひたい。

別に今回の事件と結び付けて云爲されてひどく西歐一部人士のソギエットに對する激昂を買つてゐるのは、その反宗教戰である。英國議會の現在の討議に少しでも注意した者は、保守黨の側から此れがどんなにうるさい程問題にされてゐるかに氣付かずには居られない。勞働黨內閣は駐露大使より何等正式の通知に接せずの一本槍で通して大して相手にしないのは、プラヴダ紙も『宗教防護に名を假るソギエットの內政關涉』と稱して、釘をさしてゐる矢先だから、寧ろ賢明とせねばなるまい。

それは兎に角として振袖一枚から全市の大火事を引き起したのは明曆の昔の江戶の話だが、ジノギエフの僞筆の赤い手紙一本で內閣が瓦解したのは現代の英國の事だ。それに向つてブルジョア新聞が、以上の諸事實をこね合せ、赤露に對する民衆の憎惡心を煽る方便として、どんな宣傳をなしてゐるかの最適例としてデエリイ・メエルの社說を紹介する。この新聞は元は保守黨の御用を務めてゐたが、先日それが分裂して極右に位する『統一帝國黨』が出來ると、資本主の關係からそれに鞍替えをした。但し英蘇版に大陸版を合せると賣行き二百萬に近いウアールド・レコードを持つと言はれてゐるから、反露宣傳としては申分のない最大舞台だ。

社說は題からして『ソギエット地獄』と云ふのである。要旨は――

ソギエットとは嘘を常習にしてゐる國家だ。凡ての廉恥とよき信仰の否定、それがソギエットの建國の基礎である。

そこでは宗教的信仰をもつと云ふ事だけで死刑の罪科に値する。そこでは基督教を徹底的に掃蕩するために狂的努力が拂はれてゐる。更に富豪に對する兇暴なる迫害などと云ふ事は、何世紀にもこの世界にあつた例のない事である。それは現世ながらの地獄王國だ。

罪惡的組織よ。汝の名はソギエットである。而もその蠻行を國內のみで足れりとせず、今や敢て國外にまで及ぼさうとしてゐる。白露の統率者クーチエポフ將軍の失踪は、去秋のパリ大使館員ベサドウスキ氏謀殺未遂事件と相並ぶ咄々怪事である……。(大陸版二月五日)

(一一) Ah! Non, Messieurs!

之に對する赤露防禦側では、お膝元だけにパリのリユーマニテが最も努めてゐる。最初から該紙は長論文を掲げて『クーチエポフ事件はソギエットと共產黨と勞働組合聯盟とに對する憎惡を煽らうとする反革命家のカラクリに過ぎぬ』と言つた。又――

鼠色の自動車、赤自動車、にせ警官、粗地外套の美人、ムードンの森、ニユイー外郊、サンゼルマン街道、ロアレ、ノルマンデイの海岸、發狂運轉手、幻覺症の踏切番。自動車、飛行機、怪汽船……さても目まぐるしい手品ではある……

成程、さう言はれるとそれらが誇大に報道されたから何一つ有力な手掛りとならず、隨つてそれに依つて搜索が一向に進捗した跡が見えないのは、誰でも一寸不思議にせざるを得ない。

リユーマニテが最も憎んでゐるのはリベルテだが、併しブルジョア新聞とあれば相手は問はない。アミ・デユ・ポープルからポプレイルに到るまでの十五新聞よ！と、彼は歷次呼び掛けて挑戰する。そしてそれらの諸新聞が失踪後十五日にして、言ひ合せたやうに、將軍は恐らく發見されないだらう、たゞゲペウーの犧牲となつた事は確かであるとの旨を記載したに對し、

"Ah! Non Messieurs! Le jeu est un peu facile..(そんな言葉では皆さま方、少々細工がお粗末すぎますよ)と云ふ調子の皮肉な揶揄を報道の中に交へてゐるには、時々思はず失笑させられる。そしてリユーマニテは結局――

國際的資本主義の今、最も希念する所はロシヤを彼等が搾取の驅使にもつとよく甘んずる者をして統治せしめん事である。クーチエポフ將軍事件は必ず、此の希念のもとに諸種の白露防護者が合同して謀んだカラクリに過ぎない事が初めから見え透いてゐる。……

そして他の一切のブルジョア新聞が毎朝の標題に必ず"Enlèvement de Koutepoff" とおく所をリユーマニテは又必ず Laffaire Koutiepov" と輕く扱つてゐるのも目立つ對照である。

最近では他のブルジョア諸新聞は、自分達の洗ひ立てた材料が一向探索の進捗に役立たぬのに間が悪くなつてか或は沈默を守り、さうでなければリベルテの如く、當局はこの事件にソギエットを糺彈すべき確證を握つてゐるのに逡巡して公表を憚るのは吾人の意を得ないと苦しい辯解をしてゐるのに、リユーマニテは自分達の豫言の當つたのを誇るかの如く、皮肉、諷刺、漫罵、毒語の限りを盡して、ブルジョア新聞に當つてゐる。三人のラトギヤ人がパリに入つたのを報じた時には、これで此の小説は第三卷に入つたと附記した。

ロンドンのデエリイ・ウオカアは、場所が離れてゐる加減か、ソギエット宣傳の英字新聞なのに、防戰に努める事リユーマニテ程熱心ではない。二月十一日の『反ソギエット陣營日錄』に拾ひ上げたのが確か最初で、その後も『ナンセンス』と稱して、まじめに相手にしない。

クーチエポフ將軍失踪事件。

それは果してブルジョア新聞の宣傳する如く、赤露の陰謀であらうか。併しそれにしては餘りに明確な證據となるべき手掛りなきを如何？

或はそれは又共産黨諸新聞の言ふが如く、國際資本主義のカラクリであらうか。併し彼等は、その位な玩具花火で、既に十年以上固めて來たソギエットをどうかし得ると思つてゐる程、それ程ソギエットを輕視し、白露をたよりになるものと思つてゐるであらうか。私はそれにも首を傾けずには居られぬ。

いづれにせよ滯歐二年の間、私の見聞に入つた最も不思議な事件の一つは此れである。

＊　＊　＊　＊

なほ此の事件を主題にした探偵小説はパリで發行さるる週刊ヂテクチヴに數回載つた。第一回は二月六日發行の誌上に既に發表せられてゐるのである。この事件の最初に新聞記事として見えたのが三日か四日なのだから、それを直ぐ種子として取りこんだ手際の素早さは驚くの外無い。お蔭で私は買ひそくなつた。第二回以後のは大抵見てゐるが、速成だけに只新聞記事をそのまゝ小說體に引き伸ばしただけで、玆に特別に書いてみるが程の事はない。

但し、いづれ著名な作家の材料となつて、森下雨村君をして應接に遑なからしむるのもさう遠い事ではないと信ずる。(三月三日、地中海沿岸ヷンスにて稿)

シンクレーア・評傳

前田河廣一郎

1　ロボツト

ブルジョア・ジャーナリズムにとつて、アプトン・シンクレーアほど、個性的な『興味』の尠い作家も二人とはなからう。

今日、彼れの作家生活を好奇的に觀察したとすれば、それは、或る精巧な思索・調査・構成の機械が、日々一定額の生產品を市場へ送るために、その複雜な軸や、壓搾機や、調帶を極度に活躍させてゐるのを目撃することになるだらう。

配下に數十人の調査部員を置き、出版部には出版部員を雇ひ、原稿は數人の速記者、タイピストに口述し、書簡類は秘書に整理させ、それ等諸活動の首班である彼は、機械の消耗と原料の支入れ生產品の捌け口などを監督する傍ら、營養素としては果實食や斷食を勵行し、日に幾リートルかの水を飲み、一定時刻にはテニスをやる……かうなると、作家生活も、一つの組織である。しかも、この組織に、微細な齒車の狂ひでもが生ずれば、アプトン・シンクレーアの『オイル！』も『ボストン』も出版されてゐないのである。

一つの作物の完成から、次の作物への移行に費やす、普通の文學者の示す無限の努力などは、シンクレーアにとつては、殆ど不必要な精力の濫費であるにちがひない。私は、つい先達、ニュー・ヨークの活版所からシンクレーアの長編のゲラを受取つたと思つたら、次の便では、今度は、古代ローマと近代アメリカとの交錯にテーマを置いた長編を書きかけてゐるといふ手紙を受取つた。

たしかに、ベトーヴェーンの深刻な皺や、ドストエフスキーの狂熱的な苦るしみに、藝術に於ける最大限度の抵抗力の克服を味はつて、人間の弱みと强さとを涙とともに感ずる人達は、アプトン・シンクレーアのかうした創作態度を見て、最も客觀的な氣持からさへ『ロボット！』と絶叫したくなるにちがひない。又、事實上、シンクレーアは、一種の合理化的ロボットでもあるのだ。

彼れの客觀的な文字、あのぜんまいのやうに絡らみつく皮肉、深からず淺からず平易にどこまでも伸びる散文、作物の力點の平均分布、

常識的な人間感情の取扱ひ、感覺力の缺乏――さういふ彼れの長所と短所とは、このロボット生活の生産でなくて、何だらう？　いや、これこそは、小說家といふ私經營工場に於ける、生産品の標準化、類型化、そして能率增進化された產物でなくて、何だらう？……

しかしながら、これには、理由がある。その理由は、シンクレーア自身の生理的、心理的、精神的必要から發生したものでもあるが、一面、彼れの道德律が、近代アメリカの餘りの醜惡さに反撥したといふ必然性も介在するのである。

我々のシンクレーア研究は、かうしたシンクレーアといふ作家の主觀的方面と客觀性とを併せ吟味して、反映的に今日のアメリカ帝國主義的資本主義の剔抉にまで及ばねばならない。



最近のシンクレーア

2 略傳

アプトン・シンクレーアは、一八七八年九月二十日、アメリカ合衆國、メリーランド州バルテモーア市に生れた。

父は、ウイスキーの代理販賣人、母は地方鐵道會計主任の娘であつた。――母からは基督教的教化、父からは、酒精に對する反感を受繼いだ。

アプトンの祖父アーサア・シンクレーアは海軍少佐で、『ペルリ提督』艦隊の一艦長として、一八五二――五四年に日本へ渡航してゐた。その後、南北戰爭にあたり、シンクレーア家は、南方同盟軍の敗北の歴史に捲きこまれ、奴隷搾取の上に立つた特權階級の傳統をかかへながら、窮乏

勃興時代の北方アメリカに漂泊しなければならなかつた。

アプトン・シンクレーアは、十二歳にニュー・ヨークの小學校を終へ、十四歳同市市立カレッヂへ入學、十八の歳にA・B・學位を得た。次にコロンビア大學法科に籍を置き、傍ら家計を助けるため旺んに通俗小説を濫作し、その量は優にスコットの全集に比すべきほどであつたといふ。

一九〇〇年、處女作『春と收穫』に着手し、同年十月、最初の夫人と結婚した。一九〇二年、『アーサア・スターリングの手記』を著はした。不遇な詩人としての作家自身の憂鬱な感情を盛つた作物である。一九〇四年、南北戰爭を背景にした歴史小説『マナッサス』が發表されてゐる。これまでは、貧困と家庭爭議とに惱まされた作家の文學的徒弟時代とも云ふべきである。藝術至上主義の夢は、これから剝げ落ちた。

一九〇四年秋、知人を頼つてイリノエス州シカゴ市に赴き、ストックヤードに七週間勞働して、その體驗に基いた小説『ジャングル』を社會主義週刊新聞『アッピール・ツウ・リーズン』へ連載した。この作物のために、ローズヱルト調査委員會が設立されたり、アメリカ一般に各種産業機關の調査熱が昂まつたが、作物の持つ社會主義的意義は、これら新興プチ・ブルジョアジーの政治・經濟運動の顧みるところとならず、かへつて資本家側のシンクレーアに對する逆宣傳を助長するに留まつた。しかし、その階級意識のためにアメリカ内では排斥されてゐたとは云へ、『ジャングル』が英國ヨーロッパに與へた反響には凄さまじいものがあつた。アプトン・シンクレーアを、アメリカの作家とならしめず、世界的作家とならしめたのは、皮肉にも、外國の屠殺業製肉業系資本家であつたといふことも、資本主義そのものの持つ矛盾の一例である。

一九〇七年及び翌年、『メトロポリス』、『マネー・チェンジャース』が出版された。前者は上流社會の腐敗を痛撃し、後者はウォール・ストリート金融機關の解剖を試みた作物である。これらは、作家が『ブラス・チェック』で抗辯してゐる通り、『危險』なこの作家に對する、資本家の操る文學界一般のボイコットに會つたこともその失敗の一因であつたに違ひはあるまいが、同時に、作家自身としても、『ジャングル』によつて獲得した客觀的・主觀的精力を延長させたのみで、何等内面的躍進を試みなかつたことが尠からぬ敗因となつてゐる。一九〇六年十月、著書によつて得た印税三萬弗をもつて、彼はヘリコン・ホームを創立し、思想方面の頭腦勞働者四十家族餘の集團家庭を經營したが、原因不明な失火のため、半ケ年にして、各種の調査書類と共に、この幼稚な社會主義實驗室は灰になつた。

一九一〇年胃病に苦しんでゐる間に著はした『サミユール・ゼ・シイカー』は、シンクレーアの文學技術とイデオロギーの最低レヱルを示す點に於て、『プリンス・ハーゲン』『機械』等の戲曲と伍すべき作物である。そして、この年に我々は、彼れの今日の藥物主義的生活を律す

るにいたつた『賭食療法』の著とその試驗的生活が行はれた。これ以後の沈潜期間、作家の態度は、僅かに主觀的觀點に狭ばめられ、『愛の巡禮』、『シイルヴイア』、『シイルヴイアの結婚』などの家族的、性的問題に集中された。一九一一年、『愛の巡禮』に於て、兩性問題を新しい見地から解釋した筈のシンクレーアは、該書出版と前後して、夫人が愛人と逃亡したといふ皮肉な出來事に出會はした。州法によつて離婚不許可となかつたところから、彼はオランダに赴き、離婚手續を經て、外遊の旅を終り一九一三年に歸國し、間もなく、現在のシンクレーア夫人と結婚した。

『キング・コール』は、歸國後、新しい努力をもつて書かれた炭坑爭議の記錄で、資料はコロラド州ルドロオのロックフエラー系礦山の爭議から得たもの、ブルジョア諸新聞が該地方の官憲と軍隊と反動團の殺戮行爲を一行半句も報道しないところから、調査を經て歸つた作家が『沈默示威』を行ひ、故意に檢束されてやつと世間にその慘劇が發表されたといふエピソードもある。ジョールヂ・ブランデスの如きは、この作物を激賞するあまり序文を書いてゐる。

一九一五年、一家はカリフオルニア州パサデナに永住的根據を定めた。一九一六――一八年、世界の社會黨及び革命的社會主義諸集團に一大試練となり、史的モメントとなつたヨーロッパ大戰に於て、アメリカのS・P・も戰爭か、非戰か、の態度確定のために大動搖を來した。日和見主義的社會民主主義と、正統マルクス主義との決定的分裂が、この機會によつて即決されることとなつた。セント・ルイス市の大會に於て、シンクレーアは、ジョン・スパルゴオ一派の社會民主主義的傾向の少數派とともに主戰論を主張して、ソシアリスト・パーテーを脱退した。彼は、後にそのことを辯明して、ウイルソンの人道主義的アッピールに幻惑されてゐたのだと云つてゐる。しかるに、この決裂の顛末をも含めての、彼れの精神的動搖を取扱つた作物『ジミー・ヒギンス』が、一端『アッピール・ツウ・リーズン』紙に發表されるや、この社會民主主義作家は、社會黨より一歩先んじて、ソヴエート・ロシア支持の結論にまで飛躍してゐた！

スパルゴオ一派が反動となつた傍ら、この作家は、固有の彈力をもつて、コムミユニズム承認にまで質的變化を遂げてゐた。それが、單純な承認であり、そこに又多少の日和見主義の介在をゆるすとしても、『ジミー・ヒギンス』に於て、作家が社會主義小說家としての第二期の活動に這入つたといふ事實は見逃し得ない。

一九二〇年に『スパイ』、『ブラス・チエック』。その後『マモナート』『マネー・ライツ』など。

一九二七年、力作『オイル！』の出現によつて、作家の視野の更に擴張されたことが覗はれる。それは、この石油企業家の經濟的諸關係を吟味する作家のイデオロギーに、刻苦的な努力が發見されるからである。『オイル！』は直ちに『ボストン』によつて繼がれ、『ボストン』は今年『マウンテーン・シテー』の出版となつて連續的な作家の勞作

の焦點が、在來まで無意識的に、或ひは有意識的に、ブルジョア社會機構の暴露にあつたことが、今は確實にその諸戰術の統一化と集中と鬪爭の現實性を帶びて來たことを證明する。

――如上は、一打ほどの『讀み應へのある』長編小説を持つアメリカの社會主義作家、アプトン・シンクレーアの略傳である。

更らに、この略傳の主人公が、小説家といふ大衆の關心を惹く頭腦勞働者であるが故に、我々は、數十行の親密な作家の畫像を添へることもゆるされるだらう。

3　肖像

壯年時代のアプトン・シンクレーアは、こんな風に描き出されてゐる。

『……がつしりした、中脊たつぷりの好男子、最初の會見では、ウエルスを懷はせた。だが、シンクレーアの容貌はもつと整つて居り、額はずうつと宏ろい。眼だつて、ウエルスのよりは光つてゐて、親切さがあつた。といふのは、鏡面のやうな反射力は尠なかつたが、より敏速で、輝きにみちてゐるといふことだ。眉根の間には立皺があつて――たしかに、思索と疑惑とのあとを見せてゐる。おそらく永い決意が、焦慮が、不平に變じたものにちがひない。それにしても、よく均整のとれた顏立で、しかも、額の皺とは矛盾した、直截に、懇切な、てきぱきした擧止がそれと伴つてゐる。シンクレーアは、まだ若かつた――三十二歲位――しかも、「ジヤングル」のやうな大作と、ほか六七卷の長編小説を書いてゐた。彼は、やがて――サーヴアンテスのやうな、豫言者と創造的藝術家とを兼ねた、傑れた數人の一人となることであらう。……』フランク・ハリス――Contemporary Portraits――Vol.III)



少年時代(八歲)のシンクレーア

それから十六七年後、より彼に近接してゐるシンクレーア評傳の著者によつて、中老時代の彼は、こんな素描で傳へられてゐる。

『……アプトン・シンクレーア「個人」は、これら(社會的活動)のほかでは、ごく際立たない、強勁な、白髮がかつた頃合の人間で、早起きな上に仕事が精力的なので、一日僕に二人の速記者を働きづめ

にさせてゐる。テニスは實にうまい、そして、熱心な話の話し手である。當人は「退屈しやすい、ナイーヴで、非個人的な自分」と云つてゐる。「悲愁や、厄災や、失敗は」、彼れの書いてゐる著作の中に感情を濺ぐことによつて、そのはけ口を見出す。どちらかと云へば、懷疑的に心靈現象などを信じ、專門醫からは馬鹿にされる醫術上の新療法などを多分に取上げる癖がある。時折、婦人クラブなどで講演をするのだが、辛辣な主張を、その種の團體の持つ抱擁力に中和させることも知つてゐる。今でも、十七才當時一週四弗半で生きてゐたと同様、平氣で若い金滿家の友人の着古るしの洋服などを着てゐる。借金は常習、それに、人類の爲だと信じた仕事には、決していくら借金をしても躊躇を感じない。いつも何かの新計畫、新著作に、多大な希望を置く性質である。まことに子供らしく、直情的で、信頼することが厚く、おまけに頑固である。彼を愛してゐる人達（いつも忠實に彼を擁護するシンクレーア夫人をも含めて）には、非現實的だと思はれてゐる存在である。」（フロイド・デル――Upton Sinclair――1927）

この二種類のペン畫には、どういふ理由からか、シンクレーアの闘爭的な鼻と、その女性的な唇との矛盾が、觀察されてゐないが、恐らく、これは、フランク・ハリスも、フロイド・デルも、私の知つてゐる限りでは、西洋人なみな鼻の持主であるところから、我々日本人のやうに、その點にはあまり敏感でないせいかも知れない。

この二つの肖像畫的叙述と前記の略傳から、我々の觀取できることは、シンクレーアの個人性が、極端にまで清教徒主義的であり、食慾、喫煙、飲酒癖、性行爲、戀愛關係等には淡泊そのものであつて、常に一定の自己統制の下に、自分に課した勞働に專心してゐる一個の禁慾的行者に近いものだといふ事柄である。と云つて、屢々の場合、彼が抗辯するやうに、彼はこの生活態度を、他の何人にも強いたり、或ひはその個人的批評を敢て弄ぶほど狹量な道德感を抱いてゐるわけではない。彼は、文筆勞働に從事した三十年間の努力ののち、この方法が、最も有効に能率的に自己を仕事に適應せしむる、鍛工上の金敷だと知つたからであるに過ぎない。

しかし、我々はこの生活態度の私的選擇が一旦、『マモナート』や『マネー・ライツ』のやうな、より直接にシンクレーアの主觀を透徹した評論に於て、他の文學者達に對する道德教訓性となつてあらはれた場合、又作物中にも、時折、その人物にむかつてシンクレーアの試みる揶揄、皮肉、訓戒、説教等が、必要以上にも、作家の主觀の混入に對して有つ紐帶に、始めて、この作家の古るい教育と傳統と感化とを見る場合、そこの存在を知り、そのピューリタニズムの狹さによつて、シンクレーアの缺點は、缺點のないところにある、と云ひながら、批評に人間的單位を恢復する所以である。我々のシンクレーア個人について、何等かの主觀強調性の痕跡を發見するのは、殆どこの潔癖に近い道德感、道德に近い潔癖性にあるだけだと云つてよい。それも、年と共に、作家が圓熟の境地に入りつつあるところから、次第にその

遊離した小ブルジョア性を階級意識の中へ沈溜し行く傾向にあることとは、當然しかあるべきことであると同時に、仲々困難な因襲的な事柄だけに、さうした勇氣を持つ彼に滿腔の敬意を表するわけである。

4　作物とそのイデオロギー

シンクレーアの五十二年間の生活は、作家としては多岐多端であり、その全輪廓を掩ふ色調は寧ろ悲劇的である。零落せる一家に生ひ立ち、やゝ裕福な親戚縁者達からの誘惑に打勝つて、獨力大學に入り、そのために無數の三文小説を書き飛ばし、一日交替で二人の速記者を忙殺したたどといふエピソードは、小ブルジョア的立身傳中の人物を髣髴させる。經濟的に不利な立場に置かれた彼が、萬難を排しても、文壇の表面に出ようとした「ジョン・スターリングの手記」以前の彼には、やはり無名時代のゴルキーなどと同じ悲慘な焦燥と絶望とに充ちてゐる。

一方、家庭には、貧困を呪ひ、作家生活を唾惡し、唯物的幸福だけを貪りもとめてゐた、同伴者があり、自分は甚く健康を害し、同時に文壇は一向に對手にしてくれないといふ境遇の彼が、「ジョン・スターリング」といふ架空の詩人の名を藉り、ニユー・ヨーク・タイムスの三面記事を引用してまで、それが溺死した詩人の「遺書」であつたといふ風に裝うて該書を出版した心理には、切々として迫まる何物かがあるではないか！　だが、この呪詛、この自然發生的反抗意識を轉換して、彼が、日頃生理的にさへ疑問としてゐたところの食料品産業中の重要な部門である屠殺製肉業の機構の内部に爆發せしめた時に（「斷食療法」參照）・最も痛快がつたのは、漫然たる資本主義の社會主義的暴露にあつただけではなくて、彼れの胃腑と、壓迫に對する復讐心であつたにちがひない。公平に客觀的でありながら、時に急角度的主觀性をあらはす、清算された今日のシンクレーアを見ても、よくその邊の事情を窺知することが出來よう。複雜な人間個性の開發は、「毒杯を飲んだやうな」何かの政治觀念や、古代の首枷のやうな道德律の犯し難い部分が多い。その當時、シンクレーアが、「ジャングル」の成功に眼を瞠つて叫んだ言葉は、よく半ば藝術至上主義の夢に魘されてゐ、傍ら人道主義に誘拐されかかつてゐた彼れの態度を裏書してゐる。

「私は、公衆のハートを狙つたのだが、あやまつて拳をその胃腑へ當ててしまつた。」

『ジャングル』は、社會自體にとつても、亦、シンクレーアにとつても、一つの驚きであつたに違ひない。それは、「詩人シエリーの精神をゾラの衣で書いた」と自白してゐる作家の絶望的な反抗が、企らまずして、アメリカといふ大僞善國の肝どころに觸つたのであつた。シンクレーアの反抗に打撃されたアメリカは、ジョージ・ワシントンといふ高利の金を貸して富を造つた最初の大統領が、五十五人の立法部委員に、「奴隷制度をふくめての私有財産制が危機に瀕してゐたので――如何なる州の無産民達も、亦、如何なる州の過激な思想を持つた州立

法部も徒黨を組んだり、法令を册立したりして、現在の特權階級に××の危險を感ぜしめざるため、最も鞏固な中央集權的政府を確立せしめた』(ダブリュー・テー・コルヤー —— Americanism, 1922 ——)ウルトラ・ブルジョアジーの政體を持ち、西米戰爭當時は、出征軍人に病牛病豚を食はせ、死馬の罐詰を送つた惡政商の橫行したアメリカだつたのである。『ジャングル』に現はれた社會主義、人道主義、無政府主義の混合觀念體は、きわめて初歩的な階級意識の表示であり、しかも、資本と勞働との明確な對峙を具體的に描出してゐない點などから、我々は、作家が最初から明確なマルクス主義的社會觀に導かれて執筆しなかつたものでないことを知り得ると斷言してもいい。一面、當時の先覺的インテリゲンツイアには、このアナ・ボル混合形態の混沌性があつたことは否めないのであるが、同時に、それは、作家としては主觀的に偶然な事柄であつたにちがひない。我々は、歴史家から、コロムバスがアメリカを發見するまでの順序を聞いてゐる。最初、コロンバスは、日本へ行つたマルコ・ポロの旅行の話を聞き込んで日本といふ國は非常に黄金の多い國だといふところから、素寒貧で冒險的であつた彼は、百方、わたりをつけて日本發見の航海へ旅立つた。そして、發見したのがアメリカ大陸であり、彼は死ぬまで其處をアジアの一部分だと信じ切つて居つた。(エッチ・ジー・ウエルス—— Outline of History ——)シンクレーアの場合では、半ば豫期しないで上陸した社會主義の大陸に、急激に自分で氣づくと立ち直つて、其處を意識的に開拓しただけである。

『ジャングル』に於ける暴露戰術は、主として體驗的なものであつた。しかるに、次の二作は、比較的彼れの體驗とは縁遠いものであつて、しかも、まだ古典的な教養と小ブルジョア的センチメンタリズムに囚はれてゐた作家としては、科學的暴露の周到な刳り取りは頗る困難な仕事であつたに相違ない。これは當然の躓跌であり、その故に敵が嘲笑したと云つて、敵を恨む理由にはならない。

だが、この『ジャングル』以後の作家の失敗は、執拗な彼れの意力と明敏な理智とに、アメリカとは如何なる資本主義產業國であつたか、そのデモクラシーと稱するカモフラージュはどんな搾取制度の別名であつたかを、深刻に反映せしめたといふことは重大な意義を持つものである。(ブラス・チェック)そして、その間に、彼れの過重な文筆勞働から生じた肉體的變革が起つたのである。彼れの作物が憂鬱に、內省的になり、或は健康の恢復術のために多大な犧牲を拂ひ、或は家庭爭議の解決のために性問題の合理化をはかり、『ジャングル』以後に於ける機械的な寫實主義を、もう一度出發點まで引き戻して見直したといふことは、尠くともシンクレーア自身にとつては全然無意義な行動でなかつたにちがひない。どんな作家も、最初の滑走力だけで、ゾラのやうに一直線な廣い大道を驀進し得るものとは限らない。この沈潛期、內屈期に於てこそ、作家の個性の發展が無限の苦悶と懊惱と內訌を經て、その吸引力を強め、角度を殖やし、彈力を鍛錬し行

くのである。

シンクレーアが、ヨーロッパの旅を終つて、家庭生活を整理し、直ちにコロラドのストライキに參加したことは、この作家の雌伏期がいかに有効に且つ賢明に利用されたものであつたかを我々に教唆する。『キング・コール』は、單的に貧弱な一ストライキの記錄であるだけではなくて、『ジャングル』に於て調べ殘された部分、——資本家側の陣營にもう一歩戰術的に踏み込んで描いてある。しかも、その前提として？作家は主人公をブルジョアの子弟として、そこに屈伸性を持たしてゐる。ジョールヂ・ブランデスの食味をそゝつた、ブルジョア青年とプロレタリア娘の戀愛事件などは、寧ろこの小說としては第二義的な興味に屬すべきである。一體に西洋人には、戀愛至上主義的傾向が多い。その點、シンクレーアが、さういふ外來の批評に魅惑されず、常に『シイルヴイアの結婚』に於て淸算した性問題に對する公平な見解を支持し通したことは、この問題の關する範圍に限つて、正しく且健康であつた。同じ現象が、ジャック・ロンドンの上に起り、あの勇氣ある社會主義作家が、戀愛至上主義に妥協して無殘な自殺を遂げたことは、アメリカのプロレタリア文學にとつては、眞に傷ましい事實である。

『ジミー・ヒギンス』を中心としての作家の黨關係及びその分裂の態度については、寧ろこの夢想的な社會主義作家が、現實の酸テストに會つたものとして、それが彼れの持つ大部分の人道主義とセンチメンタリズムとイデオロギーの曖昧性とを解消した刺戟であつたことに我々は興味を感ずるものである。そして、全米の社會黨からあらん限りの誹謗を浴びながらも、彼れの本來の傾向であつた世界産業勞働者組合の一派と殆んど時を同じうして、ボルシェヴイスム承認にまで進んだ彼は、第二インターナショナルと組して、社會民主々義に墮落し去つた社會黨よりも、遙かにより健全な階級的步動を撰んだものと云はればならない。

これは必ずしもそのイニシヤテーヴがシンクレーアといふ作家にあつたわけではなくて、ロシア革命といふ世界のプロレタリア運動史上の劃時代的モメントによつたものであることは無論である。そして彼が、進んでアメリカのインテリゲンツイアを代表して、『クラルテ』の一員となつたことも、寧ろ前後の關係上當然な行動であるとすべきである。既にその當時、在來まで勞働貴族の配下に眠つてゐたアメリカのプロレタリア運動は、戰時の資本主義の攻勢と、愛國的暴民のショウヴイニズムと、官憲の彈壓とによつて、ドックに、鐵道に、軍需品工廠に、被服製造工場に怒濤の如き反攻勢を取つてゐたのである。デブスは非戰論の爲めに投獄され、ヘーウッドは勞農ロシアへ行かうとし、フォースターは鐵道のゼネ・ストに鬪爭力を集中してゐた。アメリカ共産黨は組織され、アメリカン・ウォーカース・パーテーは建設された。

完全に一般大衆から自由を剝ぎ取り、偏狹な、そして無統制な諸禁

主義をのみ保護する各州州法の下に、合衆國の無産大衆は、或は赤旗の寫眞や複寫をさへ禁じられ（ミネソタ州）、『レニンは世界で一番賢い人間だ。』と云つただけで一人の歸還兵が六個月の禁錮を宣告され（コンネクテカット州）、時に、千人餘りの炭坑夫が全部住宅を追ひ立てられてアリゾナの大沙漠に追放され（アリゾナ州）、或はK・K・Kの虐殺に、陪審員の官選に、勞働組合本部の襲撃に、有力な鬪爭分子の國外追放に、官憲及び資本家の御用スパイの惡辣この上なき『フレーム・アップ』に、あらん限りの暴動的變國運動に、ブルジョアとプロレタリアートとの階級戰線は日に益々緊張と加壓と密度とを加へつゝあつた。時代に敏感な無産階級作家が、この死にもの狂ひのアメリカニズムの跳躍に對して無感覺である筈はない。シンクレーアが、公然とコムミニズムを表明したと否とに拘らず、我々は彼れの次の作物は、統治者階級が行政の名を藉りた惡辣な大衆抑壓の事實を指摘した『スパイ』であつたことを知るのである。この長編は、有名なトム・ムーネー事件を主題としたもので、現に爆發物が爆發した際、通行人の一人が撮つた寫眞によつて、明かにムーネーは爆彈投下者でない實證が擧つてゐたにも拘らず、彼が一人の勞働運動者であつたといふ點だけから死刑の宣告を受け、偶々その寫眞が引き伸ばされて、英國、ロシア、ミラン、ネザーランド方面からプロレタリアート集團の手厳しい抗議を受けたので、その宣告を大統領ウイルソンは終身懲役に中和した。といふ事件から、作家は一人の傀儡の如きスパイを抽出して、その惡漢がいかに無政府的なブルジョア社會に生長するかを取扱つたものである。（この作は、期せずして、私の『捕へられた男』と同じ事件を取扱つた）

『オイル！』に於ては、作家は、より全面的にアメリカの産業組織の一ユニットである石油業に肉迫すべく、頗る大掛りた出發點から、その金融、政治、社會、勞働等各方面の微細な分析を試み、單に縱の斷面圖だけではなくて、資本主義の平面的圖表、時間的發展をも作中に包含して見せてゐる。この一篇の副主人公であるポール・ワトキンスは、『ロシアから歸つたジミー・ヒギンス』であつて、些か力の足らぬ恨みこそあれ、シンクレーアがこの作物の全般の梃子として使つたコムミニズムの宣傳講習的な添書きである。ここまでこの作家は、コムミニズム・イデオロギーに近接して來た。しかし、我々の考へなければならないことは、『ジャングル』に於て、この作家がやや不鮮明な態度でソシアリズムを取扱つたやうに、ここでも、やや不確定な日和見的態度でコムミニズムを取扱つたことの危險性である。コムミニズムの作家が、コムミニズムのイデオロギーを消化しつくさずして、その與へられたる社會に於けるコムミニズム運動の歴史的モメントの認識を回避乃至は高踏的に飛躍する場合に、我々は、左の足を差出して右の足靴を當てがふやうな錯倒を見るだけである。その意味で、『オイル！』が、單なるブルジョア的分析リアリズムに墮しないことを救ふ爲めに、我々は、『ジミー』の立場よりし一面に於て、『ポール』の立場か

ら、作者がもう一度この大作を書き直す必要がなかつたかと感ずるのである。何となれば、當時のアメリカのコムミユニズム運動は、シンクレーアの認識よりも、より深くもう一歩だけ先へ進んでゐたのを知るからである。文學的技術方面から云つても、未だに、サツカレイ、ゾラによつて受けたブルジョア寫實主義の不純なるものが、多分にシンクレーアの血管を硬化させて居たことが認められる。しかしこの長編の結末のラヂオを應用した個所は技巧的には頗る冴えたものと思はれた。殊に、アメリカのラヂオとソヴエート・ロシアのラヂオが混線する場面などは、素晴らしいエフエクトである。

『ボストン』にあつては、作家は鋭角的にファッシスト化せんとするアメリカの帝國主義的資本主義の陣營と對立してゐる。殆んど何等の過激な、或は過激ぶつた文字をも使用せずに、作家の闘争力は、描き出す人物の一人一人の矛盾性により、それらの群集の諸矛盾の相對關係により、それら一切を曳摺つて動く大きい運動の聯りにより、遺憾なくサツコ・ヴァンゼツテ事件を中心とした階級的大ドラマの構成に成功してゐる。尤も二三の生優しい小ブルジョア性が綿密なデテールと人物のマッスの洪水的氾濫の外に浮き出してゐるとは云へ、かくも現實的な事件を、かくも批判的に取扱つて、尚ほかつ厳然たるブルジョアジーの積極的彈壓を行間に感觸せしめる技術は、この作家の創作態度に一段の飛躍を我々は發見するものである。だが、『ボストン』に現はれた作家のプロレタリア・イデオロギーは、題材の重量と、視野の廣汎なるに比して、さほどまでアナーキズムと根本的對立を示すほどにまで科學的分析がほどこされてはゐない。狹量は、つねに凡ゆる運動の障害である。と云つて、無批判的な抱合力は、更に危險である。要は、アメリカのプロレタリア運動の現段階に於て、ア



一九〇五年にジヤングルを執筆した家

ナーキズムとコムミユニズムの對立が、どういふ戰術的意義を以つて批判されてゐるかを作家が的確に把握すべきであつたのである。ここにも、我々は、まだ古いサンヂカリズムの若干の思想的痕跡を示すアプトン・シンクレーアを發見する。もし作家が、百％のアナーキストであつたり、或は百％のアムステルダム派であつたとすれば、恐らく彼れの如く、帝國主義的資本主義の壓倒的攻勢を描かずに終つたらう。同時に、同じ作家に、甚しく古風な人道主義的低迷の散見されるのは果して、どういふ理由からか？……

近著『マウンテーン・シテー』（これは最近「資本」といふ題名の拙譯が出版される）は、シンクレーアの作物としては、新しく書き直された『マネー・チエンジヤース』とも云ふべき作であらう。主題は單純で、その技術も頗る一般化された跡があり、平明に一人の貧乏人の子供が、資本主義のからくりに操られて、最初の知的教育から金融資本主義の惡感化を受け、最後にフオード・フウヴアー式新經濟資本主義のチヤムピオンとなる過程を如實に描寫したものである。この長篇に於て、シンクレーアは年來の暴露戰術をつとめて强調化して利用してゐる。昨年末の公債濫發、生産遞減等の原因によつて、資本主義の矛盾を遺憾なく露出し、ウオール・ストリートに三週間にして五十％の公債の市場價値を零にした、あの大恐慌を、シンクレーアは、自ら豫見したと云つてゐるのであるが、豫見といふ直感方法は別としても、その事實はコムインターン第十回本會議に於て決定された資本主義第三期の危機として取扱はれた問題なので、はからずもシンクレーアが、この資本主義の劃期的動搖を、直感的見透しによつて感知し得たとすれば、それはそれだけの興味をもつて取扱はるべきである。

不思議とこのプロレタリアートに讀ますべく書かれたプロレタリア小説には、一人の意識的プロレタリアートも登場しない。終始一貫、一人の大金融資本家の發展に作家の技術が向けられたことは、シンクレーアとしては、異とすべきである。

この作物に關しては、他日批評の機會を持つことと思ふが、ここでは、何等の階級的コントラストを提出しなくてこの種の階級的作物を創造したことの奔放さを暗示して置くに留まらう。

5　健康狂

我々は、『アプトン・シンクレーア』の著者フロイド・デルから、シンクレーアに關する色々の細かい報告を聽いてゐるが、彼れの批評としては左程耳を傾むくべき種類のものを發見し得ない怨みがある。唯、この短論の冒頭に於て、シンクレーアの禁慾生活、個性抑壓、著述の合理化等に關聯して、彼が殆ど健康狂とも云ふべきほど淡泊な生活方法を選擇してゐることを私は述べたが、そのことがシンクレーア自身の頭腦にどういふ影響を與へるかについて、フロイド・デルは彼獨自の觀察を下してゐるから、こゝに抄錄してみよう。それは、シンクレーアの『人生の本』の批評を試みた左の一章である。

『著者（シンクレーア）の人生觀は、少數の經驗的例外はあつても、主としてフロイド以前である。人生のあらゆる難問題は、この著者にとつては、理窟のわかりさうに豫想される人達へ、一應首肯出來る理窟で、理論的に話し掛けて解決することにあるらしい。そして、さういふ一應の理論で改變出來ない種類の問題は、全く話題の範圍から取除かれるか、それでなければ小つぴどい道德的憎惡をもつてやつつけられる。例へば、靑年男女の重大な問題の一つに、多角的性關係の完全な解放とか、家庭からの精神的釋放などといふ問題があるのだが、この種のことはこの書では云つてゐないし又、全く理解されてすらゐない。かういふ行爲の方面に對する有益な觀察をしない代りに、この書の他の部分では、人間の行爲の說明として、經濟的決定論に不必要なほどの力點が置かれ――その力說のために、折角の決定論も神學のやうな形態を帶びてゐる。そこで、同じ人間の心の働きに對するごく密接な智識の缺乏は、この著者が、自分の心靈學的な事柄に對して持つ信憑の傾向――これは、出來るだけ彼によつて懷疑的に防禦されてはゐるが――に對しても、自分でどう辯護したらいいかに迷ふといふやうなことも出來するのである。』―― Upton Sinclair ――

我々は、五〇%だけのマルキスト、フロイド・デル君に、これ以上を聞かうとは思はない。これから議論を誘導すれば、彼は、滔々として潛在意識の存在を說き、その性慾潛在說を主張し、一聯の精神分析術を試みるだけである。――だが、ここに看過し得ないことは、屢々の場合、フロイド・デルがシンクレーアから抽出さうと努力してゐる、神祕主義的傾向である。

我々は、シンクレーアの思想的前身がエピスコパル教會を脫化した、『人間的キリスト』の人道主義であつたことを知つてゐる。『彼等は私を大工と呼ぶ』の如きものを書いてゐるだけでも、現在でもなほその影響から全然脫けきつてはゐないと思はれる節が多い。それは、彼れの長編小說の隨所に閃見する神學者臭い語調によつても判明する。

ところが、今、彼等の生活方法はあの通りの擬・行者的生活であり、しかも、シンクレーア夫人が、殊の外神祕主義者らしいのである。今年出版された、まだ手に取つて見る機會はないが、夫人の實驗によつた『精神的ラヂオ』といふ三百枚の寫眞を挿入した高價な著述の如きは、我々の恐らく讀む暇がないと思はれるほどの心靈現象的ホッチ・ポッチの羅列であらうことは察するに難くない。もし一度シンクレーアが、この危險なスピリチュアリズムの邪道に踏み込んだなら、その時は恢復し能はざるブルジョア頽廢期の感化を受けたものと思はなければならない。

この傾向の微細な兆候でもがどうしてあらはれたか？

我々は、遠くもない、ごく身邊の彼れの半狂的な一定の潔癖性を誇張した生活方法に對する固執性に、その大部分の要因を見るのである。あの生活は、確かに健康第一主義から出發して、シンクレーアを『健康』といふ僧院に祠り上げてしまつたものである。それは、手段が目的と取つて代ることを意味する。それは、『ポール・ワトキンス』が『イライ・ワトキンス』となることであり、レニンをカソリック寺院へ詣ることだ。

シンクレーアは、よろしく、肉食に還るべきである。（了）

現代蒐集狂

赤神良譲

×

程度の差はある、けれども現代人は誰でも皆狂氣である樣である。

犯罪學者のロンブロゾーが、「天才と狂人とはほんとうに紙一重の相異である」と喝破してゐるのに眞似るならば、「天才ならずとも現代人は、狂人とほんとうに薄い紙一重の相異である」と云はねばならない。だから醫者は、殊に精神病の醫者は、陪審員になる資格がないそうである。

何故ならば彼等にはどの男もどの女も、皆精神病者の徵候を遺憾なく具へてゐる者と見えるからである。今又、吾々が醫科大學で精神病學の講義を聽くならば、丁度新聞で神經衰弱症の賣藥の廣告文を讀んで、「では、俺も少し神經衰弱かな」と思はぬ人が殆どない樣に、「あゝ、それぢや、俺もどうやら少し變になつて來たぞ」と必ず思はねばならない程、現代人には、この狂人的傾向が普遍的のものとなつてゐるのを、自分の腦味噌の中で、摑まねばならなくなる。

ガブリエル・タルドによるならば、狂人は磁石の如く二つの極をばもつてゐる、と云はれてゐる。そしてそれはマニアとメランコリアとである。だからこの狂人の二大特性である焦燥と憂鬱とは、又現代人の二大特性であり、從つてそれは現代文化の顯著なる特質をばなすものである。そしてその氣違染みたるオレンヂ色の焦燥は、現にジャズを生み、ストライキと××さわぎとを煽動し、闇灰色の憂鬱性は、日々新聞紙に見らるるが如き飛下り自殺と親子心中とを、盛に生産し出してゐるのである。私をして若し又この狂人を評さしめるならば、それは心の平衡作用をば失つてゐる人々である。だから彼等の精神生活は片寄つてゐる。船底に大穴をあけた難破船の如く、その平衡をば取戻すことなしに、彼等の心は、傾斜したるがまゝに加速度的に沈下して行くのである。

そして右に沈下するものは、遂にその極に至つてマニアとなり、左に傾斜して行くものは、遂にメランコリアの極に到達するのである。

それ故に平衡をば無視して唯或一方に傾き行く心の愛着性は、それはまさしく狂氣の第一要素であり、その素地である、と私は考へれば

ならない。そして殊にその初期的現象として、私は現代人の蒐集癖を見出さねばならない。而もその癖は又加速度的に、その次の時期に於いて、必ず立派なる「蒐集狂」となり、私の現代人狂氣論を左證するものとなるのである。

×

私はこゝに「現代蒐集狂」の蒐集狂となる程の、急角度の心の傾斜をば有してゐない。けれども私の一部の友人は、私を目して「キッス」の蒐集狂だと考へてゐる。「君、どこそこにキッスの繪があるぜ」と見つけ次第に必ず數へて吳れる。「君、蚤の市に素敵なキッスの銅版がある、高いことを云ふだらうが、なに是非買ふんだね」と次の月曜日に朝早くから私の下宿にやつて來て、巴里十八區のポート・ド・クリニヤンクールの郊外にある古物市に伴れ出して行く。「これは禁止品だから高い」「高いならいらない」といふのを、「まあまあ、そう言はずに買つた買つた」と友人どもが熱中して私に買はせる。

どちらが狂人だか私には一寸見當がつかなくなる。「君、倫敦のトラファルガル十字街にあるナショナール・ガレリーに入つて、二階に上りざまに頭の上を振返り見ると、そこにロダが白鳥を抱擁して、キッスをしてゐる名畫がある、ならば手柄に買つて見ろ」と揶揄する者があると、「何に俺が原色版のその繪を持つてゐるから、實は秘藏してゐたんだが」と躍起になつて、私に吳れやうとする。こうやつて友人に騒がれ出して來ると、私も「それぢや俺は、キッスの蒐集家なのかな」と考へるやうになり、恰も明治維新當時の五流六流の人物が、「無能の達運」で生き殘つてゐると、爲にする取卷き連中が、元老元老と煽てあげる、三呼市に虎をなすの勢で、いつの間にか「それぢや、俺は偉いのかな」と考へ、次いで「偉い」と自惚れて來る樣に、私もいつの間にかキッスに對して、狂的の愛着を持出して來た。

又私は、學者偉人の墓に興味を持つてゐた。

そうすると、「大泥棒の墓はどうです、腕の淸吉の墓は、鼠小僧は、谷風は、雷電は、花魁高尾は、……アレキサンダー・ドゥマアの墓は、ブランキーは、ハイネは……」と學生や友人の有志が、その寫眞を持寄つて來て吳れる。コムトとプルードンとの著書を蒐集しやうとすると、「コムト自身が所藏してゐた解析幾何學の本だ、貴方のコレクションを完成する爲に、時價にして安くとも三百法の本ですが、今から三十年前に買入れた時の十七法でお讓りしませう」といふ本屋の老人もあれば、「プルードンですか、これは今度ブグレーが店から出してゐるプルードンの全集にも出せない、發賣禁止の本ですが、こゝから買つたとは云はないで下さい」と二階から三册の古本を出して來て吳れた、書肆マルセルの若主人もある。考へて見るとこの現象は、現代人が皆持つてゐる自己の蒐集癖をば誰かに、例へば私に押附けて、それで自分等の心の渴望を滿足しやうとする、心理的のトリックでなければならない。

×

だから吾々現代人は、自分の狸に對して持つてゐる蒐集の渇望をば、中橋狸庵氏に押附け、彼をば狸狂氣にすることによつて自らを慰め、ガマに對する好奇的愛着をば、ガマが池の主である渡邊千冬氏に譲渡し、馬に對するそれをば巖谷小波氏に一任し、又千社札の蒐集をばお札博士に、お守札の蒐集は井上哲次郎博士に、文身皮細工の蒐集をば福士政一博士、骰子の蒐集をば尾佐竹猛博士に、刀劍の蒐集は山本悌二郎氏と辨慶とに、美人の蒐集をソロモンに、美男の蒐集をカタリナ女帝に、金の蒐集をロスチヤードとモルガンとに、猥本春畫の蒐集をば法學博士のO氏に、版畫の蒐集をば小島烏水氏に、惚れ薬の蒐集はO理學博士に、若返り秘薬の蒐集は吉田東京驛長に、ステッキの蒐集は、四萬八千本を有してゐるといふ、市俄古市のステッキ狂に、礫槍の蒐集は明大教授大谷美隆氏に、婦人の頭髪の蒐集をばT帝大のF教授に、靴と下駄との蒐集はK帝大のA教授に、骸骨の蒐集は長谷部言人博士と生蕃の酋長とに、佛像の蒐集は小泉三申氏に、それぞれその焦點をば見出して來る。だから彼等は、現代人が有してゐる蒐集癖をば代表して蒐集狂となり、その儁英となつた者である、と考へられる。

然しながら、一般民衆・プロレタリアは、その反面に於いてこの少數個人のブルジョア的獨占的優越誇示的の蒐集狂に敵意をさしはさみ、それに對抗し、彼等も亦何等かの蒐集に於いて、前者に疋敵し凌駕しやうとする。そして私は斯くの如き慾求をば指して、それは「プロレタリアのブルジョア性」によるものである、と考へる。由來、單なる蒐集癖は、加速度的に蒐集狂となることによつて、巨額の費用をば必要として來るのである。然るにプロレタリアは、その出資の可能性を持つてゐない。そこにそのコレクションの對象は安値であるといふ點に於いて、ブルジョアのそれに對して優越性、否、疋敵性をば贏得るに困難である。だからプロレタリアは、當然奇拔の思附を以つて、その安値より來る劣性をば塡補しやうとする。この奇拔性は左傾して犯罪性となり、更に進んではその變態性を生み出して來る。又それは右傾してその至純性より迷信性を發展せしめ、この變態性と迷信性とは、プロレタリアの心の中に内攻し、而もその滿足が常に阻壓せしめられてゐる性的慾望の電壓昂充と相呼應して、その變態性慾性の深度をば益々大ならしめて來るのである。

×

切手の蒐集、マッチのペーパーの蒐集、それは波蘭政府が、世界の切手蒐集狂を目當に、歐洲大戰後の二ヶ年間に於いて四百八十餘種の記念切手を發行し、マッチのペーパーが、特別に印刷されて銀座の夜店で賣られる樣になつては、最早や何等の奇拔性をも、それは持ち得なくなつて了つた。そこで彼等は、親子箸の袋を集め、汽車辨の上紙を集め、ホテルのレッテルを集め出して來た。菓子袋、料理屋・待合の受取、名士の表札、女下駄の右足、盗み集めた盃と徳利、處女の戀文、女郎の起請文、赤き口紅にてハンカーチーフに捺印したキッスの

型、それをば彼等は、千個或は千枚集めることによつて、即ちその至難性と或は又その犯罪性とによつて、彼等の望みが叶ひ、彼等の戀が叶ふと迷信し出して來たのであつた。又心理學を專攻した或文學士が、自分の知つてゐる女のカールしてゐる毛をば、恰も植物學者が標本を整理してゐる樣に、臺紙に貼附け、それを採取した年月日、姓名、年齡、採取地とその出生地とを詳記してゐた。それは上野の森の賣春婦として、その艶名を走せた「紋ぢらしのお芳」の心理と、何等異る所のものではない。若し諸君が、巴里に於いて、又倫敦に於いて、いや就中伯林のカフエー・ビクトリヤに於いて、彼地の婀娜者と話されるならば、彼女等は、必ず幾多の日本の名士、博士、教授、大官の名を、次ぎから次ぎへと披露に及ぶことであらう。そして彼女等はこの暫定的友愛結婚の相手方の名をば、無數にかぞへ上げることによつて、それから一つの科學的、大數の法則に基く所の結論をば歸納して來る。「……だから妾は、日本人の方々から好かれる素質を有してゐる、貴方は妾とこの友愛關係を結ぶことによつて、決して失望しはしない」と。それ故に彼女等はその廣告用として、日本人の名刺を蒐集し、その寫眞を蒐集してゐる。私の友人に某雜誌記者がある。彼は今西比利亞鐵道を伯林へと急いでゐる。彼の目的は、彼女等の先輩、即ち年老いてその名刺と寫眞とを不必要としてゐる老婆達から、從つて現代日本の名士大官の艶名を物語つてゐる文獻をば、蒐集するにあるのである。若し彼がその名刺とその寫眞と切なる戀文との蒐集を、更に蒐集するに成功するならば、そしてそれが日本に持ち歸られ、「暴露の展覽會」に陳列されるならば、一九三〇年をして「暴露の年」たらしむるに價し、大なる驚愕を惹起することであらう。

そしてそこに吾が蒐集狂に對して、抱かれる戰慄がある。

×

又私の知つてゐるM學士は、猥褻袋を蒐集し、その爲に吉原・洲崎・玉の井と方々の芥箱までも搜ね廻してゐた。私が、「君、章魚釣をやつたらどうだ」と惡口を叩いたら、彼は、「章魚釣て？何處で」といふ。そこで私は說明をした「章魚釣て君、夕暮に方々の裏路道を廻るんだ、そして入れ忘れてゐた、女の、、、、、のだけを、干物竿で突掛けてはずすんだ、はずしてどうするて？それを盜んで蒐集するのさ、大阪で先年、簞笥と大長持とに一ぱい蒐集した奴がある。この變態性慾的犯罪を、犯罪學の術語では章魚釣と云ふんだ、君から見たらさぞ尊敬すべき蒐集家ではないか」と云つたら、今迄怒つた事のなかつたM君も、目の色を變へて、「ちや、君はその前科者だね」といふ、「前科者」には私も恐れ入らざるを得ない。

巴里に女の靴下の古いのを盜み集めた、退職の老檢事がゐた。五ケ年間に一千八百足を蒐集したと、日曜繪入新聞が書いてゐるから、約一日一足の割合で盜んで行つた計算になる。彼は死んだ細君が戀しい餘りに、彼女の遺して行つた靴下をそつと穿いて見たのが、病附きとなつたのだそうで、寢室の天井から、それを皆釣下げてゐた。納維で

大學の學生が、學校をやめて郵便集配人になつた。そうやつて女からの戀文を悉く途中で着服して、彼の寢室は、その蒐集された手紙で埋められてゐた。彼は裁判所で「女が私を失戀せしめた腹癒である」と公言してゐたそうである。

「學者て狂氣だな」と實業家のS君が云ふ、「何故か？」と反問したら、「……あのTて花柳病の博士な、毎日セーヌ河へ釣に行くが、君、何を釣て來るか知つてゐるか」

「知らない、いつ見ても五六人の男が釣てゐるが、魚の釣れた所を見たことはない」

「所が時々ゴムの小さい袋を釣つて來てな、それを試驗管に漬けて保存して置くんだ。紐育でも釣たし、倫敦でも釣た、伯林でも、納維でも、羅馬のタイバー河でも釣てやると云つてゐたぜ、そして、そこから花柳病の黴菌を發見して、世界的の論文を書くんださうだぞ、もう五六十本も集つてゐる、今度見せて貰ふか」といふ。「氣の毒に、懷鄕病で變態的になつてゐるんだよ」「いや確に研究心からだ、隨分熱心だ。なにしろ四年もかかつたさうだ、所があの昆蟲記のファブルな、あの男は蜘蛛の研究で、十九年間も野原に暮してゐたと云ふぢやないか、だから俺なぞはまだまだ……と云ふ。學者て狂氣でなければなれない商賣だ」とS君はニヤリと笑ふ。

成程、學者は多分に狂人的傾向をば持つてゐる。或學者は卵子の代りに時計を半熟にした。又或學者は自分の細君をば見忘れて盛にお辭儀をした。日露戰爭を少しも知らなかつたといふ學者もあれば、最近飯を食ふことを忘れて、餓死して了つたといふ古典學者もある。

電車と正面衝突して轢殺されながらも、またラヂウムのことを考へてゐた男もあれば、頭の中に九發の彈を擊込んで、どうして人間はそれでも考へることが出來るか、といふことを考へたといふ學者もあつた。而も學者、殊に自然科學者は、その研究法に於いて蒐集狂のそれと殆ど同一である。彼の精神分析學者のフロイドによるならば、この蒐集狂から學者へと變つて來た、幾多の實例をあげてゐる。

彼フロイドの說は、一言にしていふならば、心理學の辨證論である、人間の心の中には、そのまゝでは破倫の非道德的な、從つて滿足されない欲求がある。そして正しい意志が、その不正なる欲求をば絕えず監視し、その正と反とが鬪爭することによつて、心的活動が生じて來る。斯くして抑壓された破倫な欲求は、いつの間にか變形されて、他の形態に於いて現れて來る。性欲旺盛なる婦人があつた。然し彼女はその性欲の滿足を、不道德的なりとして極力抑壓した。然るにその欲求は變形して、、、に對する關心となり、彼女は、、、の蒐集狂となり、雜多の、、、の比較研究は、彼女をして立派な、、、學者とならしめて來た、と報告してゐる。

私はこの說明、即ち破倫的なる欲求の變形說を以つて、極度に抑壓されてゐる欲求の斯く多き現代人社會に於ける、幾多の學者、又は幾多の蒐集狂の現象を、適確に說明し得るものであると思ふ。だから日日新婚旅行のカップルを目擊してゐる、吉田東京驛長が、若返り秘藥の蒐集狂であるといふことは、地下のフロイドをして、微笑せしめるに足る事實でなければならない。――（終）――

世界の金塊爭奪戰

支那の金本位制計畫と日本

前田繁一

一、病膏盲に入つた各國の金有欲

最近軍縮會議の向うを張るつもりか、ゴールド、デイスアーマメント、コンフエレンス（國際金縮會議）と云つたやうな事を提唱する者がある。各國中央銀行の協調と云ふ事を唱導する人がある。然しカッセル教授やフイシヤー教授の云ふやうに、各國は歐洲大戰に懲りて平和を望むの切なるに拘らず、兵火の軍縮が中々容易でないやうに、否それ以上に此の金の軍縮、金の爭奪戰防止は至難である。

各國は今や血眼になつて金をかき集めつゝある。假令借金してゞも自國の庫中に黃金の光を充滿させたいと祈念して居る。各國は歐洲大戰中、金の缺乏に弱り拔いたのである。苦るしみ拔いたのである。金本位制、金の保有高が多くなければ國際資本戰にはぶりのきかない事を痛感し、彼の印度に於てすら、彼の支那に於てすら、古い歷史を惜げもなく打ち捨てゝ、銀を排して金をかき集める事に浮身をやつすに至つたのである。世界各國の金の爭奪戰は、今後益々猛烈を極めこそすれ、容易に止むべくもない。病こうもうに入つた世界各國の黃金病は、さう易々と全快は出來ぬ。ゴールド・マニヤ、ゴールド・フエチシズムは中々直るものではない。人類の心理狀態が一變しない限り、金本位制に愛想がつかない限り、此の金の軍縮は思ひもよらぬ。然し此の調子で進んで行つたらどうなる？　金の産地を持たず、金が容易な事で入つて來ない國の將來はどうなる？　早い話が假りに遠からず支那が金本位制になるとしたらどうだらう。支那が愈々金本位制を確立するとして援助を各國に求めたと假定したら、日本は果してどれ程の援助が出來るだらうか、東洋に於ける指導的地位にある日本として、支那をして依然日本を信頼せしめ得るであらうか、今日の對支關係、對支經濟的地位を持續し得るであらうか。

二、滔々として流れ出る金

我國は本年一月十一日、多年の宿望漸く成つて、金の輸出禁止を解き得たのである。然も多數諸國の行へるやうに、平價の切下、即ち新平價に依らないで、舊平價のまゝで金解禁を斷行し得たのである。金解禁後最近までに、金が海外に流出した額は日銀在內所有正貨の一億五千餘萬圓、爲替賣却に依る在外正貨の減少額が約一億圓、地金の買上げ其の他を差引いても、金解禁後に於ける我國の正貨減少額は早くも既に二億數千萬圓に上るに至つたのである。

金解禁は國民の多年熱望して止まなかつた所であり、金解禁を斷行した以上、貿易その他國際貸借の狀況に基いて、金が出たり入つたりするのは當然である。ましてや戰時を除いては萬年入超國である我が日本が、金の流出する事は止むを得ない所、解禁に際して國民の既に覺悟せる所である。然し金解禁後に於ける我が國の金の流出狀況は、果して國民が豫想し、覺悟して居た程度のものであらうか、或ひは斯くの如く急激に斯くの如く短期間に一億圓も二億圓も出て行くとは豫想しなかつたのではあるまいか、解禁後の金流出狀況に遺算を感じ、或は其の將來に多少不安の念を抱くやうなものがあるのではあるまいか。

更に又政府當局者にしてからが、當初の豫想に反するやうな事がありはせぬか、日銀當局の爲替政策、金本位制の拙なさから、或は机上に於ける金の流出豫想額以上に、出さなくても良い金を持ち出させたり、外國銀行をして不當に鞘取りをやらせたりして居りはせぬか、此の際我國としては前述した諸種の事項を特に考慮する必要があるであろう。篤に考慮して不當な不安にかられて居るとせばそれを除き、過ちあれば速かに之れを改め、貿易その他の國際貸借を改善し、以つて金本位制の維持に遺感なきを期さねばならぬ。金解禁をして眞に國民の喜びたらしめねばならぬ。

三、金の對內及び對外價格

金が二億圓流出しやうが三億圓なくなろうが、我が兌換の制度はビクともするものではない。我が國民の日本銀行券に對するコンフイデンス（信認）は殆んど絕對的のものと云つていゝ位のものであるから、假りに日本銀行の兌換準備か十億圓から九億圓臺に減じ、八億圓から七億圓臺にすべり込んだとしても、國民の日本銀行券に對するコンフイデンスにいささかの搖ぎも起るまい。歐洲大戰前に日本銀行券流通高が四億二千萬圓であつたのに對して、金貨が一億二百萬圓、金地金が一億二千百萬圓、兩者合計して兌換準備の金が二億二千四百萬圓であつた當時に於てさへ、國民の日本銀行券に對するコンフイデンスが極めて鞏固であつた事を思へば、今後更に金の在高が減り、假りに十億の日本銀行券に對して五億數千萬圓より正貨準備がなくなつたとしても、我が國民の日本銀行券に對するコンフイデンスが薄らぐとは思へない。或は我國の正貨準備が、兌換券流通高若くは流通高プラス預金高に對して三割五分となつたところで、否世界に類例のない二割よりないと云ふ事になつた所で、我が國民の通貨に對する信認は毫末も動搖するものではないかも知れない。それ程我國民の日本銀行券

に對するコンフイデンスは鞏固なのである。從つて金解禁後二ケ月間に一億五千萬圓の金流出を見たからと云つて、ソレ兌換制度がどうの、正貨準備が激減したのと騒ぐにも當らない。況んや我國は歐洲大戰時を除いては萬年輸入超過國である。輸出する額よりも輸入する額が多く、受取る金よりも支拂ふ金が多ければ內地の金の減つて行くのは當然である。殊に金解禁後の一月二月三月は入超の最盛期である。入超最盛期に於ては決濟資金として〻も海外に持ち出される額の多かるべきは何人も解禁前から覺悟して居る所である。故に吾人は、一部の人が云ふやうに、一部の人が心配するやうに、金解禁後に於ける金の流出の狀況を目して毫末も悲觀したり、心配するものではない。寧ろ日本銀行當局が爲替事務に素人であり、其の處置拙きが爲に起る無用の金の流出、外銀に利鞘稼ぎの餘地を與ふるの愚を悲しむ以外には、英米兩國を始め、世界的の金利低下から來る我が金の流出額が減額されつゝある事を、望外の幸福として喜ぶものである。

然しながら日本銀行券に對する此の絕對的の信念は、我が國民のみが保有し得るコンフイデンスである。國內的のものであつて決して國際的のものではないのである。國內でこそ絕對的の信認をかち得て居る日本銀行券も、國際間の決濟上には何等の役に立たず、結局は金でなければならないのである。從つて金を貨幣制度の基礎とし、國際間の取引には結局金を以て決濟すると云ふ今日の習慣、今日の理法を捨てない限り、金の保有高を國內的のコンフイデンスのみに依つて安心して居る譯には行かぬ。國內における絕對的の信認のみを以つて金の流出、金の減少を唯當然の事なりとして眺めて居る譯には行かぬ。

夢を語るの類にして到底其の實現性なしとさるゝ國際間の金保有高の制限なるものが、萬々一軍縮會議の如く國際間に問題とされ、具體化するやうな事があるとしたなれば、必ずや軍縮會議におけると同樣に、各國の金の現有高を基礎として論議さるゝであらう。

更に又支那が遠からず金本位制を確立すると假定して、其の時支那が各國に對して援助を求むるとしたなれば、日本は從來の對支關係、就中對支經濟關係を保持し、進んでは益々有利に之れを轉開せんが爲には、其の時相當援助し得る余力がなければならない。假りに此の金の爭奪戰防止や支那の金本位制確立が、到底兩者とも實現性のないものだとして問題外としても、國際間における我國の信用を高め、國際間に於ける各種の取引、各種の交渉を有利に導かんが爲には、結局各國の貨幣制度の基礎たる金の保有高が多くなければならない。從つて斯くの如く對外的に觀察する時、金の流出は極力之れを防止し、減額し、我國の金保有高をして諸外國に比して餘り遜色のないやう、正貨の保持增額に努力する必要が生ずるのである。

四、猛烈な世界的金の爭奪戰

試みに世界各國に於ける對金政策を見るに、各國は總ゆる手段方法を以つて金のかき集めに努力して居る。世界各國は今や金の爭奪に熱し切つて居るのである。

例へば米國が紐育をして、今や英京を凌いで世界無上の金融中心市場たらしめ得たのも、結局は米國がかき集めた金の後光、御利益に外ならない。今日の盛況を期待して只管金のかき集めに努力し、成功したからである。即ち米國は戰時に於て先づ歐洲各國に對して極力經濟的援助を與へて心服せしむると共に、戰後に於ては各國の産業貿易の振興に、經濟力の復興に、又金本位制の復歸に、所謂「人道主義」的援助の見地から潔よく金を貸した。從つて此の期間は米國の金が滔々として太西洋を横斷し「神の使ひ」として歐洲の貧しき國、再起困難なる國に對して黄金水の洗禮を施し、哀れな傷ついた紙の衣を脱せて、金紗の服（金本位制）をまとわせたのである。かくしてポーランド、ルーマニア、ギリシヤ、ブルガリア及び戰敗國のオーストリア、ハンガリに至るまで、晴れの成年式ならぬ金本位制に復歸を見るに至つたのである。かくして各國の經濟力復興を助け、金本位の「常道」に立ち歸らせた米國は、金利政策に依つてドン／＼金を引上げた。否「金利」と云ふ魔法の杖を一寸上げただけで、歐洲の金は譯なしに米國へ、米國へと逆戻りするのである。かくて米國の金は利に利を生み、子に子を生んで殖へて行き、今や世界の金は米國の自由處分に置かれて居ると云つても敢て過言ではない狀態になり、金本位なるものは事實上の弗本位であり、國際金融の常道への復歸は結局米國弗の王座の前に堵列して、之れに臣服するに外ならぬ、と云つたやうな觀を呈するに至つたのである。

戰時に金が缺乏して困り抜いた佛蘭西、戰前に於ける投資上の方針が賢明な方針でなかつたと覺つた佛國に於ては、戰後投資上に於て其の方針を一變すると同時に、總ゆる手段方法を以つて金の保有高増加に努力しつゝあるのである。さうして金本位制に復歸せしめた一九二八年六月の二十五日には、其の金の保有高が二百八十九億三千萬フランに過ぎなかつたのが、最近（一月二十三日）では實に四百二十八億三千萬圓に激増し、猶は在外バランスを澤山に抱えて居るのである。然うして尙益々金の保有高増加に浮身をやつしつゝあるのであつて、佛國の此の金有慾は、今や將に世界の脅威となつて居るのである。

英國が一億五千萬磅の金準備の維持に努力し、又は佛國その他への金流出防止の爲に、低金利をモットーとする勞働黨内閣が、昨年の秋金利を引上げた一事を以つてしても、如何に金保有高の維持増加に苦心して居るかゞ察し得るであらう。

獨逸までが借金してまで金の増加を計り、金準備は一リラも之れを減じないと云ふだけの用意をして居るのであつて、斯くの如く世界各國は、今や何れを見ても金の充實に日も尙足らぬ有樣である。

五、各國の金の現在保有高

然らば世界各國の現に保有する金の在高はどうなつて居るか、數字は少し古いが、米國聯邦準備局の調査に從つて昨年の十月末、即ち日本が金解禁を聲明（十一月二十一日）した前月末現在における、主要各國中央銀行及び政府保有高を見ると左の通りである。

國別	一九一三年末	一九一九年末	一九二九年十月末
	百万弗	百万弗	百万弗
米國	一、二九〇	二、五二五	四、〇二三
英國	一七〇	五八三	六四二
佛國	六七九	六九五	一、五七〇
日本	六五	三五〇	五四一
獨逸	二七九	二六〇	五三一
伊太利	二六五	二〇〇	二七一
アルゼンチン	二五六	三三七	四八四
西班牙	九二	四七二	四九五
和蘭	六一	二五六	一七八
ブラジル	五三	一六	一五一
白耳義	五九	五一	一四三
濠洲	二二	一一七	一〇九
ロシア	七八七	不詳	不詳
瑞西	三三	一〇〇	一〇三
加奈陀	一一七	一三〇	七七

六、人口一人當りは佛が最高

右表に依つて之れを見る時、米國の金保有高が著るしく增加して行くのを知るであらう。佛蘭西の金保有高が近年急激に增加して居る事を知るであらう。昨年十月末現在の世界主要四十箇國の金保有總額は二百六億四千七百萬圓であるのに對して、其の內三九%（八十億二千八百萬圓）を獨りで占めて居た米國は、其の後更に增加して、本一年月末現在では四十二億八千三百九十二萬二千弗、邦貨に換算して八十六億四百三十四萬四千圓に激增するに至つたのである。さうして金保有高の最も多いのは米國、其の次ぎが佛蘭西、第三位が英國で第四位が日本、第五位が獨逸と云ふ順序になつて居る。然し各國の人口に割り當てると、人口一人當りの金保有高は佛蘭西が最も多いのである。

さうして第四位の日本と第五位の獨逸は、其の保有額に大差なく、今日に於ては或は獨逸と何れが多いか判らぬ位になつて居るのである。

七、モーラルサポートは氣休め

斯うして世界各國が金の爭奪に浮身をやつして居る折も折、我が國は金の輸出を解禁したのである。我が國の金解禁に對して多大の好意を示し、及ぶ限りの援助を爲すべしと誓言した米國、さうして各國中央銀行と協調し、寧ろ卒先してモーラルサポートを約した米國の某大銀行は、我が國が一月十一日に金の輸出を解禁するや否や、恰も待ち兼ねたと云つたやうに、卒先して金の兌換、現送、持ち歸りを開始したのである。勿論モーラルサポートを約した某銀行が、卒先して金引あげを敢てするに至つたに就いては、種々な事情もあるであらうが、或る人は之れを評して曰ふ「日本銀行の不慣れな爲替政策のまづさから、此の外國銀行をして採算上現送しなければならない事情に立ち至らしめたのである」と、又或る者は云ふ、「戰後における各國の金爭奪慾が、遂に此のモーラルサポートをして有名無實に終らしめたのである」と。何がさうさせたか自分は知らぬ。知らないけれ共米、佛、英、獨を始め、世界各國が今や猛烈に金のかき集めに努力しつゝある

事は、其の結果から見て否定し得ない。別にかき集めに努力して居るのでないかも知れないが、最近米國と佛蘭西の金の保有高が激增しつつあるのは事實であり、英國が金の流出防止に努力しつゝある事も、獨逸が正貨準備維持に苦心しつゝある事も爭へない事實である。この時に際して日本は、金解禁後三月の中頃までに、內地の正貨が一億五千萬圓以上減少した事も事實である。さうして例へ英米金利が低下した事に依つて正貨の流出が止まつたとしても、我が國の國際貸借が改善されない以上、外債募集に依つて一時金の減少を阻止し、增加する事があれば兎も角、さもなくば我が國の正貨は年々減少して行く外ない狀態に在る。

八、我が國の正貨減少と其原因

卽ち我が國の正貨在高をさかのぼつて歐洲大戰後今日までに就いて見ると、

年次	內地正貨	在外正貨	合計
	百万圓	百万圓	百万圓
大正三年末	一二八	二一三	三四一
大正九年末	一、一一六	一、〇六二	二、一七八
大正十年一月末	一、一三七	一、〇四六	二、一八三
大正十年末	一、二二五	八五五	二、〇八〇
大正十一年末	一、二一五	六一五	一、八三〇
大正十二年末	一、二〇八	四四五	一、六五三
大正十三年末	一、一七五	三二六	一、五〇一
大正十四年末	一、一五五	二五八	一、四一三
昭和元年末	一、一二七	二三〇	一、三五七
昭和二年末	一、〇八七	一八六	一、二七三
昭和三年末	一、〇八五	一一四	一、一九九
昭和四年六月末	一、〇八五	八三	一、一六八
昭和四年末	一、〇八七	三〇四	一、三九一

右表の通り戰後年々減少して行く一方であるが、之れは取りも直さず我國には金產額が少く、貿易常に入超であつて海外への支拂額が多い爲に外ならぬ。戰時我國の對外貿易が空前の大發達を爲し、貿易外の受取勘定又未曾有の額に達したが爲に得た二十一億圓の正貨は、大正十年以來の貿易逆調、貿易外の受取超過額減少に依つて年々拂ひ出され、年々減少して行くのである。昨年末には金解禁の準備として、國民に安心を與へんが爲に政府が正金と力を合せてかき集め、珍らしくも二億數千萬圓增加はしたが、それも僅かに一二ケ月の持命でソレ最早なくなり、政府が聲を枯らして打ち叫ぶ國產品の愛用も貿易の改善も、國際貸借の改善は尙十分に其の効を奏せず、依然貿易關係から我が國は、今後共漸次金の保有高を減少し行くの外はないのである。

それも我が國が金の湧いて出る井戸でも澤山持つて居ると云ふなら問題ぢやないが、日本の產金額は僅かに一年一千五百萬圓に過ぎない。おまけに手近に金產國を持たないのである。其處へ行くと米國は昨年の金產額が四千三百九十九萬弗に達するし、英國の如きも海外の領土から五千九百萬磅もの金が出る。さうして少し犧牲を拂ひさへすれば、英國は容易に金を取り寄せ得るのである。それぱかりか、英國

の海外に對する金の流用は、日本の如く出たら出つ放し、即ち入超決濟資金として出しつ放しの金ではなく、專らと云つていい位利に利を生ませる海外投資なのである。

斯くの如く何れの方面から見ても、米、英、佛その他の金保有高がどんく増加して行くに引かへて、我國は年々歳々減つて行かざるを得ない事情に在る。國際間の取引に、金を以つてすると云ふ慣習が消え失せないのであり、我が國の金保有高が年々歳々減つて行くのだとするなれば、國際間における我國の地位は果して安閑たり得るだらうか、支那及印度が近く金本位制を確實すべく着々計畫中だと傳へられる。若しそれが實現するの運びに至つて援助を求められたとしたならば、東洋唯一の金本位國としての日本、東洋における先進國としての日本が、果してどれだけの援助を爲す事が出來るのか、トビにアゲをさらはれる樣に、日本は米、英、佛、獨等の爲に對支經濟關係、對印關係を惡化せしめられずにすむだろうか。

國內間に於ける取引には金は無用、兌換券に對するコンフイデンスの鞏固にして絕對的なる日本として、金の保有高の增減は對內的に論ずべく殆んど無價値と云ひ得よう。然し對外的に之れを考察する時、殊に支那、印度の金本位制確立計畫其の他にひつからませて之れを考察する時、金の流出防止、金の保有高增加の必要を高唱する者を目して、一概に之れを重金論者として嘲笑するを許さぬものがある。吾人はこの見地に立つて、此の意味に於て、金の流出防止を硏究し、努力するの必要あるを思ふのである。

九、金流出防止の必要と其方法

金の產額の少い日本、年々輸入超過で金を食ひ込んで行く日本に於て、金の流出を防ぎ、金の減少を防がうと云ふのには、何と云つても對外貿易を改善し、貿易外の受取勘定を增加せねばならぬ。貿易を改善するのには國民が擧つて國產品を愛用して外國品の輸入を減じ、國產品の愛用に依る需要の增加と生產方法の改善合理化、生產費の低下、品質の改良改善等に努力し、邦品の輸出增進を計らねばならぬ。邦品の輸出增進に就いては新市場の開拓に努力し、新市場の開拓に對して輸出補償制度を確立するのを始め、各種の對策を考究する事も此際特に必要であり、急務とする所であらう。さうして一面に於ては四面を圍む海を最も活用し、水產業の改善に力を注ぐ事も我國として最も必要な事であり、造船業を改善發達せしめて海運界に大活躍を爲し、海運收入の增加を計る事は貿易外の受取勘定を增加する點に於て、爲さねばならぬ所であらう。之れが即ち現內閣をして來る特別議會に輸出補償法案や、船舶金融案を提案せしむるに至つた所以であらう。產業合理化、經濟化に力を致さしむる所以であらうが、金解後に於ける急激なる金の流出に關聯して、國際間における日本の地位と云ふ見地からして、此の際國民は一致して世界における金の移動狀況を注視し、硏究し、協力して以つて金の流出防止に努力せずばなるまい。

軍縮會議と米國の東洋經略

福永恭助

一　三大原則は何處へ行つた？

日英米三國に關する限りロンドン軍縮會議は目出度く成立しました。政府の回訓案に對して一時激昂した輿論も「協定は一九三五年限り」の聲明に氣を休めやうとして居ます。一時强腰を見せた軍部も僅に航空隊の擴張によつて國防上の缺陷を補ふ位な處で泣寢入りの外はありますまい。最後の難關は批准問題ですけれども、駄々つ兒の米國上院ならいざ知らず、我樞密院は九十九パーセント此問題で現內閣の瓦解を招くやうな奉答振りを見せないでせうといふのは、若槻全權からの請訓に對して半ケ月の間も愼重熟慮を重ねた濱口首相が回訓に先立つて此方面の了解を得ずに置くといふ筈がないと思はれるからであります。

とにかく會議は成り立ちました。

「それにしてもあの强情なアメリカがよくこれだけ讓歩したもんだね。」

「何と言つても若槻全權の成功だよ。」

「製艦競爭なんて實際馬鹿々々しい話だからな。」

「國際間の平和が何より大切です。」

今私がこのペンを走らせて居る書齋の窓の外は春であります。會議の成立を祝福する斯うした聲が右からも左からも私の耳に入つて來るのも無理はありません。國民負擔の輕減はそれがたとひ十萬百萬の端した金でもよろしい。しかも國際間の平和に至つては何を措いても望ましいことなのでありますから。

だが今度の所謂日米妥協案なるものがアメリカにとつての讓歩であり、其處まで漕ぎ着けたことが我全權の成功であり、そしてこれによつて國際間の平和は果して確立されたでせうか？

會議に臨む日本政府の對策の一つ——しかもその大なる一つが濱口首相の所謂「何れの國に對しても脅威を加へないと同時に、何れの國からも決して脅威を受けない海上武力」を握ることであつたことは誰しも御承知の通りです。そしてその無脅威軍縮なるものの正體に就て

國民は責任ある政府當局から未だに何等の説明をも聞かされては居ませんけれども、それが左記の三大原則から成り立つたものであることは今や公然の秘密なのであります。

一　補助艦全體引っ括めて對米七割。

二　大巡洋艦でも對米七割。

三　潜水艦は現有勢力（七萬八千噸）を維持すること。

この國家の安全保障に關する三主張を、して今度の日米妥協案で日本はどの程度に貫徹することが出來たでせうか？

海軍側に對してさへ曇り日のお天道様同様ホンの鳥渡しか見せなかつたといふ外務省起草の回訓案の內容は吾々が今日それを的確に知る由はありませんが、世に所謂「日米妥協案」として傳へられる所のもの卽、

艦種	米國	日本	比率
大巡洋艦	一八〇、〇〇〇	一〇八、四〇〇	六割〇分二二
輕巡洋艦	一四三、五〇〇	一〇〇、四五〇	七割
驅逐艦	一五〇、〇〇〇	一〇五、五〇〇	七割
潜水艦	五二、七〇〇	五二、七〇〇	十割
合計	五三六、二〇〇	三六七、〇五〇	六割九分七五

を基礎として之を前に述べた三大原則と突き合はせて見ますと、

一　補助艦全體としての對米七割は獲得した。

二　大巡洋艦では對米比率六割だから目的を達して居ない。

三　潜水艦は日本の要求を下ること二萬五千三百噸だからこれまた我主張が通つて居ない。

三つの內一つしか通らないやうな協定を取り結ぶことが我全權の成功であらう筈は無論ありません。政府は或は「無脅威軍縮の聲明はしても大巡對米七割だとか潜水艦現有勢力維持だとかいふ主張は政府として公に言明したことはない」と言つて空嘯くかも知れませんけれども斯うした三百代言的な言辭が何等國民を納得させるものでないことは軍令當局が飽く迄も「これでは國防計畫が成り立たない」と言明して居るので判ります。餅は餅屋に聞かなければ判らない。その餅屋がどうしても安心ならないといふやうな軍備が果して「何れの國からも決して脅威を受けない海上武力」でありませうか？

「だが其處のところは政府の回訓案では旨く保留することになつて居るぢやないか？」

さう言つて反問する人があるかも知れません。が其處がまた頗る眉唾物だと私は思ふのであります。

如何にも政府はその回訓案の中で重大な保留を二つばかりして居るやうであります。卽一つは「本協定は一九三五年限り」といふ聲明、（若しくは覺書の交換）で、も一つは潜水艦に關することですが、この、協定を「一九三五年限り」とする事によつてどういふ事になるかと申しますと、アメリカでは最後の三隻を一九三三年から毎年一隻づ

ゝ起工する事になつて居るから一九三五年迄は彼は十五隻十五萬噸しか海上に浮べることが出來ない。從つて「協定期間は米の十五萬噸に對する日本の十萬八千四百噸で即對米七割二分だ」と斯う政府――外務當局は言ふのであります。「それからアトは白紙だから此次の會議には七割でも八割でも何でもこちらの好きなものを要求することが出來る。實際其頃になると日本の國力も增大して八割位要求しなければならなくなるかも知れないから先々まで七割で縛られて置かない方がいゝ。」といふ意味の若槻全權談まで傳はつて居ります。が併し世の中の事はさう旨く問屋で卸ろして與れるでありませうか？

二　今日出來ない事が明日出來るか？

一體日米兩國は今日大巡洋艦（一名八吋砲巡洋艦）を何隻持つて居るかといふと、アメリカが天にも地にもたつた一艘のソートレーキ・シテイー（一萬噸）しか浮べて居ないのに日本には那智、妙高、足柄、羽黑の一萬噸級四隻と加古、古鷹、衣笠、靑葉の七千百噸級四隻の合計六萬八千四百噸が現に第一艦隊の花形として遊弋して居るのであります。或はまた建造中のものを込めて勘定しても彼の八隻に對する我の十二隻といふダンゼンたる優勢振りなのです。斯うした現有勢力の惠まれた狀態の下に開かれた會議に於てさへ彼に大巡七割を將來に亘つて約束させることの出來なかつた政府や全權達が、今から五年後の、彼がその第十八隻目を起工して吾の對米比率が建造中のものを込めて正確に六割〇分二厘二毛と隊落した時に「七割なり八割なりを改めて要求すればいゝ」なぞと口幅つたいことが言へた義理でありませうか？

斯うした日本側の保留がいざといふ場合に何の役にも立たないであらうことは米國側が日本政府のこの保留付回訓を一の返事で承認したことがまた裏書きして居ます。彼が日本の對米七割比率は撥ねつけても保留は承認するといふ處に保留の力の無さが尻尾を出して居るのではありますまいか？

また斯うも言へます。三月の二十一日と二十二日にはチレー英國大使とキヤツスル米國大使が幣原外相を訪ねて「日本は英米と建艦競爭をやる決心があるか？」と嚇かしたといふことです（東京日日）嚇かすと言つても外交官の事ですから熊公八公の喧嘩とは違ふでせうが、――あゝした時機に斯ういふことを言ふのはツマリは嚇かしである。さうした嚇かし文句に今日でさへ凹んでしまふ政府當局が今から五年後の、彼が第十八隻目を起工し終つて大巡洋艦の充實を將に完了しやうとする一方に幾つもの空いた船臺が起工命令を待つて居るといふ時に造艦競爭で嚇かされてよく我政府が對米七割を强硬に主張することが出來るでありませうか？

「其の時は我黨內閣が天下を取つて居ないから大丈夫さ。」

いくら政黨內閣でもさう言ひ切る迄無責任であり得るとは私には考へられないのであります。

「そんなにムキになつて一割を爭ふ程大型巡洋艦といふものは大切なのか？」

斯う言つて諸君の內には反問される方もあるでせう。がこれは實以て大切なものなのであります。來るべき日米戰爭に於て――は少し言ひ過ぎましたが――一番華々しい働らきをするのは この大型巡洋艦殊に一萬噸巡洋艦ではなからうかと私は密かに思ふのであります。

布哇の眞珠軍港から日本東京迄ざつと三千四百浬の距離がありますこの距離は從來主力艦隊の有効に行動し得る範圍を越えたものたと言はれて居ます。が併しこれからの世の中はスピード時代であるといふこと、そのスピードは距離を短縮するものだといふことを思ふ時に三千四百浬の距離はさう遠いものではありません。ことに航續力が一萬數千浬にも達するといふ大巡洋艦にとつては三千四百浬を往つて復ることなどは屁の河童であります。斯うしたモダーン軍艦の十八艘に護られたサラトガ、レキシントン外一隻（本年六月三十日起工）の大飛行機母艦が房總遙かの沖合に現はれて蝗のやうな飛行機を雲霞の如く東京目掛けて飛ばすことも決して夢のやうな話ではありません。警報に接した我六割の大巡が之に對して何事を爲し得るといふのでありませう？

此處でちよつと諸君の注意を促して置き度いことは既に述べたやうに日本の大巡洋艦の中には比較的小型の古鷹級が四艘も交つて居りますが、これが敵の大巡との戰鬪にどうかと思はれのは各艦に搭載して居る砲塔の數も少いといふことであります。同じ八吋砲巡洋艦にしても一萬噸級のやうに八吋砲塔が五つもあればともかく、たつた三つやそこらの端した砲塔では射擊らしい射擊は出來さうにないと私は思ふのであります。話が專門的なことに深入りして恐縮ですか、さうした意味に於ても日本艦隊の方に數字に現はせない不利があるやうに思はれるのであります。

若し夫れ潛水艦に至つては多くの日本人は潛水艦――少くとも日本潛水艦の威力を買ひ被つて居ります。ジュットランド海戰第一日の早朝家鴨の運動場のやうな狹い北海で、しかも豫め港外に待ち伏せして居たドイツ潛水艦連でさへ英國大艦隊に對して一指をも染めることが出來なかつたその潛水艦が果しても知らない廣漠たる太平洋で敵主力に對して何事を爲し得るといふのでせう？ こんなことを言ふと私が潛水艦無用論者ででもあるかのやうに聞こえるかも知れませんけれどもさうでない。七萬八千噸もあればそれでどうにか出來たものを五萬二千七百噸では太平洋では全く手も足も出ないといふのであります。

回訓案には潛水艦に就ても亦多少の保留がしてあるといひます。卽フランスの要求額の增加に從つて英國の所有高に變化を來たした時には我國所有高も、それに倣ふといふことと、驅逐艦からの噸數融通及代艦建造期の繰り上げなどでありますが、これらの小保留に多くの期待を懸けることの出來ないのは言ふ迄もありません。

要するに一九三六年以後の七割交渉權の獲得なんて屁のやくかものであるといふ事を私は斷言するに憚りません。今日出來ないことが明日出來る道理は此場合決してないからであります。

ことに滑稽なのは政府が「一九三五年迄は大巡對米七割だ」と言つて會議の成功を吹聽して居ることですが、これが全權の手柄でもなければアメリカの大讓歩でもないことはその位な年度迄の其位な比率は今度の會議が開かれなくても——或はまた今度の會議が決裂しても當然日本が得られたであらう所のものだつたことでも判ります。將來に向つて約束されない比率を紙の上で割り出して見て安心していゝといふなら、一九三〇年の今月今日は大巡の對米比率正に六拾八割四分と言ふ高率を示して居るではありませんか！

が併し會議が成功であつたか失敗であつたかの詮索は此際吾々の注意すべき要件ではありません。若槻男爵が現れやうと財部男爵が生れやうとそれは吾々の知つたことではありません。たゞ今日から大巡洋艦に關する限り帝國の海上武力が次第に六割比率に向つて低下して行くのであることを國民は知ればいゝのであります。アメリカ大海軍論者が多年求めて得られなかつた釣合良き艦隊が（wellbalanced fleet）此處に完成した曉は米國の東洋經略は愈々其正體を露はして支那大陸に君臨するでありませう。これ正に「滿蒙これより漸く多事ならんとする」の形勢でなくて何でありませうか？

三　シーワードの豫言

米國の東洋經略は米國外交界に於ける第一人者シーワードが一八五二年、その半生を擧げて合衆國內治の整備に精進した功臣カルハウンの靈柩を前にして太平洋の將來を語つた有名な豫言に緖をなして居ります。彼は言ひました。

「（上略）我等は今や國民的進步の別種にしてしかも一層崇高なる舞臺即ち富の擴張と汎速なる領土擴張の道程に上らうとして居る。我等の影は既に聖(セント)ローレンス河を越えて北進し、一方にはメキシコの谿谷を橫切つて中央アメリカの平原に達して居る。又眼を太平洋方面に轉ずるならば布哇諸島及び支那沿岸地方は既に米國の革新的勢力を認めて居る。しかして我等の勢力を感ずる所には我等の下にあつて其保護に浴さうとする希望が起りつゝある。たゞ我等の領土が擴張されるに就ては外部の困難よりも內部に在つてとかく遠慮勝ちな政策を弄する人の手に起りつゝある。斯かる困難は果して何時(なんどき)除かれるであらうか？　通商は我等をアジヤ大陸に接近せしめる。斯うして生れる新らしい事態は我等の地位に大なる變化を及ぼし、我等は亞細亞大陸との聯絡點即ち植民地の如きものを必要とする時勢に遭遇して居る。これは實に重大な問題である。しかも合衆國は遠からずして斯かる問題の解決を強ひられる時代に入(はい)るだらう。諸君、我等に果してこの重大な問題の解決に堪え得るものがあるだらうか？」

一八五二年と言へば米國がフイリツピン、グアムを領有し布哇を併合した半世紀も前のことであります。いつぞや大毎東日の課題ではありませんが「五十年後のアメリカ」といふ論文を書かせたら差し詰め彼は一等に當選したであらう程に眼先きの見えた男であります。否彼は今日の太平洋の形勢を既に七十有餘年も昔に見拔いて居たのであります。

アメリカを正義の國、人道の國乃至は平和を愛する何等侵略的野心を持たない國だと心から思つて居る人は今日では支那人にもないだらうと思ひますが、萬が一さうした人があるとしたら差し當りこのシーワードの豫言なるものを熟讀玩味して見るのが何よりの藥であります。無論アメリカにも幾多平和を愛し正義人道を尊ぶ高潔な士がありませう。が併しそれは彌が上にも物質的に向上發展しやうとする國民多數の意見の代表者ではありません。實に米人ムーアも言つて居りますやうにアメリカはその獨立（一七八三年）この方既に四回の外國戰爭を行ひ歷史上最大の內亂を戰ひ、しかして領土は實に最初の五倍に迄も擴大されて居る國なのであります。

東洋に於けるアメリカの領土擴張は一八六七年（慶應三年）に露西亞からアラスカとアリウシアン群島を買收したことから始まつて居ります。今日ではアラスカの南端にはシトカ、アリウシアン群島にダツチ・ハーバー及キスカの三要港が設けられてありますが、今から思へばこの買收は日本の北境を脅かすに必要な策源地を供給するものとして遠大なる謀であつたものと言はなければなりません。

それから見れば布哇の併合とフイリツピン群島の領有とはずつと遲れて實現した、餘程後の出來事であります。布哇の併合については一八〇〇年から殆んど一世紀の長きに亙つて英米佛三ヶ國が入り亂れてその領有を爭つたりカメハメハ王だとかカラカウア王だとかリリウオカラニ女王などといふ樣々な役者が舞臺に登場したりして長篇の物語を作つて居ますが、要するに獨立の能力の無いカナカ土人が太平洋上樞要な地點に在つて狼のやうな英米佛に狙はれたからにはどこか大國の袖の下に隱れなければならない運命にあつたものだと言へるのであります。そして遂にそれが一八九八年七月七日に地理的に一番關係の深いアメリカ合衆國に併合されたのはシーワードの豫言通りの筋道を辿つただけのことであります。布哇を併合すると否とに拘らずアメリカが此地點を海軍の根據地とする目論見であつたことは併合十四年前既に布哇との條約の中で「眞珠港を米國海軍の根據地として、それを絕對に使用し且之を改築して要塞を造る權利」をアメリカが獲得して居たのでも判ります。

布哇を併合した一八九八年は米國の帝國主義にとつては全く當り歲でありました。四月にキューバ島の獨立問題にかこつけて西班牙に對して戰端を開いた合衆國は其年の暮れには早や、巴里で開かれた媾和會議に於てフイリツピン群島を領有することになつたのでありました。フイリツピンの領有については當時アメリカは西班牙に叛旗を飜

じた同島の獨立運動者達に對してかなり不信の行爲があつたやうでしたが、それかあらぬか合衆國内でもそれを非とする意見もあるといふ有樣で大統領マッキンレーも一時之が裁領に當惑したのでありました。が帝國主義者の說が勝を占めたのでありませう、十月末には大統領は「割讓のために生ずる重大な責任については十分に覺悟をして居る。併しながら此の方法（即領有）は他の何れの方法よりも後難を殘すことは少なく、且又群島住民の利益を最もよく助長する所以である。米國は島民の安寧に對して到底責任を避けることは出來ない。」と宣言して領有の腹をきめ、其獨立に對しては「然るに同島人民の現狀は智能の發達充分ならず、即ち獨立の能力がないから其時期の到來するる迄之が傅育の任に當るは米國の義務である。」と約束して今日に及んで居る次第であります。

アメリカがフイリッピンの獨立を約束してから既に三十一年の歲月が流れました。が併しアメリカは今尙その約束を履行するのに躊躇して居ります。躊躇する理（わけ）は産業上の利益を失ひたくないからでもありますが、更に大なる理由は獨立後他國に取られてしまひはしないかといふことを怖れて居る。この「他國」といふのが我日本を指して居ることは有難迷惑な話ではありますが、アメリカがさう思ふのも滿更無理もないことかと思はれます。由來比島人には親日派が多くて、日本に併合することを望んで居る者が少くないのであります。

四　弗の進出

アメリカが時として正義人道の國として傳へられる所以のものは彼か比較的領土的の野心が少なかつたからに外なりませんが、これは或程度迄事實であります。尤もメキシコや中米などに對しては決してさうでなかつたことはあの邊でアメリカが滅法評判が惡いのでも判ります。が少くとも東洋——ことに支那大陸に對しては外のイギリスやフランスやドイツやロシヤのやうに貪欲を恣にはしませんでした。しなかつた理は西半球に於て既に有り餘る程の土地を持つて居る。この上の土地はもう欲しくない。土地よりも富が欲しい。即シーワードの所謂一層崇高なる舞臺の一半である所の富の擴張である。この富の擴張をば支那に對して行つたのであります。布哇やフイリッピンの領有は富の擴張の手段として通商貿易の足場とそれを保護すべき海上武力の根據地を獲得する意味に於て行つたまでゞある——と斯ういふ譯であります。

アメリカが初めて支那と接觸したのは英佛などに較べれば餘程立ち遲れては居ますが、それでも日本との接觸に較べれば遙かに古いことで、一七八四年と言へば合衆國が獨立した翌年ですが此年の八月三十日に米國船のエムプレッス・オブ・チヤイナ號が新らしく制定された星條旗を飜して廣東の港に入港したことから始まります。この頃（ころ）のアメリカ人は今日のヤンキー達と違つて頗る付きの船乘（シーメン）であつたものと見

えて、一七八八年にフイラデルフイアを出た帆船アライアンス號なぞはたつた一枚の世界全圖を頼りに、途中一ヶ所も寄り道をしないでやはり廣東に辿り着いて居るから大したものであります。

其頃の米國船の對支貿易は何であつたかといふと支那へは主として毛皮ことに海狸や海豹の皮を賣る、そして其れと交換に茶や絹布などを支那から持つて歸りましたが、これがアメリカやヨオロッパで頗る高く賣れたと言ひますから當時の對支貿易といふものは餘程ボロイ儲けだつたに違ひありません。とにかくさうした譯で支那（廣東）とアメリカとの貿易は次第に盛んになつてきました。

支那と接觸を始めたアメリカは其途中に横たはつて居る日本の門戸を敲くことを無論忘れはしませんでした。一八五三年（嘉永六年）にペルリがサスクエハンナ號以下の黒船を率ゐて浦賀に來航し日本の開港を迫つた顛末は蘇峰先生の大日本國民史に譲るとして、これまた米國の東洋經略史上に書き落してならない大事件の一つでなければなりません。

アメリカの對支貿易は次の表のやうに一八七〇年この方次第に増加し、ことに歐洲大戰後に於て非常な躍進振りを見せて居ることは注意すべきことであります。ことに其輸出額の増加は日本の對支輸出額（一九二八年は三一九、二九二、〇〇〇香港テール）を去ること左まで低いものではありません。世界大戰中異常な發達を見たアメリカ工業はその生産品を購買力の萎靡した歐洲に振り向けることが出來ませんから勢ひ市場を東洋に求めなければならなくなりましたが、此場合人口四億三千六百萬人と言へば殆んど歐羅巴全體に等しい人口を有する支那が何よりの得意先きでなければなりません。睡れる支那が醒め秩序が回復し生活が向上し産業が勃興した時に殆んど無限の購買力を有する國土が出現するに違ひありません。アメリカの富の擴張は第一にこの底知れない支那人の購買力を狙つて居るのであります。

米國對支貿易表
但シ香港テール千單位

年度	輸出	輸入
1870	374	7.599
1880	1.205	9.107
1890	3.676	8.165
1900	16.724	14.752
19 0	24.799	32.289
1920	143,199	67.111
1928	205.511	127.205

が私がさう申したからとてアメリカの對日貿易を讀者は輕視してはなりません。年によつて多少の増減はありますけれども其對日貿易額は對支貿易額に較べて二・四倍乃至二・八倍の多さに達して居るのでありますが、これはアメリカとしては加奈陀及英國を除いた何處の國よりも多額なものであります。更に詳しく申しますれば、この日米貿易は日本からの輸出額がアメリカからの輸入額に比べて壓倒的な數字を示して居りますが、これが主として生絲の輸出に據るものであることは改めて述べる迄もない話であります。日本はアメリカにお蠶(かひこ)を買つて貰ふことに依つて國を立てゝ居るといふ所に日本の弱點が潜んで居

るのであります。

貿易の外に富の擴張の手段として所謂「弗の進出」即投資があります。世界大戰中アメリカが世界一の成金國になつたことは誰方も御承知の通りでありますが、その有り餘る弗は今や歐羅巴にも南米にも或はまた日本にも侵入して居ります。が殊にアメリカが眼を着けて居るのは支那であります。其處は調査尚極めて不充分でありますけれども如何なる天然資源を藏して居るか測り知ることの出來ない尨大なる大陸が横たわつて居るのであります。この天然資源の開發に資本の投下を待つこと極めて切なるものがあることは申す迄もありません。

とは言ふものの今日迄のアメリカの對支投資額は事業投資に致しましても或はまた借款の形式に依るものに致しましてもまだ大したものになつて居りません。即イギリスの三十五億圓、日本の二十億圓に較べてアメリカの對支投資總額僅かに三億五千萬圓程度といふ貧弱さであります。これには後で述べるやうな色々な原因がありますが、要するに支那に於けるアメリカの經略なるものは今日迄のところあまり成功したものとは言はれません。ざつと私共の記憶にあるものでも、

一　日露戰爭の直後米國鐵道王ハリマンの企てた滿洲諸鐵道の買收と世界一周の鐵道敷設計畫は色々な事情で實現しなかつた。

二　一九〇七年(明治四十年)奉天米國總領事ストレートが企てた新民屯――法庫門鐵道への割込運動は資金の調達に困難を來したのと日本の反對とで成功しなかつた。

三　一九〇八年(明治四十一年)ストレート奉天巡撫使唐紹儀との間に取極められた、米國をして滿洲を開發させる諸案も同じ理由で失敗に終つた。

四　一九〇九年(明治四十二年)米國々務卿ノックスは滿洲諸鐵道の中立を提議したが日露兩國にダンゼン撥ね付けられた。

五　同じ頃にストレート領事の策動で錦州――愛琿鐵道の敷設權を英國商會と協同して獲得したけれども色々な事情からこの計畫は實行を見るに至らなかつた。

六　漢口――廣東間の所謂粤漢鐵道の敷設權については一九〇〇年以來色々な經緯があつたが、前記ストレートの暗中飛躍で一九一一年に英米獨佛の四國借款團が出來てそれを手に入れた。此借款團は尚支那の幣制改革と東三省に於ける興業の助成を企てたが、後、日露兩國の抗議を受けて日露を加へた六國借款團に變つた。さう斯うする内に斯うした仕事を好まないウイルソン大統領の反對に遭つてアメリカだけが借款團から脫退した。

などの例があります。無論この外に成功した方の例として一九一四年(大正三年)の導淮水利事業費二千萬弗の借款だとか、大運河浚渫借款五百五十萬弗だとか、スタンダード會社の手に依る支那の油田開發だとか、無線借款だとか、排他的の空中輸送權の獲得だとか何だとかいふ新らしいものがありますけれども。

五　いつも邪魔をする日本

支那に對する弗の進出が割合振はなかつた原因は第一にアメリカが海外發展に注意しだしたのが餘所の國に較べて餘程立ち遲れて居たといふことであります。何處の國でもさうでありますが、先づ國の內部

を整へて然る後に海外に眼を着けるといふのが順序であります。處が獨立後國内の整頓やら産業開發に相當忙がしかつた處へ持つてきて南北戰爭やらメキシコとの爭などアメリカ大陸だけでも手持無沙汰は感じなかつた處へ持つてきて米西戰爭やら布哇の併合などがあつたのでさうさう支那の方に迄手が廻らなかつたのであります。

「さあ、これから支那だ。」

米西戰爭の片もついたので斯う言つてアメリカが支那に手を出さうとした時に膠州灣や旅順や滿洲や廣州灣や威海衛や九龍などが悉皆しつこい連中の手に落ちてそれぞれ「勢力範圍」といふものが出來上つて居たのでした。

一八九九年（明治三十二年）米國々務卿ジョン・ヘイに依つて稱へられた有名な「門戸開放」の叫び聲は、斯うした狀態の下にあつた支那への割込運動に外なりませんが、一體併し斯うした傾向——故意と立ち遲れてアトから割り込むといふ傾向は東洋方面に於けるアメリカの政策でもあるやうに思はれます。卽自分はお先棒に立たないで、ひとの獲得した利益に均霑するのが得策だといふのが彼の對支態度の根本をなすものと見られますが、その顯著な例は阿片戰爭（一八四〇年——一八四二年）後支那と英國との間に英國に有利な通商條約が結ばれると直ちに支那と交渉して英國人と同時の通商上の權利を獲得したことであります。斯うしたアメリカの狡い態度はその後一八六〇年の北京條約を結ぶ時にも現はれて實際に犧牲を拂つた英佛二國から惡罵を放たれましたが、アメリカと協同して事を爲さうとする國民の最も注意を要する點であります。

が併し斯うした遣り口は支那の事情には疎いけれども弗は澤山持ち合はせて居るといふアメリカには最も適當した政策であると言へます勝手のよく判らない支那に於て處女地を開拓する、新事業を起すなどいふ風なことは面倒臭い。それよりもひとが開拓した前途有望らしい事業にアトから割り込んで遂にそれを乘取るといふのが彼等の最も得意とする所で、またそれを成し遂げるだけの弗の力を持つて居るから堪りません。此邊のことは日本でも三井、三菱の大資本家が小資本家をいぢめて居るのとそつくりであります。

支那に於ける政情が不安定であるといふことも弗の進出を妨げて居るも一つの有力な原因でなければなりません。戰爭や暴動が起こればいつ何時工場を壞はされたり掠奪の難に遭つたりするかも知れないといふやうな不安に對しては長江筋ならば十艘ばかりの砲艦とフイリッピンからの驅逐艦が（上海には千人餘りの陸戰隊も居ります）北支那ならば北京と天津と秦皇島に居る千五百人足らずの駐屯軍がアメリカ市民の利益を保護して呉れるとしても、借款の形式に依る投資などは政府が變ると前の約束がフイになるなぞといふことは珍らしくない——殷鑑遠からず日本の西原借款にありと言つたやうな次第で近頃は對支投資も迂つかり出來ません。支那の役人の常てにならないことは三井對フエデラルの無線係爭でも判りますが、中には借款した金を南

(北)方討伐の軍費に使つてしまふといふ軍閥もありますから油斷がなりません。一體斯うした事になると支那人の方が役者が一枚上で外國人はよく背負投げを喰ひます。二三年前にロシアが支那の赤化運動に注ぎ込んだ金などは實は國民政府の獨立に使はれた上に南支に於けるロシアの勢力は一掃されてしまつたやうな次第であります。話が少し筋道に入りましたが、要するにアメリカとしては支那を指導して今少し強固な政府を樹てさせて政情の安定を計らなければ手も足も出ないといふ現状であります。尤も日本の勢力範圍の滿洲だけはいつも動亂の外にあるので此方面にはアメリカも相當手を出して居りますが。

以上述べましたのはアメリカの支那に對する經濟的經略の一般ですが、尚アメリカは此外に對支文化的經略に就て何處の國よりも餘計に力瘤を入れて居ります。卽宗敎團體に依る布敎と學校並病院の經營でありますが、最近斯うした各國の文化的經略に對して相當猛烈な反抗運動が靑年支那に起つて居ることは注意すべき事であります。

支那の事にばかり氣を取られてアメリカの對シベリヤ經略に言ひ及ぶのを忘れました。今は國交さへ斷絶して居るロシヤの事ですからアメリカとしては目下の處シベリアをどうすることも出來ませんが、アメリカが早くから此處の富源に目を着けて居たことは往年のシベリヤ出兵當時の態度からして察せられます。他日國交恢復の時資金難に困しんで居るロシヤ――ことにシベリヤに堤を切つた河水のやうに弗が流れ込むことは疑を容れないところであります。

さて私はそれからそれへとアメリカの東洋經略について述べましたが、斯うしたアメリカの進出が常に利害を異にする我國に依つて阻まれて居ることは今日の日米關係を察する者の最も意を留めるべき點ではなからうかと私は思ふのであります。もとよりアメリカ東洋進出は既に繁榮なるアメリカを彌が上にも繁榮ならしめやうといふ言はゞ贅澤三昧の仕事、それに引換へて日本にとつての支那ことに滿蒙の諸問題は國民死活の問題でありますから我國が如何に門戸開放主義を振り廻はされても既得權益を一歩も讓らないのは當然のことでありますが、既に眼中大英國すらない強大國アメリカが其止み難き發展向上の念からシーワードの所謂一層崇高なる舞臺に上らうとする時に小國日本の如きものの妨害によつて自己の政策を貫徹することが出來ないとあつては彼の到底堪え得る所ではありますまい、が如何せん日露戰爭後今日迄凡そ四分の一世紀間といふものは自己の主張を貫徹するに足るだけの海上武力をは彼持たなかつた。言ひ換へれば日本を脅威するに足るだけの艦隊がありませんでした。が今や幸にしてロンドン會議は西部太平洋に於て攻勢作戰を採るに足る艦隊整備の機會を彼に與へたのであります。向後五ヶ年間は尚太平洋の波は其名の如く太平を續けるでありませう。が支那の政情が漸く安定を見た時、もうソロソロひとの仕事に割り込んでもいゝと思つた時、この釣合よき艦隊と弗の聯合軍が如何なる物を言ひ出すかは日本國民の大に監視しなければならない所でありませう。日本と違つてもともと自國防衛のためでなく造つた艦隊を只で遊ばせて置くやうなムダなことをするアメリカ人でないことを私共は夢にも忘れてはならないのであります。(三國假協定成立の日しるす)

陸軍々縮我観

河野恒吉

一、前言

昨年七月現内閣が成立するや間もなく、政府は十大政綱なるものを發表した。其中に國際的の軍縮促進を提唱し、且つ整理緊縮に於て中央地方の財政に對し一大整理緊縮を斷行すべきを述べ、其實現に當り、陸海軍の經費に關しても、國事に支障を來さざる範圍に於て、大々整理節約の途を講ずる所あらんとすと曰ふて居る。又組閣當時、宇垣陸相も首相濱口氏に相當整理縮少する意味を答へたと傳へられ、濱口首相の口からも亦、宇垣は相當踏込んでやるものと思ふと語つたと報せられて居た。其處で政客や言論者の仲間では、宇垣は思切つて軍縮をやるなと期待した。

其後陸軍省内に軍制調査會が設置され、本省や參謀本部教育總監部等の優秀なる幹部が夫れ々々其委員に任命されるに至つて、右の連中は益々其期待に向つて進むものと思つた。處が其後幾何もなくして、整理案の輪廓は此の如きものであるとか、宇垣は行る積であるが參謀本部が反對であるとか、或ひは又此頃に至つては、參謀本部に誠意がないために調査會の案は骨抜になるらしいとか、來年度の豫算編成には間に合はないとか、色々の報導が其れから其れと新聞紙上に現はれて來た。陸軍省の當局に曰はしむれば、新聞報導は餘りに六感記事が多くて甚迷惑だとのことである。然らば事實は如何だ、一體全體行るのか、行らぬのか。

二、論客が曰ふ軍縮は不可能

世間の論客が云爲する所の所謂軍縮論は、露西亞帝國已に滅びた、支那はあの通りだ、國際的には不戰條約を締結して居る、其條約の威力は頼むに足らないにしても平和の氣分丈けは世界的に横溢して居る、故に現在の陸軍は過大であるから、之を縮少して國民負擔を輕減すべしと云ふのであつて、此軍縮論は簡明直截で俗耳に入り易いから、政談演説には如何にも歯切れのよい論旨だ。併し此議論は餘りに淺薄で、軍縮平和論者たる筆者と雖ども之には同ずることが出來な

い、而かも斯かる說を相當知名の政客がなすを見て驚くの外はない。此誤謬を解くためには根本感念として、先づ二つの原則に付て述べるの要があると思ふ。

其第一は、我陸軍は抑も維新以來國家の凡ゆる文明的施設中で、常に其尖端に立つて進步改善の魁をなしたもので、此傳統精神は今日も變りはないのである、隨つて其施設上不要のものをのんべんだらりと持つて居ると云ふ間のぬけたことは斷じてない。又出來得ないと云ふことだ。若し假に他から見て從來不要のものありとせば、其れは利害得失に付て意見を異にした迄のことだ、此點は國民の信賴に値すると筆者は確信する。故にやれ緊縮政策だから陸軍費を節約して出せと曰ふた所で、廳費や演習費からでも掻き集めるより他に、經常費から緊縮する方法はない。其處で陸軍の分擔した節約費、四年度分一千三百萬圓、五年度分二千百萬圓は共に繼續事業費（主として國防充備費と震災復興費）の繰延によつて捻出したもので、經常費から出したものは唯其一小部分に過ぎぬ、元より當然のことだ。隨つて宇垣陸相が組閣當時濱口氏に節約を應諾したと傳へられたるは、以上の捻出法によりて應諾を與へたものと觀るが妥當であらう。

政黨者流に曰はしむれば、大正十一年の山梨整理案は議會に於ける各派一致の軍縮決議案により成立したもので、若し當時此決議案の强要なかりせば、あの軍縮は恐く實現しなかつたらうと說くものがあるが、實は當時右の陸軍傳統精神に基いて、露西亜帝國の滅亡、其大陸軍の瓦解、歐洲大戰間に於ける各國陸軍の劃期的發達、大戰後世界に於ける平和協調的大勢並に世界的戰後の疲弊等を考慮し、當然國防計畫の建直しと陸軍の改造を必要として居つたので、種々調査研究中であつた。大姑小姑があるから直ぐには決し兼ねたるにしても、着々其準備を進めて居たこと丈けは事實だ。であるから、當時山梨陸相にして賢明なる政治家の要素を持つて居て、議會の劈頭自ら進んで我陸軍に改造の用意ありと說いたら、軍縮決議案を以てする强制の形にならずして濟んだであらう。

要するに、我陸軍は大戰後の國防計畫建直しと其改造事業として、大正十一年の山梨整理案、次で十四年の宇垣整理案に於て二回の改編を行つた。而して前者に於ては、常備軍大體の輪廓を保存し、其中から人六萬二百五百人（內將校二千二百）馬一萬三千四百頭を減少し（經費二千四百六十二萬圓減少）て、新に機關銃重砲無線電信器材等新裝備の充實を圖つた（十三年の繼續事業として經費九千六百萬圓）。又後者に於ては、四師團を廢止し（經費二千六十萬圓減少）、新に航空隊の增設戰車隊高射砲隊軍事科學研究所等の新設輕機關銃火砲射擊材料等の整備改良を圖つた（五年繼續の事業とし經費一千七百五十萬圓）、併し是れ共に進步改善的傳統精神に基いた當然の事業であつたのである。

其第二は國防方針は最不利なる連合諸國の包圍運動に對抗することと、戰爭の要訣は卽戰卽決殲滅戰を以て短期戰で終結せしむることで

ある。其結果質量共に必要と云ふことになる。又我邦が多くの島から成り地理的に用兵の不便があることも量を多く要する因として考慮しなければならぬ。元陸軍政務次官竹内氏が、多分選擧道具にであらう先程陸軍の改造意見を新聞に發表されたが、其中に獨露の戰例を引用して、質さへよければ量の大を容易に破り得る如く立論されて居るが、之れは必しも當つて居るとは云へない。獨乙軍の精銳を以てしても量が伴はなければ戰を殲滅戰に導くことが出來ない、其ために遂に長期戰に陷つて、あの慘敗を招いた。日露戰爭の吾々の體驗から曰ふても、我軍の精銳を以てして連戰連勝をしたが、遂に殲滅戰を行り得なかつた。あの場合若し日本海の戰勝とルーズベルト氏の斡旋なかりせば、吾々は遂に長期戰の困難に陷つたであらう。其れが卽ち廿五師團增設の因となつたのである。

處が今日の現代科學を應用した新式軍備は、設備訓練共に莫大の經費を要する。其處で量を如何程度に於て我慢するかと云ふ所に國防立案者の非常なる惱みと苦心がある。彼等に於ても元より軍備のみが國防の全體でなく、人的物的の兩資源、工業力、技術力、運輸通信の施設、財力、國民の智力精神力、政治家の對內對外の手腕力量亦皆國防の重大要素たること百も承知して居る。故に他方面の案配を考慮すべきことは申す迄もない。

其處で陸軍としては、平時最小限度に精銳のものを常置し、戰時之を必要程度に膨脹せしめて作戰の要求を充たさうと云ふのが、各國の常則とする所である。如何程に膨脹させるかは國々の狀況により違ふ、英米の如き志願兵制度で海により敵軍の進入を阻止されて居る國は、平時兵力が少なく膨脹律が大且つ時間も裕長である。佛蘭西の如く獨乙と國境を接して居る國は、膨脹さす暇なく開戰直に敵に當らうとするから、平時質量兼備を欲する。日本は大體此等の中間の處で作戰の目的を達すると云ふことにならう。

此膨脹のために在鄕兵が充用されるので、常備師團は、戰時は野戰軍の中堅となり、平時は在鄕兵を造る學校であるのだ。此點は陸海軍宜く趣きを異にして居る所で、陸軍の師團は右の如く戰時中堅平時學校だが、海軍では平時の中堅卽ち其儘戰時の中堅であるのだ。戰時造艦を急いでも、小補助艦の外間に合はない。故に他國から已製の艦船を購入するか、商船を武裝する位が、戰時膨脹の關の山た。其處で代艦々々と新艦を造り、而かも、造る度毎に精銳さを加へんと圖るのである。

却說戰時中堅師團を幾何要し、膨脹師團を幾何要するかによりて、常備師團數が決定せらるるのだが、宇垣案整理によりて現在十七師團になつて居る。之を極めるに付ては、陸海軍協同の國防計畫に準據して定められたるは申す迄もない。而かも此計畫なるものは、御裁可の前に戰時政策と豫算の關係上、勿論總理大臣の諒解を得て居り、他の諸大臣も承知の筈であると信ずる。

故に此國防計畫に立脚した量を減ずると云ふことは、やれ緊縮政策

だと云ふて之に斧鉞を加へる餘地はない筈、又あるべきものでもない。隨つて彼の現内閣十大政綱中にも「國防に支障を來さゞる範圍に於て整理節約云々」と曰ふて居る。又政友會の選擧題目として發表した其政策中に、國防の經濟化と云ふことが謳はれてあるが、此眞意の諒解に苦しむ、若し經濟的軍備と云ふのなら、今日の徴兵制度の行り方が一番經濟的で、英米の如く平時高い給料で志兵願を募り、戰時長時日を掛けて莫大な經費で大軍を造らうと云ふ行り方は、大不經濟的軍備であるのだ。若し又經濟化の眞意が民業化と云ふのならば、其れは今日已に出來る丈け民業化して飛行機自動車其他一部兵器の製造迄民業とし、補助費をも出して其發達を援助して居る狀態である、今急に之を行つたからと云ふて軍費の節約になる筋のものでもない。

結局する所常備施設からをい其れと大節約が出來るものではない。若し大斧鉞を加へ得る程に軍費の大節約をなさんと欲するなれば、宜しく先づ對包圍の國防方針に改變をなし得る如く、政治的に何等かの安全保障を確立することが先決である。唯だ帝國露西亞が亡びた、支那はあの通りだ、不戰條約締結の世の中だ位では、國防計畫を改めることは出來ない。軍備の基礎は一朝一夕に改變設廢の出來るものではない。

三、何のための軍制調査會ぞ

然らば、宇垣陸相は何のために軍制調査會抔と業々しい機關を設けたのか、あれは相談斗りか、或は緊縮政策回避の口實捻出のためか、筆者は決してそうではないと思ふ。有體に曰へば、山縣が舊陸軍建設の祖であるとすれば、宇垣は新陸軍改編の祖であると云ひ得る。彼れの立案した整理改編事業は、五年の計畫正に終つて今完成の域に達しては居るが、あの改編はまだ荒削であつて、まだ細工が行き屆いた譯けではない。其處で此國家財政の難境に處して、國軍發達の强固なる基礎を確立したいとは、我軍の產みの親たる宇垣陸相の常時胸中に抱いて居る苦心である筈だ。其事は吾人が傳へ聞いた調査會設立當初の陸相の訓示中にも其抱負を窺ひ得らるるのである、其抱負の響が組閣當時首相濱口氏の手に、宇垣は相當踏込んでやるなと感じたのであらう。濱口氏の口を通して出た此響の感じや、又宇垣氏が現政府の緊縮政策に應じて繼續事業の繰延による緊縮謬誤の聲とか、會々相合して玆に宇垣は陸軍の大整理をやるなと云ふ新聞記事となつたものと、筆者は讀む。

是に於て調査會は何をしたかと曰ふことになる、元より多方面に至つて調査研究したであらうが、其眼目とする處は要するに、現在の量の中から其一部を取つて、質の向上卽ち新兵器の增加による戰鬪力の充實を行ふに、何とかよき工風方法はなきものか、又其れが作戰計畫や軍隊教育上に如何に影響するかの考察に相違ない、此處で三廳から智能を持寄つたものと見へる。而して事實は大體の案を旣に極めて、無論二案も三案も立てて參謀本部に回附し、決定權を有つて居る其參謀本

部が、今頻に議を練りつゝあるとのことだ。其れが何時頃出來上つて來年度の豫算編成に間に合ふか、否か、筆者の知る限りでない、が間に合はないとすると、陸軍省側は調査會の設置當時、來年度の豫算に間に合はす積りだと洩して居た關係もあるから其立場は惡くなる。併し何れにするも、參謀本部に誠意があるとかないとか、色々誤報されるのはよくない、元より誤報するもよくないが永引けば永引く程、新聞の種や演說の材料になるから、結局陸軍側の損だとは筆者の意見だ。尤も案が定まつても其實行の時機に付ては、明年の國際聯盟軍縮會議の決定を參酌すると云ふ說もあるが、一應の理由だと思ふ。

處で調査會の案なるものは新施設の經費捻出法として、究極する所現在の量を減ずより法はないのだから、其量を此前の山梨式に中身から取るか、宇垣式に輪廓と共に取るかだ。山梨式に行るとしても、特科隊に現在以上に大なる手の付け樣もない筈だから、自然步兵隊から取るより外に策はあるまい。新聞所報の步兵聯隊三大隊中の一大隊の兵員を止め、幹部教育や召集員の訓練に充てると云ふ案は可能性のある一考案だと思ふ。

又宇垣案にすれば一、二師團を廢すると云ふことにならうが、既に兩回の整理で、實質に於て大戰直後より約九師團を縮少して居るから、此案によるとしても二師團以上には及び得まいと思ふ、或は兩案折衷とし一師團廢止に步兵隊各一大隊兵員減を混用すると云ふことも、或は實現性ありとも云へる。但し此場合と雖ども、朝鮮滿洲に駐屯する師團は別に兵員充足の方法を考慮せねばなるまい。

序に曰ふて置くが、新聞所報に特科隊を某若干地に編合する樣なことも一方法なりと傳へられて居るが、此の如きは戰略單位たる師團を分割し、其機能を破壞することゝなるので實現すべきものではない、又之を行るとしても莫大の臨時費を要する。又在營年限を短縮すると經費が浮く樣に報導されてあるが、是亦無稽の報導で、在營年限の短縮は、教育施設增加のために經費を增加こそすれ、決して輕減するものではない。此年限短縮問題は、軍制改革の重要事項であるに相違ないが、經費捻出にはならぬのであるから茲には省略する。

四、恒久的國防費の縮少は實現不可能か

政黨者流は矢鱈に新味の政策で人氣を釣らうと欲したり、又政談演說に勝手な熱を吐いて大向うを躍らせようとしたりするが、實現に可能性のないことを無暗に叫んだ處で、其れは駄目だ、徒に不信を購ふ斗りだ。彼等が若し實際に恒久的に、國防費を削減しようと思ふならば、先づ第一に海軍に於ては戰略廢止を唱すべしだ。之れは段々と其機運に向つて來て居るから、米國フーバー大統領の在職中と英國勞働黨の執權中とは、共に此目的のために好機會だと思はれる。故に國際的に益々其機運を高潮すべきだと考へる。元より一度や二度の難關は無論之れあるに相違ないが、其目的の貫徹に邁進すべきだと筆者は專念する。

第二に陸軍に於ては、都市の空中襲撃と毒瓦斯使用を禁止することだ、之れは人道上から觀て當然大聲叱呼して主張し得ることだ。宜しく明年のジュネーブに於ける聯盟軍縮總會に於て、其實現を期すべきだと思ふ。若し幸にして之を實現し得ば、現在の施設は之より將來大に起されんとする對空擊施設をも之を省略することが出來るのである。而かも單に東京の空中防禦の施設に要する經費丈けでも、一億以上を要するのであることを世人は知つて置くがよい。

ロンドン會議の結果、我大型巡洋艦の勢力愈々對米六割と決定し、其ために我海軍が我海岸都市の空擊に對し安全を保障し得ぬと云ふことになれば、勢ひ陸上に於ける對抗施設をしなければならぬこととなる。故に明年の聯盟軍縮總會は、空擊禁止を決定するに絶好の機會であるのである、天下の有志宜しく其主張を絶叫すべしだ。

更に進んで一般的不戰條約の外に、もつと實効のある地方的の不戰條約なり、或は又極東の安全を保障する協定なりの實現も大に企圖するがよい。其等が先づ解決すれば國防方針の改變同時に軍費の減少も當然の歸結を得ること論を俟たない。

之をなさすして唯單に露西亞帝國は已に亡びたりと云ふが如きは、國防論の材料としては最早陳腐に屬する。ソビエット露西亞も建國已に十三年を經た、舊帝國陸軍の一たび瓦解の後、トロッキーによりて赤衞軍を建設せられ、次で其後任フルンゼ將軍によりて改編せられ、其五年計畫の軍制改革の事業は正に千九百廿七年を以て完了した。現在の兵力は正規軍五十五萬民兵軍四十萬ゲペウ軍十三萬總計百九萬卽ち七十二師團騎兵十一師團と九旅團に達し、舊帝國陸軍と量に於て略變りはない、其れ斗りか質に於ては、編制武裝訓練共に大戰後の獨逸の精粹を取入れて居る。昨秋の北滿に於ける露支の葛藤に見るも、新露西亞軍は恐るべき戰鬪機能を有つて居ることが判る。今十一月十七日から四日間に亘る滿洲里附近に於ける戰鬪振を檢するに、露軍は二師團騎兵一旅團（之れには重砲兵若干飛行機三十五臺戰車二十一臺裝甲自動車五十を有す）を以て、滿洲里と其後方五里なるジャライノールに居る支那軍合計一萬三千を文字通全滅せしめて居る。其後引續き追擊を行つて、五十里の道を四日半で究破して海拉爾を占領して居る。而かも之れが零點下二十度と云ふ冱寒の中の仕事だ。支那側は露軍の此早業に度膽を拔かれて、露支の葛藤も忽ち周知の始末を告ぐるに至つたのである。而かも一度ハバロースクの協約成立するや二師團有餘の此大軍が十八列車卅時間を以て海拉爾を撤退した實に模範的行動とも曰ひ得る元より舊帝國露西亞と今日のソビュエット露西亞とは國情を異にするが我國の國防を論ずるに當り世人の露軍に對する錯覺を許す譯けには行かない。

チャップリンを論ず

尾崎士郎

1　何故にかくあらねばならぬか？

この奇妙な男は、今や完全に世界を支配した。これは奇妙なことではない。彼の名聲ほどに合理的な時代的必然を示してゐるものはないからである。まことにその名聲において「彼と覇を爭ひ得るものはキリストあるのみである」（ルイ・デリュック）

キリストとチャップリン！

この對照はすくなからず、現實的基礎の上に立つてゐる。今日においては、これは誇張され、歪曲された感情ではない。この兩者ほどに、共通した時代的意義を有つてゐるものはあるまい。共に一つの「マスク」をもつて生き通したことにおいて。共に彼等の「マスク」によつて人類の憧憬に答へたことにおいて。共に最も合理的な宣傳術によつて彼等の歷史的役割を果したことにおいて。キリストが架空の幻影であるとひとしく、「チャップリン」もまた決して現存することなき時代的幻影であることにおいて。――

そして、彼等が相違するところは、キリストが死滅してしまつたにもかゝはらず、チャップリンが生きてゐるといふことである。（チャップリンが生きてゐるといふことは、チャアリイ・スペンサア・チャップリンと稱する活動俳優が生きてゐるといふことではない）

キリストの十字架はチャップリンにとつては「竹のステッキ」と「ドタ靴」である。

イリヤ・エレンブルグは彼を論じて云ふ。――「今の世界に、英國でも、フランスでも伊太利でも、ありとあらゆる國において、最も有名な人間は誰れであるか。レーニン、そしてチャップリの二人である。レーニンの名は狂熱、叱咤、鬪爭を生む。そして、チャップリンの名は唯、幸福な愉快を生む」と。

エレンブルグに從へば、「チャップリンは、新しい左翼の未來派である。」「彼は氣分本位の藝術家ではない。靈感的喜劇俳優ではない。彼

は中世紀の奇術師のやうに運動の組織を綿密に研究した堅實な構成派である。」

しかし、何よりも、彼を論ずるためには、彼自身を構成するところの時代的要素について語らねばならぬ。チャップリンは何故にかくのごとく「人類憧憬」に答へてゐるか。今日の時代において、何故に彼はかくあらねばならぬか？

彼は現代のメカニズムの中から、メカニズムに對抗するために產れてきた。それ故、一面、彼は最もすぐれたる「ロボット」である。(キリストがさうであつたごとく)時代的悲劇を乘り越えて前進する感情を人類に約束するために彼は塵ほどの概念も思想も持ち合してゐない。それにもかゝはらず、彼は立派にそれをやつてのけた。彼は演壇の上から人類に演說してゐるのではない。彼は放浪者の中にゐる。彼は質屋の番頭の中にゐる。彼は失業勞働者の中に、銀行員の中に、兵卒の中に、淫賣婦の中に、落選議員の中に、ホテルのボーイの中に、ありとあらゆる人間の中に、彼はひしやげた山高帽子をかぶつて聳えてゐるのである。チャップリンはブルジョア社會の禍根と誤謬の中から彈きとばされた人間の姿である。機械文明の中に痛ましく壓し潰され、踏み倒された人間の姿である。混沌として動搖し轉化する時代の暴風の中で、一つの氣品を保つて沒落してゆくインテリゲンチャの姿である。絕望と哀愁を越えて、沒落する時代的必然の中へほがらかに溶けこむことのできるインテリゲンチャの、合理化された表情である。



チャップリン肖像

それ故、この奇妙な男が、僕等の眼の前に明るく、悲しい姿勢をとつてよちよちと現れてくると、何の理屈もなしに、僕等の胸の底にとぢこもつてゐる宿命的感情の殼がはぢけてしまふのだ。チャップリンは何ものをも代辯しない。彼は何事をも說明しない。彼は絕えず、音樂的リズムをもつて、愉快に無邪氣に僕等の眼の前に現れてくる。彼は言ふ、最初に自分を理解したものは

世界中の子供であつた、——と。彼は露路の裏口に飴賣のぢいさんのやうにしよんぼりとして立つてゐた。それはちやうど、午後の貧民窟に小さい箱車をひいてあるいてくる「ドラ燒」のおやぢのぐるりに鼻をたらした小僧たちがあつまるやうに、この哀れでみすぼらしい扮裝をした男のぐるりに子供たちは無邪氣な優越感をもつてあつまつてきた。彼はドン・キホーテのごとく、獨斷的な空想家でもなければ、ピーター・パンのごとく、こましやくれた「とつちやん小僧」でもない。讀者は十餘年前、淺草公園の電氣看板にこの男の姿を見たであらう。そして、その横に、「アルコール先生夜どほし轉宅」「アルコール先生公園の卷」と書いれ文字を記憶するであらう。彼はチヤツプリンではなくて、「アルコール先生」であつた。飴賣の「おやぢ」に名前が必要でないごとく、子供たちにとつて親しむべき「アルコール先生」はチヤツプリンであることを要しなかつたのである。

これは正しく世界を欺くキリストの詐術であつた。そして、十餘年後の今日、「アルコール先生」は子供たちの愛情を踏み臺にしてのびあがつてきた。彼の「マスク」は、單純と、明瞭と、痴愚と、嚴肅と喜悦によつて構成されてゐる。そして、これ等の要素がメカニズムの宿命觀によつて結合してゐることにおいて、チヤツプリンは何者よりも今日の時代を、時代の動蕩する原理を把握してゐるといふべきである。彼は理論のかはりにリズムを持つてゐる。——彼の映畫の中で人間の動作が事件と調和するとき、複雜多彩な響が、音樂的リズムをもつて流れよつてくる。すべてのものがリズムをもつて進行する。それはとつてつけのものではなく作品の構成が彼のニヒリズムと宿命理論とを湛えた音樂的情操の上に成立してゐるのである。——

2　目的無き運動の論理

僕は、チヤツプリンのマスクと、マスクの製作者であるチヤツプリンとを區別して考へる。（ハムレツトとシエークスピア、ドン・キホーテとセルバンテスを區別するごとく）——その意味は、彼のマスクは既に、あまりにも彼の現實的存在をはなれて、一つの（そして言ふまでもなく獨特の）時代的存在を示してゐるからである。例へば、チヤツプリンの出場しない彼の映畫「巴里の女」はいかに、彼の映畫製作者としての才能を示すことに成功したとしても（僕はその方面の智識を全く持つてゐないから論評することを避けよう）、僕はあの冷たい悲劇的主題の中から極めて常識的に（それ故極めて巧みに）組み立てられたところの古ぼけた宿命觀を見出すだけである。それは進行する筋においても、監督者としての彼の技巧をのぞいては、モルナーその他の幾度びとなく示した思ひつきの合成體であつて、それ等の文學的効果が巧みに映畫的効果に結びついてゐるといふだけのことである。そして、チヤツプリンは唯、チヤツプリンの出現によつてのみ獨特の効果を示すのである。

チヤツプリンの存在を決定するものは力學的な運動である。それは

心理的所作の常識的な繰返へしではない。彼の感情の直接的表現であるところの外部運動の連續による結合である。目的なき運動の論理である。そこで映畫的形式が始めて、彼を表現するために最も適當なものとして決定されるのである。

マスク・の作製者であるチャツプリンは彼の藝術について次のことき意見を發表した。――「映畫は藝術の新しき情熱である。藝術は研究ではない。藝術とは喜びと美と享樂を感覺によつてあたへる情熱である。そこで、一切のすぐれた藝術は必ず多數の人間に訴ふるところを持つてゐなければならぬ。わたしは、ある類型の近代藝術を嫌つてゐるが、しかし、わたしは古典藝術の讃美者ではない。わたしの判斷にして誤りなくんば、何百年、何十年と傳つてきた傳統的作品は、唯、年代を經てゐるといふことによつて尊敬さるべきではない。然らば、いかにしてわたしはわたしの藝術を組み立てようとしてゐるか。――先づ、劇の目的から見るに、惡事と詐欺とを常習とする、律し難き性格の人物が、社會的名譽を博するといふことは人生の現實と一致する。これを如實に解剖することによつて示す鋭い諷刺が假りに劇の中心目的であるとしても、これでは多數の觀客を悩ますに相違ない。觀客の判斷はまつたく混亂してしまふであらう。これは彼等にとつて少しの喜びでもない。何故であるか。自分の正體を失つて、他人の世界に生きるにすぎないからである。そして、多くの場合、悲劇は喜劇よりも一般化されてゐない。人間は、個人的理由から、悲劇的事物を嫌ひやすいものである。悲劇を鑑賞することは甚だ困難である。しかし、悲劇が形式どほり物凄いものだとしたら、悲劇は觀客の生活に恐怖をあたへるものと言へるかも知れないが、若し、誰れにしても個人的立場から脱けでることが出來さへしたら、必ず不幸の中にも美を發見するであらう。わたしは幾度びとなく、わたしの映畫を見た人から、悲哀な物語、――愁嘆場をつくれと勧められる。わたしの作品の中に現れる悲劇的場面が大好きだといふ人が多い。彼等は悲劇そのものは好まないが、喜劇の中の悲劇を好む。かういふ程度の悲劇は大多數人間が絶えず經驗してゐる悲劇だからである。勿論、かういふ悲劇は誤解される筈がない。何故かといつて、世界中の人間の中では道化役者だけが最も孤獨であるからだ。何處にもこれほどまでに孤獨な存在はないであらう。それ故、露骨な下品さを示さないかぎり、道化が何をしようと觀客はこれをゆるすのである。しかるに、あるすぐれた鑑賞者たちの間には、悲劇のみが藝術であると信じてゐる人が多い。然るに仁輪加式喜劇も、ギリシヤ悲劇と同じく大藝術たり得るのである。いづれもひとしく情緒を重んじ、共に構成上同じ手法を用ひ、しかも共に、それぞれの論理的方法をもつて結論に達し、あるひは特殊の情緒を創造するところのクライマックスに到達するのである。それが戰慄であらうと哄笑であらうと問ふところではない。共にひとしく神秘な、それにもかゝはらず論理的な迫力をもつて構成するのだ。クライマックスをみちびきだす條件のつくり上げ方、――喜劇にあつて

は、この點は單にステッキで人の頭をなぐる以上のものではないが、——は悲劇のあらゆる場面とひとしく頑強に、論理的につくりあげられねばならぬのである。頭をなぐることは簡單であるが、頭をなぐつて笑ふとすれば、本當に笑へるやうにしなければならぬのである。喜劇においては、事物の外部は大して重要ではないが、しかし、クライマックスだけは、悲劇の場合と同じく、性格——驚異、不安のトンネルを經なければ到達されないのである」

これは甚だありふれた通俗的な論議であるが、これだけの形式的用意が、彼の「マスク」の目的無き運動の背後に隱されてゐることを知らねばならぬ。死の恐怖に襲はれた憶病者のドン・ホセのチャツプリン、どうしても足並をそろへることのできない、兵隊チャツプリン、アラスカの山の中で飢と寒さに戰ひながら喘いでゐるチャツプリン。等、等、等、——これ等はすべて「目的なき運動」において、道德と習慣を超越してゐるところに現れてくる、一つの時代的姿勢である。その運動にはすべて正確な方式があり、それ故、映畫の筋書をはなれて、チャツプリン自身が躍りだすときにのみ、はじめてつくりあげられる雰圍氣である。そこで、チャアリイ・チャツプリンが、時代に逆行する彼のマスクによつて、明かに世界を征服したといふことが了解されるであらう。

3、哀傷ヒロイズム

チャツプリンの映畫が著るしく主觀的であることは、彼の「マスク」が多分に製作者である彼自身を象徴してゐるからである。

彼の唯一の旅行記である、My Trip Abroad. 一卷を手にすると、僕は常に彼のマスクの幾部分かを感ずるところの意匠で同情的な彼自身に觸れる。

——「小路、横町、家、窓、町角、そこにも人生は動いてゐる。獸的な、それにもかゝはらず美しい人生がさまざまのかたちをとつて動いてゐる。唯、まつしぐらに、盲目的に人生といふ軌道を走つてゐる。過去を忘れ、現世を樂しみ、未來を思はぬ人間が燈火に瞬く窓々に、ぼんやり生きてゐる」

これは、彼が、トマス・バークと共にロンドンの夜の街をあるいてゐるときの感想である。これ等の哀傷的文字の連續は、すくなくとも喜劇的要素の一切を否定するものである。この同情的センチメンタリズムが、チャツプリンの出場せざる「巴里の女」をつくりあげた。「巴里の女」は男女の關係が一つの偶然によつて行き違ふことに悲劇的展開を重ねてゆく一種の運命劇であるが、最後の場面において、かゝる宿命觀が全く展開の途を失つてゐることを物語つてゐる。暗い。暗い。それでゐて途方もなく冷たい。——

幾艱難を重ねた女が、田舍の道を荷車にゆられて通りかゝる。彼女は荷車のうしろの方に馬に脊を向けて腰かけてゐる。そこへ、荷車の前方から警笛が聞えてくる。自動車だ。巴里の金持のドライブだらう

と彼女は思ふ。ところが自動車に乘つてゐるのは彼女の昔の戀人とその書記である。そのとき、男の頭の中を女の幻影がかすめて通る。さうだ、あの女は如何したらう。——ちよつと、そんなことを考へたとき、一瞬間、自動車は荷車とすれ違つてしまつた。車中の男も、馬に脊を向けてゐる女も、共に顏を合すことなしにすれちがつてしまつた。——

この結末の場面に絶望的な効果をあたへるものは、周圍の明るい風景である。長閑な春の田舍道。荷車は靜かに軋り、麥の青い穗が風にゆれ空は高く雲雀の聲がする午後の田舍道である。

しかし、かういふ筋は、今日の映畫ストーリーにおいては特に新しいものではない。しかし、映畫に用ひたのはチャップリンが始めてゞある。おそらく彼は、彼の作品がしばしばさうであるごとくモルナーの作品から暗示を得たのであらう。(モルナーにはさういふものが多い)

しかし、若し、モルナーであつたら、作品はもつと明るく、決してこのやうな、救ひなき慘忍さを表現することはできなかつたであらう。これは單なるセンチメンタリズムではない。彼の宿命論の具體化が此處に示されてゐるのである。

作者、チャップリンはこの作品について、かう註釋を加へてゐる。——「わたしは最後の場面までは、少しの餘裕もあたへず、ひた押しに進んでいつたが、最後の田園の場面において始めて全體に一つのゆとりをあたへたと思つてゐる、——と。

彼のいふところの「ゆとり」は、外邊の明るい風景である。心理的には、決して展開することなき彼の宿命觀が最後にいたつて頂上に達したといふだけのことである。そして、雰圍氣の明るさによつて、この作品の暗さは一層強度を加へてきた。

ひとり、「巴里の女」のみを論ずるのではない。あらゆる彼の作品が、若し、畫面から、チャップリンの姿を、——否、彼の合成分である帽子と杖とちよび髭とドタ靴とをとり去つてしまつたら、喜劇的効果は影をひそめてしまふであらう。

それほど、彼自身は絶望と哀傷にみちみちてゐる。畫面において、失望せず悲しまず、明るく颯爽として踊り狂ふところのチャップリンは、いふまでもなく、彼の魂の反現實的な表現である。チャップリンは日本の少女文學の作者たちに理解せられてゐるやうな、うすつぺらなセンチメンタリストではない。彼の笑ひ聲は、絶望的な呻きの底から漏れてくる。

彼は途方もなく、回顧的な懷疑派であるが、しかし、彼の哀傷と懷疑とは一つのクライマックスに達することに新しい彈力、——ヒロイズムを呼び起してくる。そして、次の悲劇的運命の中へ突進する勇氣と情熱とが用意される。彼が歴史を通じてナポレオンの運命に最も多くの興味を持つてゐるのもこれがためである。彼がナポレオン映畫の計畫を樹てゝから、もう餘程の年月が經つてゐる。彼のバンガロウに

は、ナポレオンを描いた二つの額がかゝつてゐる。一つは、白馬にまたがつて全軍を叱咤する、得意の絶頂に立つナポレオンであり、もう一つは、敗殘の身をセントヘレナへ送られてゆく船の甲板の上から悵然としてフランスを望んでゐるナポレオンである。

この二つの畫面が象徴するものは、最も高い意味において壓縮された人類の運命である。戰ひを前にすることに、これが自分の最後ではないかと思ふナポレオンと、一作を完成するごとに彼の能力の終末を絶えず意識しないではゐられないチヤツプリンと、――この二つの對照は、いさゝか兒戲に類するとしても、甚だ僕をして微笑せしめるものである。チヤツプリンが常に現世的人生觀を強調してゐるのも、彼のヒロイズムの故であらう。彼は、「私は今日此處にゐる」といふ言葉によつて、彼自身の複雜多彩な感情を説明してゐる。この言葉の裏には、彼のヒロイズムと、懷疑主義と、孤獨感と、――あらゆるものが錯綜してゐる。「私は今日かくのごとくそびえてゐる」「だが、明日は多分消えてしまふであらう」

すべての天才藝術家に共通であるごとく、チヤツプリンは常に一つの叛逆心理を用意してゐる。彼は今日、かくのごとき世界的人氣の中にゐるにもかゝはらず、絶えず社會的壓迫の中に立つてゐる彼自身を感ずる。(いかなるよき狀態と境遇においても、例へば彼が世界の王座を占めるとしても同じ社會的壓迫を感ずるであらう)



チヤツプリンの自畫像

4、アメリカ的要素

チヤツプリンは、常にアメリカ資本主義を罵つてゐる。彼はアメリカ人が大嫌ひで、それ故、實生活においても、まつたく孤獨である。彼はアメリカ資本主義に對抗することに一つの歴史的役割をさへ感じてゐる。

然らば、彼の中にはアメリカ的要素は全く無いか?

僕は立ちどころに「ノー」と答へる。アプトン・シンクレアが彼についてうまいことを言つた。――「チヤツプリンはアメリカ人ではな

い。それにもかゝはらず、ことによると彼は誰れよりもアメリカ的であるかもしれない。」

　これはチャップリンを讃美するための逆説的表現であるが、しかし、僕は同じやうにアメリカを憎む二人の藝術家、チャップリンとシンクレアとが、共に「ことによると誰れよりもアメリカ的であるかも知れない」ことにおいて一致してゐることを感じる。チヤップリンはアメリカ資本主義によつて利用された。そして、アメリカ資本主義はチヤップリンによつて利用された。アメリカがなかつたらチヤップリンは今日のごとき世界的偶像となることは不可能であつたかも知れない。シンクレアは、アメリカ的宣傳術を逆に應用することによつてその存在を高からしめ、そして、チヤップリンは、アメリカ的騒音を、彼の英國的妥協性によつて緩和してゐるといふだけのことである。

　イリヤ・エレンブルグは言ふ。――「映畫は國際的である。フイルムは全世界をすべり廻る。毎夜、世界全土のあらゆる民族の幾百萬は映畫に吸ひよせられる。わたしは眼を瞑ぢる。そして、人類の笑ひ聲を聽くことができる。これは毎日、百五十萬の陰氣な人々がチヤアリイ・チヤップリンの奇想天外なズボンを見て笑つてゐるのである。映畫は新しい情熱――運動で充滿してゐる。これは傾向ではない。實在である。専門語で言へば、彼は廻轉してゐるのである。映畫において運動が止まつた時を、機械が毀れた時を想像して見るがいゝ。然り、映畫は形像の、運動の、感情の、生活のモートルである。アメリカの映畫は傾向ではないことの眞實らしさを、人間のつくつた眞實らしさを與へてゐる。かくて、今、アメリカには映畫が獨立した藝術として創造された。それらのフイルムがほとんどことごとく彫琢を經ない未成品であり、直感の産物であり、それ故、自覺ある人の結論でないことはいふまでもないが、しかし、そこには既に未來の映畫の道筋が、はつきり感じられる。彼等は現代の偉大な藝術家、チヤアリイ・チヤップリンを、彼が自分のフイルムを創作することを助けた」――。

　そこで、エレンブルグは聲を大にして言ふ。「映畫はエヂソン、そして、チヤアリイ・チヤップリンによつて創造された」

　これは結論として、「アメリカを失ふともチヤップリンを失ふことなかれ」といふことになるのであるが、チヤップリンの中にある純粹なアメリカ的要素が、シンクレアの所謂「帝政政治の排泄物のかはりに憲法と聖書とが崇拜の對象となつてゐる」ところの、そして、「地上のいかなるところにも、歴史のいかなる時期にもかつて見なかつたほどの苛重なる貢物を敬虔な、勤勉た勞動階級からしぼりあげてゐる」ところの現代のアメリカを憎むことは當然であらう。

　一私人としてのチヤップリンは英國的な優雅さを樂しむ、禮服を着てシルクハットをかぶることの好きな男である。彼の現實の姿勢の中には、ダグラスに見るがごとき明快闊達なところはない。神經質で上品で、ヨオーロッパへの旅に出かけても、群衆の熱狂が大嫌ひで何時も逃げ廻つてゐながら、しかも、熱狂を期待しないではゐられない彼

である。船の中ではチップのことが氣にかゝつて仕方のない彼である。「チップだ、これはうつかりしてゐたぞ、船員にとつては大問題だ。數へてみると、先づ寢台番、給仕人、給仕頭、部屋番、甲板のボーイ、雜役、風呂番、土耳古風呂番、遊戲場番、喫煙室番、休憩室番、新聞屋、エレベーターボーイ、床屋、――ずゐぶんゐるぞ、船醫と船長にもやらないと憎まれやしないかしら」――

撮影中でも機嫌が惡くなると、むつとして仕事を中止してしまふ彼である。すべて、かういふ藝術的な神經質は、すくなくともアメリカ的明朗さとは對蹠的のものである。それにもかゝはず、アメリカ資本主義をして百パアセントの商品價値を感ぜしめるアメリカ的要素の上に彼は社會的姿勢を保つてゐるのである。

5、東洋的宿命觀へ

チヤツプリンは、しばしば、社會主義的批評家から、過去の抒情詩人として論難される。その論難の方法は一定してゐる。――「彼は資本主義機構の誤謬と、禍根と、不正義とを認識しながら、積極的に破壞しようとする意志を示してゐない。」「彼は宿命的低徊主義者であつて、絶えずセンチメンタルな涙によつて階級的鬪爭の足並を鈍らせる」

これはチヤツプリンに對する批難の常套語である。しかし、常套語であると同時に一つの時代的眞理を含んでゐる。さういふ立場から言へば、現在の彼は明かに、大きなクライシスの上に立つてゐるとも云へる。そして、彼の前にひらかれた二つの道。――社會主義への積極的前進と、宿命論への退却。

ある人たちにとつては、彼がこの道の接合點に立つて往きつ戻りつしてゐることが、「階級鬪爭の足並を鈍らせる」ところの低徊主義を感ぜしめるのであらう。しかし、彼はこの場所においてのみ、彼の時代的存在を認識してゐるのである。おそらく、永久に彼は對角線の結び目に立つて迷つてゐるであらう。そこにのみ彼の歴史的任務があり、彼の時代的役割がある。それ故、彼はもつと革命的になると同時に、もつと宿命的になるに相違ない。それほど人生は彼にとつては神祕な、不可思議な魅力にみちみちてゐるのである。若し、彼がその方向の何れかに足を踏みはづしてしまつたら、その瞬間から、彼は喜劇役者としての扮裝を、――山高帽子を、口髭を、ステツキを、ドタ靴を、投げ捨てゝ、悲劇俳優として登場しなければならないであらう。そして彼からアメリカ的要素を奪ひ、百パアセントの商品價値を奪ひ去るであらう。そして、われ等の親愛なるチヤツプリンは永久に古くして新しい「マスク」だけを殘して、歴史の古典に歸るべく退場するであらう。――

しかし、チヤツプリンは動いてゐる。踊つてゐる。單なるルンペンにすぎなかつた「アルコール先生」は「ゴールドラッシュ」にいたつて一つの方向を示しはじめた。觀衆は最早「泣くべきか笑ふべきか」

に迷ふよりも以上に「笑ふべきか、考ふべきか」に迷ひはじめたのである。彼は「目的無き運動」をもつて一つの目的を果しはじめた。チャップリンと「トーキー」との組打ちがいかなる形をもつて現れてくるかといふやうなことは如何でもいゝ、彼の新しい歴史はこれから開けるのだ。彼はますます孤獨になり、ますます宿命的になるがいゝ。そして、ナポレオンの映畫の完成において、何人も果し得なかつた大藝術を完成するであらう。チャップリンのナポレオン！ そして、チャップリンは急速な角度をもつて沒落してゆくがいゝ。

──「長い旅に疲れて、日暮れの道をあるいてくると、はるかに燈火が見える。絶望の夜を照らす燈火だ。月よりも星よりも、その燈火が何と大きいか。それは人間の感情に沁みとほつてくる。そのうしろに、何ものかに憧れてゐる人間の眼が輝き、嘆きと喜びにみちた生活が動いてゐるからだ。わたしは燈火の流れてくる窓のうしろに自分の姿を見る。影がゆらめいて通る。自分の影である。」（チャップリン）

チャップリンは誰れの心の中にも遍在してゐる。そして、彼こそは、歴史のあらゆる時代において、人生の旅を照す燈火である。その燈火のうしろからチャップリンの音樂がひゞいてくる。

老ひ衰ろへ、虐げられつくした老人の聲、生活に喘いでゐる、疲れた失業勞働者の聲、その中にまぢつた明るく輝やかしい踊子の聲、──すばらしい力をもつて迫つてくるコーラス。

これは、ゴールド・ラッシュの酒場である。彼によつて象徴された人生である。畫面それ自然によつて一つの音樂的運動を示してゐるチャップリンが、「トーキー」を用ゐるのは當然であらう。彼の映畫は、あらゆる藝術の要素を含んでゐる。文學と、繪畫と、音樂と、──そして畫面のリズムそのものが彼の人生觀であり、彼の哲學である。

近代的メカニズムに對して藝術的反抗を試みようとしてゐるチャップリンは、今「街の灯」によつて、彼の所謂「最後の」運命を決しようとしてゐる。これは頑迷な反動主義ではない。トーキーのメカニズムに對して、彼は飽くまでも、藝術的理想主義をふりかざしてゐるのである。



モダンよりシークへ

——社會的根據に就いて——

新居格

一

モダンよりシークへ。これが私の受取つた課題である。この課題を受取つたときそれにたいする解答はきわめて雑作なきもののやうに思はれたが、いよ〳〵となるとかなり難かしいものとなつたのである。何故ならばモダンと云ひ、シークと云ふが如き言葉はきはめきて漠然と口の端にのぼされてゐて、それらに對する一定の鮮明な意義が具象的にはないからである。モダンからシークへと云ふ場合にもわたしは社會事象を引例して説明しなければならない。何氣なく云へばモダンと云ふ英語からシークと云ふフランス語への轉移でしかありはしない。英語のモダンが當世風なら、フランス語のシークも亦當世風の意味がある。たゞ英語のモダンがあつさりと現代風なのにたいして、フランス語のシークには粋とか瀟洒と云つた風の意味がある。云はば光澤があるかの如き感じがあるだけである。では、モダンからシークへの轉移とはアメリカ風の近代明色から一轉してフランス風の洗練に移つたことを意味するのであるか。シークなる言葉はモダンたものに洗練と光澤とが加味された一段と高度な文化階梯でもあるといふのか。

わたしは語學者ではないから右の二つの文字に就いて詳細な解釋を下すことは出來ない。たゞ思ふのであるが、もうモダンでもあるまい。として云ひ換られたシークなのではあるまいか。千九百三十年型はシークシークとコロンバンの廣告ビラには書いてある。モダンがもう昨日の薔薇となつてしまつたといふのか。モダンと云ふ言葉があまりにも廣汎にまたあまりにも通俗化されたのでその言葉のもつ清新な香りがぬけて、シークと云つたフランス製の言葉が好ましい響となつたのであるか。少くともシークと云ふ言葉がモダンと云ふ言葉のそれほど通俗化してゐないことだけはわたしにもハツキリ云へる。それだからモ

ダンからシークへと云ふことは一つの轉歩と云ふことになるのかどうか。わたしには言葉から言葉への移り替りに重大な少くとも何かの意味があるとは思はれない。あるとすれば一つの言葉例へばモダンがあまりに通俗化されてゆくにつれ、その言葉のもつ內容もいくらか異り、その言葉の意味する光度が薄れて來るとは云へるのである。わたしはモダンに就いてその意味の受容が多少とも異なつて來たと思ふ。尖端が尖端である限りに於いて、それは清新な鋭角度をもつ。それが通俗化される頃には鋭角はとつくに鈍磨して常凡な形態に墮して所謂尖端性は消失するであらう。モダンその言葉の字義は何であれ、モダンなる存在として登場したあらゆる形態には何かしらの新しい色と、線條と、角度とがあつたことは事實である。例へば、モダン・ガアルにしてみたところでそれが始期に於いて指稱されてゐた時代に於いては何かではあつた。その指稱が通俗化され特に略稱された言葉が發生するころはもう既に意味する對象が異なつて來たのである。始期に於いての指稱は服裝上の形態についてでは少くともなかつた筈だ。しかるにそれが一般的の呼稱となつたときには全然形態の上の呼稱に轉移してしまつた感がある。そしてそれは遂に一種の時世粧と同義語になつてしまつたのである。で、如何にその人の思想、感覺、意識が舊來のやうに古風であつたにしても、斷髮し、ショート・スカアトを蹴し、引眉をし、ルーヂュを塗り、ハイヒールの靴を穿てば一箇のモダン女性と見做されることになつた。さうなるとそれは全く或る時代の、或る時期の時世粧に加へられた呼稱でありえてもモダン女性の內質的な指示とは別になつたのである。そこで再びその內質への轉向が意味付けられそれがシークの名によつて呼ばれ出したとすれば誤解された通俗化にたいする一つの抗議でもあるのである。だが、シークがさうした意味に於いて使はれ始めたのであらうか。わたしはむしろさうした訂正的な抗議と云ふことよりも通俗化にたいする特選的乃至貴族的た厭棄から企てられた轉移と見る。

最近ヘンリー・モルトン・ロビンソンが「しやれ者を退出させろ」と云ふ一論文を發表してゐる。

その要點は「ダンデイズムは常に正しい。それは極致に於いて完全論の哲學であると思ふ。云ひ換へれば、極度に開明した人々にとつてこれまでのどんな時代にも注目されなかつた卓越に到達しやうとする錬磨され深慮の伴ふ努力であつてその卓越とは物を怖れず、超然たるエピキユラスの夢に酷似しエピキユラス派の理想の內含するすべてのデリケートな適度によつて表徵されてゐる。それはむづかしい、艱苦に耐へうるところの卓越で、服裝、食物、乃至家具の如きに局限せず、人生の核心と基本數とに侵透するものでその例を求めねばならぬとすれば、青年期のヘンリー・アダムス、中年期のアルツウル・ショツペンハウエルそして老年期のジョウヂ・サンタヤナである」とするのである。

シークへの轉歩とはさうした意味であるのか。ロビンソンはダンデ

イズムとは附焼刃ではない。であるから目今流行せる無數の僞物である外形的ダンデイズは即ち bop, buck, beau 等、々、々の言葉で云ひ表はされた「しやれ者」とは區別されねばならないと結論してゐる。

ダンデイ（それを女に用ゐての dandilly 若くば dandizett）がフランス語のシークに適應するのかどうかこれまたわたくしの知るところではない。シークの解說なぞは博識な哲學者九鬼周造氏に待つことにしやう。同氏の論稿『「いき」の構造』（雜誌「思想」一月號二月號）の中にはシークを左の如く說明してゐるのを見る。

「第一に問題となるのは chic といふ言葉である。此語は英語にもドイツ語にも共に借用されて居て、日本では屢々「いき」と譯される。一體、此語は語原上不思議な運命を有つたものである。chic の本原は Shick である。即ち Schicken から來たドイツ語である。さうして Geschick と同じに、諸事に就いての「巧妙」の意味を有つて居た。此語をフランスが輸入して、次第に趣味に就ての élégant に類する意味に轉じて用ひるやうになつた。今度は此新しい意味を有つた chic として、即ちフランス語としてドイツが逆輸入をし、た。多くのドイツ人は今なほ純然たるフランス語と思つてフランス風に chic と綴つて居る。chic の語は斯樣な經歴を有つた語であるが、此語が現在有する意味は全然フランス國民の創造したものである。併し此語の內容をなす意味は決して「いき」ほど限定されたものではない。外延のなほ一層廣いものである。即ち「いき」をも「上品」をも等しく要素として包攝し、「野暮」「下品」等に對して「趣味の優越」を表明するに止まつてゐる。」

また他の箇所でシークに就いて同氏は書いてゐる。

「chic とは上品と意氣との二頂點を結付ける直線全體を漠然と指してゐる」

シークと云ふ言葉の意味は以上の如きものであるらしい。そして「上品と意氣との二頂點を結付ける直線全體を漠然と指したものだ」とのことである。だが漠然たることに於いてはモダン若くはモデルンも又同樣であらねばならない。モダンと云ふ言葉も何も新しい言葉でないにも拘らず、何かしらの新しさ、少くとも新しい匂をもつものであるかの如く用ひ始められたのは事實である。世界大戰役のイギリスの生んだモダン・ガアルも從來とは違つた色調をもつてゐた。アメリカの社會が持つモダン風景も更に角新しいと思はせるところのある近代所産である。日本でのモダンも多少とも新しい風のそよぎ位は感ぜられたかに思へる。しかもモダン、モダニチー、モダニズムとは何であるかと云へば等しく漠然たるものであつたと云ふの外はない。人々はさま〴〵の角度に於いてそれを解釋した。さうしてその解釋は漠然と一味相通じてしかも明確なる定義付を缺いてゐたかに思はれる。しかも事實に於いてはその名を冠むつた無數の存在が發生したのである。非難者はモダニズムとは結局資本主義社會末期の沒落前の虹だと云

ふ風に見た。少くとも後期資本主義がその上部構造の上に浮べつゝある投影と見た。さらにモダニズム即アメリカニゼーションと見た。ジヤツヅ的傾向を、科學的傾向を、科學性を、從つて感傷主義の否定を、スポード時代を、機械のダンスを、逡巡から最小抵抗線への轉步を、集團性を、曖昧から明朗を、それらをモダニズムの特彩なりと指摘した。しかしそれらの諸要素が資本主義の屬性でもなければ、アメリカニズムのみのものでもない。それに現代にあつてはプロレタリアニズムも科學的性とスピードと、集團性と、明快と而して最小抵抗線とをもち又持たんとしつゝあるからである。たゞジヤツヅ的傾向だけを資本主義末期の狂想曲たと見るならばそれはさうだと云へるのである。

二

モダニズムとは何ぞや、それを明快に且つ何の遺漏なく說くことは至難である。漠然たる輕い筆觸で素描しうるのみである。エフ・エル・ホイーラアはモダニチーを如何に論じてゐるか本稿執筆の日までに彼の著書「モダニチー」がわたくしの手許にまでつかなかつたのでそれを參照することが出來なかつたが、わたしはモダニチーを、風の木葉を動かすごとく現代の社會のその面、この角度に動いてゐながら、しかもなほ漠然として遺漏なき定義を明確に打出し難いのを感ずるものである。

この漠然たるモダンからさらに漠然たるシークに轉化したと云ふ場合、その社會的根據を何處に求むべきであるか。

エドガア・アンセル・モウラがその著「このアメリカ世界」のなかで歐羅巴人に就いて云つて居る。「ヨーロッパ人の政治的信條はよし何であれ、殆どすべての教養あるヨーロッパ人はモブからの區別に依存する貴族的趣味と標準とを特有してゐる。(中略)であるから、自らヨーロッパ人はすべての同一の高さにする力、特に、商業主義の不愉快な能力と標準化された生產とを一緒にする力に反對するのである。」

ヨーロッパ人の反對する行方にアメリカニズムと呼ばれるものがある。そしてモダンの色調が最も濃くアメリカニズム若くはアメリカニゼーションと共にあるとすれば、シークへの轉移とはモウラアの指摘した教養あるヨーロッパ人の愛し好むモブから遠離させて存在せしめる貴族趣味への還元なのであるか。さうであればそれは新古典主義への反對行進であると云はれねばならない。

わたしはジヤン・パツウが女性のデリカな線條美を表現するものはロングスカアトだと主張してゐるのを何かで讀んだことがある。それに對してアメリカのさる作家がショート・スカートを主張しショウト・スカアトが近代の社會生活により適合した服裝様式だと云つてゐるのを見たことがある。アメリカ女はロング・スカートの着用を嫌ふ。けれどボルチモアではショップガアルには否應なしに強制してロングスカアトを着させたと云ふことがある。それは雇主がショップ

ガアルのロングスカアトが客を魅惑すると云ふ理由に基いたものらしい。わたしは上述したフランス人の考へ方とボルチモアのショツプキーパアのそれとがシークで、ショート・スカアト賛成論者がモダンであると見てゐるかどうかを知らない。けれどもシークにはどうやら傳統的な光澤さが感じられるのである。わたしは端なくもイギリスの駐佛外交官ハロルド・ニコルソンがラトヴアの外交官と論爭したことを思ひ出す。後者が「すべて慣習無視は生意氣となる」と云つたにたいし「すべての因襲墨守は固陋である」と答へたことを。傳統と因襲とをもたないアメリカがモダニズムの温床となつたのは當然だと云へるのである。アメリカの影響ばかりとは云ひ兼ねるが、この國日本でもこの數年前からモダニズムの風が流れ始めた。而してそれは段々と吹き募つて一般化され、通俗化された。その現象形態をわれ〳〵は否應なしに認めざるを得ないものとなつた。文學の領域にさへモダン文學の發生を見るに至つた。文學のことはしばらく措く。また、正しく見解されたモダニズム(そのものの發否は別として)もしばらくあづかることにする。と云ふのは現在の日本で流俗的に亂用されつゝあるモダニズムを一先づ取上げて解剖に附せなければならないからである。一例をあげる、モダニズムは科學性に立脚するが故に、感傷性とは相容れない。然るに所謂モダン民謠とも思はれてゐる盛場の行進曲の如きは依然として涙と感傷とが纖維となつてゐる。昨今では多少の頽勢を見せた所謂モボ・スタイル、それは單なるアメリカの映畫俳優の扮裝模倣に過ぎなかつたそれがどこにモダニズムの清新な角度をもつてゐたか。ハイ・ヒール、ボブ、ルーヂュ、ハンドバツグ、ショート・スカアトそれらの組合せが譯もなくモダン女性の姿態として通用した。その場合その女性がどんなに古風な心の持主であつてもそれは計算に入らないのであつた。バアでもバアに侍するウエートレスでも、ましてダンス・ガアルが何れもモダン風景の登場者となつた。尤も新しい大都市が再建されて、そこに多くのモダン建築や橋梁や照明が見られるに至つた。青い空を立體的に貫いた高層建築或は集合住宅であるアパアト、アスファルトの坦道、その上を疾驅する自動車とバス、地下には地下鐵道、地上には航空機、それらは近代の機械文明が生んだモダンな景觀である。そしてそれらを背景として人々の生活様式にもモダナイズされた多くが意識的なると、無意識的なるとを問はず、あるにはある。しかしながら他面に流俗的なモダン姿態があるのである。そのところ玉石混淆であると云はねばならぬ。むしろ蒙古附近から黄塵に空を染めて吹いて來る風塵のやうに、モダンの僞態が通俗的な擬態をしてゐるとも觀られるのである。

レビウ、マネキン、ジヤツヅバンド、トオキー等、等、等、あらゆるものが飜譯化される。それらが移植された最初に於いて稚拙見るに堪へないのをわたしは別に非議しやうとは思はないし、現在の如く國際的交渉が盛んな時代に於いて特に取り立てゝ模倣を指摘する必要も見ないのである。わたしは時代の推移が浮べて來るあらゆる現象を寛容

に見ることもする。さりながら、コロンバンの廣告ではないが、千九百三十年はシークの時代だと叫ぶものがあるとすれば、よしそれは新しを好む漫然たる動徵であるにしても一應は理由がつけられるのである。即ちモダンからシークへの轉移を解釋して新古典主義への復歸とすべきではなくして、むしろ流俗的僞態から光澤のある正態への改訂的前進と見るべきではなからうかと思はれるのである。モダン・ボーイがシーク・ボーイの呼稱に變つたにしても、モダンとシークの字義的解釋からしてかゝる理由はないものと思はれる。わたしは言葉なり名目に就いて考へやうとは思はない。末梢的存在はそれが何であれ堪らないものであるが、末梢的存在ですらないものが流俗的受容の下に於いて僞態を僞態でないかの如く見せるまやかしものに至つては特に堪へ難いものである。

三

尖端ならざる尖端があり、前衞でない前衞があり、モダンでないモダンがそれ〴〵跋扈するとき、それ〴〵の本物は轉位する。良貨は惡貨に驅逐されるグレンシアムの法則は巷に塵を捲上げるやうに煽動するチヤアナリズムの力に助けられて一層力強くなる。ダンセニイの小話「人選ひ」がその間の消息を傳へてゐる。

「名譽が夕方街を歩いてゐたとき、お化粧をした惡名が瓦斯ランプの下で意氣揚々としてゐるのを見た。さうして大勢のものが道の塵のなかで彼女に跪いてゐた。「あなたは何と仰言いますの」と名譽が惡名に訊いた。「名譽と云ふものです」と惡名が答へた。そこで名譽は誰も名譽が行つて仕舞ふのを知らない位そつとぬけ出して行つた。惡名は程なく歩き出した。すると、崇拜者たちも立ち上がつて付いて行つた。惡名は案の定彼女の郷里の地獄に追隨者を導いて行つた」

惡名が羽振をきかせてゐるとき、名譽はしのびやかに遁走するやうに、僞態モダンの諸相がモダンの名によつて横行してゐる場合、僞態でないモダンの姿は形を消すのである。露骨に云ふならば、混淆状態にあるときには流俗的に見て贋造モダンの現象が席を占める。わたしは今をその時であると見たい。清新な斷截面のエスプリの少しもない古風でも外面の化粧だけでモダンで通る時代であるからだ。モダンからシークへがあるべきものがあるべしと云ふ動きかどうか、或は「もうモダンでもあるまい。それは古くなつてしまつた。だからまだ通俗化しないシークを用ゐ」て特選的優越を漫然と誇らうとするに過ぎないのかどうかわたしには判別がつかないのである。シークと云ふ言葉がモダンのそれに那程左樣に入り替りつゝあるのか、而して明らかにシークへの動向があるのかどうかをも實は知らたいのである。だが、俗解モダンがその意味の正しさに歸つてさらに一つの前進をしやうと云ふ傾向があるのだと聞かされゝば、さうありうべきことだとわたしには受取れるのである。それはモダンの言葉の濫用が適正の使用に收縮することであるから當然に受容れうべきことであるに外ならない。

世界を風靡したジャッヅ音樂がその不完全と平凡と單調とでヨーロッパの專門音樂家は云ふまでもなく、音樂の門外漢をさへあかせたと云ふことになつた。ダンサアは別として一般人はヂャッヅにあきて來た。そして却つて物靜かな曲目に耳を傾けたい欲望が擡頭して來たと云ふ。ヂャッヅ音樂自體も新しい調整のリズムに轉化してゆかうと云ふ傾向を示して來たともきく。ヂャッヅ音樂のリズムの社會化された社會のそれも調整と光澤とに前進すべく向いて來たのかも知れない。異樣感を強く燒付けたモダン女性の施粧も尋常のものと化了して來た許りでなく、日本女性の洋服姿も板について均整と美とに移つて來た。その程度になつてシークの呼稱が貼付されたとすればそれはモダン風景のその方面に於ける一つの進步である。漸く整形して來たのであるとも云へやう。モダンの稱呼もあまりに耳馴れて來て、シークと云ふ稱呼がいくらか耳馴れないだけに新味を帶びてゐるやうに思はれてゐるのではない。シークだとて今更の言葉ではない。しかし言葉の內容は絕へず移り變る。であるから現在の日本で云はれてゐる、また云はれかけてゐるシークがフランスで意味するそれと全然同じだとも云はれないかも知れない。現在日本でのシークの意味は整形されたモダン、光澤と洗練とが加はつたモダン、濛々として街巷を蔽つてゐたやうな暗靄が沈んで多少の明澄さを加へた、つまり暗靄量の少くなつたモダニチー、さうしたものに加へやうとする稱呼ではないかとわたしは回答してみたいのである。

だが、ウルトラ・モダン、シーク・ボリッシュド・ヴアンダリズム、モダン・バア・バリズム、さうした言葉が廣告塔の電飾のやうに明滅する。

華やかな現在日本である。しかし現在日本の現實は華やかなばかりでなく無數の黑い線條をも交錯させてゐる。詰り、社會のもつ明暗が共に濃度になつて來たのである。モダンからシークへと云つたところではそれは云はゞ社會表相の浮遊層に於ける問題である。フイルムの回轉につれて移り行く形と影との變化、その範圍に於いての問題である。しかも、わたしはそれにたいして以上の如き一つの回答を與へてみたのに止まる。雜誌「ヴアニチー・フエア」に掲載されさうな題目であるとつくづく思ふ。が、この回答をするに當つてわたくしは現代のモダン青年男女とシーク青年男女とに識別されうるどれだけの相異があるかを具象的に記述しえないのは殘念である。わたしは注意深く觀察を試みてはみたが、強いてわたしが見解したやうに云ふ以外に具體的な事例を持つて來ることは出來なかつた。あるにしても僅に仄かな色合の相違ではないのか。この複雜に交錯し且つ絕へず變形して行く社會現象のうちから鮮明に區別を剔り出すことは誇張しない限り不可能である。まづ言葉があり、事實が言葉に從つて發生する傾向がある。よかれあしかれ、しかも漠然とではあるがモダン的色調が顯在したやうに、シーク的な色調をもつ一群の形態がそのうちに顯在するやうになるのかも知れない。アメリカにはこれまでのところシークはな

い。明快はあつても色氣と色合とはなかつたからである。シークはアトモスフイアの纖細が光澤となる。それはモオラアの指摘したやうな貴族性に近接することである。新古典主義への復歸ではなく、新貴族主義の加味になる。近時のアメリカ文化がほんのりではあるが微量の色氣と色合とを附け加へて來たやうな傾向がある。しかし何と云つてもビジネスと、能率と、スピード・エンド・マツスプロダクションである。日本にはアメリカよりもアトモスフイアが豐かである。その潤ひある新情緒がモダニズムへの完成から早くもシークにたいする愉悅となつたのではないか。藝術の國、藝術的な國、であるから新藝術派が早くも古めかしき殘滓をもちながら一寸したお化粧でもしてる國。さうしてフランスの藝術が肌に合ふ。シーク・ボーイと云ふ意味でコクトオ・ボーイと云ふ言葉を使用してゐる青年をわたしは知つてゐる。豫定の枚數を超過したから省きたいことをカツトして直ちに結尾に急ごう。そして云ふ。モダンからシークへと主張するわたしではない。たゞ課題にたいしてもわたしの見解を投げ出してみたまでゞある。だが、雜誌に娛樂の洪水を見るときには多少氣のさす執筆であることを感じた。人人が所を得て輕い氣持で紅茶の後に論ずべきテーマであるからである。

　それからシークの思想内容に就いてであるが、モダニズムがイズムでもなく、思想でもない如く、シークにイズムも思想もある譯のものではない。ダンデイズムが哲學上の完全論への到達だと說いた論者がゐるから、シークもその意味での形而上的思想を強いて附加してもいいかも知れないが、それはむしろ特に構成して附加するだけのことである。シークは主としてスタイリツシユな問題である。云はゞ形式主義論の範疇に屬する。であるから、シークなるものに思想内容があるとはわたしには考へ得られないのである。シーク青年男女は文學的には新藝術派に傾き、階級的にはプチ・ブル・インテリに多いことにならう。形式に關心をもつ必要はプロレタリアも同樣ではあるが、プロレタリアにとつてシークの問題は當面のものではない。畢竟その問題に觸れる時機もあるが、それはプロレタリアが階級として消失する未來での問題であるからだ。今の時代に於いてはシークは有閑群の問題であるより外はない。シークな青年男女群は思想に觸れたがらないか、思想を問題にしない。シークは個人主義的な問題であつて社會性と直接に問題はつながらないからである。わたしはこの國日本に於いてシーク的存在が發生してゐるとすれば、その社會的根據は多分かくあるべきであらうとは上述した。だがシークには社會思想のあるべきではないと斷言したいのである。

　果してシーク的な存在がどんな風に顯在的になるか又は、ならないで消えるかは少しく時日を置いてみまいと、少くとも、わたしには分からない問題なのである。

女給の生活

窪川いね子

私は最初に先づ、私の知る手近な例を二三舉げて、彼女たちの生活の線を描いて見ようとおもひます。

A

青磁色の着物をきつちりと合せて着た胸元を少し反らし氣味にして、銀盆を抱へて張つてゐる袖を眞白なテーブルクロースの間にゆるく搖りながら大股に、丁度ゴムの上をでもゆくやうに輕く彈んで歩くAの姿は、二十人以上女のゐるその店でもひと際目立つて見える方でした。目鼻立ちの派手な美しい顏を、いつもつんと正面に据ゑてゐましたが、しかし彼女は別に澄ましやではないのでした。

「や、いらつしやい。」

人混みの中に顏なじみの學生など見つけると、速つぱにさう聲をかけて、細い目に笑ひを含ませながら近づいて行きます。そして何か面白さうに話をしては、アハヽヽ、といつぱいに口をあけて大聲に、身を折つて笑ひ上げるのでした。その彼女の襟の蔭に、金の姿の襟止めが光つてゐる時があります。華族某の息子は、彼女の公然のパトロンなのでした。新聞の夕刊などに時々、カフエー何々の誰や彼れと情事をうたはれるその華族の息子といふのは、四五年前、まだ十七八だつた彼女が或るカフエーにゐた頃に、彼女の許に通つたものだつたさうです。

「私、その時分、とても嫌ひだつたのよ。」彼女はさう言ふのでした。然し今の彼女には、腑で寢たつきりの夫と、四つになる子供とを養はなければならないのでした。夫といふのは、その彼女が十七八の頃にゐた店の監督だつたのです。それに彼女が、ひとりの朋輩と爭つてまで一緒になつた男だといふ話です。夫が病氣になると、その頃は札幌のあるホテルに夫は勤めてゐたのですが、そのホテルの仕打ちは無情でした。彼女は憤然とその北海道の札幌から、病夫と子供を連れて勇敢に東京へ舞ひ戻り、そして彼女の現在の生活が始まつたのでした。

夏の或る午後、がらんとした食堂の片隅で三四人の女たちが一人の男の前に、憂はしげな顏をさし寄せて一通の手紙を讀んでゐました。それは眠り藥をのんで、自殺をはかつたAの夫の遺書なのでした。遺書には、病氣の自分の心苦しさや、Aのこの頃の仕打ちに對する恨みやが、めん〳〵とつゞつてあるのでした。

「まあ、Aちやんもよくないわね。それにしてもAちやん、どこへ行つてるんでせう。」

同居人だといふその男は朝からもう三度もAをたづねて來るのです。病人は命はとりとめたのですが。

「わかつてるわ。狂言なのよ。」
翌日になつてそのことを聞いたAは憎悪をさへ見せて言ふのでした。病氣で氣むづかしゝなり、果ては嫉妬をさへ交へてからみつく夫に、彼女はつく〴〵家が厭はしくなつてゐました。近所の評判になるやうな好い妻君だつたんだと、札幌時代の彼女を知つてゐる或る人がつく〴〵言つたことがあります。

　その後彼女の夫はやはりいけなくて、間もなく亡くなりましたが、その時も彼女はその華族の息子に、も一人のお妾と一緒に連れられて旅行中だつたのです。夫の死後、子供と妹をつれて店の近くへ越して來た彼女はその前から飮むやうになつてゐた酒にます〳〵醉ひしれるやうになり、まだかんばん前から電燈の暗い女部屋の破れた疊に顔を押しつけて醉ひたふれてゐることもありました。歸り仕度に女たちの急しく立ちはだかる蔭に、むかへに來た可愛い女の子が、まん丸い目を瞠つたやうにいつぱいに見開いて、母親の手を引つぱつてゐました。某様お誂へと華族の名を記した包紙を開いて、大柄な大島の重ねに見入り、子供にもハイカラな洋服をこしらへて、私はこれを着て、上野公園へでも連れてつてやるんだと言つてゐた彼女の子供です。その半日の若奥様ぶりを樂しみにしてゐた彼女は、その後どうしてゐますかしら。

B

　小柄なBが、紫の袖を長く垂らしてピアノを彈く時、それはお嬢様のやうでした。それはおそらく誰よりも、彼女自身がいちばんさう思つてゐたに違ひありません。彼女はオーソレミーヤ、アベ・マリアを原語で歌ひます。いつもつま先き立ちに靜かに歩き、言葉づかひもハイカラで丁寧でした。K大學の運動のメタルなどを襟に下げ、また外國の活動役者の名もよく知つてゐました。そして寫眞を撮ることが好きで、お孃様らしい自分のいろ〳〵な寫眞をたくさんアルバムにおさめてゐました。

　然し彼女の身體はお孃様のやうにのび〳〵としてはゐませんでした。小柄なのにもかゝはらず、少し前こゞみなのでした。ちよつと强つい目はすばしこく動くのでした。時にウイスキイの一杯をあふると、いつもお澄ましやの彼女がすつかり元氣になり、テーブルからテーブルへと笑ひを投げて歩きました。

　そして金持ちの學生たちに手紙を書き、彼らからの贈物を、彼らの前で胸に抱いて小おどりするのでした。彼女は自分の欲しい身のまはりのものを買ふことが出來ないのです。月末になると、少しでも多く溜めたお金を、彼女の「お父さま」の許に持つて行つてやらねばならないからです。

　その彼女について、二三の客から同じやうな噂が他の女たちの耳にはひりました。一人の客は、彼女に贈物をするといふので、或るデパートで彼女を待ち合せてゐました。男はイロ〳〵な考へをめぐらしながら待つてゐたことでせう。すると間もなくやつて來た彼女のうしろには、彼女に似て小柄な、そして何か眼に陰險な影の感じられる彼女の「お父さま」を始め、四人の妹が從いて來たので

す。――それに彼女の家族の全部でした。――男は仕方なくひとり〳〵の妹にも贈物をしみんなに御飯を御馳走しなければなりませんでした。

またひとりの客が、彼女を芝居に誘ふと、彼女はやはり家族の全部を引連れて行つたといふことです。

彼女の望み、それは彼女ひとりだけでなく家族の全部を、お孃樣のやうな自分のレベルにまで引き上げることでした。

C

柔かくいかつた肩を振つて、派手な裾をパッ〳〵と大股にけつて歩くCを見ると、誰もがすぐ、オヤ、こいつあと思ひました。脣の端を輕くかんで、少し下がつた目尻にいたづらしい笑ひを含ませて、それでゐてつんと人を喰つたやうな顏をしてゐました。こぼれるやうな愛嬌で、いと丁重に腰をかゞめると思ふと、いつぱしの毒婦ぶつた風で、人を喰つたやうなその顏をふんと仰向けます。

彼女は店の近所に髮結ひの二階を借りて、國から一緒に出て來た夫と二人住んでゐましたが、毒婦ぶつたその彼女が、自分の時間がある時など、ながし元でせつせと自分たち夫婦のものなど洗濯してゐるのでした。

「ゆんべは二人で手をつないで歸つたわよ。」

彼女が時にそんなことなど言ふ彼女の夫といふのは、保險會社か何かに勤めてゐて、體格の立派な、顏立ちの整つた、それでゐてどこか野暮な鈍さのある男でした。いつか彼女たちの間で誰がいちばん、御亭主に可愛がられてゐるだらうといふ評定の際、「まあ、あたいだね」さううそぶいたのは彼女でした。

そして外の食堂では、彼女を取卷く男の一人が、「御亭主と別れたいからといふもんだから……」さう言つて、今更のやうに他の女たちにぐちつてゐるのでした。

死ぬ前頃の彼女は、勤め人だといふ山の手の妹の家に引うつり、身體が惡く店も休んでゐた故か、毒婦ぶつたところがなくなり、優しくなつてゐましたが、病氣も大分よくなつたと言つてゐた頃、突然腦梅毒に冐されて死んでしまひました。

二千圓の預金がもう少し多くなつたら待合を出したいと最近言つてゐた彼女でした。

そして一人の客から二百圓の金を借り、その借金の連帶保證人に、やはり自分をとり卷く客の一人を選んだ彼女でした。連帶保證人にさせられたその若い男は彼女の危篤の報を店で聞いてどんなにかあはてたことでせう。

美しかつた彼女の顏が、木片のやうに無表情になつて、うは言許り言つてゐる枕元に、氣負ひ込んで、彼女の亭主の歸りを待つてゐた男もありました。それも彼女の二千圓の預金の一部に關係があるのに違ひありませんでした。

彼女の遺骨は彼女の夫によつて鄉里の北海道へ運ばれましたが、鄉里には、彼女から月々の送金を待つてゐる彼女の父親がゐるのでした。

D

若い女たちの中で、Dの年齡はかけ離れて見えました。彼女は四人の子持だつたので

す。彼女はその春、入婿だつた彼女の夫と別れたのでした。娘の頃カフエーに働いてゐたことのある彼女は、また元のやうにして働く決心さへあれば、四人の子供と母親を養つてゆけると思つたのでした。生れてまだ一年經たない末の子の世話も母親にまかせ、彼女は一張羅のお召の着物を持つてそのカフエーへ働きに出たのでした。初めの頃、乳が張つて來ると、彼女はよく便所にはひり、乳を搾り捨てるのでした。搾つた、乳のとばつちりを、そつと草履でふみ消しておくのでした。

とにかく彼女の年齢は、他の女たちに比べてかけ離れてゐました。さうしてそのことを彼女自身、白々と化粧ひしながらもよく知つてをりました。彼女は、若い女たちを目的に來る客たちの前に、そしてその對手の女へもまた客へ對すると同じやうに、丁寧な言葉づかひでお愛想を言ふのでした。娘の頃働いた店が格別のやかましいと言はれたカフエーLであつたといふのが誇りのひとつである彼女の、その丁寧な言葉づかひは、幹彦式の古めかしいものでした。

然し、時に彼女自身も、自分のさうしたワキ役たらうとする押し込みにばつの悪さを感じることがないでもありませんでした。それだけよけいに、彼女は年下の他の女たちにも常に遠慮を持たねばならないのでした。一方また、料理場の入口などで煙草を喫んでゐて、コック見習ひなどに怒鳴られるのも彼女でした。彼女にはさうした時、他の女たちのやうに負けずに罵り返して男をコントロールすることが出來ませんでした。

もう長男は小學校へ行き始めてゐました。そんな子供たちに對しても、白粉氣のある姿で家を出入りするのがはゞかられると彼女は言ふのでした。かと思ふと、知り合ひの人の贈物だと言つて何か活動寫眞の夜會にでも出て來さうな、背中へながゝと房の垂れる眞白なショールを、御自慢の黒縮緬の羽織の上にかけて通ふのでした。

日頃から無理に押してゐたらしい彼女の病氣が――多分肺が悪かつたのだらうと思ふのですが――いけなかつた時、そして本當にまだよくなつてゐないのに出て來てぶり返した時、骨ばつた、蒼い彼女の顔は賴りなげに哀れでした。整つた顔だち、小さな口もと、さうしたものは、こんな時よけいにみぢめな哀れさを増す許りです。

「みんな、私が悪かつたんですわ。」

彼女はさう言つて、悔いと反抗と諦めをごつちやにしたやうな表情をするのでした。

別れた夫といふのは、少し長く八百屋の男と話してゐたと言つては、髪の毛を掴んで引ずり倒す勝らしい男だつたといふことですが……。

E

私は今、こゝにとり上げて見た彼女たちの二三の生活、然し、これは決して彼女たちの生活の特異なものといふわけではないのです。それどころか、私の知る範圍では、彼女は彼女一人だけの生活を支へればいゝといふ、そんな人は全く一人か二人に過ぎませんでした。

朝の掃除が済んで、[illegible]をました彼女たちが殆どひとかたまりになつて立ちながら味噌汁をすゝつてゐる臺所口へ、他人には容貌ですぐそれと分る彼女の父親たちが顔を覗かせて小腰をかゞめます。娘は父親を見てちよつとつんと改まつた表情でうなづき、女部屋へ引かへし、幾らかの金を渡すのでした。

いつかなどは自分の家から通つてゐるEに父親があとから追つかけるやうにたづねて來たことがあります。

「今晩までに二十圓出來ないかつて言ふのよ。困つちやつたわ。」

ひと捻りでつぶれてしまひさうな、そんなひ弱な身體を持つたEは、低い鼻をちよと傑はせて蒼い顔をいよ〳〵暗くするのでした。

オーケストラと喧騒の洩れて來る暗闇の露路で、ねんねこで負ぶつた子供をゆすぶりながら母親が、エプロンと化粧した顔の白く浮いて見える娘に、くど〳〵と何か訴へてゐることもあります。

とにかく彼女たちは、彼女たちの家庭の事情に幾分の相違こそあれ、そして彼女たち自身の欲望に幾分の相違こそあれ、常に無理な經濟の必要にあがいてゐることは事實です。

彼女の家庭にとつては、彼女はたしかに唯一のかせぎ人であるに違ひはないのです。それにしても彼女たちは、夜までに二十圓つくれなどゝいふ父親に對してまでも、何と柔順な娘たちであることでせう。

親たちの中には、途中から降り出した雨に、合羽や足駄を屆けに來るお父つあんもあれば、毎晩娘の歸りを迎へに來て店の裏口にたゝずんでゐるおつかさんもあります。

然し、私の知つてゐるかういふレストランの女には、夫婦生活をしてゐる者はあつても俗にいふ男に入れ上げる女は殆ど無いと思ひました。彼女たちの生活ではそんな浮氣なことはゆるされないのでせうし、彼女たちの考へももつと功利的になつてをりませう。

かうして常に家庭の經濟に結びつけられてゐる彼女たちは、決して所謂モダン・ガールではありません。朝の掃除に五分十分遲れたといつてはスタンドの男に怒鳴られ、仲間にはつんと白眼で挨拶をそらされ、窓の縁に登つてはガラスの一枚〳〵を拭かねばならず油と泥でやつと持ち上るほど重くなつた雜巾を箒で押して、床のリノリウムを光らせて廻らねばなりません。一日勝手に休んでも他の仲間の時間が狂ひ、それがたとへ病氣であつた時にさへ、翌日に厭味を聞くことを覺悟しなければならない位です。かういふ生活は、惡い意味でいふモダン・ガールには、決して好まれないに違ひありません。

藝者といふものが、大抵の場合、家庭の都合によつて身を賣られ、働かさられるものと思ひますが、それと同じ關係にある女給たちは、モダン・ガールよりもむしろずつと藝者に近いものです。そしてこれはよけいなことですが、彼女たちの身のまはりの趣味も、所謂純粹な藝者趣味です。それは、だいたいにおいて彼女たちの目的にする客が、藝者あそびから目先きを變へて彼女たちに近づいて來る客だからではないでせうか。

　しかし、私のかういふ者へは、私の知る女給の範圍が狹いからかも知れません。私が知つてゐるのは、まだひと口にカフエーとか、カフエーの女とか言つてゐた頃です。この頃でもカフエー何々と呼ばれる話があることはあるのですが、それにしてもカフエーといふ言葉そのものが、何か野暮くさく、古く聞えるやうになつたのではないでせうか。さういふことを、これを書いてゐて氣づいたのですが、私さへさう氣づくほど、この頃では酒場といふものが別に出來、そして新しい喫茶店がどん／＼殖え、今までのカフエーといふものがすつかり種類別になつてゆきつゝあるやうです。

　そのやうに女給の型も幾分づゝ分けられるのかも知れません。私は酒場にゐる女の人をよく知りませんが、人に聞くと彼女たちは、女給といへばすぐ目に浮ぶあの白いエプロンをかけてはゐないさうです。こゝにはきつと斷髮で洋裝のひともをりませう。そこでは見つともなく何枚もの料理の皿を一度に運ばなくてもいゝのです。たゞ彼女たちは美しい小さなグラスに、黄や赤の洋酒のゆらぐ銀盃をさへ捧げればよろしい。彼女たちにはもつと變つた話があります。

　何いたるところの街うちにある無數の小さなカフエー、曰く何、曰く何、さういふ話にはカフエー女と一般に言はれる轉々と渡つてゆく放浪生活者も少なくないと思ひます。彼女たちは呑氣に、たゞ自分一人さへ食べてゆければいゝのです。それだけにまた彼女たちは開つぴろげでたあいのないものです。せいぜい錦紗に似た柄のメリンスの着物。

「ねえ、買つてちようだいな。」

　そして、店から馳け出して行つて、向ひの呉服屋で手に入れて來て、ふゝゝと仲間の顏を見て笑ひます。いゝな、と思ふと、初めての客とも直ぐに仲よしになつてしまひ、勝手を集め、自分のふるまひのやうな散ざいに浮かれます。もつともこれは、小さなカフエーの店主の政策からも來てゐるのです。

　それに比べると、大きなレストランの女のひとは何處とお上品にきれいに見えることでせう。收入がいゝから、立派にやつてゆけるのだな、初めの間はさう思ふのです。外部からでなく、自分も女給として一緒に生活して見てもさう思ふのです。だん／＼彼女達の生活の裏が分つて來ても、それは大抵の場合お互ひの愉快や、噂話に過ぎません。それ程彼女たちは互にお體裁ぶり、自分の暗路を仲のいゝ一人にさへ洩らさうとはしないやうです。

「女給さんよ、團結せよ！」と？

　いつだつたか外部から、プロレタリヤ的な意味をもつてさう呼びかけられた話を聞いたことがありました。おゝ、しかし、彼女たちは何のことやらと思ふことでせう。團結が出來るとか、團結が彼女の生活をよくするとかなどゝいふことは彼女たちにとつては全く可笑しなことです。彼女たちが、彼女たちの望む生活へ浮び上るには、秘密な非常手段が要りませう。そして彼女たちは非常手段をあれこれと選んでゐやうつゝ、遂にゐがき續けるのではないでせうか。

山村の春日

中村憲吉

山火事

『春風火を好む』と書きし立札や峡の村山の落葉の暖むこのごろ

其処此処の火事の小噂話のみならず今日は煙あがるちかき山火事

いく年の落葉のふかき春山の伐りあと焼けば土よりぞ燃ゆ

山火事に鎌鍬さげて行きしひと煙に塗みれかへりきたれり

春山行

枯れ山に春のかぜ鳴りそぞろかに乾きしおち葉木のなかを飛ぶ

谷のへの稚うぐひすのしばらくは人とわかれし山路にきこゆ

ちかくより山雞立ちて音たかし垂り尾をひきて木の上とぶ見ゆ

春山に來てゆくりなく山雞の雌雄のあそびを驚かしける

いくばくは芽ぐむ樹ありて濕り地に山の蛙のいちはやく鳴く

いぢけたる植林の杉は花結びその低木原うぐひす啼きつ

山どり

春の夜の小雨にぬれて山びとは生かして捕りし山鷄もて來

赤金の羽毛をかざる尾長どりは抱きすめつつ灯にかざし見る

夜すがらを伏籠にさやぎ鳥馴れずなほ人にむきて嘴を鳴らす

かへるでの赤き芽を吹く木のもとに鷄雛をだして籠に伏せて飼ふ

水の上

釋沼空

うつ〱に　心むなしくゐるわれを　つく〲に思ふ。やみにけらしも

船まどのゆれ　つよしと思ふ。うつら〱　睡り藥は　きゝて來らしき

大海の夜はの水の面(モ)の、ひたうねり　かぐろく見えて　ものなかりけり

いきよわる人の命を　ひたぶるに惜しと思へり。旅のすべなさ

はろ〲に　浮きて來向ふ海豚のむれ。つぶら〲に　向きをかへたり

曇りとほして、四日といふ日もくれにけり。物なき海に　臥蛇(グワジヤ)の島見ゆ

處女子の　いさかふこゑの聞き分かる。鳥にわたり來、幾日へにけむ

蛩の村にこよひやどりて、宵早し。二階に脚をふみのばし寢る

こと〴〵に　山かすむ日となりにけり。山にむかへば、心こほしも

山原になほ鳴きやまず　夜のふくる　山の雉子を聞きて寢むとす

山の夜に、醉むなしもよ。聞きてゐて、夜ふくる山の霧をおもへり

岩の上にふみゆく足のたまさかは、ふみためて思ふ。山の深さを

雪ふみて、さ夜のふかさを還るなり。われのみ立つる音の　さびしさ

目のくだり　梢かさなる常磐木の山下とほく　人ごゑ聞ゆ

映畫——左翼的な、營利的な

片岡鐵兵

一

この頃、映畫も、文學や演劇と同じやうにいはゆる左翼的なものが非常に大衆に受けるやうになつた。この現象はちつとも不思議ではない。みんなの生活が苦しくなつて行くのは、如何ともしがたい現實なのだ。失業者は全國に百萬からあるし、給料や賃銀は下る一方だし、雇主や資本家にどんなにコキ使はれても、もしそれに少しでも反抗したらすぐ馘になりさうだし、全く民衆の大々多數の生活は打ちのめされてゐる。斯ういふ現實——身にふりかゝる火の粉は、大衆を自覺させずにはおかないのだ。

一方、階級鬪爭は益々激化する。プロレタリアートの鬪爭力は、この社會のギマンをバクロし、民衆に階級的立場をハッキリさせて行つてる。

こんな時代に、文學や演劇や映畫の内容が、左翼的であればある程、大衆の喝采を博するのは當然のことだ。みんなが貧乏し、下らぬ奴にコキ使はれ、働いても働いても生活がラクにならぬのは、全く社會のカラクリが少數の資本家と地主の利益のために出來上つてるからだ。我々を搾取し、我々の生活を縊めるところの物を××しろ！　斯ういふ風に民衆に呼び掛ける映畫は、民衆の心のどん底を打つのである。民衆は自分の生活を苦しくしてゐるものに對する××で、胸がハチ切れさうなのだ。そのハケ口を映畫に求め得た時、民衆はその映畫に對して熱烈なる喝采をあびせ掛けざるを得ないのである。

從來の映畫の内容は、悉く無意味な喜劇か、センチメンタルた悲劇か、ハラ〳〵させる荒唐無稽なチャンバラ物か、目出度し目出度しの戀愛物か、好男子の出世物語かであつた。それらは娯樂として樂しまれた。然し、それらは、民衆の心を揺り動かす程の影響力を持ち得はしなかつた。觀客は心の表面で笑ひ、或は泣いた。然し、誰も、それらの映畫の表はすものが「本當だ」とは思はなかつた。映畫にあるやうな目出度い出世や、面白い運命が、自分の生活にとつても實現される現實だとは信じなかつた。嘘だが、ゴマ化しだが、それらの嘘に

瞞して、笑つたり泣いたりすることで、苦しい生活を忘れようとしたのに過ぎなかつた。その證據に、從來の映畫が人の話題に上つたのは、必ず出演スタアの印象についてゞあつた。映畫の持つ思想的方面は何等興行價値に於て大きな役割を持たなかつたのだ。それは、どうせ嘘なら、内容なんかに對して觀客は何の要求も持つてゐなかつた、といふことの證據である。興業政策にスタア・システムといふものが、のさばつてゐるのは、此の表れに他ならない。次ぎに、觀客大衆は、場面の美しさ、面白さ、そのコンテイヌイテイといふものに映畫の重要性を求めた。そして、一層大多數の觀客は、映畫がどうせ嘘八百の物語なら、事件や場面がなる可く心を打つて來るスリ、ングな物に刺戟されたいと要望するやうになつた。心の病的な、異常な刺戟によつて、日常の文化的被搾取のウツセキを忘れよう、斯る要望が、劍劇物の大きな流行の基を作つたのだ。

然し、劍劇などが、やがて行詰るのは仕方のない事だ。その手法に於ても、その興業政策に於ても、それはやがて行詰つた。何故なら、現實の生活に「劍劇」はない。その素材、形式の暗示を、日常生活から拾ひ出して來ることが出來ない藝術は、當然ほろびるのが運命だ。そこで、劍劇もぼつ〳〵飽かれたとなると、今度は何劇で金を儲けやうかと、映畫資本は模索した。小唄映畫？　それだつて、劍劇以上に永い流行的生命を保つといふ見とほしはつかない。

社會の狀勢は、興業資本家をして、イデオロギッシュな物の製作へ眼を向けさせた。

もとより、在來の組織、在來の製作者によつて高度のイデオロギイに武裝された左翼的映畫の作れる筈はなかつた。彼らは、おそるおそる、やゝ左翼的な、何らか階級鬪爭の匂ひのある、彼らに云はせるとそれでも頗るプロレタリア的な、映畫を一本二本製作して見た。

ところが、それはたとへ「ほんのチョッピリ」左翼的であつても、其處にプロレタリアートの力が意識され、そこに資本家に對する××があり、そこに社會のギマンとカラクリが暴露されてある限り、それは忽ち觀客大衆を捉へてしまつたのである。ほんのチョッピリでも眞實が語られてあるといふことが斯くも大きなセンセイションを捲き立てた。この事は、從來の映畫が、いかに民衆の本來の要求から掛け放れてゐ、いかに民衆の生活に觸れて來ないところの嘘八百でみたされてゐたかを十分に物語るものだ。民衆は、それらの嘘八百を、そのまゝ「嘘八百」として心の表面に受け流してゐたのだ。然るに、まんざら嘘でもない、其所には、多少とも「眞實」について民衆の心に呼び掛ける映畫が出現した。それは民衆の心にピンと來た、それこそ、搾取に苦しんでゐるもののウツセキの、本當のハケロだつた。觀客大衆は熱狂してこれを迎へたのだ。

金儲けに敏感な映畫資本家が、これを見のがすわけはない。彼らは、「左翼的」映畫に「新しき興行價値」を見た。彼らは續々として斯る映畫を製作し始めた。

以上が、今日の映畫資本の下で、いはゆる左翼的映畫製作の流行の緒を見る原因である。

二

昨年五月、日活の撮影監督內田吐夢が片岡鐵兵原作「生ける人形」を、小林正の脚色によつて製作した。これが、日本に於ける、いはゆる左翼的映畫製作への資本家的生產家の最初の、意識的な試みであつたと云つても、大した間違ひはないだらう。

「生ける人形」は原作其物が決して左翼的ではない。あの原作の中には、プロレタリアは少しも出て來ないし、資本家の內部のバクロにしても、それは甚しく現實性のキハクな所謂「調べ」る努力を缺いた作品だ。只、小ブルジョアの寄生狀態、その階級的立場を描かうとした意圖だけが取上げられる。それさへも、當時の作者のイデオロギイの甚だ甘いものであつたことを掩ふことは出來ない。その甘い原作を、可成り忠實に脚色した「生ける人形」が、本當のプロレタリア映畫にならう筈はない。殊に、原作者がちよいちよい覗かせた思想――戰爭反對等々は、脚色に於て全然抹殺されてゐるのだ。

斯る甘い「生ける人形」も、當時の映畫界では、一の劃期的な役割を果した。內田吐夢の技巧の進步性は、果然批評家の認めるところとなり、その映畫は、當時の嘘八百に滿ちた諸映畫から、空々しい感激を强いられてゐた觀客の心を捉へたのである。そして、特に、インテリゲンチヤ層の觀客が、大體に於て此映畫に好意を持ち、あらゆる機會に斯る映畫が今後どしどし製作されることに對する希望を表明した。

斯うして「生ける人形」は、映畫資本家にとつて意外な興行成績をあげてしまつた。「評判は好かつたし、金も儲かつたし」だから、左翼的映畫も馬鹿にならない、そんな事を思ふやうになつた。

つゞいて、日活の辻吉郎製作の「傘張り劍法」が、可成り高度に（そのイデオロギイ的である點では「生ける人形」より遙かに高度に）左翼的なものとして大衆の大きな支持を得た。斯くて辻吉郎は一躍して多數の進步的映畫批評家の寵兒となつた。

そこで、注目すべき現象が起つた。それは劍劇の形式に、左翼的意識を盛ることが、多くの製作者を誘惑するやうになつたことだ。第一、劍劇では、色々の異常な場面や殺陣で見物に刺戟を與へると同時に、其所に左翼のイデオロギイを盛り込むことが出來る。殊に劍と劍との打ち合ひを、現在の階級鬪爭の白熱場面に寓意させることが出來るのだ。斯うすることで「これは昔話だ、千九百二十九年の階級鬪爭とは、何の關係もない」と、××に對して主張することが出來る。大衆は、「昔話」を一たん現在の生活へ引戾して鑑賞する。昔話と、現在の生活との一々の暗合點を、鑑賞することで、煽動られるのである。

その著しい一例は、松竹下加茂で、伊藤大輔が、月形龍之介主演

のもとに作つた「斬人斬馬劍」であらう。

「斬人斬馬劍」は、大切な所で支配階級の××に屈服してゐる。然しそれが資本家的生産下にある映畫製作では仕方がなかつたのだと諒解して、その屈服した點を鑑賞から除外して見るなら、可成りの煽動力を持つてゐた。筋は殿樣の下にある代官の横暴に對する、被搾取農民大衆の蜂起である。觀客大衆は、代官に打ちのめされた農民を、×××××又は地主に虐げられつゝある農民に還元してこの映畫を見るのだ。そして又、一般小市民は、代官に打ちのめされつゝある映畫の中の農民を、自分自身の苦しい生活と結び付け、暴虐なる代官を、自分を現在コキ使つてゐる雇主や資本家の姿に結び付ける。斯うして、常日頃のウップンを、自分に代つて映畫が爆發して呉れる事に、熱ある期待をかけながら見物するのだ。又、觀客は、政治的權力を持つた代官の暴虐さに、×××××××搾取の關係をも感得する。

「斬人斬馬劍」の中では、浪人武士の一團が活躍する。彼らの武勇が、農民の蜂起を助け、農民の前衞に起つて、その快刀亂麻の劍を振ふのだ。伊藤大輔は、これらの武士に、現代のインテリゲンチャを暗示してゐる。

農民は、政治的壓迫、封建的搾取の苦痛から、自己を解放して呉れるものとして宗教にたよつて見た。が、それも駄目だつた。そこで、最後に、「自分の力で」解放をかち取る他に何の方法もないといふ眞理に到達した。遂に蜂起した。今まで「大衆が起ち上るまでは」と、空しく劍を撫してゐた浪人たちも、猛然と、陣營の中に飛び込むのだ。

こゝで活劇が展開される。劍と馬とスピードと！　それは壓迫されたものゝ爆發だ。上に對する反抗の最大限の表現――觀衆は、こゝに××××自己を感じるのである。

大衆は、いつも××××がつてゐる！

三

右太プロでは、金子洋文原作「幾」その他を製作した。そして、あらゆる劍劇物は、多少のバクロ、多少の「上のものに對する××」を加味すればするだけ、大衆の歡迎を受けることを經驗した。斯くて、映畫に何らかプロレタリア的な意識を加味することは、興行價値の上で絶對に必要である事が、認識されたのだ。この事から次のやうな結論が生れる。映畫は、左翼的であればある程、大衆の支持を受ける。大衆はそれほど左翼化してゐる。大衆がそれ程左翼化してゐる程、現代は不平と不滿とに滿ち溢れてゐる、事程左樣に、現代の民衆は、わるい、苦しい生活を餘儀なくされてゐるのだと！

四

最後に、殆ど映畫界に空前絶後の人氣を博したのは、帝キネの鈴木重吉が苦心の製作になる藤森成吉原作の「何が彼女をさうさせたか？」だ。それは政治的意識が何程にも展開されてゐない點で、十分に「左翼

的」ではなく、それ故にまた檢閲の通過を容易ならしめたのであらうと推察される。が、この映畫は、資本家によつてあらゆる罪惡と邪惡の網の張られてあるこの社會の機構をバクロした點で、大きな成功を收めてゐる。これを見た小僧は泣き、勞働者は絶叫した。字幕ごとに大衆が「さうだ!」と共鳴の聲をあげるので、淺草の上映館は文字通り演説會場のやうに灼熱した。斯うして、淺草では、五週間といふ、續映のレコオドを作り得た。

然し、資本主義の下で製作される映畫は、つねに「左翼的」の限度に制肘されねばならない。それが大衆を惹き付ければ惹き付けるだけ、この種の映畫に對する檢閲の眼は光り、その鋏は狂暴にさへなるからだ。

「何が彼女」の現れる少し前に、日活の溝口健二が優れた左翼映畫を製作した。夏川靜江、小杉勇主演の「都會交響樂」である。彼は此所で、虐げられた漁民と、ズルイ資本家と、悲慘な失業自由勞働者と、消費生活にタイ敗した資本家とを描き、勞働階級への愛情、その「力」による××、そして自ら滅ひて行く資本家階級を、見事な技巧で構成した。然し、××××××、斯る眞實を盛つた映畫の上映を許す筈はない。當局は、「都會交響樂」を「××××」××××××、製作者へ突き返へした。「とてもこんな物は!」と頭からハネつける事で以つて、左翼的映畫を製作する映畫資本家を威嚇したのだ。

映畫資本家は、左翼的熱情を以つて左翼的映畫を作るのではない。それ故、×××××に對しては一溜りもなく縮み上るのである。「都會交響樂」は、後日、見るも無慘な改訂をへて世に發表されたが、檢閲前の試寫でもとの姿を知つてゐるものは、××の無茶苦茶であることに對して、誰が憤らずに居られたであらう。

今や、映畫資本家は、左翼的映畫を作れば金が儲かるが、その代り××が怖しいといふ深刻な煩悶に到達してゐるのだ。何とかして大衆の要望が、左翼的映畫でない方へ振り向くことはあるまいか?映畫資本家の腹の中はこゝにある。そこで、昨年末、松竹蒲田は「小兒病的な左翼映畫を極力排斥する。松竹蒲田は反動的愛國的映畫を作るんだ」と勇敢にも聲明した。だが、それにも拘らず、大衆は益々要求してゐる、映畫の左翼化を!

最近には、東亞の、林房雄原作「都會双曲線」が檢閲保留のウキ目を見た。

五

諸君は、過般の總選擧に於て、言論の取締りが、比較的カン慢であつたことを記憶されるだらう。大衆の眼の前で、いかにも自由主義的に見せた政府のヤリ口に、我々は決して××されてはならないんだ。諸君の眼の前ではどんなに振舞はうとも、政府はカゲではどんどん××××をふるつて、大衆の眼を掩ひ、耳をふさぐ事に努力してゐるのだ。だから、濱口内閣は前の田中内閣よりか自由主義的だと幻想

するなら、それは、うまく／＼と相手の×××策に引つ掛けられたのである。然し、民衆は、××××××××に物事の洞察を與らせられる程、不聰明ではない。資本家と地主の××である限り、民政黨であらうが政友會であらうが、その本質に於て何の變りがあらう！　諸君の見たがつてゐる映畫は、諸君の知らないうちに、どし／＼××の手でチョン切られてるのだ。

六

要するに、資本家によつての左翼的映畫の製作は檢閲といふ矛盾に行き當つて、その發展をハバまれざるを得ないのだ。進歩的撮影監督の腕は鳴るけれど、××××××××、プロレタリアと農民に社會×××を知らしめ、××××××せしめるやうな映畫の存在を許しはしない。

然し、現實の世の中では、大衆は益々窮乏化し、益々左翼的になり、さうして、プロレタリアの闘爭組織が、大衆に對して間斷なき働き掛けをなしてゐる以上、反動的映畫が松竹蒲田の望み通りに益々隆盛を示すやうな事はあり得ない。

現在、營利的でなしに眞の左翼的映畫の創造へと、組織的に努力してゐる團體がある。それは、經濟的な、また社會的な條件から、大きな力をまだ持つてはゐないし、設備もたうてい世の營利的な製作所と比べて問題にはならないが、その情熱と、努力と、科學的な態度、階級的な態度の正確さで以つてやがて勞働者農民の大なる支持をかち得、眞の左翼的映畫を創り得るであらう事は豫見し得られる。

それは營利的でなく、勞働者と農民の間へ持ち込むことを目的とした努力で拵はれてゐるのだ。それ故、それは十分に上映の×××的活動を闘ふであらう。

それ故に、この團體こそ、大衆の「ハケ口」としてよりも、プロレタリア農民の解放の武器としての「左翼の映畫」を創造し得るものである。

現在、小型撮影機を以つて、勞働者農民の生活の間を――闘爭の間を、縱横に活躍してゐる日本プロレタリア映畫同盟の成長を、我々は切に期待してゐるものである。

文藝時評

青野季吉

プロレタリヤ文學理論にたいして、この約一年、特に近來、懷疑を表白したり、批評を加へたりすることが盛んである。それも、プロレタリヤ文學の初期の時代に、既成の批評家がプロレタリヤ批評に加へた懷疑や批評のやうに、まるで盲目滅法な、全然無理解な、或る場合には全然『惡口』に墮してしまつたやうなものではない。今日の批評や懷疑は、なかにはそこで甚しい誤解がそのままになつてゐるやうな場合もないではないが、概して眞面目で、出來るだけの理解の上に立つてそれをしようとの意識が、よく分る。かう言ふ懷疑や批評は、一般にプロレタリヤ文學理論の發達のために大いに歡迎されてよいし、また特殊に、個人的な氣持から言つても、靜かに教へられる氣持にもなるし、その批評家と共同研究をしようと言つた落着いた氣持にもなる。四月の雜誌を見ても、三木清氏の『新興美學に對する懷疑』(文藝春秋)や平林初之輔氏『プロレタリヤ文學への二三の警告』(新潮)の場合がさうである。

三木氏の論文は、分り切つたことを念入りに啓蒙的に述べた部分が多いが、プロレタリヤ文學の批判者の批判のうちにも、またプロレタリヤ文學批判の檢討の部分にも、斷片的ではあるが、かなり鋭い考察がふくまれてゐる。平林氏の『警告』は、およそ輪廓的には、いづれも當つてゐると言つてよい。その限りではプロレタリヤ批評にも作品にも、たしかに貢獻するところがある。だが、一、平林氏が『警告』してゐるやうな點は、プロレタリヤ批評家や作家がすでに、多かれ少かれ自覺してゐるもので、且つ現にそれぞれ何等かの仕方で、それを『清算』しようと努力されてゐるのである。たとへ形はハツキリしなくとも、清算が案外はかばかしく行かなくとも、『警告』と共に、この努力を理解し、賞揚すべきではないだらうか？ 二、平林氏の『警告』は、プロレタリヤ作品にも觸れてゐるのであるが、私には、現實の作品に關する限りでは、平林氏の言説は、その周到な、潛入的な對照の上に立つてゐないのではないかと考へられる節が多い。それはとにかくとして、三木氏や平林氏の場合のやうな懷疑や、批評は、まことに望ましいと私は考へてゐる。

プロレタリア文學理論の場合に比して、プロレタリヤ作品にたいする批評や檢討は、數においては盛んだが、また周到な、精緻なものが殆んど見られない。最近では、廣津和郎氏の本誌三月號の批評が、非常に念の入つた、重要な『問題』に觸れたものであつたが、見る可きものはこれ位のものである。プロレタリア文學理論にたいする懷疑や批評と共に、いやそれ以上、實際のプロレタリヤ作品にたいする、觀照と、理解と、解剖との上に立つた周到、精緻な批評こそ、現在、最も要求されてゐるものであり、要求されていいものではないだらうか？　プロレタリヤ文學理論にたいする懷疑や批評は、既に、嚢に言つたやうな段階乃至境地に達してゐるのに、その作品にたいする理解や批評は、まだ極く素朴的だと言ふのが、今日の實際である。

このことは既成批評家にたいしても言はれるし、同時に、プロレタリヤ批評家にも、一層強く言はれていいと思ふ。平林氏は今日プロレタリヤ作品のイデオロギーの檢討が何よりも肝要だと言つてゐるが、これは妥當な言葉で、イデオロギーがやかましく言はれるくせに、實際に作品について、イデオロギーが潜入的に檢討されてゐない。これは、拒めない事實である。イデオロギーばかりでなく、問題の『形式』についてもさうである。プロレタリヤ文學の形式論は、もしそれが現在なされなければならぬとすれば、與へられた、現在の作品の形式の解剖・批判から出發されなければならない。それが薩張りなされないで、抽象的な、惡く言へば當爲的な形式論が試られてゐるのである。

プロレタリヤ作家や批評家について言へば、いまこそ、外部からの懷疑や批評に、靜かに、落着いて耳を傾けてよい時であるし、傾けられる時でもある。と同時にまた、自己の内部及び周圍にひそんでゐて、これまで何等かの形で『無視』してゐたものを、こだはり無く正視して、それを正しく處置しなければならぬ時である。現在プロレタリヤ作品や作家に『行詰り』があるとして、それを打開する努力線の大きな一つは、たしかにこゝに在ると言つてよい。――こゝで一寸附言しておき度いが、かゝる自己批判的、沈潜的な、反激情的な態度を主張すると、或る人々は當然にこれを非難するであらう。否、非難しなければならない筈だと思ふ。何故と言へば或る人々によると、今日の日本のプロレタリアートのおかれてゐる政治的位地は、極く切端つまつたもの、××の×××なもので、したがつて××××をもつてブルジョアジーに當るべきで、一切の合法的手段は反動的だと言ふ。これが客觀的に正しいなら、プロレタリヤ作家や批評家に、右のやうな沈潜的、自己批判的な態度を求めるのは、たしかに、大へんな間違ひである。いや、そも〳〵文學運動や、演劇運動のやうな、合法的拘束の極度に多い運動にたづさわつてゐるのが、そも〳〵根本的に間違ひでなければならないのである。だが我々、尠くとも私は、問題の『客觀的地位』をさう言ふ風には絶對に觀察しない。私ばかりではない。口には切端つまつた『客觀的地位』を唱へ、×××××の敢行を叫び

ながら、實際は文學運動や演劇運動に多大の時間と努力を割いてゐる人人は、心の底では、やはり私とほゞ同樣な『客觀的地位』の觀察に立つてゐるのである。たゞ、それをそれとしてハツキリ言へない、乃至は認めることの許されない何等かの理由があるのであらう。――

　プロレタリヤ作品にたいする批評は、まだいかにも素朴だと、私はいま言つたが、この感は、最近の一種の『勢ひづいた』批評――實際は非難――を見ると特にそれが深い。プロレタリヤ作家や批評家は、いま自己解剖や自己批判の日程を課せられてゐるが、かゝる素朴的な批評――非難――は、これを果敢に撥ね反さなければならない。またそれは極めて容易である。

　一、プロレタリヤ作品は『面白くない』と言はれる。最近、新興藝術派叢書と言つたものゝ廣告を見ると、やはりこの言葉が目につくやうに言はれてある。それほどこの言葉は『大衆的』に魅力があるのであらう。この素朴的な非難は、主として『新興』の藝術派が投げつけるものだが、これは極めて興味のある現象である。と言ふのは、ヂヤーナリズムの滿悦しさうな、面白い、新奇な、變つたものを提供することを、それを唯一の意識的目的としてゐる藝術派の内質が、自らの工夫したプロレタリヤ作品にたいするこの素朴的な批評の言葉に、笑ひ出されるまでに暴露されてゐるからである。

　プロレタリヤ文學は『面白くない』として、いつたい誰が、面白くないと思ふのか？　一般に大衆、別けても勞農大衆か？　それとも、一握りの文壇的好奇群か？　後者であれば、確かにさうであらう。だが、その代りにそれはプロレタリヤ文學にたいする批評にも非難にも、てんでなつてゐない。前者であると言ふなら、明らかにウソである。個々のプロレタリヤ作品の實際の反響がそれを物語つてゐるし、『文戰』『戰旗』の讀者層の擴大と深化（勞農層への）とが、それを數字的の明瞭さで實證してゐる。事實、勞農讀者層に立脚して言へば、プロレタリヤ作品は、面白くないどころか、刻々に『面白く』なつて行つてゐる。こゝに問題があれば、まだ『面白さがまだ足りない』であり、『面白さがまだ稀薄だ』である。こゝから出發すれば、立派に批評が成立つ。

　二、プロレタリヤ作品には必然性がない若しくは薄いと云ふ。三木清氏も先日『讀賣』でその意味のことを述べてゐたし、やはり同紙で豐島與志雄氏もほゞその意味のことを論じてゐる。兩氏特に三木氏の場合は、決して素朴的とは言へないが、一般のこの點に關する批評はかなり素朴である。

　今日のプロレタリヤ作品は、たしかに、必然性が稀薄であると言へる。だが、これも非常に伸縮性のある評言で、例へば或るプロレタリヤ作家が、或る政治的暴露に創作的情熱をそゝられて、一篇のプロレタリヤ暴露作品を成したとする。この場合、その政治的暴露に興味を抱いてゐる讀者と、それに全然興味のない讀者とでは、同じく『必然

性が稀薄だ」と感ずるとしても、その度合が非常に異つてゐる。前者の場合では、作品觀照上の補足的心理作用が、讀者の心に十分に訴へられてゐるわけであるが、後者ではそれが全く缺けてゐる。しかもプロレタリヤ作品の必然性を云々する既成批評家には、この後者の場合が極めて多いのである。

或る藝術作品が十分な意味で必然性をもつと言ふことは、その作品が多かれ尠かれ完成された作品であることを意味する。今日のプロレタリヤ作品は、いかなる意味でも、完成されたものではないし、またあり得ない。したがつて十分な意味での必然性のないのは當然である。だが、同時に、その必然性が刻々に濃厚になつてゐることも、嚴たる事實である。——必然性がないと言へば、いま簇がり出てゐる藝術派の作品のごとき、どこにそれがあると言ふのか。

三、プロレタリア作家にはよい作家がないとか、その作品には古典と拮抗し得るやうなものがないとか言はれる。中村武羅夫氏の批評などにはよくかうした言葉が散見する。

まだ生ひ立つて何もない——階級的藝術運動、それもプロレタリヤのそれとしては、十年や二十年はホンの手習ひの時期である——プロレタリヤ作品のことであるから、既成作家的な意味でよい作家を求めたり、古典と比較したりするのは、そもそも滑稽な話である。またプロレタリヤの側の人達にしても、プロレタリヤ文學の『勝利』をそういふ風な比較や、對抗の上においたら、それこそ不明も甚しいと言はなければならない。

だが、こゝでも事實はモット微妙である。よい作家や古典と比肩すべき作品はないが、しかし、これまでのどんなよい作品や古典をもつて來ても、決して獨自の存在權を奪はれないだけの作家や作品は、これまでの長からぬ時期の間に、立派につくり出してゐる。これは何人も拒まれまい。そしてこれは我々から見れば、驚く可き達成である。その限りで『勝利』と言へば言はれる。

四、プロレタリア作品と言つたところで、文學的に見れば、事實、ナチユラリズムの作品から一歩も出てゐない——とよく人々によつて批評される。これは一見當つてゐそうに見えて、實際には、プロレタリヤ作品の中核に搔爬り觸れてゐない。

プロレタリヤ作品の大部分、特にリヤリズムを頑强に把持しようとする作家の作品は、なるほど、形式的にはナチユラリズムのそれを多分に『踏襲』してゐる。これは十分に理由のあることである。だが、單に、無目的に、謂ゆるありのまゝを、官覺的、印象的に觀たまゝに描くと言つた、乃至は、實驗的にのみものを取扱つて、そのありのままを描くと言つたナチユラリズムの行方で、今日のプロレタリヤ作品が餘すところなく說明されるであらうか？　目的意識的の作品でなく、單なる自然發生的の作品でも、たしかに、それ以上のものがある。自然發生的の作品にある一種の階級的の激情、目的意識的の作品に、たとへ充實してゐないにもせよ、意識的に强調されてゐる階級的

批判——これが、ナチユラリズムで完全に處置出來るであらうか？

プロレタリヤ作品は、その限りにおいて、他の何でなくとも、ナチユラリズムから立派に一歩を踏み出してゐると言つてよい。

特に形式については、なるほどこれまではナチユラリズムを多く出なかつたと言つてよい。が、今日では、内容の生長の壓力に押されて、その踏襲された形式が次第に破壞されて行きつゝある。これが實際である。岩藤雪夫君の作にはそれがまざ〳〵と現はれてゐるし、小林多喜二君の作品にも、それが指摘される。たゞ、ナチユラリズムの形式が大膽に清算されて、ダイナミックなコンポジションとスタイルが十分な鮮やかさをもつて生れるまでは、實際まだ來てゐないだけである。

これは必ずしもプロレタリヤ作家の努力の不足とか、文學的タレントの薄弱とかのためではない。原因はモツト深いところに在る。ルナチヤルスキーも言つてゐるやうに、『——實際において與へられた作品の形式は、決してその内容の手によつてではなく、尚幾つかの他のモメントによつて決定される。思考、會話の階級的心理的習慣、與へられたる階級の生活樣式とも名づけらるべきもの、與へられたる社會の物質文化の一般的水準、隣邦の影響、生活のあらゆる方面に現はれ得る所の過去の惰性或は更新の渇望——これ等すべては、形式を決定する補足的モメントとして、形式の上に働きかけることが出來る。形式はしばしば作品とではなくて、全時代及び全流派と結びつけられてゐる。』

極めて性急に、プロレタリヤ作品に『新らしい形式』を要求するものこそ、文學上のわからず屋なのである。

五、プロレタリヤ文學理論が確固として構成されてゐないと言はれる。これもおよそ分り切つた他の弱點をついて、その生長、存在をさへ否定しようと言ふ、見えすいた批評——非難に過ぎない。

プロレタリヤ文學理論が十分な意味で構成されてゐないのは、爭はれない事實である。現在では、正直に言つて、それはスキだらけである。この理論は、いく度も言ふやうに、いま、世界共働的に汗みどろになつて構成に努力されてゐるのである。問題があるとすれば、それが構成されてゐないと言ふところに在るのではなくて、それの構成が正しい軌道によつて、正しい速度でなされてゐるか、或は無意識的に偏向に陷つてゐるやうなことはないか、である。批評や非難は、そこにスタート・ラインを引かなければならない。

もつともプロレタリヤ批評にも『罪』はある。モウ今は『理論的建設』の時代だと言つて、抽象的・觀念的に、それの仕上げを急いだやうな事實も、その『罪』の大きな一つである。事實、その成績は一向上つてゐないのである。さう言ふ努力も必要でないとは言はないが、それはしかし、既成の文學イデオロギーや文學批評との激しい鬪爭のうちに、徐々展開されるのが本統で、少し例は大ゲサだが、その關係は、マルクスの『資本論』が、ブルジョア經濟學の批判のうちに成つたと異るところはない。日本のプロレタリヤ批評は、たしかに、既成

方のイデオロギーや文學批評との論爭を早く切上げ過ぎたと思ふ。これは間違つてゐる。啓蒙的な意味から言つても、この論爭はかなり忠實に、頑強に行はれなければならないのである。

プロレタリア作品にも批評にも、多くの缺陷のあるのは認める。それかと云つて、今日の素朴な批評――非難は、かくその大部分は本統の批評にも非難にも成つてゐない。しかもさう言つたものが、先にも言つたやうに、現在、一種『勢ひづいて』ゐるのである。

四月の創作はかなり讀んで見たが、いま記憶に殘つてゐるのは、『ブルジョア』（芹澤光治良）『蒼ざめた大統領』（金子洋文）『昭和初年のインテリ作家』（廣津和郎）『工場細胞』（小林多喜二）――以上『改造』――『夜明け前』（島崎藤村）『巷路過程』（細田源吉）――以上『中央公論』――くらゐである。あとの諸作は他誌で批評するとして、こゝでは芹澤氏と廣津氏の作品について述べるにとどめる。

芹澤氏の『ブルジョア』正直なところ、私は興味をもつて讀んだ。が、その間にも常に意識してゐたことは、私の興味をひく要素が、第一に一種のフレッシュなその表現と、第二にスヰスの結核都市コーを舞台とした『變つた生活』と――單に、それだけだといふことであつた。そして實際、これだけでも最後まで讀み通させるほど、それは巧妙に書かれてあると言つてよい。

この小說の冒頭に、『これも崩壞する階級の一態である。』と說明されてゐる。なるほどこゝに描かれてゐるのは、その崩壞の一態であるが、題名が『ブルジョア』であるに拘らずそれは飽まで一態に過ぎず、ブルジョアジーといふどえらく大きな階級の崩壞過程には、かうした一相乃至一態もあるかと思はせられるに過ぎない。崩壞の一態を描くことは少しも差支へないが、それがたとへ一態であつても、文字通りに一態でなくて、崩壞の全相にたいして、表徵的か、若くはその他の何等かの關係で、聯關を示してくれなくては、今日では我々にとつて最早不滿である。從つて作者が特に冒頭に說明してゐるこの點では、私の興味は殆んど呼び起されなかつた。

その一種フレッシュな表現にしても、いかにも技巧的な・理智的で――それがフレッシュに感じさせる要素であるが――的確であり、明朗ではあるが、それだけにまた、訴へかける力や、情緒的に我々を抑へつけて、底へ引づり込んで行く力が稀薄である。その限りではモダーン派の特色をよほどこの作品は帶びてゐる。これは勿論作者も意識してやつてゐることである。

さうすると結局この作品で、我々にとつて本統に興味的なのは、變つた土地での變つた人々の樣々な生活姿態だと言ふことになる。これはまことに生々と、陰影がしつくりと浮き出すまでに、よく描かれてゐる。

たゞこれだけのものだが、努力してあるだけに、讀みごたへがある。

廣津氏の『昭和初年のインテリ作家』は、例のこだはりのない、流

れるやうな調子で、充分に味を持たせて、描きこなされてゐる。正直に言つて、少し退屈を感じさせられる個所がないでもないが、舌ざはりは至極なめらかである。

が、私はこの作品を讀みつゞけてゐるうちに、妙に淋しいものを感じた。そこに描き出されてゐる昭和初年のインテリ作家、特に、例へば須永を例にとつて見ると、廣津氏は、溫かい心と、落着いた觀察者の眼をもつて、その作家を彫刻してゐる。しかし、この『特殊な』存在にたいして、客觀的な視點からの批判と言ふものを殆んど加へてゐない。北川についてもそうである。しかも我々から見ると、須永や北川の存在や行動は、かなり批評されていいものであるし、また彼等自身にしても、現實には、今日の社會や環境にあつて、いや、こゝに描かれた環境の範圍でも、かなりつき詰めた自己批判をしてゐるに相違ない。作者の用意と聰明をもつてして、何故この客觀的な批評が避けられてゐるのであらうか？

昭和初年のインテリ作家とそれを取卷く生活姿態には、かういふ部分相もあると言ふことは分る。が、作者の描かうとしたものが、單にそれだけでないであらうことは、題名だけにも示唆されてゐる。ところが實際は、それだけに終つてゐる。この作品を讀み了つて、淡い失望を覺えたものは、恐らく私一人ではないであらう。

我々の現實の認識や、我々自身の經驗から言つても、昭和初年のインテリ作家は、特に人知れず『苦しみ』『惱んで』ゐる。或る場合では、それは彼の自殺にまでも導いてゐる。その現實を前にして、この作品に描かれてゐるインテリ作家は、餘りにアイドルであり、餘りに呑氣である。一口に言へば無苦悶的である。これではどうしても我々の現實感が滿足しないのである。

廣津氏は、評論の方で時々閃かすあの解剖力と客觀性とを、何故、創作の場合に持ちつゞけ、發展させることが出來ないのであらうか？私には疑問である。（四、八）

ドレフユス事件

大佛次郎

七、シユウレ・ケストネエ

灰の中に殘つてゐて危くまた燃え上らうとした火は、將軍連の靴で踏消されて一切の事件が再たび闇に埋められた。これは、つめたく森とした闇である。何も見えやう筈がないのであるが、ドレフユス事件の眞相を段々知るやうになつた將軍たちには、何かしら不安がひそんでゐるやうに思はれるのだつた。

軍部の命令に從つて默々と亞弗利加の沙漠に去つた前の情報局長ピカール大佐（中佐より昇進）の後姿が第一にこの不安の種となつて殘つた——大佐は一切の秘密を知つてゐる。自分の轉任の事情も看破つてゐる。今は上官の命令に服從してゐるが、いつ、この秘密を種に取つて自分たちに逆襲して來ないとも限らないのである。

流石に、將軍たちはこの不安を感じてゐても特にピカール大佐をどうしようとも考へないし、またどう出來るものでもないと知つてゐた。將軍たちはこの國でも清濁併せ吞む空虛な闇を含んで、沈默を守つてゐるのを賢明な流儀としてゐる。小細工を弄して、遂に溫厚なピカール大佐を怒らせるやうなことをしたのは、この將軍たちに忠實過ぎる參謀將校たち、殊に事件の頭初からドレフユスを有罪だと信じて熱心に働いて來た人々なのである。アンリ大佐、デユ・パチイ・ドウ・クラン大佐などであつた。

ピカール大佐はチユニスへ赴任した。こゝは蠻人の叛亂の危險はあつても、巴里のやうに社交的でゐて陰險な生存競爭はなく、單調すぎる無爲の生活が見つけられる筈だつた。自然も人も原始的だし、すくなくとも海と砂漠が、本國とも巴里とも文明とも、遠く引離してゐるわけで、この違つた環境に入り生活も變れば、大佐の良心に陰影を投げてゐるドレフユス事件の不愉快な記憶も自然忘れられていゝ筈であつた。大佐は、この事件の秘密を知つてゐることを良心の重荷としてゐる。出來るならば忘れたいくらゐなもので、これを問題にして同僚や上官の重大な過失をあばかうとする心持などは少しもないし、佛蘭西軍隊の尊嚴を大切に思ふ點では決して人に劣らなかつたのだ。けれ

ども、大佐の後を承けて情報局長の實權を握つたアンリ大佐から見れば、ピカール大佐がいつ現在の、上官の意志に柔順な態度を捨てゝ、逆襲して來るかわからないと思はれるのだつた。すくなくとも、そのことがあると見て準備して置く必要があると感じたのである――それまでに、自分たちのほころびを繕つて置く用心が肝要だつたのだ。これも佛蘭西陸軍の尊嚴のためなのである。また大佐の上官たちゴンス將軍などは、大佐の計畫を知つて暗にこれを是認してゐるのだつた。ピカール大佐は、本國から離れてから暫くこんなことゝは知らなかつた。自分だけが左遷を甘受すれば、それで濟むことゝ信じてゐた。袈裟も金モールも同じことで、立派な軍隊ほど宗教團體のやうに組織も裝飾もされてゐるもので、正直で善良な軍人ほど軍隊に對して宗教的な感情を持つてゐる。大佐などもその一人で、自分がかうして犠牲になることにも淋しい誇りを感じてゐたくらゐ、善良で氣高い軍人だつたと云へるのである、かう云ふ人だつたから、任地に向つてから間もなく、本國佛蘭西で自分に關して妙に惡い評判が立つてゐると聞いても、最初は何かの間違ひだらうくらゐに考へるだけで、これが眞逆佛蘭西陸軍の參謀本部で計畫的にやつてゐたことだとは、全然氣がつかないでゐるのだつた。しかし、この惡い評判と云ふのが、取りやうに依つては、自分が情報局長の椅子にゐる間何か賣國的な行動をしたやうに取られるものだと知つてから、漸く平氣ではゐられなくなつた。噂はどこから出たか？

まだ、範圍は限られてゐるが、世間では段々とそれを事實と信じて來てゐるやうなのである、本國から離れてゐて、どの程度まで話が眞實かわからないが、またそれだけに大佐は苦しみ初めてゐた。愕然としたのは、やがてその報道がまつたく他所からではなく自分がつひ數ケ月前まで局長の椅子にゐた情報局から出てゐると知つた時だつた。それでもなほ、大佐の理解は、經歴の上で自分の競爭者だつたアンリ大佐の個人的な陰謀だと考へたくらゐのものだつた。ピカール大佐はアンリ大佐にあてゝ詰問狀を出した。誰れがこの手紙の返事に逆襲的な亂暴な手紙を受取らうと思つたらう？　情報局では、大佐が根もない噂だけだと信じられたものを、正氣で糺査を續けてゐると云ふ返事であつた。

ピカール大佐は初めて目があいたやうに感じた。――これは俺れを追落さうとしてゐるのだ！　賣國奴エステラーヂーの代りに俺れを。

ピカール大佐は、すぐに辭職して事件を暴露することを考へなかつたのではない。けれども大佐になるまで軍隊で暮らした人間は、この場合にも長い習慣を振棄てられなかつた。

何を相手に俺れは鬪はうとしてゐるのか？　自分の名譽を毀損しようと掛つてゐる陰謀とだ。しかし、これは同時に光榮ある佛蘭西軍隊の不名譽を暴露するものなのだ。自分一個の名譽のために、これだけの危險を冒していゝことか？　「軍隊の尊嚴」と云ふことを考へるだけ

で、大佐はもう動けなくなるのだつた。道徳的には別様にも考へられるが、軍人として訓練されて來た大佐には、この軍隊の尊嚴と云ふことゝ「祖國の名譽」と云ふことは、如何にも道徳以上の貴い存在なのである。この國家の立場から云へばドレフュスは已むを得ない犠牲なのだ。俺れもやはり目をつぶつてゐなければならないのだ。歸するところは、やはりこれだつた。結局、解決の途がないと云ふことなのである。

ピカール大佐は、また口を噤んだ。けれどもそのために、苦痛は一層深くなつた。誰れかにこれを知つてゐて貰はなくてはならない。一人だけでこの秘密を守つてゐるのは、もう耐え難いことだつた。大佐は、人を撰んだ。これは昔からの友人だ。休暇を貰つて巴里へ戻つて來た時、古くから事毎に親切な相談相手になつてくれてゐた辯護士のルブロアに會つて、これを打明けたのであつた。

ドレフュスは無罪なのだ。賣國奴はエステラーヂーだ。

それから俺れに向後何があつても、俺れが正しかつたことを信じてゐてくれ。いつまでも俺れの味方になつてゐてくれ。軍人としての俺れの名譽を辯護してくれ。必要があつたら政府に上申してくれ。

しかし、俺れはドレフュス事件が世間に知れてはならぬと信じてゐる。だから、このことは、どんなことがあつても、ドレフュスの兄弟や辯護士には知らさないようにこゝで誓つてくれ。いゝか。

きつとだ。いゝか。

ルブロア辯護士は、この話をしてゐる古い友人の、心労にやつれた姿を見まもつてゐる。大佐がこれを打明けるまでに、どんなに苦しんで考へ拔いたかを知ると、

『宜しい。』

と答へて、君の話の證據になるものがあるか、と尋ねた。そこで、ピカール大佐は、ゴンス將軍から貰つた手紙をまとめて渡した。これは、將軍連が最初ピカールの意見に同意した證據となるものだ。すくなくともピカール大佐が事件の審査に從ふのを認めたことの證據となるものだつた。

この怖ろしい秘密はルブロア辯護士の頭に移つた。ルブロア辯護士にはピカール大佐のやうに軍人的謹愼がないばかりか、「人道の聖書」と云ふ著述まであるひとで、自然とこの問題に對する意見も、ピカール大佐のやうな消極的な態度では我慢出來ないのだつた。無論、辯護士としては、やはり依頼人の言葉を尊重しなければならないが、その範圍では、何とかしてドレフュスの助かる機會を作りたいと思つた。

偶然に、このルブロア辯護士がアルサス出身の上院議員で政治家として老練なシュウレ・ケストネエに會ふことになつた。このひとはもとからドレフュスの判決に不審を持つてゐたし、アルサス州の出身だつた點で、ドレフュス一家の努力に同情を持つてゐたひとである。ルブロア辯護士は、この政界に有力な人物と話してゐる内にこのひとに

頼つてドレフユスを助けてやりたいと思ふように成つた。たゞ友人としてもまた辯護士としてもピカール大佐に累を及ぼさぬ方法を採るように注意を忘れなかつた。シユウレ・ケストネエはルブロアが示したゴンス將軍の手紙を讀むと、この事件の最初から自分が感じてゐたとほりなので驚きもし悦びもして、事件を必ず自分が問題にして見せると誓つた。けれどもルブロア辯護士は、ピカール大佐の名を出してくれては困ると云ふのである。それからドレフユス家の方へこのことを知らせるのは控えてくれと云ふのである。

これでは、殆ど何も出來ないのだつた。手段もなく確信を漏らしてゐるだけの結果になるのである。またシユウレ・ケストネエは陸軍大臣のビヨオ將軍に會つて、問題になる前に陸軍の方でドレフユスを放免してはどうだと勸告した。この將軍とは古くからの友人であつた。

ところでビヨオ將軍は、そんな筈が有りやうはないと云ふのである。しかし充分に調査して見ようから、二週間待つてくれその間誰れにもこれを話してくれるなと云ふのだつた。シユウレ・ケストネエは快よく承諾した。けれどもこの二週間の猶豫期間の中に軍部では開戰の準備を整へたと云つてもよいのである。

シユウレ・ケストネエは、ビヨオ將軍の調査の結果を聞いた。

斷じて、そんなことはない。と前言を、一層斷定的に繰返すだけである。――この回答と同時にエステラーヂーが一時的に休職を命ぜられた。そのほかに變化があつたとすれば、一時鳴りをひそめたやうに見えた猶太禍の聲が遽かに復活して毎朝の國粹主義の新聞の論説欄を賑はし初めたことだつた。

放蕩兒のエステラーヂーは空想も出來なかつたやうな境遇に自分がゐるのに氣がついた。自分は突然に休職になつたが、軍隊の友人たちが前よりも自分に親しくしてくれることである。そればかりでなく、遠くから手紙を寄越して激勵して來る者がある。お前は猶太人の陰謀にかゝつてドレフユスに代つて賣國奴の汚名を被せられようとしてゐるが、決して絶望するな、我々が附いてゐるからには指一本ささせるものでない。あわてたり狼へたりすると反つてお前の不利になることだから出來るだけ平氣でゐろ――こんな意味の手紙が頻りと來るのだつた。差出人の署名はないのだつた。やがて、それが手紙だけではなくなつてから、エステラーヂーは、自分に何が味方してゐるのか、はつきり知つて自信を固めた。

見たこともない人間が訪ねて來てエステラーヂーに、いつ、どこそこへ來いと命令のやうに告げて行くのだつた。時間は大てい夜暗くなつてからで、場所は最初はモンスーリの公園であつたが、やがて專らアレクサンドル三世橋の上と、モンマルトルの墓地が指定された。エステラーヂーが、不安に思ひながらそこへ行くと、帽子を目深くかぶり、外套の襟で顏を隱した男がどこからとなく出て來て、エステラー

チーに、どう處置すればいゝか一々命令を與へるのだつた。お前が我我の指圖どほりにすれば、助かるようにしてやらうと云ふのだつた。この面會の間に、エステラーゲーは、これから物を書く時少し字體を變へて書けとまで注意された。この、まつたくデユマの小説にでもありさうな交渉が實際にあつたことは、エステラーチーが後に自分から公言したことである。

　間もなく、かうして本人が來て會ふことが危險だから誰れか信頼出來る代人を寄越せと云ふのだつた。その時からエステラーチーの情婦や辯護士が代りに行つて命令を受取つて來ることになつた。

　同じ、出所不明の命令が、獨逸大使館のシユワルツコツペン大佐に申出て、大佐がドレフユスを使つてゐたと何かの形で宣言させろと云つて來た。エステラーチーがそのとほり交渉してみたが、獨逸大使館ではこれに答へずに、シユワルツコツペン大佐を急に歸國させて、エステラーチーを失望させた。しかし凡そ賣國奴でエステラーチーほど、安心の出來る地位を惠まれたものはなかつた。途方もなく大きな勢力が自分を庇ひ養つてゐてくれるのだ。エステラーチーは友人たちの同情にくるまれて、これまでよりも樂しい日を巴里で暮らしてゐるのだつた。

　シユウレ・ケストネエは、總理大臣のメリーンにも會つて勸告した。陸軍大臣のビヨオ將軍にも再三會つて、遂にそれまで口に出さなかつたエステラーチーの名前をあげて迫つたが、將軍はあれは詐欺と云ふだけのものがないので休職にはしてあるが告發する考へは今のところないと答へるだけだつた。シユウレ・ケストネエは初めて、軍部がこの事件でどんな態度を採らうとしてゐるか、看破した。何を云つても、もう無駄だと思はれた。それも自分は最初から正直過ぎて策を過つたのである。先手を打たれたのである。それと氣がついた時は、軍部はまつたく武裝を整へて、逆襲に掛らうとしてゐる時であつた。シユウレ・ケストネエは、ビヨオ將軍に當分この件について他言はしないと誓つたのである。從つて將軍もこの交渉に關して何も云はないのが徳義だつたのである。驚いたことは、新聞がもうこれを知つてゐてさかんに書き立ててゐたことである。シユウレ・ケストネエ君が賣國奴ドレフエスの釋放を運動してゐる。これだけの事實について市民が教へられた結論は、猶太人の魔手が再び佛蘭西をおびやかし、軍隊の名譽を傷つけようとしてゐることなのだ。これは實際に國民の嗜好に叶つた材料なのだ。どうして、ジヤーナリズムがこれを見のがさうか？

「金は伯林から出てゐる！」

記事はこゝまで飛躍を遂げた。

　シユウレ・ケストネエは毎日のやうに脅迫状を受取ることになつた。毎夜のやうにモツブが硝子窓に石を投げるのだつた。警官も形式

だけに繰出して來るだけなのである。滅多に外出も出來ないことになつた。

その內、ある日ドレフュスの兄、マチウが突然にこの家に轉がり込んで來た。そして主人の顏を見るなり

『エステラーヂー？　エステラーヂーつて云ふんで御座いますか？先生。』

と、云つた。

シュウレ・ケストネエは、ルブロア辯護士との約束を守つて、これまでマチウに會つてもこの名を云はなかつたのである。

『どうやつて、わかつた？』

と、この時も、反問の形でマチウの質問に答へたのである。

マチウは、それと聞いて嬉し泣きに泣きながら、自分たちが最初の「密書」を寫眞版にして方々へ配つたことや、その一枚を見た或る仲買人がこれは自分が取引のあるエステラーヂー少佐の字にそつくりだと云つたのを聞いて早速お尋ねに上つたわけだと話すのだつた。

マチウは、これからすぐ、エステラーヂーを相手に告訴すると云ふのだつた。

シュウレ・ケストネエは、これに同意を與へた。けれども、その數日前にあたる十一月六日に政府が、自分で新聞に材料を與へて輿論を沸騰させて置きながら如何にもこれに答へなければならなかつたやうに見せかけ、ドレフュス大尉は「正當」に有罪を判決されたことで、政府はもとよりこの判決を尊重するとわざ〳〵公示までしたことを思ひ出すと、この弟思ひのマチウ・ドレフュスの努力がどの程度まで成功するか、考へるだけでも暗い心持になるのだつた。――――參謀本部が敵なのである。政府が敵なのである。國の輿論が敵なのである。

けれど、マチウは猪のやうに向不見に進むことだけを考へてゐた。これと反對にこの計畫が知れると同時に、エステラーヂーは極めて手際のいゝ芝居を打つて見せた。自分の潔白を證明出來るように悅んで取調べを受けようと公言したのである。モッブは、無論この武士道的な大見得に喝采を吝まなかつた。エステラーヂーはこれだけで世間を味方にして終つたやうに見えた。さうしてゐる內に、エステラーヂーは、また誰れかわからない人間から面會を求められた。指定された淋しい橋の上に立つてゐると、黑い着物を着た女が傍へ來て話しかけた。これは男の女裝したものだつた。

安心してゐるがよい、大丈夫だ。と力をつけてくれて、裁判になつた場合、どう處置したらいゝか、一々敎へてくれるのだつた。巴里の十二月、霧の深い晩の、人通りのない橋の上の會話である、傳說は、この女裝の怪紳士が、ドュ・パチイ大佐だつたと云ふことに一致してゐる。

八、エステラーヂーの審判

この軍國的な時代では祖國の危機と云ふ大袈裟な看板を見せられた

だけで、國民の大部分が是非の論なく軍部の味方になるのだつた。新聞も反猶太同盟の機關紙「自由公論」無論のことだが、その他の國粹主義の諸新聞や大部數の發行をしてゐる、所謂自由主義の諸新聞もこの輿論に追從して、國旗を振りかざし、猶太禍を唱へ、祖國の危機を呼號するのだつた。ジャーナリズムがニュウスの發明の競爭を初めたのである。この愛國的人心に投じさへすれば、創作された噓でも歡迎されるし愛國心を刺戟するのだつた。リブル、パロル、ラントランシジャン、レコオ・ドウ・パリ、ル・ジユール、ル・プチ・ジユールナルなどの有力な新聞が全部勇ましくこの砲擊に參加した。いや、これに加はつたから新聞として一層有力になつたとも云へるのである。この時に、割のよくない敵側ドレフユスの味方に踏止つてゐたのは、有力な新聞ではフイガロとシエークルだけで、あとは二流以下の小さい新聞だけだつた。けれども、壓迫は大きいし、聲は小さいのだつた。第一に書く材料が、乏しい眞實だけなのだし、相手の陣營のやうに自由奔放に創作まじりの饒舌や熱辯を振廻すわけに行かなかつたのである。そればかりでなく、フイガロまでが、やがて、讀者が急に減るし株主が怒り出したために、この戰線から落伍するよりほかはなくなつた。殘つたのは、ドレフユスの同情者レイナックの據るシエークルを筆頭に、左翼に屬する小新聞だけなのである。よく見て佛蘭西の人口の四分の三が、愛國的熱狂の渦に捲込まれて、ジャーナリズムが創作した國難を信じてゐる。そのほかのことを見ようとは考へてゐないのだつた。國粹主義と軍國主義と反猶太主義と、この三つが依しされずに一つものと理解されてゐる。——ドレフユスに味方する者は卽ち獨逸の味方なのだ。黑幕となつて指圖してゐるのは猶太人の同盟なのだ。この同盟の本部は伯林にあつて、金も無論これから出てゐる。佛蘭西の軍法會議の神聖を瀆して、軍隊の規律を紊亂させ、共和國を倒壞に陷入れようと云ふ彼等の陰謀なのだ。

そこで、シュウレ・ケストネエも賣國奴だつた。ドレフユスの兄弟は無論のことである。ピカール大佐もそれだつた。——またたんと容易にこれが信じられたことだらう。この人々が今度の事件に限らず昔から非國家的だつたことも次々に報道された。シュウレ・ケストネエの要求で、證人としてチュニスから呼ばれることになつたピカール大佐は、刑事が附いて被告の護送も同樣な取扱ひを受けた。同時に巴里では大佐の留守宅に嚴重な家宅搜索が行はれて、また市民の愛國的熱情を昂奮させることになつた。これはエステラーヂーの要求に基づいて執行されたものだつた。世間では、これも當然のことに見てゐるのだつた。

エステラーヂーの豫審にあたることになつたのは、ドウ・ペリウ將軍であつた。このひとも軍人の典型と目されてゐるひとで直情的だが批判力は缺けてゐた。將軍は被告に好意を示してゐたのは最初からだつた。亂暴だつたのは、エステラーヂの書いたものだと原告側が申立てゝゐる「密書」の審査を拒絕したことである。將軍に云はせれば、

これはもうドレフユスが書いたものと既決の問題なので、今になつて審査することはないと云ふのである。當然のことで、將軍の報告はマチウ・ドレフユスの訴訟を却下せよと云ふ極めて明瞭な結論であつた。

參謀本部でも、この報告があまり軍人的に過ぎて、政治的でないのを遺憾とした。すくなくとも軍法會議にかける程度の讓歩は政治的に必要なのである。その結果がエステラーヂーに自發的に審判を申請させようと云ふことになつた。妙な話で、エステラーヂーが書いた申請書に、調べる役のペリウ將軍が、ところぐ\筆を入れたのだつた。

丁度その時議會が開かれてゐた。こゝでは理想的に國民の輿論を反映させてゐるのだつた。内閣自身も、國民と同じやうに事件の裏面を知らないで確信を以てドレフユス黨に反對の態度を採つてゐた。事情を知つてゐる大臣はあつても輿論が味方してくれてゐるのを利用して無知を裝つてゐる。中でも陸相の椅子にあるビヨオ將軍は、軍部の意見を代表してゐるので、終始高壓的に、祖國の敵に對抗してゐるのだつた。

政府反對黨がこの問題で内閣を攻撃しようとしたが、結局軍隊の名譽をなぜもつと積極的に護らないのかと云ふのにとゞまつて、氣勢が揚らなかつた。十二月四日にドウ・マン氏の質問があつて總理大臣メリンが答へたのは、「ドレフユス事件と云ふやうなものが問題になつたことはない」と云ふのだつた。陸相のビヨオ將軍は、ドレフユスが有罪だつたことは自分の良心にかけて斷言出來るし、ドレフユスは十七人の將校立會の下に正當に適法に罪を宣告せられたもので、問題の起り得る餘地はないと答へたのだつた。

急進黨の者も、總選擧を間近く控えてゐたので、愛國的に見えた點では保守黨と變りがなかつた。ジヨオレスでさへが沈默してゐた。議會で一人だけで旗幟鮮明にドレフユスの味方だつたのはレナックだけである。ミルランがこれに侮辱的な言葉を弄して、あとで二人が決鬪まで行つたのが世間を騷がせただけである。

上院にもドレフユスの味方はなかつた。十二月七日にシユウレ・ケストネエが熱心に意見を陳べたが、議場はこれに冷淡なものだつた。まつたく、この議會の模樣から見ても、エステラーヂーがこれから軍法會議に附せられたところで、その結果がどんなものか、先が見えてゐたのである。けれども、ドレフユスの兄たちは、不幸な弟と同じやうに佛蘭西の陸軍を信じ、正しいことが正しいとせられないことはないと信じて、軍法會議の開廷を待つてゐるのだつた。

ドウ・ペリウ將軍に代つて新たにエステラーヂーの訊問に當つたのは、ラヴアリイ大佐だつた。かうして人が違つたところで、軍部の意志に變化はないのだつた。エステラーヂーは、例のやうに調べられる前に、情報局からラヴアリイ大佐が「心配はない人だ」と聞かされて

ゐたのである。このラヴァリイ大佐も、ドレフュスの事件とエステラーヂーの事件とを、まつたく別個のものとして取扱つたのである。やがて豫審調書が作成された。エステラーヂー少佐の私生活は決して青年將校の模範とは云ひ難いが、これを以て賣國的な行動があつたやうに見ることは出來ない。筆蹟鑑定の結果は第一の密書は彼の筆蹟でないと判明した。次にプチイ・ブルウは出所が疑はしいと思はれる。このプチイ・ブルウのことでは、寧ろ當時の情報局長ピカール大佐の處置に怪しむべき點がある。大佐の舊同僚の證言に依れば、大佐はこれを發見しながら一ケ月に近く同僚にも秘密にしてゐたのである。なほ機密の書類を部外へ漏らしたことも證據がある。その他の點でも軍人として不謹愼な行動を採つてゐる大佐のことで、この度のことも眞に佛蘭西的な人心に忌むべき影響を與へることであるし、プチイ・ブルウが根據のある證據とは認め難いやうに思はれる。

軍法會議は、翌年千八百九十八年の一月十日十一日の兩日にわたつてシエルシュ・ミヂイの監獄で開廷された。エステラーヂーはその前日になつて、この監獄に收容されただけであつた。

ドレフュス家では、ドウマンヂュ辯護士とフエルナン・ラボリ辯護士に出席して貰つたが二人とも發言する機會を與へられなかつた。會議は最初一般の傍聽を許されてゐたが、ラボリ辯護士がピカール大佐の件で立つと同時に、筋書とほり傍聽が禁止になつた。從つて、ピカール大佐が證人として何を語り、どう待遇せられたかは、まつたく外部へ知れないことになつた。

監獄の外では、群衆の愛國的示威運動が行はれてゐた。エステラーヂーが無罪を宣告されて監獄の門から出て來たのを見ると、怒濤のやうに歡呼の聲が揚つた。エステラーヂーは、馬車まで熱狂した人々の肩に擔がれて行くのだつた。オルレアン公爵が飛び出して行つて、この男の手に接吻した。――かうして被告は赦されて出て來たが、證人として出廷してゐたピカール大佐が監獄の門から出て來なかつたのは奇怪だつた。これは大佐が會議の席から、すぐ未決監へ收容されたからである。

これも共和國萬々歳だつた。陸軍萬々歳には違ひなかつた。

「これは共和國を將軍連に引渡したと云ふことである。」と社會黨の首領ジヤン・ジヨオレスが下院で傷ついた獅子のやうに叫んで、そのために遂に演壇で毆られることにまでなつた「軍國的無政府」の狀態が來たのである。――ドレフュスの味方は小人數だつたが、またそれだけに熱心な人が多かつたのである。この誠實な人々にとつて、この軍法會議の結果は何を教へたらうか？

軍國的無政府、まことにこれだつた。將軍連は軍部の最初の失策をよく知つてゐて、これを隱すために第二第三の嘘を積み重ねて來たのである。これが彼等の云ふ軍隊の尊嚴であつた。――よその專制君主國の出來事ではない。共和國の佛蘭西に起つたことなのである。――

その結果はどうだらうか？　無論正義などは問題ではなからうか、嘘にしろ何にしろ段々固めて來たものが、いよ〱突崩すことの出來ない堅牢な城砦になるのだ。見るがいゝ、最早適法にドレフュスの無罪を宣明する途がなくなつてゐるのだ。

ドレフュスの判決だけでさへ覆せなかつたところへ、賣國奴エステラーヂーの判決を重ねて、――まつたく適法にやつたことには違ひないが――救正の途を失はせたのである。司法上は、もう何の手段も殘つてゐないのである。ドレフュスは有りもしない罪の濡衣をもう絶對に乾すことが出來ないのだ。弟思ひのマチウ・ドレフュスはこのことをどう感じたらうか？　また優しいリュシイは？　レイナックは？シュウレ・ケストネエは？

この人々が善良すぎたのに對して軍部は最初から計畫的に一分の隙なく芝居を演じ終へたのである。大向がこれを支持してゐるのだから、話は樂だつた。それに脚本部が立派だ。俊秀をすぐつた參謀本部が作戰を樹てたことだ。エステラーヂーの軍法會議にも判士席の後にある椅子に舞臺總指揮と云ふ格で、ドウ・ペリウ將軍が座つてゐるので、いつ傍聽を禁止するか、どの程度にエステラーヂーを調べ、どう云ふ汐時にピカール大佐を引あげるか、段取りは出來すぎてゐる。このピカール大佐の檢束が、どんなに效果的なものになるかも豫め計畫の中に入つてゐたことであらう。ドレフュスの味方が、かうも無慘な敗北を見ようとも、これは寧ろ當然すぎる結果だつたと云へる。絶望だけである。マチウもリュシイも、慰め合ふ力さへなくしてゐるのだつた。

この、ドレフュスの家族とは別に、熱心にドレフュスの味方をしてくれてゐたオーロール新聞のモンマルトルにある編輯室でも、集つてゐる人たちがまつたく敗軍を認めて、半分やけで、仕事にも手がつかず、ストーヴを圍んで突立つてゐるのだつた。これは二流以下の小さい新聞で、讀者もすくないし勢力もないのだが、思想的には自由主義のジャーナリストでエネスト・ヴォガンが、現在では知らぬ者もないジョルジュ・クレマンソオと協力して、極く最近に創刊した新聞で、共和主義の立場から、初から軍閥と僧侶を目の敵にしてゐる點が社說の特徴だつたし、そのために今度もドレフュスの味方に立つて奮戰して來たのである。

この一月十二日、殆と再起する氣力も殘らぬくらゐ叩きつけられた翌日の陰鬱な午後に、こゝの表の戸を押して、この編輯室へ入つて來た男があつた。目鏡をかけた髭男である。帽子を脱ぐと、禿げ上つたひろい額があらはれた。これは「女優ナナ」や「居酒屋」を書いた知名の小說家のエミール・ゾラであつた。ヴォガンもクレマンソオもこのゾラとは親密だつた。殊にドレフュス事件のことではゾラは文士の中にすくなかつたドレフュスの味方で、フイガロ新聞が戰線から落伍するまでは再三熱烈な論調で輿論に逆行した正論を唱へて、そのためには、やはり大衆から憎まれてゐた一人だつたし、これも敗軍の將

だつたのである。ヴオガンとクレマンソオが、ゾラと見て立つて行くと、ゾラは一封の原稿を出して、これをオーロール新聞へ載せてくれないかと云ふのだつた。かう云ひながらゾラがいつになく昂奮した樣子でゐるのをヴオガンは氣がついた。

ヴオガンは、原稿をあけて表題を讀んだ。

「大統領フエリクス・フオール君へ」

と書いてある。これは、公開狀であつた。ドレフユスのことなのだが――とゾラは強く云つた。マチウ・ドレフユスにしろ、シウレ・ケストネエにしろ、これまで皆、手段を過つてゐたのだ。彼等を叩きつけるのには、もつと革命的な方法でなければいけなかつたのだ。遠慮してゐてはいけない、法律なんかに、こだわつてゐては駄目だ。俺れは自分の思ふとほりのことを書いて來た。諸君が勇敢にこれを掲載してくれたら、必ず何かになると思ふ――熱心にかう云ふのである。

その間も、頁をひるがへしてゾラの原稿を讀んでゐたヴオガンは熱に浮かされたやうに顏に次第に朱をさして來てゐる。クレマンソオは、傍に立つてゐて後にあだ名された虎よりも海豹のそれに近い髯を撫でながら、ヴオガンが何か云ひ出すのを待つてゐる。

『これだ!』

とヴオガンは叫んで顏をあげた。荒々しく手を延してゾラに握手を求めた。クレマンソオに讀んで見ろと云つて、自分は昂奮を抑えきれない樣子で、歩き出してせか〱行つたり來たり初めながら、また立止ると

『君も僕も喰らひ込むかも知れん。』

とゾラに云つた。

ゾラが、それも覺悟だと云ふやうに頷いて見せると、ヴオガンは、編輯室にゐた者に皆集つてくれと大聲で呶鳴つた。

『みんなに聞いて貰ふものがある。このゾラ君の書いたものだ。俺れたちは、別の戰術でサーベルにぶつかつて行くのだ。これは多分ダイナマイトよりも有效だらうぜ。それから俺れたちの新聞が今の十倍も賣れることになるのだ。』

虎のクレマンソオも原稿を讀み終つて顏をあげた。ヴオガンの言葉を是認するやうににや〱笑つてゐるのだつた。

それから朗讀だつた。安普請の屋根も飛びさうに熱狂した喝采だつた。鯨波の聲だつた。さてそれからが、不自由な小さい印刷機をひつぱたいて、徹夜で必死の働きだつた。とにかくこのちつぽけなオーロール新聞社が全能力をあげて刷れるだけの枚數を刷り上げようと云ふのだつた。平常は一萬と刷つてゐなかつたのが、この千八百九十八年一月十三日の朝刊は見事に三十萬枚刷り上げたのである。

朝だ。

戰鬪開始だ。オーロール新聞社はからにして社長までが霜の眞白な町へ出て、刷り立ての紙を撒くのだつた。――これこそ佛蘭西の參謀本部が作戰計畫の中に全然考慮してゐなかつた敵の奇襲であつた。(次號完結)

上方見物

鏑木清方

明治中期に、吉田市松といふ有名な摺師が居た、根生ひの江戸つ子で、極めて名人肌の男だつたが、來る度に持つて來る手土産が、今戸の煎餅だとか、深川のバカの目差しとか土地生つ粋のものに限つて居た。その男が京都へ往つて土地の人に四條河原かなんかに案内されて「東京にこんな綺麗な川はあるまい」と言はれたので、

「篦棒めヱこんな薄つぺらな川は川じやあねへ、隅田川へ來て見な、こんな底の砂利の見え透くやうなケチなんじやあねえや、」

と言つて啖呵を切つて來たと大得意で話してきかせてくれたことを、三條、四條の大橋を通つて、中は太く、左右は細く、三筋に劃つた川水を、川といふ字に見立てるのか、それとも京名物縞御召の柄見本といふ心かと、在りし日の諧心に流れた河原をなつかしみつゝ立ち盡す時、幾度も思ひ出した。

市松が濁つた隅田川を自慢したのを、つまらぬ負惜しみと笑ひたくはないが、加茂川を薄つぺらだと罵倒したのに共鳴する氣にもなれない。

初めて見た東海道以西の地、美しいものは美しく、醜いものは醜く、赤いものは赤く、白いものは白いと見て來た。

今度の旅行は友人の渡歐を送るのが動機となつて、私の長い病癖から家人の遊覽の機會を奪つて居た埋め合せも果したく、一家揃つての上方見物といふ程度で、私自身の藝術上の滋養分吸收は、まあ出來たら位な氣持ちで出かけた。

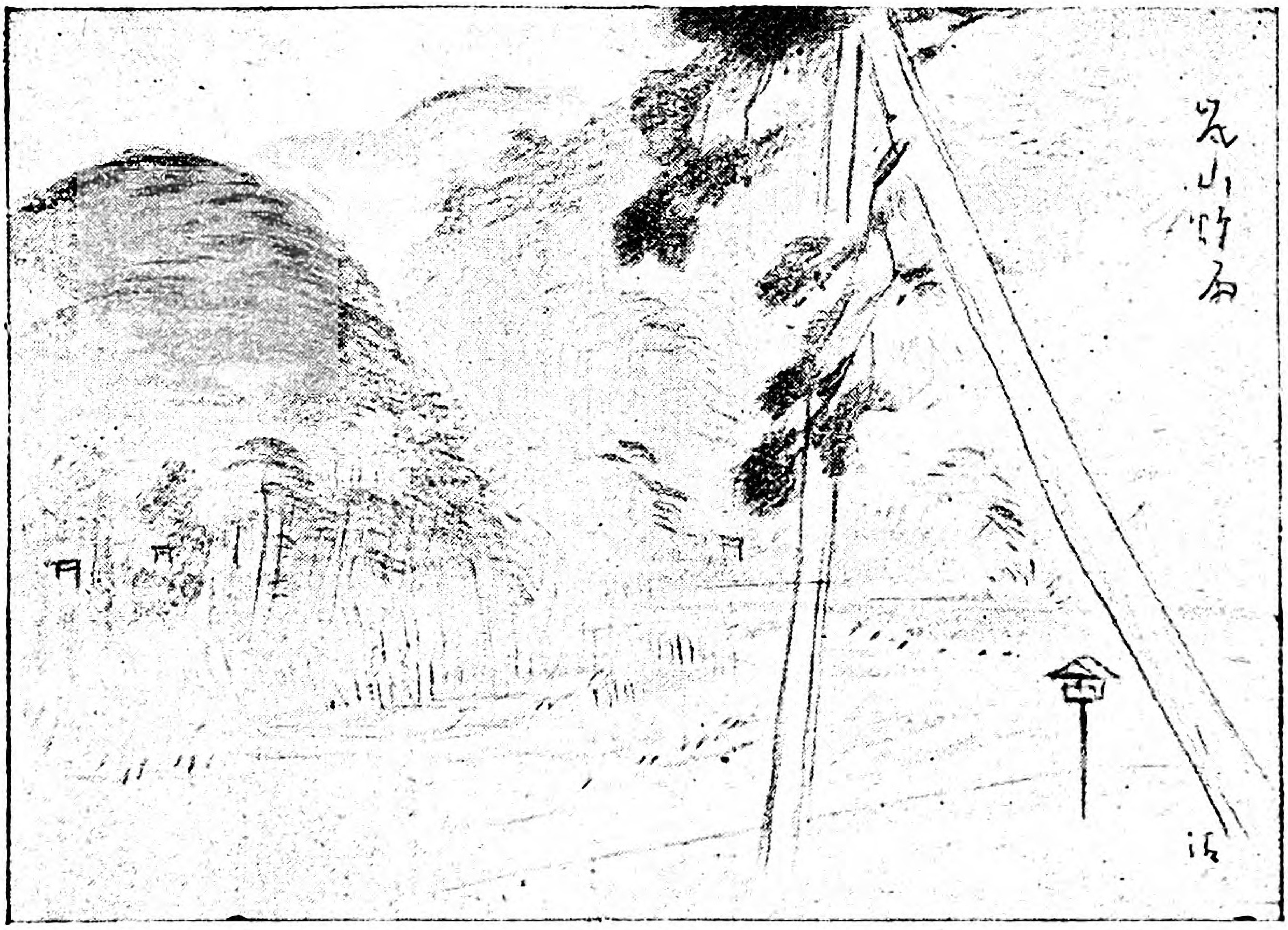
私は元來京都を好む、私の藝術上の素質が、風の荒い東京より、水の清い京都の方に合ふのではあるまいかと思つたこともある。祖先以來三百年永住の東京を愛する心は深いけれど、然して東京の自然にも沁々美しいと思ふこともあるが、植民地化してゆく今日の東京が、生活上の便宜以外さう棄て難いものとは思はなくなつてゐる。

市松君が居たら頭から罵倒されることだらうが、昔日の俤とてはなく、こゝも亦植民地化の跡顯著なものあるに拘らず、私には東京よ

り京都の方が住み好い都に思はれる。

それは勿論、私の藝術を根據にしての話である、人と人との交渉、京都人の間にはいつて他國の人が快く暮らしてゆけるかどうか、京都の好きな私も、これには大きな疑問を抱く。

私は今、京都移住問題に當面してゐる譯でもないから、さう深く考へて見ることもないが、亡友吉川君は常に京都を好み、私の今度滯在してゐた麩屋町の柊家と對き合つてゐる俵屋に一年足らず逗留し、遂にこの地に家を借りて、半永久の住居を定むるに至つたのを、吉川君らしいことゝは思つてゐたが、一ケ月程京都に居て見て、吉川君



のこの地に落ちついた氣持がよく解つた。私も吉川君のやうな境界だつたら吉川君の爲た通に爲るであらう。

久しい前に幸田露伴先生が、京都大學に赴任されてゐた頃の一文の中に、京都は美術家揺籃の地なりといふ文章があつたのを記憶してゐる、寔にその通だと思ふ。

私が今度の旅に出かける前は、京都と奈良より寧ろ大阪と神戸に興味を有つて居た。それは京都と奈良は机上の知識が多少はあるところへ、京都の友人からは「君が來たら恐らく甚だしい幻滅を感じるに違ひない、奈良はとにかく、京都は寧ろ、筆を執らざる君が幻想の繪に譲つて置いた方がよいかも知れぬ」と言はれて、私もさう

だらうと思つてた。

大阪と神戸には近代都市の動きを見ることを、風致とか、風情とかいふもの丶他に期待して居た、商工業の發達は東京を凌ぐといふ大阪、横濱の貿易は震災後西移したといふその神戸。

併し、大阪神戸を併せて七日足らずの滯在では、新しい時代を語る何物にも觸れることは出來なかつた。

景觀の上からの大阪は思つた以上に煤煙に燻つた都市、僅かに淀川の豐富な水量、隅田川よりずつと綺麗なのが、この都市に脈を與へて居る。

神戸と大阪間の阪神國道は、ドライブヱイとして恐らく我國に比類なき道路であらう、六甲山脈を北に、茅淳の海を南に、三十哩の時速をもつて疾走する快味はまた得難いところであるが、私の通つた二月末は、まだ六甲山が美しくなく、沿道の菜の花にも早かつた。

神戸は私の觸れようと思つた新鮮味は見出せなかつたが、時代のつゐた新開地、昔の銀座、昔の明石町に見るやうな明治趣味を、元町通から海岸へかけて味ふことが出來た。

京都と大阪を繫ぐ道路線は、近く起工するやうにきくが、この二つの大都會を繫ぐ國道が、ありやなしやの狀態にあつたのは意外であつた。

淀川に沿うて一方山城、攝津の平野、一方大和、河内の平野を臨みつ丶、猪が出た山崎街道を昔語に、輕快な乘合自働車が通るのも遠いことではあるまい。

世にも汚ならしいあの樂天地附近、天王寺の塔をいたましい氣持で見返りながら河内へ出て、大和川の流れに沿ふて大和路へか丶り、龍田、法隆寺と進んで來た時は、全く濁世を出で丶淨土へ着いた思ひがした。

それから奈良へはいつて、こんな滑らかな、こんな美しいところが、よく今まで失はれずにゐるものだと不思議に思ふ位だつた。

寂びしい、白磁のやうに寂びしい。

奈良の一ばん美しい時は五月新綠の頃だといふ、あのなだらかな線の三笠山が若綠に萠えた時、春日の若宮の丹塗の玉垣にはひか丶る大きな藤が、紫の英を房々と垂れた時、老杉、五松、綠いよ／＼濃く、白玉の水は光を增すであらう、初夏の自然はどんなに美しくこの神都を粧ふのであらうか。

三月初旬、二月堂の御水取も程近いといふ頃である、例年なら京都や奈良は一年中の尤も寒い時であるさうな、ことしは天候が變調で、猿澤の池の柳も淡く黄ばんで垂れてゐる程の暖かさ。

奈良の鹿は東京の圓タクのやうだと人に語つて、我ながら殺風景な

比喩だと思つたが、春日の燈籠の列んでゐる參道を、跡から〳〵と續いて來るのに出會ふとそんな氣がする。

藤の花を見ぬ代り、馬醉木の花盛りを見た、東京では多く庭の下草に使はれてゐる小植物、大きな杉の下影に、この木の群れて林を作つてゐるのが、丈一丈に達するのは珍らしくない、蒼白い壺形の花が連つて垂れてゐる、その下に臥鹿三四、避けるが如くであるが、今の鹿は毛の脫け替る時で汚ならしい。

奈良には一週間程居た、雨の日が多く、晴れたのは一日だけであつた代り、時候も早いし遊覽の人も尠く、千年の古都にあるにふさはしい閑寂な日が續いた。

水門だの、高畑だの、築泥のくづれたのが續いた細い徑を何となくあるいて、古都の匂ひをなつかしむ心地は、東京に居て全く想像し得ぬ、法悅に浸るとでもいふべき感情である。場所は違ふが、京の町で、雪の降つた朝早く、古風な町家の續く中を傘をさしてあるいて行く、高瀨川にかけた小橋を渡り、三條の大橋まで來て、春雪の霏々たる中に、淡墨の滲んだやうな東山を瞰んだ朝の趣もさうであつた。

二月堂の下で、若狹の井戸のうしろから、大湯屋を一巡りして、いつも餘り人の通つてゐない、花の散いてある徑を、正倉院の前の方へと降りてゆく時、嘗て小林古徑氏が只一人いかにも樂しさうに、一歩一歩を味ふやうにこの徑を靜かに下りて來らるゝのに會つたことがあると、奈良に居る私の門人が案內しながらの話である。

その門人に導かれて新藥師寺へも往つた。東大寺へは、奈良ホテルでゆくりなく出會つた長谷川榮作氏と連れ立つて、貴き眼福を恣にする幸を得た。

丁度ある畫家が戒壇院の持國天を兎唇だと云つたといふ記事の新聞に出た時分である、持國天の鼻の下に塑像の剝落で色の違つて見えるところがある、寫眞で見るとその部分がなるほど兎唇と見誤まれさうである。

戒壇院の塑像では廣目天のあの盛り上つて來る力を凝と內へ收めて、固く結んだ唇と、半眼に天の一方を睨む、灰白色の顏面に、黑い〳〵黑燿石の瞳とは、一度見たら永久に忘れることの出來ない强い印象を與へられる。

秘めたる佛の厨子を開く刹那の氣持、信仰のことには疎い鑑賞の衆生でも、藝術的な讃仰の心は宗教的にも相通ずるであらう。

中宮寺の如意輪觀音の、異樣に艶やかな黑い膚の光の滑らかさは、畏いことだが妙に蠱惑的にさへ感じられる。

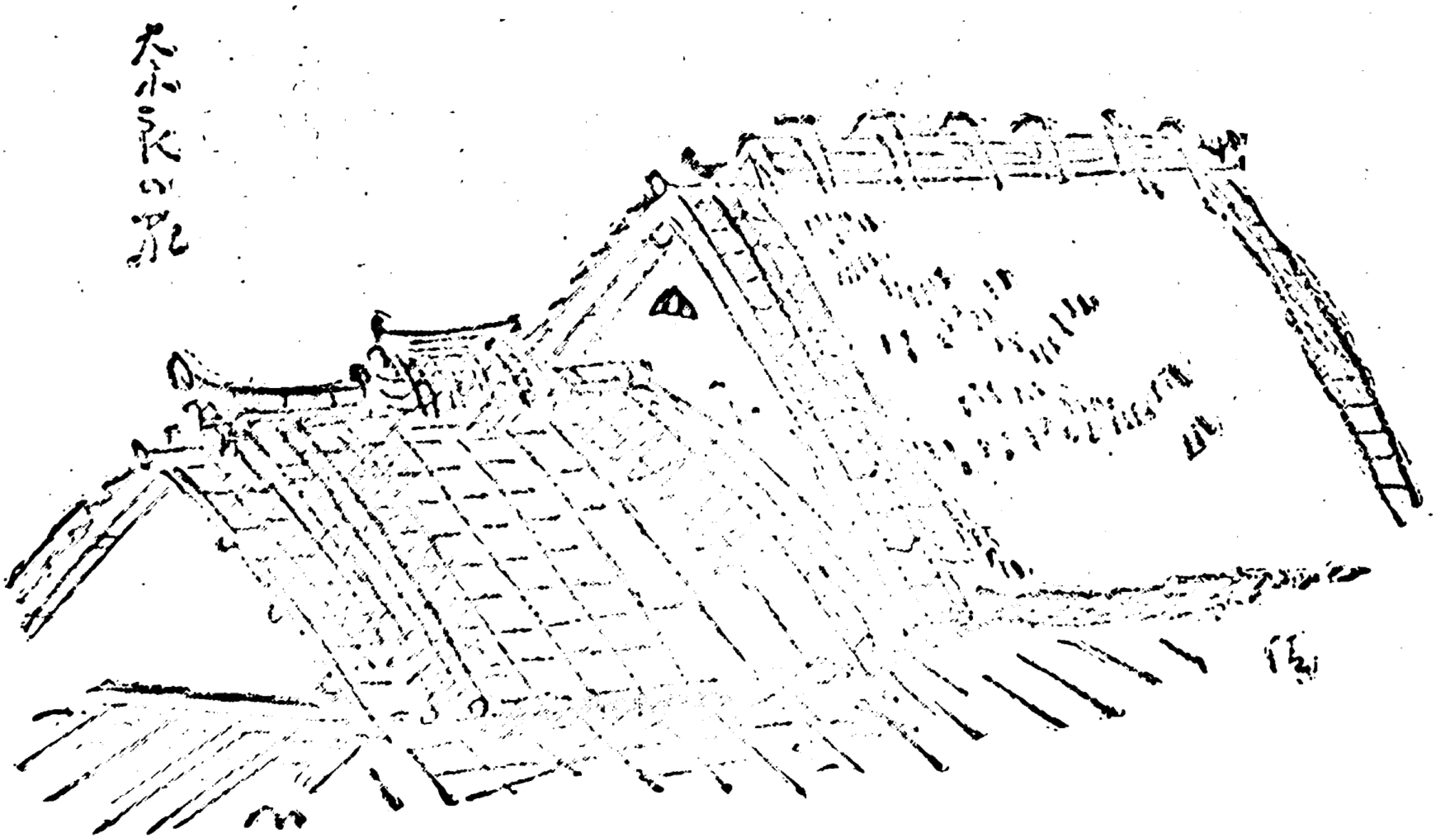
よき佛像は、肉身の感を力强く傳えらるゝものである。

三月堂の前に、築泥に格子門、小やかな持佛堂である一構へを、い

かなる隱者の住居かと、始めて通つた時から床しく思つて居たが、それが開山堂、又た良辨堂とも呼ばるゝものであることを後に知つた。

德川初期だといふが、もつと古く見ゆる古風な家作りの住居と、庭にある椿の名木とに充分な詩興を惹かれたが、後に寛仁三年の建立だといふ開山堂に、良辨僧正の像を拜してこゝでもはるばる來ぬる幸を思はずにゐられなかつた。

京で四五人集まつた席上で、奈良は住むには餘りに淋しいと土田君が言つた、あの精進一途な人でさへ淋しいといふ、土田君に比べたらあそびの多い私などには長く住むことは難かしか



らうが、ある時期にはこの里に落ちついた氣もちであたりを見まわしたい。

入用な品物を買つて歸るやうな氣で、奈良へ來るのは奈良を冒瀆するものだなどゝも考へて見たりした。

初めて京都へはいつた時は、京都の町も山も、いかにも美しいと思つた、奈良から京都へ歸つて往つたら、京都を初め程美しいとは思はなかつたが、扨て東京へ歸つて來て回想すると、都會として京都程美しい土地はやはりあるまい、あの美しい京都が、恐らくは急速度を以つて東京のやうな植民地的都會に歪められるのではなからうか。

現に東寺の塔は煤煙の中に圍ま

れてゐる、紫野附近は安價な分讓地となつて地ならしされつゝある、太秦はキネマに荒らされてゐるし、洛外の其處彼處、アスファルトにプラタナスの植民地的景觀は漸く美しき京都を蝕みつゝあるではないか。

奈良の猿澤の池は、須磨寺遊園地の醜俗に危く陥せんとしつゝあるが、その他は、この貴き古都を破壞すると思はるゝ程のこともない、共同便所のやうなものに見ても、この都には誰かものゝ解る上司があつて、建築の統一を意としてゐることが解る、これは奈良の中心が大部分公園になつてゐるからであるが、公園といふと自分の國を忘れてかゝる當事者の多い中に、奈良はまあ〳〵さういふことのないのを、私は日本人として悦ばしいことだと思つてゐる。

京都もどうぞさうありたい、京都が商工業の進展を計るよりは、日本の公園として一木をも損はず、一景をも汚すまじとつとむることが、京都としての眞實の生き方であらう。

近頃盛んに唱へらるゝ國立公園といふのは、その内容については知らぬけれど、京都の如き、御所、二條、桂、修學院の離宮を有し、史蹟、風景、名勝に富む、他に比類なき美しい都は、その潰滅を防ぐ爲めに、今では少しく後れたりといへども、望むらくはその全市を公園として指定し、國家の理解ある保護を加へたい。普通商業地をも含ませることが不可能なら、部分的に劃つてもよいが、公の都市計畫にも、私の建築設計にも、この都こそは斷じてアメリカの屬國たらしめぬやうに極力方法を講ずべきである。

三條の大橋に擬寶珠があり、大に京都情趣を漂はせるは悦ばしいが、橋の東詰に巨大な銅像の蹲ると見て驚かされ、よく〳〵見ればそれは高山正之の銅像であつた。三條の橋と高山彦九郎は、須田町の廣瀬中佐とは違つて因緣はあらう、併し、必要以上の大きさと、必要以外の醜さを強いたことは見逃し難い。

鴨河を直線に劃つて、人のあるかぬ道路のやうな地帶、それは昔の河原の變化したものとも見られるが、どういふ必要に迫られたものか知らぬが、眼に訴ふるところを以つてすれば、これも風致破壞事業の罪過の一つである。

平安神宮の前に何かの紀念として建てられたといふ朱塗の大鳥居も、必要以上の大きさを敢てしたことに罪がある。

東山の麓にある祇園の山鉾に擬した塔も、着想はなるほどゝ一應うなづけるが、東山では八坂の塔以外には何にも高い建物を欲しない、東山と八坂の塔との關係は、何にも其處へ加へてならないやうになつてゐる。

桂の離宮附近に電車が通つてゐるのも避けたかつた。申すも畏

いことであるが、御所の周圍はかなり心配な狀態に置かれてある。少くも方半里が程民有地もそれを心として桂の御所を護らなければいけない。

八瀬が、東京近郊のやうになつてゆくのも惜しい限りである、どうかあれを大原へ及ぼさぬやうにしたい。

大原は思つたより淺い感じはしたけれど、四邊の山の形がいい、三千院も寂光院も、もつと淋しいところに考へてゐた、それでも私の訪れた時、寂光院に宿つて、阿波の內侍とも、亦た女院御自作とも傳へらるゝ張貫の像の修繕を爲て居た、奈良の若い彫刻家は、この古い像をつくろひながら、山寺に獨り籠つ



てゐると、月の夜など何となしに淚がこぼれて來ますと語つた。尼寺には八重紅梅が美しく咲いてゐた。

宇治と醍醐は見ずに歸つたが、その他私の訪れた中では、やはり大原と嵯峨とに尤も多く心を惹かれた。

嵯峨方面も破壞の魔手が、漸く伸びさうな氣がしてならないが、まだ〳〵今の內はいゝところが多い。廣澤の池は纏まり過ぎてはゐるが、磨いたやうに美しい、一體纏まり過ぎて居るといふことは、京都の何處の景色に對しても言へる、それだから一目見ていかにも美しい、旋毛を曲げた見方をしてゆくと、その纏まりを綺に爲たくなることがありはしないか、長く

この風景に接してゐると、或はそんな氣が起るかも知れない、けれども今の私はそれどころではない、見るもの悉く繪にしたい慾望が出る。二尊院の山門に、時雨もやうのある日雨宿りして、ふと見上げた高い松の梢、細かい葉は彌が上に茂つても、空隠す程の暗さはなく、遙かの梢から地上をさして、狩野派の古畫に見る月を捉ふ猿猴の手のやうに伸びた枝、赤松の赤い濡れ色、東では見られぬものゝ一つである。

またある時は黄昏せまる西芳寺で、苔寺の名に負ふ苔の踏み心地、淺き春の身に沁む山氣を心ゆくまで吸ふても見た、その苔寺に一日の茶會を催うされた京の人の心つくしも忘れ得ぬ、湘南亭と扁額ある茶室に、點茶は京の美しい良家の娘御達、詫びと寂びとの山寺に、牡丹、芍藥、香に立つて、薄紅梅の帛紗捌き。土天井の張出縁に重詰を開くと、若狹の魚、洛外の野菜、呑めぬ口にも瓢の酒を先づ盃に受けて見る、山颪、雨を誘つて時ならぬ村時雨に手甑の綵へる、西川祐信の畫趣である。

汀の馬醉木影を浸す池の鏡の、曇るかと見れば又た霽れて、淡日松尾の峰を照らす、この日こそ沁々と京都を味ふことの出來る日であつた。

大阪で吉田屋、京都で島原の角屋、この二遊里の見物は屢々兩都の人に誘はれたけれど、遂に果さずに了つた、吉田屋はとにかく、島原の方はどうも足が進まなかつた。この旅に先だつて文藝春秋の催しで、復興の帝都を巡覽したことがあつた、その時吉原を通過して、あるまじきものの存在を慘ましく思つたことがある。西澤一鳳の隨筆であつたか、古く讀んだものの中に、但馬屋のお夏が年老いて峠の茶屋に餘生を送るを見て、通りすがりの旅人が、あれこそ清十郎に死に後れた、但馬屋おなつが成れの果云々といふ一節を、その時ふと思ひ出した。

大宮通を電車で通つて、埃つぽい場末の町に、古びた燈籠の立つ角を、この先が島原と教へられたゞけで、こゝでもまた但馬屋お夏が成れの果を思はずにはゐられなかつた。

さういへば、さういつた感じを京都の寺々でも受けたことが多い。天球院の山樂の襖繪などは、保存もよし、心なき群衆の見物もないところなので、純な心で接することが出來たが、三十三間堂や、血天井のある養源院などは餘りに見世物氣分が厭はしい、あの俗な案内者が卑しい聲をふり立てて、襖は俵屋宗達の筆、全部國寶ですとやられると、宗達の爲めに涙なきを得ない。

國寶は指定と同時に、因果なのはこの子でございといつた扱ひを受けさせないやうにしなければならない。

私の心境が近來風景に親しんでゐる爲めもあらうが、往復の街道でも、京都、奈良に於いても、尤も多く心を惹かれたものは、自然景と、建築の面白さとであつた。建築では大和路—龍田あたりから都跡村あたりの白い壁に薄手な屋根、屋根は多く瓦で緣を取つた茸葺で、關東の厚みのあるのと違つて、薄い草の褥を、瓦屋根の上へふうわりと打ち掛けたといつたやうなのが珍らしかつた。

奈良！大和路には京にも勝して、村徑籬落、一歩一景、たゞその儘の繪であつた。



風俗では、大原女、舞子、春日の巫女、大阪の藝者をとりぐ特種なものと見たのは言ふまでもない。

大原女と他國人が總稱するもの〻中に含まる〻、大原、八瀨、白河、梅ヶ畑、高尾、といつた區別を辨ずる程には見なかつた。

春日の巫女は藤の咲く頃に更に見たい。

大阪の藝者は廊燈の影にくづるゝ緋牡丹のやうである。

京の舞子、藝子、延いてはいはゆる京美人を、濃厚な感じに傳ふるのは、未だ私には解し難い、私の認むるものは、畢竟、他のものに私自らを認むるに過ぎなかつた事は知つたが、それにしても緋牡丹よりは薄紅牡丹、花瓣を重ねて濃く見ゆる紅も、一片となれば白に近い。

街路に見かける若い女の、平常着らしい取合せ、大阪は東京に似た

ところもあるが、京都は極めて單調である、格子、中形の染模様の二色、三色位に纏めたのが多く、色なり、調子なりを數字で示せば、五分五分の保ち合ひで、三分と七分の際立つた變化を試みたものはないやうである。

藝子、舞子の白粉こそ厚いけれど、町の女には白粉のうすいのが多く、白いといつても日本人のことだから、多少の黄ばみはある皮膚に、極めて明るい半襟を着けてゐるのは、京大阪を通じて、醜いとは言はぬまでも、美しくは見えぬ好みである。

私が京都へ出かける時、知る人の多くが、食物で困るだらうといつてくれた、東京から何か持つて往つたらどうだと、外國へでも行くやうに心配してくれた人もあつた。

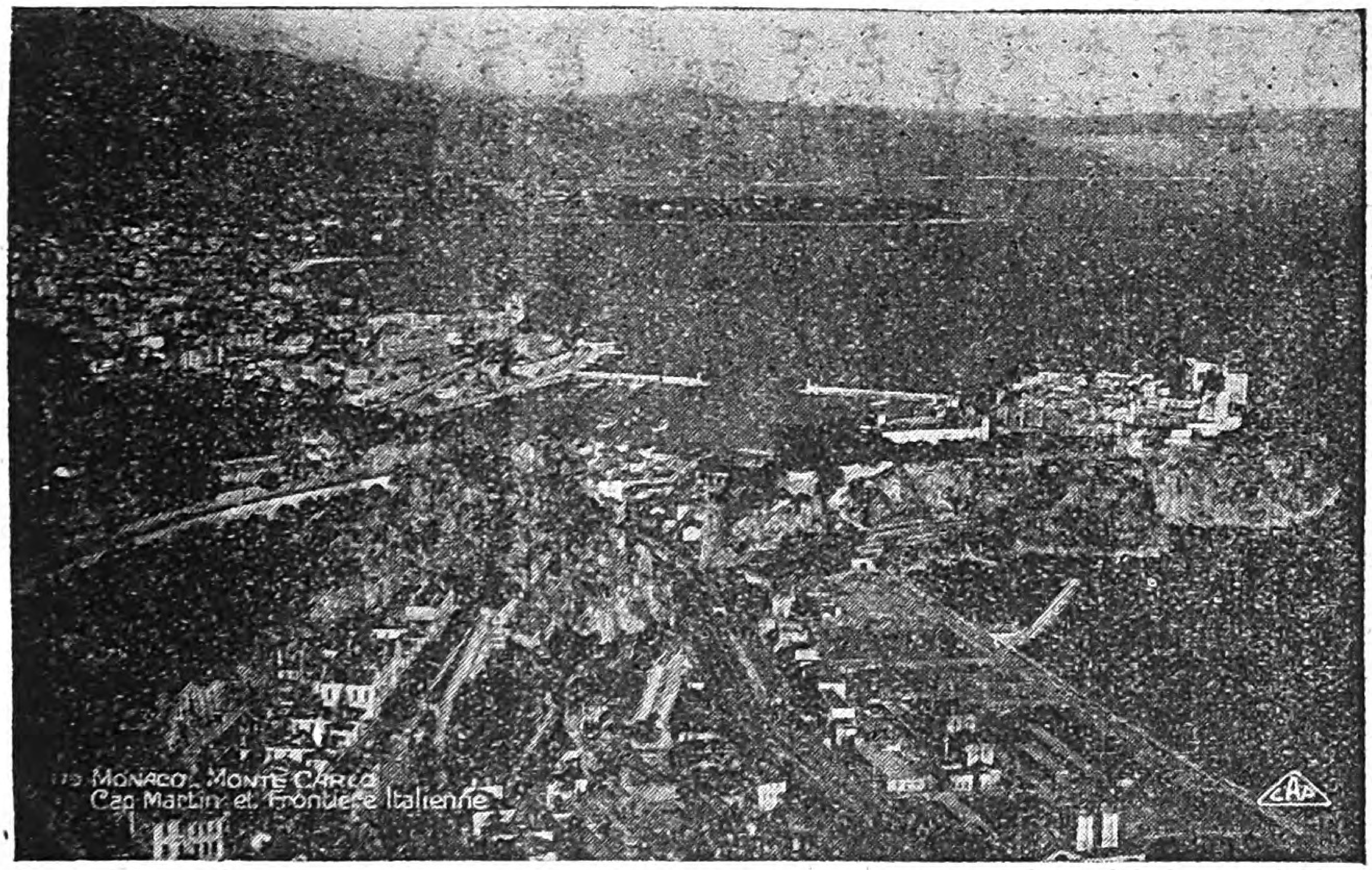
けれども東京固有のものを除く他は、京阪の食物は何でもうまかつた、菓子などは東京のものより京都のもの〻方が私としては好みに適ふ。東京に來る人が何か食物を土産に持つて往かうといふのは辭退した、もつと長く居たらとにかく、三十日や四十日の滯在では、別に東京のものを態々京都で味ふ氣にもならない、京都で食べれば、東京のものより、京都のもの〻方がうまいに極まつてゐる、食物と風土の關係は一朝一夕のものではない。

私どもの作る繪に於いてもその通りで、私はこの後上方の風景人物を描くかも知れないが、それは上方の風景人物を借りるまで〻、それが心から上方の味を持つことは、望みもしないし、望んでも出來ないことである。

ある藝子を選んで、寫生といふ程でもないが、髮の形などを描きとめながらきいて見ると、その藝子は東京が好きで、髮も東京風に結つてゐると言はれて一度は苦笑したが、私の選み方は、やはり自然だつたのだと苦笑は微笑に代つて、そのま〻筆を續けた。（完）

血色を良くする肝臓療法

最近貧血に對する肝臓療法といふことが醫學界で喧しく叫ばれて來た、虚弱な人に哺乳動物の肝臓を朝晝晩食べさせれば血色が目に見えてよくなることは今までの鐵劑や砒素劑にも勝つて居るといふのである。然し生の肝臓を毎日〳〵手に入れることは不可能であるのみでなく、腐敗し易く料理にも困る、近頃ではヘパトーゼといふ肝臓の錠劑が出來て居り、生の肝臓と同様に諸所の病院で使はれてゐる、かさが小さく、錠劑であるから服み易く、勿論長き保存にも耐えるし實際によく效くと云はれる、數日て食慾が著しく進んで來るだけでも效果はある、血色の如き二三週間も續けてゐる中に見違へる程よくなつて來るといふ樣なことが實驗的に報告されてゐる、謂ふまでもないが肝臓療法も思ひ出したやうに時々用ふるのでは全く無意味で、規則的に毎日〳〵缺かさず用ひ、始めは少量でも次第に用量を增してゆくといふことが必要である。



第二圖　モナコ公國の遠望。右手に突出た岬の上にあるは王宮と水族館。港を抱いて左りの海角の上にあるのがカジノ。

モンテ・カルロの話（上）

世界散策記（その二）

久米正雄

一　初歩

私がかの一部の人々から「惡德の溫床」であり、「歐羅巴の病源地」と呼ばるゝ所の、モンテ・カルロに赴いたのは、一九二九年の一月半ば、南佛リヴエエラの季節が、既に始まつてゐる最中だつた。

確かな日附は、日記を付けてゐない私だから、覺えてゐない。が、一月の九日の夜、九時四十分に巴里を發つて、十日の晝近くニースに着き、確かその翌日か翌々日に、山手のオテル・メルヴエイユに、有島生馬氏一家を訪ねたら、そこで初めてモンテ・カルロ行きの相談が出たのだから、たしか十二三日だつたらう。

尤も謹嚴な有島氏一家は、私たちをあの有名な博奕に、と云つて誘つて呉れたのではない。寧ろ、ずつと清淨な目的で、丁度其時、佛蘭西第一のピアノ彈きであるコルトオが、モンテ・カルロのカジノの中にある劇場で、獨奏會をす

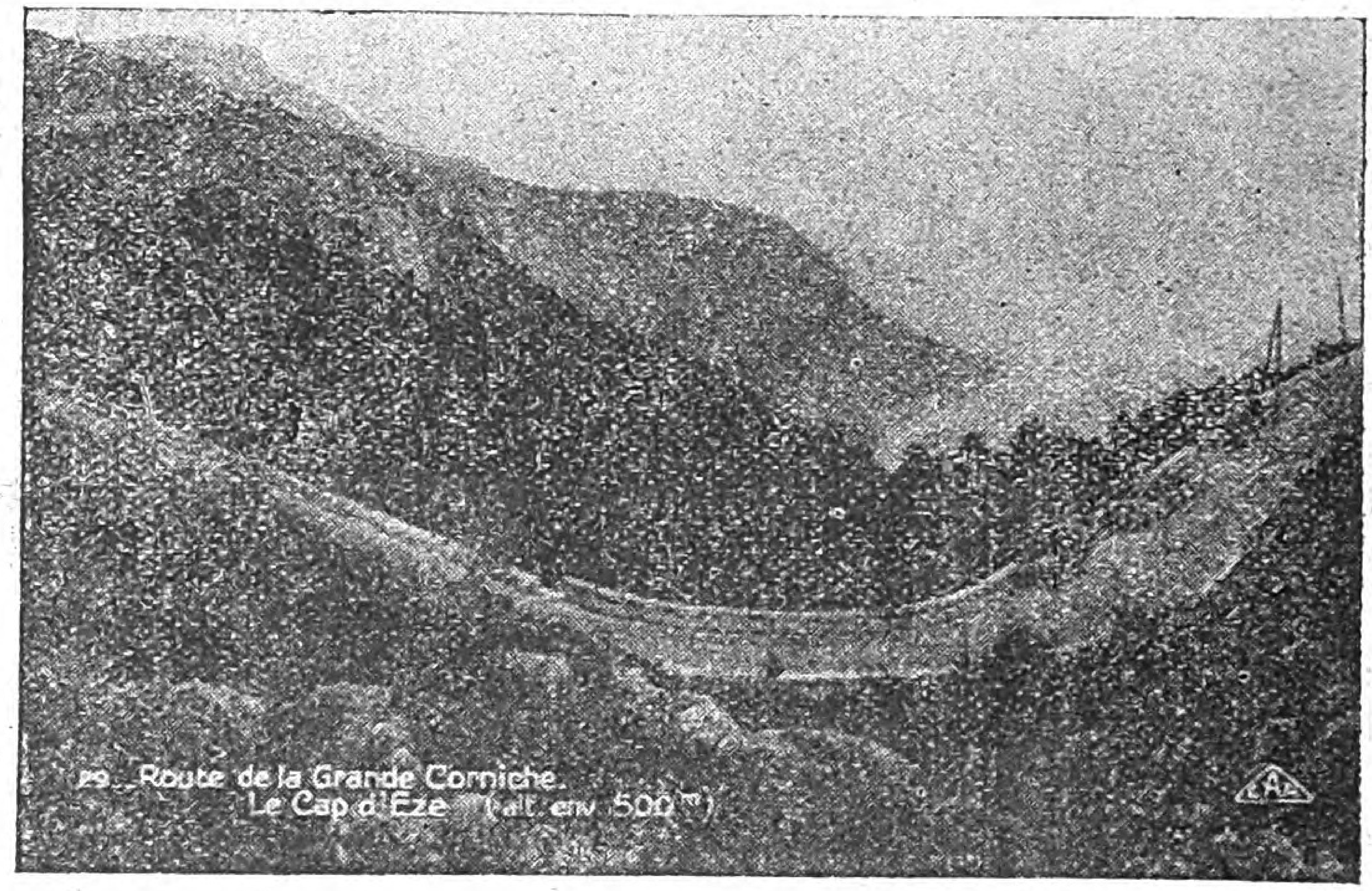
るから、それを聞きに行かないかと云ふのだつた。

「……そして、それが晝興行だから、終つてから、鳥渡向うの方へ行つてもいゝぢやありませんか。併し何しろコルトオは、どうしても一つ遍聞いて置かなくちやア。」

私の性癖を知つてゐる有島夫人が、さう云つて微笑し乍ら、薦めて呉れた。

私の聞いた限りでは、恐らくコドウスキイやパデレウスキイなどより、ずつと藝術的な彈奏を感じさせたコルトオは、巴里で既に、柳澤健君に連れられて聞いたので、——其時は管絃樂の伴奏付だつたが、今度は靜な獨奏で、しかも僕だつて少しは知つてゐるショパンのプレリュードを、廿四も彈くと云ふので、その後の付け足りが無くとも、一も二もなく行く氣になつたのは、云ふ迄もない話だつた。

況んや、さう云ふ清淨な音樂の鑑賞を前提として、兼ねて目ざした賭博の宮殿カジノへ、第一歩を踏み入れると云ふ事は、願つてもない好機のやうに思へたからだつた。



第一圖　モンテ・カルロに赴く途上の風景

「行つていらつしやい。そして序に、音樂會の費用を、すつかり儲けていらつしやい。私たちは、まだ丁年未滿で、そつちの方へは入れないんですから。——此間は藤原義江が、隨分勝つて歸つたつて話よ。」

令孃のアキ子さんまで、そんな風に云つた。

「なアに、よく聞いて見たら、勝つたと云つたつて、二千法だつて云ふぢやないか。その位なら、パパだつて勝てるかも知れない。」

さすがの有島氏も、場所柄、興味を持つてゐると見えて、そんな事を云つてゐた。

「だけど駄目よ、私たちは。山ノ内でも連れて來たら、大にやるかも知れないけれど。……まア其方は一つ、貴方にお任せするんだわね。」

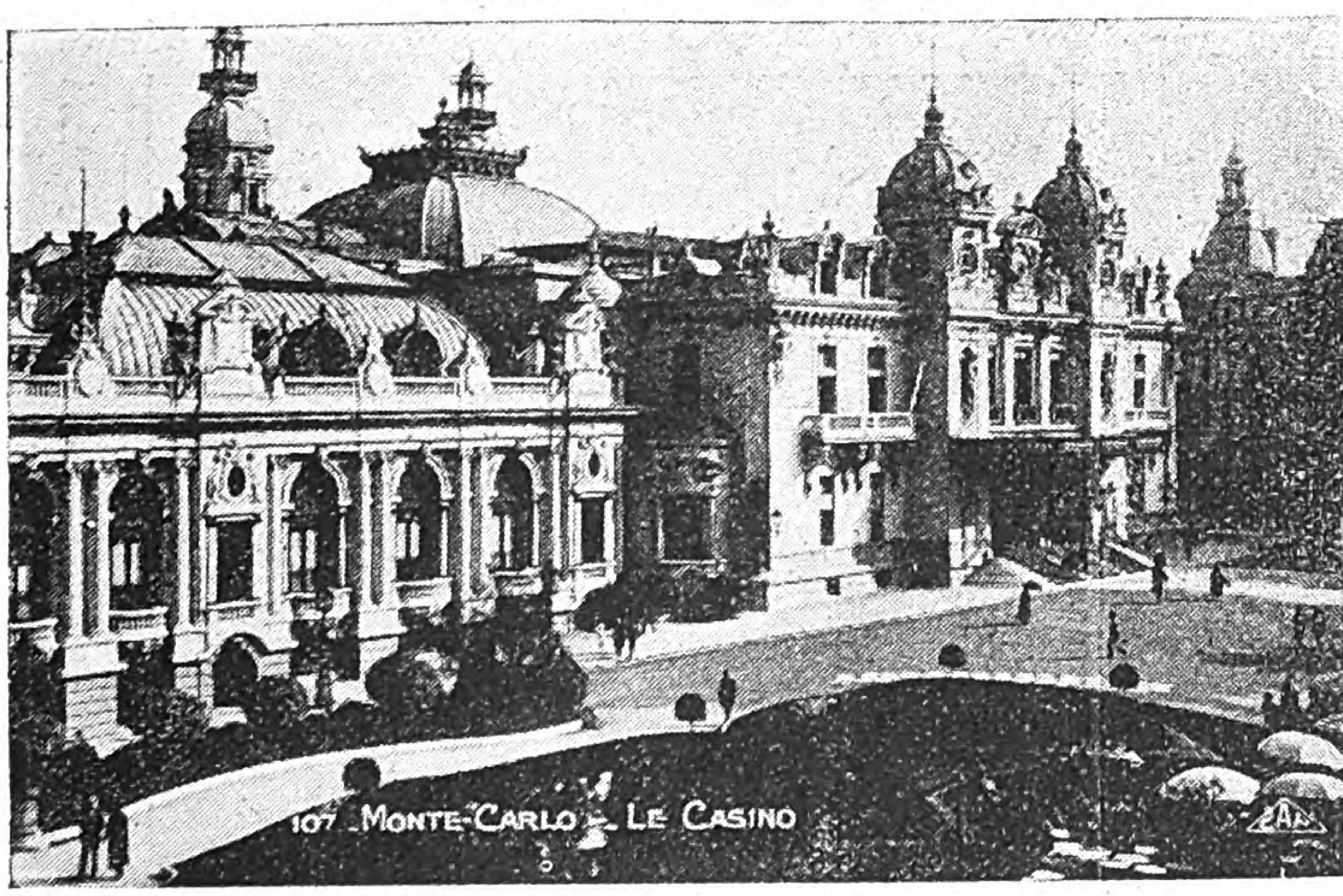
夫人が笑つて云つた。

「ぢやア明日は一ツ、私が慾と欲との二筋道を行つて見ますかな。」

そんな事で、同行の約束が成り立つた。

宿のアングレテエルと云ふのに歸つて、帳場に頼んで、切符を取つて貰ふと、幸ひにまだ相應な場所のが、餘つてゐた。同行のT君。――私の此の紀行に現實味を添へるため、思ひ切つて名を明して了ふと、加納治五郎氏の息子で、畫家の竹添君も、一緒に、是は音樂の鑑賞だけに行くと云ふので、一行は有島氏夫妻とも五人。アキ子孃は、丁年未滿で、ルーレットのある廣間へは入れないのだが、音樂會場の聽衆席へは入れるに係らず、何かの都合で行かなかつた。

私たちは、宿からタクシイを傭つて貰つて、――賃金百四十法(日本金十一二圓)で其午後一日、何時迄待たして置いても關はない約束の下に、勇んでモンテ・カルロへ向け出發した。



第三圖　カジノの前面。右下に日傘の見ゆるはカフエ・ド・パリのテラス。右手に一隅のみ見ゆるは、ホテル・ド・パリ。

ニースからモンテカルロ迄は、アルプス山脈の餘波が、海へ落ち込む所、伊豆の或る場所を思はせるやうな、もつと岩の多い丘と斷崖つづき。そこをオリーブと椰子と其他の常綠樹が、赤い屋根の家々を綴つて、實に世界一の明媚な風光を作つてゐる。そしてその丘腹を貫いて、上、中、下、三段の坦道が、いづれも快適なドライブを與へて、一時間近くの道中を倦ましめない。――其日私たちは、有島氏の提言に依り、沿道風景の大觀を得るために、一番上方の道を選んだ。その冬なほ燦たる日光の下の、ヴイル・フランシエ、ボーリウ其他の風光は、今、敍述するの煩に堪へないから、最も代表的なパノラマを、寫眞版でゝも插入して置かう。(第一圖及第二圖參照)

かうして私たちは、定刻の一時迄に、モナコ王宮のある岬の根を過ぎり、玩具のやうに綺麗な海港を迴つて、愈々モンテ・カルロの、カジノ(賭博殿)の入口に着いた。

私は兼ねて期してゐたが、矢つ張り、何よりも先づ此のカジノの、建築の壯麗に怖えた。前の廣場は、公園のやうな一ト叢の立木と、圓い花園を中央に、左り手にはどつしりしたオテル・ド・パリ、前にはサン・マルコに似たと某詩人が唱つたと云ふ、屋根の複雜した、妙な建物のカフエ・ド・パリ。そしてカジノ其物は白大理石前面に、一ぱい日を沁ませて宮殿より立派だ！（第三圖參照）

入口に車が着くと、玄關に立つてゐる、青羅紗に金モールの番人が、進み寄つて戸を開く。私たちは其大理石の上り段に敷いた、深紅の氈を怖々と踏んで、重い硝子扉を押した。扉は二重になつてゐて、中に、廻轉式の出入口がある。そこを入ると、左り手の部屋が、旅劵を査めて、入場劵を賣るところだ。

私たちは、世界各國から集る、雜多な人々に交つて、怖々と旅劵を差出し、型の如く一二の質問を受けて、十法を拂つた。約一圓未滿の入場料である。

さうして私たちは、有島氏の後に從つて、先づ、突き當りの音樂會場へ入つた。

其時聽いたコルトオの音樂と、その小さくて立派な劇場内の印象に就ては、又書く折もあらう。たゞ私は夢のやうに四邊を見廻し、夢のやうにピアノを聽いて、しかも印銘最も深かつたと云へば、玆では足りる。そして正面の二階の特別席に、モナコのプリンセスだか何だか、青い絹の着物を着た若い貴婦人が、古風な畫を見るやうに、濟まして聽いてゐたのと、演奏が濟んでから、髮の毛を藝術家風に伸ばしたコルトオが、慇懃にその貴婦人に挨拶して、その手袋をはめた手の甲に、恭々しく唇を當ててゐるのを、今でもはつきり覺えてゐる。

……

「……ぢやア向うの方へ、鳥渡行つて見ませうか。」

さう有島氏に云はれて、私は我に返つた。そして今度は、愈々賭博場の方へ、ルーレツトやトランテ・エ・キヤラントのある廣間の方へ、行く事になつた。

廣間の入口には、番人が居て、先刻入口の左手の部屋で、旅劵を見せて購つた入場劵を改めた。

私はさうして初めて其廣間に歩み入つた。

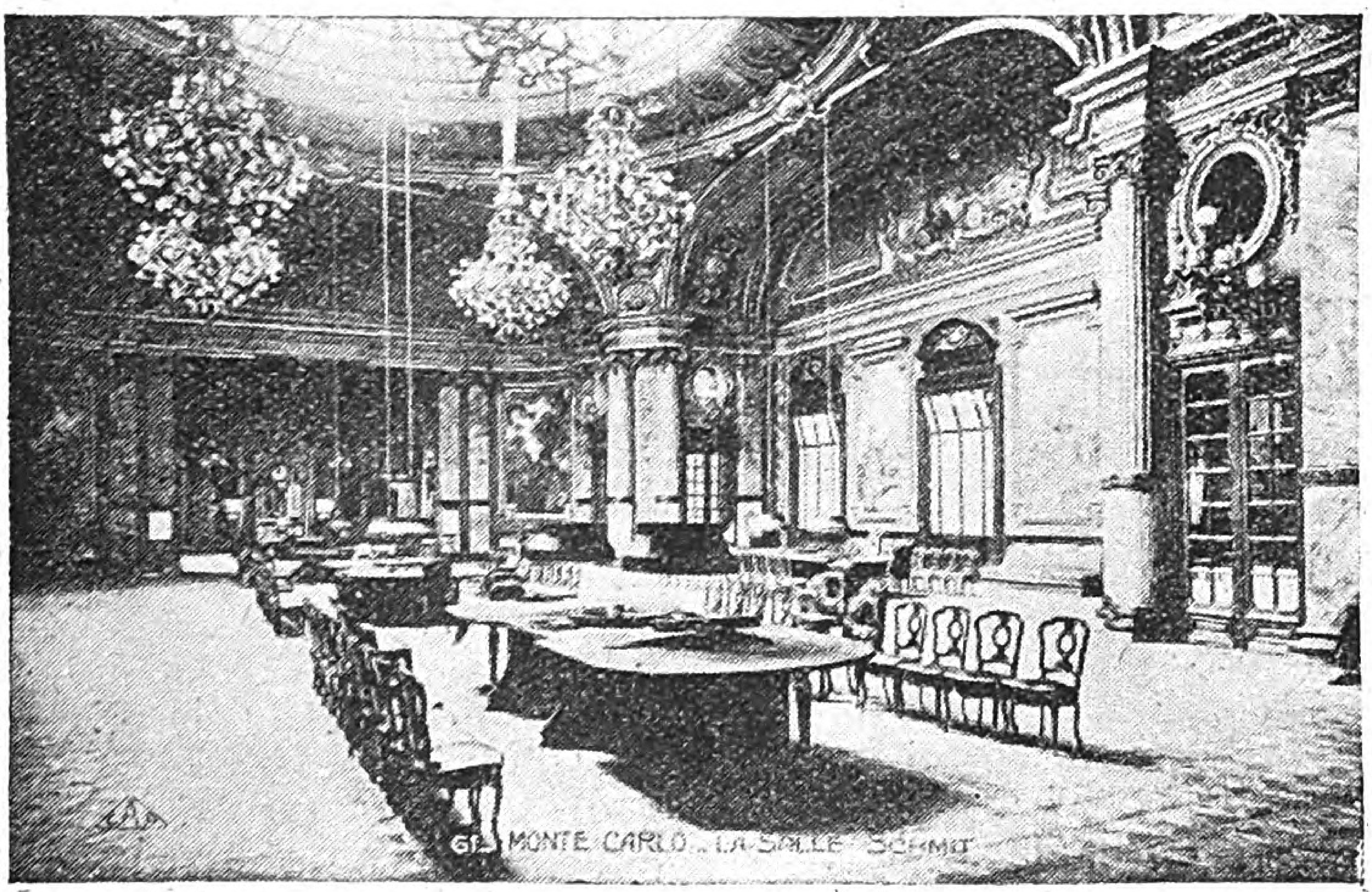
その建築者の名を取つて、シユミツトの廣間と呼ばるゝ、中央の大廣間は、丁度午後の人の出盛り時と見えて、十五六台も置いてあるだらうと思はれる、ルーレツトの長い青い卓に、いづれも一杯に黑く人だかりがしてゐた。（第四圖參照）

が、私は、入ると直ぐ、その周圍の美しい黑珠を鏤めた裝飾よりも、何よりもその場の空氣の、陰鬱でドシツと重いのに驚いた。人々

は、それだけ集つてゐるのに、緊張して、凝固してゐるのか、厭に物静かだつた。そして盤を廻轉させる役人の、鼻にかゝつた佛蘭西語が物倦く反響なしに響くのみだつた。

　そして場内では、煙草は全く禁じて居るのに、何だか室の空氣は、重く濃くムッと澱んで、ほんたうに人々の青息吐息が、むら〱と揺れてゐるやうだつた。――私は何よりも其重い、陰欝な空氣に壓倒された。もう少し株式取引場か、競馬の馬券場のやうに、喧騒にでも支配されてゐたら、氣が樂だらうが、これでは其處らを歩き廻るのさへ、足音を忍ぶほどの靜けさだ。賭心と云ふ怪物、それが人々の上に重くのしかゝつて、脂汗をじつとり搔かしてゐるのだ。その脂汗の匂ひがするやうな氣がした。

「……お金を札と兩換して、もつと奥へいらつしやらない。」有島夫人が、立佇つて逡巡してゐる私たちを、誘つて與れた。「奥の方に私の行き馴れた卓子があるのよ。その方がもう少し人數が尠いから、却つていゝでせう。」



第四圖　カジノ内部。ザル・シュミットと呼ばるる大廣間

　私は唯々として、そこの室の隅の現金台で、五百法紙幣（約五十圓未滿）を兩換すると、奥の、シュミットの新廣間と呼ばれる方へ入つて行つた。

　成程其處は、卓子に腰掛けてゐる人は滿員だつたが、周圍は立つてゐる人が、割りに稀薄だつた。――私たちは有島夫人が馴染だと云ふ台の、――確か卓子の番號は十七番だつた。――一方の端のに並んで立つた。

　私は馴れないので、暫らく氣を落ち着けて、台の様子を見てゐた。

　卓子の中央部には、直徑三尺もあらうかと思はれる、ルーレットの鉢が、〇から三十六迄の數を赤と黒の目に刻んで、輪盤をくる〱廻轉させて居る。

　廻し役が、輪盤の中央にある、銀の十字形の取手を指で捉へて、適宜な速さで廻し初める。象牙か大理石の玉を、その輪盤と反對の方向に、鉢の外側を

傳はるやうに、クーッと廻はし初める。……役人は呼ぶ。

「メッシユウ！

マルケ、ヴオ、ジユウ！

フエト、ヴオ、ジユウ！」

(皆さん、お賭けなさい。賭遊びをなさい。と云ふ程の意味。)

事務的ではあるが、多大な吸引力を持つた言葉だ。

ルーレットの目は、赤黑を辨ぜず廻轉し、白い玉はピンと跳ねたり、鉢の周圍へ打衝かつたりし乍ら、なか〱目の中に落ちない。

落ちさうになると、クルピエは呼ぶ。

「リエン、ヌ、ヴア、プリユウ！」

(もういけません！)

玉はことりと落ちて、輪盤は回轉を緩める。——運命の賽の目だ。

私が見た最初の目は、十二だつた。

「ヌメロ、デユーズ！ 赤、偶數、エ、前半！」

宣告は下る。さうしてその卓子の、兩端へと敷き述べられた青羅紗に、點々と置かれた賭札は、眞鍮製の熊手で、ツツ、ツツと引寄せられ、當つた分だけは、其額だけの賭札を、ポン〱〱〱と投げて、揃へて、押して寄越す。……

「メッシユウ、マルケ、ヴオ、ジユウ！」

有島夫人が、最初の運試しと思つたか、その十法の換錢を、ポンと赤へ置いた。質の悪い眞鍮で出來てゐる、一圓銀貨大の賭札は、其處で運命を待つた。

二十五が出た。赤だ。倍になつて歸つて來た。

次は、三十六の一本槍へ、夫人はそれを置いた。當れば三十六倍になつて歸つて來る。

「リエン、ヌ、ヴア、プリユウ！」

十一が出た。夫人の換錢は、クルピエのレークの先で、手もなく掻き寄せられた。が、誰かゞ、そこの七、八、九、十、十一、十二の六點張りに賭けてゐたと見えて、辛うじて六倍になつたのがある。いづれその張りやうは、項を改めて說明するが、いづれにしても、なか〱六ケ敷さうだ。

私は、それだけを見ると、勇を皷した。そして、どうせ先づ最初に賭けるのだから、最小限度の十法チップを、一點張りで賭けようと思つた。そして當れば、三十六倍になつて返つて來るのだから、三十六回の中一度當ればいゝ譯だ。だから尠くとも三十六回だけ、同じ目に張り通してやらうと思つた。數のチャンスから云つても。理窟上三十七回に一度は、——零を入れるから、——其目が出る筈だ。だから運がよければ、直ぐ出て、その後は儲けになるし、惡くても三百六十

法、（約三十五圓未滿）の損だ。其位は、最初の龜の踊りに、即修として奉納してもいゝ。

だが、どの數にしよう。

私は先刻音樂會で、コルトオが彈いたショパンのプレリユードの中、十八番が殊に氣に入つたのを思ひ出した。それと二十四番目も、非常によかつた。十八か二十四。そのどちらかにしよう。

私は前の卓子についてゐる人の、出た數を記した手控へをそつと覗き込んだ。——卓子に就いてゐる程の人は、殆んど皆が皆、手帖やうなものに、出た數を記錄して、その運の目の動きを計つて居る。——見ると、どつちも近くに餘り出てゐないらしい。

私はそつと傍の妻に囁いた。

「俺は十八か二十四へ賭けたいんだが、どつちがいゝ？」

「……さうね、二十四になさいよ。」

妻は自分の年齡に近い方を、選んだのかも知れなかつた。



第五圖　カジノの下の見晴臺

私も心の中で又、プレリユードの曲の數が、二十四あつて、結局そのどれも甲乙無いと云へば無いのを思ひ出した。そしてコルトオが二十四を選んだんだから、一つ俺もその紀念に、二十四を選ばうと決心した。

「よし、そんなら俺は、是から三十六回だけ、二十四へ張つて見るから、君は君の好きな所へ賭けて見給へ。」

そして私は、五百法の中百四十法を妻に渡すと、直ぐ最初の十法チップを、ポンと二十四と數字を書いた、枠の中に置いた。

勿論、最初から、それが出ようなぞとは思つてゐなかつた。一回濟んだ。勿論外の數だつた。二回濟んだ。當らなかつた。三回、四回、五回、……十回に及んだ。まだ出なかつた。十九回、二十回、……私は出ぬその數を追ふて、執念く、事務的に置き續けた。終ひには、默つてポンと私が札を投げ出すと、手近な台役人が、それを二十四へ置いて呉れた。そして何か、微笑して私に云つたが、私には數よ

り以外の佛蘭西語は、まるで分らなかつた。

そして三十六回、とうとう一度も二十四は出なかつた。

私は何だかホッと息を吐いたが、併し心の中は、何だか厭な、割り切れない氣がした。三百六十法ばかりどうでもいゝやうなものゝ、何だかヘンに情け無いやうな氣がした。併し、もう仕方が無かつた。もう一度三十六回張つたら、或ひは直ぐ出やしないか、と思はれたが、又そこは博奕は諦めが肝要なのを知つてゐた。キレイに廢す事にした。

が、それでも、鳥渡諦め兼ねたのは、十八の數を選んでゐたら、既に十回目位に一度、二十五六回目に一度、都合二度出た事だつた。妻を恨む譯にも行かないし、結局つく／＼運命の皮肉を、嘆ずる外無かつた。

妻も、十四回、是はいろ／＼數へ張つて見たが、結局みんな親に取られてゐた。

もうそろ／＼暗くなりかゝつてゐた。

有島氏が、何處か外の卓子でやつてゐたと見えて、丁度そこへ歸つて來た。

「どうです？」氏もどうやら浮かぬ苦笑を湛へてゐた。

「いや、どうも僕は三十六回敗けて、みんな駄目でした。貴方は？」

「私も少し敗けました。」

「ぢやア、今日は仕方がないから、此儘少し預けて置く事にして、歸るとしませうか。」

私たちは、灯の點きかゝつてゐるカジノの、慌しい玄關を出た。

「……今日はみんな敗けね。」

と、歸りの自動車の中で、有島夫人が云つた。

「いや、竹添君は敗けませんよ。――かうして見ると、結局、やらない人の方が偉い譯かな。」

私は竹添君を顧みて笑つた。

「いや、」竹添君は生眞面目な顏をして云つた。「僕も今度來たらやりますよ。今日は何だかあんな事が初めてだもんですから、どうしていゝんだか、ちつとも樣子が分らないんで、手が出せませんでした。」

「でも、おやりにならずに濟むなら、其方がいゝことよ。たとひ少しばかりでも、敗けると厭ですからね。」

有島夫人は云つてゐた。

私も、初めから一定の主義の下にやつたのながら、なか／＼敗れて悔なき心境までは、達するのに難かつた。――お蔭で、日暮れにかけての歸りの風景は、隨分いゝ所があつたのに、少しも面白くなかつた。皆も何だかヘンに疲れて默りこくつてゐた。

二、再　敗

第二回目に行つた時は、當時カーニュに住んでゐる、若い畫家の連中と一緒だつた。

丁度其頃、巴里でも畫の蒐集家として有名な福島氏が、伊太利旅行からの歸途、ニースに立寄つて、有島氏を訪ねて來、又私たちと同宿に、竹添君が居るのを知つて、オテル・アングレテエルへ訪ねて來た。そして其處で、氏や竹添君が知つてゐる、隣村カーニュに滯在してゐる畫家たちと、或る日、ルノアル翁の遺家を訪ねる事になつた。

慶應病院の醫師で畫家を兼ねてゐる宮田君。實業家で有名な喜劇作者を父に持つ益田君。それから二科で新進の林茂義君。──それに福島夫妻と洋子ちやん、竹添君及び吾々を加へた一行が、あのオリーブ青緑に靡く丘の中腹に、ルノアルの家を訪ねて、數々の遺作に随喜感激した事は、又稿を改めて書く折もあらう。が、その歸途に、モンテ・カルロ行を私が其年少の友達と約束した事は、先のコルトオの作合と云ひ、何とも藝術の神に濟まぬ仕儀ではなからうか。併し此處は南佛リヴエエラである。あらゆる歐羅巴のよきものと、惡きものとが、渦を巻いてゐる「季節」である。

約束の日には、宮田君と益田君とが、連れ立つてやつて來た。そこで吾々は、メッシナ廣場の傍から出る十フランの乘合に乘つ、勇んでモンテ・カルロへ赴いた。此の乘合自動車は、眞紅の贅澤なクッシヨンの付いた、二十五六人乘の遊覽車で、座席もずつとスツクリしてゐるし、動搖も割合に少かつた。此の自動車の道は、眼下に海を見下ろす、中道を通つた。それも又いゝ景色だつた。──私の知つてゐる限りでは、此の乘合が、世界中で一番いゝ設備を持つて居る。そして運轉手が、一人で車掌を兼務して、毎時殆んど滿員の車を處理して行くのも、何か頼もしげな感じを起させた。

私たちは並び、カジノの前に立つた。今度は、さうオド〱しては居なかつた。そして一日の長を誇つて、寧ろ案内するやうに、例の入口の傍の入場劵賣場へ入つた。

と、一行の中、益田君が旅劵を忘れて來た。が、そこは又言葉が割合に達者で、風貌が烏渡伊太利か西班牙の青年にも紛ふ同君の事とて、二十法ばかり巧みに役人に掴ませると、直ちに入場を許可して呉れる事になつた。

丁度午後の二時頃で、カジノの廣間はさう混んで居なかつた。今度こそと思つて、私たちは紙幣を金札に換へた。

皆の後で、私は千法紙幣を出して、取換へて貰つた。約百圓弱だ。如何に旅中の大切な金でも、其位は擦る氣でないと、勝てないと思つ

たからだ。勿論、千法位の資本では、云ふに足りない部だらうが、初歩の私には、それ以上賭る勇氣が殆んど無かつた。それに千法だと、最低十法だから、百單位ある譯だ。百單位をうまく使へば、何とか當る事もあらう。……

換金台では、百法の赤い換札を五つと、それから十法の眞鍮錢型のを、澤山呉れた。私は向うを信用して、ザラ／＼と手の中へ受取つたが、歩き出し乍ら、直ぐ後で勘定して見ると、十法が一つ、どうしても不足してゐた。私は不足を云ひたかつたが、言葉を知らなかつた。覺束ない英語で、通じるかも知れぬが、それとてもう後の祭りに違ひない。一つ肩を聳かして、ジュヌ・セ・パ（知りませんよ）とでも云はれて了へば、それつきりな事は分つてゐる。——此の釣錢不足の手には、その後、競馬場の窓口でも、一度會つた。その時一々勘定して、足りないから受取らずに居たら、やつと氣がついたやうに、顔色も赤めず不精不精に、一つ足して呉れた。外國、殊に佛國のやうな、戰後の窮乏國では、官營公營の場所でも、外國人殊にそんな所で金錢に淡白な、——尠くともさう見せたがる日本人と見ると、——その氣質を知つてゐるのか、油斷がならない。私は外國人に對するカケ値、釣錢詐欺などは、西洋人は絶對にしないものかと思つてゐたのに、佛蘭西、伊太利は勿論、獨逸、更に老大國の英國までが、矢つ張り吾々に其手を食はせるのを見て、遂に其點、日本人などの方が、寧ろ廉恥心に富んでゐるのを發見した。そこへ行くと、吾々を金の無い、劣等國民扱ひにする米國の方は、ずつと淸廉潔白だ。

餘談は兎も角、私は其日、先づ換錢台で十法を胡麻化されたのが、ケチの付き初めだつた。何も十法ばかり惜しい譯ではないが、言葉の分らない異邦人だと思つて、胡麻化されたのが、口惜しかつた。その腹癒せに、是が非でも勝たうと思つたのが、却つてイケなかつた。

前に入つた吾々の仲間は、もう直ぐ其處の、シュミットの廣間の取つつきの卓子で、立つて張り初めて居た。妻も其處に、並んで立つてゐた。

私は釣錢を胡麻化されたのを、癪だから默つてゐた。そして連中に鳥渡合圖をしたまゝ、其處に殘して置いて、一人で靜かに試みやうと思つて、奥の部屋に赴いた。

丁度其處の七番と云ふ卓子が、今開いたばかりと見えて、人が空いて居た。私は思ひ切つて、其端の方の椅子に、一人の老婦人と並んで腰を下ろすと、暫らく様子を見てゐた。

今日は、どう云ふ風に張らうか。——私は自分の素人考へで、昔、横濱の某所で、遊び半分に、此のルーレットを廻した記憶などを辿り

乍ら、今日は赤黒か丁半かの、二倍張りばかりを試みやうかと思つて躊躇してゐた。

と、私の向ひ側に居る一人の、背廣を着たアメリカ人らしい若い男が、頻りに百法の赤札を單位にして、同じやうに赤黒の平張りを試みてゐる。別に是と云ふシステムは無いらしいが、時々氣が向いた方へ、赤なら赤へ張つて、取られると倍、又その倍と張り續ける、一番單純な方法をやつてるらしい。私も單位は其一割で、鳥渡氣恥しかつたが、今はそんな事を云つて居られないので、自分も先づ其方法で運試しをしようと、心を決めた。

そして暫らく時期を待つてゐた。と、丁度續けさまに、赤ばかりが三度續いて出た。

時分はよしーつと私は思つた。三度も赤が出た後だから、今度は黒が出るだらう。私は先づ十法の眞鍮札を、黒の◇形の記してある大枠内に置いた。

が、一回轉の結果は、又二十七の赤が出た。

今度は黒だらう。今度黒でないにしても、もう五回目だから、やがては出るに違ひない。それに一度賭け初めたものだから、其目を追はなければならない。――私は直ちに二十法を置いた。

が、又三十四の赤が出た。

「メッシウ！ マルケ、ヴオ、ジュウ！」

今度は四十法を置いた。

「リエン、ヌ、ヴア、プリユウ！」

コトリと玉は落ちた。

「數字、十八！ 赤、偶數、エ、前半！」

又赤だ。

今度こそは、もう初めから七回目の、自分が張つてから、四回目だ。八十法、――十法の眞鍮を八ツ、重ねて黒へ置いた。

が、又一の赤が出た！

ふと見ると、敗けて居るのは、私ばかりでは無かつた。私が張り出した前後から、向ひ側の若い紳士も、同じ赤を追ひ出して、是は赤い百法の札を、大分重ねてゐたが、同じやうに取られて、焦つて、又張つてゐた。

私は今度は、百六十法、――百法の赤いのと、十法の眞鍮六つを、並べて置いた。彼もそれと競爭するやうに、其十倍に近いものを其處に置いた。何だか、黒へ張り初めた最初は、もう直き黒が出るだらうと思つた。が、二三度續けて、赤ばかり出ると、今度も又赤が出さうで、堪らない不安がこみ上げて來た。が、併し又押し切つて、此方が黒を止めると、其邊で意氣悪く又黒が出さうで、止すに止されなかつ

た。

「リエン、ヌ、ヴア、プリユウ！」

「數字、九！ 赤、奇數、エ、前半！」

又赤だ。

今度張ると、三百二十法だ。私は殘つてゐる札を、厭な氣持で數へた。そしてもう一度、と思つて、物に憑かれたやうに置いた。と、見ると、向うの男は、思ひ切りよく斷念したのか、ボンヤリ頰杖をついて、賭けるのをよした。彼の前には、もう百法の赤が、二つ三つしか殘つて居なかつた。

「メツシユウ、マルケ、ヴオ、ジユウ！」

「フエト、ヴオ、ジユウ！」

役人は呼んだ。が、彼は其儘賭けずに、殘りの札を取ると、ついと立つて、向うへ行つて了つた。

盤は廻り、珠は落ちた。

私は息を殺して、結果を見守つた。

と、緩く止まつた盤の目の、白い玉が落ちてゐるのは、又、赤い劃線内ではないか！

「數字、三十！ 赤、偶數、エ、後半！」

今度は、私が慘敗して、立ち上らなければならぬ番か！ 私は殘りの金札を數へようとした。が、數へなくても、その數は分つてゐた。もう既に、都合六百四十法取られてゐる譯だ。それと胡麻化された十法を加へて、六百五十法、だから、餘す所は三百五十法な譯だ。

「メツシユウ、マルケ、ヴオ、ジユウ！」

役人の聲に交る鼻聲が、嘲るやうに響く。私は何だか、カーツと頭が鳴つた。――もう、取られた金の多寡ではなかつた。それは諦めやうに依つては、僅かだ。が、何か併しそれに附隨した敗け目の氣持が、私の背中に油汗を流させた。――ぢつと、私は堪へて、最後の殘つた三百五十法を、眼を瞑る思ひで、再び黒へ置いた。

「リエン、ヌ、ヴア、プリユウ！」

ほんとに、もう駄目だ、と言ふ氣がした。そして盤を覗くに堪へなかつた。

と、續いて、役人の鼻聲が響いた。

「數字、二十六！ 黒、偶數、エ、後半！」

私はホッと息を吐いた。そして、其時ばかりは、顏が硬はるのを意識し乍ら、努めて笑顏を浮べて、役人が熊手の先で押して寄越す三百五十法を、蘇る思ひで受け取つた。

受け取り乍ら、併し六百四十法張れば、元通り取り戻せたのだのに、と、後悔した。が、換錢はなし、現金で張れば、役人が直ぐ臺上

で換へて呉れるのも分つてゐるが、それだけの勇氣がなかつたのだ。——畢竟なるに、是も萬里の外にある旅鳥のせいだが、博奕度胸の無いのにも、自分乍ら烏渡情け無く感じたり、それでもまア是だけ戻つて來たゞけ、儲けものだ、と思ひ直したり。……さすがに私の手は、そんな萬感に少し戰へてゐるやうだつた。

さうなると、もう其臺に居て、張り續ける勇氣は無かつた。

それで烏渡耻しかつたが、やつと殘つた七百法をポケットに入れると、立上つた。——都合三百法の敗けで濟んだ譯だ。考へて見ると、僅かばかりの敗だが、併し持つてゐた換札凡てを張り盡した時の感じは、破産に瀕してゐる實業家の氣持と、さう大して變らないやうなものだつた。手にも、ねつとり油汗が出てゐた。

臺を離れると、何となく吻とした。そして成程、賭博と云ふものは、敗けが込んで來ると、衞生に害がある、と考へられた。が、又、何となく異常な出來事を經て、切り抜けて來たやうな、蒼白い興奮が殘つてゐて、何か戰績を語りたいやうな快味も無いでは無かつた。

私は、又、ミユミットの廣間の方へ戻つて來た。

と、通りがかりに、ふと見ると、一人のベエレ帽を冠つた、小さな日本人が、目の前に大分赤い札を積んで、熱心に張つてゐる。——よく見ると、ヴイル・フランシに下宿してゐる、矢張り竹添君の友人で、奈良の豪家の山川君だつた。

丁度彼は、彼の張つた「十二數張り」が當つて、三倍になつて返つて來る所だつた。

「……おい、君、どうです？」私はそつと肩を叩いた。

山川君は、近眼鏡の底から、烏渡睨め付けるやうな眼で、私を見返つたが、微に笑つた。

「あゝ、貴方ですか、今、烏渡勝つてます。——今日はきつと貴方がたに、此處で會ふやうな氣がしてゐましたよ。一人ですか。」

「いや、皆、向うでやつてます。」

「どうです景氣は？」

「僕は今、向うで一人でやつてゐたんだが、烏渡やられました。皆はどうだか、是から見に行く所です。」

「さうですか。そんなら僕も、向うへ行つて見ませう。」

「少しでも勝つてるなら、さうし給へ。長くヘバリついてゐると、結局敗ける。少し勝つたら立つ癖を付けないと、勝が殘りませんよ。」

私は、敗けてゐる癖に、そんな事を云つた。勝つて巧みによす。それが賭博の要諦だ位は、私も知つてゐた。そして勝つても、對人賭博だと、なか〳〵勝ち逃げは出來ないが、此處は對手が國家的役所、乃至は國家的會社なのだから、關ひやしない。

「さうですな。── 僕は是で三百法ばかり勝つた譯かな。一時は大分敗けてたんだけれど。……」

さう云つて山川君は、馴れた手付で、金札を取り上げ、その中の十法の模錢を二つほど、近くの役人にポン〱と投げ與へると、「難有うございます、」と云ふ言葉を後に立上つた。

山川君は、私達より大分前から、ニイスの隣りのヴイル・フランシと云ふ海港へ、繪の勉強がてら避寒に來てゐるのだが、又此のモンテ・カルロの山へ上つて來たのにも、一日位の長があつた。そして彼は、私たちが後にニースを去つて、伊太利の方へ廻つた後まで、ヴイル・フランシで勉强してゐて、孤軍奮鬪、よく私の代りにカジノを征服し、結局は少し敗けたらしいが、私にその研究の結果を、可なり精細に傳へて吳れた。彼は勿論佛蘭西語が相應に達者なのと、身體が小さい異邦人たる爲に、役人などからも大變可愛がられて、幾多のカジノ挿話を、私に漏らして吳れた仲間だ。──その挿話の一二は、後に書かう。

山川君と、最初の台へ戻つて見ると、益田君と宮田君とは、今、當つて居る最中だつた。

「どうだい、景氣は？」私は又同じ事を尋ねた。

「今、少し勝ちなんだがね。」

益田君も、やゝ蒼白く興奮して、稍も勝機を逸すまいと、卓子を見張り乍ら答へた。

「今日は益田さん、迚も當りなのよ。」傍に見てゐた妻も說明した。「先刻なんぞは不思議な位「十二數」が當つたわ。」

それは三十六の數を十二宛に分け、一から十二、十三から二十四、二十五から三十六の上中下の中、一つに賭けて其數の中が出れば、本金共に三倍になつて歸つて來るから、調子よく當ると、割合に適宜で面白い賭け方だつた。そして大抵の人は、それをやるのが多かつた。

次の「廻し」が初まつた。

今度は宮田君も、「縱の欄」で當つて、──それらの賭け方は、後に說明しよう。──三倍になつたやうだつた。

と、宮田君が立つて、賭けてゐる横の、一人の老婦人が其換錢を取らうとした。

「セタ、モア、マダム！」（それは僕んですよ）

宮田君が、低いけれど、嚴しい聲で云つた。

老婦人は顏を赤めもせず、何か二言三言、ブツ〱云つたが、役人が直ぐ此のムツシユのだと云つたので、無事に賭錢は宮田君の手へ收まつた。

「是でロイツ二度目なんだぜ。餘り失敬だから云つてやつた。」宮田君

が日本語で、さう說明した。

目の皮のたるんだ、黑い着物の老婦人で、此の年恰好の慾張り婆が、カジノの中には、隨分多かつた。殊にその老婦人は、殆んど常習犯らしく、其後も他の卓子で、屢々行き會はしたが、鳥渡此方の賭札を、取り込まないで置いたりすると、其婆が自分のゝやうに、胡麻化して取るらしかつた。――又、その賭け札の間違ひは、時々惡意のない同志の間でも起つた。と、それは卓子の中央の、廻し役と並んでゐる見張り役と、端に居る役人が、適宜に裁くのが常だつた。

益田君と宮田君の當りを見ると、私も又再び勇を皷して、やりたくなつた。

どうせ敗け序でだ。今度は一本槍で、第一回の初志を貫徹して見よう、と思つた。即ち又今日も、同じ數へ三十六回、當る迄張つて見ようと決心した。

前の人の手帖を見ると、どうやら今日も又、二十四が出てゐないやうだ。が、今日こそは出るだらう。數も飽く迄最初を追ふ事にした。

私はポンと、眞鍮の換錢を二十四の數の上に置いた。

今度は、さう焦らなかつた。一回、二回、三回と取られた。が、五回取られて、六回目にコトリと落ちた玉は、廻轉が緩んで數が讀めるやうになると、何と、二十四らしいではないか!

「あら、二十四よ。出たわ。」妻が目聡くさう云つた。

「數字二十四! 黑、偶數ニ後半!」

其宣告を、私は初めて夢のやうな思ひで聞いた。

中央の役人が、熊手を伸ばした。そして其内側へ、赤い百法の換札をポン、ポン、ポンと三つと、眞鍮のを六ッ投げ入れて、手際よく改めて揃へると、私の方へズーッと押して寄越した。一本槍が當ると、さすがに卓子中の眼は、その賭け手に集る。私もやゝ面目を施して、――前に三十六回取られた事なぞは、オクビにも出さない顏付で、さも當然の事らしく、それを受取ると、其中の十法札を三つ、私の近く、卓子の端にゐた役人へ、氣前よくチップに投げてやつた。

「メッシ、ボーク!」

彼は特に大聲でさう云ふと、その換錢を取つて、卓子の端に設けたチップ入れの穴へ、それをトン〳〵と叩き入れた。――いゝ氣持だつた。三十六回と六回、都合四十二回賭けて、やつと元金に近いだけ取戻した。否、まだ六回分六十法は損をしてゐるに係らず、其取つた一割に近いものを投げ出す、此の素人の博奕打は、正に祝福されてあらねばならなかつた。

次の「廻し」が初まつた。

私は餘威を驅つて、今度はもう一回、數字の一を狙はうと思つた。

それは、今日まだ其卓子で、割りに出ない數だつたのと、前に當つた後で、イの一番の緣起を擔いだのだつた。私は例の眞鍮錢を取つて、「數字一！」と呼び乍ら、其枠の方へ投げた。

が、不幸な事には、其一の數のある枠は、私の立つてゐる端からは、一番遠い、卓子の中央に近い所にあつた。私の札は、狙ひを外れて、枠の外の零の所へ滑つた。

中央にゐた役人が、私の札を熊手の先で抑へると、それを零の枠内へ、正しく置き直し乍ら、「此處でいゝのか？」と佛蘭西語で聞いたらしかつた。

私は勿論、佛蘭西語は出來ない。が、其時、言葉に少しでも確信があるならば、いや、又もう少し何かに自信があるならば、「數字、一」と一言云へばいゝのだつた。が、それが何となく、云へないやうな氣がした。それに又枠を滑つて、零へ行つたのは、今度零が出る天意かも知れない、と思つた。――又實際よく零は出た。（これは零が目につくのかも知れない）。――で、私は、只、默つて點頭いた。（何と、是が異邦人の悲哀よ）。

廻轉は初められた。

「リエン、ヌ、ヴア、プリユウ！」

そして、コトリと落ちた玉は？

「數字、一！　赤、奇數、前半！」ではないか。

「あらア！」妻が小さな聲を擧げた。

「畜生！」私も小さく叫んだ。

「たアんだ！」見てゐた宮田君と徐田君が、口を揃へて云つた。「一へ直させればいゝのに！」

これが運命だ。――私には、何かそんな氣がした。口惜しいやうな、併し、事實は當つたんだから、勝つたやうな、又不運が二倍されたやうな、複雜な氣持だつた。

が、それで氣折れがして、もう此邊でよす時だと云ふ氣になつた。

「……どうだ。一と先づ出ようか。」

皆も疲れてゐた。そして、相應に勝つてゐたので、それに同意した。

徐田君は二三百法勝つてゐた。宮田君も百法以上勝つてゐた。初陣で、しかも十法單位でやつたにしては、好成績も上の部だ。山川君は、賭けやうも大きいだけ、もう少し勝つてゐるらしかつた。私も、後のアン・プランが當つたゞけ、氣持は少くとも勝つたやうになつてゐた。

皆は上機嫌だつた。上機嫌で、前のカフエ・ド・パリへ入り、それからタクシーを呼んで、ニースへ歸つた。――勝つた金高などは、も

う何處かへ飛んで了つてゐた。が、日當が出れば、それでいゝとしなければならない。

三　研究

併し私は、何となく滿足が出來なかつた。まだ敗けた記憶が、濃くコビリついてゐて、それから常住坐臥「山」の事ばかりが氣になつた。畜生！　何とかしてあの「山」を、征服してやりたい。どうかして尠くとも、あのルレットをマスターして見たい。……

ふと私は、あゝ云ふ公の機關があつて、あんなに大つぴらに、數年に亘つてカジノが開かれて居る以上、あの勝負に關しては、何か尠くとも研究された方法、所謂定石があるに違ひないと思つた。

どうせ相手が、お盆のやうな器械の事だから、必勝法と云ふやうなものは、絶對にないにしても、又數理から考へて見ても、親が三十七分の一の其又半分だけは、尠くとも有利に出來てゐるのだから、子は何時か必ず敗けるにしても、其間に、何か「よりよき方法」が研究されてない法はない。そしてその「定石」を知る事は、此の勝負に對する第一常識でなければならない。其處から出發しなくては、たゞ漫然たる運氣を試すに過ぎない。

私は、元來、あらゆる勝負に關して、定石主義者だつた。不幸にして碁は知らず、將棋も定石を「會得」する迄には、餘りに六ケ敷くて至らなかつたが、併し、大抵の室内遊戯などは、その普通の「素人のレヴェル」迄達するために、定石めいたものを尠くとも「知る」のが凡て上達の秘訣と考へてゐた。ゲエムは定石から、スポーツはフオームから入るのが、理論的にも、一番捷徑だ。――さう思つた私は、早速、近くの本屋に驅けつけて、英文で書いたルレットの定石書を探した。本屋は、私たちがそれ迄宿つてゐた、オテル・アングレテエル・エ・ブレターニュの裏の、コアン・ド・ニイスと云ふのが、一番英書が豐富だつた。

行つて見ると、果して、其ルーレットの定石と云ふのは、隨分澤山あつた。それは佛蘭西語のなら、何處へ行つても、鳥渡したお土産屋に迄、嚴重に封入した秘傳書が、可なり高い値段で、賣られてゐた。――聞けば、モナコ公國内では、その賣買が公けには禁止されてゐるとの事だが、自由な佛蘭西の此處ら邊では、十數種も類似のものが、發賣頒布されてゐるらしかつた。それは大抵同じだが、いづれも、秘法らしく嚴封してあつた。

私は、止むなく英語の本を、二三種買つた。そして宿へ歸ると、早速椅子の中に沈み込んで、その研究に耽つた。

本の名は「親の費用で暮したモンテ・カルロの十日間。」「モンテ・カ

トロ、逸話及び遊戯法。」「ルーレット及びトランテ・キヤラント。」

それから、是は後に見付けたのだが、驚くべき事には、毎週、ラ・ルビユウ・デユ・モンテカルロ（モンテ・カルロ評論」と云ふ小雜誌が、季節中は發刊されてゐて、それにはカジノの或る卓子の、——例へばNo.IIの——一週間の出た目が、悉く詳細に記録されてゐて、そして其何曜日には、何數が何回、一週間の統計は何回と云ふやうに、すつかり載せてあるから、研究の材料には事缺きはしない。

以下、私がそれらに依つて、研究し、會得し、そして實驗し、又更に見聞したところを、詳細に物語らう。

人は、此の殺人的不景氣の最中に、長々と西洋賭博の話でもあるまい、と云ふかも知れない。が、併し、是もあの歐羅巴文明の、羅典文化の一つの黑子だ。好惡は暫く措き、或ひは他山の石として、或ひは己れの鑑として、見るもの、次に說き明すを聞きねかし。

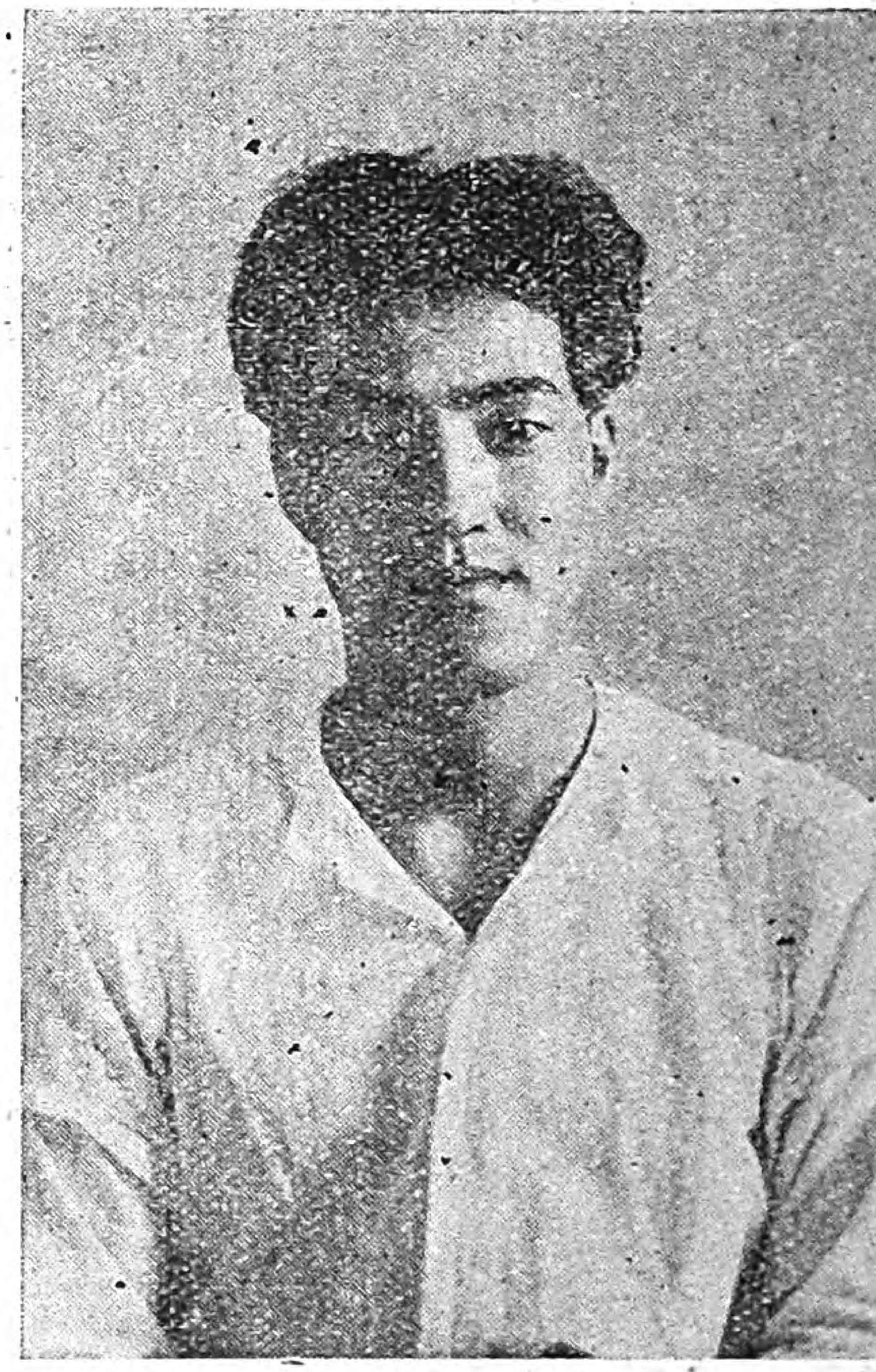
（以下、豫定の紙數を過ぎたから、四、モンテ・カルロの歷史。五、古今の挿話。六、最も面白き方法。七、私の成績等は次號に廻す。乞諒。昭五・四・九——筆者。）

「耽羅漫筆」正誤及び補遺

安倍能成

拙稿耽羅漫筆は題目の通り一個の漫筆に過ぎず、固より學術的價値を要求するものではないが、事實には成るべく誤を傳へないことを期した。然るに活字となつて見るとそこに一つの重大な誤を氣付いたから訂正して置きたい。それは漢拏山の副成火山のことをマルといふと書いたが、これは全く記憶の誤である。それはマル（朝鮮語で馬の意）でなくてオルムと呼ばれて居る。オルムには岳といふ漢字があててある。何故此等の山をオルムと呼ぶかについては定說はない樣であるが、私と同行した加藤灌覺氏が土地の人に聞いた所によると、オルム（朝鮮語で氷の意）は全く氷といふ意味から來たので、此等の小死火山の火口には冬氷が出來る、それを切り出す所といふ意味から來たのであり、岳と呼ばれるのは皆比較的高地にある氷の出來る樣な山ばかりで、海岸近いものは朝鮮の他地方と同じく山又は峯と呼ばれて居るさうである。私の地圖で見た所によると海岸近い所にも岳と呼ばれるものはあるが、しかし高い所にあるものの殆ど總てが岳と呼ばれて居ることも事實である。土地の人の說が眞實であるかも知れない。

次に濟州島で木桶を見ない樣だといつたが、これも加藤氏の說によると事實でないさうである。同氏は濟州島の外に全羅南道及び仁川でも內地の盥の樣な淺い木桶に、例へば牡蠣だとかむきみの樣なものを入れて居るのを見られたさうである。それから慶尙南道の南海島でも水を入れる木桶があり、京城あたりでは肥料を運ぶ木桶もあるさうである。內地の樣に箍をはめた板を寄せて作つた木桶を見ないといふのは、全く私の見聞の狹いのによるのだといふことが分つた。然し內地と違つて濕氣の少い朝鮮の人々は、液體でないものを容れる器としては木桶を用ゐぬらしく、又一般に內地の樣な木桶の使用の少いことは、濟州島についても、朝鮮各道についても略言ひ得られるであらう。（四月四日夜京城にて）



シベリヤ（當選）

大江賢次

一

涯なき雪の曠野。死の沈默のやうな密林。息苦しいほど垂れ下つたセメント色の空。冬――すべてが凍結したシベリヤの黄昏。

バイカル湖の結氷した上を、七台の橇がイルクーツクからアンガラ河を下つて、對岸へ近道を急いでゐた。橇の鈴の音が、凍つた湖の上を鳴り冴えた。馭者は鞭を振り、ときどき「ちよッ、ちよッ」と疲れた馬を勵ますほか、外套の襟に埋めた顔を首垂れ勝に、默つて對岸の遙かな灯を憂鬱な瞳を擧げて眺めた。――灯のある處には人が住んでゐる。ペーチカが燃えて、暖い部屋が俺達を待つてゐるだらう。卓子の上には、この腹の底から凍り切つた俺達を元氣づける火酒があり、熱い珈琲やスープが皿數多く湯氣を立騰らせてゐる。又、俺達の沈んだ灰色の心を、いゝ、しんから和ませてくれる手風琴やギターの音が……あゝまるで、もう、仄かに聽えるやうだ。

酒好きな、一番先頭の橇の馭者は、心の中に火酒の渦を卷かせ、醉つた自分を幻想してみたが、矢張り――本當に飲まねえと不可ねえナ……と悟り顔に、息が凍りついた長い山羊髯を片手で採むやうにすると、突然、妙に腹立たしい氣持が湧いてきたのである。――一體、何處まで行きア、俺達は幸福な氣持で羽根枕に、ぐつすりと鼾がかけるといふンだ?!

二番目の馭者は、急に先頭の馭者が、慈悲と云ふものを湖の底へ捨てたかのやうに、鞭を零下四十度の夜氣に唸らせて、物憑きの如く馬を走らせるのを見ると、情無い氣持になつた。彼は、殺人犯のやう

た獰猛な顔付だが、案外心は優しく涙脆いのだ。馭者仲間でも「顔に似つかねえ馬煩悩」と評判なのである。——可哀さうに馬の奴め、向う岸へ着く迄にぶッ倒れて仕舞やしねえだらうか？　並足でも先頭馬てえものは一倍草臥れるもんだが……チッ、赭鼻の野郎の氣が知れねえ、手前ア全體誰に食はして貰つてやがるんだ？　え、馬ぢやねえか、謂ば手前の阿母の乳房みてえなもんだ！　罰當りめ、いゝ加減に虐めるがいゝや。手前が死んだら、きつと地獄で笞責めだ！　あッ、見てられねえ……可哀さうに、馬の凍つた背は血だらけだらう。

彼は反動的な憤りに燃えた。わざと落付いて、面當てがましく緩るやかな口笛で、鞭を忘れたかのやうにした。先頭の橇は、波形の氷上を躍るやうに、軋みながらぐん／＼離れ進んで行つた。

三番目の馭者は、此奴バクチが三度の食事よりも好きだ。だから痩せた彼の、野狐が嚔をしたやうな貧相な顔は、トランプの王様や女王が眼の先にちらついて、獨り悦に入つたり時たま（ちえ、また敗けた）顔を顰めたりした。彼は火酒を煽ると、胃痙攣を起して吐く癖がある。で、酒代りに熱い舌の爛れるやうな珈琲を、バクチに夢中になると夜つぴてガブガブ喫むのだ。そしてきまつて二三日は昂奮して、夜は寢付かれず充血した眼で、自棄に性急な鍛冶屋の鞴のやうに、膏薬だらけの手風琴を鳴らし立てる。——ふッ、待ちアこの前の埋合せに、うんとポケットが裂けるほど掻き集めてやるんだ！　あの脊眼れのした猶太人が、癇癪を起してひつくり返るのが見てえな！　うう、奴ア金と情死でも仕兼ない世界の屑ッ葉だ。若し、俺ア勝つたら猶太人の顔へ、銀貨を一掴み叩きつけてやらう。奴め、周章てゝ拾ひやがるこッたらうぜ、痛快だ。勝つ！　俺ア勝つてみせるぞ！　勝つたら……手風琴の新しいのを買はう、さうさう、橇の底も修繕して、うん、ぬくい襯衣を買はう。野薔薇の花の刺繍のある……イルクーツクの娘どもが變な眼付をして見れるやうな、氣の利いたやつを買ふとな。そこで、まだ餘つちよる、として今度は……ぶる、ルルルル、おッ寒ウ！

四番目の馭者——彼は空虚だ。彼は何も思つて居ない。何も彼も凍結してゐるのだ。思ふのさへ億く不必要なのである。でも、強ひて何を考へて居るか知らうと云ふ物好きがあれば、彼の西藏の古い龕の中にある佛像のやうな無表情な顔に、短刀を突きつけて迫つてみるがいい。彼は、その時、まだ死ぬのは惜い……と云ふやうな、微かな表情を現はして、煙草に染つた樺色の唇から、瞬きもせず冷然と答へるだらう。「俺かい……俺のウ希望てえのア……誰もウ働かずに食て居られるやうな革命が、なア、あつて欲しいンだけど……」

五番目の馭者は、七人の中で一番若い、喧嘩好きな西比利亞ッ兒で

ある。彼は、些細なまるで針の先で突いた程の事でも、喧嘩腰でぶッかつてゆく若者だ。彼は憤慨屋であり、又晴やかな點でも随一だ。喧嘩だ！ こいつが彼の全人生でもあるかのやうに。だが、恐ッしく反面には泣蟲の場合もあつた。譬へば彼がヂプシー娘に振られた際など、五つか六つの子供のやうに泣くのである。天眞爛漫な泣き方は、案外海千山千の阿婆摺れ女をものにする奇蹟を生むこともあつた。

しかし彼は、今、何を思つてゐるか？ 喧嘩ではない、又戀でも酒でもないのだ。彼は熱心にいんきん田蟲の掻痒のみ念頭に置いて居るのである。これは拳鬪の強いマドロスより穴熊のやうな炭坑夫より、ずつと數倍の苦手であつた。夏から秋、白樺が落葉して曠野が狐色に冬がれても、田虫の奴は悠長に繁殖した。この爲、彼は、胸へしなだれかゝつたクルックの錠前師の娘にも、接吻だけ、それも慌たゞしくして別れたものだ。折角の戀を！ 接吻してゐる間でも、田蟲は激しく痒みを催したのだ。――くそ、奴は、この冬を越さうッて料簡なんだ?! 今は痒みより疼く方が酷く、橇が揺れる度に彼の顔は歪んだ。

六番目の馭者は能の無い男で、彼は今暗い湖上の涯に、チラチラと見える街の灯を眺めると、トルストイの「復活」をチラリと思ひ出して、何だか殊勝な氣に囚つて――「神さま……アーメン」と歯の一本も無い口をモグモグさせて言つた。そして傴僂がゝつた矮軀を縮蝦のやうに曲げ、隣に似ぬ老人じみた咳をつかせた。

「おい隱居、寒いなア」と七番目の、殿の馭者が聲をかけた。

「うウ……」と前の馭者は言つたのみで、悴み切つた掌をガサカサ揉んだ。

――隱居ア胸がわりいだ？ はア、降誕祭まで床に就かにやえいが……全く、肋膜が病みつくこたア、自分が病みついたも同様だもんなあ！

だが、同情は直ぐ燃焼して、彼は、この冬はバイカル湖を往復して稼いで、春になつたら半ば放浪的に、好きなギターを携へて革命後のモスクワへ行つて見よう！……とロマンチックな旅愁を心に描いた。

――全く大したもんだ、……も居ねえし、誰にだつて頭を下げんで、俺どの世界だと威張つて歩けるだ。だから永生きせにやなンねえ。行かう！ 勞働者農民のモスクワへな……俺ア、から馭者なんぞして、革命どころかパルチザンの兄イ共の味方もせんで、宙ぶんらりで暮して居るだが、ふン、これでも白系ぢアねえぜ。赤え、赤え、コンミニストなんだ。だから、俺あレーニン様はお天道様と、晩餐の麺麭だつて同じだと位に思つて尊敬しとるだ。春モスクワへ行つたら、いの一番にレーニン様へ「わが尊敬する同志レニン様あ！」と挨拶しよう。そして……

その時、橇の列がぴたりと停つた。馬は愕いて前の橇へのしかゝり乍ら嘶き、頻りに氷面を足掻いた。
「やい、如何した？　此處ア街ぢあ無えぜ！」
「行けおい！……割れ目に出遭つたンか？」
五番目と殿の馭者とは一緒に呶鳴つた。
「止れ！」不意に、全く不意に、暗い前方で不馴なロシヤ語が響いた。「でないと撃つぞ！」

2

「な、な、何言つてやがンだい！」
氣短な五番目の馭者は、ひらりと飛降りて前方を透した。
二番目も、三番目も萬歳をしてゐる。成程、五名のカーキ色の兵士が、湖の底からでも湧いたやうに、銃を擬してゐるのだ。
「誰だい、畜生！」と五番目は空腹の力の無い聲で威勢を張つた。「どけやい、邪魔立てしねえで……誰だ？」
一歩進み出ると、不氣味な銃口がぴりッと動いて彼を狙つた。
「動くと撃つぞ！」
六番目の馭者は、橇の中へくづ折れるやうにへたばると、顫え乍ら枯枝のやうな掌を組んで「おゝ神さまア……」と鈍く唱へた。
四番目の馭者は、木乃伊のやうに、ぽかんとして、手を擧げるのも忘れてゐる。
「止れッ！　おーい、止るんだ野郎！　でないと撃つぞ！」
知つてか知らないでか、一番の橇は百米も先を、鈴の音も急しく驀地に滑つて行く。……「撃つぞ！　おーい止らんか？」
銃聲が耳を劈いた。一人の兵士が、片膝ついて狙ひ撃つた、が、橇はまだ走つてゐる。頭らしいのが何か判らない母國語で叱咤した。兵士は非常に周章て、咬みついた泥飴を振り離すやうな恰好をすると、再び狙つて撃つた。
鋭い馬の悲鳴。一度後足で棒立になり、ばたりと氷面へ横ッ倒れになつた。
――あ、やられた！……可哀さうに。と二番目の馭者は、碧い眼を瞠き肩を戰かせた。
「馬鹿ッ、馬を撃てと誰が吩咐けた?!」
頭の、小柄な××は、服地と同じい、カーキ色の顔を赭くして、外套の襟の中からへ、、まを罵つた。
「はッ……」と兵士は體をキチンと棒にすると、もぢもぢして水洟を啜り上げた。
「はッぢや無い、早く行つて橇を、、するんだ！」

「はッ」

兵士は走り出した。重い服裝が不自由に鳴つた。乾燥した大陸の空氣に、濕潤地に育つたこの兵士は、喉を痛めて走りながら苦しげに顏を顰め、青い痰を吐き續けた。何と云ふ不恰好な、人を莫迦にした跳だ！……と、つるりと滑つて、思ひッ切り彼は腰骨を氷の上へ叩きつけた。

「馬鹿ッ！　足元に氣をつけろ間拔野郞め！」

恐ッしく口の悪い××は、狼のやうに吼えると得意らしく胸を張つた。「動作活潑にせい！　屁ッぴり腰で、家鴨ぢアあるまいし……抵抗したら撃つてよろしい！」

「手を擧げろ！」ともう一人の兵士は、五番目の馭者の臀部を銃で毆つた。

彼は振返つた、朋輩は？　あ、七番目も何時の間にか萬歳をしてゐるのだ。

「早く擧げろ！　貴樣反抗する氣かア？」と兵士は母國語で言ひ、急に氣付くと覺束無いロシヤ語で（乳呑兒のやうに）言直した。

彼はぴよんと兩手を擧げた。擧げて、口惜しくなつた。——何てえ無禮な奴らだ！　彼は手を下して、正面から罵倒してやり度え、と憤激した。が、待て待て、逆らつてドンとやられるのは損だ、どうせパルチザンか否かを調べる爲だらうから、嫌疑が晴れりやすぐ釋放してくれるに違ひねえ？　と思つた。彼は從順しく、だが不服らしく青年らしい頰の脹らませ方をして、矮小なカーキ色の兵士を睨んだ。

懷中電燈がパッと照された。

「貴樣ら、パルチザンの仲間ぢア無いか？」

銃を擬しながら、疑り深い黒い眼が六人の馭者を圍んだ。

「違ひます！　俺どあイルクーツクの者で、皆馭者です、善良た馭者……」

「分つてゐる、俺の訊くのは、パルチザンか否かつてことだ！」

「パルチザンではありません、旦那！」と七番目が狼狽して強く言つた。「撃たねえで下せえまし、俺どが死にア、嚊や餓鬼ア乾物ンなつちまひますだ。何が旦那、そなえなパルチザンなんか……ふウ、言ふだけでも胸糞が悪いだ！　へえ、善良無垢なロシヤ帝國の馭者でごぜえますだ旦那！」

「つまり、貴樣らア白系だといふのか？」と××は聲を柔らげて言つた。

「へい、旦那あ、左樣でがすとも！」

馭者は手を擧げたまゝ、首だけペコペコとトルコ人形のやうに、器用に叩頭した。「旦那」は効いた。××は彼を信頼した。

——何てえ卑劣な奴だ！——と五番目の若い馭者は、七番目の馭者を横睨みにすると急に瞼が熱く胸が滾り始めて、スル　スルッと涙をヒビれた頰へ傳はらせた。

「貴樣もか？　おいデクの棒！」

へえとか、はいとか言ふのは口惜しいので、彼は「うム………」と低く呻くやうに言つた。

「心い、はつきり吐せッ！」どかんと銃で背骨をどやされて、彼はくたりとたると自棄に大聲で「バ、バルチザンではありませんッ！」と喚くと、涙を舌で舐めてしやくり上げた。

「泣面かくな」と嘲るやうに兵士は笑つた。

と、急に、饑じげに、羊皮を裂くやうな嬰兒の泣聲が、黑い防水布で蔽はれた六番目の橇の中から、兵士達の眉をぴくりと動かせた。

——赤ん坊が居る!?「橇には何が積んであるのか？」

「食糧品でごぜえますだ旦那」

「何々だ？」

「へえ、鮭の燻製と、パン粉と、牛罐と野菜と………」と七番目の馭者は小首を傾げた。

「俺がには牛酪と砂糖とが積んでありますだ」

二番目の馭者に低く言つて嚏した。

「貴樣は？　殘らず隱さず言へ」

「俺でがすか？　俺のア……」と三番目の馭者は、相手のトランプを拔く前の思案に似た言ひ躊躇ひをすると、急に穢らしい笑ひをして

「ひッひッ俺のア酒類でがす！」

「諾し、次は？」

彼はぽかんとしてゐた。人を小馬鹿にしたやうな白痴面が、カーキ色の兵士の癪に觸つた。いきなり毆りつけた！　馭者は、痛いといふ感覺は失つてゐなかつた、彼は、横面を押へて、ペッと血の混つた唾を吐くと「痛え………」と呟いた。

「まだるッこい、何とか吐しやがれ！」

性急な時には、自分に一番親しい使ひ馴れた言葉が出るものだ。兵士は氣付くと、又、たどたどしいロシヤ語に躍起した。

「………俺がのはア、チーズとパン粉とフライ油とウ、それから、……ッと、あのウ、あのウ、馬鈴薯」

「此奴ア拔作だ！」と蔑んだ眼で××は舌を鳴らせると「次の泣ッ面、何を積んで居るか言へ」

「パン粉。腸詰。紅茶。魚の乾物」

彼は、成可く口數尠く、ぶつきら棒に言ふと、鼻をグッグッ詰らせて、痒い股をもぢもぢさせた。——畜生、カーキ色のチョコ兵め！

何てえ侮辱だ　や、野郎……い、い、いんきん！　くそイマイマしい……

六番目の捕虜は、佝僂がかつた短躯を低めると、訊かれぬ先に咳ずきながら、

「俺のア、はア、蜂蜜がちよつぴりと、そ、それから」と吃つて薄紫の唇をへなへた顫はせた。「そ、それからア、女が二人と赤ん坊とでがすだ、へい」だが彼はさも周章てくさつて「そ、それから、あのウ、ミ、ミルクがアち、ちよつぴり……乳が出ねえもんで、へい」と附け加へた。

遥かに、鋭い、重苦しい裂くやうな叫喚が響いた。一同は首を捩ぢた、が、暗くて判然と見えない。不吉な予感が、六人の捕虜の脳裡を掠めた。

「貴様の家内か？」

兵士は防水布をめくると懐中電燈を照らした。

「んやでござえます、イルクーツクの街から、び、び、便乗のウ、客でがすだ」

蒼白い光を浴びて、二人のまだ若いロシヤ婦人が、恐怖と不安の瞳で仰いだ。一人は三十を越した位の、窶れては居るが上品な何処か惹きつけるものがあつた。がつしりとした、爛熟期の酔ぱいやうな魅力が、、、、、兵士の胸を唆つた。螺細工のやうな隠れた蝶、引縮めた容しい唇……二人とも頭巾で頭を包んで居るので、人参色の髪は見えなかつた。もう一人の方はずつと若く、また処女であることは一目見て頷けた。ハチ切れるやうに肥つた胸部の、頬は蒼褪めてはゐるが艶かで、聡明らしい眼な稚い澄んだ瞳の上に、長い睫が可愛く瞬して見えた。裸にしたら、どんなに美しいだらう！

「おい、お前たちは捕虜の言ふ通り客で便乗したのか？」と××は声を荒げて覗き込んだ。二人の女は、ぴつたりと抱き合ふやうにして慄いた。嬰児はヒイヒイ泣いていた。

「ダーシヤ、饑じいんだ、ミルクを呑ませてやりた」と七番目の捕虜が首を伸ばした。

「動くと撃つぞ！」と傍から他の兵士が銅鑼声で威嚇した。

「手を挙げてるのに可哀相だ、縛つた方が安全だ……奴ら縛たらうし」

兵士は命令どほり一人づゝ後手に縛つた。

「××殿、あの捕虜は逆上せて抵抗しましたので、銃床で殴つてやりました」

駈つて来た兵士は、きちんと敬礼をした。

「あの悲鳴がそれか？　それで」

「はツ、へたばつたまゝ、くたりました」

××は女の方へ向いたまゝ

「よろしい、馬は駄目か？　惜しいことをした……おい、ミルクを呑ませてやれ、俺達ア恐くはないよ」と女に言つた。

女は、初めて微かに笑顔を浮べた、そして早口に何か唇を動かした。

「んん？」

「へえ、ミルクが凍つて、呑ませられねえツて言ふのでがす。そりやシベリヤの冬ア寒うがすでなあ！」三番目の馭者は代りに言つて下品に追従笑ひをした。

「お前達は、パルチザンの家内ぢアあるまいな？」

「…………」二人とも默つてゐた。

「おいお客さん、何とか言ひなよ。この兵隊さんの敵の、パルチザンの身内ぢア無えかつてお訊ねだ」

嬰兒を抱いた女は強く首を振つた。

「お前は？」

若い女は、無表情に、電燈の光を目眩しげに仰いだのみである。

「おい、早く言へ！」

「この娘は私の妹です！」突然、腹立たしげに、幾分ヒステリカルに女は言つた。「……啞なんですの……」

耳も遠いんだな？　と兵士は諾し〳〵と頷いた。――可哀さうに、だが啞でもいゝや。

「何處へ何用があつて行くのかね？」

「私達？」……姉のダーシャは、どう答へやうか？　と心の中で迷つた。彼女の夫はパルチザンに這入つて、生きて居るか死んで居るか消息が不明だつた。そして彼女等は、イルクーツクで生活に窮して、着のみ着の儘でチタに確か住んでゐる、彼女の弟（彼は税官吏で、勿論帝國主義者であつた）を頼つて行く途中であつた。革命の爲、弟も如何してゐるか分らなかつた……ダーシャは思ひ切つて「チタの夫の處へ行くのです。夫は、革命前まで彼地で官吏――税官を勤めて居りました。えゝ、大の反ボルシエヴイキなんです！」

「よろしい、ではチタだな。俺達の方で何とかして無事に送り届けてあげやう。チタの何處かね？」

小さい時から、嘘は神を冒瀆するものだと聴かされたダーシャは、暗い氣持に捉はれて溜息つくと、泣き止まぬ嬰兒を揺動るやうにしてあやし乍ら、

「それが、この騷ぎで、何處だか判りませんの」と眉を顰めた。

3

暗い零下四十度のバイカル湖上を、、、された七台の橇が、一人の馭者と一頭の馬とを氷上に殘してひそかに走つた。縛を解かれた馭者は、否が應でも橇に乘つた兵士の言通りに馭さねばならなかつた。馭の無い一台の橇は殿の橇が曳いた。

橇も馬も、そして自分までも、これからカーキ色の兵隊の爲に、、されるのかと思ふと、馭者はどん底へツンのめされたやうだつた。彼等は哀願した、泣いて頼んだ、だがこの小柄なきかぬ氣の兵士達は、頭として肯いて吳れないのだ。それどころか一反抗すると殺しちまふぞ！」と齒を剝いて脅した。

――大した獲物だ！ 橇に食糧品が滿載ときてゐる。その上、ふツ、六人の馭者附だ。おまけに女が二人！ ××は、暗い對岸の灯を眺め乍ら、駐屯地へ歸つたら上官がどう言つて賞めて吳れるだらうか？ ××へ累進すのもこれで早くなり……うへツ、俺にはバイカル湖につて云ふバナ、型の湖ア、飛んだ幸福を摑ませて吳れたもんだ！とほくそ笑んだ。彼は上等の葉卷に火を點けると考へた――、、、、誰よりも、、、、、手えもんだな。

大根足の、山梔で染め上げたやうな色の、弛んだ膚と不恰好な胸の、故鄕に自分を待ち乍ら、惡阻でペッペッと虫酸を吐いて居た二つ年上の妻を想ひ浮べると、××は言ひ知れぬ輕蔑と幻滅を感じた。

――だが、×隊長の甚助め、、、を一目見たら見遁しやしねえンだ。畜生、ちよつぴり髭め糞だあ！「、、の、、は」……やり切れねえな。

「おい、酒を積んだ橇、ウオッカを一罎出してくれ」××は吐き出すやうに言つた。

バクチ好きな馭者は振向くと、

「旦那、止したがようがすぜ、ひッハッ」と喉をしやくつた。

「馬鹿ッ！ 惜しいのか貴樣？」

「ヘッヘッたあに惜しかアございましねえ。でも、旦那の命捨てるのがア惜しいと思つて」

「何ッてやがンだ、そのウオッカにア毒藥が混入してあるンか？」

「滅相も無え旦那！……ウオッカ飮んでえゝ氣持になつて、この寒氣でウトウトしたら最後之介でごぜえますだ」と馭者は仰山らしく手を振つた。「シベリヤおア、その爲おッ死ぬ者ア稀でございましねえだ！」

「何でもいゝ出せと言つたら出せ！」

案の條、××はホカホカ温もつてくると、雪燒のした黑いフライ鍋のやうな顏を俯向けて頻りに酒を始めた。

「旦那ア！……旦那ア！……」と馭者は律義に呼ぶことを忘れなかつ

た。

「おい、俺どにも出せ！」と後の橇から兵士達が低く言つた。

彼等はラッパ呑みに、息もせず煽ると「ルルルルッ、喉が焦げつくやうだア！」と空壜を氷の上へ微塵に叩きつけた。

金屬性を帶びた、碎ける音が快く耳の奥を擽つた。

「旦那ア、俺どにも一雫づゝ相伴させて戴きア、これで、もつと早く着かせることが出來ますだに。喉さばきが良けれア、馬だつて勇みますだで……ヘッ！ ヘッ！」

「狡い奴だ、早く着くンなら皆で一壜のめ。おい、本當に一壜だけだぞ、な、パルチザンの父つあん！」

「緣起でも無え……うヘッ、うヘッ……」

兵士達は、寢て居ても着くだらうと、大きく自分達の絕對威力を信じた。そして微睡んでは馭者に呼び起された。疲れて居るところへ、強烈な酒が全身へ滲つて、何てえ……ふウ……えゝ氣持だあ……「旦那ア！ 寢込むと危ねえだ」えゝうるせえ！ 默つて……け、けつかれ、うう……

鼬みたいな面をして寢込んだカーキ色の兵士を見乍ら、五番目の馭者はムズムズした。彼は、衝動を牽制しようと、又一方に焦つた。橇の積荷には手斧がある！ 湖上で狼に襲はれた時に揮ふ唯一の武器。――ぐわンと、、、それぎりだ、だが、これとて團結が必要である。一人で五人を、、、ことは不可能だ、ロシヤの革命だつて、、、、、おア出來つこ無え。しかし皆が俺に贊成して吳れるだらうか？ 贊成するにしても咄嗟に？……駄目だ、矢張り俺獨りがいゝんだ！

彼は手斧を探り乍ら、兵士の寢顏を何遍も窺つた。斧の柄が觸れた！ ……彼の呼吸は荒く急しくはづんで、全身が小刻みに顫えた。鋭い眼差は燐光を放つかの如く煌き、尖つた鷲鼻の孔は殺氣に脹らみ、顳顬はズキズキ搏動し……今だ！ 一思ひに！ 今だ！ と唆け促すのである。

突如、、、、、。次の瞬間、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。若い馭者は毛の擦切れた外套へ、、、、、、、カッと逆上せて次の橇を奪はうとした。

「ア！ アッ！ アウウウ！ ア！……」

六番目の橇から、啞娘が素早く見付けて立上ると喚きたてた。

――畜生ッ！ と若い馭者は睨み返すと、斧を探つたまゝ橇から飛び降りた。

他の兵士はバネ仕掛の如く愕いて起上つた。

「、、、、られた！」と唸るやうに四番目の橇から兵士が叫んだ。

「やツひでえ……」六番目の馭者は、蛙のやうな不恰好さで橇の中へへたばつた。「……神さまア……」

橇は止つた、と、若い馭者は四番目、、、へ躍りかゝつた。兵士は銃を摸したが餘り接近して居るので、急に銃を逆さに振り上げた。馭者の一撃は手許が狂つて、橇の縁を伐り裂いた。

「うぬ、野郎ツ！」……銃床が唸つた。

馭者は身を翻して避けると、銃身を力任せに斧で毆りつけた。手が痺れた、、、、、、、、、、、、兵士は空手になると魔に似た奇聲を擧げた。

銃聲がした、馭者はのけぞりに倒れて傷口を押へた。二番目と三番目の橇から、兵士が敏捷く飛降りると走り寄つた。馭者は倒れた儘、油斷した兵士の向う脛を毆りつけた。兵士はバタリと氷上にへたばつて呻いた。と、一人が銃床で馭者の仰向いた顔面を一撃した。顔は、恰も鑵を潰したやうに碎かれた。四番目の橇の兵士も折れた銃を拾ひ把ると、倒れた兵士へしやがみ込んで「大丈夫か？　おい、しつかりせい！」と早口に言つた。兵士は長靴だつたので、直ぐ立上ると跛を曳き乍ら近付くと、

「くそ、何てえひどい奴だ！」と憎悪に充ちた顔で蹴りつけ、更にそれでも氣が濟まぬとみえ、腰から牛蒡劍を抜くと銃に附けて、グサツと串刺しに貫いた。不氣味な音がして粘ッこい血が氷面へ擴がつた。

馬は、この慘劇を目のあたり見て、氷面を足掻くと寂々と嘶いた。

「もう駄目だ……」と、、、、、、だらりとなつた手の脈を診て言つた。、、、、、。忠實に働く奴だつたがなア……」

「やい貴様ら、反抗するとこれだぞ！」

一人の兵士が、荒々しく怒號して睨み廻した。森と五人の馭者は石像のやうに硬くなつた。

危く難を脱れた兵士は、銃劍でグサツ、グサツと馭者の屍を所嫌はず突刺して、腹癒せをすると高く快げに笑つた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。微妙な、死の聯關からつたのか……

馭者達は、暗い氷上で、どちらへともつかずに胸に十字を切つた。

「有難う、有難う」と××は啞娘の肩を撫でゝ（娘はビクッと身を退いて姉へ縋みついた）禮を繰返した。「お蔭で助かつた……有難う！」

「××殿、他の奴らも一緒に殺つけちまつたらどうです？」

「うム……」

馭者達は泣き出した。氷上に跪いて憐みを乞うた。

「まあ待て！」——敗者達の顏は輝いた——「さう無闇に、、けちまふのはいかん。今後……、、しにくゝなるからな！」

橇の列は再び一人の屍を置捨てゝ動き始めた。振返ると、灰白い氷上に、斑點のやうに屍が次第に小さく、軈て見えなくなつた。

——奴ア神經痛でイルクーツクに寢てゐる、たつた獨りの阿母に孝行してゐたツけ……と六番目の敗者は心に呟くと首垂れた。

4

カーキ色のパルチザン討伐隊は、尼港事件以來極度に憤激して、シベリヤ鐵道を守つて出兵は増加され戰線は伸びた。彼等はパルチザンと云ふ野獸の群（人間では無い？）の壞滅を期して、執拗に砲撃を、、、、バイカル湖畔まで追つたのである。——ロシヤは無頼漢どもに政治を掠奪されて、、、、、、、されてしまつた。惡い思想患者がウヨウヨして、仕事もせずに怠けて、善良素朴な國民を煽て上げたのだ。ロシヤは滅びた、それは上下一致しないからだ！ パルチザンもその無頼漢の一味だ。人道の敵である。奴等を討伐することは東亞の平和の爲のみならず、ひいては世界人類の幸福の爲でなくて何であらう。憎むべきシベリヤの蛇蝎を滅ぼせ！ 光輝ある歷史を穢す忌むべき暴徒を葬れよ！ 赤い思想を驅逐せよ！

兵士達はこれを信じた。堅く信じてゐた。雪のシベリヤで神出鬼沒のパルチザンと鬪ふことは、苦しいことではあるが彼等は兎に角或るものを信じてゐた。——「パルチザンは惡い奴である、だから討伐するンだ」と。

パルチザンは、彼等のやうに服裝など一定してゐないのだ。便衣隊で、どれがどれやら薩張り判別出來なかつた。武器もタカの知れたものだし、人數も較べものにならぬ程少かつた。正面からの戰鬪なら一たまりもなく壞滅出來るが、ちやんとそれを呑込んでゐて不意討ちをしたり、散々に出沒して掻攫ひ、巧みに赤化宣傳をする事を忘れなかつた。

派遣軍の參謀本部では、パルチザンの襲撃を惧れるよりも、宣傳に依つて兵士が、、するのを虞れた。、、、、、、、、、、、、、。さるで惡性な傳染病の防疫のやうに。パルチザンは、鬪ふことよりもビラを撒く方が多い位であつた。

兵士達には、ロシアの、、騷ぎがどんなものであるか判らなかつた。中には、何處の國民でも物識りぶる者が居るやうに、彼は、さも見て來たかの如く言ふのだつた。仕事せんで怠けた奴が、無頼漢を唆いて金持や、、を追ッ拂つたンだ。今に彼奴んどは仲間爭ひをして、ほら、俺が國の、歷史で習つたらう？ 戰國時代みてえに亂れちまふの

がオチだあ！」

黒龍江の流域地方に、パルチザンは跳梁してゐた。廣漠たるシベリヤの各地に、獨立したパルチザンの群が蜂起した。仕末が悪かつた。だから派遣軍では各支隊に別れて、それぞれ手柄話を誇らうと息捲いた。バイカル湖畔まで來た支隊は、全線の最左翼であつたのである。

支隊の駐屯本部は、湖畔の小さい驛のあるさびれた街を抱いた、白樺と落葉松の丘陵の蒼ぼけた寺院であつた。寺院は、三ヶ月前にはパルチザンの一群が掠奪して、强硬に反抗した僧侶を銃殺し、ニコライ堂のあらゆる聖像も装飾品も焼き棄て、がらん洞の寺院が急拵への城廓に成り變り、此處で一大集團を作つて白衛軍の背後を討つて、モスクワの赤衛軍へ合流してやらうと企てたのである。だが彼等の目論見は、カーキ色の精鋭の波濤の爲、央ばにして潰走の憂目をみなければならなかつた。彼等は憤つた――俺達の饑と死を彷徨つて鎖を斷ち切らうとするのに、掻擾すなんて餘計なおせつかいだ！ 邪魔だてするならこつちもこつちだ！ 彼等は山脈の中へ、密林の奥へ、曠野の涯へと散つて窃に連絡を取つて狙つた。そして虚を衝き、肉迫し、巧みに宣傳を忘れなかつた。斥候戰が處々で起つた。橇の徴發が急屆だつた。又燃料と食糧品と。無暗に突進することは危険であつた。絶えず各支隊と連絡を取る必要がある……獨立はダイナマイトを抱いて火事場へ行くやうなものだ。

七臺の橇が、食糧品を滿載した上××附で、、、、、本部へ辿り着いた時、粉雪が、湖からまともに吹きつける烈風で、息詰るやうに襲つてゐた。雪にまみれた歩哨が、微動するのも億劫らしく縮み込んで、直立の儘凍死したかのやうに橇を無表情に見送つた。

「ほう、大手柄をやり居つたな！」

四五人の××が、ムツとするやうなペーチカの傍で、ドロツプスを頰張り乍ら地圖を圍んでゐたが、一齊に首を振り向けて××を賞讃した。――「異常はなかつたか？」

「はツ……」と敬禮をすると、××は悄然と首垂れた――、、、、、、一人殺しました……」

「パルチザンに狙撃されたのか？」

「さうであります」大變な返事をしたものだと彼は鳥渡悪びれた、が、さう言つて良かつたと直ぐ悟つた。でも、敵は極少數で鏖殺しにしました」と更に、、、、、、して「……に、その他湖上及び附近の沿岸地帶には、敵影は見當りません。取者近名は善良で白系だと申して、パルチザンの暴虐を憎んで居ります。で、念の爲縛つて監視をつけて居ります」

「さうか、油斷ならないからな。S支隊のやうに、化けたパルチザン

の馭者の道案内で、窮地に陥れられる例もあるからなア……御苦勞だつた、皆風邪や凍傷に罹らぬやうに氣を附けてやつてくれ」

「あ、それから、橇に二人のロシヤ婦人が便乘して、チタの夫の處へ行くと申して居ります。それで、一緒に連れて參りました」

「ぢア馭者とその婦人達を鳥渡取調べるから連れて來い」

馭者達は、銃殺でも宣告されはしないか？と顫えた。婦人――ダーシヤは案外しつかりと、人怯ぢ癖の妹の手を引いて、炊事當番から貰つた暖いミルクに見入つた、亜麻色をした産毛の嬰兒を抱いて、居並ぶ將校のカーキ色の顏を眺め廻した。

取調べは簡單に終つた。彼等と彼女達は胸を撫で下して、裝飾の掠ぎ奪られた、がらん洞の寺院の廊下を監視兵に跟いて歩つた。どの室も、廊下も、矮小なカーキ色の兵士と武器で充ちてゐた。兵士の中からは、猥褻な言葉がダーシヤと妹に浴びせられた。が、彼女等には勿論解らない異國語であつた。

「典型的なロシヤ婦人だ……美しい」と一人の禿げた××が呟いた、が彼は、直ぐ不覺を誤魔化さうと「實際ロシヤ國民は氣の毒だ。可哀さうぢアないか……恐るべきは思想だな！」

「勿論貴官は……」と傍から狡い眼をしたちよびり髭の××がつゝいた。「、、、、、、、、、、、でせう？」

「思想國難の秋、正義の劍を把りて起つ神州の健兒か……久しく詩も作らんからなあ」と彼は素知らぬ態度で腕を組み、天井のない寺院の屋根裏を睨んだ。

「唖だつて……可哀さうだな。いゝ肉附だ、まつたく」と眼鏡の將校が感心した。

「いくら美人でも、、、、、、、、、からなア！」

「おい、しつかりし給へ、大した御熱心で。今頃ア、、、、、、、噂してるぜ！」

「うわつはつ！　はつ！　はつ！」

橇の荷は運び込まれ、定例を破つて酒が少量づゝ配られた。炊事當番は氷結した酒を溶き、肴に罐詰を公平に分配した。俄に、寺院内は賑かな談笑と、元氣な軍歌が湧いた。××達は、士氣を鼓舞し、慰勞する點に於て甚大なる効果のあるだらうことを信じた。窓の外ではごオう……バラバラツと吹雪が風巻いた。

××達には、再びロシヤ婦人の噂が始つた。、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、」、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、」、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、」、。

「よオ！　よオ、、、、、、、！」

「カチユーシヤ可愛いやア別れの辛さア……」

空閣組は盛んに冷かした。

寺院の奥詰りの、僧侶の居間だつたらしい質素な室――絨氈は剝ぎ去られ、毀れた硝子窓は板を打ちつけて、仄明るい蠟燭の灯が粗末な木製の寢床の傍に瞬いてゐた。ダーシヤとワーリヤ（姉の妹）は、眞ン中に嬰兒を挾んで、獅嚙み合ふやうにして毛布にくるまつてゐた。ワーリヤは微かに寢息をたてて居たが、ダーシヤは未だ眠つてはゐなかつた。

ノックの音がした。扉が開いた……ダーシヤは横はつた儘首だけ擡げて、赭ら顔の××を不審さうに見た。

「騷がしくて寢つかれないだらう？」と覺束無げにロシヤ語で近づいた。「うむ、ペーチカがすつかり冷えちよる（××は母國語で呟いたが、直ぐにニヤリと卷煙草に火を點けてロシヤ語で）煙草のまない？」

「えゝ、あの、のみませんから……」

「あ、さうだ、皆に隱してチーズを持つて來てあげたよ。葡萄酒も持つて來たかつたが、、共の眼が四方で光つちよるでなア……」

××は、ポケツトからチーズの包みを出した。

「まあ有難う、ワーリヤが――妹が大好きですの、親切に有難うございます」とダーシヤは受取つた。

と、手首を、硬い××の手ががつしりと握ると、火酒に火照つた口が急に彼女の耳に近々と囁いた……「ダーシヤ、、、、？　、、、、、……、、、、、、ね、、、、……、、、、、？　、、、、、、」

ダーシヤは嬰兒を抱寄せると、手を引込めやうとした、が、強く握り締めてゐる。彼女は、ワーリヤが目を覺さぬやうに氣遣ひ乍ら、靜かに、哀願を籠めて言つた。「、、、、……」

××は性急にもう、、、、いた。ダーシヤは受取つたチーズの包みを、嬰兒を抱いてゐた手で××に突きつけた。「……いけません、これ、お返しします」

――、、ごかしよりも、最初ッから、、、方がよかつたな、と××は後悔して、、、を變へやうとすると、ノックの音が響いた。彼は慳いてチーズをポケツトへ捩ぢ込んで、手を離すと彼女を睨みつけ……直ぐ廻れ右をして這入つて來た二人の××へ、、をした。××はほろ醉つてゐたが、いかにも軍人らしく取澄して、××には（邪魔た失せろ！）突慳貪な一瞥を與へると、、、の方へ悠然と近づいた。

「ダーシヤ、お寢み」と××はバツが惡さうに出て行つた。――ささか、××に告げ口はせんだらうな？

彼は、、、、、、、……が、よく聽き取れない。××は躍氣にな

つた。

××は嚴しげに、もう一度取調べる必要があるから、誰か一人別室へ行つて貰ひ度いと前置して、

「本官は、それで、貴女を調べるやうになつて居る。穩順しく素直にさへして貰へば、簡單に濟むのだから」と、、××はダーシヤに言含めた。

「あの……ワーリヤは不具なんですから、訊問したつて駄目ですし……」

幾分不安げに彼女は××を凝視めた。

「いや、その……婦人でも油斷がならないので、共産黨の宣傳ビラやレポや、その他スパイの秘密書類を取調べる必要上、身體檢査を形式までに濟ますのです」とちよつぴり髭の××が慌てゝ說明した。

「では、こゝで、ワーリヤと一緒にして下さい」

「それがその、各人別々にする規則であり、且又、、、、、、でしてな」××はわざとらしい咳拂ひをして、不器用に煙草に染つたハンカチで鼻をかんだ。

ダーシヤは頷いた。××は顏を見合せて眼がものを言つた……だが、軍人らしく！

嬰兒を抱いたダーシヤが、××に跟いて扉を出ると、××は火塊を摘み上げた時のやうに、吃驚して腰をキンと伸ばし、踊るやうにして、、、、、、取縮つた。

「お前は」と××は顎をしやくつた「歩哨をしてゐるのかね？」

「はツ…………」

××は、皮肉に一瞥を投げると、タンゴでも踊るやうな腰付で、ダーシヤを連れて廊下の彼方へ曲つた。

「ちえ！　人を馬鹿ンしてら……厭ンなつちまふなあ」と××は、、、、、に對する憤懣を、自棄に拳骨で自分の毬栗頭へ酬いたのである。

と、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

××は棒立になつた。

扉が開いて、ハンカチで引掻かれた頰を押へた中尉が首を出した。

××は、、を——ヤツ、俺はまだ此處に立つてゐたのか!?——した。

「おう××、丁度いゝとこだ、來て手傳つてくれ……ピストルがある！」

5

怪事件が出來した。倉庫にある、、、、、、、、したのである。

いくら、、が居眠つて居たにせよ、本部の出入口は一つしか無いの

た。とするならば、一體、、、はナザレの奇蹟同樣に消えたか？

幸にして××達は、マルクス主義を嫌惡しても唯物論者であつた！

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。蜘蛛の巣だらけで、パルチザンが叩ッ込んだらしい聖像の首が、裏なり瓢簞のやうに轉げてゐた。

、、、、の、、長は、熊の胃をしやぶつたやうな顔で、もう一度、綿密に、、、、を調べた、が、矢張り足らないのである。敗者は一人一人嚴重に取調べられた。一人の支那人敗者は、「、、、、は盗りませんが、誰かの靴下と慰問袋（これはハガキとタオルだつたので、ハガキは棄てた）を盗りました」と餘計なことを白狀した。それだけだつた。

結局、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、（のであらう）と斷定された。本當ならば直ちに、、、、、、、へ屆けるべきだが、支隊の名譽に關することであるから、暫く保留して取扱すすべを凝議したのである。

雪は深くはないが、寒氣は硝子の破片で擦り切るやうに嚴しく、あらゆる間隙をめがけて咬みついた。烈風が、バイカル湖上の火山灰のやうな粉雪を捲き上げて、丘の支隊本部へこオう……と襲ひかゝつた。大氣は眞空かと思はれる程乾燥し、凍傷と呼吸器病が蔓延つた。乏しい野菜の節約は壞血病を生んだ。ホームシックに罹つた兵士は「馬鹿ッ、軍人が！」と、られた。

二度目の怪事件は一週間程經つて、珍しく吹雪が歇んだ深夜に起つた。駐屯した寺院へ落花のごとくビラが撒かれたのである。だが見廻りの不寢番が見付けて誰何した。犯人は脱兎の如く逃走して、倉庫の屋根から柵を越えやうと白樺の枝へ傳ひ上つた。研ぎ澄した鎌のやうな三日月が、吹溜めの雪の上へ蒼白い光を投げてゐた。犯人は、太い白樺のつんつるてんに氷結した幹で滑つて焦つた。不寢番は飛びついて引摺り落さうとした。犯人は片手でピストルを續け樣に撃つた。彈は外れた……今度は不寢番が撃つた。肩の關節を撃ち碎かれて、犯人はドサッと落ちた。不寢番は蟾のやうに飛びつくと腕を捩ぢ上げ、續け樣に顔を毆りつけてぐにやりとさせた。

非常呼集のラッパ。

……だが××達は兵士の外出を禁じて、廊下や庭に撒かれたビラを一枚も殘さず下士に拾ひ集めさせると、ペーチカに投げ入れたのである。兵士達は不思議さうな顔付で、汗と垢に汚れた冷たい武裝姿で顫え乍ら、ヒソヒソと臆測を逞しうした。

鼻血だらけの顔を、吹溜めの雪になすりつけると、ゾロゾロ不寢番は昂奮して引摺つた。——太え奴だ！ 彼は氣絶した犯人を月光に照

して見た。ロシヤ人では無い！　やつぱりカーキ色の蟲だ。どこか大陸的な風貌が——此奴ヨボだな？　と直感させた。

取調べは深更に拘らず開始され、柔道三段の、將棊の駒のやうな××が活を入れると、氣附にウイスキーを口へ注ぎ込んだ。犯人——若い鮮人は、酒を嗜まぬらしく酷く咽んだ。寒いとみえて歯をガチガチ鳴らせ、大蒜臭い咳をつかせて俯向いた。

——何といふしぶとい獸だ?!

石のごとく、啞のやうに宥めすかし、脅し、毆り、蹴り、鞭打ち、又優しくあらゆる訊問の手管を盡したが、彼はまるで聲帶と云ふものを持たずに生れたかのやうだつた。啞では無いか？　とまで一時は疑つた、耳が鋭敏らしいのをみると、飽迄も緘默を押通す意地らしかつた。彼がパルチザンの一味であるか、又モスクワの共產黨から派遣されたものか、それとも彼自身が獨計の行爲であるか、そしてパルチザンに煽動られて金儲けに決行したものか、皆目判らないのである。

死刑——銃殺！　宣告されると、青年は蒼褪めた顏を擧げ、激動を强ひて抑壓して幽かに微笑みながら淋しげに頷いた。

「おい、どうだ、一切を白狀したら直ぐ釋放してやるが。」

薄紫に腫れた彼の顏を、××達は鳴を鎭めて凝視めたが、反應は……ちよれた蓬髪の頭を横に振つたのみであつた。——全く言語道斷な圖太い野郎だ！　と訊問役の××はイマイマしげに舌打をして匙を投げた。……夜明け方、寢靜まつた兵士達は、丘の中腹の方に當つて、湖の底から響くやうな銃聲を夢現に聽いた。

——一日も早く奴等を壞滅しないと、增々殖えるばかりだ、と支隊の幹部は憂ひ焦つた。……春が來る！　黑龍江の雪解水のやうに、炭坑から、工場から、田野から、新しいパルチザンが氾濫することだらう。この酷寒の間に、行動の比較的鈍い不活潑な燻りを揉み消さう！

——俺達だつて、早く凱旋して年金のついた勳章が戴きたいんだ！

長い、明けることを忘れたかのやうな夜が續いた。稀に太陽が鈍い光を湖上に投げたが、直ぐ灰色の雲が意地穢い姑婆のやうに遮つた。旱魃と革命の動亂とで飢餓に瀕した農民が——否すべてのシベリヤの住民は、掠奪し合ひ、死物狂ひに醜く（そんな上品なことを言つてたら死んぢまふのだ！）食慾と暖を攝るため爭つた。何處へ——それは分らない、誰獨り目標は無いのだ、のに飢ゑた彼等の群は、蟻のやうに犇き合つて雪の曠野を漂泊ひ始めた。

……………何でも、南の國では、俺達のために雪の降らぬ土地の肥えた、肥料無しの播き放題で收穫できる廣え土地を、ロハで貸してくれるさうぢや。セレンガ河を溯つて、蒙古の砂ツ原を横切つてもう一息西藏の丘を越せば、そのビルマとかいふ有難い國へ着くンぢやさうり

な。行かう！　荷厄だと途中でへたばるぞ、手ぶらで行つても蒙古や西藏の國では、誰でも喇嘛教の短いお經を唱えて口號めば、山羊のお乳や黍粉の練團子ぐらゐくれて、宿もしてくれるといの！

誰が言觸らしたか判らない。が、彼等の群は、橇に家族を乘せ、橇の無い者はとぼとぼ歩き、この途方圖もない移住に飢ゑた胸を躍らせた。バイカル湖の氷上を渡つて、セレンガ河の畔をセレンギンスクへ、四方八方から白い雪原を黒いリボンのやうに、續いて蒙古へ辿り着かぬ間に、行倒れて了ふであらう自分達の運命を、暗示する如く「流浪の群集」は急いだ。

「移住の群は益々殖えるばかりです、は、セレンガ河は人で埋つて、もう食べる物が無いので奪ひ合つとります。私共は、極力移住の不可能を說いてやりました、が、とても、とても肯かないんです。まるで物憑きのやうに、こつちの老婆心を邪推して私達に不穏な行動さへ示すぢやアありませんか！」

　偵察から歸つた童顏の××は、双眼鏡のサックと挾んで吊した地圖を、肩から外しながら仰山さうに言つた。

「惡いンです、パルチザンの奴等が、その群集を煽動したらしいのです……やりきれませんよ。私達の姿を見ると、一同は口々に罵りましてね、え、さうです、群集心理つて恐しいもんだ！　はあ、寒いもんだから、見附け次第に家屋を掠奪して、何でも身に纏ひ貪り食つて、おまけに火を放つてぐるりを圍んで暖を採る。そして火が燃え盡きると又旅を續けるッていふ譯です……まつたく無茶です、見ちや居られませんぞ！」

「困つたもんだなあ」と支隊長の××は、仁丹髭を捻つて「これッて云ふのも、過激思想が齎したボロぢやからのオ！」と空嘯いた。

「油斷も隙もあつたもんぢやありません、シベリヤ鐵道沿線は、部下に晝夜警戒させとりますが、それでも群集は枕木を拔いて燃料にしやうとするのです。は、昨夜發見すると、、しました」

「よしよし、刑罰はみせしめに嚴しく取締らんと不可んからのウ。……すると、パルチザン達は、セレンガ河を中心に集中して居る樣子だな？」

「群集の中ぢや、移住を斷念して奴等に加入する者も尠くないやうですが」

「うむ、充分偵察してくれ、早晩それらを一掃する必要があるのだからのウ。よろしく頼む！」

　偵察隊は七名、三臺の橇に分乘して灰汁の氾濫したやうな雪の黃昏を、白樺の密林を縱斷してセレンガ河へ向つた。右にはバイカル湖が鼠色に何處までも續き、寒々と裸の白樺の木の間に仄見えた。風は凪

いでゐた。静かに、屍の心臓のやうに、重苦しく、すべてが石の如く黙し、凝乎と氷結した荒削りな黄昏。右は冬眠した山脈が白ちやけて、粉雪を篩ひ撒かうと垂れたセメント色の空を支へてゐる。擦り切れた外套の襟に深々と顔を埋めて、兵士達は、ふと、故郷の炉燵を心に描いた。橇は浅い谿へ密林を抜けて傾斜を滑つた。谿は涸れて、放牧の水飼場らしい澤地から、橇が近づくとドツと鴉の群が飛上つた。馬は愕いて前脚を揃へて立つた。橇の兵士――黒い木乃伊――は、がくりと揺れて故郷の炉燵から現實に還つた。澤地には、石塊のやうな野兎の屍が、貪婪な鴉の嘴でも持餘す程凍結して横はつてゐた。

暗くなつた。

時計はまだ五時である。軈て風が出るだらう。凍傷に塗りつけた顔の油薬が不快だ。そして誰も、いんきんが爛れて疼き始めた。乾燥した大氣で、カタル症に罹つた鼻は嗅覺を失ひ、陰欝な大陸の生活は知覺すら捥ぎ取つた……橇は進む、涯しなく進む。――一體俺たちは、、、、、、、、、、、、、？　、、、、？　、、、、？　分らない、何が何だか、よく考へれば考へるだけ、薩張り分らない。分らない。分らない。

飢と死に追はれて移住するシベリヤの群衆は憐れだ。だが、彼等を憐むより先に、おゝ、、、、、、憐れな人間であらう。何物にか――或る巨大なマンモースのやうな彼奴に、まんまと傀儡られてゐる人形は誰だ？　憐れな人形は？

6

「うワ、うワ……くウ、う……うワツ」

「おいどうしたア？　氣味のわりい！」と傍の兵士が覗き込んだ。

「う……うワツ！……」堅パンを喉へ閊えさせた×××は、鶏のやうに胸を張り首を伸縮させて、ギクギクした。

「ふツ、餘り周章てるからだ、ほら」龜屈んだ拳で背を叩いてやりながら「……唾でよく捏ねてから呑まんからだぞ。下つたかア？」

「う……おツ、ひでえ目ン遭つたど」と兵士は苦笑して涙を拭いた。

闇の底を、橇の上で皆は堅パンを噛つた。……それぎり、言葉は途切れた。霰が、風の咆哮と共に、散彈の如く頬をこツ酷く擲きつける。馬の結んだ尾に氷柱が伸びた。橇はよく轉覆した。投げ出されて……凍結した大地は白い鋭利な牙で噛みついた。

「××殿、あれは何でごわせう？」

不意に、酒樽の底を叩くやうな訛り聲が真中の橇からした。

――國の女房アもう生んだかしら？　男かな、女かなア？　男なら彌吉、女ならミツヱにせいと言つといたが。……これで三人目か、ふ

ウ小作は辛い、が俺も辛い。今度の出兵で恩給年限が縮まつたわけだ、あいつが目當だ、早う軍服を脱いで家の手助けせにやならん……
「よつぽど太い火だ！」――「××殿ッ！」
××はハッとして顏を擧げた。
小高い丘陵の彼方の空。熟れたトマトのやうに燒けた闇空。火事だ！　あの空の下には焔がある。巨大な渦巻ける焔が！　赤い、紅い、朱い、赧い、赭い、血のやうな焔が。渾沌の底から燃えて盛り上る、確乎たる新興ロシヤの群衆の焔。――ロシヤと俺の國、俺の國とロシヤ。パルチザンと俺達、俺達とパルチザン。、、、、と、、、、、、、、、と、、、、。自由なプロレタリヤと、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、と自由なプロレ……タリ……焔だ！
焔だ！　燃えろ！　燃えろ！　吼えなんぜシベリヤの衆！……そこで俺は？　俺は、橇に乘つてゐる。橇は、走つてゐる、ひイ、ふウ、みイ、三台走つてゐる。何處へ？　分らん。何しに？　知らん。御苦勞さんで？　分らん、知らん、いらんお世話だ！……
「××殿、あつこへ向けませうか、橇？」
――（御苦勞さんで？）分らん、知らん、いらんお世……
「××殿ッ！」
「馬鹿ッ！」と彼は、心の隅の揶揄者へ一喝した。……「いらんお世話だ！」
兵士は首を縮めた。――？　？
「ん？　何だつて？」と××はこの時初めて訊いた。
「…………」一同は默つてゐた。
「おい皆パンを齧つたか？　ム、許し。……風邪ひくなよ。ほう、よう、よく燃えちよるなア！」
「はあ……」と氣のない返事をした。
「（俺の頭は混亂してゐた、と××は反省した）……混亂してゐた」と、橇の片側が何かの上に乘つて、ぐらりと急角度に××は傾いた。次の瞬間、彼は凍へた大地に體を投げつけてゐた。痛い！――だが、これは混亂の燃ちア無いんだ！
「うわッはつ、はつ、はつ、はつ！」とへたばつた體、痛む體を揺動つて哄笑した。
吊り込まれて誰かゞ笑つた、が、直ぐ屏で聳いて燒けた彼方の空を眺めた。
「誰だ、笑つた奴は？　誰が笑へと言つた！」
森と、橇の黑い塊は答へない。
××は不機嫌に、兩掌へホオ……と息をかけて橇へ乘つた。活潑に、橇は動き始めた。氷と相擦れて蛇が産をする時の呻きに似た、冒

の髓へ滲み込むやうな音を立てた。鈴は皆捲り取られてあつた。――俺は呶鳴つた、叱りつけた。俺は、何故、腹を立てたのか？　俺は何てえ、我儘勝手な暴君だらう。怒る權利？　、、と、、……そのレツテルが權利か？　情無い人間の傲慢……いや俺は呶鳴つてもいゝんだ！　正しいんだ！　俺は、、、、、である！……「あツ」

再び強く投げ出されて、××は泣出し度いやうな頭を抱へた。何と云ふ慘酷な橇――いや俺の人生だらう、俺の人生からへまを差引けば一體何が殘るといふのだ？　泣け？　ふッ……顰めた慘めな顏を解いて、彼は倒れたまま燒けた空を眺めた。と、ぴよくんと立上つた。――俺は、偵察隊長である！

小山を越えた。燒けた空（あの下には焰がある！）は、又もう一うねり、向うの山の上だ。進め、進め、橇――俺を乘せた人生。巨大なマンモースが山の彼方に蹲つて、盛に紅蓮の焰を吐いてゐるンだ。又山を越えた。馬は喘いだ。風風風風……彼は散彈だ！　針礫だ！　畜生。燒けた空は虹のやうに、又もう一つ向うの山――でない密林の彼方だ。全體……（と××は考へた）シベリヤの野狐はそんなに老獪なのかしら？　橇は怯えたやうに走つた。深い溪谷が彼等を呑んだ。懷中電燈の淡い光で午前三時が確められた。この溪谷はセレンガ河の一枝流だらう、と頗る曖昧な參謀本部の地圖を覗いて、不安げに一同は肯定した。小憩。

「おい焚火がしたいな」と××は大地に叩られた腰を爺のやうにして呟いた。

懷中電燈が、闇を螢のやうに游いだ。それをヂッと凝視めながら、××は惡寒に身震ひした。――俺は、欲を言へば靜養しないといけないンだが……後頭の髓に血が一杯發生たやうに、痒く、痛く、惱く、不快だ。そして心臟は獅子狂ひで、眼窩がズキズキ疼き、鼻は凍風にそぎ盜られてのつぺりとして――本當にさうかな？　と彼は眞面目に馴れた掌で撫でた。鼻は、感覺を失つて假死してゐる。顏の爪だ！　え、何だつて、顏の爪だア？　全くだ、ふふふ……とすれば、滿更俺の腕も、こんな奇拔な形容詞を創り出すンだから、狂つてゐるのぢア無えな。彼は安堵を得て獨り微笑むともう一度「顏の爪」を撫でた。と、淡い煙が彼の顏先を掠めて、濕つた枯木が燃えついた。

焰を抱くやうにして、皆は戰友の髯に埋つた光る眼の顏を珍しげに眺めた。

「おい成吉思汗は源義經だらうか？」

××の奇問に誰も答へなかつた。で、彼も默り込んだ。

「なあ、この中でチョンガーは誰々だい？」

と暫くしてから彼は眺め遣した。
「俺、さうであるまし××殿」と百姓出らしい兵士が愚鈍な面で言つた。
「私は一度貰ひました、厭ンなつて戻しました」と一人の童顔の兵士は羞んで言ふと、瞳を硬くして……「終り！」
「終りは蛇足だ」と××は噴き出した。
「××、嬶が間男したンか？」
「阿呆ぬかせ！　女つて厭なもんだあ、俺ア獵りの方がえゝぞオ……
……」
「皆ア幾歳の時に女の味知つたら？　誰とどんなキッカケで、どうしたか順ぐりに言へな。」
四人の兵士は、俄に瞳を輝かしてクスッス妙な笑ひ方をして「お前先言へ」「お前が先だ」「恥しいもん……」「ほら言へ」と互ひに肩を小突き合つた。
「左の端から……お前××ツて云つたな？　××から言へな」
「はア、どうも……」と××は荒れた厚い唇を舐めてゐたが「俺ア遊廓へ檢査の年に行きました」
「ど偉い辛抱強い奴だな」と××は笑つた。「次のお前ア？」
「私ウ……そのウ、私はア……どうもまづいなア」と職人らしい兵士は、外套の頭巾の上から頭を掻いた。
「早く、後が急くンだ！」
「ダイコクなんで、はア」
「ダイコク？　大黒様ア男だッぞ、おい！」
童顔に隣の兵士が言つた。
「馬鹿言へイ、ダイコクつてお寺の、ほら、坊主の嬶のことさ、ちえ！」
皆ドッと笑つた。彼が静になつた。
「幾歳の時だ？　お前ア寺へ小僧に行つとつたんか？」
「んや××殿、私はア十四の春から左官の弟子入りしましたです。へい、十七の時、寺の壁塗りに行つて……住職ア××の本山へ行つて留守で、へい。まづいやどうも話すのア」
「言へ〳〵××！」——「如かせるなヤイ」
「若いダイコクなんで、え、三人働きに行つとりましたです。私に、庫裏の漬物樽の重石を取つて呉れろつて頼むんで行きますと」
「いきなり抱きついたンか？　よオ、よオ」
「冷かすのアよせ。へい、皆本堂の内壁を塗つとりました。春でぽかぽかぬくい日で、私は正直に漬物樽の傍へ行くと、それでない、此方の樽だつて奥の部屋へ引張り込みますです」

「お前その時、ハハアと悟つたゞらう？」

「なアに旦那——んや××殿、十七ですもの本當に奧にもあるのかと思つとりましたです」と唾しぶきを飛ばし乍ら、彼は温まつたズボンの股をポリポリ掻いた。「……てな譯で、それから後も住職さんが留守になるてえと、別に塗り所も無えのに、私を雇つて呉れるのでして、ヘツ、ヘツ、ヘツ！」

「うまくやつてら……よつぽど好きだつたんだな、畜生」

「今度は俺が話してやらう、俺は十九の秋同窓の女學生とくツついたんだ」……本當は今の女房と、土くさい、粗野で無茶な野合をしたのだ。そして孕んだので仕方無しに夫婦になつたのである。——だが、つくり話の方が面白いからな。と××は出まかせにいきさつを喋つた。

皆は（女學生？　ひやア運がえゝなあ！）片唾を呑んだ。焚火はジクジク燻つた。

と、その時、谿の崖上に當つて馬の嘶きが遥かに聽えた。一同はぎくツとして仰いだ、が粉雪と闇に視野を塗りつぶされて見えない。橇馬は、闇の彼方を慕つて高く嘶いた。——パルチザン？　焚火を踏み消すと、一同は銃を把つた。「裝塡しとけ！」と××は低く命じた。

……暫く經つたが何事もない。

「崖の樹に風が唸つたんだらう」

橇は、しかし、反對に迂回して行くことに決められた。間も無く落葉松の矮林が可成廣く迎へた。横斷することは到底不可能だ。橇は更に矮林に添うて大迂回して走つた。曉が近かつた。

セメント雪が一しきり襲ひかかつた。矮林を離れると、非常にゆつたりとした緩い傾斜が東へ展け、一帶に枯草が風にざわめいた。この二千米突弱の傾斜は、急に深く地層を刳つた狹い川に盡きてゐた。兵士達は曉の寒氣に顫え乍ら、峽の底に仄白く流れた瀬音に首を傾げたのである。——どうして渉るだア？　相當の水深と高い斷崖。氷結しない程の急瀬。

又二露里餘り、峽の崖上を沿うて溯つた。石塊が多く、それが曉の薄明をとほして髑髏のやうに無氣味で、やゝもすると橇を覆さうと呪ひ、縮み込んだ黒い塊——兵士を斷崖の底へ投げ落さうと齒を剝いた。彼等は冷汗を掻き、難路コースの無事を祈つた。幸に雪は次第に旋毛を和げて、地明りが朝を兆し晦冥は褪せた。まだ空は燒けてゐる……痩せた野兎が枯草の中から飛び出した。又急に、移住民の喚聲かと思つて橇を停めると、鴉の群が饑じさうに空高く鳴き過ぎた。何か知ら皆は緊張した。

地圖は、約三千米突でセレンガ河が東南に在ることを示した。峽は

次第に淺くなり、それに伴つて瀬も淺くなつてきた。崖は傾斜に變り、橇は容易く水邊へ降り着くことが出來た。馬は貪るやうに水を飲み、歯が痺れるとみえて一口飲むと仰向くやうにして首を振つた。

「あまり澤山飲ませるなよ。腹痛を起すからな」と××は注意した。兵士は、橇の底から鹽を出して馬に舐めさせた。

　對岸の傾斜を登り詰めると、白樺の疎な林があつて、通り拔けると淺い谿間がゝつた窪地に、珍らしくも小部落が貧しげに塊り合つて見えた。樹の間から透して眺めても、皆移住したものか人ツ氣が無く、寂然と鎭り返つてゐる。だが小人數で部落へ近づくことは危險だ。迂回——橇は忍びやかにコースを變更して進んだ。

「やツ人が死んでら!」

　白樺の根元に、蹲つたまゝボロボロの衣類を着た乞食のやうな老婆が、土を二三寸掘つて死んでゐた。枯枝のやうな手……伸びた爪に土が黒々と、そしてガクリと垂れた顎……口から土まみれの白い草の根が覗き、老衰と飢餓が凍死へ——いや、彼女の最も幸福であらう天國へ導いたのだ。

「まるで石塊みていだ! ほら、カンカン鳴つちよる……」と兵士は屍を銃床で小突いた。

　林が盡きると共に彼等は丘の上に出た。

「おう、××殿! セレンガ河があ!」

先頭の兵士は昂奮して叫んだ。

　朝。空は重く低いが朝の光が高原がゝつた丘陵地に射し、丘の麓を隈揚に蜒つたセレンガ河の氷面が、燻銀のやうに廣々と視野を展げた。その氷上を、もう溯つて行く蟻のやうな飢ゑた群集が、橇が、家畜が疎に見え、兩岸の風を避けた地點——至る所に狼を惧れて夜だけ屯した人々が、もう歩く勇氣も挫けたかの如く蹲つて居る。双眼鏡に映る悲慘なパノラマ……此處まで連れて來た家畜類を、惜み乍らも屠り食つた殘骸が、氷上に散らばつてゐた。行斃れがゴロゴロ腐つた馬鈴薯のやうに、其處此處に散在してゐる。昨夜の火は一露里餘り下流の、製粉所らしい建物が彼等の喉を撈る犧牲になつたことも判つた。河の上には、鴉が低々と飛交うて、家畜の殘骸や人の屍を執拗に啄み、不吉な聲で空虚に鳴いた。

　——もう少し經ちや、人間の屍を奪ひ合つて喰ふだらう……ふと、××の双眼鏡のレンズに、セレンガ河の上に巨大なマンモースが現はれ、悠々と逃げ惑ふ群集を踏み潰すのではないか?!——幻影だ! 彼は双眼鏡を眸から離して眺めた。おゝマンモース! 確かに巨大な……彼は、瞳を強く擦つて見直した。だが、矢張りマンモースが灰色の巨軀で暴虐を極めてゐるのだ!——俺の眼の錯覺だ!?……おや、俄

に、逃げ惑つてゐた群集が、皆踵を返して徒手空拳でマンモースを襲ひ始めたぞ。痛快だア！ ふウ、やツつけてくれ偉いぞウ、何て元勇氣だ！ そら、敗けるで無えぞシベリヤの衆。お前方ア強いだあ！……さうだ、皆が力を合せてぶツからんせ！ 踏み躙られ、潰されても後から後から新手が襲つた。男も、女も、老人も、子供も。……ウヌ、ウヌ、そこだ、もう一息の辛抱だ！ 根氣だア！ ウヌ、くそ、敗けるで無えぞ……ひやア、マンモースが倒れた！ ウウウウ勝つたあ！

瞬間、×××はぼろりと双眼鏡を取落した。彼は發狂したのである。どきんと立つて、底氣味の悪い空洞な聲で笑ひ續けた。

「偉いぞ！ 勝つたア、どえらいぞシベリヤの衆……わつはつはつはつ……太いマンモースが、ふツふツふツ、ごろりと……うわつ、はつはつ……萬歳ツ、よオ、ひツ、ひツ、ひツ、うへツ、うへツ……突撃ツ、こゝはアお國をウ何百里……はつはつはつ！」

7

一羽の禿鷹が、冬晴れの空を悠長に大圓圏を描きながら飛翔してゐる。

禿鷹は、幅廣で逞しく擴げた儘で、太く短い頸の上——物凄く曲つた嘴と、重々しい光りを放つ圓い峻烈な眼を持つ四角い頭が、始終下界を注視し、鋭い爪は獲物を挑んでゐる。

曠野、森林、湖、河……薄鼠色がゝつたシベリヤの雪原へ、鈍い冬日を受けて禿鷹の影が走る。暖いと日南へ兎や野鳩が出て來る、彼はそれを物色してゐるのだ。彼の瞰下した地上は、大まかに單調で、靜寂と沈默が澱んでゐる。彼は今食慾を充たすことより他は念頭に無いのである。だが、地上は欠伸の出るほど靜かではない、では何が起りつゝあるか？

禿鷹は、輪を描き乍ら次第に降りてきて愕いた。谿間の日南に、二百名餘りのパルチザンの集團が、天幕を中心にして蠢いて居るのだ。……彼に、革命とパルチザンとカーキ色の派遣兵との繼がりが理解できれば、直く頷いたであらうが彼は不審と不可解で一杯で、驚異と不安と好奇心に駆られて益々低く降りた。

久闊の日和で、皆日南に出て外套を敷いて寢轉んでゐた。食を燻らして雜談と議論に耽る者。無口に、背を曲げて外套の裂目を繕ふ者。熱心に錆びたモーゼル銃を磨く者。トランプの連中、谿の流れでゴリゴリひよつとこ面をして髭を剃る者。橇に釘を打ちつける者。何か洗濯する者。傳令、斥候に出る者。ギターを彈く者。馬を愛撫する者。炊事係の人。少し離れて太陽へいんきん田虫の日光療法をやつてゐる

者。謄寫版のレポを讀む者……彼等の服裝は、顔と同じく各自に異つてゐた。並なものさへ誰獨り着て居ない、皆ボロボロだ。貧しい悲慘な境遇が、環境が創り上げた彼等の容貌は、どれも一癖ありげである。坑夫、百姓、職工、土方、鍛冶工、船頭……殆んど筋肉勞働者だ。彼等は無骨で赤裸々で、よく僅かな事で口穢く罵り合ひ喧嘩もした。だが集團行動と彼等のイデオロギーとに對しては、恐ろッしく眞劍に忠實に、昂奮して素直に秩序を守つた。言葉や外觀は荒ッぽいが、氣は案外優しく、無邪氣で、涙脆かつた。

今、天幕の前では、勇敢な同志が盜んで戻つた、、、、、、、、を据ゑて、物珍しげに覗いたり撫でたり叩いてみたりしてゐた。「此奴、、、の孫だな」と仔細らしげに一人のパルチザンは腕組をした。

「だが、、、に較べりや親爺だあ！　何てえ名だい奴さんは？」

「ふッふッ、だから百姓は世間へ出されねえや。こいつア、、、ッてえんだ、分つたか同志！」

「、、、なら知つて居ただ俺ア……」

「折角盜んでも、、、が無えでな……無用の長物だあ。もう一度忍び込んで、、、と、、をどつさり盜んで來いよ、なあおい」

繃帶で頭を卷いたのが横から言つた。

「此奴が一つ有りア百人力だがなあ！」

「やい喧しい、誰奴だ呑氣に下手くそなギターを彈きやがるのア？」と坑夫上りの獰猛な面をしたのが振返つて呶鳴つた。「ちえ、歯がキイキイすらあ、畜生！」

「モスクワぢや、俺どの同志は、、、で市街戰をやつたんださうな。なあおい、盜んだ、、、、、、、、、、、へお見舞申してえな。」

痛快だがなあ、かう、ドドドドドッと」

「同志さうムキになつても、、が無えんだ」

「や、間抜め、『火酒』といへば『洋盃』てえ諺があるンぢやねえか。へまな野郎だ」

「洋盃なしでもラッパ呑みが出來らあ！」とルバーシカを繕つてゐるのが頓狂に言つた。

一同はドッと笑つた。——異議無し！

禿鷹は愕いて急に谿の上へ舞ひ上つた。彼は又新しい異常を地上に發見した。目眩い雪原を、馬に乘つたパルチザンが三名、驀地に本隊へ歸つて來るのだ。彼等は谿への傾斜を驅け下りた、一同は愕いて銃を把つたが同志と分ると立上つて迎へた。

「大變だ、グラコフが捕まつちまつた！」と泡を嚙んだ馬から降りると、向ふ歯の抜けた斥候の一人が昂奮して言つた。

「えつ、グラコフが？　どうして親愛なる同志を取戻さんで歸つて

來たんだ？」

　隊長は眼を怒らして詰つた。

「それが……それが、同志諸君、俺ア……」と彼は泣乍ら「それが、出來なかつたんだ……」

「さうでがす同志、全く。グラコフを見殺しにするには忍びなかつたでがす、だが、俺どア、はア、十露里も行つた處で――密林の中でがした、不意に敵の斥候と出會つたもんで、まあ聞いて下つせ、敵ア十名近くで、こつちア四名だ、十發と四發だもん倍半分でもきかねえでがせう、幹を楯に騰ち合ひました」

若い、百姓出のパルチザンの斥候が、手眞似をして陳述した。

「するてえと、グラコフは急に……」と先程のが焦つて口を挾んだ。

「默つとれお前ア。そこで俺どは退却の必要を感じたでがす。考へて下せえ、十發と四發だもん！　敵ア直ぐ追撃して來た、俺どア走りやした、盲滅法。するてえと、不意にグラコフ――えい、奴が一番殿でがした――の馬めが躓いて、その途端に奴ア落馬したでがす。俺どが氣付いて、走り乍ら振向いた時ア、三人の敵に組伏せられたところでがした」

「同志、お前の言つた事ア、正確だ！」と最初のが拳で涙を横拭ひした。

「殘念だあ……これでも、俺達の行爲が卑怯だと云ふのかア？」

　左腕に擦過傷を受けて、同僚に繃帶をして貰ひ乍ら、もう一人の斥候が悲壯に脣をひン曲げた。

「よろしい、君達の行動は止を得なかつた事だと認める。(と隊長は握手して)……貴重な同志を失つて俺達は痛切だ……おい諸君、俺達はぢつとしちア居られない。同志を取戻さう！　奴は殺されるだらう、夜襲だ、夜襲だ、一刻も早く！」

　谿間の露營地は俄に色めき立ち、戰鬪準備にパルチザン達は右往左往した。……灰鴉は、彼等の存在を忘れたかの如く、飢ゑた胃を充たすべくまだ地上を物色しながら圓を描いて居る。

　寺院の一室では、捕虜のパルチザンを訊問最中であつた。パルチザンの主力は幾程か？　現在どの地點に居るか？　機密を訊かれても彼は頑として口を結び、空色の瞳は冷靜に、すべてを觀念した態度をカーキ色の××は持餘した。

…………珍しい西日が、雪の反射で室内を明るくした。ダーシヤとワーリヤは、せつせとカーキ色の服の裂目や外套を繕つてゐた。下痢で痩せた乳兒は、氷の馬鈴薯のやうに萎びて眠つてゐた。姉妹で働き乍ら、話すことの出來ない佗しさともどかしさが、ダーシヤを憂鬱に蝕ませた。彼女は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、啞の妹

を絞め殺し、乳兒もさうし、自殺しようと迄決心したのである。だが思ひ止つた。――死ぬことぐらゐ不幸な事は無い！　より強く生きることが幸福であり、私達にとつては復讐でもある！　、、、、、、女性の、一番大切なものではないのだ……革命後のさまざまな試練が、彼女の人生觀を根柢から覆した。消極的で宗教に中毒し、因習と傳統に絡まれ、舊い道德の桎梏に囚はれて居たロシヤの婦人――ダーシヤは勇敢にすべての繩を斷ち切つた。諦めるのではない、改めて新しい魂を築いたのだ。母なるソヴエット露西亞の爲に！　世界の貧しき人々の爲に！　彼女はカーキ色の被服類を縫はせられ乍ら、次第に厖大な愛に目覺めてきたのである。彼女は働いた、――この、カーキ色の、プロレタリヤ達が風邪をひかぬやうに……そして、、、、、、、、、、、、、、、、！

その時、急に寺院の内外がざわめき始め、三百名餘りの兵士が忙しげに廊下を去來し、橇の滑り軋む音、馬の嘶き、靴音、武器のガチヤつく音、甲高い吠えるやうな下士の號令が雜然と響いて來た。出動準備かしら？　とダーシヤは耳を澄した。すると扉が開いて、ちよつぴり髭の××が這入つて來た。彼女は警戒して睨むやうに注視した。

「ダーシヤ、いよいよお別れだ、支隊は三十露里ほど奧地へ移ることに決つたので、急に出動準備なんだ。何分、パルチザンがあのあたりに根據を持つて暴れてる樣子でね」と××は微笑み乍ら、ワーリヤへも會釋した。

ワーリヤはそつぽを向いて俯いた。

「××、私達はどうして呉れるのです？」

「その件で來たのだよ、そんなに何も、他の事で、來たんぢやないから安心したまへ、はつ！　はつ！……貴女方は、チタへ送つてあげます」

「さう……」

今更の、白衞軍に加はつて居るだらう弟の處へ、尋ねて行く愚かさ無意義さをダーシヤは痛感した。

「軍用列車の出發時刻がいくらも無いから、早く用意をする必要がありますよ。ぢア成可く早く……」と××はそゝくさに出て行つた。

用意、と云つても彼女達は此儘立上りさへすればいゝのだ。――いよいよチタへ行くのだ、行つたら私は働かう！　働き甲斐のある仕事へ全身を献げやう！　母なるソヴエット露西亞のために。

落日が、淡茜色に雪の丘を染め、バイカル湖にも鈍い微光を投げてゐた。出動部隊は、蜿蜒と連つて徐々に動いて行く。馬――橇――人――馬――橇――人……ダーシヤは子を抱き乍ら、黙々と寺院から伸びて行く黑い長い繩を見送つた。イルクックから乘せて呉れた馭者達

も、默つて通り過ぎる時に手を擧げた。姉に寄り添うたワーリヤも手を擧げて打振つた。兵士達は、彼女等を眺めて何か戰友と囁き合ひ、通り過ぎた。……彼等は行く、雪のシベリヤの奥地へ行く、何處までも行く。何しに？　夫の居るパルチザンと鬪ふ爲に。……ダーシヤはふと或る哀愁を胸に湧かせた。

「あウウ！　うウツ、あ、あ、ウオ！」

ワーリヤの聲にハツト我に還ると、彼女は潤んだ瞳を向けた。「ワーリヤ、どうしたの？」

「あウウ……ウ、ウ、ウ、ウあウ！」と妹は懸命に指差した。

其處には、隊から離れて、一人のパルチザンが三名の兵士に縛られて、丘の中腹へ行くのだ。彼女はどきツとして、危く乳兒を取落すところであつた。まあ――何てグラコフによく似た後姿だらう？

「グラコフ!?」と大きく鋭く、彼女は夫の名を呼んだ。「……グラコフ!?……」

パルチザンは立止つて振向いた。ぢつと彼女の方を凝視めると、遠くから（顏ははつきりと見えなかつた）……「ダーシヤ!?」と上吊つた聲で答へた。――あゝ何といふことだ、夫だ！　夫だ！　グラコフだ！　すると兵士はパルチザンを突飛ばして、行け、と促した。

「グラコフ！……待つて！　グラコフ！」

夢中に雪の中を、ダーシヤは呼んで追かけやうとした。二名の兵士が後から走り來て彼女を抱き止めた。「離してツ！　グラコフ、行つちや厭！……待つて！　私の……グラコフ！　ダーシヤよ、私よウ……離してツ、お願ひです！」

「おい駄目だ、銃殺されるンだ。早く橇に乘らないと列車に遲れるぞ！」

兵士はぐいぐい彼女を反對に押した。ダーシヤは雪の中へ倒れた。火の點くやうに泣く乳兒……雪に顏を押當てゝ彼女は夫を呼んだ。不思議に、泣けなかつた。あまりに、あまりに……

「うわツはつはつア……太いマンモースめ、うへツ、うへツ、ヒヒヒ、やあ！　やあ！……うわツはつはつ、總攻擊だア！　よオ、ひツ、ひツ、うわ――ツ！……」

寺院の監禁室から、一番最後に引張り出された×××が、橇の中で突然立ち上つた。手錠が冷たく光つた。

工兵達は、今、彼等の巣を燒いて行かうと作業を急いでゐる。

橇は、去り行く兵士と反對に、發狂した××と二人のロシヤ婦人と乳兒を乘せて、丘の傾斜を湖畔の方へ滑つた。

「うわツはつはつ……馬鹿、おい、俺は發狂なンかして居らんぞオ！　嘘つきめ……マンモース……ひツひツひツ、行かうかアも

どろォかァ……オーロラのゥ下をゥ……か。馬鹿ッ、偵察の橇に女を乗せる奴があるかッ！」

乳兒は怯えて泣いた。

陽は低い山脈の彼方に沒した。急に膚寒く湖面から風が橇を迎へた。ダーシヤは振返つた……丘の寺院は、煙を吐いて火山の噴煙のやうに、メロリ、メロリと鐘撞臺の尖塔の窓から焔が覗いた。――みんな燒けてしまふのだ、もう、ロシヤには不用な寺院が。そしてロシヤに有用な人間は殺されてしまふ……だが彼女は輕く諦めた。そして暮れ行くバイカル湖の薄鼠がゝつた氷上へ、泣くに泣かれない瞳を移した。

鋭い銃聲が、燃え盛る寺院の向側で、パルチザンの心臟を忠實に貫いた旨を告げた。

8

斥候の衝突は頻繁になつた。傷いた彼等の報告は、刻々と兩軍が接近すると云ふ事のみで、今は、戰鬪開始の時間――彼我の速度を待つばかりである。

事實パルチザン達は、彈藥が乏しく糧食も殘り尠かつた。で、隊長は「停れ」と命じて、密林の勾配へ散兵を敷き、谿へ下りて來た敵を迎へ撃つ計畫を樹てた。

「彈が乏しい、だから皆は一發で出撃ちをするやうな心構えで、充分照準して貰ひ度い」と隊長は訓示し「……沈着が肝要だ、周章てると敗けちまふぞ。自分の持場を頑強に護りさへすれば、俺達はきつと勝つ好地域に居るのだ！」と附け加へた。

時間は經つた。闇は深く、雪は降らなかつた。白樺の密林は、原始的な重い靜謐を湛え、慓悍なパルチザンの銃口は、雪崩れ下りる爬蟲の群――敵を、谿底へ殲すべく片唾を呑んで向けられてゐる。暗い、それが射撃を防げはするであらうが、彼等の瞳は梟のやうに谿間の深地の、樹の疎な仄明るみへ次第に馴れた。

程無く敵の小隊が、谿向ふへ現はれた。暫く其處で凝議してゐる模樣である、が、やがて、果して小隊は谿底へ下り始めた。――小隊では無いな？ とパルチザン達は推測した。――油斷がならないぞ、囮に氣を奪られて、罠にかゝることは有勝なものだ！

「撃て！ と命令する迄は絶對に撃つちや不可ないぞ」と傳令が栗鼠のやうに走り去つた。

散兵の、厚ぼつたい唇から唇へ「一發でも無駄撃ちするでねえぞ」ともう一度傳へられた。皆は自信に充ちた頷きをみせ、モーゼル銃を幹に當てゝ狙つた。引金……齒がガッガッと鳴る。

敵は今迄の集團を解いて、谿から長く一横線に、用心深く、匍ふやうに彼等の目睫へ迫つた。――何てえ、嗅ぎのよくきく犬奴だ!? と隊長はイマイマしげに舌を鳴らせると、同時に多少怒りつぽい聲で「撃てッ!」と號令した。

それは、まるで密林の、白樺の幹が一齊に激怒したかのやうに、カッと火を噴いて靜寂を劈いた。巨大な谺だ!……次の瞬間、暗い、斑の雪地の傾斜に、バタバタッと斃れる敵の影を見た。パルチザン達は昂奮し、硝煙に咽び、蓋を開けた儘の彈藥盒から續け樣に銃口は閃火を吐いた。カーキ色の兵士は皆斃れたかのやうに見えた。と、敵は應戰の火蓋を切つた。皆斃れたのではなく、爬蟲のごとく地に伏し、白樺の根元から射撃を始めたのである。パルチザンも矢張り白樺の幹を楯に、地べたを狙つて亂撃を浴びせかけた。鋭い射撃の應酬をしながら、敵は次第に匍ひ迫つて來るやうに思はれた。白樺の幹にプスッとメリ込む小銃彈の呻きや、不意に肩先を掠める不氣味な唸りも、却てパルチザンを冷靜に落付かせた。彼等の死傷は尠かつた。勇敢なカーキ色の一兵士が、彼等の列へ突然走つて近づくと、白樺の幹にぴたッと身を吸付けて、右手だけが何かを投げた。轟然たる裂けるやうな音と火花が、パルチザンの頭上で――手擲彈は幹に命中した――脅した。と一人のパルチザンが、闇を匍うて近付くと拳骨でぶン毆つた……いや、彼のピストルは、次の手擲彈を投げやうと身構へた敵を、のけ反りに、斃したのである。彼は、大膽に素早く、手擲彈を續け樣に敵の頭上へ投げると、闇中を目にして何か喚き乍ら踊るやうに躍つて來た。

と突然、密林の後方――パルチザン達の背後から、恐しい銃聲と共に敵の一小隊が突撃して來た。樹の間を縫うて、暗い、梢高い、銃口の多い密林が雪地に流れて來たのだ。――挾み撃だ! 思ふ壺に嵌つちまつた、畜生! パルチザンは動搖し混亂した。隊長の吼えるやうな叱咤が響いた、が、秩序は崩れた。

「地に伏せろ! 背後に撃てッ! 周章てるのは娘ッ子ばかりだ……同志!」

背後の敵は次第に幅廣く、投網のやうにパルチザンを包圍した。……

……機關銃が歌ひ出した。彼等の直ぐ頭上で、鋼の夜鷹が景氣よく雪崩れた。何處か、彼方の密林の外の地點で、寢呆けたやうに重い砲聲が轟き始め、パルチザンとは方角違ひの、谿の上空ですさまじく炸裂した。

パルチザンは混亂しつゝ戰いた。彼等の死傷は殖え、擾すやうな戰闘の喧噪の中に、呻きと叱咤と譯の分らぬ喚きが……そして人々は次第に彈藥盒の底が見え出すと、列が縮まつて一處へ集つた。それは危

險だ！　彼等は地に伏し、人を小莫迦にしたやうな機關銃の噪ぎへ根限り撃ち、力を失つて凍てた地面へ噛みつき、のたうつ瀕死の友の赭茶けた頬へほつれた髮を撫でゝやつた。砲彈は密林を威壓し、敵味方なく破壞しやうと怒號した。白樺の幹は裂け、花電燈のやうに氷柱を垂らした梢が、金屬性の音をたてゝ地面へ崩れた。

「おい同志、彈を此方イよこせ！」と向ふの幹に靠れてゐる一人のパルチザンへ聲をかけた。

「…………」――「やい同志！……俺アもう無えンだぜ！」

彼は匍ひ乍ら――と、鉛の夜蛇が身邊を唸つて掠めたので、彼は凍てた地面へ獅嚙みついた――近づくと、脚をグイッと引張つた。――あ、硬くなつて居る！　彼は彈藥盒を屍から外すと又撃ち始めた。

「畜生、もう一疋命中てゝやろか、ウウ……」

「やい、浮腰する奴ア誰だ？……天非落はしねえぞ、卑怯者め！」と坑夫上りのパルチザンが齒をむいた。

「同志！　俺達ア、モスクワも見ねえで死ぬンか……」

十五六の、貧相な搾り盡された豆カスのやうな少年が、頭を抱へて坑夫上りに匍ひ寄つた。

「何ッてやがンだい。貴、貴樣ア泣いてやがる……ちッ、ち、やい、やい、撃て！」

「俺ア……俺ア……ふウ」

「阿母の乳がのみてえと云ふのか？　畜生、貴樣にあやかつてられねえ。ほら、其處らの死骸から彈を搜して來い！」

少年は欷歔きながら屍へ匍ひ寄つた。

炸裂した砲彈の閃光で、密林を透して地上に、白樺の幹に、陰鬱な、銅のやうな照返しを投げた。敵はヂリヂリ肉迫して來る。

「何てえ執拗い機關銃だ？……ちえ糞だ！」

「おい捕虜になるなよ。むごい目に遭ふからな……どうせ崖の下へ立たせる（銃殺）に決つてら！」

「話するで無え！……撃てッ」

「おーい、しつかりしろ同志！」と蜂の巣のやうに鉛の夜蛇に螫された屍を搖動つてゐたが……「不可ねえ。……奴と火酒を煽つて腰が立たねえことがあつたがなア！」

「水ウ……水ウ……うひッ ひッ！」

頭をやられたパルチザンが悪鬼のやうに闇で踊る。

その時、敵の熔岩が雪崩れた。混亂の渦が急速に卷いた。熔岩……咆哮……銃劍……突撃！！

――俺達の命は、一打あつても足れアしねえんだ！

夜明け方に一しきり降雪が續いた。直ぐ雲は通り過ぎ、暫くすると

朝が密林へ――東半球へ訪れた。もう、銃聲も絶え、鉛の夜虹は姿を消し、激戰は惡夢のやうに拭き去られて、硝煙の餘臭すら漂つてゐない。氷柱だらけの、鐘乳洞の中のやうな密林は、鈍く燦めく薔薇色の微光に包まれて、黒い石塊の如くゴロゴロと散在した屍へ降り積つた雪が、白々と靜寂の底に廣く眠つてゐた。裂けた白樺の枝の隙間からは、碧色の空の明るい破片が見えた。泣き乍ら屍から彈を集めた少年も、坑夫上りのパルチザンの胸へ、まるで乳房に縋り附いたやうに、硬く、瞳をあけたまゝ、空洞に朝の光を凝視めてゐる。すべての屍の血はビードロのやうに凍結し、顏を埋めた茶色の髮は豪猪の針毛の如く氷つて光つてゐる。

谿の澤地にも、カーキ色の屍が雪に埋れて雜魚寝をしてゐた。醒めない眠り。其處には理解出來ない奇怪な現象が展開されてゐる。　、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、

、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、………！

宏い・シベリヤ――お前の默り癖は、何時まで續くことだらう？

俺達の死は、一體、そんな小ぽけなものだつたのか。死……氷中の花のやうな俺達の屍は、鴉さへ嘴を傷めてつゝかない。俺達の骨壺を抱へて、誰ひとり悲しんで哭れる者が無いとでも、お前は思つてゐるのか？

一羽の禿鷹が、柔かく溶けてゆく蒸氣に煙つてゐる濡れた翼を張つて、地平線に登つた冬の太陽を懷しみながら、密林の上を緩やかに大旋回を描いてゐた。

9

曠野では夜つぴて鳥が騷いでゐた。北へ渡つて行く途中、こゝで翼を休めてゐるのだ。夜は暗かつたが、しかしもうすつかり春らしく暖かである。

低く擴がつて居る牧場。

その上に白々と纏ひついてゐる靄が、恰も皿に溜めた牛乳の上に凝る浮滓の如く、その底から軈て間も無く、ソヴェット國營牛酪製造場の黒つぽい建物が仄かに浮き、若草を戀ふ牛の吼える聲が聽えた。牧場に續く果樹園は、丘から始まつてなだらかに傾斜しながら、河岸の方へ靄の中に眠つてゐる。まだ裸だ。

シベリヤの早春は、暗い夜の方はずつと勢がよくて、ぐつと蹲つて、大地そのものに獅嚙みつき、厚つぼたい濡れた衣で一切を掩ひ盡してゐる。が、光は徐々と薔薇色に空いつぱいに擴がりつゝある……

そして刻々と地に迫り、縺れのぼる霧と格闘してゐるのだ。處々の高まつた丘の上などでは、露に浸つた蜜柑色の斜面が夜の闇から覗き出したり、果樹園の裾のシルカ河の面がぼんやり光つたり、消え行く霧と輝かな曙との間に乳絞りの人が働き、蜜蜂は草原の開花期を待ちあぐんで飛んだ。

黒龍江の上流であるシルカ河は、雪解水で氾濫して夜つぴて音を立てて流れた。もう氷片は見えない。河の彼方は狐色の曠野が春を急ぎ、地平線にヤブノロイ山脈が翻つてゐる。灰色の鶴の群が、氾濫した水際に立つてコロコロ啼くと、果樹園の下に塊つた雌鶏どもがうとうと眠りながら啼き交して、總て一緒になつて北へ飛んだ。何も彼も急がなければならないのだ。

奥地の密林地帶も春が兆してゐた。斜面の雪は解け、森や窪地の雪は鼠色になつてビショビショした。白樺や落葉松は重苦しい匂ひを發し、谿の底では泉が目を醒した。晝間――大氣は暖く膨れはじめ、物みな太陽の光に息吹き出した。黄昏は緑がかつて段々長く搖蕩ひ、すべての物の響が敏くなつた。狼は群をなして歩き廻り、雄鶏は雌を爭つて咬み合つてゐた。

闘爭の冬は過ぎ、勝利の春がシベリヤ全土へ訪れた。勞働のかぐはしき春が！　どれだけ人々はこれを待つたことであらう。だがたうとうやつてきた。やつてきたのではなくてやつてきさせたのだ。犠牲があつた……氣の毒な、可哀さうな彼等。死んだ者は、憎惡を超えて悼まねばならない。彼等がプロレタリアである限りは。

……………ダーシヤとワーリヤの姉妹は、この國營牛酪製造場の乳絞りをしてゐた。此處では皆が憤懣なく働き、歡喜に充ちてインターナショナルを歌ひ、眞面目に議論し又ふざけ合つた。「同志！」の洪水だつた。搾取の無い勞働がかくまでも皆を幸福に働かせると云ふ實證が燦き灑ぐ春の日光の下に展開されたのである。どの部屋にも聖像はペーチカで綺麗に昇天し、その代りに偉大な慈愛を包んだ、不愛想な顏のレーニンの像が据ゑられた。

牧場は褪せた狐色から淡緑に醒め、温い小雨と明るい日光に、やがて濃厚な、艶々した、柔く甘い、食べ切れない緑の毛氈をびつしりと敷いた。陽炎が縺れ、輕い眩暈を催すほど目眩しい。牛は眼を細めて貪り食ひ、乳房は見る間に張り切つた。瑠璃色の穹窿では雲雀が囀り、河の畔では菩提樹が匂つた。微風は絶えず曠野を和かに撫でて來、シルカ河のどんよりした黄色い波が丁度猫が咽喉を鳴らすやうな音を立てゝ、丘の裾へ甘えかゝつてゐる。……果樹園は白く花が溢れた。

――此處には遊んで居る人間は居ない！

シユツ、シユウと快い音を立てゝ、指の間から乳房が覗いて、白い、溫い乳がバケツの中へ次第に溜る。牛は眼を細目にし、尻を垂れ、長い銀色の涎を曳き、反芻すら忘れて恍惚としてゐる。

「また今朝方モスクワとレニングラードから至急送れつて來たぞ！」と委員のクジミツチが、日に燒けた顏を仰山さうに笑ひ乍ら、かう、澤山と云ふ意味に腕を擴げて乳絞りの處へ駈けて來た。「忩らにやならんだ、あつこの後仕末に忙しい同志にな。皆がパンをちぎつたまゝで待つとるぞオ！」

女達はキヤツキヤツと笑ひ乍ら絞り急ぐ。

「クジミツチの爺さん、さう駈けづり廻つちやお腹が空くわ。一つ飲みたんせ、ほら！」

惡戲好きなオリガが乳をシユツと浴びせた。乳は、滑稽じみたクジミツチの平つぺたい顏へ流れた。

「こらツ！　貴重な乳を……べろべろ……勿體無え。この栗鼠め、ウンと抱きしめて息のならねえほど接吻でもしてやつたら、ふツふツ、もつと穩順しうなるだらう？　こら、こらツ、やめんか……一雫でも大切な……」とクミジツチは踊るやうに呶鳴つて、指で顏の乳を搔つて舐めた。

朗かに女達は笑ひ、牛は鐵色の瞳をあけた。乳を絞りながら、ダーシヤはふと風邪が因で烈しい搐搦で死んだ、乳兒の瞳を想ひ出した。この牛酪製造場が國營になつてから初めて死んだと云ふので　小さな墓が丘の背に作られて皆が哀悼した。彼女は、よく墓へ行つて跪いた。――今生きてゐたら、もうヨチヨチ蟹股で步くことだらうに。

休憩に、ダーシヤは小走つて丘の背へ行つた。シルカ河が目の下に光り蜒つて、スギルビカや、薊茴、きんぽうげ、鋸草、釣鐘草、鬼薊が、色とりどりに咲いてゐた。墓の前に跪いて、彼女は瞳を閉じた。死んだ乳兒が、草原をヨチヨチ步つてゐる……すると今度は大きくなつて、はち切れさうに健康な頰を輝かせた少年隊になつて、自分へ微笑みかける……ダーシヤは腕を伸ばして「おゝ！」――そして瞳をあけて見た。幻想だつたのだ……彼女は瞳を潤ませて、大空の雲雀の遙かな囀りをぢつと聽いた。

ワーリヤは姙娠してゐた。五月いつぱいは外で働き――姉と共に乳を絞つたが、腹が六月に入ると規則に依つて働かなくてもよかつた。が、彼女は退屈で勿體無いので、內で牛酪の包裝を手傳つた。一度も結婚したことの無い彼女が、姙娠してゐることは人々の噂に上つた。

「なア、處女が、誰ともくッつかねえで孕むてえことがあるかなア？」と一人の男が腕を組んだ。……キリストみていに」

「他愛もない、そんなことがあつてたまるものか。だから男つて甘い

もんつて相場がきまつてるのよ！」と蒼脹れのした女が狡るさうに笑つた。

「一體……」

「一體も二體もないぢアないの、播かぬ種子は生えぬつてね。ふッ、ふッ」

「油斷も隙もなンねえな……ふう」

「噓だつて孕まれないと云ふ規則は無いわよ！」と女は鼻の頭に小皺を寄せて「でも、どうせ私生兒ね、だから新しい法律だと、何でも相手の男は全收入の三分の一を、扶養料に出さなくちやならないわ。あの人知つてるかしら？」

「知らせてやるがえゝぜ、一生涯父なし兒であの女の瘤だあ。孕ませた男を訴へてやるがえゝだ。女にいゝ法律が出來たぢア無えか」と傍から眇の男が、仔細らしげに嗅煙草を鼻へ近づけ乍ら言つた。

「おやお前さん、此處ぢア煙草は嚴禁の掟だわよ！」と女が口を尖らせた。「ほら、蜜蜂が嫌ひだつてね……」

男はバツが悪るさうに眇を妙に瞬くと、「蜜蜂の家」のある果樹園の方を見て、周章てゝ行つて了つた。

女はダーシャに「新しい法律」を話して聞かせ、男を訴へて扶養料を取つておやりと薦めた。

「ありがたう……」とダーシャは禮を言つたのみで、深い憂愁と困惑に捉はれた。

五月の夜は蒼く燻んだ。

六月は緑がゝつた白い色で潤んだ。

ワーリヤは、果樹園の花の匂ひと牧場の草の香に噎ぶやうな、靜かな頭の痛いやうな晩に産氣づいた。まだ二月も早いのに。――流産であつてくれゝば、どんなに母子とも幸福だらう……とダーシャは思つた。ワーリヤは苦しんだ。ダーシャは傍を瞬時も離れず、妹の手を握つて力添へをし、ねつとりと湧いた額の膏汗を拭いてやつた。陣痛は永引いた。シルカ河の方の靄の中で、夜鶯がしきりに鳴いた。

曉近くワーリヤは分娩した。生れて暫くの間嬰兒は泣かなかつた。だがダーシャが尻を輕く叩くと、猫の鳴き聲に似た、弱々しい聲で顔中に赧い皺を寄せて泣いた。ワーリヤは産の苦しみに打ちのめされたやうに寢てゐた。ダーシャはぢつと、猫のやうな聲で泣く八月目に生れた、痩せた、兒を凝視めた。――、、、、、、、、、、嬰兒……、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。皮肉な運命のこぼれ種……彼女の顔は蒼褪め、全身が木の葉のやうに顫えた。――この子は、この子は……やつぱりさうだ！　ダーシャは獨り決心を固くと、そつとワーリヤを窺つた。彼女は、ぶよぶよの嬰兒の口へ手を伸

ばした。――愛するが故に……愛するが故に……彼女は瞳を瞑つて、軟かい觸感を恐怖しながら、力を籠めやうとした。と、不意にワーリヤはがばと飛び起きると姉の手を捥ぎ離した。

「ううツ！……あうツ、うう……あオ！」

ダーシヤは、ハツと電氣に打たれたやうに妹の顔を見た。「ワーリヤ……」

「うう……うオ、あうツ……うウツ！」

ワーリヤは嬰兒を犇と抱き〆て、姉を烈しく罵るやうに睨んだ。

いきなりダーシヤは泣き伏した。彼女はワーリヤの一切を理解したのである。恥づべき自分――母性愛のめざめ……廣い、大きな、強いもの……ダーシヤは身を踠き、髮を掻き毟つて嗚咽いた。泣き濡れた瞳を擧げて、碧く澄んだワーリヤの強い瞳を見ると、彼女は急に物憑きのやうに晴やかに笑ひ始めた。

笑はずには居られないのだ、悲しき故に。

ダーシヤは胸を擴げ、腕を差伸べてワーリヤの苦しんだ額へ、何物かに感謝する氣持で唇を觸れた。ワーリヤは微笑み、初めて腕を解くと嬰兒を姉に渡し、窶れた顔を歪めて欷歔いた。

「ワーリヤ、お笑ひ！　私がわるかつた……でも、もうみんな……さうよ、お笑ひ。えゝ、いゝともよく分つてるわ、朗かに笑つて頂戴！ね、さ、みんな人類の爲に……えゝ笑ふのよ。いゝとも、私が、あの子の代りに育てゝやるわ」とダーシヤは泣笑ひながら嬰兒を覗き込んだ。

六月のシベリヤは、白みがゝつて青磁色に明け初めた。東の地平線の霞は薔薇色だ。果樹園の花は冷たく首垂れ、シルカ河の畔では鵲がもう喋つてゐる。

――一九二九・一一――



彼女と春

野上彌生子

一

珈琲挽は二圓七十錢であつた。眞知子は紙包みのまゝそれを下げ、松坂屋の地下室を出た。今までのは小さい甥がおもちやにしてこわしてしまつた。嫂はうちで挽かない珈琲は珈琲ではないと云つた。

高架線の電車が威嚇的な騒音を擧げ、空を横に突つ切つた。眞知子は花見衣裳を飾つたショウ・ウインドウの前からそれを見送つた。御徒町で乘れば田端の家まで二十分とはかゝらなかつた。何故かもつとゆつくり行きつきたかつた。昨日關に出した葉書には、米子が大阪に立つ前に殘した注意に從ひ、書物を取りに行きたいからと云ふ意味だけを書いた。

眞知子は公園に向つて歩いた。

蘇芳色のつぼみの櫻に人が群れてゐた。生暖く垂れた雲から眞晝のうす陽が射し、すぐ翳つた。濕つぽい風が吹いた。どこかで花火がせつかちに裂けた。

眞知子は美術館の前を博物館の裏へ出た。鋭く、ちか〳〵した反響、建物と樹木を通

して重い空氣に散亂してゐた音のつぶてが、急に雜然とした硬質のひびきの塊りになつて耳に蝟集した。道の片側をしきつた葭簀の中で、大勢の石工が仕事をしてゐた。鑿から飛ぶ花崗石の屑で、圍ひは雪の降つたやうにしろ〴〵と見透かされた。禿のある鮮人の人夫は、大きな破片を石材の間から擇り出し、車力に積んでゐた。やがて梶棒に取りつき、前屈みに引きはじめた。

眞知子はのろい車力を追ひ越さうともせず、あとについて步いた。うしろの鑿の音が、細かく、高低をもつて入り亂れながら、それなりに調子づけられ、なにか遠い囀りのやうに傳はつて來るのを意識の半分で聞いてゐた。彼女は思ひ出してゐた。五ケ月前の夕方、同じこの道を關と米子と三人で步いたのを。──さうして關がなにを話したかを。──彼のちよつとした身振や、語法、そんなことまではつきり覺えてゐる自分に、輕い厭惡を感じた。眞知子はスプリング・コートの肩をゆすぶり、急に横廻りして車力を拔いた。

時々蒼く透いた空が、執拗に黝ずんで來た。空氣は一層あたゝかく、濕度を增し、植物性の甘重い匂で飽和した。谷中の墓地の木陰に入つた時には、帽子にかすかな雫のけはひを感じた。降つてはゐなかつた。二三日似た空模樣がつゞいてゐるので、また晴れるかも知れなかつた。且つ、行つて書物を持つて來るだけに、どれ程の時間を取るだらう。さうだ。すぐ歸つて來られるのだもの。眞知子はそれ以上多くを考へまいとした。同時にまたそんな何んでもない用事のために、關が自分を待つてうちにゐてくれるだらうとは、決して。──

植木屋の年取つた、佝僂のかみさんが鍵を渡してくれた。期待された通り彼はゐなかつた。

「よほど前にお出掛けになつたのですか」

「つい今し方ですよ。」

「いつごろお歸りになるか仰しやいませんでして。」

「聞きませんでしたねえ。」

ぶつきら棒なかみさんは、脊中の瘤で答へた。とつ、とつ、とつ、とつ──かみさんは苗床へ侵入した鷄の方へ走つた。代代M──家の庭に勤めてゐると云ふこの古い植木屋は、かみさんと聾の少し足りない息子だけしか雇はゐなかつた。それ以上の人手を要する仕事は今は家ではしてゐなかつた。寺につゞく昔からの植木畑は、反對の崖に沿うた書齋の方よりも前から代地にしてあつた。

何故あんな餘計なことを聞く必要があつたらう、──眞知子はポケットの底で鍵を握りしめ、庭を横ぎつた。暗灰色の塗料の褪めたドアが頓て前にあつた。そこだけテレス風に石で疊んだ入口に立ち、眞知子は抑制した落着きをもつて、探つたまゝの鍵を取り出した。

机、椅子、小さい喫茶卓、書棚、いつも陽に出てゐて踏臺代りに使はれるモデル臺、壁の鏡。あつた程のものは悉くもとの位置に、もとの形であつた。ずつと前眞知子が銀座で見つけて持つて來た模様紙の、安ものゝ、漏斗型になつた電燈のシェードまで。それで彼女の感覺には、その部屋が全然新しい、別な、見たこともない場所の如く映つた。眞知子は戸をうしろに、小麥色の絹の靴下のまゝ埃つぽい床に立ち、窓際の机の亂雜な書物の堆積を、開けつ放しにされた辭書を、松屋の青罫の原稿紙を眺めた。それから向うのモデル臺の側にむき出しに下つた紺の上下の洋服を。彼はさう遠くに出たのではないのかも知れなかつた。恐らく――何かどうちから彼女を追ひ立てた。書棚は机の横と後の壁に直角にあつた。

皮、クロース、紙、――赤、黒、黄、青、――ゴシックの金文字、思想と言葉の象徴、諧音と旋律の固形物、記號の魔術――段々に仕切られ、沈默した脊表紙で、なにか甲蟲類の甲羅のごとく見える排列。米子自身よりは英文科の二年で亡くなつた兄に寧ろ屬してをり、單なる學生の藏書として以上に豐富な内容は、彼の學生時代が、田舍の家の物質的破綻に米子の頃ほど影響されなかつたことを示した。

モーガンの古代史と、フレザのトテミズムの研究、それから二三のちよつとした飜譯書、貸しただけのものは彼女の方の低い本棚の上に、他の、氣忙しく片づけたらしい書物や雜誌といつしよになつて積まれてあつた。ふだんの米子なら決してしない無秩序をついでに直しておかうとして、ふと部厚な一冊の綠いろの書物が眞知子の眼をひいた。斯んなものを讀む氣になる時もまだ彼女はあつたのか。――それはマッケイルのぎりしあの古詩の選集で、眞知子も一度借りたことがあつた。米子は兄の愛讀書であつたと云ふ追憶から大事にして、自分でも好んでもとは讀んでゐた。併し思想と生活の變化は、彼女の机の上にあるものをも別種類にしてしまつた。眞知子はその綠いろの表紙を彼女の手近にいつ見たか、殆んど覺えないくらゐであつた。思ひがけもなくそれがそんなところに出てゐたこと、殊にブハーリンの史的唯物論と重なつてゐたことが、一層意外な、そぐはなさを感じさせた。勿論無産運動の實行者がぎりしあの古い詩を讀まれない筈はなかつた。が、理論以上の理論から、寧ろ險しい觸覺から、彼等の陣營に於ては忌避されてゐる種類であることを眞知子は知つてゐた。多分米子は兄の書棚のものを何か一冊持つて行きたかつたのであらう。で、それを取り出し、急に他のものに變へ、そのまゝ殘したのであらう。さう眞知子は想像した。どんなものと撰び變へられたにしろ、その選集に手を觸れたところに、搔き落しても搔き落してもこびり附いてゐるインテリゲンチヤの渣を見た。

――ぼんやり考へながら、史的唯物論の下から緑いろの書物を引き出し、眞知子は立つたまゝの姿勢で、左の肱を本棚に突き、それを開けてゐた。美が宗教であり、戀が神の子であつた、さうしてバッコスの葡萄の液がクリスト教の苦味からまだ犯されなかつた時代の古詩の斷章は、なにか秘密な麻痺藥の如く作用した。數分間、眞知子は活字の中に自分と場所を忘れた。表のドアの開いたのに氣がつかなかつた。

『――』

咄嗟にページを閉ぢ、眞知子は關に振り返つた。言葉が見つからなかつた。緑いろの表紙は彼の眼を遁れなかつたであらう。が、勿論そんなことを問題にはしなかつた。彼はまつすぐに机の方へ歩きながら、たゞそれだけ訊いた。

『書物は分かりましたか。』

『えゝ、ぢきに。』

眞知子もそれだけ返事をし、外套の內ポケットから風呂敷を引き出した。數册の洋書は可なり嵩ばり、重かつた。その上あがり口には珈琲挽きがあつた。フレザだけ置いて行けたら、否、置くやうに勸めてくれたら――本棚の上で一二度包み換へながら、机の前から、それでも椅子だけ彼女の方へ向けて無關心に見てゐる關を眞知子はにくんだ。と、そのこゝろが、內側に熱つぽくふくれてゐた、關に對する場合の習慣性な臆病を壓縮した。彼女は風呂敷の手を休めないで、意識的にしやき〳〵口を利いた。

『大阪から何か云つてゐらして。』

『あなたの方へはどうです。』

『一度だけ。』

『忙しくやつてるやうですから。』

『無理をしすぎて、米子さんまたお病氣にでもならなければよいがともつてゐますわ。』

『元氣はいゝらしいですよ。』

包は出來上つた。用事はすんだ。眞知子は歸つていゝ筈であつた。が、本統にたゞそれだけの用事で彼女は此處に來たのであらうか。

その日は芝の上村の家で、鎌倉の新たに建て增した別莊に家ぢう招かれた。母さへ偏頭痛を押して出掛けたのに、彼女は先約を楯に留まつた。珈琲挽を買ひに行つたのも、嫂の望に忠實であらうとしたためではなかつた。どこかでそれくらゐの暇潰しをしなければならないほど彼女はあんまり早く出てしまつた。

漸く捕まへたものが手から辷り落ちて行く、そのもどかしさで、彼女は包の結び目をもう一度固く締め、すぐ暇を告げる代りに机の方へ

眼を注いだ。
『なにかお書きもの。』
『先行社の社會科學叢書の飜譯を一冊引き受けちやつて。』
『そんなお仕事には、この家のあるのが便利ですわね。』
『本所ぢや駄目ですから。色んな奴が出たり入つたり絶えずするし、その上すぐおもてが鐵工場で、朝から晩までがんがんやられるんで。』
『まあ。』
彼に向けた右の方の眼だけ、活き活きと眞知子は見開いた。鐵の叫喚の中に、ふだん關が住まつてゐるのを驚いたのでは勿論なかつた。それより口輕くそんなことを彼が一度でも話したらうか。――それも彼女にははじめての、洋服よりは素朴に書生つぽらしく見える瓦斯大島の彼は、急に違つた人のやうな親しみを與へた。
『本所の、あなたのゐらつしやるところ、』
眞知子は見開いたまゝの眼つきを變へないで、それと共に唇に浮かんだ微笑には氣がつかないで續けた。『どんなとこか行つて見たいともつてゐましたの。』
『なんのためです。』
『なんつて。』
『細民窟の視察ですか。』
『――』
『工場地帶に於ける細民の生活狀態――そんな課題でも學校から貰つたんですか。』
聲は出さないで、竪半面の筋肉で、にやりと、いつもの意地の悪い笑ひ方を關はした。それから彼女の方へ向けてゐた椅子を机の方へずらし、伸び上つて、辭書を引き寄せた。さあ、用事が濟んだら歸つて下さい。僕は忙しんです。――彼の背中は、顏より無慈悲に見えた。
――靴の留金がへんになつて、それに少しきついので、旨く掛からなかつた。嫂が買つてくれた、舞踏靴のやうな華奢な靴であつた。なんだつて斯んなものを穿いて來る氣になつたのか――上半身でこゝみ、逆に血の上つた顏で、彼女は唇を嚙んだ。
送つて出て、上り口の板の間に、兩手を帶の間に入れて立つてゐた關は、珈琲挽といつしよに並んだ風呂敷包を見て、はじめて彼女の少くない荷物に氣づいたらしく、急に要るのでなかつたら、どれか殘してはどうかと勸めた。
『大丈夫です。』
靴の上から頭を動かさないで、眞知子は答へた。
『また取りに來るのが面倒なら――』

誰か、——誰が二度ともう斯んなところへ來るものか、彼女は聲帶の後で叫んだ。

『——小包にして送つてあげませう。』

『いゝえ。』

『持てますか。』

『持てます。』

強情に意地張り、やつと留金をかけた。その時、そとの石疊で下駄の土を落す音がして、入口の把手ががちやと鳴つた。ドアの開いただけ、小峰の固い小さい身體が塞いだ。

『お客さま。』

後向にこゞんでゐたのと、病院とは服裝が違つてゐたので、客が誰であるか分らないらしかつた。それだけ、眞知子が荷物を取りあげてまつすぐに立ち、彼女の方へ向けた横顔は、殆んど信じられないやうに見えた。

『——』

小峰は病院と同じく挨拶をしなかつた。その時の單なる無視は、なにか嗅ぎ出さうとする性的な惡意となつて、彼女の飛び出た一皮眼を鋭くした。眞知子も關だけに頭を下げ、そのまゝ通り拔けようとした。右手に持つた珈琲挽の包みが小峰の羽織にさわつた。それでも知らぬ顔で過ぎ得るほどよそ〲しくは、眞知子には振舞へなかつた。併し彼女の會釋に報いられたのは、同じ探索の視線と默禮のみであつた。

いぢわる。皆んな揃つて。——大股に、急ぎ足で、眞知子は植木屋の稍々傾斜になつた前庭を驅け拔けた。一圖な怒と悲しみで、惡太郎の嘲弄から逃げ出した小さい子供のやうに。關は關として、小峰の態度が、殊に彼女の眼から放射されたものが、眞知子を激さした。何をあの人は私から探り出さうとしたのだらう。何を疑ぐつたのだらう。あんな眼つきでひとを見ただけでも恥づべきだ。——彼女は立ち留まり、重い包と珈琲挽を持ち代へた。坂の中途になつた道から丁度眼に入る研究室の鋭角の破風と、すり硝子の廣い窓の一片は、その小峰をあれほど讃め立て、その屋根の下に同居までした米子を思ひ出させることに依つて、彼女の腹立ちに冷たい錘をつけた。いつか米子がまたそこに住むとしても、結局前より一層寄りつけないドアとそれはなるであらう。この閉め出しは何よりも堪へがたかつた。眞知子には自分の家が自分の家でなかつた。兄たちが歸つてからは、その事實はますます明白になつた。

眞知子は腦病院の黒い塀の下を機械的に歩行した。櫟の粗い木立を透いて、すゝけた屋根だけ覗いてゐる建物から狂人が急に叫び出した

いつもこの道に出る時には、無意識な警戒から反對の植木畑の側を眞知子は通つてゐた。今日は狂暴なその聲を聞いても塀から離れようとしなかつた。寧ろ彼女のこゝろは狂人といつしよに叫んでゐた。どこへ行けばいゝのだ私は。どこへ行けば――

朝からの濕つぽい空氣が、終に細かい水滴となつて落ちて來たのにも、電車道に出るまで氣がつかなかつた。

二

暮れると雨は本降りになり、一さう生暖くなつた。その日半日眞知子を捕へてゐた憂鬱は、にぶい頭痛と共に、めつたにない病人じみた疲勞を感じさせた。皆んなを待たないで眠りたいと彼女は思つた。そこへ自動車の音がおもて通りの方から、屋敷町の暗い雨の中へ大きく圈をなして走り込み、門口で留まつた。眞知子は急いで立ち上つた。外から歸つた時、玄關がすぐ明るくならなければ嫂は機嫌がわるかつた。

併し前庭の雨を拔け、重い土間の戸をしづかに開けて入つたのは河井であつた。

『鎌倉からお歸りになりましたか。』

『いゝえ、まだでございます。』

もう少しで、大きな聲で小さい甥たちを呼びかけようとしてゐたので、思ひもよらぬ客を見た驚きは、ひそかなをかしさといつしよになつた。

河井は今夜七時過に逢ふ約束になつてゐたのだ、と云ふことを話しながら、

『少しお早いかと思つたのですが、出先からそのまゝ伺つたものですから。』

『兄たちも日いつぱいには歸つてまゐる筈になつてゐましたの。子供づれで、汽車にでもおくれたのだと存じますわ。』

眞知子は玄關の電燈の下に膝をついたまゝ、切り口上で述べた。夜、雨の中を訪ねて來た約束の客に對して、それは親切な仕方ではなかつた。殊に兄夫婦が彼に寄せてゐる歡心を裏切らないためには、待つことを乞ふべきであり、また待つて貰つても一と汽車より遲れる筈のないのは分つてゐた。にも拘はらず彼女はさうは云はなかつた。

河井は多く濡れてゐない洋傘を左の袖口に凭たせ、右手で時計を引き出した。

『やがて半になりますね。』

『さよでせうか。』

眞知子は同じ形式張つた答へ方をしながら、河井が對人的にひどく

敏感なやうでゐて、斯んな場合にひとの氣持を見拔けないのは、周圍に絶えず甘へさせられてゐる一種の闊々しさからだと思つた。それが正しかつたかどうかは別として、その時の河井はたしかにいつもほどは氣が利かなかつた。彼は洋傘をまた袖口からはづし、兩手で銀の飾のついた柄を押さへ、土間に佇んだまゝすぐ暇を告げようとはしなかつた。

女中が杉戸の間から眞知子を呼んだ。立つて行くと、彼女が風呂に入つてゐた間に鎌倉から電話で河井の訪問のことを知らせて來てゐたこと、都合で豫定よりおくれるかも知れないから、それまでに見えたら、眞知子に相手をしてくれるやうにと云ふことまで注意されてゐたことが分かつた。

『そんならそれのやうに、忘れないですぐ通じなくちや駄目ぢやないの。』

眞知子はいつになく女中に怖い顏を見せた。が、小言がなんの役に立つだらう。彼女は引つ返し、云ふまいとしたことを云はなければならなかつた。

『電話がまゐつてゐましたのださうで。少し遲れるかも知れませんが、およろしかつたらお待ちして頂きます。』

曾根は表座敷につゞく八疊を居間にしてゐた。そこには爐が切つてあつたので、手狹ではあつたが、暖房裝置のない昔のまゝの家で早い春もあたゝかに暮らされた。彼の妻は、婦人雜誌から得た知識に恭いて爐のまわりに敷いたラグ、二三の低い椅子、褐色のねぎしを蔽うて垂れた多彩な織物の壁掛、その他ちよつとした洋風の家具に依り、今までの凝固した好みとはすつかり違つた、おもしろい風變りな部屋に改造されたと考へてゐた。眞知子は床の間と反對の長押に父の頃から懸つてゐる高泉に對し、少し氣の毒に感じながら、不調和だなどゝは云はなかつた。模樣替の後は、親しい人々はそこへ通され、彼女の手がずつと省けたから。

併し今宵の溫氣にはその部屋は幾らか暑すぎた。

『何ですか蒸々いたしますこと。』

彼女は足もとの爐の火に灰をかけ、なほ椅子から立つて書院窓の小障子をすかした序でに、兄の机の上の時計に眼をやつた。八時に二十分からあつた。丁度それくらゐ彼女は河井の前にもうかけてゐた。主人役の意識的な努力で、なりたけ不愛想になるまいとしながら、他の人々が彼を見ると持ち出すやうな話材を借りるのは、常にも增して今夜の彼女は不適當であつた。で、數日前の新聞に發掘を報じられた或る地方の古墳とミイラのことを噂しただけで、役目を抛棄した。河井も專

門家らしい短い意見を加へたのみで、いつもほど興味を持つてはそれに留まらなかつた。空虚な埋め手のない二分に、軒の夜の雨が降り注いだ。と、河井は同じ新聞に聴講生廢止のことが出てゐたが事實なのかと訊いた。

『本統です。』

『新しく入れないだけでなく、全部廢されるやうに書いてありましたが。』

『えゝ、皆んな追ひ出されてしまひましたの。』

仲間の憤慨語をそのまゝ用ひたのが、河井を微笑させた。

『なにか研究してゐられた方はお困りになつたでせう。』

『考へるほど大した影響はないともひますわ。純粋に學究的な氣持からと云ふより、見得と結婚までの暇潰しに入つてゐるやうな人たちが大部分でしたから。』

『制度も中途はんぱのやうでしたね。』

『圖書館へ入ることさへ許されないくらゐですもの。でも中には眞劍な方もゐらつしやいましたし、そんな人たちは地方の大學へ移るやうですわ。』

『ではあなたは。斯んなことを伺つて大變失禮ですか。』

『わたくし、さうね。』

眞知子は知らず知らず親しい答へ方をし、唇の間に小さい齒をのぞけた。誰ともまだ話さなかつた、しかし一度は論議される筈の當面の題目に就いて、思ひがけもない人から不意打をくつたのがをかしかつた。そこまで調子よく續いた會話も、はじめよりは彼女の氣持を紛らしてもゐた。と云つて河井を相手に彼女のひそかな苦悶を打ち開ける氣は勿論なかつたから、どこまでも冗談らしく、唇の間のほゝ笑みを消さないで云つた。自分は田舍の大學へ行つてまで勉強しようとするほど學問好きでもなければ、見得と結婚までの暇潰しに講義を聴いてゐた仲間にも入らないので、四月からどうするかは分つてゐないと。——

『まだ考へても見ませんの、今までのことを續けて行くか、それとも止してしまふかさへ。』

『では別の問題に就いて、あなたのお考へになつてゐることを伺へますまいか。』

『どんな問題。』

『例へば結婚に就いて。』

『私を暇潰し仲間へお入れになるつもり。』

『いや、許して頂ければ、』

河井は幾らか撫で肩の上半身を、卓越しに彼女の方へ傾けた。『求婚

者の一人として。』

興じて、不用意に、活き／＼と彼に見開いてゐた眼を、眞知子は長い反つた睫毛で蓋をした。急に光の襲ひ込んだ窓を、あはてゝ鎖さうとするかのやうに。丁度またその輝やかしい洪水が視る力を眩惑させると等しく、彼女の耳を打つた意外な音波の振動は、聽覺を混亂させた。

『あなたは多喜子さんと私を間違へてゐらつしやいますわ。』

『あの方と私の間に、普通のおつきあひを越えた交渉は少しもありません。』

『そんなこと、』

彼女は再び大膽に彼を見まもつた。瞬間のめんくらひは、臆面のない證言に對する驚きに變じた。『本統にするひとがあるでせうか。今までのあなた方のおつきあひを見てゐた人なら、誰だつて。』

『正直にお話すれば、私たちの間に特別な親しみの生じることを他で望んでゐたのを、知らなかつたわけではありません。併しあなたにお目にかゝるまでは、自分のおかれた位置に對しわりに呑氣でゐたのでした。』

『その後だつて、御自分の位置をお捨てになつたとはおもひませんわ。』

『どうしてそんな。』

『でなければ、もつとあの方をお避けになることが出來た筈ですもの。』

河井ははじめて言葉をとぎらした。その數秒を、なにか咽喉に痛みを感じる人のやうなかすれた、が、ふだんの靜かさを失はない聲で彼はつないだ。

『柘植さんを避けようとするには田口さんを避けなければならなかつたのですし、同時にそれはあなたを避けることであつたかもしれんさは、あなたにもお分かり下さると思ひます。』

併し辯疏は眞知子の若い情緒を柔軟に甘やかす代り、却つて彼のエゴイズムを憎ませ、姉に彼等の婚約の行き悩みを聞かされた時と同じ同情を、多喜子の上に感じさせた。

『どんな理由があつたにしても。』

彼女は相手の視線をはづし、顔からネクタイの眞珠へ眼を逃がしながら、容赦のない言葉で指摘した。『それで婚約の可能を皆んなに信じさしたのは、あなたの責任ですわ。殊に多喜子さんにそれを信じさした以上——』

『多喜子さんにそんな誤解を與へるやうな行動を、私自身として取つた覺えはもうとうありません。』

眞知子は急に大きな聲で笑ひたくなつた。彼の無意識な、それだけ底の知れないエゴイズムは、色盲に色の感覺が缺けてゐると等しく、彼のやうな、我まゝの出來る環境に生きてゐるものゝ共通な理性の歪曲に依るに相違なかつた。從つていかに細かく分析して見せたところで、彼女の感じさせようとするものを、彼が感じ得る筈はなかつたし、また多喜子のために眞知子がそれほど骨折る必要もない譯であつた。

『ぢやそんな問題とはきり離して、』

彼女は腕椅子の身體をうしろに引き、組み合せた手で白い顎を支へた。『私のお答いたしませうか。結婚に就いてどんな考を持つてゐる――さうお聞きになつたのね。』

河井は愛情の優しい表示で、電燈の側だけ明るくした顏で、うなづいた。

『この一二年間、たしかに月に一遍ぐらゐのわりで私は同じ質問を受けましたわ。』

相手のあらはしてゐる感情からは自由に、幾らか諧謔的な氣持にさへ彼女はなりながら。『母とか、姉とか、親類の伯母とか云ふやうな人たちから。本統は私の意見なんかどうでも構やしない、たゞ早く結婚しなくちやいけないつてお說教がしたいのですわ。私或る友達に話しましたの。あんな人たちは何んだつてひとの顏さへ見れば結婚を勸めるんでせう。自分たちの結婚に滿足してもゐない癖に。――さうしたら友達が旨いことを申しましたわ。丁度時分どきに見えてるお客樣には、自分でお腹が空いてゐなくともなにか是非食べさせようとするやうなものだつて。それからは私もまだ何んにも頂きたくはございません、つて斷ると同じくらゐ氣輕く斷ることにしてゐますの、まだ結婚したくはございませんつて。』

『しかしいつまでも同じやうにお斷りになる積りでせうか。』

『それは私にも分かりません、將來のことまでは。でも今でも一つのことはつきり申されますわ。いつか食べものを考へるやうに私が結婚を考へるとしても、決してあなた方の階級に相手を求めようとは思はないつてことだけは。』

河井は影になつた方の額を手で蔽ひ、肱を椅子の凭せから離さなかつた。そのまゝの姿勢で、眞知子を見ないで彼は訊いた。

『複數の意味に於てそれは仰しやるんですか、また私と云ふ特定の單數をお指しになるのですか。』

『どちらでも同じ。でもはつきりさせるために、あなたと云ふ單數にしてもよろしいわ、――いゝえ。』

云つてしまつて急いで訂正した。『やつぱし複數。』

『――』

『あなたは單數ではないのですもの、あなたと結婚するのはあなたのお母樣と結婚することなのですもの。想像も出來ませんわ。』

『あなたに對する母の深い敬意を知つて頂けたら、多分さう云ふ風にばかりは仰しやらないだらうと思ひます。』

他の場合で、他の相手であつたならば、怒として表はされたかも知れないくらゐ重壓な感情を見せ、河井は云つた。『母はずいぶんあなたを好きになつてゐます。もつとお親しくなることを望んでゐるのです。』

『もつとよく研究するために。――』

眞知子はほてつた新鮮な頰で、とうとう笑つた。『あなたが今夜のやうな話をなさらうとする決心のついた順序が、はつきり分かりますわ。』

河井は、なにかの偏見を彼の母に對して彼女は持つてゐるらしい。自分は兎に角として、母が彼女に誤解されるのは今の彼には最も辛いことだと云つた。

『誤解なんて、そんな、』

眞知子は反射的に取り戻した眞面目さで、言葉が洩らした以上の感情を浮べた、彼の半分明るく、半分暗い顏を見まもつた。『あなたの立派な點を知つてゐると同じに、お母樣のよいところも私には分つてるつもりですわ。お逢ひするまで考へてゐたより、ずつと氣持のよい方だともつてるくらゐですもの。』

『それだけの好意が持つて頂けるなら――』

『いゝえ、それとお母樣やあなたの住まつてゐらつしやる世界が、あの環境や生活が、私に緣がないのとは別ですわ。』

『私のことはどうにでも變へられる譯ですが、併し母のあゝ云ふ風な暮し方は、――あれはなにかの昆蟲がそれの特殊な習性で生きてゐるやうなものなのです。母自身の責任でもなければ、贅澤でもない、たゞ最も自然なのだと考へて見て下さらないでせうか。實際また人が性情や好みで、それ〴〵氣に入つた暮らし方をするのは一つの自由なのですから。』

『そんな自由を、この世の中の人が仰しやるやうに皆んな持つてるとお思ひになつて。』

成るべくそつとして置かうとしたものが、眞知子の內側で炸裂した。河井が茫然として、母に似た高貴な、もの靜かな眼を見張つたほど性急に、彼女は疊みかけた。『決してさうぢやありませんわ。持つてるのはあなたや、あなたのお母樣や、お仲間のお金持や貴族だけですわ。そんな人だけ、そんな氣樂なことが仰しやれるのですわ。でもいつまでそれが續くでせう。同じ自由と權利を奪はれた人たちが、今はれたものを取り返さうとして戰つてゐますわ。それ〴〵氣に入つた暮

らし方をして、それで誰をも虐げない社會を作り出さうとして、首になつたり、××に投げ込まれたり、學校から追ひ出されたりしてますわ。その中でどうしたら一萬年前の人間の使つたがらくたなんぞ問題にしてゐらつしやれるかともふと、――勿論學問としては必要であり、立派なことであるにしても、私の今の氣持では、お母樣のお誠のお相手が勤まらないと同じに、あなたのさう云ふ生活のお招伴をしようとは思ひませんわ。』

求婚の拒絶と云ふより、それは一つの宣言であつた。同時に河井に向つて發せられたと云ふより、彼の立つてゐる機構、富と權力の底に壓搾された潜熱の必然的爆發により、支柱の一本々々がすでに火になりつゝある、どんなアトラスも擔ひつゞけることの出來ない世界に對する、彼女の決然たる離別であつた。

眞知子は立ち上つた。云ふだけ云つてしまつた時自動車が門に留まつた。彼女は雨の音と、爐のほのかな炭火と、電燈の暗い翳の沈默に彼を見捨て、部屋を出た。

三

『昨晩は變にしよげてゐらしたのね、河井さん、待つてなすつた間もあんな風だつたの。』

『あんた風つて、變つてらしたか知ら。』

『まあ、氣がつかなかつたの、呑氣な眞知子さん。』

細く尻下りに、流行のひき方をした眉で、鏡の中の嫂は笑つた。

眞知子は手傳つてウェーヴを直してゐた。雨のあとの燦々とした朝の日光が化粧部屋の窓にあつた。

眞知子は彼を見ないですむやうに、嫂たちが歸ると先に床に就き、すぐ眠つてしまつた。三十分とゐないで歸つたことさへ知らなかつた。

『なんでも外國へまた出掛けたいやうなこと云つてらしてよ。』

嫂は鏡臺の横の火鉢から鏝を取つて渡しながら、河井の噂をつゞけた。『私ですから云つてあげたの、それもおよろしいけれど、その前に早く御結婚なさいよ、そして奥樣と御一緒にいらつしやいましよつて。』

『それがいゝわ。』

昨夜の顛末は思ひ出してもゐないかのやうに、狡くしらばくれ、眞知子は訊いて見た。『で、なんて。』

『その方はごまかしちやつたの。たゞ母が淋しがるから籠るつてこぼしてらしたわ。あれぢや幾ら他から御膳立したつて、多喜子さん駄はなささうね。』

『さうか知ら。』

『斯んな氣も私にはするの。――そこんとこ細くかけて。えゝ、いゝわ。――河井さんは半分向うで育ちなすつたから、日本のお孃さんぢや喰ひ足りないんぢやないかつて。歸つて一年にもならないのにまた入らつしやりたいなんて變ですもの。きつと向うにあてがあるのだともふわ。でなければ、多喜子さんはあんな可愛い方だし、お母樣のお氣に入りだし、殊に河井さんが默つて愛してるやうなお孃さんと云つても、今のところないのは分つてるんだし、――あら、笑ふの、眞知子さん。』

『だつて、お嫂さまつたら、』

不用意に、自分を裏切つて落した鏡の上の嘲笑を、急いで始末しようとして、『ひとりで極めてゐらつしやるから』

『ぢや、そんなお孃さんでも河井さんにあるのだともつて。』

『ないつて斷言出來ないでせう。』

眞知子は今度は大つぴらに笑つた。

嫂はもし河井にそんな秘密があり、殊に萬一にも外國婦人なんぞであつたなら、彼の母をはじめ周圍の人々はどんなに駭くか知れないと云つた。併し眞知子は信じた。その假想された戀人が八月の紫陽花ほど碧い眼をしてゐようとも、彼が彼女に結婚の申込をした以上に、皆んなを喫驚らさせはしないであらう。

夜降つて、朝晴れる、五六日癖になつたその反覆で、春が成長した。曾根家の庭にある數本の古い櫻もすでに花であつた。おひ〳〵歸つて行く日の近づいた嫂は、花の美しい間に身うちだけの客をしようとした。前日、こま〴〵した買ものゝため、眞知子は下町へ行くことを頼まれた。

二つの百貨店から菓子屋に行き、それから寶石屋へ廻つた。電話で要領をえなかつた嫂の襟留が、意匠通りに作られつゝあるか調べ、また期日までに仕上げられるやうに嚴命しなければならなかつた。赤入りのネクタイで、かぼそい頸に咽喉佛の飛び出た店員は、眞知子がなにか云ふ度に、女のやうな科をして頭を下げた。用事はすんだ。重い研ぎ硝子の一枚戸を押し、眞知子は銀座の心臟に立つた。

半哩足らずの、この舗道から發散する、東京の尖鋭的魅力とされつゝあるものに對しては、眞知子はむしろ批評家であつた。けちな、間に合せの、混亂と不秩序のほか特長のない、その安つぽい通りを最上に美化してゐる所謂銀座人の幻想と自己陶醉が、時には滑稽にさへ感じられた。

とは云へ、雨のあとの白く光る石だたみを踏み、飾り窓の前も、カフエの卓も、まだ清らかに閑靜た午前の銀座を、それだけ一つ持つて

歸ることにした輕い包紙を提げて歩くのは、一種長閑であつた。その上關を訪ねた日から、彼女はまだ外出しなかつた。

街路樹の下の四角な植込に連翹が咲いてゐた。鬱金いろの小さい同じ花は、田端の植木屋の垣根にも群がつてゐた。その日の苦い思ひが酸の増した胃液のやうに彼女の意識に分泌された。胸いつぱいの涙で、氣狂ひ病院の上の坂道を逃げ降りた自分自身を、眞知子ははつきり描くことが出來た。同時におなじ夜の河井との交渉は、苦澁な追想につながるだけ、一さう奇妙な、馬鹿々々しいものに見えた。實際彼女に取つて、それは一場の笑劇以上ではなかつた。

電車側に斜に連り、わざといつまでも彼女を拔かなかつた二人の三田の學生を、無遠慮に突つきり、不意に誰かゞわめいた。

『なにぼやく〳〵してんの。』

A――子の好みの惡い青い帽子と、大きな光る眼鏡が、前にあつた。

『――氣がつかなかつた。』

『銀座の二丁目歩いてるつて風。恥辱だわ。』

『以後は注意します。』

『ぶうだ。』

A――子は、その銀座二丁目で、生徒控室式の笑ひ方をした。

彼等は連れになつた。ひとり行くよりは確かにずつと銀座らしい漫歩であつた。でなくも米子に別れ、學校から閉め出され、母と兄と嫂と、氣持にも身體にも手數のかかるその客の間で暮らしてゐる眞知子には、彼女の時々わざと男のやうな句調をする話ぶりや、特殊の技倆で相變らず色んな噂をかき集めてゐる、多分三分の一は間違つてゐるお饒舌にも、どこか遠くに沒した故郷の方言を聞く懷かしさがあつた。

舖道で殘されたものが、ちよつとしたカフヱの卓へ持ち越された。寢坊して朝飯を拔いたA――子は活潑な食慾で、眞知子は半分おつきあひで、一緒に食事をした。すむとA――子が機敏に支拂つた。

『そんな法てないわ。』

『まあ任かせておくもんです。』

眞知子の異議を、彼女は例の男ことばで一蹴した後、不統一を云ふと意外な收入があつたので、京橋まで歩くうち誰かに出逢つたら、昨日喧嘩した人でも奢る氣でゐたのだ、と話した。

『婦人評論に匿名でちよいとしたものを書いたとこが、運よく原稿料を貰へたつて譯なのさ。』

『なら、もつと御馳走させてもよかつたのね。』

『この次します。あの主筆を先から知つてるんでね、編輯の方へ働かないかつて云つてくれるの。』

『いゝ塩梅ぢやなくて。學校の方は駄目になつたんだし。』

眞知子は洋銀の小さい籠から取つたつま楊子をおもちやにして折りながら、A——子の仇名をよい意味で思ひ出してゐた。『そんな才能あなたには十分あるともふわ。』

A——子は出來たら福岡に行つてX——教授に就いて見たいのだけれども、と云つた。

『まあ諦めて働きますよ。要するに聽講生なんてものは、あなたのやうなブルのお孃さんたちにはお誂へ向きなんだけれど——』

『人聞きのわるいこと云ふわね』

『わるくてもよくても、ブルの事實や蔽ふべからず。』

『——』

釣錢を盆に載せて來た、娘のやうな顏をした少年の給仕がうす赤い瞼の眼を張つて目送したほど唐突に椅子を離れ、眞知子はさつさと戶口へ進んだ。おもてへ出ても、笑つて追うて來たA——子をすぐにはふり返らうともしなかつた。

家の方へ曲る角の交番のうしろから、海色のパッカアドが傲然と電車路へうなり出た。停留場から二三步あるきかけたばかりの眞知子に、窓の內側の知つた顏がちらと白く透いて見えた。彼女はそのため足を留めようとはしなかつた。電車からいつしよに下りた四五人がまだ散つてゐなかつたし、それにトラックが一台、出鼻を遮られて前を塞いでゐたので、向うでは多分氣がつかなかつたであらう。それなら却つて仕合せであつた。

が、自動車は線路の向側から、急カーブで引つ返して來た。運轉手の內野が敏捷に飛び下り、交番に沿うて曲らうとする彼女に追ひついた。

『まあ、眞知子さん、今までお待ちしてたんですよ。』

後の花屋の前で、倉子は彼女のために戶を開けてゐた。『お晝ごろには歸つてゐらつしやるやうな孝子の話でしたから。』

『銀座で友だちに逢つて。』

『實は今日こそゆつくりあなたにお逢ひして行きたいと思つたのですけれど、これからN——伯爵のお茶の會で、どうしても外せませんのでね。』

『なにか御用事でしたら、伺つてまゐりますわ。』

『いやな眞知子さん、』

若いひとのするやうな表情で、倉子は輕く睨む眞似をした。『往來の立ち話でもすむ用事に、朝から三時間もあなたを待つたとお思ひになつて。——とにかく、お母樣と孝子までによく話しておきましたか

ら、お歸りになればどんな用事で私が今日伺つたか、またあなたつて方がどんな運のよい生れ合せかつてことがお分かりになりますわ。』

倉子は、どうかして相手を間違へたのだと思はれるほど慇懃にそれを云つた。出來たらもつと話したいらしかつた。が、自動車のうちと外で、殊におもて通りで、人目を刺戟しないでそれ以上會見をつゞけることは出來なかつた。倉子は明日逢ふのを樂しんでゐる旨をおしまひに附け加へ、やつと、眞知子に屈みかけてゐた上半身をもとの位置に戻した。

『それでは。』

『さよなら。』

うしろに駈け去る爆音を聞き捨て、倉子の今日の態度と言葉の意味を眞知子は歩きながら探つた。むづかしいことでもなかつた。それまでの例により、倉子が親密と接近を示す場合は、一つの極きつた目的によることが分つてゐたから。併し不斷なら見つけても知らぬふりで駈け過ぎた筈の彼女が、わざ〳〵乘物を返してまであんな世辭を使つて行つたのは何故か。たしかに特別な仕方であつた。が、眞知子の關心はそんなことよりもなほ胃の腑にある、A―子の支拂つた三皿のランチに強く殘されてゐた。原稿料の代り、バアの女の契約金でそれがあつたとしても、價値を割引する氣にはなれなかつた。バアはもちろん、雜誌社で働くことさへ許されやうとは信じられない境遇が、その收入の貴重さを眞實に思ひ知らせた。學校ではいゝ加減馬鹿にしてゐた、ちやらつぽこやのA―子の前に、あはれに無能な自分を眞知子は今日感じてゐた。

『やつと歸つてらした。』

『大さうまた遲かつたのだね。』

母がめづらしく娘の部屋で話し込んでゐた。不意に開けた彼女に對する二人の迎へ方にも、常にない或るものがあつた。大さうまた遲かつた――それさへ勞はりの調子で響いた。

『田口の叔母樣が是非あんたに逢つてからつて、今さきまで待つてゐらしたのですよ。』

『お逢ひしたわ。』

『おやさう。』

堯子はその母が敷いたまゝになつてゐた座布團を、義妹に裏返した。『どこんとこで。』

『花屋のまへ。』

『なら、ほんの一と足違ひでございましたわね、お母樣。』

母も殘念がつた。

二人はちよつとしたことで昨夜から氣まづい顏をし合つてゐた。眞知子が買物に出る時まで、母は欝憤をひそかに娘に訴へ、堯子がはづんでゐる明日の客をも、餘計なことだとけなした。その彼等を二三時間の留守になにが妥協さしたのか。——田口夫人の見せた不思議な懇親と、それは容易に結びつけられた。が、知らぬ顏で、眞知子はまづ買物の結末をつけようとし、殘つた金と受取を紫檀の小さい茶卓に並べかけると、嫂は横から引つたくつた。それどころではない重大な用事が、彼女を待つてゐるのだと云つて。

『あなたの御縁談。』

『——』

寧ろ違つた用事であつた方が、彼女を驚かしたであらう。

『をかしくもないつて顏ね。』

堯子はふり返り、意味のある微笑を未亡人に送りながら『でも誰があなたを欲しがつてゐらつしやるかつてことが分つたら、決して冷淡にはしてらつしやれないわ。ねえ、お母樣。』

『さうですとも。今度の話をまた何とか云ふなら罰があたりますから。』

『大變だわね。』

『それくらゐ云つてもいゝのよ、眞知子さん——ね、考へて御覽なさい、きつと見當つきますわ。』

眞知子は分らないと答へた。仲人役の第六感で、飛んでもないところから田口夫人が絶えず探し出して來る相手を、想像し得る筈はなかつた。が、嫂はすぐそれを打ち開ける代りに、興味あるメンタルテストを容易に捨てやうとしなかつた。

『分らない筈はないのよ。あなたが知つてらつしやる方だもの。』

『なほ分らないわ。』

『おやお兄樣がよく褒めてる方。』

『分らない。』

『學者で、お金持で、——』

『——』

『それで綺麗な方。』

分らないとはもう云へなかつた。が、矢張り分らなかつた。河井が今になつて田口夫人を通じてそんな申込をする氣にどうしてなつたのかは。——眞知子はそれでも三秒と空費せず、答へた。

『その方なら、私お斷りした筈です。』

『だつて、眞知子さん、』

嫂の顏にあつた笑が、疑惑と狼狽で抹殺された。『勘違ひしてゐるんぢやない。私河井さんのこと云つてるんですよ。』

『私も河井さんのこと云つてるんですわ。』

『そんな譯はありませんよ、眞知子。』

一そう眞劍な懸念で、なにか云はうとした堯子を遮り、未亡人は口を入れた。『今日はじめて田口の叔母樣からそれはあつた話で、あんたは斷つてやつと知つたくらゐのことぢやあないか、それに自分でもう斷つたなんて、そんな出鱈目を云つて。』

『出鱈目かどうだか、河井さんが私の返事はよく知つてらつしやるわ。』

『ぢや、眞知子さん、』

未亡人に邪魔された質問を、堯子は急いでそこに挾んだ。『河井さんがなにか直接に話したことがあるの。』

『えゝ。』

『いつごろ。』

『鎌倉へ入らした晩。』

堯子はにたりと、彼女に向けた右の眼だけで、蒼白くほゝ笑んだ。

それで、あの朝上手に白らばくれてゐらしたのね。——

眞知子はそれより、そんな打ち開けをさせられることの、一種腹立たしい厭惡で云つた。『その時はつきりお斷りしたのですもの。それに田口の叔母樣からきた話させるなんて、河井さんらしくもない——』

『いゝえ、それだけは誤解よ、眞知子さん、今日の話は河井さんのお母樣の一存に出たことで、河井さんには內證らしいの。』

なほ譯が分らなくなつた。眞知子の無言の質問に對し、嫂は聞いただけを傳へた。

河井の母は、息子の對象が自分のひそかに期待してゐたものよりは意外な相手にあつたことを、母らしい愛と敏感で見出した。結句母もまた息子の擇んだものを悅んで擇まうとした。ところが最近彼はすつかり失望しきつてゐる。理由は母にも話さうとしない。もし眞知子に彼等の知らない婚約でもあつたのであらうか。この憂慮が母を迫き立てた。で、田口夫人によつてそれを確かめると共に、內々の申込を依賴した。——

『あのお母樣が昨日、それも夜になつて目白へ入らしたのだつて。母なんか驚いてたのよ、眞知子さんはなんて仕合せな方だらうつて、ねえ、お母樣。』

『いゝえ、このひとはどんな仕合が來ようと皆んな斯うして取り逃すのですよ、強情の分らず屋ですから。』

殊に二度と近づかうとは思はれない幸運であるだけ、未亡人は娘の無思慮が諦めかねるらしかつた。『だいち、そんな大事な話を自分で勝手に斷つちまふなんて、そんな出過ぎたことを平氣にして——』

『だつてお母様、私だけのそれは問題で、ほかの人には關係のないことぢやない。』

『何ですつて、眞知子、もう一遍云つて御覽。』

百遍でも云つてやれた。眞知子は我慢した。すでに額の筋を青く張り、涙聲で鼻を詰らせてゐる母をそれ以上ヒステリにしないために。同時にまた母娘の正面衝突を内心おもしろがらないではなく見てゐる嫂に對して。が、尭子は義母の味方としての立ち場を捨てないで、眞知子に愼重な考慮を促した。

『お母様もあれほど殘念がつてゐらつしやるんだし、誰だつて今度の話だけは惜しいんですから、もう少し考へて見ることになすつたら。』

『本人に直接斷つといて、そのお母様から話があつたから考へ直すなんて、そんな變なことお嫂様にだつてお出來になる。』

『でも田口の母としては、何とかあなたの返事を持つて行かなきやならない譯よ。まさか、御本人にお斷りをいたしてあるさうでございますつて、云はれもしないでせう。』

『本統はさう云つて頂くのが一とう簡單ですわ。』

この言葉が母の興奮を沸騰點にした。これも少し怒つた嫂の無言の協力で、いつも斯う云ふ場面の最後に繰り返される訊問がはじまつた。これほどの相手の何が不足なのか、どこが氣に入らないのか。—

『その年になつて、あんたもたゞ厭だの、結婚したくないのつて云ふんぢやないだらうから、ちやんと筋道の立つた理由を云つて御覽。田口の叔母様にお願ひして、先方にもその通り返事をして頂くから。なぜ默つてるの、眞知子、云へないのかい。』

眞知子は彼女の戰術を守つた。脣を一つの線にして默りつゞけた。拒絶の理由を、河井に云つた通り正直にそこで發表しようとは思はなかつた。もし發表したとしても、田口夫人に取つては今一つの持つて行きにくい返事よりも、數倍持つて行きにくい返事にそれはなつたであらう。

明けの日の客には、丁度風邪を引いてゐた芝の辰子と、關西方面に出張中の、ひとりではない證據の上つてゐる上村の外には、重な親類が殆んど集まつた。彼等は着いて十五分とたゝないうち昨日の出來事をひとり殘らず知つてゐた。花見の趣向で配られた櫻の模樣の手拭を帶に挾んだり、頸に卷いたりしながら、彼等はなにか不幸の悔みでも述べる調子で交る〴〵未亡人を慰めた。田口夫人は一時間半眞知子を離室に隔離し、彼女の結婚哲學を說いた。おしまひには面と向つて惡口を云ひ、眞知子のやうな娘は見たことも聞いたこともないと云つた。

それ等のすべてに拘はらず、ひそかな共通の現象を眞知子は見逃さなかつた。すべての客は、殊にすべての女客は、仲人役の田口夫人すら、また嫂の堯子すら、極端に云へばあの氣のよい富美子すら、眞知子が河井と結婚しないのを殘念がるより悦んでをり、ほつとしてをり、それで落ちついて今日の御馳走を食べてをり、本氣に嘆き、落膽してゐるのは、片面サロメチールだらけにして靑褪めてゐる彼女の母ひとりきりであることを。

四

氣狂ひ病院の黑い塀の中に、瘦せた櫻が一本咲いてゐた。勾配の急な、どこか土藏の感じを持つ病舍の屋根の片側に、夕陽があつた。氣狂ひは默つてゐた。道には靑い草が萌え、崖の樹木は春の若い樹脂の香を放つた。

ねずみの薄い春着になつて一さう細つそり見える眞知子は、通りからその裏道へ出ると、頓てちよつと靴の爪先で立ち留まるやうにし、淺い帽子の下の眼をまつ直ぐにした。十數日前、二度とは踏まないと思つて驅け下りた、今日もその決心を捨てるか捨てないかを思ひ惱んだ坂道が――終に前にあつた。

眞知子はポケットを上から摑んだ。竪に二つに折られて入つた葉書、それには、今日の四時過來て貰ひたいと云ふ意味を三行書いてあつただけで、彼女の拒絕や都合は顧慮されたあともなかつた。はじめ讀んだ時には眞知子は疊に放り出した。が、すぐ拾はれた。結句その坂道が――終に前にあつた。

そしてまた間もなく、その家の剝げた戶が。――

眞知子は山吹のしんに似たベルに指を當てた。いつもほど素つ氣なくではなかつたが、今日だけはその位あつてもよいと思つたほど愛想よくも迎へられなかつた。

關は脊廣で、外から歸つたばかりのやうに、黑い帽子が机の上に投げ出されてあつた。

『葉書のご用事はなに。』

圓い茶卓の方へ、彼が自分の椅子を引つ張つて來たのを待つて、眞知子はすぐ訊いた。

『一つ當てて御覽なさい。』

『大阪からなにか云つてらしたんでせう。』

眞知子はそれに極めてゐた。米子のこと以外に彼と交涉はない筈であつた。が、關は答へた。

『そんなことぢやないんです。』

彼は机の方に去り、抽斗から大型の嵩ばつた、白い洋封筒の手紙を

持つて來て眞知子の前に置いた。封が切つてあつた。住所は違ふが宛名は關の名前で、右上りに癖のある、達者なペンの書體には見覺えがあつた。

『これ拜見するのですか。』

『どうぞ』

裏を返して見た。義兄の山瀬からであつた。

『關君、この間から君に手紙を書きたいと考へながら、アドレスが不明で困つてゐたところ、先行社の社會科學叢書の廣告に君の名前を見出したので、早速社宛に書くことにした。

先づ率直に用事から話さう。外でもない僕の義妹の曾根眞知子に關することだ。彼女はこの間河井輝彦氏から結婚を申込まれ、それを拒絶した。(そのことは君は既に十分御承知のことと信ずる。さう僕を推定させる理由はいづれ後に書くが。)彼女のこの無謀な仕方は、家族をはじめ親族一同を非常に失望させてゐる。殊に老母はそれ以來殆んど病氣の有樣らしい。僕の妻に來た手紙には、斯んな思ひをして永生をするよりは死んだ方がいゝ位だとまで書いてあつた。無理はないのだ。眞知子はこれまで結婚問題では老母を惱まし盡してゐたし、思想的傾向から云つても親類ぢうで危ながられて、老母としてはどこでも構はないから早く片づけたいと念じてゐた際の縁談なのだ。河井氏には君をも紹介したから概念があると信ずるが、立派な學者で、非常な金持で、あの通りの男振りだ。河井家の一族の强大な資本的權力に對しては當然敵である君自身にしても、河井氏個人の人物には敬意を惜まないだらうと思ふ。全く老母に取つては天から降つた婿なのだ。それを眞知子が平氣で斷つてしまつた。長姉の辰子はいつも眞知子を庇ふ方だが、その姉すら譯が分らないと云つてゐる。さうだ、譯が分らない、皆んなさう云つて呆れてゐるだけだ。併し僕だけはすぐ分つた。(自慢ではないが、僕は斯ういふ直覺力に就いては些か自信があるのだ。)この事件の後には君が潜んでゐることを僕は看破した。

眞知子は君との間はほんの知合ひで、友達でもなければ勿論同志でもないと極力否定したに拘はらず、僕は信じなかつた。若い男女が知合ひになつた以上友達でない譯はない。また君たち階級戰線の鬪士に於て單なる友達と云ふものがある筈はない。僕は君と眞知子との秘密な連鎖を認識する。そして多分河井氏への拒絶も、ライヴアルとしての君の私情と、同時に資本家の代表的權威者に對する君の反抗が、彼女を暗々裡に指導したのだと信ずる。否、否、僕はそれ等の一切の推理と直覺を放擲しよう。さうして彼女が東京で僕に

公言した如く、君たちは輕い知合ひに過ぎなかつたことを信ずるとしよう。僕はそれを約束する。同時にその約束の下に於て、關君、僕は君に乞ふ。眞知子を說得して河井氏と結婚さしてくれ給へ。君だけがその力を持つてゐるのだと云ふことを考へてくれ給へ。さうすれば老母をはじめすべての親類が胸を撫で下すだらう。眞知子自身としても幸福になるに相違ない。彼女の程度の左傾化は、今の日本に於ては流行性痲疹の如きもので、若いものは誰も一度かゝるのだし、さうして頓てけろりとするのだ。生徒主事としての經驗から這般の經過は僕が最もよく知つてゐる。同時にまた君は知つてゐる筈だ。君たちの鬪爭が當分の間如何に困難な戰であるかを。もし君が少しでも眞知子を愛してゐるなら（この言葉は取り消す、約束に依つて）少しでも好意を有するなら、血の降る荊棘の道に、彼女を誘ひ込む代りに、その前に開けてゐる平和にして幸福な結婚の方へ導く努力を惜まないだらうと思ふ。中學時代に既に君が示した叡智と聰明に信賴してこれを乞ふ譯だ。

併し誤解されないために一言附加しておくが、斯うは云つても僕は君たちの思想及び行動に對しては無理解ではない。決してそんな時代後れではない。反對に共鳴と、感激を持つてゐる位だ。これまでも新しい主義思潮に敏感であることが僕の特長であつた。斯んな田舍にゐても僕が退歩しないのはそのためだ。打ち開けると、この間の總選擧でも、校長の眼があれほど光つてゐなかつたら極左黨の×—氏に投票したかつたのだ。が、如何せん僕の職務が僕を束縛してゐる。めつたなことは出來ない。斯う云ふことを君に書くことさへ非常な危險だ。讀んだら火中してくれ給へ。繰り返して云ふ、すぐ燒いてくれ給へ。他のことは兎に角として、それだけは何より大事だから忘れないやうに賴む。——』

驚き、恥ぢ、憤り、——同時にかすかな憫みを交へた可笑しみ。

——それ等の群がり縺れた感情で、さうして顫へる手で、手紙をもとの通り疊んで封筒に入れると、讀んでゐた間彼女の顏から眼を放さなかつた相手をしづかに仰いだ。

『それで。』

『結婚するんですな。』

關は冷然と數學教師のやうに答へた。

『私をお呼びになつたのは、それだけの忠告。』

『まあ、さうです。』

白く、齒型のつくほど、眞知子は脣を嚙んだ。

『——手紙にあつた通り、忠告することを依賴されたのだし、また大體に於て山瀨さんの意見には僕も贊成です。』

『……』

『河井氏なら最も適した相手ぢやありませんか。あの人はあなたを幸福にしますよ。ですから早く結婚して、皆さんを安心させるんですね。』

『あなたがどんな親切な方かつてこと、今日こそ、はつきり分かりましたわ。』

彼女は立ち上つた。山瀬の手紙を摑んだ。ずた／＼に引き裂いた。投げつけてやりたい。──怒りで紫に燃えた眼に、關の不意な當惑の顏が、斑點の如く映つた。と、何かゞ彼女の組織のしんで挫折した。丁度今ずた／＼に裂かれた紙片のやうに。彼女は椅子に倒れ、顏を兩手で蔽うた。身體ぢう嗚咽になつた。

『どうなすつたんです、眞知子さん。』

關の初めていたはりを帶びた聲が、肩の上で響いた。眞知子は何度も泣きやまうとして、むせび上げた。顏を蔽うたまゝ、細い指に傳はる涙の中で、きれ／＼に云つた。

『兄の手紙は半分ほんたうです。──河井さんを斷つた時、私はあなたを考へてゐたのです。いゝえ、いつだつて、いつだつて考へてゐたのです。今の生活から私を救ひ出してくれるのはあなただつてことを。あなたに依つてだけ、私は生き直されるのだつてことを。』

關は引き緊めて少し歪みのついた頰を傾け、動じない眼で、彼女の告白を聽いた。さうして何とも答へないで、そのまゝ再び椅子に引つ返しさうにした。と、盲目的の衝動で、眞知子は反ね上り、飛びついた。關はちよつと蹌踉めき、寧ろ優しく受け留め、兩手を彼女の肩に置き、涙で薄赤く濡れた顏を眺めた。

『自分の云つてることが、どんな重大な結果を持つかあなたは分つてないんだ。』

『分らないで、私がなにか云つてるとお思ひになる。』

『いよ／＼となつた場合の實行を僕は疑ふ。あなたを疑ふとよりは、あなたの血を信じない。』

『それが持論ね、あなたの。プロレタリア以外の血を信じないことが。──でも』

彼女は肩の兩手を自分の二つの手で抱き、それを胸に壓しつけた。

『私のたつた一つ持つてるもの、誰にも分けなかつた、あなたの爲だけに取つておいたものまで信じないとは仰しやらないでせう。』

關は云ひかけて、云はなかつた。彼の蒼白な顏に今まで決してあらはさなかつた何かゞ浮かんだ。

『もし私の血に必要な勇氣が缺けてゐたら、それが血の代りをしてくれますわ。』

眞知子は涙の乾燥した、きらきらする眼で續けた。『あなたの新しい同志としての資格を、それが十分つくつてくれますわ。あなたの憎むものを私に憎ませ、あなたの戰ふものと戰はせ、あなたの行くところへ、ついて行かせますわ。』

それが何であるかは口に出さうとはしなかつた。出せば厭味な、微臭い、中世期風の安易と牧歌と、逸樂の響をその言葉は伴ふ懼れがあつた。彼女は全く別なものを覺悟する。貧困を、飢餓を、一つの黒い壁に對する絶えざる戰を、留置場を、刑務所を、治安維持法を。——說明の必要はなかつた。

關は顏を眞知子の顏に重ねた。唇のまん中に、堤を切つた烈しい熱情で、一切の承認をした。

外の樹木に時々鈍い風のけはひがし、すり硝子の廣い窓が薔薇色にくろずんだ。部屋はうすい闇になつた。それでも、すつかりは暮れてしまはない、どこか暖い夕陽の一片が隱れてゐるやうな、春の長い黄昏であつた。郊外によくある呑氣な故障で、電燈もつかなかつた。

眞知子は椅子の下に小暗く坐り、頭を關の膝に置いた。彼女は今はじめて幸福であつた。戀の單なる勝利ではなく、牢獄を脫け出た、足の鎖をやつとはづした囚人の滿足にそれは似てゐた。彼女は樂しげに輝く眼で、脫獄の共犯者を眺めた。

正しく關は共犯者で、援助者ではなかつた。彼等の愛人らしい告白の交換が、それを明白にした。關は眞知子が絶えず彼を意識してゐたと同じに、絶えず彼女を意識してゐたことを打ち明けた。はじめて彼女を見た日、すでに今日を知つてゐたとさへも。

『それなのに、どうしたら、』

彼女は一さうの悦びと驚きで、同時に少し怒つて膝の上の頭をあげ、彼を非難した。『あんな冷淡な風してらしたの。意地惡ね、ほんたう。あなたくらゐ意地惡はないともつて、いつも口惜しかつた。』

『もつと意地惡になれたら、係蹄にはかゝらないんだ。』

『どちらがかゝつたのか知ら。』

『僕だとも。』

彼は兩手で彼女の顏を挾み、笑つた眼と、唇を壓しつけた。

『兎に角あなた見たいなお孃さんは、どんな關係に於ても僕等には厄介なお荷物なんだから、極力避けなくちやならなかつた。』

『うそ。避けたのぢやなく、お仕舞にしつかり掴まへるために、わざと何度も放しただけよ。ね、今日分つちまつたわ。』

『幾ら避けても新しい係蹄がおかれたのだ。』

そんな惡口を云へばもうゐてやらないと眞知子は云つた。實際もう

歸らなければならなかつた。部屋は殆んど暗くなつた。

『ね、放して。』

反對に強く緊めつけられた。

『ほら、かゝつてるのは誰。』

眞知子はその係蹄の中で身悶えをし、朗らかに少年のやうに笑つた。明日また來る約束をしてもいゝと云つた。

『ですから、もう歸して頂戴。』

『明日は僕ゐない。××の爭議の應援に行く。』

『ぢや手紙を書くから。』

『下らない。』

『あら、どうして。』

『――』

低い、調子の破れた、どこか崖下の氣狂ひに似た叫びが耳を打つた。と、丁度その氣狂ひと同じ形相のものが猛然と蔽ひかぶさつた。彼女は驚き、しなやかな身體で藻掻き、倒されまいとして爭つた。爭つた。恐怖が誰であるかを忘れさせた。寧ろ誰をも見なかつた。彼女はたゞ男性をはじめて見た。

『馬鹿。』

暗がりで、らん〳〵とまだ燃えた眼で、まつ青な、歪んだ笑顔で、關は向うの書棚の隅に逃げ込んだ眞知子を見た。『いつまでそんな所にゐるんです。』

『だつて――』

悲しげに、美しい頸をあげ、容易に避難所から出ようとしないで彼女は云つた。『電燈をつけて。――ね、さうしたら行くわ。』

關は机の上に引いた電燈のスヰッチを亂暴にねぢた。黄色い更紗模様の笠が、同じ形の影を天井の壁紙に大きく投げ、煥然と明るく點つた。

『怒つた。』

眞知子は輕捷に、なにか一變した部屋を横ぎり、近づいて覗き込んだ。『機嫌を直して。』

横に向いたまゝ、振り向かうとしないで、關は明かな嘲罵でつぶやいた。

『紋付で日比谷へ行つて、帝國ホテルでお客をしたきや、結婚ぢやないともつてる。』

『いゝえ、さうぢやない。』

彼女は濕つぽく熱した彼の首に手を廻はし、無理に自分の方へ向かせた。『違つてるの。あなたと結婚した以上もう家には歸らない。――たゞさう思ふだけ。卑怯でもなければ、怖いんでもないわ。女の恥

癖。さう云つてもいゝわ。この氣持、男のあなたには分らないのよ。ですから今夜はこのまゝ歸して。ね、その代り明後日の晩きつと來るわ。みんな始末つけて。』

『氣の長い奴だなあ。』

短かく、かすれた聲で彼は笑ひ、亂れた長い頭髮を額からあげた。

『明日は駄目だつて云つたのぢやない。』

眞知子はそのぞんざいな、親しい言葉がめづらしく、愉しかつた。

『ですから明後日まで待つのよ。待つと云つて。――ね。それから序でにもう一つお願ひ。』

『何だ。ひとが讓歩すればすぐつけ込んで。』

『だつていゝの。花買つて。』

『花。』

『私買つて來てもいゝけれど、あなたに買つといて頂きたいの。――紋付で日比谷へ行かなくとも、ホテルでお客をしなくとも、花ぐらゐいゝのぢやない。私たちの結婚にだつて。』

『むしろ、君のブルジョア生活とブルジョア趣味への訣別として買はう。』

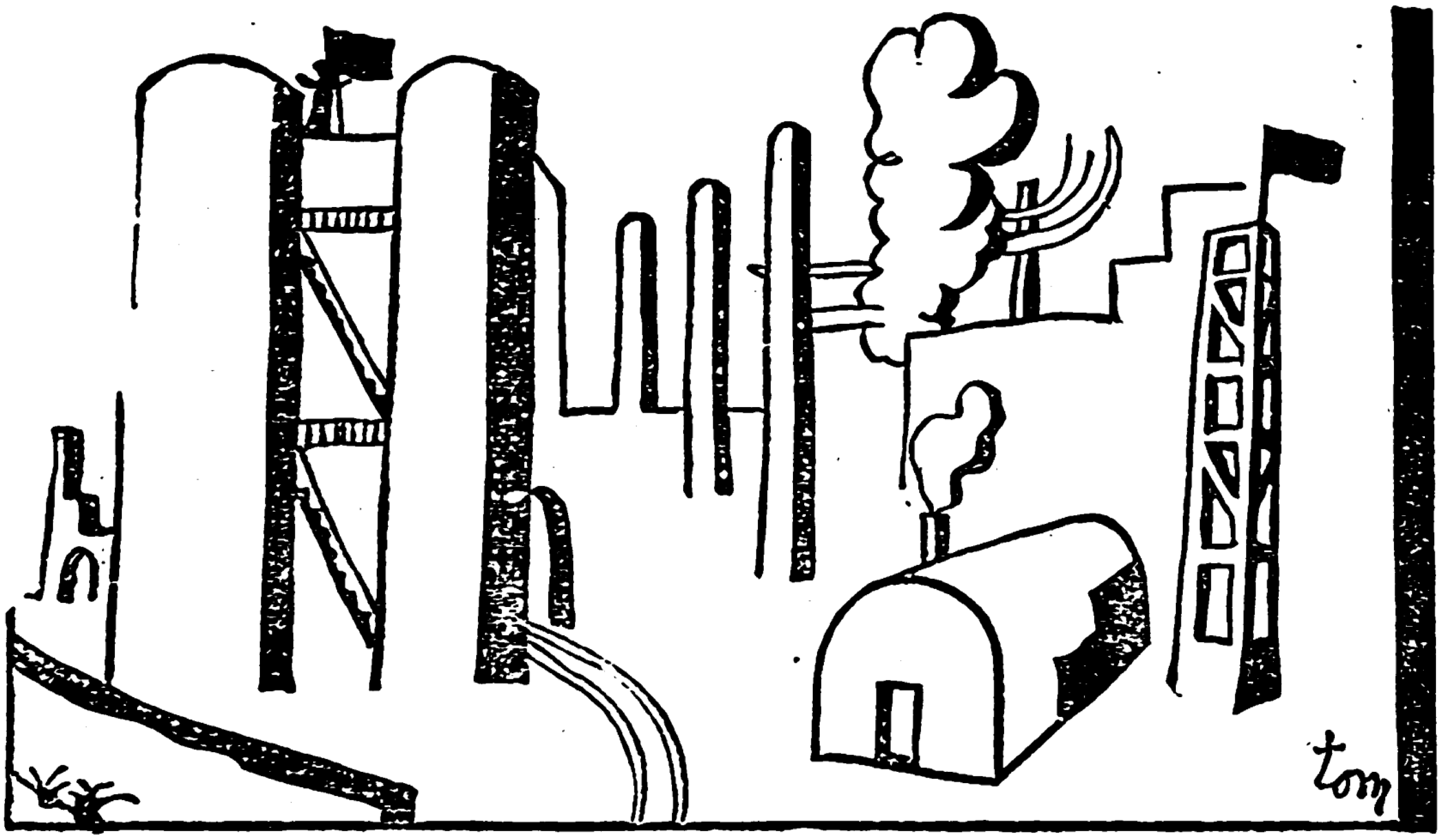
『結婚よりお葬ひの花だわ、それなら。』

眞知子はのぼせて汗ばんだ顏を反らし、潑剌と笑つた。どちらでもよかつた。彼女の場合、二つのものは同意語であつた。

『なにの花でもいゝわ。今ごろ咲いてる綺麗な花なら。その代り慾張つてたくさ――』

男の性急な強い唇がおしまひまで云はせなかつた。彼女は與へた以上に多くを與へられたことを一層たしかに感じた。繰り返して云ふ、彼女は今日はじめて幸福であつた。

――眞知子のつゞき――



工場細胞

小林多喜二

下

17

その夏は暑かつた。しかし秋は雨と氷雨が代り番に續いて、港街が荒さんだ。冬がくると、秋のあとをうけて、今度は天候がめづらしくよかつた。が、天氣が續けば、除雪の仕事もなくなつて、勞働者は瘠せなければならない。

港の勞働者の生活はその上、政府の緊縮政策のために、更にドン底に落ち込ませられた。——「親方制度」「歩合制度」の手工業的な搾取方法を昆布巻きのやうに背負込んでゐる勞働者たちは、假りに港に出て稼げても、手取りは何重にも削り取られて、半分になつて入つてきた。歩合制度になつてゐながら、親方は「水揚高」取扱高）の公表もせずに、勝手にごまかして、そのゴマかした高の何割しかくれなかつた。金澤が石炭現場に積込機械を据ゑつけてから、パイスキを擔いでゐたゴモ

が五十人も一かたまりに失業した。

女房たちは家の中にヂッとして居れなくなつた。然しポカンと爐邊に坐つてゐれば、坐つたきりで一日中さうしてゐた。呆けたやうになつてゐた。何も考へてゐなかつた。――臺所に立つて行く。然し臺所に行けば、何んのために立つて行つたのか、忘れてゐた。一所にゐることが出來ない。何か心の底で始終せき立てられてゐた。――女房たちは、夫の稼いでゐる運河のある港通りへ出てきた。

日暮れまでゐて、歸りに女房たちは親方へ寄つた。幾らでも貸して貰ひたかつた。

――笑談ぢやない！

受付から親方が顏を出した。

――この不景氣をみてくれ。こつちが第一喰へないんだ。

さう云はれても、女房たちは受付の手すりに肱をかけたきり、だまつてゐた。歸ることを忘れてゐた………。

「H・S工場」の窓から、澱んだ運河を越して、その群れが見えた。――濱が騷がしくなつた。

「Y勞働組合」はそれ等の間を縫つて活動してゐた。×××ストライキが起るのは、たゞ「××××」だけあればよかつた。組合はそれに備へる充分の連絡と組織網を作つて置かなければならなかつた。

「工場代表者會議」が緊急に開かれた。それはこの場合二つの意味をもつてゐた。――運輸勞働者が一齊に蹶起したとしても、Y市の「工場勞働者」がその鬪爭の外に立つことは、他の何處の市でもさうであるやうに分りきつてゐた。それをこの「工代」の力によつて、全市のストライキに迄發展させなければならなかつた。一つは「H・S工場」の最近の動搖についてゞあつた。

四つの鐵工場から六人、三つの印刷工場から三人、二つのゴム工場から四人集つた。それは各々背後にその工場の何十人かの意見を代表してゐた。

その中に、森本が見習工のとき廻つて歩いてゐた鐵工所の仲間が二人もゐた。

――やつぱり俺達はな……！

と云つて、お互ひに笑つた。

「工代」をこの位のものにするのに、河田たちは半年以上ものヂミな努力をしてきてゐた。――で、

「H・S會社」は職々兢々としてゐた。社員も職工も仕事が手につかなかつた。――それは三田銀行が日本の一流銀行である合資銀行に合同されることから起つた。政府は金融機關の全國的統制――その集中

をはかつてゐた。この合同もそれだつた。銀行はます／＼巨大な、數の少ないものに纏められて行つてゐる。で、今までの「H・S會社」に對する三田銀行の支配權は、當然金菱銀行にそのまゝ移つて行つた。

ところが、金菱銀行は自分の支配下に「N・S製罐會社」「T・S製罐會社」この二つの會社を持つてゐた。然し今まで製罐業では、金菱系の會社は何時でも「H　S會社」に壓倒されてゐた。だから、今「H・S」が一緒になれば、日本に於ける製罐業を完全に獨占出來るのだつた。――その製品を全國的に「單一化」して生産能率を擧げることも、技術や工場設備の共通的な改良整理も出來、人員の節約をし、殊にその販賣の方面では、今迄無駄に惹き起された價格の低下を防いで、獨占價格を制定し思ふ存分の利潤をあげることも出來るのだつた。――だから、三田銀行が今迄とつてゐたやうな「單純な支配」ではなしに、金菱が積極的に事業そのものゝ中に、ドカ／＼と干渉してくることは分りきつてゐた。――これは職工たちの恐れてゐた「産業の合理化」が直接に、そして極めて惨酷に實行されることを意味してゐた。工場はその噂さでザワヽヽめいてゐた。

然し問題はもつと複雜だつた。

――今度のことでは、君、專務や支配人、工場長こいつ等の方が寧ろ白になつてるんだぜ。

と、役員の更迭のために新しい銀行に提出する書類の作成で、事務所に殘つて毎日夜業をやらせられてゐる笠原が云つた。

――金菱では自分の系統から重役や重だつた役員を連れてきて、あいつ等を追つ拂ふ積りらしいんだ。然しあゝなると、あいつ等も案外モロイもんだ。――然し問題は面白くなるよ。死物狂ひで何か劃策してゐるらしい。

然し何時でも側にゐる笠原には大體その見當がついてゐた。――彼等は、金菱の惡ラツな進出が如何に全工場の「親愛なる」職工を犧牲にし、その生活を低下させ、「Yのフォード」を一躍「Yの監獄部屋」にまで墮落してしまふものであるか、と煽動し、全從業員の一致的行動によつて、沒落に傾いてゐる自分達の地位を守らうとでもするらしかつた。

――どうも一寸ひツかゝりさうだな。

と笠原が云つた。

――然し金菱にかゝつたら、いくら專務がヂタバタしようが、桁から云つたつて角力にならない。これからは「金融資本家」と結びついてゐない「産業資本家」はドシ／＼沒落してゆくんだ。時々あるいゝ手本だよ。さう云へば「國」鈴木だつて、手はこれと同じ手を食らはさ

れたんだ。企業資本制制の一つの過程だた。

そればかりでなく、「Ｈ・Ｓ」の製罐業の大部分は親會社である「日露會社」に賣込されて、カムチヤツカに出てゐた。それで、一方にはソヴエート・ロシアの「五ケ年計畫」の進出、他方には國內資本家間の無駄な競爭に、何時でもおびやかされてゐた。漁區落札數の增減はテキ面に生產高にひゞいた。——「Ｈ・Ｓ」はそれに備へるために、政府を動かして、國民一般の愛國心とソヴエート・ロシアに對する××心を煽り立てなければならなかつた。

今年は更にロシアが組織的に、色々な手段を借りて、わが優良漁區の蠶食をやるといふ確實な噂さが立つてゐた。「日露」と「Ｈ・Ｓ」の株價は傾きかけた水のやうに暴落してゐた。

「Ｈ・Ｓ」のさういふ情勢に對しては、河田は「工場××」の積極的な活動、「ニュース」による暴露、××、新しい「××」の獲得は云ふまでもないとして、更にこの當面の「戰々兢々」たる動搖をつかんで、職工が勞働者としての自分の立場と利益を擁護するために、「工場委員會」の自主化の闘爭を起すやうに努力しなければならない事を提議した。

勞働者がどんな資本の「攻勢」にもグイと持ちこらえ得るためには、何より工場全部の勞働者が「足並」を揃へることだつた。職場、職場で程度がチグハグでたために、滅茶々々にされることはめづらしくないのだ。それは彼等が色々な問題について、工場の全部にわたつて充分に討議する「機關」を持つてゐないところから來てゐた。——その機關として、自主的な工場委員會が必要なのだ。今のところ、それは工場長や社員できめた役付職工や去勢された職工によつて、勝手にされてゐる。我々はそれを勞働者の利益のための機關として、勞働者によつて組織されることを要求しなければならない。——それが可決されて、時期、方法その他の具體案が長い時間かゝつて、愼重に練られた。

それから他の代表者の情勢報告があつた。

運輸勞働者のストライキには、そのかゝげる「要求」の中に、必ず工場勞働者たちも動かし得るやうな「條項」を入れること。それには工場××が全力をあげて、それと工場獨特の問題と結びつけて、宣傳、××をまき起すこと等が決議された。

終ると、河田は仰向けに後へひツくりかへつた。

——これで俺三日ばかり碌に寢てないんだ。

河田は特に××の追及をうけてゐた。轉々と居場所をかへて、逃げまはつてゐた。そしてその先き〴〵で連絡をとつて、組合や森本たちを指導してゐた。然し二十萬に足りない小さい市では、それは殆んど

不可能なほど危險なことだつた。

10

會合が終ると、外へは一人づゝ別々に出た。賑やかな通りをはづれて、T町の入口に來た頃、森本の後から誰か、すイと追ひついて、肩をならべた。オヤツと思ふと、それが河田だつた。

——一寸これからT町へ用事があるんだ。

森本はその時フト變な豫感を持つた。——河田はお君のところへ行くのではないか。

河田は一緒に歩きながら、自分たちの運動のことを熱心な調子で話し出した。河田のその熱心な調子は何時でもさうだが、獨斷的なガムシヤラなところを持つてゐた。それは初めての人に、無意識な反感さへ持たせた。然し森本はその調子を河田から聞いてゐるときは、何時でも自分のしてゐることに、不思議な「安心」を覺えた。彼は力と云つていゝものさへ、そこから感じることが出來た。

——君はこの仕事に獻身的になれるかい。

ときいた。森本は、なれるさ、と答へた。

——獻身的の意味だが……。

河田はさう云つて、一寸考へこんだ間をおいた。——人通りはまだあつた。自動車のヘツドライトが時々河田の顏を半分だけ切つて——カーヴを曲がつて行つた。

——獻身的と云つても、一生を捧げるといふ位の氣だな。

と云つた。

足元で春の近いザラメのやうな雪がサラツ、サラツとなつた。

——勿論俺たちの仕事は遊び半分には出來ることでもないし、それに俺たちのやうなものが、後から後からと何度も出てきて、折り重つて、やうやくものになるといふやうなものだから、分りきつた事だが……。

森本は今更あらたまつた云ひ方だ、と思つた。

——「ニユース」だつて半年のうちに、とにかくこの位になつたといふ事は、一糸亂れない「組織」の力だつたと思ふんだ。——でねえ、俺たちの目的だな、××××××の××を××るといふことだ、そのためには鐵のやうな「組織」とそれを動かし、死守して行く所謂その獻身的な同志の力が要るわけだ……。

又そこで河田らしくなく言葉を切つた。

——分るな？

——分つてるよ。變だな、今更……。

彼がさう云ふと、河田は口の中だけで「ムフ」と笑つたやうだつ

た。

——その鐵のやうな組織といふのは、工場××を通して工場勞働者にしつかりと基礎を置き、勞働者の最先端に立つて鬪ふ政黨といふことになる。———で、勞働者の黨と云へば、それは「×××」しかないわけだらう。

然しそんなことも森本は倦きる程きかされてゐたことだつた。だから、彼は「それアさうだ。」と云つた。

——鍋燒でも喰ひたいな。

河田が立ち止つて、その邊を見廻はした。すこし行くと、小さい處が眼についた。二人はそこで鍋燒を食つた。——河田は森本の家の事情や收入や係累のことを聞きながら、自分のことを話し出した。

かういふ運動をやるやうになつた動機とか、スパイ三人を向うにまはして、×のパイプを持つて×××をやつたことがある話とか、どん底の生活をしてゐる可哀相な女が時々金を自分に送つてきてくれる、それが自分のたつた一人の女だとか、自家では然し母が彼のことを心に病んで、身體を惡くしてゐるとか、そんなことを話した。彼は「お前にだけ親があると云ふのか。」といふ詩を讀んできかせた。それは聞いてゐると、胸をしめつけた。——何時でも冷やかに動いたことのない彼の瞳が、その詩を云ひ終ると潤んでゐた。森本はかういふ河田を初めてみたと思つた。仕事をしてゐる河田は一分もさういふ彼を誰にも見せたことがなかつたのだ。

——工場はまだ大丈夫かい。

と河田がきいた。彼は何時でも森本の「顏」のことを心配してゐた。

——少オしは。長い間だから。

——ん。少オしでも惡いな。

——會社の鈴原さんの話だと、最近バカに工場長のところへ警察の高等係がきて、何か話してるさうだ。

鍋燒の熱いテンプラを舌の上で、あちこちやつてゐた河田が、眉毛を急にピクッと動かした。

——工場長が時々顏の知らない人をつれて、工場のなかを案内して歩くけれども、ひよつとすると、それが高等係かも知れない。それに君ちやんの話だと、職工のなかには皆の動きを一々報告してゐる會社に買收された奴がゐるさうだ。佐伯たちの××と知らないで、鉢合せでもしたら事だからな！

——……!? 注意しなけれアならないな。

——「ニコース」は矢張り分つてるんだ。參つてるらしい。何處で作つて、どんな經路で入つてくるかを躍氣になつてるらしい。

——フン！

「ニュース」は初め嚴密に手渡しされてゐた。然し、××の根が廣まり、それが可なりしつかりしたものになつてくると、それを工場內の眼のつく所にワザと捨てゝ置いたり、小規模だが、バラ撒いたりするやうになつてゐた。

——組合のものが作つてるんだツて、工場長は云つてる。「ニュース」の何處かに、專務の一ケ年間の精細な收入と家庭生活と一年間の藝者の線香代と妾のことを載せたアレ、とても人氣を呼んで、とうとうグル〳〵廻つてしまつた。あれで、女工のうちでは、これが本當なら、專務さんの「ナッパ服」に今迄だまされてゐたツて、泣いた奴が澤山ゐたさうだ。嘘のやうな話だけど——

二人は聲を出して笑つた。

——何んしろ細大洩さずだから、彼奴等も浮かぶ瀨が無いだらう。

外は人通りがまばらになつてゐた。二人は用心して歩いた。

森本の家の近くの坂に來たとき、河田が內ポケットから新聞の包みを出した。

——これ明日まで讀んでおいてくれ。そして讀んでしまつたら、すぐ燒いてくれ。

森本はそれを受取つた。

——ぢや、明日九時頃君のところへ行くから、家にゐてくれ。

さう云つて、河田が暗い小路を曲がつて行つた。——彼はその足音を聞いて、立つてゐた。

次の日、森本は河田から「×××」××××をうけた。

19

「H・S工場」の××が毎日々々集合した。手落ちのないやうに、細かい方法がそこで決められた。河田も顏を出した。

ビラの形で撒かれる大衆的なニュースが、本當に生きた働きをするためには、その「時期」が絕對に選ばれなければならなかつた。工場委員會が開かれる少し前であつて、それが同時に「會社」の整理斷行が確定した日でなければならなかつた。

ビラを撒いてからの第二段、第三段の××、從業員大會開催の件などが、決議された。

こん度は、專務の方からも職工を利用しようとしてゐた。普通のストライキと異つてゐた。專務は沒落しかけてゐる。だから、××の相手は專務や工場長ではなかつた。この大きな「動搖」をつかんで、職工の結束の機關を獲得することにあつた。然し、專務たちのもくろんでゐることも、職工を結束させるといふ點では、その形態は同じだつ

た。――この同じ一點に向つてる丁度逆の二の力かどのやうにもつれ合ふか？

ビラは大體次のやうな骨組を持つた。

1。工場長が天下り的に工場委員をきめるのでは何んになる。われわれは全職工の選擧によつて、全委員をきめることを要求する。2。今迄提出する議案は工場長が一應眼を通して、差支へのないものばかり出してゐた。こんなベラ棒なことがあつてなるものか。勞働者の本當の日常利害の問題をドシ〳〵出すこと。3。委員長には工場長が勝手になつてゐた。これでは職工の利益になる事項が議決されるわけがない。委員長は全委員の互選できめること。4。委員會で決めたことでも、決めッ放しのものがあるし、又工場內の大切な規約を改正する場合などは一度だつて委員會に出したことがなく、專務や工場長だけで勝手に決めてしまふ。結局どうでもいゝことだけ委員會に出す。これでは委員會は看板より劣る。我々はこんなゴマカシに全部反對だ。5。女工も働いてゐる工場であるからには、女工からも委員を選ぶこと。6。「合理化」の慘酷な整理、勞働者の虐使と首切にそなへるたつた一つの力は、この工場委員會の自主化を握つて、足並をそろへ、全職工が結束することを措いて他にないこと。7。專務らが自分の地位にしがみつくために策動するかも知れない。それに乘せられてはならない事。8。市內のゴム會社、印刷會社、鐵工所も同じ問題をひッさげて、立ちかけてゐる「H・S」の同志に握手を求めてゐること。9。濱の人夫の窮狀はもはや對岸の火事ではない。同じ運命がわれわれにも待ちかまへてゐる。彼等とも我々は手を握つて、共に立たなければならないこと………等々。

色々なところから出る噂さや臆測がグル〳〵廻はつてゐるうちに、雪だるまのやうに大きくなつた。それが職工たちを無遠慮に搔き廻はした。皆は落付くことを忘れてしまつた。休憩時間を待ちかまへて、皆が寄り集つた。職長さへその仲間に首を差しこんできた。

何時でもこッそり工場長に色々な小道具を造つてやつてゐた仕上場の職工たちは、今度は露骨に惡口をたゝきつけられた。職工は工場で自分のものを作ることは愚か、鐵屑、ブリキ片一つ持ち出しても首だつたのだ。

――又新しい工場長にもか？　ハ、、、、精々どうぞね！

上役にうまく取入つて威張つてゐたもの等が、ガラ〳〵とその位置を顚倒して行つた。支へ柱を一旦失ふと、彼等は見事に皆の仲間外れを食つた。

――ざま見ろ！

皆は大ッぴらに、唾をハネ飛ばした。

そんな關係を持つてゐる職長などは顏色をなくして、周章てゝゐた。が、早くも彼等は、職工の大會を開いて、對策を講じなければならないと云つた。佐伯たちがその先登に立つた。「H・S危急存亡の秋、諸君の蹶起を望む！」と、愛社心を煽つて歩いた。――彼等はそんなときだけ、職工をだいじに使ふことを考へた。

晝休みに、女工たちは男工の話し込んでゐる所をウロ〳〵した。

――どうなるの？

ときいた。

――男も女も半分首だとよ！

男工がヤケにどなつた。（次號完結）



「鬼熊」の死と踊子

川端康成

一

屑栗ばかり買つて來る人だと思つたが、女は默つてゐたのださうである。ケン吉の身なりを見ると、さうも云へなかつたのだ。

彼女の値段は餘りに安過ぎて――だから反つて彼女は金錢の値打なんか、もう見當がつかなくなつてしまつてゐた。二三枚の××よりも、兩手に一ぱいの燒栗を喜んだ。

しかし、彼女の相手は同じ木賃宿の定連に限られてゐたから、ひどく見下げられるやうなことはなかつた。また、見下げられることがあつても、それを慰めてくれる男は、同じ宿屋に幾らでもゐた。

慰めて貰ふためには――彼女は辱められた部屋を出て、隣りの部屋の襖をそうつとあけて、入口にぼんやりもたれてゐればいいのであつた。

「よう、お入りよ。」

さういふ時は、×××もいらないことを、男達は心得てゐるのだ。

そのやうな隣りの部屋が、或る夜ふとした廻り合せで、ケン吉の部屋であつた。――

と云つても、三疊に三人寢てゐるのである。

ケン吉の枕もとに、燒栗が七八つあつた。

「まあ。お前さんもずゐぶん薄情だね。」と、女はそこに坐つて、栗の皮を剝いた。

「私を呼んでくれないでさ、一人でむしやついてるんだよ。」

「さうぢやねえ。」

「私んとこへ來るつもりで買つて來たのが、厭やんなつたんだね。」

「さうぢやねえ。――あんまり少いからさ。」

と、ケン吉は薄笑ひした。

彼は買つて來るのではない。拾つて來るのである。

私がはじめてケン吉を見たのも、彼が栗を拾つてゐる姿であつた。

淺草の六區、片側は映畫館や演藝館、その前が池――池の岸に夕暮から露店が並ぶ。その中に燒栗屋が二つある。夜が更けて、店々が歸つて行つてしまふと、アスファルトに二ところだけ、小高い芥が殘る。栗屋の跡である。

一人の男が蝙蝠のやうにその上へしやがんで二十分も栗の皮を掻き分けながら、栗の實を拾つてゐる。

毎晩同じ男であつた。それがケン吉であつた。――兩手に一ぱいの栗で、女が買へるのだつた。一晩でそれだけ拾へることもあつた。四晩かかることもあつた。

彼はやはり淺草の芥箱から、その日その日の糧を求めてゐたのだ。

そして、小說家の私はその同じ芥箱から、人生を搜してゐたのだつた。

それも所詮は、人生の夢であり、幻であつただらう。

なぜなら、先づ第一に、私は自分で芥箱をあさることが出來なかつたからである。

それから第二に、

「芥箱の中の手紙や、いろんな書きつけのやうなものを拾つて來てくれたら――それを僕が買ふんだよ。」と、私が云つた時に、ケン吉はひどく驚いたではないか。

また第三に、私はその手紙や書きつけが穢くて手を觸れることも出來なかつたのだ。木賃宿でケン吉が一枚一枚擴げて見せるのを、私はただ讀むだけだつたのだ。

第四に、淺草の裏面を知らうとする、かういふ方法からして、指をよごさずに泥の中の花を拾はうとするものであつた。

第五、第六と――番號を附けて數へたてては、きりがない。要するに、戀文の反古が一番私の興味を惹いたのだ。そして、一人の踊子の奇怪な死にぶつつかつて、私の好奇心は戰慄しながら、その滿足し

たのである。

例へば、あの栗の好きな女だが、彼女が乗る唯一つの乗物は、隅田川の哀れに古ぼけた乗合蒸汽船であつた。

「電車なんて、私嫌ひさ、電車の中はお役所みたいな氣がするわ。」

電車にも、乗合自動車にも、地下鐵道にも——彼女は一年以上乗つたことがないさうだつた。

電車がお役所とは——私には想像も及ばない感情であつた。

しかし、想像も及ばない感情といふものは、やはり人生の病菌であるらしい。それもそのはずである。盛り場の下等な飲食店や、見世物小屋や、怪しげな家などの芥箱——醫學上の病菌の巣の中から、私はこの感情の病菌を拾ひ出したのであつたから。栗の好きな女と隅田川の蒸汽船に乗るくらゐで、私はあつさり切り上げるべきであつたらう。

2

彼女等はいつも不幸であつて、明るいところに住居を定められることは少ない。たいていじめついた路地とか、高い建物の北側とかにきめられてしまつてゐる。だが淺草の彼女等程、物語に富んだ生涯は他に多くあるまい。彼女自身虐げられたり、殺風景なことには馴れてゐるが、それでも突然にびつくりさせられるやうなことが多くある。——と、淺草の詩人、I・N氏は書いてゐる。

彼女等とは、云ふまでもなく芥箱である。

I・N氏が「芥箱」と題する長い文章の載つた雜誌を、私のところに持つて來てくれた。私はその文章から、芥箱あさりを思ひついたのであつた。そして、屑栗拾ひのケン吉に、その手助けを頼んだのであつた。

芥箱とは、勿論芥を捨てる箱である。しかし、社會の底をさまよう人々にとつては、それが食堂である。溫い寢室である、祕密の金庫である。

「醫者よりは、まだよつぽど綺麗な仕事ですよ。」と、私はI・N氏に芥箱あさりの計畫を打ち明けて笑つたものだ。

「人間の排泄物は、醫學上の診察に大切なものですからね。芥箱の芥は、人生の排泄物つてわけでせう。まあ芥箱をあさつてみれば、その家の生活の健康狀態も、たいてい診察出來るかもしれませんね。」

そして、その診察の結果は——私は驚いたのである。

家宅搜索といふものが、犯罪の探偵法として、一番効果があがるのももつともだと分つたのである。人間は思つたより不注意なものだ。芥箱にまで生活をさらけ出してゐる。

醫者が排泄物を診察するよりは、ただ少しばかり根氣が必要だつたけれども、この紙屑診察法も、先づ醫學と同じくらゐには正確であつた。私の手帳は、他人の生活の秘密で膨らんで來た。例へば、

──S映畫館へ出演してゐる石川舞踏團の伏見絹代は、つい先頃まで、東京市の水道局の受付に勤めてゐた。課長が彼女を見て、斷髮に盛裝で市民に接するのはけしからんと、奥へ入れた。間もなく姿を消したかと思ふと、舞臺へ現れた。

──淺草區、昭和四年一月より十二月十六日まで出産總數、六千六百二十三人。死亡者數、三千六百八十三人。死産數、三百六十二人。

──射的屋が雇娘を養女とする入籍屆書の書きつぶし。寄席俳優KHの洋服代及びその月賦高。歳の市、露店商人場割控。各座樂屋への艶文數百通。選手ブロオカアの買收計算書らしい、數字ばかりの反古。乞食が胸にさげてゐたらしい、平假名ばかりの哀願書。Tレヴィウ團樂屋夫婦見立て表、並びに女優品行表。映畫のプログラムの裏に書いた、不良少女團の暗號らしい文字。松山簡易食堂への脅迫狀。

──P館は先月館内修繕といふ名目で休んでゐたが、その實、館内の椅子その他を差し押へられてゐたものらしい。芥箱に差し押への紙が棄ててあつた。

──H娛樂場の操り人形師は、美男の評判が高い。人形芝居が終つてから、彼は幕の前へ現れて、毎度ありがたうございますを云ふ。その挨拶だけを見に行く淺草娘が多い。

──淺草區の小學兒童相手の文房具店は、六十二店全部結束して、學校當事者から直接兒童に、學藝用品を無償で與へようとする計畫に、反對運動を起した。

それから、そして──いやしかしもう、この物語とかかはりのない他人の秘密を、あばき立てることはつつしまう。

それでなくてさへ、私はもう十分自分を淺間しく思つてゐたのである。

みじめな木賃宿である。相手がケン吉である。燒栗の好きな女が時時覗く。さういふことのためもあつたであらう。

しかし、私が次第に犯罪者のやうな氣持に追ひ込められて行つたのは、他人の暗い秘密を嗅ぎ出さうとしてゐたためだつたにちがひない。私は刑事や探偵のやうに、第六感ともいふべきものが鋭くなり、だが一方不思議にも、名づけやうのない疲れを感じた。

「僕の神經も、芥箱の中の魚の骨のやうに、腐敗菌で青白く光つて來た。」

勿論ケン吉は、神經の話をする相手ではない。

「旦那、旦那。」と、彼は私の顏色をうかゞひながら、

「こいつあ、面白いや。オニクマてんでさ、オニクマ。」

「オニクマ？」

それは鼻紙であつた。赤い字がにじんでゐる。

「紅ですぜ、旦那。オニクマ、オニクマ、オニクマ、こいつあ面白いや。種にたらんかね。」

彼が三度讀んだ通りである。

――オニクマ、オニクマ、オニクマ――

片假名で三つ書いてある。下へ行くほど字が大きい。

楽屋の鏡の前にぼんやり膝を崩して坐りながら、踊子が棒紅で落書したのにちがひない。そして鼻をかんで捨てたのだ。

それから四五日して、ケン吉はまた、「オニクマ」と紅で書いた鼻紙を拾つて來た。

「レヴイウの踊子の落書に、オニクマとは餘りに奇想天外だ。」

しかしもう、私の第六感は笑はなかつた。その横に新しい一行、

――死、死、死――

これはケン吉には讀めないのだ。

ところで間もなく私は、千葉の鬼熊事件の豫審調書を手に入れて、そこに踊子水木柳子の少女時代を發見するやうなことになつたのである。調書では行方不明となつてゐる影山けい子をである。

口紅の落書が、そこまで私を導いて行つたのだ。

3

十年前のオペラ女優までが、淺草に返り咲いた。ジヤズ・ソングとジヤズ・ダンスの流行である。

高津富士子は眞晝間、白い外套のボタンをはづして、兩手をポケツトに突つ込み、四五人の男に取り卷かれながら、六區のアスフアルトを、レヴイウ小屋のポスタアのやうに歩き廻つた。古い淺草の顔なじみを見つけて、人ごみの頭越しに、晴れやかな凱旋の挨拶を投げかけた。

彼女は十年前のオペラ女優時代と――ただ下顎に一筋、括りが出來ただけであつた。

この不思議な若さは、果してどういふ芥を撒潑してゐるのだらうか。

「高津レヴイウ團の芥箱」――といふ小説を、私は書かうと思ひ立つた。

彼女等は音符も滿足に讀めないかもしれない。ワン・ステツプの調子を踏みはずすかもしれない。

だからしかし、麥畑の匂ひが、煙草工場の匂ひが、不良少女團の匂

ひが、女學校の匂ひが、または百貨店の賣場の匂ひが——樂屋裏の芥箱の中にも、まだそのまま殘つてゐるだらう。よその芥箱には魚が腐つてゐても、ここの芥箱には果物が腐つてゐるだらう。

「當分、淺草座の芥箱ばかり拾つて貰ひたいんだ。」と、私はケン吉に頼んだばかりだつたので、踊子の落書だと、直ぐ分つたのであつた。

すると、麥畑どころか、あの「英雄」鬼熊の頬髯の匂ひまであつたのだ。

ガラスの劇場なんて、新八は氣ちがひさ。——と、これもケン吉が拾つて來た、手紙らしいものの書き出しだ。

——ガラスの劇場なんて、新八は氣ちがひさ。

あんな夢みたいな話聞くの、柳子とお月さまだけだわ。

高津富士子なんて、あんなの鬼熊だわ。あたしはさう思ふ。あたし達の踊を見る人だつて、あきれた氣ちがひさ。おたづね者の柳子が、裸で飛んだり、跳ねたりしてるんだもの。新聞屋が澤山見に來るんですつて。私は吹き出してしまふ。

さうすると、どうでせう。あの子はいつも樂しさうに踊つてゐる。明るい踊子。——樂屋のお辨當を見せてやりたいわね。

ガラスの劇場になつたら、第一お辨當が困るでせう。

新八のガラスの街つて、いつたいいつ出來るの。表から樂屋風呂の中まで透き通つて見えて、ガラスの壁にも、椅子にも、天井にも、舞臺の踊子の姿が一ぱい、ちらちら寫つて——ガラスは美しい魔物である、か。地震の時はさぞみごとでせうよ。

金のやうに硬いガラスが出來るつて、新八は云ふけれど。

ああ、神さまよ、そんなら、千葉の木や草もみんなガラスだつたら、鬼熊は直ぐつかまつたでせうに。柳子は東京へなんか、逃げることもなかつたでせうに。それから着物もガラスなら、柳子は裸で踊ることもないでせうに。

ついでにもう一つ、人間の體がガラスなら、あつさりこはれて死ねるわね。道でうつかりぶつつかつたら、心中だわ。

弱虫のガラスさん、今夜も屋上庭園でね。

4

さて「鬼熊」とは——勿論、諸君の記憶にもまだ新たであらう。

「鬼熊」と呼ばれた放火殺人犯、石山熊之助のことである。

千葉縣香取郡の荷馬車挽に過ぎなかつたが、彼一人を捕へるために——

捜査區域、五千四十四萬五千八百餘坪。

警察官の延人數、六千八百九十九人。
經費の總額、三萬三千四百二十八圓。
山狩二十四回。
大山狩一回の人數、警官二百名、消防組員三千名。
その時の拳銃、二十五挺。
木小屋、洞穴、空家の檢索二十五回。
立廻見込地域内の戸數千九百十七戸へ、戸口調査的の捜査、十四回、乃至三十四回。
新聞通信の特派員五十餘名。
捜査日數、四十幾日。

しかも、捕まらなかつたのである。捕まつたと云へないこともないが、時代物映畫の英雄讃美の文句そのまゝ、細目の恥は見なかつたのである。

力のつきるまで斬り拔けて、いよいよ追ひつめられた時に、自分の腹に刀を突き立てる。捕方はうやうやしく、それを拜見してゐる。――そのサムラヒ魂の型通りに、鬼熊は自殺したのであつた。先祖の墓の傍で、西枕で――。

全國の新聞が、號外で彼の最後を飾つたのももつともだ。

しかし、彼に自殺の決心を固めさせ、彼の死を見とゞけた、一人の少女のあつたことは――その時、世間は知らなかつたのである。五年後の今でも、知つてゐるのは、淺草座の芥箱だけかもしれない。

だが、これでは少し話が飛び過ぎるといふものだ。

暫く諸君に、五年前の千葉の片田舍へ行つて貰はう。

「新馬を調練する名人だつたわ。」と、柳子は私に話したものだ。

「近所のお百姓が馬を連れて、よく頼みに來るくらゐだつたわ。子供が馬ならしを見に行くと、熊さんはわざと馬をあばれさせてね、小さい私はびつくりして、わつと泣いたのを覺えてゐます。――俠客氣質で、皆から兄貴兄貴と立てられて、子煩惱で、戀は命がけで――。」

そして、「鬼熊」の名が天下に鳴り渡つた大正十五年に、その石山熊之助は三十五歳であつた。同い年の妻との間に、十三から一つまで、四人の子供があつた。家屋二棟と、輓馬一頭と、荷馬車一台とを持つてゐた。妻は小作をしてゐた。

彼がいよいよ女敵を打つまでには、苦しい一年の月日があつた。二人の女が殆ど同時に彼を裏切つたのは、去年の夏であつた。

旅人宿の女中は、熊之助に身受けされたにかかはらず、彼の傍にただ七日ゐただけで、先夫のところへ逃げてしまつた。

村の居酒屋の娘には、若い男が出來た。

柳子の云ふやうに「戀は命がけで――」、しかし、居酒屋の娘は、若

しても、泣きついても、もう彼のものとはならなかつたばかりでなく、鰻裂庖丁を持ち出したために、脅迫罪の現行犯として告訴され、懲役三ヶ月、三ヶ年の執行猶豫の判決を受けた。

そして刑務所から歸つたのが八月十八日、その翌る晩、居酒屋の娘を薪で殴り殺したのだ。それから——娘の祖母を打ち倒し、彼と娘の仲裁に立ちながら娘に味方した男の家に火を放ち、娘の死顔を眺めに戻り、駐在所から巡査の佩劍を盗み、旅人宿の女中を逃がしたと思はれる男を斬り殺し、刑事に重傷を負はせておいてから、附近山地の森林に姿をくらましたのだ。

やがて四十日の間、警官と消防と新聞特派員と——そして彼は一代の人氣男になつてしまつたのだつた。

山狩しながら消防が心臓痲痺で死んだ。巡査が草刈鎌で斬り殺された。新聞記者が特種爭ひに血迷つて、捜査の警官を、消防組員を、鬼熊の同情者の村人を、買收しようとした。天下の人々は警察官の無能を攻撃しながら實はひそかに英雄崇拜熱に浮かされて、鬼熊が捕へられずに、天晴れ自殺することを望んだ。村にはひそひそ話が多くなつた。それもそのはずだ。鬼熊は食物を求めに、また二人の女をめぐる男達を殺さうと、嚴しいはずの捜査網をくぐつて、二十回近くも人里に姿を現してゐたのである。

その「追はれる鬼熊」の姿を、その頃十四歳の少女だつた、踊子柳子が見たのであるが——私はこの半月ばかり前に、小説の挿繪畫家のA氏に會つた。

「マネキン・ガアルを連れて、お花見に行つて來ましたよ。千葉縣の何とかいふ、成田のまだ向うの、御料牧場なんですが、馬と、豚と、羊と、牛とが、一ところにゐるんです。羊の穢いのには驚きましたね。」

「それは鬼熊事件のあつたあたりぢやないですか。佐原署と成田署の警官が働いたんだし、御料牧場の近くにも鬼熊の現れたことがあるんですよ。」

「さうですかね、あすこが？」

「千葉のあの邊に、御料牧場が幾つもなければですが。」

「さあ。——櫻がずゐぶん咲いてゐましてね、その花の色がまた綺麗でした。東京の櫻のやうに職業的でなくつて。マネキンもモデルより職業ずれせずに、ずつと素直でいいですよ、ポオズがね。裸にはなつてくれませんが、挿繪に必要な衣裳の着こなしなら、お手のものですからね。」

「しかし、そんなに連れ出したりしていいんですか。」

「そこは銘々スケッチ帳を携へてね。結局、大浮れに遊んじまいまし

たけれど。農家が四人に、女房子供まで連れてるんですよ。」

「あのあたりの娘で、高津レヴィ團の踊子になつてるのがゐるんです。」

「驚いたな、あんな田舍から。」

一九三〇年――と、二人は笑つたのであつた。

5

大正十五年に十四歳の影山けい子は、昭和五年に十八歳の水木柳子である。

彼女が十四歳の九月二十五日の夕暮であつた。

土藏の月影に誰かがゐると思ふと、もう彼女は帶をつかまれてゐた。男の腕がうしろから彼女の首を卷いて、口を抑へてゐた。

「けい。靜かにしろ。」

熊之助であつた。

「おれのゐたつてことをしやべると、叩き殺すぞ。」

息苦しさで、はじめて我に返ると、急に身をもがき出した。すると、相手は少し落ちついた。少女の兩肩を掴んで彼の方を向かせた。

「でも後で見ると、肩が少うし紫色になつてゐたわ。」と、十八歳の柳子は私に話すのである。

「けい。おれは氣ちがひぢやねえ。恨みのない人間に、指一本だつてさはりつこねえ。來なよ。」

彼はけい子の手をひつぱつて、傍の柿の木の下へ連れて行つた。

「ああ、なんだか急に體がだるくなつて來やがつた。お前がいい子だからさ。」と、熊之助はやさしく彼女の肩を抱きながら、坐り込んでしまつた。しかし、手の指がぶるぶる顫へてゐる。けい子はそれを感じることが出來た。彼の顏が見えて來た。

「その臭さつたら――でも、はじめは臭いのがちつとも分らなかつたのよ。」と、柳子は私に話すのである。

「一月もつと、山の中を逃げ廻つてたんでせう。顏がぼうぼうだとか、げつそり痩せてるとか――もうそんなんぢやなくて、何だか人間と思へないのよ。けだもの――闇ん中を駈け廻つてゐる、氣がちがつたけだものの、そのまた生きた幽靈――でも、恐しく強いのよ。」

「實にむつかしいんだな。」

「むつかしいわ。あたしはこの頃でも、何度その夢を見るかしれないんですもの。――あんなみじめな人間のために、世間が大騷ぎした。少し後になつて考へると、阿呆らしかつたの。でも今思ふと、あれは人間ぢやなかつたやうな氣がするわ。」

しかし、十四歳のけい子はただ顫へてゐるばかりだつた。

「けい。何か云へ、何か云へつたら。」

熊之助は彼女を膝に抱き上げた。そして、少女の體溫に驚いたらしかつた。彼女の頬に顔をこすりつけた。けい子は氣が遠くなりかかりながらも、熊之助の頬がさつと鳥肌になるのを知つてゐた。彼がこのまま死ぬのではないかと思つた。

熊之助はがつかりうなだれて、

「けい。一生の頼みだから、これを研いで來てくれないか。」と、懐から錆びた剃刀を出した。

「おれが死んだら、お前世間に云つてやんな。鬼熊に死ぬ覺悟をさせたなあ、おいらだつてな。」

熊之助は、けい子の胸に顔をこすりつけた。泣き出しながら、少女の肩に噛みついた。彼女は驚いて飛び退いた。

「畜生、逃げてみろ。――もうどうもしやしねえ。お前の恩は死んでも忘れねえよ。」

それから彼はけい子と一しよに、その土藏の家の戸を、そつと叩いたのであつた。

その村の消防組の部長の家であつた。

熊之助の足は立つてゐられない程弱つてゐた。

「熊さんの氣持はよく私に分らないの。」と、十八歳の柳子は私に話すのである。

「それだのに、あたしは氣が滅入ると、いつもあのことを思ひ出すんですもの――いまいましいつたらありやしないわ。」

彼女はめりんすの樂屋着一枚に、腹まで化粧した素肌であつた。幕間の屋上庭園であつた。

6

消防組合員は捜査隊に加はつてゐた。しかも、鬼熊自殺の相談は消防事務所でまとまつたのであつた。――その前にも度々、鬼熊は握飯の土産つきで、村人から逃して貰つてゐた。

この人情と、新聞心理とが――哀れな英雄の戯畫を描いてゐたのであつた。

「鼻紙に口紅で書いた落書――あたしだつて、あの時の新聞屋に棄てられた紙屑みたいなものよ。」と、柳子は私に話すのである。

熊之助は消防組の部長に泣きついた。――死ぬ前に一度生れた家の飯が食ひたい。兄と、それから親しい友だちの一人に會ひたい。

部長は直ぐにその友だちといふのを誘ひ出して來てやつた。彼は消防の副小頭であつた。三人は火見櫓の上で會つた。部長は熊之助の剃刀を研いでやると云つた。そして、部長の裏山に熊之助をかくまつ

た。剛小僧は握飯三個と、漬物と、菓子一袋と、藁草履を一足とどけてやつた。

翌る日の夕方、東京の新聞社の特派員が部長を訪ねて來た。この消防は記者に買はれてゐるのだつた。

「素晴しい特種だ。他の社に嗅ぎつけられないやうに、二三日は警官に捕まらないやうにしかと頼んだよ。お禮は幾らでも出す。さうだ、僕をこつそり鬼熊に會はせてくれないか。」

一號見出し、何段抜き——彼の頭は輪轉機になつてしまつた。

次の日の夜明けに山狩りがあつたが、警察から消防組へ應援を頼むのだから、熊之助は安全なところへ移されて、燒酎を飲みながら、一人の新聞記者相手に「逃走苦心談」をやつてゐた。

「新聞屋のおだてるのを聞いてゐると——。」十八歳の柳子は私に話すのである。

「ほんたうにあたしだつて、赤城山の國定忠次より鬼熊の方がえらいやうな氣がして來たわ。いさぎよく自殺したら、乃木大將の死んだ時みたいに、日本國中が騷ぐだらうつていふのよ。」

消防部長や新聞特派員は、けい子の口を何より恐ろしがつた。だから、なるべく彼等の傍を離さなかつたのである。

「すつかりいい氣持にされちやつたのね、熊さんは燒酎に醉つ拂つて、その場にぐつすり寢ちやつたのよ。」

それで、自殺は明日といふことになつた。特派員と消防部長の二人が立ち合ふといふことになつた。記者は鬼熊を揺り起して、

「天晴れ、一代の人氣男らしく死花を咲かせてくれ給へ。君の立派な最後は、僕が新聞で日本國中に報せてやるからね。」

いよいよ、その二十八日の夜は、月も出なかつた。八時から十一時まで——鬼熊に剃刀を持たせるには、たつぷり四時間かかつた。

「しつかり。」

「しつかりやれ。」

立合人の掛け聲に應じて、鬼熊は氣ちがひのやうに咽を切つた。眼をあいて自分の手の血を見ると、ぱつと剃刀を遠くへ投げて、傷口を兩手で押へながら、がたがた顫へた。

「やい。き、き、貴様ら。」

木蔭からけい子が逃げ出した。鬼熊が追つて來た。少女は首筋がぺとりと濡れて倒れた。男の手の血であつた。

「けい子よ、」彼も折り重なつて倒れた。血まみれの手で、少女の髮をつかんで、顔を覗きながら、

「けい。生きてんのか。さうか、お前もゐたのか。——おら死んでやら。」

立合人達に抱き起されながら、

「畜生。死んでやら。」

今度は首つりであつた。

熊之助は松の枝に兵兒帶をつるした。木に登つて、帶を首に卷いた。

しかし枝をしつかりと握つて離さない。首をすくめて、足を縮めた。新聞特派員が叱りつけた。

「おい、手を離すんだ。手を離したら、死ねるんだ。」

「いやだ、おれはいやだ。」

「新聞に恥さらしだぞ。人氣がた落ちだぞ。天下の鬼熊だ。しつかりしろ。」

「手を離すのはいやだ。足を引つぱつてやれ、足を。」

三百圓くらゐなら、引つぱり賃を自分が出してもいいと、記者は立合人に云つた。

それで、消防副組頭ともう一人の男とが、足を捉へやうとした。その顏を足が蹴つた。

「何をさらすんだ。」

二人の男はひるまずに足をつかまへた。

「人殺し、畜生、助けてくれ。首つりは厭だ。首つりは厭だ。」と、鬼熊は叩かれたみみずのやうに體を振り廻した。

けい子はすつと木蔭から立ち上つて、松の木の方へふらふら歩き出してゐた。

「なぜ歩いて行つたかなんて、お聞きにならないわね。」

と、柳子は私に話すのである。

「死ぬのは恐しい。美しく死にたい。――二つの反對の考へが、あたしにつきまとつてゐるの、その時からのあたしに用のない考へだつて、おつしやいます？ だけど、あの時に私の心臟は固くなつちやつたんでせう。木にぶら下つた――あれが鬼と呼ばれた人氣者なんですつて。あたしはあれがみつともないなんて思やしなかつたけれど。それどころか――あたしは長いこと、あの姿にうなされて、それから今では、あの姿を思ひ出すと、不思議と眠れますの。」

「つまり、君が鬼熊のほんたうの戀人だつてわけだね。」

「ふん。私のゐることに氣がついて、足を引つぱることはさすがに止めたんですからね。」

そして、自殺は翌る日に延すより仕方がなかつた。

二十九日の夕暮、熊之助はストリキニイネの入つた最中を食べさせられたのであつた。

勿論彼も、それが毒だとは知つてゐたらう。

けい子はもう見に行くのが恐しかつた。そのかはり、消防の部長の家に閉ぢこめられてゐた。彼女は脅かされてゐて、彼等から離れることは出來なかつた、新聞記者からの口止料を貰つてゐた。

そして、人情と特種との一味は、熊之助が虫の息になつてから、警察の捜査本部へ屆け出たのであつた。犯人隱匿、自殺幇助の疑ひがかかるのは明らかだ。

「それをこはがつて、あたしは東京へ連れ出されたのよ。新聞屋に夢のやうな都の話を聞かせられてね。裸で踊つてるのも、そのお蔭でせうね。」と、十八歳の柳子は私に話すのである。

「あたしは氣がつかなかつたけれど、きつと五年間、オニクマ、オニクマと落書してゐたのだわ。それで、口紅の落書のやうな女になつちやつたのよ。」

柳子は口笛吹きながら、遠くの廣告燈を眺めてゐた。青ざめたコンクリートの屋上に、黑い踊靴だけが光つてゐた。

水木柳子の死因は分らない。私はもう淺草座の芥箱から、それを拾ひ出さうとは思はないのだ。ただ私が知つてゐるのは、私の氣まぐれのためにケン吉が失業して、再び芥箱から食物をあさつてゐるといふことだ。

編輯だより

◇ことしの花は呆氣ない花であつた。雨に櫻せた花ばかりを見せられた。失業群が巷に滿ち滿ちて心は花に向かなかつた。

◇三割も四割も配當があり、一人の社長に三百萬も四百萬も退職給が出でて減給とはつり合はぬ。

◇失業對策は姑息であつてはならぬ。海外發展には押太く出でねばならぬ。世界は人物の行き詰り、日本も人物の拂底。どこもかしこも算盤づくの小競り合ひ、青瓢たんの指導者ばかりが多くて骨太い働き手は皆無の狀態。

◇默々たる滿洲の資本主義發展はどうなる、軍國的機構はどう進展して行く。印度の革命には力がほしい。

◇軍縮會議も收まるところで收まつた。飯が食へないで此岸に縛られるのは無理の相談。

◇對岸には年中行事の「電報の革命」が我國の「失業騷動」と對立している。

◇福田德三博士永らく病みて慶應病院にあり。その快癒を祈る。

◇我社の日本地理大系「大東京篇」出來、數日中に發賣する。復興祭あてこみの際物でなく永劫の生命を企圖した爲め記念祭後の四月上旬まで編輯部は活躍した。多大の犧牲を拂つているだけに陸離たる光彩に充つ。刻下唯一の記念帖。次に「臺灣篇」を刊行する。

◇『潤一郎』全集こそ明治、大正、昭和の三時代を代表して千古に光る全集。頭のいい、藝術の分る人々は市中に百と積まれる全集をさしおいて先づ本集に就くだらふ。でなければ藝術の方で泣き出すだらふ。

◇『國木田獨歩』全集も異常の歡迎を受けつつある。

◇經濟學全集の四月配本は「現代日本經濟の研究」篇。

◇ウエルズの「生物科學大系」も本社より近く出版のこととなつてをる。

◇「何が彼女をそうさせたか?」が現在出版界での第一の賣行を示す。「何で此書がそう賣れるか」と成吉君伯林でほくそ笑んでいるかどうか。

◇「菊池寛集」の十錢本が近く發賣される。これこそ紙價に大變動を及ぼすだらふ。

◇永い間の我が出版界の問題であつた巨人『社會科學大辭典』は近く五月中旬には發賣する。群小を威壓して堂々と我が出版界を睥睨するのも近いうちにある。

◇『改造』も、我出版部も五月以後はまた生れ變つたやうに活躍しはじめる。

改造定價

册數	定價	郵税
壹册	五拾錢	參錢
半ケ年	參圓	郵税不要
壹ケ年	六圓	郵税不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和五年四月十八日印刷納本
昭和五年五月一日發行

定價五拾錢(郵税三錢)

東京市芝區愛宕下町四ノ四〇 編輯兼發行人 山本三生
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 印刷人
印刷所 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ四〇 改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43) 一二三一 一二三三 一二三二 一二三四